# 近代諸家集

五

# 例言

一、本卷は、近代諸家集(五)として、鹿持雅澄の山齋歌集、加納諸平の柿園詠草、中島廣足の橿園歌集、釋幽眞の空谷傳聲、千種有功の千々廼舍集、大隈言道の草徑集、平賀元義歌集、安藤野鴈集、及び和田嚴足家集を收めました。

一、本卷は、石川佐久太郎が擔當しました。

一、山齋歌集は、明治四十一年刊山本修三氏の山齋集により、植松壽樹氏の萬葉調短歌集成を參考しました。

一、柿園詠草、千々廼舍集、野鴈集は、續歌學全書により、諸書を參照しました。

一、橿園歌集は、天保十年の寫本をとり、同年刊の板本とも校合しました。

一、空谷傳聲は、慶應二年の刊本によりました。

一、草徑集は、文久三年の刊本をとりました。

一、平賀元義歌集は、植松壽樹氏の萬葉調短歌集成により、羽生永明氏の平賀元義歌集、及び尾

山篤二郎氏の平賀元義歌集の兩書を參考しました。

一、和田巖足家集は、彌富破摩雄氏が、特に本大系の爲に編纂された新稿によりました。

一、本卷編輯につき、植松壽樹、彌富破摩雄の兩氏が、特別の厚意を以て、種々御援助下された事に就き、爰に深謝の意を表します。

校註國歌大系　第十九卷目次

目次終

# 解題

## 山齋歌集

山齋は土佐の萬葉學者鹿持雅澄の號であつて、雅澄の集を山齋集といふ。明治四十一年山本修三氏によつて刊行せられた。これは短歌三卷、長歌二卷、文章二卷より成つてゐて、文章は雅澄の長男雅慶が書き集めておいたものである。本大系に收錄したのはこの短歌の部三卷である。

鹿持雅澄、姓は藤原、諱は雅澄、通稱を初めは源太といひ、後に藤太と改めた。古義軒、古義居士、山齋、醜翁等の號がある。雅澄が氏を飛鳥井ともいつてゐるのは、權中納言飛鳥井雅康の裔であるからである。鹿持を稱するにいたつたのは、雅康の孫雅量が足利の末亂を避けて、土佐國幡多郡入野鄕鹿持城に居たからで、山內氏が土佐の藩主となるに及んで、雅量の孫雅春これに仕へて初めて鹿持氏を稱した。雅春の孫安治、宗家を出でて徒士柳村某の跡目を買つて柳村氏を稱し、世々土佐郡福井村に住して居た。宗治の孫を尉平惟則といつて、その長子が雅澄である。寛政三年（皇紀二四五一）四月二十七日に福井村の家に生まれた。初めは柳村氏を稱して居たが、後士班に列す

るに及んで鹿持氏に改めた。本居宣長の死んだ享和元年(皇紀二四六一)は、雅澄十一歳であつた。十五歳の文化二年(皇紀二四六五)には母を失つた。

雅澄幼時は多病で餘り學を好まないやうに見えたが、青年期に入つてから大いに學に志し、藩士中村隆藏に漢學を受け、國學を谷眞潮の門人宮地仲枝に就いて學び、盛んに萬葉調の長短歌を詠んで漸く名を知られるにいたつた。集中に

文化二年二月五日後藤順平眞龍往二于江戶一之時作贈歌

武藏野の野のそき落ちず咲き出來ね藤の裏葉のうら安にして

といふ歌が出て居るが、果して文化二年の作とすれば、實に雅澄は十五歳の時かく立派な萬葉調の歌を詠んだ事になるが、これは文化十四年の作と、文政二年の作との間に入つて居るから、恐らくは文化二年は文政二年の誤りであらう。さうだとすると山齋集中で年代の明記してある最も早い作は文化七年(皇紀二四七〇)、雅澄二十歳の作である。

文政二年(皇紀二四七九)二十九歳の時武市半八正久の女きつ子を娶つた。きつ子は勤王の志士武市半平太の叔母で、貧困の中によく雅澄を助け勵まして、雅澄の名を成さしめた頗る賢婦人であつた。されば天保七年(皇紀二四九六)四十九歳の時に、この賢妻を失つた雅澄の悲しみと困惑は大き

なものであつて、彼自身「古言譯通」の奧書に次のやうに記して居る。

去年の冬ゆくりなく妻に別れしことのかなしさはさるものにて、おほやけ事のいとまには、老いたる父幼き子ども養ふことのみにかゝづらふ身となりぬるを、もとより家貧しくてことを助くる僕だになければ、手づから菜つみ水汲みなどして月日をわたるに、今はふみ見筆とることのいとまのさらにあるべくもなし。しかはあれども、わがつねに「丈夫は名をし立つべし後の世にききつぐ人も」といふ古言をとなへをりしを、ありし世に妻がききよろこびて、夏の日のあつさもいはず、冬の夜のさむさもしらで、朝夕の事とりまかなひつゝ、いさゝかもわが志の撓みなからむことを助けあへりしそのおもやうの、今も見るやうにおぼゆれば、今は暇なしとてかきさしたるものを、名ありてのち、つひにしみのすみかとのみなしなば、人こそしらねありかよひつゝ見む魂のいかにほいなく口をしきものに思はまし。いでやわがたてたるこゝろざしのゆるびなきほどを、ありかよふたまも見よろこびてよと、それをせめての力にして、ほと／＼消えぬべかりし心を又さらに振ひおこして、よなかあかつきをいはず云々。

雅澄の窮狀、きつ子の內助の功、雅澄の勤勉苦學の狀察すべしである。初め家の貧しい雅澄は書籍を買ふ事が出來ないので、僅かに知人の間を漁つて耽讀するに過ぎなかつたが、家老福岡氏は、その篤學を知つて、雅澄に其の書庫を開放し、又新に購入して研究を助けた。尋いで國學教授館總裁

公子大隅君は雅澄をして教授館寫本校正係とした。此等の事が雅澄の研究に多大の援助となつた事は云ふまでもない事である。雅澄の著は「萬葉集古義」を始めとして、「古言譯通」、「永言格」、「南京遺響」、「土佐日記地理辨」、「古今集序存疑」、「古今集月夜の燈」等數十部の多きにいたつてゐるが、その畢生の力を注いだのは萬葉研究である。その古義の稿本の如きは、生を終へるまで日夜改删して筆をおかず、遂に朱墨交錯して讀み難きに至つたといふにいたつては、其の刻苦想ふべしである。しかも貧窮と戰ひ、終生郷里を出でないでこの大著をなした事は、まことに偉とすべきである。

天保十三年(皇紀二五〇二)五月五十二歳の時に、父尉平が歿したので、九月に雅澄は亡父の祿を繼いだ。これよりさき、天保五年(皇紀二四九四)四十四歳のとき、國學出精の故を以て、賞として米を賜はつたが、弘化元年(皇紀二五〇四)五十四歳の時、「積年國學出精、追々萬葉歌學に通じ、既に數部の著述に及び且つ手弘く導方を爲す。」の賞として、藩主より金若干を賜はり、同三年には遂に士格に列せられた。かくて彼の門に學ぶもの多く、松本弘蔭、葛目弘守、宮地守遠、別府安宣、南部嚴男、横山直方等名がある。維新の志士武市半平太、吉村寅太郎、佐々木高行伯の如きも雅澄の教を受けた人々である。老公及び藩主の連枝等も亦彼を師として學ぶに至つた。刻苦精勵倦む事をしらなかつたこの老萬葉學者は、安政五年(皇紀二五一八)八月十九日病を以て逝いた。時に年六

十八歳である。福井村の彼の墓石には

吾以後將生人者古事之吾墾道爾草勿生曾

の遺詠が刻せられて居る。併しその生涯の勤勞の大著「萬葉集古義」は生前に刊行されるにはいたらなかつた。雅澄の子孫が明治にいたつて、之れを宮内省に獻じたのに、畏くも特に御内帑金を以て上梓せしめ給うた。時に明治十二年、雅澄の歿後二十二年目の事であつた。

雅澄の歌に對する考を知るには、次に引用する彼の言で十分であらう。

歌よまむと思はば、奈良以往の人々に交り居るこゝろもちならでは、いかに志を高くもつといふともせむなかるべし。……これによりて某は、常に、昨日は家持卿、憶良大夫などと手を攜へて山に登り、今日は金村、蟲麻呂などと臂を交へて川逍遙し、又朝には藤原卿、橘御等の前に出でて物語を承り、夕には柿本、山部の朝臣等の門に入つて歌の添削を乞ふなどぞすなる、この心もちをしばしもはなれては、いかでか歌と云ふばかりの歌をばよみ得べき。

卽ちその歌風は萬葉風を全く自家藥籠中のものとして、自在に古言を驅使してゐる點にある。山齋集の長短歌もその大部分は萬葉書きで、その詞書も漢文であるなど、全く萬葉風であつて、萬葉學者たる彼の面目は躍如としてゐる。

山齋集の短歌の部は上中下三卷に別れ、年代順に作歌が排列されてゐる。上卷は文化七年から文政九年まで、卽ち二十歲から三十六歲までの十七年間の作、中卷は文政十年から弘化五年まで、三十七歲から五十八歲までの二十二年間の作、下卷は嘉永二年から歿年の安政五年まで、卽ち五十九歲から六十八歲までの十年間の作が集めてある。而して天保十五年以前は、歌は二三首の他は全部萬葉書き、詞書は全部漢文であるが、十五年以後には歌にも詞書にも假名文が交つてきてゐる。かく年代順に排列されてゐるがために、この集は彼の自敍傳的興味をも併有してゐる。

音羽山夕越えくれば逢坂の關の小川にさゞれ浪たつ

春がすみ霧らふ夕の春雨に垣内(かきつ)の梅の散りか過ぎなむ

打靡き春さり來れば鏡川かはの瀨淸み鮎子さばしる

これらの歌には年を明記してないが後二首は文化七年、最初の一首はその以前の作であらう。とにかく二十歲前後の作だけに、華やかな敍景である。鏡川はその下流が高知市の中を流れてゐる川である。此の頃の彼はよくこの川から題材を得てゐる。

さにづらふ妹が手馴の鏡河ゆく瀨の浪の音のさやけさ

鑑河淺瀨(かゞみがは)の浪を脛に上げてい渡らす子は誰が思ひ妻

朝なさな妹が取りみる鏡川またかへり見む清き川瀬を

月見ると風流壯士の打出ける夜ぞ久方の雲吹き拂へ鑑河風

鏡河奥邊にしづく眞白珠さやかに見よと月は照るらし

の如きである。第二の歌は淺瀨を渡る美人の姿が、若い雅澄の心をときめかしたであらう事が想見されて面白い。「文化午年（七年）毎日詠二一首歌一之中八首」などとあるを見ると、盛んに歌作に耽つてゐたらしい。

淺茅原つばら〳〵に蟋蟀の音のみし鳴かゆ妹に逢はずて

吾が乘れる馬打速め吾妹子が金門に立ちて吾を待たむぞ

夜を寒み霜ぞこゝだ置くその上ふみ妹許行かば人知らむかも

大野郷見二美女一作

咲きにほふ大野の里の女郎花誰しの人の頭插なるらむ

草枕旅の假寐に相卷きし妹が袂を別れかゆかむ

これらは文化十三年、二十四歳の頃までの作である。情熱に燃えてゐる雅澄が思はれる。

父に似て餓鬼とな成りそ大寺の金剛力士の姿とをなれ

これには、「文政四年辛巳十月三日申刻、男子出生、登時述ニ拙懐一作歌」との詞書がある。妻を娶つて三年目長男雅慶が生まれた時である。これによつてみると壯年時代の彼は、晩年のその肖像畫に見るやうに、やはり痩せてゐたのであらう。

懦弱や吾を召上げて古事を解き申せとぞ吾に告げつる
書典讀む人は多きをたゞ獨り吾を召上げしことの奇しさ
眞つぶさに解き申さむと思へども智き心の無きがすべなさ

これは文政四年七月、國學の講義に召されるやうになつたのを細木瑞枝が賀した歌に報いた五首のうちである。

早往きて今宵は纏かむ天雲の千重に重なる遠嬬の手を
夕露に玉裳ひづちて久堅の天の川津に君待つ吾は
秋萩の其の花咲みに遠嬬のゑまむ眉曳ゆきて早見む
天の河打橋わたし年月に吾が待ち居りとゆきて告げこそ
妹が家道近づくらしも天の河川端もさやに琴の音聞ゆ
高々に君をいませて石枕相巻く今宵明けずもあらぬか

萬世に年は來經（きふ）とも天の川たゆることなく逢はむとぞ思ふ

これは文政六年七月七日の作で、牽牛と織女とに擬した連作である。

男盛（をさかり）の時來向ふと初春を待ち歡べる時もありしを　文政十年正月

吾（あ）が盛りくだつともよし吾妹子が玉の光儀（すがた）の舊りずありせば　同

昨日まで面なかりける白髪も身にふさはしく成りぞしにける　文政十三年正月

白髪生ふる事は思はず人なみに今年も春を待ち歡びつ　天保二年正月

童等が待ち歡べる春ごとに身の老いらくの來ぬものにがも　天保四年正月

よそにのみ思ひてありしを四十餘（よそぢま）り四つちふ歳の春は來にけり　天保五年正月

思ほえず老舌いでて初春の今日の吉詞（よごと）ぞよゝみそめたる　天保七年正月

百年は半ばばかりになりぬるをなど吾が髪の黒き筋なき　天保十一年春

白髪生ひ膚も皺みぬ吾が身をら舊りたる良しと誰かいふべき　同

かやうに文政十年三十七歳から天保十一年五十歳までの年頭の歌を列記してみると、衰へゆく肉體と、老いゆく人のわびしい心とが年々に深まつてゆく有様が見えて興味が深い。既に白髪となり膚も皺み果てては、反つて老境に安んじて、

初春の初若水をむすび上げて心も身さへさやまりにけり　天保十二年元日

數ふれば五十三まで豐つ日の初日の光仰ぎ來にけり　天保十四年正月

といふやうに衰へを嘆いたりわびしがつたりする心は消えてしまつて平穩な狀態になつてゐる。人間が衰へ始めてから、老境に入るまでの心的經過がこれらの作にいかにも率直に現はされてゐる。

野干玉の晝夜わかず思へれど逢はずてあるは人目多みこそ

以下の「正述二心緒一」と題する十五首は、いかにも萬葉風な率直な戀歌で、惻々として人に迫るものがある。

思はぬに矛取るつらの數にしも召上げたまへることの畏さ

弘化三年士格に列せられた時のよろこびの作である。

照る月の影か玉かとたどるまに露けさまさる野路のしのゝめ

これは集中に珍らしい近世風の作で、嘉永二年九月、九首の題を賜はつて、特に近世風によめと命ぜられた時の作の一つである。

頑狂れさどひし罪を早知りて贖ひ奉れ亞米利加奴

以下「述二拙懷一」と題した七首は、安政元年ペルリの再來に對する彼の憤激が迸つてゐる。

銀も黃金も玉もよしゑやし飮みての後は欲しけくもなし

貧苦と精勵とで瘦軀鶴の如き老萬葉學者が、數獻の酒に生活苦をわすれて陶然たる狀を覩るやうである。かやうに彼の歌には衒氣がない。純眞な感情の流露した自然の響である。これが雅澄の歌の尊いところであらう。

## 柿園詠草

加納諸平(もろひら)の家集である。諸平本姓は夏目氏、夏目甕麻呂の長子である。文化三年(皇紀二四六六)遠江國濱名郡白須賀驛に生まれた。恰も鹿持雅澄が二十三歲の時で、盛んに萬葉調の歌を詠じて漸く名を知られ始めた頃である。初めの名は兄瓶、後諸手、諸平、長樹と改め、後諸平に復した。通稱は小太郞、中頃春太と改め又小太郞に復す。幼い頃同國新井驛の親族高須元尙の家にあつて、句讀を中山美石に、畫を刈谷三七に、算を元尙の男蘆根に學んだ。諸平の父甕麻呂は寬政十年本居宣長の門に入り、ついで享和元年宣長歿するや、續いて春庭の門に學んだ學者であつたので、諸平も夙くから書を讀み歌を詠じた。文政四年(皇紀二四八一)十六歲の時に、父甕麻呂に伴はれて、畿內の勝地舊址を探り、歷朝の皇陵を拜して、和歌山に居た本居大平を訪れた。この年は鹿持雅澄の

長男雅慶が生まれた年であり、塙保己一の歿した年にあたつてゐる。翌文政五年に父甕麻呂が歿した。ついで和歌山の醫師加納伊竹の嗣子となつて、通稱を杏仙と改め、醫學を學ぶかたはら羣書を渉獵し、大平に教を受けて居た。文政九年二十一歳の時、春夏かけて遠江に往つた。近世諸家の歌を撰んで類題鰒玉集と題し、その初編を上板したのは文政十一年二十三歳の時であつた。爾來嘉永七年(皇紀二五一四)までに七編十四卷を上板して廣く世に行はれた。八編は稿成つて上梓にはいたらなかつた。

天保二年(皇紀二四九一)四月、藩命をうけて紀伊續風土記新撰の事に從つた。時に二十六歳、十返舍一九の歿した年である。天保四年二十八歳の時、特に國學を以て仕ふべき命を承けた。これは本居大平存生中の推薦だといふ。大平は此の年に歿したのである。諸平は通稱を兵部と改めた。同六年三十歳の時に、紀州名所圖會を撰すべき命をうけた。弘化二年(皇紀二五〇五)、紀州名所圖會後編の命を承けた。時に四十歳。同三年養父伊竹の後を繼いだ。此の年難波から都をかけて旅行をした事が詠草中に見えてゐる。嘉永四年(皇紀二五一一)七月、四十六歳の時に、紀州名所圖會後編が出來上つた賞として、銀若干を賜はつた。安政三年(皇紀二五一六)諸平の建議がいれられて、藩に國學所をおいて、諸平が教授になつた。翌安政四年(皇紀二五一七)六月二十四日に、國學所月例

の歌會があつた。其の日の課題は「夏曉」で、諸平の詠は、

夏の夜はつゆよりもろく明けにけり蓮花ちる東雲の雨

といふ稍寂しい感の歌であつた。會が終つて家に歸つて、病が發つて遽に歿した。享年五十二歳。和歌山湊海善寺に葬つた。卽ち雅澄の歿した前年である。その著には枕草子註釋、榮華物語校本、萬葉名所集、古今集眞名序解、晉丹集摘草などがある。柹園詠草は短歌と長歌とに別れてゐる。嘉永六年諸平四十八歳の時に上梓された。別に年代順でもなく、整然と部立されても居ない。諸平の跋にも、「千歌ばかりをついでも定めず拔き出し侍れど。」と記し、歌風についても自ら、「弘仁よりこなたのめゝしき方に流れて、神世のあとにつぐべき姿詞もなく。」と記してゐる。この他拾遺一卷が飯田年平、瀨見善水、佐々木春夫、足立正聲等によつて明治十八年に刊行せられてゐるが、これは本大系には割愛した。

沖かけて霞みにけりなそなれ松なれのみ春の色とみしまに

霜とくる枯生の茅生の朝じめりやがて春めく日影ならまし

鶯のけさなく聲を絲にして霞の袖に花ぞぬはまし

これらの歌は古今風の主觀的な歌ではあるが、それよりは一層優麗である。

旅衣わゝくばかりに春たけてうばらが花ぞ香ににほふなる
負ひかへるゑびらの露に雨見えて夕かげくらしこやのたか垣
桑とると霞わけこし里の子がゑびらにかゝる夕ぐれの雨
三月まつ河ぞひ桃の木かげよりゐひ心なる月を見るかな
「ゐひ心なる月」は實に巧みな描寫である。
くれぬめり菫さく野のうす月夜雲雀のこゑは中ぞらにして
春風に胡蝶の夢はさめながらあさ野の菫かたねぶりせり
下句、可憐の菫を描き盡して餘蘊なし。擬人の上乘なるもの。
櫻さく岡のやかたに見し夢の名殘まばゆきあさづく日かな
吉水の花のしづくにぬれ〳〵てはてはしらめる月の影かな
み吉野のうづの玉殿春をへて苔のむしろに花ぞちりしく
吹きのぼる夕川風にをすまけば雲居をかけて螢とぶなり
みそぎする瀬々の白波秋かけて淸き河原に夕風ぞ吹く
とほじろき洲さきの松のかげながら月をひたせる波の上かな

「月をひたせる」新古今風の技巧。

月にたつ波間の煙たえ〴〵にあしやの火かげ秋ふけにけり

衣笠の遠山かげはなほ見えて雨雲がくれ月ぞふけゆく

夕づく日てらしもあへずかき曇り柞(はゝそ)が原に村雨ぞふる

尾花ちる嵐の末は暮れにけり野寺のかねのひゞきのみして

あともなきさゝぎの聲に霜とけて野路の板橋上じめりせり

「野路の板橋上じめりせり」と末句の柔かなあたり風雅集の趣のある歌である。

あさ月夜かへる燕の聲すなりすみし軒端も秋風やふく　戀

くれなばといそぐ契りもあるものを間遠にひゞく鐘の音かな　同

駒わたす人かげもなし犀川の岸のつかさはかたくづれして　古戰場

滿目荒涼たる古戰場に立つ。詩人無限の感。

紀伊國續風土記を撰ぶべき命をうけて、三度までも熊野の海山をめぐつた時の作は、或はその風俗を、或はその風景情趣を描いて優秀の作が多い。

山賤がけぶりふきけむ跡ならし椿のまき葉霜にこほれり

み熊野のあら山中に海なしてたつ朝霧をいくへわくらむ
夕されば山路の松のふたさきを岩根の蔦にてらしてぞゆく
山賤がもちひにせむと木の實つきひたす小川を又やわたらむ
磯近くかりねする夜ぞ敷妙のまくらあらすな沖に居れ波
沖さけて浮ぶ鳥船時のまにかけりもゆくか鯨見ゆらし
七こしの峯に夕ゐる秋の雲一なびきして月はのぼれり
高機をいはほにたてて天つ日の影さへ織れるから錦かな　那智瀧
ますらをがすべしもとゞり解きはなつ瀧の響に雨みだるなり　同

彼はまた色々なものを歌に詠じてゐる。

尾花川さゞなみしぶく夕風にあら鷹すゑてたつはたが子ぞ

これは大津繪の歌のうちの鷹をすゑた若衆を詠んだ歌である。

君をさておきや別れむあたどもの亂れ入りてはそふべくもなし

これは將棊の金將を詠んだ作である。

たなうらにつくりもたてむ庵ながら七種うゑて月をみしかな

「しば〱家居をかへける事を思ひいでて」と詞書がある。時々住居を移したとみえる。かやうに諸平の歌は華やかであつて多分に新古今風の情趣をもつて居るが、その全體の感はどこやら江戸派の作風に一脈相通ずるものがあるやうに思はれる。がしかし中には萬葉風の面影をもつてゐる作も見られる。

かげろふのたち野のま柴をりしきてかへり見すれば花散りにけり

を鹿ふす小野の高萱しげくともゆずゑにわけて藥がりせむ

心なくあてをば過ぎじ橘のした吹く風にわかゆひれふる

里ちかき井手の柵風こえてあさゝゆふ子が袖かへる見ゆ

はたゝ神なるとの沖をこぐ舟の跡かきくらし雨さわぐなり

夕月夜ひとりやぬべき庵崎の河原の千鳥霜はぶくなり

夏草のあひねの濱の眞砂地は八百夜ゆくともあかじとぞ思ふ　戀

夕さればねぐらとめゆく村鳥の爭ふつまにあはでやまめや　同

恰も眞淵の作の樣に、萬葉風に新古今の情趣を合はせもつてゐる。かく見てくると、諸平の歌風は、眞淵に似て眞淵でもなく、宣長にも似てそれよりも優れ、千蔭春海に似た一面もある。卽ちそ

れらの歌風が皆とりいれられてゐると思はれる。元來鈴の屋門には理論的な健實な學者は多いが、詩想富贍な歌人は少ない。これはその學風が然らしめた自然の傾向であらうが、その中に於て諸平の詩味豐かな歌は一異彩であらねばならぬ。その長歌は萬葉の風骨を得て雄勁である。

かげともに　かへるでを植ゑ　外面に　ぬるでをうゑ　蛙手の　歸りますやと　ぬるでの　ぬる夜もおちず　待てれども　かへりもまさず　ぬれども　いをしねかねて　去年をしぬばく

これは大平の一週忌の時の作である。特に「登二巴嶽一時作歌」は堂々幾十句を連ねたる雄渾な大作で、最も優れた力作であるが、今は餘りに長いので、引用することをひかへておく。本文によつて諸平の長歌作者としての卓拔な伎倆を味覺されたいと思ふ。

## 橿園集

橿園集は熊本藩の國學者中島廣足の家集である。廣足はその歿年から逆算すれば、寛政四年（皇紀二四五二）に生まれた筈であるから、雅澄の生まれた翌年に生まれた事になる。通稱を太郎といひ、初の名は春臣、後に弘足とも書いた。黄口、蛙麿、田翁ともいつた。橿園と號したのは、此の人屢肥前の長崎にゆき、遂に此の地に住んで、その庭に橿樹があつたからである。歌を千蔭門の一

柳千古に學んで、語學の造詣も深かつた。文政十一年（皇紀二四八八）三十七歳の時の秋、長崎から暫く故郷に歸る途中、大風にあつて船が覆つたので、攜へて居た家集を失つてしまつた。天保十年（皇紀二四九九）に、この橿園集が出版された。彼の四十八歳の時である。安政三年（皇紀二五一六）六十五歳の時の春京に上り、嵐山吉野を巡つて浪華に出で、以來此處に五年留まつてゐた。この前年の安政二年の十月が、江戸に大地震のあつた年である。文久元年（皇紀二五二一）國主の召に應じて歸國し、國學師範役を命ぜられ、熊本城下白川邊に住んだ。時に七十歳。水戸の浪士が櫻田門外に大老井伊直弼を斬つた翌年にあたつてゐる。文久三年五月頃から病に伏し、四年正月二十一日に歿した。年七十三歳、肥後萬日山に葬る。

廣足は畫に巧みに亦醫術にも精しかつた。詞の八衢補遺、詞の玉緒補遺、雅言類聚、不知火考、橿園隨筆、橿の下枝、うなゐのすさび、樺島浪風記、檜垣翁家集補註、くさ〲の物語、背燭談、景樹螢火の說、上古嫁娶辨、瓊浦集、しのすだれ、さき草考、和歌諸說等數多の著がある。彼の歌に對する見解は、橿園隨筆、橿の下枝によつて知ることが出來る。又橿園集は天保十年の上板であるから、前半生の歌しかない。彼の生涯の歌を知るには、「しのすだれ」を併せて見なければならないが、これは頁の都合で、本大系には收錄し得なかつた。

橿園集は春夏秋冬戀雜の順に分類されてゐる。廣足は「歌はたゞうつはもの大きにして、品たかく、調とゞこほらぬこそ歌なれ。」と主張したが、いかにもさうした趣の歌を詠じてゐる。

朝ぼらけ竹の葉しだり降る雨のしづけき窗にうぐひすの鳴く　春

朝日さす松のむらだちむら〳〵に霞いさよふ春の山のは　同

よしの川櫻吹きまく水上のあらしをたゝむ瀬々の白波　同

むらさめの雲吹き送る夕風に山ほとゝぎす聲むせぶなり　夏

風清き空にとびかふかはほりのかずさへ見ゆる夏の夜の月　同

沖津浪ゆふだつ雨はしほ風のはやみの浦にきほひきにけり　同

秋風の行く方見えてはる〴〵となびく末野の花すゝきかな　秋

かげふかき槇のした道吹きおくるうき雲早し秋の山風　同

入日さす豐はた雲のいろくれてうす霧なびく秋の海原　同

ゆふまぐれすゝき吹きしく粟津野のあらしの底にうづらなくなり　同

むらしぐれはるゝ外山のしづくあひて夕日も寒く散るもみぢかな　冬

木がらしのしぐれをさそふ山のはのむら雲くろく照る月夜かな　同

つりたれし船はかへりて夕風の寒き入江に鴨ぞうかべる　冬

冬くればあまのよび聲とよむなりまつらの海にくぢらとるらし　同

おほかたの夏のならひと人や見るおもひにやせてなやましき身を　戀

あしがらのみねのうき雲うき立ちて神のみさかにはやさめぞふる　雜

ましばたく端山のけぶりほのくれてねぐら木ぶかき村鳥の聲　同

長歌には、長崎に居た彼は、詠食火鳥歌、觀虎作歌、觀淸人戲場作歌、詠紅毛舶入貢歌などの珍らしい題材をあつかつてゐる。

其のかたは　鶴に通ひて　大きさは　さを鹿なせり　態の如　かぐろき毛をら　蓑のごと　おほしたらはし　ひたひ角　さゝげかゞふり　大船の　ゆたのたゆたに　垣ぬちを　いゆきもとほり　なく聲も　たてぬものから　なげいるゝ　たぶての石を　さながらに　くひかゞのむ　其のさまは　言のはたえて　怪しくも　くすはしきかも　おこしたる　火のみにあらず　石をさへ　かゞのむ鳥の　いかにして　此の世の中に　なりは出づらむ

これは詠食火鳥歌の後半であるが、概してかやうに平明な作が多い。

## 空谷傳聲集

空谷傳聲集は眞言の僧幽眞の家集である。幽眞は古岳とも咋夢ともいふ。初め高野に住したが、紀の川の邊藤崎山に幽居をトし、琴を嗜んで挹翠琴房と名づけた。菅茶山に學んで詩を善くし、歌は諸平の流をくんで、脫俗の風がある。明治九年(皇紀二五三二)に六十五で歿してゐるから、その生まれたのは文化八年(皇紀二四六八)である。空谷傳聲と書いて「やまびこ」と訓ませるなども、いかにも詩を作る人らしい好みである。この集上中下三卷に別れ、上卷は春、中卷は夏と秋、下卷は冬と雜とに分類されてゐる。

梅の花ちるかげ寒き夕山にあるじもとむる鶯のこゑ
うぐひすのこゑもうすれて青柳の煙にかすむ夕ぐれの里
琴とれば鶯來なき月みれば霞む軒端に梅かをるなり
花の香のくゆりし小簾の風絕えて松靜かなる夕暮の雨
ともすれば琴ひきさしてうち霞む窗の外山のながめられつゝ
世の中の塵にまじらぬ山陰の花にむかひて春日くらしつ

おのづから花は散るらむあらしだにさそひもあへぬ山かげにして

故郷落花
家とへば家のあとなし花とへば花もあとなく散りはてにけり

青柳のかげになびきし笛の音もうかびてかすむ春の川水

世の中を卯の花垣にへだてても我にとひよるほとゝぎすかな

夕立の過ぎゆく岡の松原にしぐれそめたる日ぐらしのこゑ

ながむれば家ぞこひしき秋の夜の月もうき世のほだしなりけり

月を見て誰かは家を戀ひざらむ野に臥すわれも人の子にして

小萩さく岡のやかたに琴とりて露ちる夜半の月をみるかな

夕日影なゝめにてらす山窗に獨りしぐれて散るもみぢかな

からすなく尾越の松に月落ちておく霜白し曉の山

かづらきの山路は雪に埋れけり犬鳴く寺に宿やからまし

われゐひぬいでや流れに枕して清き巖に口そゝがまし

世の中を夢と見はてて誰かすむ風のばせをの葉がくれの宿

莊子
おのれかとみれば蝶なり胡蝶かとみれば人なり夢の世の中

琴とりてこの世は花につくさまし終のむくいはさもあらばあれ　述懐
こゝろより外には山もなかりけり何をもとめて家はいでけむ　同
誰をかはたのみ誰にかたのまれむありて空しきまぼろしの世に　無常
鶯はなけども梅はかをれども悲しき春のゆふべなりけり　春哀傷

かやうに、優美な純客観的な敍景の歌もあるが、自らの心境を詠じた主観的の歌の多い。がそのどちらも技巧に流れないで、穩かである。ことに主觀的の歌は平坦の中に無限の感慨を含めてゐる。歌に於て心の大切な事がつくづくと思はれるのである。

## 千々廼屋集

千々廼屋集は、正三位千種有功（ありこと）の家集である。千種氏姓は村上源氏、久我晴通の二男具堯から出た。有功の父は正三位千種有條である。有功の生まれたのは、寛政九年（皇紀二四五七）十一月であつた。卽ち鹿持雅澄が七歲、中島廣足が六歲の時である。文化四年（皇紀二四六七）十一歲の時、從五位下に敍せられた。これは加納諸平の生まれた翌年であり、加藤千蔭の歿する前年である。文化七年、十四歲にして元服昇殿を聽され、翌八年從五位上に、同十二年十九歲で正五位下に進み、翌

十三年侍從に任ぜられた。この年は、山東京傳が歿した年である。文政元年(皇紀二四七八)二十二歳にして從四位下に敍せられ、翌二年和歌所の御人數に加へられ、同四年二十五歳の時に從四位上に進んだ。諸平が十六歳で和歌山に本居大平を訪ねた年である。翌文政五年(皇紀二四八二)二十六歳の時、左近衞權少將となつた。式亭三馬の歿した年である。同八年二十九歳で正四位下に進み、同十年三十一歳の時には左近衞權中將となつた。同十一年には從三位に、天保三年(皇紀二四九二)三十六歳で正三位となつた。賴山陽の死んだ年である。嘉永七年(皇紀二五一四)八月二十八日長逝時に五十八歳。翌安政二年(嘉永七年十一月安政と改元)三月に千々廼屋集が梓行された。

顧みれば元祿以來堂上歌學は其の勢力を失墜し、この頃は自由な見地から種々の淸新な歌學が唱道されて居た。とはいへこれは民間に於ての事で、堂上家に於ては猶舊來の迷陋から醒めず、民間の人々の歌を地下風といつていやしめてゐた。そこで有功も一條忠良に點を乞ひ、忠良薨去の後は飛鳥井家に入門し、また有栖川職仁親王、久世通理などにも敎を受けた。が併しこれは御所に出す歌の爲であつて、私には景樹、季鷹等に交はつて、堂上風から脫したのは偉とすべきである。故に後には冷泉飛鳥井兩家から忌まれて、禁中の御會には餘り出仕しなくなつたといふ。

有功が常に二十一代集を座右において、歌風の變遷に心をつけてゐたとか、初學の者が敎を乞ふ

折には、全き瓦よりは缺けても玉たれと敎へたといふが如きは、彼の識見の凡ならざるを示してゐる。又何事にも風流を好んで、座敷の壁の窗に三日月形を造つて、夜には壁の裏に行燈をつけたので、さながら月のさし入つた樣に見えて、風情があつたなどといはれてゐる。物産學者山本正誼と無動寺から白川山にかけて採藥に出かけて、草の名をよんだ歌を集めて、天台採藥和歌一卷を殘した如き、彼の趣味の廣い事を知るに足る。彼の歌集には千々廼屋集、天台採藥和歌の他に、屋代弘賢に端書を求めた千種の錦、唐詩選の五言及び七言絶句二百四十首を短歌に詠じた和漢草、契沖の富士百首に倣つて比叡山を詠んだ比枝の百枝、古今集の歌の句によつて詠んだふるかゞみ、久我建通が有功の草本を寫したといふ有功卿集がある。この中には月百首、五辻家で詠じた一日三百首、獨吟千首、日枝山に採藥に上つて草名を詠んだ五十首、赤穗義士の百五十回忌によんだ五十首等を收めてある。其の他成島柳北が撰んだ千種三位百首といふのがある。

千々廼屋集には初篇とあるところをみると、漸次世に出さうとしたのであらう。春、夏、秋、冬、戀、雜、長歌と分類されてゐる。

大にへの腹赤つりつゝ八汐路のやすきにほこる春の浦人　　春

あを馬のいなゝく庭に見渡せば遙かにかすむ比良のしらゆき　　同

もえそめて花なき菫それをしも摘みてやゆかむ春のすさびに　春

いとゞしく霞みにけりな遠つあふみ濱名の橋の春の夜の月　同

殿の内はひゝな遊びのけふの日にもる人なしと花やちるらむ　同

釣たれて歸らむとすれば鴨川の柳の木の間月のすゞしさ　夏

大和路は夕立すらし神さぶる伊駒たかねに雲さわぐなり　同

みなせ川秋風たちて山もとに一葉とうかぶ舟もさびしな　秋

袖におく露見えそめて大丈夫とおもへるわれも秋の夕ぐれ　同

もみち葉も殘る夕日もかすかにて山べさびしく暮るゝ秋かな　同

津の國のなにはの蘆の秋の風うらさびしさを盡してぞふく　同

比叡はまだしぐるゝ雲のあなたなる比良の遠山雪降りにけり　冬

漁舟ふなですらしも伊豆の海やふじの高ねに横雲わたる　雜

君めせどなほ大舟のゆくら〳〵仙人さびて酒のうちにをり　同

最後の歌は飲中八仙歌のうちの李白を詠じたものである。

えみしらが跡をきよめて相摸潟みちくる汐にうたふ舟びと

これは、「神國の威光人の智仁勇あるをおち尊みて夷船どもはかへりしさまなればことほぎの歌をと人の乞へるに」と詞書した歌の中の歌である。

この集の最後に長歌があるが僅かに數首であつて特に云ふほどの事もない。

## 草　徑　集

草徑集は大隈言道の家集である。言道通稱は清助、萍堂と號した。姓は清原氏で、舍人親王の流れである。親王五世の孫清原正高が豐後國に貶せられ、その孫助道が長野氏を稱した。それより十世の孫治高、豐後國大隈村に居たので、大隈を氏とした。これが言道九代の祖である。後筑前國福岡に移つて商を業として居た。言道は寛政十年（皇紀二四五八）に福岡藥院町抱へ安學橋の家に生まれた。千種有功の生まれた翌年である。加納諸平の生まれるよりは八年以前である。言道家業を繼ぐを嫌つて家を弟に讓つて、自分は藩士二川幸之進相近に歌と書とを學んだ。相近は二川樣を興した書家である。漢學を廣瀨淡窗の塾に學び、能樂の嗜みもあり、小鼓をよくし、篆刻にも巧みであつたが、凡ての業たゞ師の摸倣をのみするの愚を悟つて、歌は元より書道にも一機軸を出した。本集に輯錄した空谷傳聲集の板下は實に言道が書いたのである。市中の騷がしきを避けて那珂郡今泉

村に住んで子弟を教へた。野村望東尼が歌と書とを言道に學んだのは此の頃のことであらう。言道の歌が甚だ時流に遠いものであつたので、野卑と誇る輩が多かつたといふ。安政五年（皇紀二五一八）八月に大阪に出て、今橋一丁目堺筋に住んだ。時に六十一歳である。これは雅澄の歿した年であり、諸平の死んだ翌年で、有功が死んでから四年たつてゐる。

大阪で門人も出來たが、中島廣足や萩原廣道とは交遊があつた。彼の特色のある歌風は依然としてこゝでも餘り認められる事は出來なかつたが、野村望東尼は上京の序に言道を大阪に訪れて向陵集の序を乞うた。文久三年（皇紀二五二三）正月に草徑集三卷を刊行した、六十六歳の時である。大阪には七年ばかり住して鄉里に歸り、慶應四年（皇紀二五二八）七月二十九日に七十一歳で歿した。望東尼の死んだ翌年である。

彼は極めて多く歌を詠じた人らしい。嘗て一年間毎日百首宛詠まうとして、たゞ孫兒の生まれた日だけが六十首にとゞまり、他は缺けた事がなかつたといふ。彼の歌集は若い時のに南櫻集、篠舍集、梟居集などがあり、又自筆の大隈言道家集四卷がある。これは今橋集二卷、戊午集二卷から成つて、弘化元年（皇紀二五〇四）から嘉永五年（皇紀二五一二）まで、卽ち四十七歳から五十五歳までの九年間の作を、大阪の中の島で自ら淸書したもので、これも數萬首のうちから拔いたといつてゐる

る。彼の歌が一見極めて淡々として、たゞよみ捨てたやうに見えてゐて、しかも餘韻嫋々としてゐるのは、果してその裏に非常な苦心と推敲とが隱されてゐたのであつた。

彼の歌論の著には「ひとりごち」、「こぞのちり」がある。彼はいふ、

僕かりに木偶歌と號づけたる物あり。魂靈なくて姿も意も昔の物なり。かかる歌は千萬首詠めりとも、籠にて水を汲むが如し。

然るにこの木偶、何年せば靈や入り來らん。僕つら／＼田舍人の歌を見るに、木偶にて世を終る人多し。古人は師なり、吾にはあらず。吾は天保の民なり、古人にはあらず。みだりに古人に執すれば、吾が身何八、何兵衞なることを忘る。意のうはべのみ大臣の如くなりて、詠む歌さぞ尊きことにてもあるべけれども、そは賈人の冠袍を著たるなり。全く眞似にて、歌舞伎を見るが如し。………善人たらんと欲せば、先づ心よりはじむべし。善き歌詠まんと欲せば、先づ心よりはじむべし。心を種として、吾が歌を詠ずるに、俚心俗意、もとよりにて、未だ風姿髣髴たる事を得ず。年を經、月に亙りて、漸々に少しづゝ古人に近づく。全く似ざるを以て古人に近しとす。古人に似たるを以て古人に遠しとす。

凡百の歌人の痛い處を衝いて居る。言道のやうに獨自の歌をよむ人にして、始めて堂々と主張し得る言である。

心の好き嫌ひを以て、物の吉凶を言ふは誤りなり。譬へば今の京畫を嫌ふ人ありとも、その京畫よきはよきなり。狩野家の畫よしとも、その畫あしきはあしきなり。歌も同じく、人に似て風はたがへど、よきはよし。唯吾が好む所を以て、世間の廣き物の善凶を定むること勿れ。

歌の體色々あるものを、眞實を好むとて、唯涙ぐましく眞目なる事ばかりいふは、偏れるなり。もとより、眞目なる心の時は、眞目なる事を云ひ、戯れたる時は、戯言を云ふ事なり。「世の中にたえて櫻のなかりせば」とうめき出でたる時もあれば、又「いざ櫻我も散りなむ」と溌り立ちたる時もありて、種々に歌のさま變るべし。古今に瀑布の歌、

清瀧の瀬々の白絲繰りためて山分衣織りて著ましを

こき散らす瀧の白玉拾ひ置きて世の憂き時の涙にぞ借る

これはこれ、世にあるまじき事なれど、瀑布を見て興の餘りに戯れ云へるなり。滑稽にて、眞目なる歌とは違ふことなり。此の類四季の歌はいふに及ばず、何の卷にも數多あり。眞目なる歌を實情なりとて、それにのみ偏るべからず。此の戯れはた實情の外ならず。

といつてゐる彼の言は大いに傾聽すべきである。これらは「ひとりごち」のうちにあるのである。

又「こぞのちり」に於て、眞淵の「うひ學び」と景樹の「新學異見」について、

眞淵の論は、歌といふものを詠み習ふ論なり。景樹は、歌の主意を云ひて、學ぶことを云はず。言道曰く、何の道も學ばずして、己れとよきに到らば　さばかりよき事はあらじ。されど學びて、よしあし交れる道に入り、年月を經て後にあしき事のみ選び捨てんより外はあるまじ。初めより善き事を選びとる力あらば、師といふ者は無くてありなん。何の道もしかなり。されど歌は外の技藝とは別にておのが心をいふものなれば、一つには心得がたし。

との言は極めて公平な見方である。これらの言によつて、言道の歌に對する態度や、その公平な識見は十分に察知する事が出來得ようと思ふ。

さて草徑集は、文久三年門人茂村恒久の上木したもので、別に分類はしてないが三卷とも各々春からはじまつて冬に終つて四季の順になつてゐる。その間々に所謂雜がまじつてゐる。彼自らの序に、「一歌にても取るべきは取り、捨つべきは捨て給はらむこと、今更にいふべきにあらず。をこなる人まねにこそ。」と謙遜してはゐるが、自信の作であることは推察し得られる。

さそひゆく力つかれて散る花を流るゝ水にゆづる山風　上卷

寒ければ居ぐゝまりたる嶺の雲たな引きてこそ秋は見えしか　同

暗き夜は見えぬ歎きをそなたよりいふばかりにもかをる梅かな　中卷

窓ちかく打ちたれてきて梅の花おのが手をさへつくゑ顔なる　同

折らるゝも覺えぬ程に手ふるれど心えて散る花の枝かな　同

降る降らぬ定めかねたる景色しておのれなづめる夕立の雲　下卷

打ちたるゝ柳の絲にすがりても引かれじとする浪の亂れ藻　同

この集を通讀して、先づ目につくのは、かやうに巧妙な擬人法が極めて多く用ゐられてゐる事であ

る。しかもこの擬人法が單なる修辭の末技ではない。言道が對象をつく〴〵と凝視して居る時、彼の自然に對する感激の心は、溫い同情となり、風や梅の花や又は浪にもまれてゐる藻などまでが、生々とした生命と感情をもつて言道の心に働きかけてくるのである。かくして自然に生じた擬人法である。否擬人などといふ間接的な生溫いものではない。詩人言道の眼はこれらのものの姿に、これらのものの生きた心を實際に見たのである。既にこの點に於て彼は歌人の第一人者であらねばならぬ。

流れくる花に浮びてそばえてはまた瀨をのぼる春のわか鮎　上卷
恐ろしき景色はやみて夕立のつね降る雨になりにけるかな　同
所せく草の上葉のはしるしてまろびも落ちぬ露の白玉　同
水鳥はたちて跡なき川の面にやがても落ちず舞ふ一羽かな　同
折々は雨のまゝにもしたがはで橫さまにちる花も見えけり　中卷
風ふけば空なる星もともしびの動くが如くひかる夜半かな　同
梅が枝にひとく〳〵となきながら見ぬかほつくる庭の鶯　下卷
夕日影なかばも海に入る時ぞうね〳〵ひかる沖のさゞなみ　同

これらの歌はいかにもよく自然を凝視し得てはじめて認め得る境地である。「風ふけば空なる星も」の如き一讀三嘆の妙がある。

はしるして身をまかせたるゐねぶりを心得がほに照らす春の日　上卷

こゝにもと人にいふ間にさ蕨のありかうしなふ春の野邊かな　同

漕ぐまゝに夜明けて見れば見しりたる昨日の船に又ならびけり　同

おのがすむ磯かと思ひてみるくひの入るれば水に動きぬるかな　同

行くまゝに家つゞきなる都路のいづこの程にひなび來ぬらむ　同

唯一つ夜半の枕にまろびこし木の葉うごきて寒き山里　同

これのみや今日はありつることならむ松の實一つおちし夕暮　中卷

一かたに向ひて散れる松の葉に風の行方をしらす庭かな　同

何事もなすわざなくて長き日に日のありかをば幾度か見し　下卷

詩人の敏感をもつて、しかもよく物を凝視してその精神を描寫し得る彼は、人々の見なれてゐる平凡々の事に材をとつてかく無限の詩味を横溢させてゐる。

うちわたすをち方人の道おそく行きはつまじき野の景色かな　上卷

いつよりか入相の鐘はなりつらむ心づきたるはての一こゑ　上巻

すゑ遠くまがひ路もなき一筋を見てもつかるゝ旅心かな　同

田の面より我が門さして來る人の近づかぬまに誰と知らばや　同

わりて見る度に面白しいつも〳〵並べるさまのおなじさや豆　下巻

これらの作にも彼の詩材を得る敏感さが現はれてゐる。

花の枝をたをればさわぐ蝴蝶かな己をさへにいかゞなるかと　上巻

人にのみ子を思はせて夕雲雀うはの空にはいかで鳴くらむ　同

わらはべの手を逃れこし蝶ならむはねやぶれても飛ぶが悲しさ　同

つまこふる蛙の聲の一聲のはてのなげきにたへずもあるかな　同

しぶ〳〵にまが引く小田のことひ牛うたれぬ先に歩めと思へど　同

宿るべき木の間もなくて飢鳥のなく聲かなし雪はふりつゝ　同

つばくらめ親まちかねてならべれば我も遲しと見る軒端かな　下巻

おのが身にまがふばかりもなれる子を猶はぐゝめる親鳥かな　同

無心の雲や風にさへ心を認め得た彼は、動物に對してかく溫い心をもつて詠めたのは當然なこと

である。

浅き瀬にまろび〳〵て流れ來る枝も櫻の花ざかりかな　上卷
こゝまでも夜半には波の打ちよせて松にかけたるちり芥かな　同
窗に窗むかひ合ひたる大船の一夜どなりのなつかしげなる　同
いま一重雲を出づれば雲もなき空なるものを知らぬ月かな　同
よく見れば門田のそほづいつも〳〵そなたに人のある心地して　同
いつしかと空しくなりて降る雪の寒き夜にたく炭だはらかな　同
ともすれば語らひどちのもの顏に膝抱かれてながめをぞする　同
何とかや月にはあらでおそろしき物もいづべき冬の夜の雲　中卷
手折りつる跡みぐるしき花の枝なりあふまではいかに久しき　下卷
手にただにもすゐて見るべき妹が島遙かに細く幼げにして　同
薄雲にねぶりがほなる空の月晴るゝは夢のさむるなりけり　同

これらは觀察に著想に彼獨得の妙味を見せてゐる作である。

釣りもえで歸るかたみの空しきをかろめ顏にも吹く嵐かな　上卷

飛びにぐるつばさ頼みの山烏人あなづりのわざのみぞする　上巻

末の世といつより人のいひ初めて猶世の末にならぬなるらむ　同

居並びてあるだに暑き夏の日に身に身を寄せてなれる桃の實　同

空をこそむかひかねしか水よりもおもはゆきまで照らす夏の日　同

唯一つ生ふる木もなし閒近くは撫でても見まくほしき青山　同

よそよりはいづれもおなじ村烏おのが妻こそつまも見知らめ　同

秋の雨ふる照るなしに笠きたる山田のそほづ疲れ顏なる　同

かゝげたる時のみあかし燈も我がゐねぶりにねぶりたぐひて　同

人なげに目の前をしも行きかひて塵さへ我をかろめつるかな　同

かずしらぬ魚の命は板の上のかたなの跡にしるしぬるかな　同（俎板）

風吹けば亂るゝ鳥にこきまぜておなじけしきにゆく木の葉かな　同

世の中の治めがたさやこれならむ一毛ぬくにも身さへ動けば　同

えもにげぬすくせ悲しき櫻ばな折らるゝ枝の鳥はたつとも　中巻

老いぬれば松の葉さへもおのづから打ちすげみたる面影にして　同

庭きよく拂ひてけりと見るばかりはれたる空の朝霞かな　下巻
行く人をゐなか童の見るばかりたち並びたるつくづくしかな　同
はきだめの塵の下なる芋すらも子は親にこそつきてありけれ　同
白雲にはねうちつけて飛ぶ鶴のつばさも今は塵ぞはらへる　同（羽帚）

著想がいかにも非凡である。

拂へども立ちまふ塵の去りやらでたゞおき所かふるなりけり　上巻
けふ見れば少女になりぬ去年までは一足しても飛びしならずや　同
年を經てなきにしるきをよきことのあるべかしくも思ふ行末　中巻
老いぬれどまた此の春もさく花のちる花のともいひくらしけり　同
歸り來て寢ての後さへ花見つゝゆられて舟にある心地かな　下巻
今はとて打ちぬる時は命さへわが身とともに伸ぶかとぞ思ふ　同
あはせてはまたとき放つ古衣かくてぞ春も秋も經にける　同
手にとりて空しと捨つるうつせ貝みな世の中はかくこそありけれ　同

輕妙洒脱枯淡の極である。

たわらはのものゝふこともことわりに寂しさ永き春雨の空　上巻
妹が背にねぶるわらはのうつゝなき手にさへめぐる風車かな　同
親なけば子さへ泣くなり世の中のせむすべなさも何も知らずて　同
何ごとか遊ぶあそばぬいさかひも泣くぞ限りのわらはべの友　同
聞きすてて飯たく親の見ぬまにも聲の限りになくうなゐかな　同
風吹けば庭の木の葉のよるばかり片すみごとにゐるわらはかな　同
若菜つむ友におくれてあぢきなく啼く子もまじる春の野邊かな　中巻
さし柳さしていくかも經ぬものを根ざし引き見る友わらはかな　同
幼きもまた幼きをなつかしみ鳥の子いだく里のたわらは　同
いくばくのおとりまさりも見えぬ子の負へる負はるゝ哀れなるかな　下巻
こたへする聲面白み山彦をかぎりもなしによぶわらはかな　同
これらの子供を題材にした作の多い處を見ると、彼は子供が好きであつたのではないかと思ふ。
きこえずば猶こわだかに道問はむこなたに行くや志賀の山越　上巻
輕妙な作である。問答體になつてゐるのが面白い。

いつしかと我とりなれて後手の老のすがたは誰にならひし　上巻

わらはべのこゝにありとも知らすれど見えぬばかりになれる老かな　同

何事もしらぬ翁のさとじこり誰もあはれといふ人のなき　中巻

何事も聞えひがめて老の身のことたしかなる思はくもなし　同

なにごとかいひさして末は忘らるゝ老こそ老の心なりけれ　同

いつよりかおもて皺びて老のどちいづれもおなじ友垣ぞかし　下巻

これらは老を詠じた作である。

わがごとく酒に醉ふらし音たてて打てば打つ手をまぬる山彦　上巻

醉ひ伏せる身を遠ぞきてあぢきなくよそより守るねやの木枕　同

野べ寒きかへさも樂し我が宿にかみたる酒ものこりありやと　同

かみおける我が手づくりもまだしきにほころび出づる壺の梅かな　同

み冬よりかみて飲みたる酒さへも殘る寒さの程はありけり　下巻

なき時はなくて幾日か過すらむある日は酒のあるに過ぎつゝ　同

彼の酒に對する愛著を知るべきである。

くま〴〵にかくれ〳〵も行くものを身にさしあてて吹く嵐かな　上巻
家にてはとかくいはれし木枕の高きひききもなき旅寐かな　同
所せくとなり〳〵をへだてたる世の中垣のむつかしげなる　同
表のみめでたく見えてぬひ物の裏むつかしき世にこそありけれ　同
人心くちてはなれて桶の輪のわかれ〳〵になるぞすべなき　同
水にだにうくかろ石のかろければ沈む時なき身のやすさかな　同
よそめのみもて隱されて世のうきめ見てみぬふりも哀れいつまで　同
おのれさへ骨身にそむく世の中を人なつけてと思ひつるかな　同
早くより人の用ゐぬ我が身もて老いたる故といひけたるらむ　同
櫻花さきなみだりそ今の世はやつるゝにこそ人もあなづれ　下巻
我が身こそ何とも思はねめこどもの憂してふなべに憂き此の世かな　同
しな高きこともねがはず又の世はまた我が身にぞなりて來なまし　同

これらの歌に彼の人生に對する態度がよく現はれてゐる。これを要するに彼の歌は平淡であつて餘情がある。輕妙であつて沈痛でない。生活苦を詠じて脫俗の風がある。洒脫のうちに涙をかくして

ゐる。あらゆるものに深い同情を注いでゐる。そして非凡な觀察、巧妙な譬喩で平凡の中に津々たる詩味を横溢させてゐる。やゝ俳人一茶の面影を思はせるものがあり、一脈の俳味を帶びてゐるやうにも思はれる。而してその調は萬葉にあらず、古今にあらず、勿論新古今でもなく、全く彼の獨自のものである。これらの優れた特長をもつてゐる事が、彼の當時に喜ばれないで、今日の聲價を得た所以である。まことに言道こそ天來の歌人であらねばならぬ。

## 平賀元義集

元義の父は備前國岡山藩の中老池田志津摩憲成の老臣で、平尾新兵衛長春といつた。その祖先は信濃の平賀源氏の裔だといふ。寛政十二年(皇紀二四六〇)七月三日、元義は母の實家であるところの、備中國下道郡穂北郷陶村の内奈良の農宮本平兵衛の家に生まれた。大隈言道の三歳のときである。幼名猪之介、後に丹介、喜左衛門、七藏と改めた。實名は直元、長元、義元、又別に直滿とも稱してゐたが、後に興津氏の厄介人になつてから興津新吉藤原直元、又は義元といつてゐた。天保三年に平賀姓に復して後は、平賀左衛門太郎源元義と名乗り、外に禰古彦又は吉備雄とも稱し、號を石楯、楯之舍主人、雄詰ノ舍、備前處士といつた。

文化九年（皇紀二四七二）十三歲の時に、岡山藩師範馬場氏（劍）、牧野氏（弓）に入門した。翌文化十年の頃は岡山番町筋の米搗會に出席して、黑住教の開祖黑住左京の講話を聞き、又藩の學校に學んだ。文化十四年十八歲の時には岡山藩士齋藤直興と親しみ歌會に出席した。同年岡山藩士小林氏の女を娶つたが、翌々文政二年（皇紀二四七九）に離緣した。時に元義二十歲である。翌文政三年は藩の師範安田氏に入門して捕手、腰廻、手裏劍を學び、一方同志を集めて日本書紀を開講したが、主家に退身を願つて父の厄介人となつた。文政七年（皇紀二四八四）二十五歲の頃は頻りに謠曲を學んだ。その年の末に元義の弟源五郎が父の跡目相續をして、平尾新兵衛長直となつたので、翌文政八年からは平尾家の厄介人たる事をやめて、祖母の實家興津長八郎重之の厄介人となり、興津氏が藤原姓であつたので、興津新吉藤原直元（又長元）と稱するやうになつた。文政九年二十七歲のときに、文政三年開講以來繼續してゐる古學社中の爲に神書を講じた。又一方には槍を尾澤氏に、戶田流居合を根岸氏に、据物を入江氏に入門して學んだり、岡山五番町の興津家にあつて農民を無禮討にしたりした。

文政十年（皇紀二四八七）二十八歲の五月に、岡山藩家中犬丸松次の養子となつて犬丸新吉といつたが、同年十二月離緣となつて、再び興津家にかへり、もとの興津新吉となつて天保三年に至る。

天保三年(皇紀二四九二)三十三歳の時の十二月、他所住居を願ひ、藩籍を脱して本姓に復し、平賀左衛門大郎源元義と稱し、まもなく岡山を去り、備中、備後、石見、出雲、伯耆、因幡等を巡り、その間に貫之抄、歌仙歌集等を抄してゐる。天保六年(皇紀二四九五)三十六歳の時から弘化元年まで十年間、備前國一ノ宮の社家大藤内家の客となつてゐた。此の間にも諸方に遊んで古書を抄してゐる。弘化二年(皇紀二五〇五)四十六歳の四月上京してゐる。弘化四年四十八歳の春頃から美作方面に旅行し、嘉永元年(皇紀二五〇八)四十九歳の時、備前國磐梨郡稻蒔村の石淵鴨神社の神主長濱豐三郎の二女富子を娶つて其處に同棲するやうになつた。嘉永四年五十二歳の時には、淸水谷家の侍格として己と母とは駕籠に乘り、家來として門人數名を從へ、槍を立て、若黨以下一行十數人で堂々と上京して、和漢の大家を歷訪してあるいた。安政二年(皇紀二五一五)五十六歳の春以來痼疾劇しく五月頃癒え、六月再發醫療を加へて又癒えたので、美作にゆき、桑村に滯留中再び病に苦しみ、七月快方に赴いたが猶歩行が出來なかつた。八月に辛うじて稻蒔に歸つた。

安政四年五十八歳の時、門人矢吹林太郎等の後援によつて美作勝田郡飯岡村多門に楯の舍塾を創立した。この矢吹氏は富家であつたとみえて、元義は屢金策を依賴してゐる。京都吉田家から神社覈錄撰定のために、美作備前備中備後四ヶ國の古跡地名調査を元義に依賴してきたので、これを成

就して稿を吉田家に送つた。文久三年（皇紀二五二三）六十四歳の時、岡山藩主池田茂政襲封以來初めて入國し、元義にも室入住居御免の沙汰があり、元義大いに悦んだ。翌元治元年春には長男源大を伴つて美作地方を旅行し、冬病んで長濱家にかへり、また病んだが、その翌年慶應元年（皇紀二五二五）六十六歳の正月、病がやゝ快方であつたので、又長男をつれて旅行に出た。同年十二月頃は、備前上道郡大多羅村の門人中山縫之助の家に居たが、藩主から明年正月登城の上御目見得仰付けられる旨の命があり、殆んど同時に備前國御野郡中野村の黑住教の行司所から顧問としての招聘があつたので、

きはまりて貧しき我も立ちかへり富み足り行かむ春ぞ來向ふ

と詠んで、十二月二十八日中山家を出て、同郡長岡村に赴く途中、長利の村はづれで、急に卒中で斃れた。門人相議して大多羅村字大師の中山氏の墓地に葬つた。享年六十六歳、子は後妻富との間に長男源大、次男藤次の二人があつた。

元義は古學者國士を以て自任して奇行のあつた人で、彼自らは古學を兵學、神道、歴史、地理、民族、國法、神事、政事、醫學、名物、文章、歌學と、十二の科目に分けてゐる。「和歌の體の事御尋、先師賀茂眞淵翁の歌の體を好み申候。然れども學問の餘力によみ申迄にて、歌ばかりよみ不申

故、世上の歌よみの樣に、數は得よみ不申候。」といふ彼の書簡があるといふが、これをみても彼自らは國學者としてたつてゐたので、歌はその餘技に過ぎないのであつたらしい。元來元義の歌をはじめて天下に紹介したのは羽生永明氏であり、ついで羽生氏によつて元義をしつた故正岡子規が激賞して歌壇に喧傳されるやうになつたのである。子規が元義の歌を喜んだのはその萬葉調であるからである。子規は、

まぬけのそろひともいふべき歌人等の中に萬葉の趣味を解する者は半人も無き筈なるに、そも元義何に感じてか斯く萬葉には接近したる、こゝ殆んど解すべからず。

といつてゐるが、これは元義の事のよく知られなかつた頃であつたからであらうが、現在ではさして驚くべきほどの事でもないであらう。契沖以前の歌人は知らず、眞淵以來の古學者ならば誰でも萬葉は讀む筈である。始めて萬葉をよんだときには、實に目のさめるやうな驚異を感じるのは何人も經驗したところであらうし、直情徑行の元義が萬葉に共鳴するのは當然な事であり、しかも元義が眞淵の著をよみ、備中には眞淵門の谷眞淵の門人内藤中心(なかご)があり、その家集櫻舍集中の歌を元義が抄出してゐるといふから、これらのことが因をなして、元義をしていよ／＼萬葉調に傾倒せしめたのであらう。

扨かやうに單なる歌人を以て快しとしなかつた元義は、歌集などもなかつた、それを岡直廬氏・赤木格堂氏、羽生永明氏等の努力によつて漸次收錄されてきたのである。

高田のや加佐米の高峯み雪積み春風さむし薬田の足守　上

ひさかたの天うちきらし兒島のや麥飯山ゆあわ雪流る　同

まな兒なす兒島の高嶺津島山陽炎たちぬ夜は明けむとす　同

大君の春さりくれば青菜つむわが山方にかすみ棚引く　下

妹が家の板戸押開き我が入れば太刀の手上に花ちりかゝる　同

棚霧らひ雨(あ)ぶりの山の朝雨に濡れつゝ行けば涼しくもあるか　同

これらは敍景歌である。

大君の加佐米の山のつむじ風益荒(ますら)たけをが笠吹き放つ　上

弓柄とる益荒猛雄(たけを)しおもふ事遂げず殆(ほとほと)かへるべきかは　同

月よみの光さやけみ鉾とりて男さびする丈夫のとも　下

吾が大君ものな思ほし大君の御楯とならむ我なけなくに　(備後三郎)　同

弓とれば人におくれぬものゝふの世に名を揚げむ時をこそ待て　同

これらはいかにも男性的の雄渾な歌である。

妹が手を鳥羽の島の朝風に曉飮みし酒さめにけり　上

天照皇御神も酒に醉ひて吐き散らすをばゆるし給ひき　同

杯に散り來もみぢ葉みやび男の飮む杯に散り來もみぢ葉　同

たゝなめて射水の神の奈義の峯初雪ふれり見つゝ飮めこそ　同

これらは酒を詠んだ歌である。元義は大酒家であつたともいふし、さして大酒ではなかつたともいふが、書いたものにも、元義醉書といふのが多いやうであるから、大酒家でないまでも酒は大いに好んでゐたのであらう。

花守は心許しついざ吾妹上枝の梅をこゝに手折らむ　上

皆人の得がてにすとふ君を得てわが寐る夜らは人な來りそ　同

天地の神に祈りてますらをを君に必ず生ませざらめや　同

久かたの月に向ひて吾妹子と飮むさかづきに梅の花ちる　下

吾妹子がかきひく琴の殊更に音新たなる春のあかとき　同

こゝろなく啼く鳥かも吾妹子に別れのをしき春の曉　同

たらちねの母にころばえ夜逢はむ妹とし我は晝こそ逢ひけれ　同

これらは女性を題にした歌であるが、いかにも率直に大膽に歌ひ出してゐる。右の例にもみえるやうに、彼の歌には「吾妹子」がよく出てくるので、人が吾妹子歌人と渾名したといふことである。

えみし等は知らずやありけむ靈ちはふ神と君とのいます此の國を　上

整ひし五百津の軍いかでかも君が御楯とならざらめやも　下

暗四鬼の司人たち願はくはすめらみ國の大道をゆけ　同

これらに彼の思想をみるべきである。

中卷には長歌が出てゐる。

十二月二十九日、野々口隆正及びある漢學者流の、おのれを天傳ふ平賀の老翁、また平賀翁なにと物に書きたるを見て、いたく嘆きてよめる歌

皆人は　吾を老翁といふ　みな人は　吾を翁とふ　よしゑやし　老翁ともいへ　よしゑやし
翁ともいへ　黑髪は　白くもならず　白き齒は　黑くもならず　足すらも　いまだいなへず
口すらも　よくぞ物いふ　此の足の　踏みたつ極み　此の口の　物いふ限り　大夫の　心振起
し　八島國　あるき囘らひ　古の　御書押開き　御國ぶり　說きぞ示さめ　事しあらば　火に

も水にも　大君の　爲にぞ死なめ　年は老いぬとも

いかにも面白い作である。

かやうに彼の歌はいかにも率直である。そしていかにも調子がいい。この雄渾な調子といふ點に於ては、元義は萬葉歌人中の傑出したものである。而して元義自身もこの歌調を最も重んじてゐたのであらう。それは彼の詠草らしい反古に「元義未しらべざる歌」と記してあるといふ事や、門弟堀尾の宅で萬葉の講義をした時に、巻二人麿の高市皇子尊城上殯宮之時歌にいたると、元義はその歌を聲高らかに繰返し吟誦して、つひに辭句の解に及ばなかつたといふ逸話などで推察し得ると思ふ。

奈義の山みねの白雪かすむなり美作國内(くぬち)春し立つらし　上

これには、「慶應元年正月二十六日、勝田郡にて山を見さけて。」と詞書がある。

見渡せば奈義の神の峯雪消えて美作國内夏立ちにけり　下

これは羽生氏の註解平賀元義歌集によれば、「嘉永五年四月一日勝田の郡豐國の郷にて。」と詞書がある。がこの二首は殆んど同趣向の歌である。

山陽(かげとも)に春し來ぬらし神さぶる奈義山雪に霞たなびく　下

山陰には春し來ぬらし伯耆のや大山雪に霞たなびく　下

これも殆んど同趣同巧の歌である。

備前國周匝の武士高木帶刀が家の庭にある谷蟆の石を

神漏伎の少名御神や造りけむ見れば神しき石の谷蟆　下

嘉永三年三月二十八日、播磨國赤穗郡八野鄉入野村鶴屋濱崎氏が家に持ち傳へたる鶴龜松竹梅のかたなせる奇しき石を見て

大穴牟遲少名御神の作りけむ岩かも見ればこゝら神しき　上

かやうに同趣同巧の歌が少なくはないやうである。それから元義の歌には地名などをよみこんだのが非常に多いのも一つの特長をなしてゐる。

彌兵衞が十握の劍遂に拔きて富子を斬りて二きだとなす　下

彌兵衞は利兵衞とある本があるが、これは元義の壯年時代目擊した市井の事件を題材にとつたといふことであるが、その女が富子、天保十三年頃大守隆公の家歌會の時の作といふ

あけむあした掃ふな富子おもしろく今日の筵に散る櫻花

この時の女がまた富子、又羽生氏の年譜の天保十四年八月十三日の條に、元義の狎女深井富なるも

のが元義に手紙を送つた事があり、嘉永元年に娶つた後妻が富子であるのは、偶然の一致かもしれないが、そのいづれもが同名であるのは不思議である。

## 野鴈集

安藤野鴈は奥州半田銀山の小吏の子で、文化七年（皇紀二四七〇）に生まれた。幽眞の生まれる前年であり、有功十四歳の時である。通稱を刀禰といふ。江戸に出で、番町の塙忠寶の塾に學んだ。一時八丁堀同心某の養子となつたが、間もなく離縁して塙の塾に歸り、晩年は諸國を流浪し、慶應三年（皇紀二五二七）三月二十四日、武藏國大里郡冑山村根岸武香の家で歿した。享年五十八。常に弊衣をまとひ繩を帶とし、雨中草履をはいて、悠々歌を誦しつゝゆくといふやうな風の人で、非常に酒を嗜み、奇行逸話が尠なくないといふ。

野鴈集は古ぶりと今ぶりとに別れ、古風は長歌が主で、雜、相聞、挽歌に分類されてゐるが、歌數は僅かに十六首、今風は春、夏、秋、冬、戀、離別、羇旅、賀、哀傷、雜に分類されてゐて百八十四首である。

春山をゆめ人懸くな忘れにし彼の眉引の思はゆらくに

たゞ一目見てし君ゆゑかぎろひのもゆる春日を戀ひわたらくも

これは古ぶりの相聞の長歌の反歌である。今ぶりの例を引いてみよう。

おのづから急がで渡る春の日に殘る寒さものどけかりけり　春

ながめには柳の眉もたゆげにてうるみて見ゆる花のまなじり　同

ゑひみだれ花にねぶりし酒さめてさむしろ寒し春の夕風　同

吉野川はしる小鮎のかくれがは花のふゞきのよどみなりけり　同

ふるさとも春もわかれの關山に花のみ散りてあふ人もなし　同

さみだれの雨今こそは晴れぬなれあかりて匂ふ姫ゆりの花　夏

ながめむかふ心々にかなしさの色さだまらぬ秋の夕雲　秋

さぶしさは水底までにとほりけり夕日のすめる秋の砂川　同

枝にゐる鴉ばかりをくもりにて霜よりしろきありあけの月　冬

最も特色を發揮して面白い歌の多いのは雜である。すこし引かう。

軒端よりふりさけみれば富士のねはあまり俄にたてりけるかな

これは岩淵にての作である。「あまり俄に」は寫し得て妙。

秋ふくる庵のあまりさびしきに盜人だにも入りて來ななむ
人は皆ねぶたかりとて歸りつるあとの霜夜のおもしろきかな
わが顏をかべの穴よりうかゞひつ鼠の友とおもふなるべし
おのづから出でて流るゝ山清水澄みもにごりもなき世なりけり
戀しさのあまり思ひに過ぎぬれば憎くさへなるものにぞありける
いにしへの妹がぬひてしたへの帶紐にもあへずなりにけるかな
消え殘る身の油火をかゝげても讀ままほしかる書にもあるかな
命こそはかなものなれ寶なれたから物なればかなものなれ
何事を思ふとなしの醉泣きにたねなくおつる我がなみだかな
一もじをみそもじばかり長らへて讀み竝べたる歌にもあるかな
いかにも邪氣のない飄逸な歌である。歌集の最後には、
五十まで諷へる歌をかきつめて二もゝちにもなりにけるかな
といふ歌を添へてゐる。

# 和田巖足家集

和田巖足、初め千尋といひ、後は巖足と改め、又の名を眞震といひ、馬百合ともかき、巖足を伊豆足とも書く、通稱は震七郎、晩年には釣龍翁と號した。肥後熊本の殿人弓削平八の二男で、天明七年（皇紀二四四七）鹽屋町の邸に生まれ、後、同藩士和田園四郎の養子となつた。彼天性磊落、容貌魁偉、非常に酒を好み、武藝を能くし、就中槍術に秀でて居た。夙くから長瀬眞幸の門に入つて國學を修め和歌を學び、まことに文武兩道に秀でた典型的の武士であつた。

文化十三年（皇紀二四七六）八月、三十歳の時に、養父の跡目を相續して、御番方となつて公事に勤務してゐるうちに、世事に疎い彼は、事によつて、文政五年（皇紀二四八二）八月四日、肥後の南端の八代の御城附に貶せられた。八代では組頭の副役を命ぜられてゐたが、天保三年（皇紀二四九二）四十二歳の時の二月二十八日、彼が小宴を開いた時、かねて公から禁酒を命ぜられてゐた園部某を招いた廉で、同年十一月に役を免ぜられ、翌天保四年四月には、彼の養子和田土之助と、嫡女とが家出をした事に坐して、三十日の逼塞を命ぜられた。

天保十一年十一月には、再び御城附組脇仰付けられ、弘化三年（皇紀二五〇六）八月には、其の精

勤を賞せられて、御紋付上下一具を賜はつた。ついで彼の次女が熊本の殿人大西彌左衞門に嫁し、嘉永二年（皇紀二五〇九）四月に、大西の一族は知友さへ誘ひ合はせて、八代の巖足の家を訪ねた。彼の喜びは非常なものであつた。恰もこの時彼は寃罪をうけて役を免ぜられ、佐敷御番を命ぜられた。人々はその寃を雪げとすゝめた。彼は「讒言聞え上げたらむ人を、言ひ顯はさむは、おのれもやがて其の人のなしし業に近し、そは敷島の日本心にあらじ。」といつて、それを退けて、養子と共に謹愼閉門の身となつた。熊本からの來客達も悄然と去るよりしかたがなかつた。彼はこの時の感慨を歌つていふ。

足乳根の　母が養ふこに　あらねども　眉ごもり如　こもりゐて　名殘も盡きず　朝鳥の　ただ立つ人を　朝もよし　紀の關守が　たつか弓　引きも止めず　かな戸べに　送りもあへず　行く水の　過しやりつゝ　樫の實の　一人二人の　家人と　打向ひ居て　とふ言も無し

反歌

妻兒どもも言こそ問はね玉襷かけてやすらふ人の船路を

この時彼は六十三歳であつた。がこの謹愼は二十一日間でとけた。そしてその年の末に佐敷へいつた。この佐敷御番は全く流刑に等しいものであつた。がしかし彼は公務にいそしんだばかりでな

く、その隙々にはその邊の地理を踏査し、要害を見定め、一朝事ある時に備へたのである。

翌嘉永三年正月、熊本の兄危篤の報に驚き、急遽兄の許に赴いて看護したが、兄は終に長逝した。

山はこえ海はわたりて見し君もいまはいほへの雲にかくりぬ

とはこの時の詠である。そして安政四年(皇紀二五一七)七十一歳の十一月に、病のために跡を養子喜太郎に譲つてしまつた。安政六年(皇紀二五一九)四月二十七日、遂に佐敷の番所で歿した。享年七十三歳、三十歳で和田氏を繼ぎ、三十六歳の時、些細の事から八代御城附に貶せられ以來三十七年間を、殆んど罪なくして配所の月を見たのであつた。

巖足の歌は古體である。がしかしそのうちには、

玉にぬくものならなくに花の雨は雫をさへぞめづべかりける

一つ散り二つ數そひ風またで落葉の積る夕暮の庭

朧夜の空行く月のかげ見えてゆたかに寄する春の浦波

音たてて降るとはなしに咲きにほふ花の雫となれる春雨

といふやうにまれには近世風を帶びたものもある。

えみし船いましきり來よ蔵の矢のたねつきぬまに射てましものを

寧樂の世のふりにし昔を我はもよ友とのみこそ朝夕に見れ
とみ果ててとみ等申さく御迎への御馬引きたてて松陰にありと
わすらるゝ我のみもとな戀せじと御手洗川にみそぎせむかも
荒駒のくゑはらゝかすあがきより村消えかゝる春の野の雪
つむがりの太刀も得てしかわが戀の戀の奴を切り拂ふがね
酒のまむ友どちもがもしく／＼に雪の降る夜は寂しきものを
荒野なる尾花吹き越す秋風にしゝまつ征矢もそよとこそなれ
大伴の旅人のきみはまさねども月待つほどの友はありけり
ますらをの心たらひに花は見む醜の御楯は命はかなし
眞直にし世をしわたらば大路行くことひの牛の遲くともよし
馬手に越す弓末に月のかゞやけば程なく聞ゆ矢叫びの聲

かやうに古調な歌であるが、「荒野なる」や「馬手に越す」のやうにやゝ細かい趣の歌もある。

刈菰の亂れて靡くあやもなしあやはなけれどしゑや面白し雨の青柳

これは旋頭歌である。

何のいとまありてかもとな櫻の咲きのさかりに異こひはせむ
春べは花をりかざし遊びつるぬべの秋萩したなつかしも

かやうに古風な四言の句のある歌をも詠んでゐる。

ぬもせにたづさはに居りむれ居りのどに遊ばくたづさはに居り

これは四言が二句もはひつてゐる。

長歌では米艦來航の件を詠んだのが、數十句をつらねて堂々たる作で、いかにも彼の氣概をみるに足るが、餘り長いので、能勢家で酒宴を催した時の歌を引かう。

此の宿の　泉の壺に　家君の　かよわきかたの　弱肩に　太玉襷　とりかけて　釀成酒の　新しぼり　今日斟み初むる　まどゐして　誰はあれども　瑞枝さす　松崎のあそ　西の主　眞震らをさへ　中垣の　隔てぬ友と　猪じもの　膝折り伏せて　埋火の　炭火搔起し　三栗の　かなに圍み居　勇くはし　鯨のもころ　呑む酒の　呑みのすさびに　主さへ　呑みなさへつゝ　時も今　伏木に隱る　荒熊の　あらおもしろの　冬の宴や

反歌

春ならば雪の伏木をいでよ君さらに仙境のみきを給らむ

かやうに彼の歌はいかにも蒼古で、或は雄渾或は飄逸である。

解題終

# 山齋歌集

鹿持雅澄

# 山齋歌集

鹿持雅澄

## 上

萩

小牡鹿の妻問ふ小野の萩の花今や咲くらむいざ行きて見む

雪

走出の堤に立てる槻の樹の枝もとをゝに降れる白雪

秋風

夕されば稲葉おし靡べ白鳥の鳥羽田の面に秋の風吹く

霜

吾が門の一むらすゝき押し靡べて朝霜いたく降りにけるかも

旅

志賀の山夕越え來つゝ岡の邊の小竹葉刈り敷き寐ねがてぬかも

---

○小牡鹿の云々　牡鹿が牝鹿を訪ね行く野に咲ける萩の花。萩は鹿の花妻ともいふ。
○走出の堤に立てる槻の樹　萬葉集卷二「わが二人見し走出の堤に立てる槻の木のこち〲の枝の云云」走出は門口の意。
○枝もとをゝに　枝も撓むばかりに。「とをゝ」は「たわゝ」と同じ。萬葉集卷十「足引の山路も知らずしらかしの枝もとをゝに雪の降れれば」
○夕されば云々　金葉集秋大納言經信「夕されば門田の稲葉音づれて蘆のまろやに秋風ぞ吹く」。
○夕されば　夕方になること。
○おし靡べ　おし靡かし。
○白鳥の　鳥羽の枕詞。
○鳥羽田　山城國紀伊郡。
○吾が門の一むらすゝき　後撰集戀小町があね「我が門の一むらすすきかりかはむ君が手なれの駒も來ぬかな」
○志賀の山　近江國滋賀郡。

山時雨

しぐれ降る冬山道を越え來れば衣手さむく濡れにけるかも

會レ家之時、賦二野外雪之題一

この朝け小簾まきあけて春日野に降れる白雪見れど飽かぬかも

山吹

玉川に咲きてにほへる山吹の花の盛りは見れどあかぬかも

詠花十首之中

朝さらず雪と見るまで高座の三笠の櫻咲きいでにけり

名所山

朝さらず雲居たなびく葛城の高間の山は見れどあかぬかも

貌鳥

打ち靡く春さり來れば高圓の野邊の貌鳥朝にけに鳴く

梨花

うち寄する浪と見るまで櫻麻の麻生の浦梨花咲きにけり

かた枝さす麻生の浦梨いまもかも花咲きぬらむいざ行きて見む

萵

○この朝け　今曉。
○小簾まきあけて　白氏文集卷十六「遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看。」
○玉川　六玉川の中の井手の玉川。山城國綴喜郡にある山吹の名所。
○朝さらず云々　萬葉集卷三「春日を春日の山の高座の御笠の山に朝さらず雲居たなびき云々。」
○朝さらず　毎朝。
○高座の　みかさの枕詞。
○葛城の高間の山　大和と河内との國境。高間山は葛城山の主峯。
○打靡く春さり來れば　萬葉集卷十「打靡く春さり來ればさゝのうれにを羽うちふりて鶯鳴くも」
○打靡く　春の枕詞。
○春さり來れば　春になつたから
○高圓　大和國添上郡。
○貌鳥　定說がない。例へば稚澄は顏よい鳥といひ、仙覺はカッコウ鳥といひ、眞淵は喚子鳥といふ
○朝にけに　毎日。
○櫻麻の　をふの枕詞。
○麻生の浦梨　顯註「志摩の國にあり。齊宮の御莊にて、梨を獻ずる所なり。伊勢志摩といひて一つによめり。」
○かた枝さす云々　古今集卷二十「をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寢てかたらはむ」
○かた枝さす　木の一方へ枝のさし伸びてゐる。

鶯のかよふ岡邊のつゝじ花いざ家づとに手折りて行かむ

相聞

高圓の野邊のさを鹿吾が如く片戀のみに音をや鳴くらむ

漁舟

夕凪に遊ぶ鷗の羽根が崎こぎたむ舟は漁すらしも

小松原

足曳の山の常陰の小松原茂りもゆくかいや年のはに

難波潟

生駒山うち越え來れば難波潟難波壯士の綱引する見ゆ

名所山

さゞ波の志賀津に立ちて見渡せば鷲の高嶺に雲ゐたなびく

名所川

音羽山夕越えくれば逢坂の關の小川にさゞれ浪たつ

名所橋

白鳥の飛幡の里を立ちいでて宇治の川橋ちかづきにけり

羽根崎

---

○家づと　家への土產。
○相聞　愛慕の心を詠んだ歌。
○鷗の羽根が崎　鷗の見える羽根が崎（土佐國安藝郡）。鷗の羽根から羽根が崎といひ下す。
○こぎたむ舟　漕ぎ廻す舟。萬葉集卷三「繩の浦ゆそがひに見ゆるおきつ島こぎたむ舟は釣せすらしも」。
○常陰　宣長の說では、山の撓んで陰をなした所。萬葉集卷十「足引の山のさかげに鳴く鹿の聲聞かすやも山田守らす兒」
○茂りもゆくか　茂りもゆくかなの意。
○いや年のはに　愈每年の意。
○生駒山云々　金槐集「箱根路をわが越え來れば伊豆の海や沖の小島に浪の寄る見ゆ」
○生駒山　大和河内の國境。
○難波壯士云々　萬葉集卷四「わが衣人になな著せそ網引する難波壯士の手には觸るとも」
○さゞ波の　志賀の枕詞。
○志賀津　近江國大津の湊。
○鷲の高嶺　京都東山の一峯鷲の尾山、靈山ともいふ。
○雲ゐ　雲。
○音羽山　京都東山の一峯。
○關の小川　近江國滋賀郡。音羽川、鏡川ともいふ。金葉集秋　源俊頼朝臣「音羽山もみぢ散るらし逢坂の關の小川に錦おりかく」
○飛幡の里　鳥羽の里。
○宇治の川橋　山城國宇治郡。

大鳥(おほとり)の羽根(はね)の崎(さき)なる白波にたゆたふ舟の泊(とまり)しらずも

鏡河

さにづらふ妹(いも)が手馴(てなれ)の鏡河(かゞみがは)ゆく瀬の浪の音のさやけさ

九月旬餘、月光清朗之夜、遶聞二鶴喧一作歌

月讀(つきよみ)の光さやけき秋の夜に雲居とよもし鶴(たづ)ぞ鳴くなる

野時雨

兒等(こら)が家路(いへぢ)さかりし來(こ)ずば武藏野(むさしぬ)の時雨の雨に袖はぬれじを

題二村上彦四郎畫一

丈夫(ますらを)の數(かず)にもあらぬ奴等(やつこら)の手に取らすべき旗にあらなくに

雪朝將二交遊一

たゞ獨(ひと)り見(み)まくはさぶし赤駒(あかごま)の足掻(あがき)を速(はや)め來ませ吾(あ)が背子(せこ)

以二「加保與波那(かほよはな)」五言一、冠二毎句頭一

蜻火(かげろひ)のほのかにぞ聞く呼子鳥(よぶこどり)羽買(はがひ)の山に鳴き渡るこゑ

寄碇戀

大舟におろす碇(いかり)のいかばかり思(おも)ひに沈(しづ)む吾(あ)が心(こゝろ)ぞも

山　柳

---

○大鳥の　羽根の枕詞。
○大鳥の歌　萬葉集卷二「ものゝふの八十氏川の網代木にいざよふ波の行方知らずも」と歌調が似てゐる。
○たゆたふ　搖られたゞよふ。
○鏡河　高知市中を流れる河。
○さにづらふ妹が手馴の　鏡の序詞。
○さにづらふ　妹の枕詞。
○ゆく瀬　流れゆく川の瀬。
○月讀　月。
○とよもし　響かせ。
○兒等が　妹が家。
○家路さかりし來ずは　離れ遠ざかつて來ないならば。
○時雨の雨　時雨。
○村上彦四郎　村上義光。
○奴等の手云々　大塔宮の錦旗を賊の手から奪ひ取つた話。
○見まくはさぶし　見るのは寂しい。
○赤駒の云々　萬葉集卷十一「赤駒の足掻はやけば雲居にも隱れゆかむぞ袖まかむ吾妹」
○赤駒　赤毛の駒。
○足掻　前足で地を搔くこと。
○吾が背子　親愛なる友の意。
○蜻火の　ほのかの枕詞。
○呼子鳥　郭公。
○羽買の山　萬葉集卷十「春日なる羽買の山ゆ」云々の歌から、高圓山若草山、三笠山の總稱か又はその一つかといふ。
○大舟におろす碇の　大舟から水中に投げ入れる碇の如く。思ひに沈むの比喩。
○沈む　戀の物思に氣がふさがる。
○沈むは碇の緣語。

春日なる三笠の山の賢木原さかえも行くか神の御前に

初春、詣二母墓一、聊述二心緒一

眞幸くて世にましまさば初春の豐の祝言相言はましを

神祇

白眞弓おして射さくる八幡山嶺の木立は神さびにけり

古京

青丹よし寧樂の京は見るごとにいよゝさぶしも寧樂の京は

落ちたぎつ瀧の京を今見れば舊りにし御代の思ほゆらくに

夕春雨

春がすみ霧らふ夕の春雨に垣内の梅の散りか過ぎなむ

馬上戀

置きて來し妹も吾をし戀ふればや此の山道に駒のつまづく

猿

奥山の嶺のさゝ栗もり食むと高木のうれに猿なくなり

爲レ賀二秦泉寺村吉井九介六十算一賦二寄レ水祝之題一

底清き秦の泉の眞清水は誰が萬代の鏡なるらむ

---

○行くか　行くかなの意。
○眞幸くて　無事で。
○豐の祝言　豐は大きいもの、美しいもの、滿ち足りたもの等の意を表はす接頭語。
○白眞弓おして射さくる　八幡山の序詞。白眞弓は射の枕詞。おして射さくるは弓を押し張つて射放つ意で、射さくる矢を八幡山に掛けた。
○八幡山　山城國岩清水男山八幡宮のある山。
○青丹よし　寧樂の枕詞。
○落ちたぎつ　落ちてさかまく。瀧の縁語。
○瀧の京　吉野の夏箕河の下にあつた吉野離宮。
○思ほゆらくに　思ほゆるに。
○霧らふ　空を立ちこめ覆ふ。
○垣内　垣根の内。
○散りか過ぎなむ　散つてしまふだらうかな。
○駒のつまづく　萬葉集卷七「妹が門出で入りの河の瀨をはやみ吾馬つまづく家思ふらしも」
○さゝ栗　柴栗。
○もり食むと　枝を離れないで食べる爲に。もりは守りの意。
○うれ　梢。
○秦の泉　秦泉寺村に關係せる語
○鏡　手本の意と清澄の水を鏡に見る意とを掛く。

山振

朝夕に見れど飽かめや蛙鳴く芳野の川の山振の花

魚

打靡き春さり來れば鏡川かはの瀬清み鮎子さばしる

詠レ花歌幷序

日者有レ人、稱二山櫻之盛一焉、於レ此、余奮然志二遊觀一矣、時維暮春之初、與レ友交レ臂、泝二久萬河流一、到二役行寺村柿瀨里一、此地、有二一株櫻一、其樹長大、枝々繁茂、其花滿開、美而艷也、曳々如レ雲、皎々如レ雪、盈レ視駭レ矚矣、愛時踞二樹陰一、不レ知二遲々春日之將一レ沒焉、聊作二短詠式一展二拙緒一云

文化七年庚午
三月朔日記

足曳の山さへ照りて咲く花の盛りに逢へる今日の樂しさ

以二「遠美那倍志」五言一、冠二毎句頭一

少女等が海松刈らすと難波潟邊浪に袖をしぼりけむかも

行客舟已遠

遠江濱名の海の奥放けて榜ぎゆく舟の泊知らなく

戀

○打靡き云々　萬葉集卷五「春さればわぎへの里の河門には鮎子さばしる君待ちがてに」
○さばしる　走る。「さ」は接頭語。
○交臂　同行。
○久萬河　高知市の北方を流れる河。
○盈視駭矚　見る目を滿足させ驚かした意。
○拙緒　つまらぬ感想。
○足曳の云々　萬葉集卷三「足曳の山さへ光り咲く花の散りにし如きわが大君かも」
○海松刈らすと　海松を刈るために。海松は海藻類。
○邊浪　船緣に立つ波。
○遠江云々　萬葉集卷二「いさなとり近江の海を奥放けて榜ぎ來る船へつきて榜ぎ來る船云々。」同卷六「眉のごと雲居に見ゆる阿波の山かけて榜ぐ船泊知らずも」

淺茅原つばら〳〵に蟋蟀の音のみし鳴かゆ妹に逢はずて

野遊歌三首

文化七庚午、時正膺二暮春之望一也、櫻花盡散落、山振半謝レ枝、爰想二河南藤華方發一、適與二三一把レ臂、臨二鑑河之滸一、于レ時忽見三娘子渉二河水一、乃作歌

鑑河淺瀨の浪を脛に上げてい渡らす子は誰が思ひ妻

遂欲レ探二勝景一、泝レ流渉レ川、行二神田里一詣二觀音堂一、堂邊樹頭有二蔓藤一未三曾開二花一、不レ憾乎、猶歩而至二于南山下一則躑躅盛開、開欲レ燃、寔堪レ駭レ矚、則作歌曰

足曳の山さへ照りて躑躅花もく咲きにけり春深みかも

盤桓久レ之、夕陽沒レ山、爰則強レ情向二歸路一、野徑見三美女摘二草花一、又歌曰

霞たつ淺茅が原に袖垂れて菫摘む兒の家をしぞ思ふ

黄昏抵レ家聊記

詠海

土佐の海に榜ぎ出でて見れば大鳥の羽根の岬に五百重浪よる

詠里

○淺茅原云々　萬葉集卷三「淺茅原つはら〳〵に物思へば舊りにし里の思ほゆるかも」
○淺茅原　茅のまばらに生えた原
○つばら〳〵に　大層つまびらかに。
○蟋蟀の　蟋蟀の如く。
○音のみし鳴かゆ　我は聲を立てて泣いてはかり居る。
○逢はずて　逢はずして。
○脛に上げて云々　古今集卷十九藤原兼輔「いつしかとまたく心を脛に上げて天の川原をけふや渡らむ」
○い渡らす　渡る。いは接頭語。
○もく咲きにけり　茂く咲いた。萬葉集卷二「水傳ふ磯の浦まの岩つゝじもく咲く道を又も見むかも」
○盤桓　進み難い貌。

舊りにける跡ともしろく飛ぶ鳥の飛鳥の里は人目乏しも

某年某月某日丁二寛邦院君一周御忌一、不レ堪二悲傷之情一、拭レ涙作歌

照る月の雲隠れにし今日も來ぬ吾が泣く涙いまだ干なくに

見　戀

紅の赤裳の姿みるごとにいやめづらしき妹にもあるかも

翫二物華一歌幷序

三月下旬、有レ客來告曰、吾子無レ意レ於二逍遙一乎、請、與レ子倶攬二賞芳菲之令節一、以取二一日之樂一、不二亦可一乎、余曰諾、遂與レ客把レ臂、行到二鑑河之下流一、嘗過日連雨、河水汎溢、無レ由二渡行一、則泝二上流一舟而渉、著二南岸一閑遊、至二神田村一、土地有レ神、祠邊樹杪有二紫藤一、靡々亂綻、又黄鳥嚶嚶競レ臎、吁乎適今日遨二遊勝界一、對二此眺翫一、亦何幸也、詎聊可レ不下述二其詞一暢上所心一耶、乃歌曰

藤浪の花のさかりを飽かずとや梢去らずて鶯の鳴く

荆　藤

霍公鳥來啼きとよもせ吾が屋前の垣津の茨花咲きにけり

聞二霍公鳥喧一作歌

○舊りにける跡ともしろく　舊跡といふことが著しく事實に現はれて。
○飛ぶ鳥の　飛鳥の枕詞。
○人目乏しも　人の訪れることも少い。
○寛邦院君　山内家第十一代の主豐興の戒名。
○照る月の雲隠れにし今日　寛邦院君の第一周忌の今日。
○樹杪　樹梢。
○黄鳥　鶯。
○霍公鳥云々　萬葉集卷八「わが宿に月押照れり霍公鳥心あらば今宵來鳴きとよもせ」
○屋前　庭。

ほとゝぎす啼く聲聞けば山畑の麥刈る時になりにけらしも

螢火

夕されば茅生の露原かき分けて童女放は螢となるなり

應二東館君命一、賦二山月之題一歌

仰ぎ見る高坂山のいや高に照りたる月の影のさやけさ

同レ前、賦二秋月添レ光之題一

秋の夜の月の影こそ眞十鏡さやかにのみは見えわたりけれ

詠月前十首之中二首

月前鹿

照り出づる月夜を淸みさを鹿の妻呼ぶ聲はをちこち聞ゆ

月前旅

松が根を枕にまきて久方の月見る夜は家をしぞ思ふ

冬夜問二娘子一道上作歌

妹許と戀ひつゝ行けば夜を深み時雨の雨に袖は濡れつゝ

爲レ賀二愛宕町土居八右衞門六十齡一、賦二春祝之題一

萬代の春も經てまし愛宕山峯の小松の神さぶるまで

---

○茅生の露原　茅の上に露の繁くおりた原。
○童女放　うなゐ子。放り髮の童女。
○東館君　山内家第十代豐策の子豐道。分家して東邸に住む。

○眞十鏡　さやかにの枕詞。

○松が根を云々　萬葉集卷一「大伴の高師の濱の松が根をまきてし寢れど家し偲はゆ」
○枕にまきて　枕として寢て。
○久方の　月の枕詞。
○妹許と　思ふ女の許へと。
○神さぶるまで　古色を帶びて、森嚴になるまで。

櫻

朝さらす棚引く雲と見ゆるまで尾上の櫻咲きにけるかも

鶯の來鳴く垣津の櫻花この春雨に散らまく惜しも

吾が屋外の垣津の櫻風をいたみ散りかも過ぎむ見る人もがも

舟

孕濶迫門の朝霧おし分けて棚無小舟沖に出づる見ゆ

夏戀

霍公鳥かよふ岡邊の夏草の思ひしなえて戀ふるころかも

鹿

秋風の寒き夕を小牡鹿の山にも野にも妻よびわたる

芽子の花散らふ岡邊の秋風の寒き夕に小牡鹿鳴くも

旅

泊する室戸の浦の湊風さむき此の夜は家をしぞ思ふ

懷古

高千穗の二上見れば皇神の天降りましけむ古おもほゆ

詠川

○尾上の櫻　峯の櫻。

○この春雨に云々　萬葉集卷十「足引の山の間照れる櫻花この春雨に散りにけるかも」

○屋外　庭。

○見る人もがも　見る人があればよい。

○孕濶　土佐の浦戸灣の一部。

○棚無小舟　棚（せがい）といつて舟の左右の兩側に棚の樣な板が附いてゐない小舟。大船には棚がある。

○夏草の　夏草の如く。

○思ひしなえて　思ひ萎れて。萬葉集卷二「夏草の思ひしなえて偲ぶらむ妹が門見む靡けこの山」

○散らふ　散るの延音。

○室戸　土佐國安藝郡。

○湊風　湊に吹く風。

○高千穗の二上　霧島山の二峯即ち高千穗（東峯）と韓國嶽（西峯）とをいふ。萬葉集卷二十「久方の天の戸開き高千穗の嶽に天降りしすめろぎの神の御代より云々。」

朝なさな妹が取りみる鏡川またかへり見む清き川瀬を

正月四日、嗟二嘆大町稲城家燒亡一贈歌三首

玉牀も庭も垣津も春野なす燒けすさびてし君が家はや

迦具土の神の荒びは言はむすべせむすべ無しや神のあらびは

寒き夜を家さへなしに明かすらむ君を思へば心神もなし

朝霞

三冬すぎ春立ちぬらし朝がすみ山にも野にも棚曳く見れば

寄島戀

玉津島來寄する浪のしく〳〵に子等が容儀の思はゆるかも

懷古

大君の宮敷きましし橿原の雲飛の山の古おもほゆ

詠舟

文化午年、毎日詠二一首歌一之中八首

浦戸崎沖つ白浪庭よしと八十の釣舟朝開きすも

惜無名戀

空石花貝實なき言もち沖つ浪音に立つらむ吾が名し惜しも

---

○朝なさな　朝な〳〵。毎朝。「みる」までは「鏡」の序詞。
○大町稲城　寶藏院流の槍術家。
○玉牀　玉は美稱。
○垣津　垣根の內。
○春野なす　春野の如く。春には野原を燒くからいふ。
○燒けすさびてし　燒け荒れてしまつた。
○迦具土の神　火の神。
○心神もなし　利心もない。敏き心も起らず意氣が消沈する。
○三冬　初冬仲冬季冬の三ヶ月。
○玉津島　紀伊國和歌の浦にある
○しく〳〵に　頻りに。
○雲飛の山　畝傍山。
○浦戸崎　土佐國浦戸灣の岬。
○庭よし　庭は波の平靜な海面。萬葉集卷十五「むこの海の庭よくあらしいさりする蜑の釣舟波の上ゆ見ゆ」
○八十　數多の意。
○朝開　朝船を出すこと。
○文化午年　文化七年。
○空石花貝　肉のない介殼で「實なき」の枕詞。萬葉集卷十一「住の江の濱に寄るとふうつせ貝實なきこともて我が戀ひめやも」
○もち　もちて。
○沖つ浪　音に立つの緣語。音に立つは評判になる意。

逢夜待戀

烏玉の夜牀片さり今宵もや吾が背の君を待ち明かすらむ

瞿麥帶露

撫子の花の盛りを今朝見れば白露いたく置きにけるかも

池上蓮花

植ゑおきし吾家の池の花蓮この朝露に咲きにけるかも

暮山鹿聲

夕さらず小牡鹿鳴けり小倉山嶺の松風寒くしあるらし

月浮流水

桂川流るゝ水尾の早き瀬に照りたる月の影のさやけさ

寄月見戀

春の夜の朧月夜のほのに見し妹が笑まひし忘れかねつも

水郷寒葦

朝霜の日にけに置けば三島江の玉江の葦は冬枯れにけり

正月十一日、會二伊與木千茂家一時詠レ梅

鶯のかよふ垣津の梅の花千代とことはに見とも飽かめや

---

○烏玉の夜牀片さり　萬葉集卷十八「烏玉の夜牀片さり朝寢髮云々。」
○夜牀片さり　夫の寢る場所をあけて、牀の一方に臥し。
○夕さらず　毎夕。
○小倉山　萬葉集卷九「龍田の山の瀧の上の小鞍嶺」の事である。萬葉集卷八「夕されは小倉の山に鳴く鹿の今宵は鳴かずいねにけらしも」
○桂川流るゝ云々　萬葉集卷七「泊瀬川流るゝみをの瀨をはやみゐで越す浪の音のさやけく」
○桂川　山城國葛野郡。
○水尾　河中の深い水路。
○春の夜の云々　萬葉集卷十二「こもしびのかげにかゞよふ空蟬の妹が笑まひしおもかげに見ゆ」
○日にけに　日ごとに。
○三島江　攝津國三島郡。
○鶯のかよふ云々　萬葉集卷十「鶯のかよふ垣根の卯の花の憂きことあれや君が來まさぬ」
○千代とことはに　千代常磐に。千代も長くいつまでも。
○見とも　見れども。

同時、詠二雪中鶯聲一

かき霧らし雪は降りつゝしかすがに木の間くき鳴く鶯の聲

戀

吾妹子が待つとし聞かば荒熊の住むちふ山も越えがてましや

春　戀

春山の嶺の櫻の花咲にゑましし姿いつか忘れむ

三月朔日伊與木千茂家會、賦二雨後柳之題一

昨夜ふりし雨に競ひて吾が園の一もと柳萌えそめにけり

深崎秋月

さやに照る月に競ひて吾が舟は三埼の海に近づきにけり

伊與木千茂、往二于江戸一之時、悲レ別作歌

吾が背子が垂り佩く太刀の手上にもならましものをたぐひて行かむ

應二門人大江清男需一、詠レ酒

大名持少御神の無かりせば誰か釀まむようまし豐御酒

爲レ賀二千屋茂樹母六十齡一、賦二寄レ水祝之題一

落ちたぎち流る走井のうまし水うまらに食せ萬代までに

---

○しかすがに　さうはいふものの。萬葉集卷十八「みしまぬに霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつゝ」

○くき鳴く　くゞり鳴く。

○荒熊の住むちふ山　萬葉集卷十一「荒熊の住むとふ山のしはせ山せめて問ふとも汝が名はのらじ」

○越えがてましや　越え難くない意。

○花咲に　花の咲いたやうに。萬葉集卷七「道の邊の草深ゆりの花咲に咲まししからに妻といふべしや」

○さやに　さやかに。

○三埼　土佐國幡多郡。

○手上　刀の柄。

○たぐひて　一緒に。

○大名持云々　大名持は大國主神ここは古事記にある酒樂（さかほがひ）の神話を指す。

○うまし豐御酒　よい御酒。

○落ちたぎち云々　萬葉集卷七「落ちたぎつ走井の水の清くあれはわたりはあれは行きがてぬかも」

○走井　飲料の爲に山川の流水を酌む所。

○うまらに　甘く。

伊與木千茂、往二于江戸一之時、作贈歌二首

朝がすみ八重山越えて別るとも心ばかりはな隔てそ君

朝日照る高坂山の高々に吾が待ち居らむはや歸りませ

掘二取冬薯蕷一、贈二大町稌城一歌二首

足曳の山の邊野の邊とめ行きていこじ取り來し冬薯蕷これ

愛しき君を見まくは冬薯蕷いや常敷に逢ひ見まくこそ

稌城報贈歌二首

足曳の山邊に生ひし冬薯蕷懸けて千年を共にかも見む

愛しき君が取り來し冬薯蕷千年をかけて見とも飽かめや

賀二市原氏八十算一

高坂の山の磐根に這ふ蔦の又をちかへり千代も經てまし

詠二芳野山一

淑人のよく見と言ひし芳野山よく見て行かな淑人のため

文化十二年乙亥八月十五日夜、應レ命賦二田家月之題一

金門田の秋の垂穗の八束穗の穗向を見せと月は照るらし

同年九月十三日夜、應レ命賦二湖上月之題一

---

○朝がすみ云々　萬葉集卷十「朝霞八重山越えてよぶこ鳥なきや汝が來る宿もあらなくに」
○高坂山　土佐國土佐郡にある山であらう。
○高々に　逢ふに待ち望む意。
○冬薯蕷　野老。山の芋の類。
○とめ行きて　搜し歩いて。
○いこじ取り來し　根引のまゝ取つて來た。
○冬薯蕷云々　萬葉集卷七「すめろぎの神の宮人冬薯蕷いや常敷にわれかへりみむ」冬薯蕷は冬にも葉が青々としてゐるから「いや常敷の枕詞に置いた。
○いや常敷に　永久かはらずに。
○をちかへり　若がへる意。
○淑人の云々　萬葉集卷一「淑人のよしとよく見てよしといひし芳野よく見よ淑人よく見つ」
○淑人　貴人。
○金門田　門田。
○八束穗　長い稻穗。
○穗向を見せ　穗の靡く樣（稻の出來ばえ）を見給へとて。

垂姫の浦吹く風に霧晴れて布勢の湖月照りにけり

同年九月十四日夜、與㆓神山氏小谷氏吉田氏㆒、欲㆘賞㆓月光㆒遊㆗鑑河㆖、于㆑時雲霧鬱々、卽陳㆑思作歌

月見ると風流壯士の打出ける夜ぞ久方の雲吹き拂へ鑑河風

暫時、雲霧頓散、月光清朗、又作歌二首

鹽屋崎押照る月の影をよみ潮江の小田に鶴鳴きわたる

鏡河奥邊にしづく眞白珠さやかに見よと月は照るらし

文化十二年乙亥九月十六日、遊㆓羽山郷㆒道上矚目物華之詠、并興中所作贈答之歌十八首律五首、絶十三首、今除㆓律五首及律之反歌二首㆒

到㆓高岡郡新河㆒作歌

古の野中健男が掘り設けし新河水の音のさやけさ

到㆓高㟁里㆒、訪㆓橘小枝㆒、不㆑遇、仍作以貽

神河の奥を深めて吾が思へる君に逢はむとなづさひぞ來し

到㆓大野郷㆒、超㆓多能治山㆒之時、日既沒

多能治山夕越え暮れて大鳥の羽山の里に近づきにけり

到㆓羽山郷姫野村㆒、訪㆓伊藤躬列㆒作歌

---

○垂姫の浦　布勢の湖内にある。
○布勢の湖　越中國氷見郡。現今は十二町潟といふ。
○押照る　おしなべて照る。
○小田　田。
○しづく　沈んで透けて見える。
○古の云々　野中兼山は土佐の民利を進め、中野川、日出野川を通じて新河の疏水を作つた。
○神河　仁淀川の古名。奥を深めの緣語。
○奥を深めて　神河の上流に溯る意を行末かけて深く思ふ意とを掛く。萬葉集卷四「わたの底奥を深めてわが思へる君に逢はむと年は經ぬとも」
○なづさひぞ來し　たゞようて來た。なづさふは水の緣語。
○大鳥の　「羽」の枕詞。

天傳ふ姫野の菅のねもごろに吾が思ふ君を今日見つるかも

又

足曳の山もとゞろに鳴る川の音のさやけさ聞かくしよしも

此地有レ河、號二鳴川一、因作二此歌詞一、二十日翌朝、將レ發二歸路一、因レ此源清來、相與惜レ別之時、主人躬列作歌

白露に匂ふ姫野の秋萩の飽かずも君を行かす悲しさ

鳴川の野上の薄穗に出でて招く甲斐なき今日にもあるかも

雅澄和歌

家に行きて吾は偲ばむ白露に匂ふ姫野のすゝき秋萩

源清作歌

羽山嶺に生ひなみ立てる旗すゝき穗に出でて招く甲斐もなきかも

雅澄報歌

秋風になびく姫野の旗すゝき穗に出でて君を偲ぶ今日かも

二十一日、發二躬列之家一之時、作歌

姫野のや初もみぢ葉の珍らしく相見し君に今日や別れむ

詠千鳥

○天傳ふ　「ひ」の枕詞。
○姫野　土佐國高岡郡。
○菅のねもごろに云々　萬葉集卷十三「み吉野の眞木立つ山にしゞに生ふる山菅の根のねもごろに吾が思ふ君は云々。」「菅の」までは序詞。
○ねもごろに　懇に。「ね」に菅の「根」を掛く。
○音のさやけさ云々　萬葉集卷十「夕さらず蛙鳴くなるみわ河の淸き瀨の音を聞かくしよしも」
○聞かくしよしも　聞くのが快い。
○旗すゝき　薄の高く簇く様を旗に見立てた語。穗の枕詞ともなる。萬葉集卷十四「新室のこどきに至れば旗すゝき穗に出し君が見えぬこの頃」
○穗に出でて　心を打明けて。
○初もみぢ葉の　初もみぢ葉の如く。萬葉集卷八「珍らしとわが思ふ君は秋山の初もみぢ葉に似てこそありけれ」

吉野山押照る月の影をよみ瀧つ河内に千鳥なくなり

設二宴紅葉下一作歌

風をいたみ散り敷くもみぢ杯に浮べて飲まな置きや朽たさむ

氷

鴨鳥の遊ぶ池水磐牀とこほりわたりて寒し此の夜は

朝雪

佐野の岡朝立ち來れば神の崎荒磯の崎に雪降りにけり

詠千鳥

鹽の山押照る月の影をよみ指手の磯に千鳥しばなく

爲レ賀二森田彌三丞八十八齡一、賦二寄レ竹祝之題一

彼方の竹生の節竹幾見竹いく度千代を經なむとすらむ

賀二古谷莊助眞靜母六十算一

百傳ふ八十隈山のゆづる葉の含める千代は君がまに〳〵

詠雲

古もかくやありけむ三芳野の御舟の山に立てる白雲

詠霞

---

〇瀧つ河内　水が逆卷いて急湍となつてゐる河内。河内は川が曲つて三方水にかこまれた所。吉野の宮瀧を指す。萬葉集卷六「萬代に見ともあかめや三吉野のたぎつ河内の大宮所」

〇風をいたみ云々　萬葉集卷八「杯に梅の花浮けて思ふどち飲みての後は散りぬともよし」

〇置きや朽たさむ　そのまゝ置いて腐らすことはしない。

〇鴨鳥の云々　萬葉集卷四「鴨鳥の遊ぶこの池に木の葉落ちて浮べる心吾が思はなくに」

〇磐牀と　岩の平な處のやうに。萬葉集卷一「栲の穗に夜の霜ふり磐牀と川の冰こゞり冷ゆる夜を云々」。

〇佐野　紀伊國東牟婁郡。

〇神の崎　荒磯の崎。

〇鹽の山　指出の磯と共に甲斐國笛吹川の畔。他で、千鳥の名所。古今集卷七「鹽の山差出の磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く」

〇しばなく　頻りに鳴く。

〇節竹　一說に竹の節の間を一長（たけ）として云ふ語。日本書紀「こもりくのはつせの川ゆ流れくる竹のいくみ竹節竹」

〇幾見竹　竹葉の茂つた竹「いく度」と萬をあはす。

〇百傳ふ八十隈山　百と數多の屈折の多い奥深い山。

〇ゆづる葉云々　萬葉集卷十四「あどもへかあじくま山のゆづる葉のふゝまる時に風吹かずかも」

〇古もかくや云々　萬葉集卷三「瀧の上の御舟の山に居る雲の常にあらむと吾が思はなくに」「大君は千

歳にまさむ白雲も三船の山に絶ゆる日あらめや」
○梓弓云々　萬葉集卷十三「梓弓腹ふりおこししのぎ羽を云々。」卷三「ますらをの弓末ふり立て射つる矢を後見む人は語りつぐがね」「引放つ」までは矢の序詞。
○矢野の神山　伊勢國度會郡であらう。
○思ふどち云々　古今集卷二「思ふどち春の山邊に打群れてそこともいはぬ旅寢してしが」萬葉集卷八「春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寢にける」
○袖たれて　安らかに遊び樂しむさまをいふ。
○獦人は　獵師。
○窺はく知らに　窺ふのを知らずに
○嬬戀に云々　萬葉集卷八「春の野にあさる雉子の妻戀におのがあたりを人に知れつゝ」
○いやしき　愈頻りに。
○生の緒に云々　萬葉集卷十一「生の緒に吾が息づきし妹すらを人妻ありと聞けば悲しも」命にかけて歎息する今宵すら。
○飛びぐく　飛びくゞり。
○嬬さふ云々　萬葉集卷十「山遠みやこにしあればさを鹿の妻よぶ聲は乏しくもあるか」妻呼ぶ聲の珍らしく面白くもあるかなの意
○打速め　早く歩めよ。
○金門　古事記傳に金物をしげく打つ、堅くした門戸である。
○美酒　「み」の枕詞。萬葉集卷四「美酒を三輪の祝がいはふ杉手觸れし罪か君にあひ難き」
○三輪の祝　大和國三輪社の神主
萬葉集卷七「御幣取る三輪の祝がいはふ杉原云々」。齋ふは忌み愼ん

梓弓腹ふりたて引放つ矢野の神山霞たなびく

詠菫

思ふどちいざ春の野に袖たれて菫摘みつゝ此の日暮さな

詠雉

薩人の窺はく知らに嬬戀に春野の雉子いやしき鳴くも

逢

生の緒に吾が息づきし今宵だにかく逢ひ見ずば明日も經めやも

鶯

吾が屋外の木の間飛びぐく鶯の嬬とふ聲の乏しくもあるか

馬上戀

吾が乘れる馬打速め吾妹子が金門に立ちて吾を待たむぞ

杉

美酒三輪の祝が御幣取り齋ふ杉原幾代經ぬらむ

霜

夜を寒み霜ぞこゝだ置く其の上ふみ妹許行かば人知らむかも

大己貴神

畏きやこの大御神の無かりせば皇御國は成りがてましを

梅

掻霧らしはだれ降り覆ふ沫雪をこゝだ惑はす梅の花かも

松

大鳥の鷲尾の山に竝み立てる嬬まつの木の年の知らなく

幡多郡清水莊監濱田千秋、革二名千束一之時、乞二詞於余一、仍作贈歌

名に懸けて榮えを行かむ左濱田の千束の稻の八千代足るまで

二月朔日、會二柳井千春家一之時作歌

天の岡石根さくみて梅の花匂へる屋外に吾は來にけり

會二宮地先生家一之時、折二梅花一贈歌

引攀ぢて手折りてぞ來し風流士の今日の頭插の爲にと思ひて

月夜花

心ぐく照れる月夜に吾が背子が垣津の櫻あひ見つるかも

遊二津築島一見レ花作歌

櫻花咲きの盛りを津築島繼ぎて見に來むいや年のはに

文化十三年丙子三月十五日、會レ家之時、作歌二首

で祭る意。
○こゝだ　甚しく。
○大己貴神　大國主神。
○掻霧らし云々　萬葉集卷八「沫雪かはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花ぞも」
○掻霧らし　空の曇る意。
○はだれ　斑に。
○大鳥の　大鳥は鷲なればいふ。
○嬬まつの木云々　萬葉集卷九「妹らがり今木の嶺に竝み立てる嬬まつの木は古人見けむ」「まつ」に「待つ」と「松」とを掛く。
○名に懸けて　千束といふ名に隨って。
○榮えを　「を」は嗟辭。
○石根さくみて　岩を踏み分けて
○宮地先生　宮地仲枝。雅澄の國學の師。
○心ぐく云々　萬葉集卷四「春日山霞棚曳き心ぐく照れる月夜にひとりかも寢む」心ぐくはうらなつかしくの意。
○津築島繼ぎて　津築島と繼ぎと調を合はす。
○いや年のはに　愈年毎に。

瀧花

君がためなづさひ渡り瀧の上の吉野の櫻手折り來にけり

落花似雪

風交り散りくる花を時ならぬ雪かも降ると思ひつるかも

八月十五日夜、應二東殿君一、賦下月契二豐年一之題上

萬代にかくし御覽まし打ちしなひ穂立さやかに照れる月夜を

九月十三日夜、應二同君命一、賦二池月之題一

宮人の舟乘しけむ埴安の池浪清く照る月夜かも

文化十三年丙子秋八月、遊二西灘一、道上矚目物華之詠、幷輿中所作之歌十九首

戸羽郷訪二某氏一作歌

百重山千重山越えて照る月のさやけき屋戸に吾は來にけり

照る月のゆつる垣根に鳴く蟲の聲のともしき屋戸にもあるかも

年魚走る戸羽の小川の底清み天行く月の影宿しつゝ

大野郷見二美女一作

咲きにほふ大野の里の女郎花誰しの人の頭插なるらむ

○君がため云々　萬葉集卷九「暇あらばなづさひ渡り向つ尾の櫻の花も折らましものを」
○なづさひ　水に浮び。

○御覽まし　見給ふ事であらう。

○宮人　宮中の人。
○埴安の池　大和國十市郡。天の香具山の麓。
○西灘　土佐國幡多郡。

○ゆつる　移る。移る彼方此方と移る。

○誰しの人　誰人。「し」は助辭。

訪二戸羽郷市野里長新家一歌

山河のさやけき里と新室の君が宿りを戀ひつゝぞ來し

於二上香江浦司村彌直館一宴時作歌十首

芽子

咲きにほふ秋の芽原分けくれば旅の憂けくも思ほえなくに

薄

高岡の香江野のすゝき初尾花かざして遊ぶ今日の樂しさ

女郎花

女郎花咲く野を來れば家妹がなまめく姿思ほゆるかも

海邊黄葉

押岡を吾が越え來れば香江の海の磯邊の木末匂ひそめたり

海邊鹿

大海の磯もとゞろに寄る浪の音に競へるさを鹿の聲

旅中戀

草枕旅の假寢に相卷きし妹が袂を別れかゆかむ

濱藻

○新室　新築の家。
○上香江　土佐國高岡郡。
○家妹　家妻。
○匂ひそめたり　色づき初めた。
○大海の磯も云々　萬葉集卷四「伊勢の海の磯もとゞろに寄する浪かしこき人に戀ひ渡るかも」
○とゞろに　轟くばかりに。
○草枕　旅の枕詞。
○相卷きし　枕とした。

家づとに拾ひて行かな香江の海の清き濱びに寄れる玉藻を

雨中舟

香江の海の磯山霧らひ降る雨に爭ひかへる海人の釣舟

霧中浦

香江の海の荒磯の千鳥夜くだちて騒ぐを聞けば家をしぞ思ふ

磯貝

いざ兒ども鹽干にけらし貝崎の荒磯のしゞみ出でて拾はむ

還レ自二上香江一之時、與二弼直一相別歌

貝崎の磯もとゞろに寄る浪の立別れまく惜しき今日かも

訪二渚埼村發生寺僧一不レ遇

鯨魚取渚埼の海の奥まへて思ひて來しを直に逢はぬかも

訪二下元眞清一作歌

渚埼の海濱吹く風の音のみに聞きける君を今日見つるかも

文化十四年丁丑秋八月、遊二于幡多郡一道上矚目物華之詠、并與中所作贈
答之歌七十首

八月十三日夜、上川口莊監安光敬八家作

○家づとに云々　萬葉集卷十七「白波の寄せ來る玉藻よのあひだもつぎて見に來む清き濱びを」卷十五「家づとに貝を拾ふと沖べより寄せ來る波に衣手ぬれぬ」
○濱び　濱邊。
○夜くだちて　夜が更けて。
○貝崎　土佐國上加江町の東方の岬。
○立別れまく　「まく」は「む」の延音。
○渚埼村　土佐國高岡郡。
○鯨魚取　海の枕詞。
○奥まへて　心を深めて。
○直に　直接に。
○下元眞清　通稱良助、號西洲、書家。
○音のみに　評判にのみのを意を掛く。

秋の夜の月夜を清み川口の磯うつ浪のゆたに見えつゝ

又

蜷の川水霧らひつゝ行く水の音のさやけき屋戸に來にけり

件家西有レ河、源出二蜷川村一、號二蜷之河一、仍詠二此歌詞一

茵花にほへる妹が抑へ指す小櫛の山は見れど飽かぬかも

件家少許南有レ山、號二小櫛山一、于時、天霽月光淸朗、對二此美景一聊發二感情一、作二此詞一云

同十四日朝、將レ發二安光氏一作

河口の荒磯の崎に立つ浪の立別れまく惜しき今日かも

到二蜷川村一、訪二善福寺一、藏二一宮尊良親王所レ翫茶椀一枚一、請レ僧見レ之、仍作歌

よき人の御手に馴らしし玉椀を手にとり見れば涙し流る

同十五日夜、到二入田村一、訪二大黑泰全巖一

秋の夜の今宵の月をめづらしき吾が兄の君と見らくしよしも

巖和歌

月讀の御靈給びけむ秋の夜の今夜來ませり吾が戀ひし君

○ゆたに　ゆるやかに。

○茵花　にほへるの枕詞。

○にほへる妹が抑指す　小櫛の序詞。萬葉集卷十三「日本の黃楊の小櫛を抑指す云々。」抑指すは垂れ下る髮を抑へて刺す意。

○河口の云々　立つ浪のまでは立ちの序詞。

○尊良親王　後醍醐帝第一皇子。北條高時の爲に土佐國畑に流さる

○よき人　尊貴のお方。

○見らくしよしも　見ることは樂しい。

○月讀　月。

十六日、同家應レ需、賀二嚴父六十齡一

秋年の岡邊もしゞに立つ竹の千代の榮えを見む人やたれ

秋年者大黑氏所レ居地名也

同十七日、發二大黑氏一之時作歌

濟川渡りやかねむはしきやし吾が背の君に相別れては

同日、到二利尙村一、訪二莊監永野貞隆一

燒刀を利尙の山は險しけど直に越えきぬ君に逢はむため

同日夜、探レ題所レ作之詞七首

女郎花

愛しき妹が笑まひにたぐへつゝ見れども飽かぬ女郎花かも

蟋蟀

秋芽の花の露ちる此の庭に來鳴く蟋蟀聞かくしよしも

葛

吾が門に延ひおほとれる眞葛原色づく見れば霜は置くらし

河蝦

芳野河湍々の岩牀寒みかも妻呼ぶ河蝦さ夜中に鳴く

○しゞに　茂く。

○濟川　四萬十川。

○はしきやし　いとしい。

○燒刀を　「と」の枕詞。

○延ひおほとれる　這ひ亂れひろがる。

寄山戀

吾妹子し待つとしいはば岩根ふみ百重の山も百夜越え來む

寄花戀

秋芽は早も咲けるか妹許にやまず通はむ花見がてりに

露

金門田の稻葉の上に夕されば玉と見るまで置ける白露

同十八日夜、同家、探下郡内勝地竝有二由緒一處上所レ作之歌二十一首

入野濱

鳴く鹿の聲にたぐひて大方の入野の濱にしきる白浪

喜佐潟

行きめぐり見つゝ遊ばな唐衣打つ喜佐潟にしきる白浪

宮路山

古を吾が問ひよれば宮路山立てる木の葉もうらぶれにけり

龍串

汐滿てば荒磯の渚鳥たつ串の荒磯のくまみ見れど飽かぬかも

愛宕山懷古

○岩根ふみ云々　萬葉集卷十一「岩根ふみ重なる山はあらねども逢はぬ日まねみ戀ひ渡るかも」

○花見がてりに　花見がてらに。花を見る序に。

○玉と見るまで云々　萬葉集卷八「さを鹿の朝立つ野邊の秋萩に玉と見るまで置ける白露」

○入野濱　土佐國幡多郡。

○しきる白浪　頻りに押寄せる白波。

○行きめぐり云々　萬葉集卷六「行きめぐり見とも飽かめやなきずみの船瀨の濱にしきる白波」

○唐衣　打つの枕詞。

○宮路山　土佐國幡多郡　保之の亂の時、藤原師長の流罪地。

○うらぶれ　心憂く萎れ。

○龍串　幡多郡。奇岩を以て有名

○渚鳥　洲に居る鳥。

○たつ串　鳥の立つと龍串とを掛く。

○くまみ　隈のめぐり。

宮柱太高敷きし愛宕山いく代を經てか神さびにけむ

有井莊司墓

神さぶるこれの奥都今見れば有井壯士の有りし世思ほゆ

有岡山

有岡の山のもみぢ葉あり通ひ見つゝ偲ばな秋立つ毎に

入野賀茂社

太刀の後鞘に入野に宮敷きて幾代經にけむ賀茂の大神

伊豆多神社

梓弓伊豆多の杜の神垣に鎭齋ふ槻の木いく代經ぬらむ

松田城蹟

遠つ人松田の山は舊りぬれど昔の人の面影に見ゆ

柏島

篠津山吾が越えくれば柏島浪の磯觸立ちしきる見ゆ

七日島

いざこゝに七日宿りて七日島荒磯のくまみ飽くまでは見む

華松

○太高敷きし　いかめしく立てた

○有井莊司　有井三郎左衛門尉。畑に流謫せられた尊良親王の爲に作居を建てた人。

○奥都　墓。

○あり通ひ　馴れ通ひ。萬葉集卷十七「ふせの海の沖つ白波あり通ひいや年のはに見つゝ偲はむ」

○太刀の後　鞘の枕詞。萬葉集卷七「太刀の後鞘に入る野に葛引く吾妹云々。」

○鞘に入野　鞘に入るゝと入野とを掛く。

○梓弓　「い」の枕詞。

○遠つ人　「まつ」の枕詞。

○磯觸　岸に打寄せる波。

打鳴すや鼓の浦の近ければ音の響の松のさや〳〵

水莖の崗

淑人の舟乘しけむ水莖の崗の湊の古おもほゆ

鯨野河

大海に居るや大魚の鯨野河ゆく瀨の水の音のさやけさ

呼埼

飯に飢ゑつ餉直は持たず里はなし如何にか越えむ咽び呼埼

井澤山

春がすみ井澤の山に立つ霧はいたくな立ちそ家もあらなくに

平野丘

はた薄尾花假ふき今宵もや平野の岡に旅寢せむ吾は

伊夜濱

鳥自物浮寢する夜は伊夜の濱いやしく〳〵に家をしぞ思ふ

大島

幸ありと海人の釣舟連泣めていそはき歸るこれの大島

蕨岡

○さや〳〵　さわ〳〵と音する。
○水莖の崗　寵串の西方。
○餉直云々　萬葉集卷五「つね知らぬ道の長手をくれ〴〵と如何にか行かかむ餉直はなしに」餉直は糧で干飯の類。
○咽び呼崎　咽び呼ぶと呼崎とを掛く。
○春がすみ　「ゐ」の枕詞。
○はた薄　旗薄。
○假ふき　假りに葺き覆ひ。
○鳥自物　浮きの枕詞。
○浮寢する　舟の中に寢る。
○いやしく〳〵に　愈頻りに。
○幸あり　大漁の意。
○いそはき歸る　爭ひつとめて歸る。

吾が背子とたづさへ行きて蕨岡木末の紅葉けふはかざさむ

竹島川

井澤山峯の秋霧分けて來て竹島河に近づきにけり

同十九日夕、雨後望二松尾山一作歌　松尾山在二眞鍋家前一麓有レ河號二鶴代川一

遠つ人松尾の山に雨晴れて夕霧立ちぬ此の川の端に

又對二此勝景一思二大黒巖一作

吾が背子と携へ來なば黄葉する松尾の山も見せましものを

同二十七日、與二川崎氏一將レ遊二龍串磯一

愛しき君に引かれて龍串の磯の白玉今日は拾はむ

同日訪二三埼村濱屋孝達一之時、宴吟歌

ねもごろに聞かす御言を龍串の海よりまして深くしぞ思ふ

同二十八日、同家作

千尋崎三崎の海の庭きよみ浮び出でたる鰹釣舟

至二清水村一、訪二村長濱田千東一

加久美潟荒磯のくまゆ浪間もりなづみぞ吾が來君が目をほり

牧山　千東家探題作歌

---

○海よりまして云々　萬葉集卷十一「人事はしましぞ吾妹綱手引く海よりまして深くし思ほゆ」

○庭きよみ　靜平の海面が清いので。萬葉集卷十一「庭淸み沖邊漕ぎ出る蜑舟の取る梶間なき戀もするかも」

○浪間もり　浪の寄せる隙間をねらつて。

○なづみぞ吾が來　歩み惱んで來た。

○君が目をほり　君に逢ひたくて「ほり」は欲する意。

荒駒を放ちて飼ひし牧の山木立しげくもなりにけるかも

比島　同上

をとめ等が織る機物の杼島潟荒磯のくまみ今日見つるかも

鹿　同上

うかねらふ心も知らず射目人の立ちたる岡にさを鹿鳴くも

鴈　同上

筑波嶺の小峯とよもし尾花散る師付の田居に鴈鳴き渡る

黄葉　同上

吾が背子と黄葉かざして遊ぶ日は旅を憂けくも何か思はむ

同九月朔日雨、將レ發二千束家一之時、千束作歌

木積寄る浦の四吉屋は賤しけど君は留りぬ雨障して

雅澄作歌

木積よる浦回の浪のなみくに君し聞かさば立ちがてめやも

同二日到二稲江濱一、訪二鵜谷翁之一、有二長歌一今略レ之嘗翁之庭上靈芝自生、因需二詞于余一、卽詠二一首一與レ之、其歌

生ひ出でしこれの福草さきはひの多かる宿の兆なりけり

○をとめ等が　機物のまでは杼の序詞。杼は機の具。

○うかねらふ云々　萬葉集卷八「この岡にを鹿蹈みおこしうかねらひかもかくすらく君ゆゑにこそ」うかねらふは窺ひ狙ふ意。

○射目人　狩の射手。

○小峯とよもし　峯を鳴り響かし

○師付の田居　師付は筑波山麓の平村。田居は田。

○木積　木の屑。

○四吉屋　陋屋。

○雨障して　雨のために籠り居て

○靈芝　「いはひたけ」ともいふ菌類。張衡詩「因二露寢一兮產二靈芝一、象二三德一兮應二瑞圖一。」

○さきはひ　幸ひ。

山霧　同家探題作歌

秋霧はいたくな立ちそ龍田山木末の紅葉見に來しものを

旅戀　同上

水莖の岡の松が根枕きて家偲ぶ夜の寐こそ寐らえね

同三日、到二中村一訪二吉屋正胤一之時作歌、正胤

風の音の遠音に聞きて高々に吾が待ちこひし君ぞ來ませる

雅澄報贈歌

九月の初もみぢ葉の珍らしき君が目のみを戀ひつゝぞ來し

同時、清水龍者來訪之時、則龍作歌

名ぐはしき君を待ち得て九月の長き此の夜の飽かずもあるかも

雅澄報歌

いふ言の多かる君にたぐへずば如何に明かさむ長き此の夜を

同四日、在二中村旅館一、于レ時大黒深水過訪、贈二其父巖之歌二首一曰

栲衾かりてさ寢ませ置く露に時雨に草の枕寒けむ

拾はなむ君が眞袖の錦貝かたみに賜れ見つゝ偲ばむ

即雅澄和歌

○枕きて　枕として。
○寐こそ寢らえね　安眠が出來ない。
○九月の初もみぢ葉の　珍らしきの序詞。
○名ぐはしき　名の美はしい。
○栲衾　絹布類の衾。
○さ寢ませ　「さ」は接頭語。
○草の枕　旅寢。
○拾はまむ君が眞袖の錦貝　君が拾うて袖の中に入れる錦貝。
○かたみ　記念。

草枕露に時雨にさむき夜は君がやどりをかけてこそ偲べ

又、贈二昔日龍串所作長篇一、其標紙錄レ歌

寄る貝の數にはあらねど此の木積君が爲にと拾ひてぞ來し

同夜集二旅館一探レ題歌二首

山月

いざ兒ども小簾卷きあげよ山の端にいさよふ月の光ゆづりぬ

浦月

吹き下す比良山風に霧晴れて志賀津の浦は月夜さやけし

同時、應二淸水龍需一題二扇鶴畫一

朝づく日直さす方ゆ飛び翔り鳴くなる鶴のあやにともしさ

同五日、發二旅館一更投二蓮光寺一、陳二前日之謝一作

鵜代川水尾し絶えせず今よりは君が面わを戀ひ渡りなむ

丁丑年八月十五日夜、應レ命詠二關路月之題一

逢坂の關の山路を越えくれば淸き淸水に月は照りつゝ

同九月十三日夜、應レ命詠下月滿二海上一之題上

唐の海原かけて松浦潟おして照りたる月讀壯子

○草枕　露の枕詞。
○かけて　いつも。
○標紙　表裝紙。
○寄る貝の數にはあらねど　海岸に寄る貝などとは比較にならないつまらぬものなれど。

○小簾　小は接頭語。
○いさよふ月　ためらひ上る月。
○ゆづりぬ　ゆつりは移りに同じ

○朝づく日　朝日。
○直さす方ゆ　直接に射す。
○あやにともしさ　誠に珍らしく面白い。
○鵜代川水尾し　絶えせずの序詞
○面わ　面。
○丁丑　文化十四年。
○淸き淸水云々　逢坂の關の淸水の枕詞で、例へば拾遺集貫之「逢坂の關の淸水に影見えて今や引くらむ望月の駒」
○松浦潟　肥前國松浦郡。
○月讀壯子　月。

應二姫公之命一詠二月前鹿之題一

借高の野邊さへ清く照る月に牡鹿鳴くなり高圓の山

應レ命詠二江月之題一

船泊つる室の港にさ夜更けて清き渚を月照りわたる

應レ命詠二瀧月一

老人の變若ちふ瀧のうまし水こよひは汲また月見がてりに

應レ命詠二島月一

月清み玉の浦囘を榜ぎ來れば離れ小島に浪のよる見ゆ

寄レ木賀二本居大平六十算一

とこしへに君はませやも奧山の賢木の枝のいや榮はえに

賀二大神景井母君六十算一

み園生のゆつ桂の樹五百枝さし榮えをゆかむいや年のはに

贈二長樂院仙英一歌序

昔日、與二一友一詣二寶刹一、辱見二投轄一、宛如二舊好一、時維孟夏、賞心不レ一、籬落欺二卯花之雪一、雲間傳二子規之聲一、於レ是乎、情與レ杯共傾、心與レ境相契、嗟乎我不レ遊二靈場一、何以得レ洗二俗塵一乎、別後頗切懷企、未レ遑レ致レ謝、因

○借高の野　大和國添上郡。萬葉集卷六「大丈夫の弓末ふり起し借高の野邊さへ清く照る月夜かも」
○高圓山　同郡。借高の北の麓。
○室の港　紀伊國西牟婁郡。
○老人の云々　萬葉集卷六「古ゆ人のいひ來る老人の變若ちふ水ぞ名に負ふ瀧の瀬」美濃國養老瀧をいふ。
○變若ちふ　若返るといふ。
○うまし水　味のよい水。酒をいふ。
○月見がてりに　月見がてらに。
○玉の浦　紀伊國東牟婁郡。萬葉集卷七「荒磯ゆもまして思へや玉の浦の離れ小島の夢にし見ゆる」
○いや榮はえに　愈益榮えて。
○ゆつ桂　葉の茂り枝の榮えた桂。
○榮えをゆかむ　「を」は嘆辭。
○寶刹　寺。
○見投轄　引き留められた。
○孟夏　四月。
○籬落　垣根。

聊作二五七之歌一以奉二瀆机下一、幸尭存

家に來て吾はぞ戀ふれ子規鳴く卯の花のかげに寢し夜を

文化二年二月五日、後藤順平眞龍、往二于江戶一之時、作贈歌

武藏野の野のそき落ちず咲き出來ね藤の裏葉のうら安にして

庭上梅花始開之時、細木瑞枝來訪、仍余卽攀二其枝一作歌

吾が背子がかざさむ爲と今日までに含みて待ちし梅の花これ

下元眞淸、寄二來書牘一之時、作贈歌三首

春べ咲く花の藤崎幸くあれと聞かす御言を聞くが歡しさ

桑田山高嶺のみ雪今は消にて麓の若菜萌えぬらむかも

霞たつ戶島の磯囘たもとほり玉拾ふらむ君をしぞ思ふ

宮崎實靜、見レ差二檢地使一、在二津野山鄕四萬川村一之時、作贈歌三首

津野山の田井のことごと見明らめはや事をへてかへり來吾が背

雪消する津野山風の寒き夜は服襲ひて寢さね麻布小衾

草枕旅寢せすらむ四萬川のしくしく君が面影に見ゆ

嘗與二大神氏一、約下往二河上一賞上二櫻花一、于レ時余先至而大神氏後至之時、

大神氏作歌

○尭存 笑納。

○武藏野の云々 上句の意は出世して歸り來れの意。

○野のそき 野のはて。

○藤の裏葉の うら安の枕詞。萬葉集卷十四「春べ咲く藤の裏葉のうら安にさ寢る夜ぞなき子らをし思へば」

○うら安にして 安泰で。

○含みて 蕾のまゝふくらんで。

○春べ 春の頃。萬葉集十四「春べ咲く藤のうらはのうらやすにさぬる夜ぞなきここをし思へば」藤崎までは序詞。

○消にて 消え去つて。

○たもとほり 徘徊し。

○田井のことごと 田を全部。

○はや事をへて 早く檢地を終へて。

○服襲ひて寢さね 重ね著して寢給へ。

○麻布小衾 麻衾。

○しくしく 頻りに。

○飽かにと　飽き足らない事と思つて。「に」は打消し「ず」の活用「ぬ」の轉。
○甲斐はありけり　その甲斐があつて、來てくれてうれしい。
○幣にたぐへつゝ　幣かと思はれての意。
○引留むるがね　引留める爲である。
○妹名根しさすや　櫛の序詞。妹名根は妹の意。名根は親しんでいふ語。「し」は強め語。
○面變りせず　面變りせずしての意。

---

吾が背子が跡踏みもとめ川上の櫻の花を今日見つるかも

雅澄和歌

獨りのみ見るは飽かにと吾が背子を戀ひつゝ居りし甲斐はありけり

三月二十一日、住吉社作

神主の手向くる幣にたぐへつゝ神の御前に散る櫻かも

同日、訪二小松常石丸一、彼家庭櫻正盛、仍作歌

み園生の櫻の花と愛しき君が面わと見れど飽かぬかも

同二十二日朝、將レ發二常石丸家一之時、常石丸作歌

金門田に延へ置く繩は豫めかへらむ君を引留むるがね

雅澄和歌

吾がために延へし門田の御標繩越えて行くべきすべの知らなく

賀二下田浦老龜谷岳之父六十算一

寄松祝

妹名根しさすや櫛江の濱清み玉も千歳の數やよすらむ

朝日さす高坂山の山松の常磐にいませ面變りせず

細木春幹、往二于美濃國一之時、作贈歌

老人も變若と名に負へる瀧の水裹み汲み來ね家人のたに

己卯八月、賀二山田氏母君六十齡一

さねこじに根こじて植ゑし若松の木垂る代までに君はいまさぬ

己卯八月十五日夜、應二上命一、詠二瀧邊月一

島傳ひ見つゝ明さなみ吉野の瀧つ瀬毎に照れる月夜を

同九月十三日夜、應二上命一、詠二月前鴈一

秋田刈り借廬の廬戸あけ置きて月見る夜らを鴈鳴き渡る

贈二下元眞清一

爛漫二遊吳濱一之日、取二路洲浦一、獲レ接二芝眉一吾子延レ走上レ筵、雅愛懇至、槃俎綺錯、羽觴飛騰、豈啻承二高話深旨一、大開二鬱結之胸一耶、憐二走渴望一、幸垂二鴻慈一、揮二毫數紙一賜レ之、永以爲二家寶一焉、乃知二龍門之恩、復厚二陋身之上一、感謝懽怡、何可レ勝レ言乎、唯不レ顧二拙劣之語一、作二寸分之歌一而呈二之記室一、聊以酬二芳恩一云爾、其詞曰

勇魚取洲崎の海は淺くとも君がこゝろし吾が忘れめや

寄二下元眞清一

某月某日、忽忝二來書一、跪承二芳旨一、心神開朗、鄙懷除祛、兼見レ惠二墨妙數

○老人も云々　三四頁老人云々の歌參照。
○家人のたに　家人のために。
○己卯　文政二年。
○さねこじに　根つきのまゝ掘り取り。
○根こじて　根のまゝ掘り取つて　拾遺集雜春「いにし年根こじて植ゑし我が宿の若木の梅は花咲きにけり」
○木垂る代　木が生長して枝垂れるまでの長い世。
○君はいまさぬ　君はいまさぬか坐すの意。
○秋田刈り云々　萬葉集卷八「秋田刈る借廬も未だこぼたねば鴈が音寒し霜も置きぬがに」
○芝眉　尊顏。
○走　下部。自分の意。
○槃俎綺錯　御馳走を飾り立つ。
○羽觴飛騰　大いに杯をやりとりする意。
○記室　書記役。侍史の意に同じ。
○勇魚取　海の枕詞。

○下拙　拙者。
○孟冬　十一月。
○「紅葉の錦云々　拾遺集秋公任「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦著ぬ人ぞなき」
○孟春　一月。
○遐齡　長命。

紙一、行草八分、點々有ニ法程一、畫々有ニ結構一、所謂知覺靈變之機、染翰神遊之妙、超ニ他人之常格一者、蓋於ニ吾子一乎有焉、而吾子情誼之厚不レ遣ニ下拙一、頻蒙ニ徳音一、感謝不レ知レ所レ言也、時正膺ニ孟冬一、江上落葉舒ニ絢錦一、汀岸殘菊猶芬郁、加之、三島風景最可レ怜、伏望下棹ニ輕舟一陪ニ吾子一致上ニ雅興一、唯山川阻隔、白雲杳渺、無レ由ニ朝夕相見一、聊賦ニ小什一、以供ニ一笑一耳、筆不レ盡レ意、再信可レ期、己卯十月七日雅澄謹啓

中(なか)の島邊(しまへ)島上島(しまうはしま)たもとほり紅葉(もみぢ)の錦著る人や誰(たれ)

吉川氏母六十賀篇序歌

人生之百福、莫レ先ニ於壽一、自レ是天幸不レ可ニ求而得一也、今玆、吉川氏翠善、年算既六十矣、子弟親屬、張ニ宴于庭梅之下一、及招ニ致賓客一、于レ時孟春、氣淑風和、梅花映レ杯、芳香馥郁襲レ人、黄鶯囀々、似下述ニ祝辭一者上、於レ是衆皆驩然、擧レ觴相與唱ニ遐齡之頌一、加旃、況需下寄梅之賀辭于上ニ四方一、頃者諸賢之佳什如ニ花之盛一、如ニ枝之繁一、太宰苑梅之篇、比レ此如レ蔑矣、遂纂輯而爲レ卷、乃乞ニ序於余一、因叨(みだりに)揮レ毫且祝曰

梅の花ひと瓣(ひら)／＼に諸人(もろびと)の千代(ちよ)の壽詞(ほぎごと)こもりてあらずや

贈ニ釋仙英一

走、曩者乘ニ春興ニ逍ニ遙永濱一、遂投ニ狻猊下一、公執ニ洒茗一厚ニ高誼一、交レ臂相歡好、思無レ不レ言、言無レ不レ盡焉、對レ花式詠、仰レ月式吟、既鬮(ハラフ)ニ鬱結一、大散ニ愁緒一、其愉快不レ可ニ復言一也、大抵寶刹之爲レ地也、負ニ峨々之青嶺一、抱ニ渺々之蒼溟一、松風奏レ琴、濤響調レ鼓、一詣則心身雙清、無ニ百煩不ニ自滅一、眞人表之靈域也、往歲之過訪也、濡滯度レ日者、亦在レ玆、實破ニ拂世俗之塵埃一、而使ニ人忘ニ歸者也、加旃公也、其德高ニ山嶽一、其慈深ニ蒼海一、走常誦レ之在レ口、銘レ之在レ心、感謝詎(ナンゾ)有レ極、謹脩ニ片楮一、聊抒ニ寸衷一、伏垂ニ昭鑒一焉、又書ニ一絕于紙尾一、以換ニ軒渠一

櫻花照らす月夜(つくよ)を面白み遊びし心常忘(つねわす)らえず

行縢　文政三年二月十八日、集ニ會坂井正和兄家一、探レ題作レ歌

旅だたむ其の日近づくいざ兒(こ)ども行縢(むかばき)造れ其(そ)の緒(を)堅(かた)らに

貝　同上

海人(あま)の子に袖たづさへて浦戸潟(うらとがた)潮干(しほひ)のしゞみ今日は拾(ひり)はむ

落花入レ簾　同上

春風の吹きのまに／＼櫻ばな小簾(をす)の間通(まとほ)しこゝに散(ち)り來(く)も

二見岳眺望　同上

○狻猊ド　高僧の意。
○洒茗　酒茶。
○片楮　紙片。
○換ニ軒渠一　お笑草に供する意。
○行縢　腰に垂れる騎馬用の毛皮
○袖たづさへて　連れ立つて。

二見山手向に立ちて海若の沖つ島山見さけつるかも

水邊若草　同上

春雨のつぎてし降れば池の邊の水際の草は萌えにけるかも

寄弓戀　同上

梓弓絶えば絶ゆとも又更に弦緒取著き引かざらめやも

同夜甚雨、宿二同家一作歌　旋頭歌

おもふ子が屋戸に此の夜を明かさざりせば雨の岡いかで超えゆかむ雨の降らくに

正和兄和歌

春雨の降らずありせば如何にして荏道ふ家に君を留めむ

春日登二三谷山一　文政三年三月十日、集二于山田清賢兄家一、探レ題作レ歌

三谷山岩掻登り見渡せば河内國原霞たなびく

寄針戀　同上

あり衣の寶の子等を己が身に縫ひつけつべき奇しき鍼もが

特牛　同上

角立てて事負の牛の吼ゆるこゑ其の面持の恐れざらめや

○手向　峠。
○見さけ　遠く見やる。
○つぎてし降れば　續いて降れば
○梓弓云々　萬葉集卷九「わぎもこが結ひてし紐を解かめやも絶えば絶ゆともたゞにあふまでに」卷二「梓弓弦緒取りはけ引く人は後の心を知る人ぞひく」
○絶えは絶ゆとも　相手の心が離れることをいふ。
○弦緒　弓弦。
○引かざらめやも　相手の心を今一度引き寄せることをいふ。
○降らくに　降るに。
○河内國原　河内國。原は廣い意
○あり衣の　寶の枕詞。萬葉集卷十六「あり衣の寶の子らがうつたへは云々。」
○寶の子　良家の女子。
○奇しき鍼もが　珍らしい鍼があらばよい。
○特牛　牡牛の强健なもの。
○事負の牛　特牛。

○妹と吾と云々　萬葉集卷十一「逢はずとも吾は恨みじこの枕我と思ひて卷きてさ寢ませ」
○赤駒　赤毛の駒。
○愛しき　愛すべき。
○砌上山振　石疊のほとりの山吹
○愛しき子に云々　萬葉集卷十九「妹に似る花と見しよりわが標めし野邊の山吹誰か手折りし」
○標めし花　繩張をして取圍んだ花。
○觸りず　觸れず。

枕　同上

妹と吾と纏きて百夜をさ寢すがね我がつくりたる黄楊の木枕

鞍　同上

赤駒に鞍おけ子ども烏玉の夜牀片去り妹待つらむぞ

同日至レ夜雨降、借レ傘而還、明旦反二贈其傘一之時作歌

風まじり重きて降り來る雨の岡濡れず越え來し愛しき此の傘

文政三年庚辰三月十五日、細木瑞枝來訪、贈答歌十首

見二砌上山振一瑞枝作歌

愛しき子が姿に似ると見ませこそ此の山吹は生ひてありけめ

雅澄和歌

愛しき子にたぐへて標めし花なれば見てのみいませ手をはな觸りそ

瑞枝復作

此の花に思ひよそへし妹が名を告らばぞ手だに觸りずかへらむ

雅澄復和

結びてし妹が許さむ時にこそ名をだに告らめ花は折らせじ

瑞枝復作

妹が名を告りがてにせば山吹の花は根こじて吾が花にせむ

雅澄復作

千早振神の齋垣は壞ゆれども吾が結ふ標を越えさせめやも

同時、詠二庭上茵花一與二瑞枝一歌

つゝじ花憫怜と見ませ愛しき子のその脣の色にしかずとも

瑞枝和歌

君と妹と倶々まで愛でし丹躑躅の散りの殘りをあはれとは見ず

瑞枝告別作

打渡す柏尾の山に居る雲の立別れまく惜しき今日かも

雅澄報歌

打渡す柏尾の山に居る雲は雨と降り來ね君を留めむ

賀下幡多郡湊浦人某、預上拜謁之列一作歌

湊のや浦の沖べにしづく玉かゞよひ出づる時は來にけり

爲二文政四年辛巳八月十五日夜、月宴一、應レ命預賦二海邊月之題一

月讀の光を淸みわたつみの手纏の玉の亂れあへる見ゆ

爲二同時月宴一、應二東殿君命一、預詠二潮月之題一

---

○告りがてにせば　いひ難ければ。

○神の齋垣　神社の垣。

○吾結ふ標　標繩を張ることは、自分の所有を示す意。

○打渡す　見渡す。

○雨と降り來ね　雨となつて降り來れ。

○湊のや浦　湊の浦。

○しづく玉　水中に透き通つて見える玉。

○かゞよひ　輝く。萬葉集卷六「見渡せば近きものから岩がくりかゞよふ珠を取らずはやまじ」

○手纏の玉　手に纏つて飾りとした玉。萬葉集卷十五「わたつみの手纏の玉を拾ひ取り云々」

夜さへに玉藻刈るべみ鳴戸の海うづ潮白く月照りにけり

爲二同時月宴一、應二姫公命一、預詠二月前鶴之題一

我が君の御代榮えむと照る月に鳴きてさわたる天の鶴むら

同時、預詠二庭月之題一　南殿宿題

大殿の庭もしみゝにこき敷ける玉にかゞよふ此の月夜かも

閲二紹子浦戸磯崎記一之時、題レ後贈歌

磯崎にかゞよひわたる白玉を拾ひあつむる其の人や誰

贈二下元眞清兄一

濱清み千船の湊洲崎の海幸くや吾が兄この頃のあひだ

眞清兄酬和

一去二城都一遊二異境一、朝望二海市一祈漁幸。片心不レ動自無爲。觀得波濤千萬頃

爲二九月十三日夜月宴一、應レ命作二關路月之題一

足柄の箱根の關につまり居て月見る夜らは明けずともよし

爲二同時月宴一、應二東殿君命一、預作二月前鹿之題一

月讀の押照る野邊に小男鹿の妻よばふ聲をちこち聞ゆ

爲二同時月宴一、應二姫公命一、預作二月前管絃之題一

---

○夜さへに云々　萬葉集卷十五「これやこの名に負ふ鳴戸のうづ潮に玉藻刈るとふあまをとめども」
○刈るべみ　刈るべきによつて。
○うづ潮　渦卷く潮。
○我が君の御代榮えむと　萬葉集卷十八「すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山にくがね花咲く」
○さわたる　渡る
○大殿の庭云々　萬葉集卷十三「大殿の砌しみゝに露おひて云々。」
○しみゝに　隙間なく。
○こき敷ける　敷き並べる。
○濱清み云々　萬葉集卷六「濱清み浦うるはしみ神代より千船のはつる大わだの濱」洲崎の海までは幸くやの序詞。
○幸くや　無事であるか。
○この頃のあひだ　この頃。
○海市　蜃氣樓。
○千萬頃　一頃は百畝。廣茫たる範圍をいふ。
○つまり居て　留り居て。
○よばふ聲　よばふは呼ぶの延音、呼ぶ聲。萬葉集卷七「宇治川は淀瀨なからし網代人舟よばふ聲をちこち聞ゆ」

月清み遊びすらしも殿の内ゆ小笛緒琴ぞさやかに聞ゆ

同時、預詠二見レ月戀レ友之題一　南殿衍題

惜しき今宵の月夜たゞ獨り見つゝや居らむ君が目をほり

題二梅假花一

咲く花は山にも野にも見るといへどこの常花ぞいやめづらしき

應二東殿君命一、詠二菊名玉葛一

玉葛たゆることなく萬代に君が插すべき菊の花これ

致仕君御二遊磯崎御館一之時、從三供於二仁井田濱一、觀二相撲一陣レ思作歌

大海の磯もとゞろにとよむなる相撲の場の雄詰の聲

同時、向レ府御船發二磯崎一之時作歌

磯の崎いさきもとほり五百重浪千重浪しくに又かへり見む

文政四年辛巳十月三日申刻、男子出生、登時述二拙懷一作歌

父に似て餓鬼とな成りそ大寺の金剛力士の姿とをなれ

應二致仕君命一、詠二菊名柴垣一

御園生の八節の柴垣しば〳〵に見とも飽くべき花ならめやも

同前、詠二菊名志乃布乃美太禮一

○遊び　管絃の遊び。
○假花　造花。
○常花　造花なればかくいふ。
○玉葛　たゆることなくの枕詞。萬葉集卷六「玉葛絶ゆることなく萬代に云々」
○致仕君　山内豐策。
○いさきもとほり　波の高く立ちめぐり。
○五百重浪云々　萬葉集卷十一「奥つ藻を隱さふ波の五百重浪千重しくしくに戀ひわたるかも」
○しくに　頻りに押寄せる。
○餓鬼　細身弱小の意。萬葉集卷四「あひ思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへにぬかづくがごと」
○金剛力士　仁王尊。
○姿とを　「を」は歎辭。
○八節の柴垣　幾段にも結へる、柴で作れる垣。第一二句は「しばしば」の序詞。

昔べを今もしのぶの亂菊若紫の色にかをれば

同前、詠二菊名大和言葉一

唐國ゆ渡りしときく其の花は大和言葉の種となれりき

賀二久保鷹亟七十算一、寄レ竹祝之題

御園生にたしみ竹生ひ慥々に立榮えゆかむ年の知らなく

應二姬公命一、詠二池氷之題一

水下經魚も佗ぶらむ磐牀と池の氷いたく凝る此の夜は

南殿侍女沖野氏梨佐、秩滿、被レ許還レ鄕之時作贈歌

里中に住みわたるとも內垣の風流の手振忘らすなゆめ

爲レ謝二高田氏印刻之賜一、爲下釋覺知所上レ誂作歌

菅の根のねもごろ彫りて賜ひたるこれの文字形地に置かめやも

應二姬公命一、詠二早梅之題一

み雪降る庭にはあれど咲き出たる梅の初花折りてかざさむ

文政五年壬午元旦試筆

打渡す遠の小里に鳴く鷄の聲にたぐひて春は來にけり

應二姬公命一、詠二朝鶯之題一

---

○昔べを云々　伊勢物語「春日野の若紫の摺衣しのぶの亂れかぎり知られず」
○昔べ　昔の頃。
○渡りしときく　聞くに菊を掛く
○大和言葉の種　歌の材料。葉及び種は菊の緣語。
○たしみ竹　繁く生えた竹。
○慥々に　しつかりと。
○水下經　魚の枕詞。繼體紀「いはれの池のみなしたふ魚も上にでて歎く」
○磐牀と　磐牀となつて。萬葉集卷一「磐牀と河の氷凝り冱ゆる夜を云々。」十九頁鴨島の歌參照。
○內垣　山內家の御殿。
○手振　風俗。
○菅の根の　ねもごろの枕詞。
○地に置かめやも　萬葉集卷五「言問はぬ木にもありとも吾が背子が手馴れの御琴地に置かめやも」
○聲にたぐひて　聲と共に。

御園生の百木の梅に朝な〳〵來鳴き木傳ふ鶯の聲

應レ命詠二南殿庭梅一

朝ぎよめ仕ふる子等の袖さへにこゝだもにほふ梅の花かも

贈二若菜一

君がため雪消の水の袖濡ぢて山田の澤に摘める芹これ

閏正月、應二姫公命一、詠二水邊柳之題一

うち手折り蘰け吾妹稻むしろ川ぞひ柳萌え出でにけり

詠春雨

曲庵の四吉屋の軒の草朽ちて降る春雨のはやも漏れつゝ

賀二補日新八丈七十壽一

朝日照る潮江山の櫻花千代に咲けこそ君がかざしに

應二姫公一、詠二尋レ花之題一

咲き出たる花もありやと常知らぬ山の奥がに分け入る吾は

二月十又五日、姫公遊二覽舟岳山一之時、陪從作歌

手弱女の袖吹きかへす春風に散りて流るゝ山櫻花

題二櫻花畫一

---

○御園生の云々　萬葉集卷十七「み園生の百木の梅の散る花のあめに飛び上り雪と降りけむ」
○南殿　山内豐策の子豐著の住む所。
○朝ぎよめ　朝の掃除に。
○こゝだもにほふ　甚だしく匂ふ
○君がため云々　古今集春、光孝天皇「君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつゝ」萬葉集卷十「君がため山田の澤にゑぐ摘むと雪消の水に裳の裾ぬれぬ」
○蘰け　鬘として著けよ。
○稻むしろ　川の枕詞。顯宗紀「稻蓆川ぞひ柳水ゆけばなびきおきたちその根は失せず」
○曲庵　傾いた小庵。
○千代に咲けこそ云々　萬葉集卷十九「雪島の巖に立てるなでしこは千代に咲かぬか君がかざしに」
○常知らぬ云々　萬葉集卷五「常知らぬ國の奥がを百重山越えて云云。」
○奥が　奥深い所。
○手弱女の云々　萬葉集卷一「手弱女の袖吹き返す飛鳥風都を遠みいたづらに吹く」

霞立ち永き春日をけならべて見れど飽くべき花ならめやも

應二姫公命一、詠二桃花之題一

吾妹子が赤裳の色を奪ひたる毛桃の花は見れど飽かぬかも

詠二海石榴一

足引の片山海石榴手折りもてつばら／＼に見れど飽かぬかも

應レ命、詠二南殿庭上藤花一

大殿の御垣の池の底清み岸の藤浪かげに見えつゝ

所レ謎二大谷尙善一、題二秋七草畫一

かき數ふ七草の花色異ににほふ秋野の見ればともしさ

壬午三月二十七日曉天、聞二霍公鳥始喧一作歌

卯の花の四月も來ねば思はぬに今朝來鳴きそむ霍公鳥かも

四月、應二姫公命一、詠二霍公鳥之題一

ものゝふの磐瀨の杜の古を偲べとや鳴く本ほとゝぎす

應レ命詠二風鈴一歌

橘の花の香通ふ朝風にさやぐ小鈴の音の涼しさ

たわやめの袖吹きかへす夕風に涼しくすめる鈴の音のよさ

〇霞立ち云々　萬葉集卷五「霞立つ永き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも」
○けならべて　幾日も。
○奪ひたる　萬葉集卷五「雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがな」
〇毛桃　外果皮に毛茸多い桃。
○足引の云々　萬葉集卷一「こせ山のつら／＼椿つら／＼に見つゝ思ふなこせの春野を」
○片山海石榴　片山に生えた椿。
○つばら／＼に　つまびらかに。
○藤浪　藤の花。
○かき數ふ云々　萬葉集卷八「秋の野に咲きたる花をおよび折りてかき數ふれば七草の花」
○かき數ふ　數ふ。
○にほふ　美しく咲く。
○卯の花の　「う」の枕詞。
○思はぬに　意外にも。
○ものゝふの云々　萬葉集卷八「ものゝふの磐瀨の杜のほとゝぎす今も鳴かぬか山の常陰に」
○ものゝふの　「い」の枕詞。
○磐瀨の杜　大和國生駒郡。
○本ほとゝぎす　古くから來て馴染になつた時鳥。
○さやぐ　さら／＼と鳴る。

御園生の千代松風の吹くごとにさやぎぞわたる小鈴もゆらに

應㆓姫公命㆒、詠㆓橘花之題㆒

萬代に見し給ふべき島山のあから橘花さきにけり

賀㆓下田浦弘田玄仲七十壽㆒

眞髮觸る櫛江の浦の沖つ浪とゞろ〳〵にこと壽ぐがよさ

櫛江、下田舊名、因詠

應㆓姫公命㆒、詠㆓夏月之題㆒

吾が園の草深百合の花咲まひ照れる月夜に見む人もがも

七夕月　應㆓姫公命㆒、詠㆓七夕㆒

夕月の隱れぬい間に天の河はや榜ぎわたり君は來まさね

七夕露　同上

天の河かは門に立ちて君が舟我が待つ袖に露ぞ置きにける

七夕河　同上

眞氣長く君が船出を安の河安寐し寐ずて吾が待ち戀ひし

七夕橋　同上

機の蹈木を橋に渡しつゝ待つと告げ來ぬ往きて早見む

---

○千代松風　千年も經た松に吹く風。
○ゆらに　ゆら〳〵搖れて音を立てて。
○島山の云々　萬葉集卷十九「島山に照れる橘うずにさし仕へまつらなまへつ君たち」
○島山　庭園。
○あから橘　橘の實が赤らんで居るのでいふ。古義の說では、花の白々と明らかなる意。
○眞髮觸る　櫛の枕詞。
○吾が園の云々　萬葉集卷七「道のべの草深百合の花咲みに笑まししからに妻といふべしや」草深百合は草の茂みに咲ける百合。
○隱れぬい間に　いは助辭。
○天の河かは門に立ちて　萬葉集卷十「天の河かは門に立ちて我が戀ひし君來るなり紐解き待たむ」かは門は河の渡場。
○眞氣長く　「眞」は接頭語。長い間。萬葉集卷十八「安の河こむかひたちて年のこひけがきこらがつまどひの夜ぞ」
○安の河云々　天上にあるといふ川の名。安寐の序詞。
○機の蹈木云々　萬葉集卷十「機の蹈木持ち行きて天の河打橋渡す君が來むため」蹈木は機具。

七夕琴　同上

織女の吾を待ちがてに此の夕なげき搔きひく琴の音聞ゆ

七夕笛　同上

吹き鳴すや手馴の笛の聲知りて天の川津に妹待つらむぞ

七夕祝　同上

天の河水尾し絶えずば今の如幸くかよはむ秋立つごとに

七月應二姫公命一、詠二野草花之題一

袖垂れていざ野に行かな女郎花秋萩尾花いま盛りなり

應レ命、詠二玉砌芽子花一

御垣津の池の眞清水にほふまで島の秋萩花咲きにけり

爲二八月十五日夜月宴一、應二姫公命一、預詠二船月之題一

室戸崎吾がこぎくれば磯觸のよする荒磯に月照れる見ゆ

對山待月　同時三條新御殿中樣御兼題

櫻井の水底清みしづく玉さやに見ゆまで照る月夜かも

渡月　八月十五夜　東殿君御宿題

大島を夕越え來れば石走る垂見の渡月照りにけり

---

○天の川津　天の川にある津。萬葉集卷十「久方の天の川津に舟浮けて君待つ夜らは明けずもあらぬか」

○天の河云々　萬葉集卷十三「飛鳥の河の水尾速み生ひため難き石枕苔むすまでにあたら夜の幸く通はむ云々」

○幸く　恙なく。

○御垣津の池　御庭の池。

○島　池の築島。

○櫻井の水底云々　續日本紀「櫻井に白玉しづくやよき玉しづくや云々」

○櫻井　大和國高市郡。

○石走る　垂見の枕詞。

月前笛　九月十三夜　東殿君御術題

さやに照る今宵の月に宮人の吹き鳴す小笛聞かくしよしも

月契多秋　八月十五夜　同前

秋ごとに月の御面の面變りせぬごと吾も斯くしあひ見む

月前松　九月十三夜　同前

鶴が鳴く菟田の松原つばらかに今宵の月に打見つるかも

秋月添光　八月十五夜　君公御術題

秋風に色付く山の高嶺より照り出づる月の光異に見ゆ

池上翫月　九月十三夜　同前

輕の池の玉藻の上に照る月を浦回もとほり見れどあかぬかも

森海眺望　文政五年七月、門人土居高鞆死去、爲㆓四十九日追悼㆒詠

見わたせば大海の原に立つ霞奥かも知らに無き人思ほゆ

賀㆓伊勢國山田人度會神主瑞枝父六十算㆒

渡會の若歷木原久しくと祈る心を神も諾へ

文政四年七月、報㆔贈細木瑞枝賛㆓賀僕遷官㆒歌五首

懦弱や吾を召上げて古事を解き申せとぞ吾に告げつる

○さやに　さやかに。
○聞かくしよしも　聞くのが面白い。
○菟田の松原　土佐國香美郡。
○つばらかに　詳かに。
○色付く山　紅葉する山。
○異に見ゆ　勝れて美しく見える
○輕の池の云々　萬葉集卷三「輕の池の浦回もとほる鴨すらに玉藻の上に獨り寢なくに」輕の池は大和國高市郡。
○奥かも知らに　はてしもなく。萬葉集卷十七「大海の奥かも知らず行く我をいつ來まさむと問ひし兒らはも」
○度會の云々　萬葉集卷十二「度會の大河邊の若歷木吾が久にあらば妹戀ひむかも」
○諾へ　受納し給へ。
○懦弱や　拙劣である意。
○召上げて　呼び出して。

書典讀む人は多きをたゞ獨り吾を召上げしことの奇しさ

眞つぶさに解き申さむと思へども智き心の無きがすべなさ

倭文手纏賤しき吾を殿の上に召上げて在るをかしこくもあるか

書讀めと召されし吾を慇懃に言ひ祝がす君のうれしさ

文政五年壬午秋月應㆓東殿君命㆒、詠㆓菊名焚合㆒

焚物の焚き合はす香と思ひしは御園の菊のにほひなりけり

爲㆓九月十三夜月宴㆒、應㆓姫公命㆒、預作㆓庭月之題㆒

蟋蟀の鳴く此の庭に立ちならし見つゝ明かさな淸き月夜を

十月、應㆓姫公命㆒、詠㆓殘紅葉之題㆒

錦かも張れると見しは十月山の黄葉の殘るなりけり

爲㆑賀㆓高岡人千頭政輝母六十算㆒、詠㆓寄㆑岩祝之題㆒

母刀自は五百世いでませ高岡の山の磐根のこゞしきもころ

十一月、應㆓姫公命㆒、詠㆓待戀之題㆒

吾が背子を今か〳〵と牀去りて待ちつゝ居るに夜の更け行かく

十一月、應㆓姫公命㆒、詠㆓海邊松之題㆒

神さぶる尾津の崎なる一つ松あはれとぞ見る古思へば

---

○書典讀む人　學者。
○眞つぶさに　完全に。
○すべなさ　せん方ない。
○倭文手纏　賤しきの枕詞。
○かしこくもあるか　「か」は歎辭
○祝がす　祝ぐの敬語。

○立ちならし　立ち馴らし。

○磐根のこゞしきもころ　岩の嶮しい如くに。
○吾背子を云々　萬葉集十二「吾が背子を今か〳〵と待ち居るに夜の更け行けば歎きつるかも」
○行かく　行くの延音。
○神さぶる云々　古事記「尾張にたゞにむかへる尾津の崎なる一つ松あせを云々。」
○尾津の崎　伊勢國桑名郡。

文政五年壬午除夜　南殿迎レ陽、登時陳レ所レ思作歌

常ゆ異に貴くありけり侍宿せし殿の朝開に春の立てるは

文政六年癸未正月二十八日、爲下會二西尾秋滿呂家一、儲二若菜之題一、兼賀上主人四十年算一

春の野の菟芽子つみ來て今日の如ともにたげてな彌年のはに

正月應二姫公命一、詠二山霞之題一

み湯の上に樹むらしぬぎてこゞしかも伊豫の高嶺の霞流るも

爲レ賀二島崎某六十齡一、題二蘭蕃一

長人の繼ぎて見すべき島なれや常葉草も生ひ繁るらむ

二月、應二姫公命一、詠二雨中花之題一

春雨に濡れば濕づとも櫻花かざしに插さず過し得めやも

三月、應二姫公命一、詠二松上藤之題一

池の邊の松の末葉の藤の花をゝりにをゝり今咲きにけり

四月、應二姫公命一、詠二新樹之題一

四月立ちすなはち見れば向つ崗の木立しみゝに水枝さしたり

五月、應二姫公命一、詠二磯霍公鳥之題一

---

○常ゆ異に　平生よりも一段勝れて。
○朝開　夜明方。
○春の野の云々　萬葉集卷二「妻もあらば摘みてたげまし沙彌の山野のへのうはぎ過ぎにけらずや」
○菟芽子　嫁菜。
○たげてな　食べたいものだ。
○み湯の上云々　萬葉集卷三「湯はしもさはにあれども島山のよろしき國とこゞしかも伊豫の高嶺の伊佐庭の岡に立たして歌思ひ辭思はしし み湯の上の樹村を見れば云云。」
○み湯　伊豫の道後溫泉。
○樹むらしぬぎて　樹の茂れる森を凌いで。
○こゞしかも　險しいかなの意で伊豫の高嶺を修飾す。
○伊豫の高嶺　石槌山。
○長人　長命の人。
○繼ぎて見すべき　いつまでも見給ふべき。
○島なれや　庭なればにや。
○常葉草　蘭。
○池の邊の云々　萬葉集卷八「池の邊の松の末葉に降る雪は五百重降りしけ明日さへも見む」
○をゝりにをゝり　撓むまで茂つて。
○水枝　若枝。

霍公鳥磯もとゞろに鳴く聲をいかに聞きつや漁する子等

賀北川勝知七十齢

萬代にいそしみまして吾が君に仕へまつらせ今も見るごと

六月、應姬公命、詠舟中納涼之題

小船乘りこの島陰の夕風に紐解きあけて遊ばくよしも

文政六年七月七日、應女公子命作之

七夕雲　擬牽牛之意

早往きて今宵は纏かむ天雲の千重に重なる遠嬬の手を

七夕露　擬織女之意　同上

夕露に玉裳ひづちて久堅の天の川津に君待つ吾は

七夕花　擬牽牛之意　同上

秋萩の其の花咲みに遠嬬のゐまむ眉曳ゆきて早見む

七夕橋　擬織女之意　同上

天の河打橋わたし年月に吾が待ち居りとゆきて告げこそ

七夕琴　擬牽牛之意　同上

妹が家道近づくらしも天の川川端もさやに琴の音きこゆ

七夕枕　擬織女之意　同上

---

○紐解きあけて　姿もかまはず打解けて。
○遊ばくよしも　遊ぶよきかなの意。
○早往きて云々　萬葉集卷十「年にありて今日か纏くらむぬば玉の夜霧がくりて遠妻の手を」
○天雲の千重に重なる　「遠」の序詞。
○遠嬬　遠方に居る妻。或は逢ふことの稀な妻。
○玉裳　裳。男子禮装の時、表袴の上に著るもの。
○ひづちて　濡れて。
○其の花咲みに　萩つ花が咲くやうに笑みを含んで。
○眉曳　眉毛を剃つたあとに眉墨を引いて作つた眉。
○打橋　假に架けた板橋。
○告げこそ　告げてもらひたい。「こそ」は希望の意を現らはす。
○妹が家道近づくらしも　萬葉集卷十五「妹が家道近くありせば見れど飽かぬまりふの浦を見せましものを」

高々に君をいませて石枕相卷く今宵明けずもあらぬか

七夕祝　擬二牽牛之意一　同上

萬世に年は來經とも天の川たゆることなく逢はむとぞ思ふ

七月、應二女公子命一詠二庭芽子之題一

思ふ子と出で立ちたらす此の庭の一むら萩の花咲きにけり

應レ需詠二雪月花一

降り亂る雪と見るまで櫻花こゝだも散るか清き月夜に

題二蓬萊山圖一

常世島常葉の松の本邊には龜も鶴さへ來集ぞ遊べる

爲二八月十五夜月宴一應二女公子命一預作二依レ處月明之題一

こき敷ける珠の庭には月讀の光異にこそ照りわたりけれ

同時、爲レ應二君公命一儲二栽月前眺望之題一

浦戸崎押照る月に榜ぎ來れば兎田の松原浪の上ゆ見ゆ

同時、應二東殿君命一詠二池上月之題一

鳴く鳥の聲慕ひ來て妹が手を取石の池に照れる月見つ

同前　詠二海月之題一

---

○高々に君をいませて　萬葉集卷十二「望の日に出でにし月の高々に君をいませて何か思はむ」

○石枕　石を枕とすること。

○相卷く　同衾する意。卷くは枕とする意。

○明けずもあらぬか　夜が明けないであつてほしい。

○萬代に云々　萬葉集卷五「萬代に年は來經とも梅の花絕ゆることなく咲きわたるべし」

○來經とも　經過しても。

○常世島　永久にかはらぬ島。

○珠の庭　美しい庭。

○上ゆ　上より。

○妹が手を云々　萬葉集卷十「妹が手を取石の池の浪の間ゆ鳥が音異に鳴く秋過ぎぬらし」妹が手は取るの枕詞。取石の池は和泉國泉北郡。

八十梶かけ吾は榜ぎ出でむ浪の間ゆ押照る月の光さやけし

爲二九月十三夜同前一、詠二月前薄之題一

眞十鏡清き月夜に吾が屋戸の一むら薄一目見に來ね

同前、詠二月前擣衣之題一

此の月のこゝに來るまで濯衣とゞと擣つ兒のあやに悲しも

爲二九月十三日夜月宴一、應レ命預作二海上月之題一

三崎さし吾が榜ぎ往けば那波の浦のゆたけき見よと月は照るらし

同時、應二女公子命一、詠二對レ月待レ客之題一

吾が門の淺茅の上に照る月を君に見せむと吾が待たなくに

爲下餞二朝夷氏往二于江戸一之時上、詠二春旅之題一

春霞八重山超えていますらむ君が直香のしきてし思ほゆ

應下佐川家内君所上レ誂、貴賤翫レ月之題　爲二八月十五日夜月宴一

宮人の遊ぶ今宵の月夜よみ出でて來にけり山田守る翁

同前、詠二月前紅葉之題一　爲二九月十三日夜月宴一

月清み見れども飽かぬ秋山のしたびが下に宿りかせまし

秋月似鏡　三條家新御簾中樣、八月十五日夜御宿題

○八十梶云々　萬葉集卷十二「玉の緒のうつし心や八十梶かけ榜ぎ出む舟におくれて居らむ」八十梶は澤山の梶。
○眞十鏡云々　萬葉集卷八「まそ鏡清き月夜にたゞ一目見せむまでには散りこすなゆめ云々。」眞十鏡は清きの枕詞。
○此の月の云々　萬葉集卷七「此の月のこゝに來れば今とかも妹がいでたち待ちつゝあらむ」
○とゞと　轟くさま。
○あやに　わけもなく。
○三崎　土佐國幡多郡。
○那波の浦　土佐國安藝郡。
○ゆたけき　廣々とした趣。
○春霞云々　萬葉集卷十「朝霞八重山越えて呼子鳥なきやながが來る宿もあらなくに」
○直香　身の上の事。
○しきてし思ほゆ　頻りに思はれる。
○宮人の云々　萬葉集卷七「百敷の大宮人のまかり出て遊ぶ今宵の月のさやけさ」
○月夜よみ　月夜がよいので。
○秋山の云々　萬葉集卷十「秋山のしたびが下に鳴く鳥の聲だに聞かば何か歎かむ」
○したび　紅葉のかゞやく色。

秋の夜の月の光を大空に磨ぎて懸けたる鏡と見つも

月前祝　同前 九月十三日夜御會題

君が代の長五百秋を斯くしつゝ清き月夜に樂しく遊ばめ

文政六年癸未冬十月朔、奉二致仕君命一、敬詠二玉庭菊花一

朝庭に出で立ちならす少女等が袖さへ匂ふ白菊の花

癸未十月六日、應二東殿君命一、詠二名所時雨之題一

佐保のうちゆ時雨ふりしく春日山黄葉かざさむ時來るらし

十月、應二女公子命一、詠二遠近落葉之題一

龍田彦荒びにけらしこち〴〵の丘邊の路に黄葉ちり敷く

癸未冬十月五日、東殿君御二遊稱名寺一之時、從レ供作歌

吾が君の御供つかへて思はぬに潮江山の紅葉かざしつ

同時、令二侍臣探レ題裁一レ歌、探二得山家苔之題一、敬賦歌

山里の君松かげの苔むしろ今日の爲とぞ兼て織りけむ

十月二十又四日夜、會二柳井千春翁家一、探二得居醒泉之題一作歌

古をかけつゝもとなかしこけど居醒の清水むすびて飲みつ

十月二十又五日、訪二來正躬直翁家一、見二庭前黄葉一作歌

○長五百秋　限りない年月。
○朝庭に云々　萬葉集卷十七「朝庭に出で立ちならし夕庭に云々」
○佐保のうち云々　萬葉集卷八「春日野に時雨降る見ゆ明日よりはもみぢかざさむ高圓の山」
○佐保のうち　大和國佐保地内。
○龍田彦　風の神。
○こち〴〵の　彼方此方の。
○君松かげ　君を待つと松陰とを掛く。
○苔むしろ云々　萬葉集卷七「三吉野の青根が峯の苔むしろ誰か織りけむたてぬきなしに」苔筵は苔の生えた所を筵に見立つ。
○かけつゝ　心にかけつゝ。
○もとな　わけもなく。
○居醒の清水　日本書紀にある、日本武尊が伊吹山で毒氣に觸れ給うた時、其の醉ひを醒まされたといふ泉。

いさゝめに吾は來にしを君が家のしたびが下に此の日暮しつ

冬懷舊　刈谷脩能翁死後四十九日法會追悼

久萬山の松の葉しぬぎ降る雪のいやしく／＼に亡き人思ほゆ

爲十一月三日、會ニ楠本美水翁家一、預備レ題詠ニ冬月一

窗越しに押照る月をむし衾なこやが下ゆ見らくしよしも

癸未十二月六日、融相院君七回御法會之時、奉下爲ニ追悼一、應ニ女公子命上

詠中寄レ夢懷舊之題上　十一月十三日奉レ之

ぬば玉の夢のうつゝに古をかけつゝもとな哭のみし泣かゆ

故鄕雪　十一月十九日、應ニ東殿君命一

大君の見ししみ吉野見まく欲りなづみご吾が來雪の降らくに

古に戀ひつゝ來れば八釣山木立も見えず雪降り亂る　此一首不レ啓

夜寒重衾　十一月、應ニ女公子命一

いで吾妹夜の牀寒し今一重著そひてさ寢なその小衾を

雪中待友　十二月、應ニ女公子命一

松が枝の地につくまでみ雪降りあな面白し見む人もがな

寄扇戀

---

○いさゝめに　暇初に。
○久萬山の云々　新勅撰集冬基俊「奥山の杉の葉しのぎ降る雪は人だのめなる花にぞありける」
○窗越しに云々　萬葉集卷十一「窗越しに月押照りて足曳の嵐吹く夜は君をしぞ思ふ」
○むし衾云々　萬葉集卷四「むし衾なこやが下に臥せれども妹とし寢ねば肌し寒しも」むし衾は暖かな衾。なこやが下ゆは柔かい下からの意。
○ぬば玉の　夢の枕詞。
○哭のみし泣かゆ　慟哭ばかりしてゐる。
○降らくに　降るのに拘はらず。
○古に戀ひ云々　萬葉集卷二「八釣山木立も見えず降り亂る雪はだらなるあした樂しも」
○八釣山　大和國高市郡。

はしきやし君が手馴の扇にもならましものを戀ひつゝあらずは

文政七年甲申春正月、應二女公子命一、詠二峯樹帶レ霞之題一

片岡の此の向つ峯に吾が蒔きし椎のさ枝に霞たなびく

同年春二月、應二女公子命一、詠二江上春月之題一

春がすみ流る堀江の水際にゆつらふ月の光乏しも

賀二安藝郡安田鄕清岡某七十壽一

平らけく安けくいませ安田河ゆく瀨の水の絶ゆる世なしに

三月、應二女公子命一、詠二落花入レ簾之題一

吹く風に小簾のすけきよ散り亂る花にな觸りそ屋内掃くとも

柳井千春死去之後、集二彼家一、各述二哀傷之意一之時作歌

歌思ひ辭思ひ念はむ時々はいよゝ昔の思ほえむかも

島崎利鄕翁得下雕二弱浦之形一錺上之時、應レ需作歌

劔太刀名にのみ聞きし弱浦の蘆邊の鶴はこゝにしありけり

夏五月十有三日、應二東殿君命一、詠二名處鵜川之題一

丈夫し鵜川たつらし辟田河河の瀨光り篝さす見ゆ

應二同君命一、題二綠雨亭圖一

---

○はしきやし云々　萬葉集卷五「こことはぬ君にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしあるらし」
○戀ひつゝあらずは　戀うて居るよりも。
○片岡の云々　萬葉集卷七「片岡の此の向つ峯に椎蒔かば今年の夏の陰になみむか」
○ゆく瀨の水云々　萬葉集卷六「泉川ゆく瀨の水の絶えばこそ大宮所うつろひゆかめ」
○吹く風に云々　萬葉集卷十一「玉垂の小簾のすけきに入り通ひ來ねたらちねの母が問はさば風と申さむ」
○すけきよ　隙間より。
○歌思ひ云々　萬葉集卷三「いざ庭の間に立たして歌思ひ辭思はし云々。」
○弱浦　紀伊國和歌浦。
○劔太刀　「な」の枕詞。
○丈夫し云々　萬葉集卷十九「落ちたぎち流る辟田の河の瀨に年魚見さばしり島つ鳥鵜飼ともなへ篝さし云々」
○丈夫し　「し」は助詞。
○鵜川たつらし　川に鵜漁支度をするらしい。
○辟田河　越中國にあるといふ。

もみぢ葉の散り飛ぶ時に入り居りて斯くし偲ばないや年のはに

四月、應二女公子命一、詠二鶡中霍公鳥之題一

旅にして家戀しきにともしくも關飛び越えて行く霍公鳥

五月、應二女公子命一、詠二池菖蒲之題一

吾が屋外の垣津の池のあやめ草玉に貫くべく成りにけらずや

廿代神社司某、賀二母六十算一之時、應レ需、題二多度山美泉圖一

老人の變若ちふ水ぞとこしへにたけていまさね此の變若水を

爲二或娘子一所レ詠題二藤花畫一

めづらしき人の咲容になぞへてし時じく藤の花や此の花

應二葛目弘守兄需一、題二壯子乘レ牛歸レ家圖一

うちわたす田居も見がほし山もよし牛の歩みはおそくともよし

又題下雨人歡二雲氣一畫上

詳かに見ませ吾が背子惡しけくも吉けくも何の祥と定めむ

海邊眺望

浪の上ゆ見ゆるは沖の小島かも海處女等が乘れる舟かも

六月、應二女公子命一、詠二舟納涼一

○もみぢ葉の散り飛ぶ　萬葉集四「もみぢ葉の散り飛ぶ見つゝ云々」

○入り居り云々　萬葉集卷三「朝には出で立ち偲び夕には入り居りなげかなひ云々。」

○旅にして云々　萬葉集卷十「旅にして妻戀ひすらし時鳥神名備山にさ夜更けて鳴く」

○關飛び越え云々　萬葉集十五「ふみなしに關飛び越ゆる時鳥あまたが見にもやまず通はむ」

○吾屋外の云々　萬葉集卷八「わが宿の花橘は散り過ぎて珠に貫くべく實に成りにけり」

○多度山美泉　美濃國養老瀧。

○老人の云々　三四頁「老人」の歌參照。

○たけていまさね　飲み給へ。

○めづらしき人云々　萬葉集卷八「わが宿のときじく藤のめづらしく今も見てしか妹のゑまひを」

○めづらしき人　愛人。

○咲容　笑顏。

○時じく　季節はづれの。

○打ちわたす田居も見がほし　一面に廣い田の趣をも常に見てゐたい。

○惡しけくも吉けくも何の　萬葉集卷五「あしけくもよけくも見むと云々。」

○浪の上ゆ云々　萬葉集卷八「波の上ゆ見ゆる兒島の雲がくりあな息づかし相別れいねば」

舟竝めて来しくも知らく難波潟蘆の葉さやぐ風の涼しさ

七月、應二女公子命一詠二草花盛之題一

秋の野の花のくさ〴〵色ことに匂ふ盛りは今にしあるらし

七夕天象

此の夕たつ白雲は七夕の天道通はす領布の靡けか

七夕地儀

天人の妻問ふ宵と道のべの草さへしなふ心しあるらし

七夕雨涼

天の河初秋風の吹くなべに小雨そぼふり夕涼しも

七夕喜晴

鬱悒かりし雨雲晴れぬ天の河舟出はやせむいさよふべしや

七夕惜別

事問ひもいまだ盡きねば天の河榜ぎ別れなむたづき知らずも

七夕後朝

天の河朝川わたり別れゆく君が姿の影に見えつゝ

七夕契久

---

○舟竝めて　舟を竝べて。
○來しくも知らく　知らくはしるの誤りであらう。
○秋の野の云々　萬葉集卷十九「秋の花くさ〴〵なれど色ごとに見しあきらむる今日のたふとさ」
○色ごとに　千種萬別の色に。
○天人の云々　萬葉集卷十「狛錦紐解きかはし天人の妻どふ宵ぞ我も偲はむ」
○吹くなべに　吹くにつれて。
○天の河舟出はやせむ　萬葉集卷十「しば〳〵も相見ず君を天の河舟出早せよ夜の更けぬ間に」
○いさよふべしや　躊躇すべきでない。
○事問ひも云々　萬葉集卷十「たゞ今宵あひたる兒らに事問ひも未だせずしてさ夜ぞ明けにける」
○事問ひ　お話。喋々喃々の意。
○たづき知らずも　たよりないことよ。
○朝川　朝の川。

年に裝ふ吾が引く舟の綱手繩絶えむの心思ほすなゆめ

以上七首、文政七年甲申七月、應二女公子命一作レ之

爲二八月十五日夜宴一、應二女公子命一、豫作二山月入レ簾之題一

玉垂の小簾の間もれて山の端のさゝらえ壯子こゝに來ませり

同前、應二東殿君命一、豫作二依レ月秋勝之題一

いとのきて秋山吾はうれしかももみづ木の葉に月の照る夜は

同前、應二彈正君命一、豫作二中秋宴之題一

さやに照る今宵の月に向ひ居て思ふ人どち飲まくしよしも

同、豫作二高樓明月之題一

高樓に登りたたして國見せす今宵の月の光すがしも

同前、應二佐川家内君命一、豫作二終夜見レ月之題一

望の日に出でたる月のうつらく傾くまでに見れど飽かぬかも

同前、應二美代子君命一、豫作二都月之題一

宮女舍人壯子も月清みいそばひ出でて遊べ此の夜は

後八月、應二女公子命一、詠二閏八月翫レ月之題一

月讀の御靈賜ひて此の淸き望に二度あひし貴さ

〇年に裝ふ云々　萬葉集卷十「年に裝ふ吾が船漕がむ天の河風は吹くとも波立つなゆめ」
〇年に裝ふ　毎年の舟支度をする
〇玉垂の云々　萬葉集卷七「玉垂の小簾の間通り獨り居て見るしるしなき夕月夜かも」
〇さゝらえ壯子　月。
〇來ませり　照つて來たの意。
〇いとのきて　甚だしく。
〇秋山吾は　萬葉集卷一「秋山の木の葉を見てはもみぢ葉をとりてぞ偲ぶ靑きをば置きてぞ歎くそこし恨めし秋山吾は。」
〇もみづ木の葉云々　萬葉集卷八「秋山にもみづ木の葉のうつりなば更にや秋を見まくほりせむ」もみづは紅葉する意。
〇高樓に云々　萬葉集卷一「芳野川激つ河內に高殿を高知りまして登り立ち國見をすれば云々。」
〇國見せす　國の景色を見給ふ。
〇うつらく　つくぐ。
〇宮女舍人壯子　萬葉集卷十六「うちひさす宮女さす竹の舍人壯子も云々。」
〇舍人壯子　天皇皇族或は臣下に近侍する雜掌。
〇いそばひ　馴れ戲れ。
〇後八月　九月十三夜。

詠㆓本草蚌蛤類㆒　應㆓谷金吾丈需㆒

痁瘕を食して癒せと君がためあが漁り來し蠣ぞこの蠣

賀㆓巾山巖水翁六十齡㆒之時、應㆑需題㆓山水畫㆒

山川を高みさやけみ諾しこそ世の長人は家居せすらめ

爲㆓九月十三日夜月宴㆒　應㆓東殿君命㆒、豫詠㆓月前鹿之題㆒

月夜よみ妹に逢はむと出で行けば山のとかげに小牡鹿嗁くも

同前、應㆓美代子君命㆒、豫作㆓月出㆑山之題㆒

山の端ゆ出で來る月の影浮けて今夜は飲まないざせ吾妹子

同前、應㆓女公子命㆒、豫詠㆘月浮㆓澗水㆒之題㆖

三笠山眞楫榜ぎ出でて月の舟細谷川の浪にたゆたふ

同前、應㆓佐川家内君命㆒、詠㆓月前菊之題㆒

照る月の光は色を奪へれど其の香はしるし白菊の花

同前、應㆓彈正君命㆒、豫詠㆓月下聞㆑砧之題㆒

み空行く月にきそひて手もすまに衣擣つ子は誰が思妻

同、豫詠㆘月泛㆓海上㆒之題㆖

海原の道をた遠み夜くだちてなづさひ渡る月人壯子

---

○痁瘕　腹の急に痛む病。
○諾しこそ　宜なるかな。
○月夜よみ云々　萬葉集卷十一「月夜よみ妹に逢はむとたゞちから我は來つれど夜ぞ更けにける」
○山のとかげ　山のたわんで陰をなした所。萬葉集卷十「足曳の山のとかげに鳴く鹿の聲聞かずやも山田守らす兒」
○山の端ゆ出で來る月　萬葉集卷十六「下にのみ戀ふれば苦し山の端ゆ出で來る月のあらはればいかに」
○浮けて　杯に浮ばして。
○いざせ　人を誘ふ意。
○三笠山云々　三笠山から現はれた月をいふ。眞楫の「眞」は接頭語。楫は艪や櫂の類を廣くいふ。月の舟は大空を海に喩へるに對して月を舟に擬す。萬葉集卷七「春日なる三笠の山に月の船出づみやびをの飲む杯に影に見えつゝ」
○細谷川　細い谷川。萬葉集卷七「大君の御笠の山の帶にせる細谷川の音のさやけさ」
○たゆたふ　ゆらぎたゞよふ。
○色　白菊の花の色。
○しるし　著し。
○手もすまに　手も休めずに。
○道をた遠み　「た」は接頭語。道が遠いので。
○夜くだちて　夜が更けて。
○なづさひ渡る　たゞよひ渡る。

○枕づく云々　萬葉集卷二「わぎも子と二人わが寢し枕づく嬬屋のうちに云々」枕づくは嬬屋の枕詞。
○嬬屋　夫婦の寢る室。
○あらたまの　來經の枕詞。
○あたら盛りを云々　萬葉集卷二十「秋の野に露帶べる萩を手折らずてあたら盛りを過してむとか」
○憂けくも知らに　辛いことも知らずに。「に」は「ず」の意。
○浦安に　安寧に。
○誘ひ　歎き誘ふ。後撰集春藤原興風「山風の花の香かどふ麓には春の霞ぞほだしなりける」
○瀧の上の櫻云々　萬葉集卷九「白雲の立田の山を夕暮に打越え行けば瀧の上の櫻の花は咲きたるは云々」及びその反歌「暇あらばなづさひ渡り向つをの櫻の花も折らましものを」
○折らまくに　折りたいので。
○由はかもなき　すべはないかなあ。由はなきかもと同意。

十月、應ニ女公子命ー、詠ニ里家雨之題ー

山畑に麥まく兒等が袖通し時雨ふるなり高坂の里

十一月、應ニ女公子命ー、詠ニ屋上霰之題ー

枕づく嬬屋の上に打つ霰いたくな打ちそ寢ねがてなくに

十二月、應ニ女公子命ー、詠下惜ニ歳暮ー之題上

あらたまの來經ゆく年をとゞめかねあたら盛りを過しなむかも

甲申除夜侍宿作歌

世の中の憂けくも知らに侍宿して春待つ今夜樂しく思ほゆ

文政八年乙酉歳旦侍作歌

吾が君の御代浦安に侍宿して眞も今朝は春に逢へるかも

同朝、玉砌聞レ鶯作歌

御園生の梅の下枝に鶯の今朝來鳴きそむ聲のよろしさ

正月、應ニ女公子命ー、詠ニ梅薫レ風之題ー

春風の誘ひ來りし吾妹子が墻津の梅の花の香のよさ

二月、應ニ女公子命ー、詠ニ瀧邊花之題ー

瀧の上の櫻の花を折らまくになづさひ渡る由はかもなき

始見二長瀬淸玉一之時、淸玉作歌

飛鳥井の遠き流れの眞淸水の夷の里居に涌き出でしかも

雅澄報贈歌

飛鳥井の流れを遠み君無くば誰か汲まむよあたら眞淸水

三月、應二女公子命一詠二春旅之題一

春楊取り持ち見れば眞氣長み妹が眉引思ほゆるかも

朝比奈淸弼往二于江戸一之時作贈歌

武藏野の小岫が雉子とよもさば言告けやりし聞使と知れ

三月二十七日曉始聞二霍公鳥啼一贈二交遊一歌

霍公鳥汝が初音の玉ならば貫きても君に見せましものを

賀二福原弘道母八十八齢一

今のごと眞幸くまして八十餘り八つの坂路を八度越えませ

四月、應二女公子命一詠二墻卯花之題一

ほとゝぎす聲聞きがてり出でて來て妹が垣間の卯の花見つも

四月二十五日夜、會二于楠本美水翁家一寄レ橘賀二六十齢一作歌

み園生の植木橘百枝さしいや榮はえね百世經るまで

○飛鳥井の遠き流れの眞淸水　雅澄の先祖は飛鳥井家であるから、雅澄を指す。
○夷の里居云々　長瀬宅を訪問したことを指す。
○誰か汲まむよ　長瀬が雅澄に意を示したことを指す。
○あたら　惜しい。
○春楊云々　萬葉集卷十「梅の花取り持ち見ればわが宿の柳の眉し思ほゆるかも」
○眞氣長み　時長く。
○武藏野の云々　萬葉集卷十四「武藏野の小岫が雉子立ち別れいにし宵よりせろにあはなふよ」小岫は山の洞穴。
○とよもさば　鳴き響かば、皇極紀「をち方のあはぬのきゞしとよもさずわれぞねしかご人ぞとよもす」。
○聞使　彼方此方との間に通ふ使。
○霍公鳥云々　萬葉集卷十「霍公鳥汝が初音は我にもが五月の玉にまじへて貫かむ」
○聞きがてり　聞きがてら。
○植木橘　庭に植ゑてある橘。
○み園生の云々　萬葉集卷八「いかといかとあるわが宿に百枝さし生ふる橘玉に貫く五月云々。」
○いや榮はえね　愈益榮え給へ。

賀ニ香美郡枝山郷小松幸盛四十算一

神さぶる小松の神社に酒すゑて禱る萬代は誰が爲ろかも

五月、應ニ女公子命一詠ニ水邊螢之題一

山の井の底も照るまで夜くだちて水草の上に螢すだけり

六月、應ニ女公子命一詠ニ關路鷄之題一

逢坂の關もとゞろに打羽振き呼び立て鳴くもあはれ其の鷄

同月、應ニ美代子君命一詠ニ夏月之題一

いざ子ども月夜さやけし門に出でて鳴くほとゝぎす草取も見む

稚　稻　水溪八趣之一

打ちわたす高も洿田もいや日けに繁りまさるか水を多みこそ

應ニ美代子君命一詠ニ名所七夕之題一

天なるやさゝらの小野の菅枕いまか巻くらむ其の遠嬬と

七夕言志

天人の逢ふ夜と聞けば吾さへに心動きて寐こそ寢らえね

牽牛のかよふ天道を振りさけて見る吾さへに在りぞかねつる

秋花勝春花

○誰が爲ろかも　「ろ」は語調の爲や餘情の爲に添へる助詞。
○すだけり　集れり。
○逢坂の關云々　枕草紙「夜をこめて鳥の空音ははかるとも世に逢坂の關はゆるさじ」孟嘗君の函谷關の故事。
○打羽振き　羽搏きし。
○草取　鳥が木草の枝にとまり居ること。
○高も洿田も　高田（高地にある田）も低地にある田も。
○いや日けに云々　萬葉集卷十一「飛鳥川水ゆきまさりいや日けに戀のまさらばありがてましも」
○いや日けに　日々愈まさりて。
○天なるや云々　萬葉集卷十六「天なるやさゝらの小野に茅草刈りかやかりばかに鶉を立つも」
○さゝらの小野　天上にある野。
○菅枕　菅を束ねて作った枕。
○牽牛の云々　萬葉集卷十「夕づつも通ふ天道をいつまでか仰ぎて待たむ月人をとこ」
○在りぞかねつる　居たゝまれない心がする。

咲く花を春とは言へど秋萩に豈まさらじか盡す心は

八月十五日夜、居二泰嶺院君喪一、仰見二明月一述二拙歌一

この夜らの月夜は清く照りたれど晩闇耳見成鶴

この夜らの月夜は清く照りたれど代は曾て無し君しまさねば

九月十三日夜、同前、一天翳曀、月光不レ明、仍聊述レ懷

おぼほしく今宵の月の見えつるは雲か棚引き吾が涙かも

衣笠村住人平石覺右衛門母六十賀

大君の衣笠山の茂み立てる千代松陰に住む人や誰

公文鐵平六十賀

萬代に君が見すべき島際には誇りて咲けり櫻花さへ

文政九年丙戌正月十八日、侍二東殿一見二梅花一、應レ命

萬代に見し明らめむ此花の盛りに逢へる今日の貴さ

正月、應二女公子命一、詠二雨中鶯之題一

春雨にしぬゝに濡れて鶯は木傳ひ啼くも妻求むとか

二月、應二女公子命一、詠二野外雉之題一

榲の野の霞がくりに妻戀ふと音にのみ啼きて雉子さをどる

---

○泰嶺院君　山内豐策。
○晩闇耳見成鶴　夕闇にのみ見えた意であらうが、脱字があるらしい。
○代は曾て無し　萬葉集卷十六「うき飯を水にかみなし我が待ちし代はかつてなしたゞにしあらねば」その甲斐は全くない。
○翳曀　目の明かでない貌。
○大君の　み笠の枕詞。
○此花の盛り　王仁「難波津に咲くや此花冬ごもり今を春べさ咲くや此花」
○しぬゝに濡れて　しつぽり濡れて。萬葉集卷十「朝霧にしぬゝに濡れて呼子鳥三船の山ゆ鳴きわたる見ゆ」
○榲の野の云々　萬葉集卷十九「榲野にさをどる雉子いちじるく音にしも啼かむこもり妻かも」
○榲の野　越中國射水郡。
○さをどる　躍る。はねあがる。

○咲く花に云々　古今集春伊勢「春霞立つを見捨てて行く雁は花なき里に住みやならへる」

○水口祭　陰曆二月苗代に水を引く時に、水口に幣を立てて祝ふ祭
○峯上花見　香光錦「尾の上の花の花見がてりに」か。

○古の人は云々　千載集春源義家「吹く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻かな」

○月讀の云々　萬葉集卷十三「月讀の持たる越水い取り來て君にまりてをちえしむもの」
○越水　若返る水。
○たげは　飲めば。
○いざ垂姫云々　萬葉集卷十九「垂姫に浦波吹きて浦淸く云々。」
○垂姫　越中國氷見郡布勢湖畔。
○竹の根の根足る處　古事記「卷向の日代の宮は……竹の根の根足る宮。」竹處を掛く。根足るは根の缺ける所のない意。
○不知也河云々　萬葉集卷十一「犬上の鳥籠の山なる不知也河いさとをきこせあが名告らすな」
○いさをしき名　勇名。

同月、應ニ彈正君命一、詠ニ歸雁之題一

咲く花に逢はじとするか春まけて雲隱りつゝ歸る其の雁

同前、詠ニ二月見レ花之題一

いざ今日は水口祭いでてせむ峯が上の花見がてりに

三月、應ニ彈正君命一、詠ニ勿來關之題一

古の人は勿來の關なれど面影のこる山櫻かな

中山參枚六十賀、詠ニ開櫻歌畫一

長人の插頭のためと櫻花千代松陰に咲き出けらずや

或人六十賀、詠ニ寄レ匏祝之題一

月讀の持たる越水たげばこそ世の長人は匏持たらめ

三月、應ニ女公子命一、詠ニ名處藤之題一

船竝めていざ垂姫に古の人のかざしし藤の花見に

賀ニ竹處西村雄次者四十齡一

竹の根の根足る處を萬代に動かぬ家と住む人や誰

不知也河　近江國彥根家老督學軍帥中野平馬
蘭溪六十賀配題

萬代に水緒し絕えずて不知也河いさをしき名を四方に流さね

四月、應二女公子命一、詠下尋二餘花一之題上

今一重越えて尋ねばおく手なる山の櫻に蓋し逢はむかも

同月、應二彈正君命一、詠下聞二子規一之題上

居り明かし待ちしもしるく子規山彦とよめ今ぞ鳴くなる

日前社　紀伊國家士野呂九一郎介石翁八十賀、配題得レ之

萬代と祈る心を明らけく知ろし給はね日前の神

熊　野

萬世にあり通ひつゝ君と見む熊野の御埼幸くあれこそ

那智瀧

落ち瀧つ那智の大瀧山とよめ君が千歳をことほぐが吉さ

五月、應二女公子命一詠レ樗

ほとゝぎす喧きにし日より愛しき妹にあふちの花咲きにけり

同月、應二彈正君命一、詠二五月雨一

五月山木立も見えず降る雨の雨間も開かず幾日經ぬらむ

寄龜祝　坂本長兵衛者家、一日、有二龜忽焉出二于砌上一、因レ是乞レ祝、贈二此歌一

音のみに聞きし常世は龜の住む君が此の家の島にしあらずや

○今一重　もう一つ山を。
○蓋し　若しも。
○居り明かし　寐ずに夜をあかし
○とよめ　とよもし。鳴り響かし。
○日前の神　日前神宮。紀伊國海草郡。
○あり通ひ　續いて通ひ。
○落瀧つ　逆卷き落ちる。
○妹にあふちの花　妹に逢ふと樗の花とを掛く。萬葉集卷十「吾妹子にあふちの花は散り過ぎず今咲けるごとありこせぬかも」
○五月山　五月の頃の山。
○雨間も開かず　雨の晴間もなく
○島　庭。

六月、應㆓女公子命㆒、詠㆓雨中扇之題㆒

ぬば玉の夜牀にさへも此の頃は手馴の扇手ゆ離れがたし

同月、應㆓彈正君命㆒、詠㆓聞㆑蟬之題㆒

七紘の八紘の琴をさや／＼に調べつゝ鳴く蟬の聲かも

七月、應㆓女公子命㆒、詠㆓秋戀之題㆒

秋霧のたなびく小野の夕露に濡れつゝ來しを逢はであらめや

同月、應㆓彈正君命㆒、詠㆓初秋雜詠之題㆒

萩が花咲けるを見れば小牡鹿の嬬問ふ秋になりにけらしも

八月、應㆓女公子命㆒、詠㆓鴈聲遠近之題㆒

孕潟水尾引き來れば沖にも邊にも鴈がねぞ啼く

同月、應㆓新御館君命㆒、詠㆓吸江明月之題㆒

さゞれ浪よする岩根にいちじろく月押照れり吸江の海

入交道齋六十賀句題、詠㆓青羽山之詞㆒

とこしへに青葉の山の本繁く榮えいまさね今も見るごと

十一月、應㆓女公子命㆒、詠㆓月前千鳥之題㆒

ぬば玉の月に向ひて吾が門にしば啼く千鳥聞けどあかぬかも

○手ゆ離れがたし　手から離し難い。

○秋霧の云々　萬葉集卷十「秋萩の咲き散る野邊の夕露に濡れつゝ來ませ夜は更けぬとも」

○水尾引き來れば　水脈に從つて漕ぎて來れば。

○邊　海邊。

○吸江　高知市に臨む吸江灣。

○句題　和歌の題に有名な成句を用ゐること。

○青葉の山　近江國にも若狹國にもある。古歌には「水鳥の青葉の山」とある。

○ぬば玉の　月の枕詞。萬葉集卷十七「ぬば玉の月に向ひて時鳥鳴く音はるけし里遠みかも」

○しば啼く　頻りに啼く。

十二月、應二女公子命一詠二爐邊閑談之題一

思ふどち向へる熾火の起き居つゝ相語る夜の飽かずもあるかも

○熾火　紅く熱した炭火。「起」と語調を揃ふ。

# 中

文政十年丁亥正月元日試筆歌

男盛の時來向ふと初春を待ち歡べる時もありしを
吾が盛りくだつともよし吾妹子が玉の光儀の舊りずありせば

正月、應二女公子命一、詠二春風解レ冰之題一

佐保風も長閑にし吹きて磐牀と凝りし河の冰ゆくへ知らずも

二月、應二女公子命一、詠二折レ蕨遇レ友之題一

春の野に早蕨折ると出で來ずは古りにし君に逢はましやそれ

二月二十六日、獻二御室濱所レ産花貝美代子君一、副歌

君が代を萬代かけて咲きにほふ花のかひある春にやはあらぬ

三月、應二女公子命一、詠二花下言志之題一

櫻花いま咲けるごと吾が盛り常かくあらば何か嘆かむ

四月十六日、始聞二霍公鳥喧一、獻二卯花女公子一歌

足曳の山ほとゝぎす草取りて今朝啼きそめし枝にぞありける

爲二歌子所一レ誂、題二菊花畫一

○吾が盛り云々　萬葉集卷五「吾盛りいたくくだちぬ雲に飛ぶ藥はむとも又をちめやも」
○玉の光儀　美しい姿。
○佐保風　佐卷の里を吹く風。
○磐牀と云々　一九頁鴨島の歌參照。

○それ　嘆辭。

○君が代を云々　古今集卷十九躬恆「わびしらにましらな鳴きそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ」
○花のかひある　花貝と花の甲斐あるとを掛く。
○春にやはあらぬ　春ではないか春である。
○いま咲けるごと　萬葉集卷五「梅の花今咲けるごと散り過ぎずわが家の園にありこせぬかも」
○草取りて　とまつて。

咲きしより散るちふことも慣はずて世を長秋の花にぞありける

見レ鏡傷二頭白一作歌

何時の間に黒髪變り白けけむますら壯子と思へる吾を

竹開黄葉　應二宮崎九左衛門需一

殖竹の本さへ枝さへ照るまでに吾家の園はもみぢ初めたり

四月、應二女公子命一、詠二殘花何在之題一

いざ子ども何方の山の奥がにか咲ける櫻の散り殘りたる

五月、應二女公子命一、詠二雨中早苗之題一

久方の雨間も置かず手肱に水沫畫き垂り五月苗取らすも

六月、應二女公子命一、詠二對レ泉忘レ夏之題一

藤原の御井の眞清水汲む時は肌さへ寒し秋立たねども

七月七日、應二女公子命一、詠二七夕舟之題一

安の河安寐も寢ずて吾が戀ひし妹を逢ひ見む舟出はやせよ

閏六月、應二女公子命一、詠二河夏祓之題一

往く水に潔ぐ心は速川の瀬織津姫の神のまに〳〵

七月應二女公子命一、詠二荻風似レ雨之題一

---

咲きしより云々　古今集春貫之「今年より春知り初むる櫻花散るといふことはならはざらなむ」
○長秋　無限の年月。長壽。
○黒髪云々　萬葉集卷四「ぬば玉の黒髪白くかはりてもいたき戀には逢ふ時ありけり」
○殖竹の云々　萬葉集卷十四「うゑ竹の本さへとよみ出でていなはいづし向きてか妹が歎かむ」殖竹は植ゑた竹。
○久方の云々　萬葉集卷八「久方の雨間も置かず雲がくり鳴きぞ行くなる早田かりがね」
○久方の　雨の枕詞。
○手肱　手の肱即ち肱。
○水沫畫き垂り　祝詞式祈年祭「手肱に水沫畫き垂り向股に泥畫き寄せて云々。」水の沫を滴らし。
○藤原の御井　萬葉集卷一に藤原宮御井歌の長歌がある。藤原宮は大和國高市郡にあつた持統天皇の宮。
○安の河云々　萬葉集卷十二「吾妹子に又も近江の安の河安寐も寐ずに戀ひ渡るかも」四八頁眞氣長くの歌參照。
○速川　流れの早い川。
○瀬織津姫　延喜式祝詞の六月晦大祓「速川の瀬に坐す瀬織津比咩といふ神云々。」此の神は祓物に負はせて流す罪穢を黄泉國へ運ぶのである。

夜くだちて雨か降り來し否をかもさゝら荻の葉風さやぐかも

賀二布師田人松岡文三郎六十算一

生薬吾はまゐらせず萬世の布師田河の鰻取りめせ

初秋之月、聊陳二所心一

かつ／＼もかゞよひ出でし白玉の沖つ海石に又や石著かむ

爲二八月十五日夜月宴一、應二女公子命一、豫詠二松間月之題一

名次山角の松原つばらかに今夜示せる月讀壯子

秋懷舊　九月、桑名才八、十七回忌追悼

古に戀ひつゝ居れば牀の隔に聲うらぶれて蟋蟀なくも

八月十五日夜臥二病牀一作

恙なき吾が身にしあらば無用に寢て明かさむやあたら此の夜を

病中呻吟歌

垂れ佩きて大路かよひし太刀の緒に此の頃蜘蛛の巢撥きぬるかも

月累ね病みしわたれば荒態を取りてひしがむ手力もなし

報二贈娘子一歌

おほろかに吾をな憑み天地の神のことわり無くはこそあらめ

---

○夜くだちて云々　萬葉集卷十四「筑波ねに雪かも降らる否をかもかなしき子ろがにぬほさるかも」と同じ調子。

○否をかも　さうではないだらうか。

○さゝら荻　小さい荻。

○生薬不死　死の薬。

○布師田河　土佐國土佐郡國府川

○鰻取りめせ　萬葉集卷十六「石麻呂に吾ものせ申す夏痩によしといふものぞむなぎ取りめせ」

○かつ／＼も　辛うじて。

○かゞよひ出でし云々　萬葉集卷六「見渡せは近きものから磯がくりかゞよふ玉を取らずはやまじ」かゞよひは輝く意。

○沖つ海石　萬葉集卷六「淡路の野島のあまのわたの底沖つ海石にあはび珠云々」海中の石。

○石著かむ　沈まう。

○名次山云々　萬葉集卷三「吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原何時か示さむ」名次山は攝津國武庫郡。

○牀の隔て　牀のむしろ。

○うらぶれて　愁はしく。

○無用に云々　古今集秋上躬恒「かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらに寐て明かさむ人さへぞうき」

○巢撥き云々　巢をかける。

○月累ね云々　萬葉集卷五「我が身の上に病をら加へてあれば……年長く病みしわたれば月累ね憂へさまよひ云々。」

○おほろかに　並一通りに。

○吾をな憑み　吾を憑む勿れ。

○天地の神云々　萬葉集卷四「天地の神の理なくはこそわが思ふ君にあはず死にせめ」

離り居て長戀せずは吾妹子が下に結べる紐の緒にもが

更報二娘子歌一

立ちて居て戀ふとし聞けば大海の荒磯の浪のありぞかねつる

百重にも隔りて妹はありとへど一夜も夢に見えぬ夜ぞなき

更贈二娘子一歌

雲に飛ぶ藥も如かじ愛しき妹が笑顔を唯一目見ば

病める身に戀の奴の責め來るは重き馬荷に上荷打つとか

爲二九月十三夜月宴一、應二女公子命一、豫詠二里月之題一

妹を置きて吾のみや見む大原の古りにし里に照れる月夜を

九月十三夜、伏レ枕、對二明光一、嘆慨作歌

立ちても見居つゝも見べき此の清きあたら月夜を寢てや明かさむ

題二扇山水畫一

山川のさやけき見つゝ斯くしこそ年に偲ばむ今も見るごと

題二扇鷄畫一　應二門田蘇作需一

あけ初めし天の磐屋戸思ほえて長鳴鳥ぞ今も貴き

文政十一年戊子、爲二八月十五夜月宴一、應二女公子命一、豫詠二深山見レ月之

---

○離れ居て云々　萬葉集卷五「おくれ居て長戀せずは御園生の梅の花にもならましものを」
○長戀せずは　長戀せんよりは。
○紐の緒にもが　紐の緒にでもなりたい。
○立ちて居て　立つても坐つてもいつでも。頭の緣語。
○ありぞかねつる　我慢がし切れない。
○ありとへど　ありと雖も。
○一夜も云々　古今集卷十八貫之「思ひやる越の白山知らねども一夜も夢に越えぬ夜ぞなき」
○雲に飛ぶ藥　飮めば空を翔り得るといふ藥。列仙傳二に詳し。七一頁苔が盛りの歌の引歌參照。
○重き馬荷に云々　萬葉集卷五「重き馬荷に上荷うつといふことのごと老いにてある我が身の上に病をら云々」。上荷打つは更に上積の荷をつける意。
○妹を置きて云々　萬葉集卷一一「大原の古りにし里に妹を置きて吾寐ねかねつ夢に見えこそ」
○大原　大和國高市郡。
○山川のさやけき見つゝ、萬葉集卷二〇「うつせみは數なき身なり山川のさやけき見つゝ道をたづねな」
○斯くしこそ云々　萬葉集卷一九「藤波の花の盛りに斯くしこそ浦漕ぎ見つゝ年に偲ばめ」
○年に　毎年。
○長鳴鳥　鷄。

題一

足曳の山の奥かにかくのごと幾秋經てか月を見つらむ

爲二九月十三夜月宴一、應二女公子命一、豫詠二花洛月之題一

山遠き京にしあれば隈も落ちず照れる月夜のあやにともしさ

十月晦、悲下傷門人原重勝死去上作歌

年月に思ひ積み來し古事を誰と共にか今は語らむ

十二月六日、門田藤作初七日忌、供レ花歌

眞袖もて涙拭ひて思はぬに今日の供養に折れる花これ

文政十二年己丑正月元日作歌

三十餘り九つに今日なりにけり花になぞへて見む人もがも

二月七日、賀二羽山甚左衛門六十齢一

朝にけに向ふ羽山の山松の常石堅石に榮えませ君

二月、或娘子臨二旅行一、寄二來鏡一之時作贈歌

逢ふまでの形見に見よとおこせたる手馴の鏡手ゆかれめやも

贈二麻袋同娘子一之時副歌

東路の道の八十隈隈も落ちず手向よくして早歸りませ

---

○山遠き云々　萬葉集卷十「山遠き京にしあればさを鹿の妻呼ぶ聲は乏しくもあるか」
○隈も落ちず　隅々までも殘らず
○眞袖　兩袖。萬葉集卷二十「眞袖もち涙を拭ひ云々。」
○花になぞへて云々　所謂「三十九ぢやもの花ぢやもの」であるからである。
○羽山　土佐國高岡郡新莊川上流の山。
○常石堅石に　永久に。新古今集賀康資王母「萬代を松の尾山の陰しげみ君をぞ祈る常石堅石に」
○手ゆかれめやも　手から離されようか。
○手向よくして　道中の安全を祈る爲に、途中の道の神に充分幣を手向けて。

二月十七日、女公子往二江戶一之時、贈二供奉女郎三野子一歌

掻彈くや玉の緒琴の事もなく道の長道を仕へたまはね

三野子嘗善二箏曲一、故以二緒琴一爲二歌詞一

題二鹿鳴葉落之圖一

秋山しもみぢ且散る左牡鹿の鳴くなる心木の葉知りけむ

題二水邊山振之圖一

河上に咲ける山振常やまず見れど飽くべき花にあらなくに

題二龜鶴一

常しへに龜ぞ遊べるこれやこの名に負ふ常世の鳥にしあらし

九月十三日夜、爲二月宴一、應二佐川家內君命一、詠二月萬秋友之題一

萬世の五百長秋に九月の今夜の月夜見れどあかめや

壽二福岡家母君六十齡一之時、應レ需詠二寄レ梅祝之題一

御園生の若木の梅は萬世の插頭のためと植ゑてけらずや

文政十三年正月元日

昨日まで面なかりける白髮も身にふさはしく成りぞしにける

壽二本山鄉高橋某母七十年算一

○掻彈くや云々　日本書紀「からぬをしほに燒きしがあまり琴につくり掻彈くや云々」萬葉集卷七「膝にふす玉の小琴の事なくはいとこゝばくにわが戀ひめやも」

○事もなく　無事に。

○秋山し　「し」は指示の意の助詞

○もみぢ且つ散る　紅葉する傍から散る。

○鳴くなる心云々　萬葉集卷七「天雲の棚引く山にこもりたる吾が下心木の葉知るらむ」

○常やまず　始終。

○これやこの　これこそあの。萬葉集十五「これやこの名に負ふ鳴門のうづ潮に玉藻刈るとふ海少女ども」

○名に負ふ常世の鳥　蓬萊山は龜山といふ。

○面なかりける　恥かしかつた。

栲紲の長き壽は向夏山に棚びく雲の絶ゆる日あらめや

應二岡宗泰純需一、題二著紀子舊跡古瓦一

淑人の居りし御館の古を見つゝ慕べと殘る形見ぞ

應二羽山某需一、題二牡丹、蒲公草、蘭畫一

按二倭名抄一、牡丹倭名布加美久佐、蒲公草倭名不知奈、而蘭獨無二雅名一也、此則今人所レ賞如二麥門冬一者、而世俗以二字音一呼レ之所以、後世渡二來皇朝一也、而倭名抄蘭倭名布知波賀萬、此菊類之蘭、而與二此畫者一非二同類一也明矣。

底深み草さへ生ひぬ淵なれば影見る花の何に障らむ

爲レ奉二納幡多郡不破八幡宮一、詠二社頭花一

皇神のうしはく杜の櫻花うべ誇らしく匂ひてありけり

壽二門田信順母六十齡一、詠二寄レ竹祝一

御園生のいさゝ群竹いさゝめに壽がめやも其の長人を

賀二服部良能六十年算一、詠二寄レ松祝一

御園生に立てる小松と吾が背子と榮えいまさむ年の知らなく

八月十五日、爲二月宴一、應二熊彌太君命一、詠二山月入レ簾之題一

○栲紲の「長き」の枕詞。萬葉集卷四「栲紲の永き命をほしけくは絕えずて人を見まほしみこそ」

○棚びく雲の　棚びく雲の如く。萬葉集卷三「大君は千年にまさむ白雲も三船の山に絕ゆる日あらめや」

○紀子舊跡　紀貫之の館址。高知市の東方國府村大字比江。

○見つゝ慕べ云々　萬葉集卷七「池の邊の小槻が下の篠な刈りそねそれをだに君が形見に見つゝ偲はむ」

○底深み云々　底ふかみくささへ生ひぬふちなれば影見る花の何にさやらん。

○うしはく　領する。

○うべ　道理で。

○いさゝ群竹　葉の茂つた群竹。

○いさゝめに　假初に。

○熊彌太君　山内豐策の子　豐榮の幼名。

○玉垂の小簾の垂簾　萬葉集卷十一「玉垂の小簾の垂簾をゆきがちに寐はなさずとも君は通はせ」
○かゝげ敢へなくに　揚げおほせないのに。
○福岡家　土佐藩の家老。
○伏超　土佐國安藝郡にある坂でその山の端は海に臨む。萬葉集卷七「伏超ゆ行かましものをひまもるにうちぬらされぬ浪よまずして」
○浪は數みてむ　浪を數へることが出來よう。月光の明かなことをいふ。
○橘大枝　本姓は楠瀨。
○高圓の山云々　萬葉集卷八「春日野に時雨降る見ゆ明日よりは黄葉かざさむ高圓の山」
○野の上の宮　聖武帝の離宮なる高圓山尾上宮。
○九月の云々　萬葉集卷八「もみぢ葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今宵は明けずもあらぬか」
○明けずもあらぬか　明けないであれかし。
○名にし負ひて　金丁子といふ名にふさはしく。
○韓衣　韓は美稱。
○讀まめども　數へることは出來るが。

山の端ゆ月はゆつりぬ玉垂の小簾の垂簾もかゝげ敢へなくに

同時、應㆓福岡家需㆒、詠㆓名所月之題㆒

伏超ゆ行かずともよしさやに照る今夜の月に浪は數みてむ

橘大枝所㆑誂詠㆓初春海㆒

磯の上に初鶯の啼く聲を聞きて行かむぞ舟しばしとめ

八月十五日夜、爲㆓月宴㆒應㆓東殿君命㆒、詠㆓秋月幽㆑笛之題㆒

秋風に笛の音きこゆ宮人の月見がてりに遊びすらしも

爲㆓九月十三日夜月宴㆒、應㆓東殿君命㆒、詠㆘月照㆓紅葉㆒之題㆖

高圓の山のもみぢ葉かざせとか野の上の宮に月の照るらむ

同時應㆓熊彌太君命㆒、詠㆓九月十三夜之題㆒、

九月の今宵の月を恫怜み遊び飲む夜の明けずもあらぬか

十月十日應㆓東殿君命㆒、詠㆓菊名金丁子㆒

名にし負ひて黄金の色に咲く菊の香さへ奇しく唐めきにけり

二上氏母君、今茲年算既九十矣。見㆑示㆓其縫工㆒、宛如㆓壯女㆒、誠知㆓健實㆒、因而發㆑感、聊述㆓拙意㆒云

韓衣縫へる針目は讀まめども千代の算は如何に數むべき

○鷄がなく　「あづま」の枕詞。萬葉集卷十八「鷄がなく東を指してふさへしに行かむと思へどよしもさねなし」
○覓めぬとも　尋ねても。
○過ぎにし人　亡くなつた人。
○思ひしに云々　萬葉集卷十九「ともにあらむと思ひしに心違ひぬ言はむすべ云々。」
○厄病　せむしの病。
○くがねかもしづくと見しは　黄金が沈んで居るかと見たのは。萬葉集卷十九「藤波の影なる海の底清みしづく石をも珠とぞ吾見る」
○白髮生ふる事云々　萬葉集卷四「白髮生ふる事は思はず涙をはかにもかくにももとめて行かむ」
○尾崎　岡の突き出た所。

爲二九月十三日夜月宴一、應二福岡家需一、詠二月前松風之題一
吾が背子を松吹く風の寒くとも屋の戸は閉さじ月の照る夜を

哀二傷葛目朝風一歌
歸り來む月日よみつゝ無用に年の四とせを吾が待ち戀ひし
鷄がなく東方を指して覓めぬとも過ぎにし人を往き覓めめやも
思ひしに心違ひぬ誰にかも今は語らむあたら古言

右件　葛目朝風者、往歳從二供嗣君一、留二在于江戸一四歳　于レ玆一時忽獲二厄病一、頓身故矣、仍遙聞レ喪不レ堪二悲傷之情一、聊述二小什一云爾、實文政十三年庚寅十月六日死去。

題二水邊山振畫一
くがねかもしづくと見しは山振の影なる水の底にぞありける

天保二年辛卯正月元日試筆、于レ時年四十一
白髮生ふる事は思はず人なみに今年も春を待ち歡びつ

賀二尾崎直壽六十算一、詠二寄レ松祝之題一。斯人家二葛岡神社傍一
葛岡の杜の尾崎に松植ゑて今日より千代を神に禱らむ

壽二島崎利鄕翁八十算一。嘗少時、從レ翁授二謠曲一因思二當昔一、意及レ是

○吉壽　めでたい事。
○走出　門口。
○きこしもてをせ　きこしめせと同じ。召上れの意。
○殖竹の云々　六九頁殖竹の歌の引歌參照。
○とよみ　響き渡り。
○打擧げて　聲を張りあげて。
○假山　築山。
○島山云々　四五頁萬代にの歌の引歌參照。
○殖木橘　萬葉集卷十九「ほとゝぎすわが宿の殖木橘花に散る云云」
○塵泥の云々　古今集序「高き山も麓の塵ひぢよりなりて天雲たなびくまで生ひのぼれる如く云々。」
○奈留山　出來上る意味のなるを掛く。
○酒みづき榮ゆる　萬葉集卷十九「酒みづき榮ゆる今日のあやに尊さ」酒に醉ひつぶれてよい機嫌になる。
○くしの神　酒の神。少彥名命が酒を造り初めたといふ。日本書紀「このみきは我がみきならずくしの神常世にいます石たたす少名御神の……まつこしみきぞ」
○愛の盛　高年を賞せられたこのめでたい時の意。

---

千年祝ぐ吉壽とよませ謡ひしは今日の宴の爲にしありけり

賀二醫家村井卓純六十算一

走出の御井を淸けみ萬代を生藥煮てきこしもてをせ

賀二前田勇作六十算一、題二竹畫一

殖竹の本さへとよみ打擧げて言祝ぐ千代の限り知らずも

重詠二夏祝之題一。斯人性喜レ玩二假山一、因意及レ之、

ほとゝぎす千代に來鳴かむ島山の殖木橘いまさかりなり

賀二宗石盈承四十年算一之時、配題得二奈留山一　香美郡被山郷山名也

塵泥の積り〳〵て奈留山の雲につくまで榮えませ君

應二池田倉主需一、詠レ酒

酒みづき榮ゆる每にくしの神少御神の御靈し思ほゆ

鮫屋彌助者、及二八十一之時、賀下被レ賞二高年一賜上レ物

八千歲に長らへまして今日のごと愛の盛りに八たび逢ひませ

鶯聞和琴

吾が兄子が搔彈く琴に競ひもて來鳴く鶯聞けど飽き足らず

賀二室岡山下人、長尾鶴彦四十算一

皇神にうけひて植ゑし皇國の千代松の木の限り知らずも

藤井眞澄所誂、詠春苑

百千鳥囀るなべに梅柳錦を張れる春の園かも

題牧童畫

己が騎る牛の歩みのゆくらかに吹きみ吹かずも謠ふ郷曲

八月五日、往ニ于安藝郡羽根浦一之時、或娘子貺ニ縮帶一聊發ニ歡情一、贈ニ娘子一歌

めぐり逢はむしるしに縫ひておこせたる錦の御帶地に置かめやも

同時、上道過ニ訪久萬村一醫生村岡直道贈歌

遺したる親と妻子とに萬代を生藥煎て賜ばれ吾が背子

同六日、越ニ安藝郡大山一之時作

秋風の布久爲の里に妹を置きて安藝の大山越えがてぬかも

同七日越ニ羽根中山一之時作

大鳥の羽根の中山越え來れば昔の人の面影に見ゆ

同十五日夜、羽根灘、仰見ニ月光一作

遙々に南の海路照りわたる月の光を今夜見るかも

○千代松の木云々　萬葉集巻六「茂岡に神さび立ちて榮えたる千代松の木の年の知らなく」
○百千鳥　色々の小鳥。

○ゆくらかに　ゆら〳〵と。
○吹きみ　笛を吹いたり。

○めぐり逢はむしるし　帶は結べは兩端が逢ふからである。

○萬代を生藥　萬年までも生きる不死の藥。

○秋風の云々　萬葉集巻二「ふすまぢを引手の山に妹をおきて山道を行けば生けりともなし」秋風の「吹く」を掛く。
○大鳥の云々　土佐日記の正月十一日の文によつたものでこゝでは昔の人は貫之を指す。大鳥のは羽の枕詞。

同時、思二故郷人一作

名にし負はば急ぎ飛び行きて羽根の濤に今夜は妹を率て來なましを

九月四日、家婦折二取黄葉一、寄來之時、聊述レ懷作

家人に戀ふる心の通ひてや此のもみぢ葉を折りておこせり

同月十三夜、仰見二月光一作

大鳥の羽根のみ埼の沖つ浪八重折るが上に月照りにけり

家人に見せまく欲しも大鳥の羽根の浦回に照れる月夜を

同夜、檜垣薩守訪二來於旅館一、且贈レ歌曰

千鳥鳴く羽根の河原ゆ足ぬれて君を思ふと直渡り來ぬ

卽答曰

千鳥鳴く羽根の河浪しく／＼に戀ひつゝ待ちし甲斐はありけり

又歌曰

いぶかりし心も今夜打晴れて思ふ人どち月見る吾は

月見ると君が來ませし驗ありて雲吹き拂ふ羽根の浦風

爲二門人所一レ誂、詠下春日登二國見嶺一之題上

國見山かすみ霧合ひて遙々に海原も見ゆ國の秀も見ゆ

○名にし負はば　羽根といふ名にふさはしくば。

○家人に云々　妻を思ふ我が心が妻に通じたのであらうか。

○八重折る云々　萬葉集卷七「今日かも奥つ玉藻は白波の八重折るが上に亂れてあらむ」八重折るは波が幾重にも押寄せて崩れる意。

○しく／＼に　頻りに。

○國の秀も見ゆ　古事記「知婆の葛野を見ればもゝちだる家庭も見ゆ國の秀も見ゆ」秀は四方山で圍まれた廣い所。

九月二十八日、贈㆓檜垣蔭守㆒

露霜に山の木の葉も色づきぬかざさむといひて來む人もがも

十月朔、與㆓友人㆒遊㆓羽根山㆒、翫㆓紅葉㆒

十月しぐれに競ふもみぢ葉を思ふ人どち插頭しつるかも

同時、檜垣蔭守攀㆓折紅葉㆒歌曰

白砂の衣の袖も照るまでに紅葉かざしつ見ぬ人のため

仍和㆑之曰

思ふ子の頭刺のためと吾が背子が折れる紅葉の匂ひはもあなに

翌旦贈㆓檜垣蔭守㆒曰

足曳の山さへ照りし山づとを思ふ其の子の如何に愛できや

十月六日、贈㆓檜垣蔭守㆒

石椅踏み羽根の河浪寒くとも直渉り來ぬ待ちつゝ居らむ

蔭守和歌

石椅踏み羽根の河浪寒くとも待つとし聞かば何か厭はむ

同十日、贈㆓檜垣蔭守㆒

羽根山の尾の上の黄葉折りかざし遊びし事を忘れて思へや

○露霜に云々　萬葉集卷八「露霜にあへるもみぢを手折り來て妹にかざしつ後は散るとも」

○思ふ子の云々　萬葉集卷八「をとめ等がかざしの爲にみやびをがかづらの爲としきませる國のはてに咲きにける櫻の花の匂はもあなに。」

○あなに　歎辭。

○足曳の山云々　萬葉集卷四「足曳の山さへ光り咲く花の散りにし如き我が大君かも」

○山づと　紅葉を指す。

○石椅　川の中に石をならべて道としたもの。

○直渉り來ね　萬葉集卷十「天の河瀨々に白波高けども直渉り來ぬ待てば苦しみ」

○忘れて思へや　忘れむやの意。

自二十月二十五日一至二同二十七日一、奉下爲鎭二護國家一、令下僧徒、於二金剛頂寺一、轉上二讀大般若經一、依下差二檢其事一使上、便眺二海上一、聊述二拙懷一

最御崎庭靜けみと室戸の海競ひ漕ぎ出る海人の釣舟

十月二十七日、在二于羽根旅館一、遙聞二祖母喪一、悲傷作

羽根灣しまこと名に負はば飛び往きて唯一目見て別れせましを

事竟へてかへり來るまで眞幸くて百世まさむといひし君はも

十二月二十日、檜垣薩守贈來歌

春立たば吾が兄の君に別るべみ年の此方に千歳も經かも

和歌

千代もがと君が聞かすを如何にせば今來む春を避きつゝ居らむ

天保三年壬辰正月元日、在二羽根旅館一作

花咲みににふぶに咲みて眞氣長く子等に逢ふべき春は來にけり

爲二八月十五日夜月宴一、應二大學君命一、詠二野露映レ月之題一

こち〱の野のそき落ちず照る月に露をも玉と誰か見ざらむ

爲二九月十三日夜月宴一、應二同君命一、詠二松上月之題一

向嶺の君松の葉にさ夜ふけてゆつろふ月は見れど足らずけり

○金剛頂寺　土佐國室戸町にある

○最御崎　室戸崎。

○庭靜けみ云々　萬葉集卷十二「庭清み沖へ漕ぎ出る海士舟のとる梶間なき戀もするかも」庭は靜かな海上。

○羽根灣し云々　土佐日記「まことにて名に聞くところ羽根ならば飛ぶがごとくに都へもがな」

○別るべみ　別るべきによつて。

○花咲みに云々　萬葉集卷十八「夏の野のさゆりの花の花咲みににふぶに咲みて云々。」にふみに咲みてはにこ〱笑を含んで。

○大學君　山内豐策。

○こち〱　遠近。

○野のそき落ちず　野の遠きはてまでも殘らず。

○露をも玉云々　萬葉集卷十「白露を玉になしたる九月の在明の月夜見れは飽かぬかも」

○君松の葉　君を待つ意を掛く。

○ゆつろふ月　移る月。

同夜、田野灣、仰見二月光一作

ゆたに思ふ旅の憂けくをなぐさめつ磯の埼々照る月を見て

この夜らの月夜を清けみ綱手引く奈半の泊に船のよる見ゆ

去年も見つ來む年も見む大鳥の羽根の御埼に照れる月夜を

十月二十日、家婦折二呼黃葉一寄來之時、聊述レ懷

はしきやし此のもみぢ葉に家妹が咲顏の匂ひたぐひけらずや

十一月十三日、田野旅館、遥聞二中山巖水兄喪一、哀傷作歌　賓依二宮地大人之需一

月立たば早くかへりて相見つゝ語りさけむと思ひしものを

題不盡山畫

不盡の嶺は山の大王うべしこそ神の御代より高く貴き

楠瀬大枝所レ誂詠下曳二菖蒲一之題上

紅の赤裳ひづちて手もすまに菖蒲曳く兒は誰が思妻

爲レ奉二納某社一詠レ蓮

はちす葉に渟れる露を青玉の水江の玉と打見つるかも

楠瀬大枝所レ誂、詠下松添二榮色一之題上

零り置きしはだれも消にて一つ松一つ綠に榮えゆく見ゆ

○ゆたに思ふ　長閑に思ふ。
○奈半の泊　土佐國奈半利町。綱を掛く。
○咲顏の匂ひ　笑顏の美しさ。
○田野灣　土佐國安藝郡奈半利河の河口。
○中山巖水　通稱十平、土佐國編年紀、土佐軍記の著者。
○月立たば　その翌月ともならば。
○語りさけむ　語つてうさを慰める。
○紅の赤裳云々　萬葉集卷九「吾妹兒が赤裳ひづちて植ゑし田を刈りてをさめむ倉無の濱」
○はちす葉に云々　萬葉集卷十六「久方の雨も降らぬかはちす葉にたまれる水の玉に似たる見む」
○はだれ　斑雪。沫雪。
○消にて　消えにての略。
○一つ松　一本松。萬葉集卷六「一つ松幾代か經ぬる吹く風の聲の澄めるは年深みかも」

爲レ奉ニ納栃山郷、公士方大明神一岡宗成安所レ誂、詠ニ初花一

咲き初めし山櫻花手折りきて神の御前に先づこそ手向けむ

壽ニ幡多郡森澤村里正安田竝穂母六十年算一

坂越えて伊豆多の神社に手向けせむ千代にと禱る人の祖の爲

遊ニ覽名羽鄕琵琶瀧一作

昔誰が琵琶うつ音にたぐへつゝ此のたぎつ瀬の名に負はせけむ

天保四年癸巳正月元日試筆

童等が待ち歡べる春ごとに身の老いらくの來ぬものにがも

食時三恩歌

あな貴と君が賜へる御寶は神の御靈ぞ祖のめぐみぞ

應ニ橋大枝之需一、詠ニ遠村梅之題一

遠方の里のみなかの梅の花今さける見ゆ往きて手折らむ

在ニ安藝郡和食官舍一之時、偶得レ閒、到ニ八流山千東橋古跡一千東橋出ニ于印本土佐軍記一、今成ニ一圓田地一、後人號ニ其地一以ニ字音一呼レ之、如ニ善俗一焉、里人云、往昔、此地有ニ大沼一、造レ橋往來也、先年發ニ沼底一者、得ニ橋柱殘杭一云、仍作歌曰

---

○千代にと云々　伊勢物語「世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もと祈る人の子の爲」

○身の老いらく云々　我が身の老いることが來なければよい。

○あな貴と　あゝ尊し。

○里のみなか云々　萬葉集卷十四「ま遠くの野にもあはなむ心なく里のみなかに逢へるせなかも」みなかは眞中。

千束ちふ名のみ殘りて八束穗の靡く田の面となりにけるかも

正述二心緒一

野干玉の晝夜わかず思へれど逢はずてあるは人目多みこそ

狛劍和食の濱による浪の竝みにし思ふと思はすな妹

吾妹子を鬱にし思はば斯くばかり戀ひつゝ在らむや人の子故に

斯くしつゝ後も逢はむと吾妹子がいはずありせば生きてあらめやも

吾妹子が咲まひのにほひ日間に懸りてもとな安寐しなさね

初めより逢はずありせば斯くばかり心盡して吾が思はめや

夕されば逢はむと妹はきこせども人ごと繁み如何にか吾がせむ

人ごとはしゑや言痛く譏すともそれに障りて逢はざらめやも

夕されば逢はむ逢はじを告げ來なむ妹が使を待ちぞかねつる

かくのみに甚くはわびじ後遂に逢はじと妹がいはばこそあらめ

旅にして逢ひ見し妹を月立たば家にかへりて後戀ひむかも

かくのみに戀ひむものとも知らずして悔しき妹を相見そめつる

別れなば又逢ふことぞ難からむ目な乏しみそ今しばしだに

石瀨ふみ夜道な行きと人はいへど待つらむ妹を思ひかねつも

---

○八束穗　千束の千と八束穗の八とを相對せしめて荒蕪の意を示す。
○晝夜わかず　晝夜を分たず始終。
○人目多みこそ　萬葉集十一「息の緒に吾は思へど人目多みこそ吹く風にあらばしば〳〵逢ふべきものを」
○狛劍　「わ」の枕詞。
○よる浪の云々　萬葉集卷五「若鮎釣るまつらの河の河波の並にし思はば我戀ひめやも」
○並にし思ふこと　普通一通りに慕ふこと。
○鬱にし思はば　心惱ましく思はば。
○人の子故に　子故にの
○斯くしつゝ云々　萬葉集卷十二「戀ひ〳〵て後も逢はむと慰もる心しなくは生きてあらめやも」
○日間に云々　萬葉集卷五「瓜食めは子供思ほゆ栗食めはましてしのはゆいづくより來りし者ぞまなかひにもとなかゝりて安寐しなさぬ」　やたらに眼前にちらついて安眠が出來ない。
○しゑや　歎辭。
○言痛く　仰々しく。
○かくのみに甚くは云々　萬葉集卷十二「我故に甚くなわびそ後遂に逢はじといひし事もあらなくに」
○いはこそあらめ　言ふならば兎に角、言ひはしない。
○目な乏しみそ　萬葉集卷十二「今だにも目な乏しみそ逢ひ見ずて戀ひむ年月久しけまくに」　顏を見せ給への意。
○石瀨ふみ云々　萬葉集卷十二「石根踏み夜道は行かじ思へども妹によりては偲びかねつも」

新枕まきそめてより吾妹子に晝夜いはず戀ひわたるかも

爲二八月十五日夜月宴一、應二大學君命一、詠二終夜翫レ月之題一

この夜らの清き月夜を居り明かし見つゝ遊べど飽き足らなくに

八月十五日夜、月光清明、和食濱、遥見二羽根崎一作

璞の三年の秋を大鳥の羽根の御崎に照れる月見つ

爲二九月十三日夜月宴一、應二大學君命一、詠二湖上月之題一

新治の筑波の山ゆ雨霽れて鳥羽の淡海に月照れる見ゆ

同夜、和食濱、仰見二月光一作

大海の埼々隈も落ちず照れる今夜の月のさやけさ

秋日和食濱作

朝凪に網引すとならし海人の網子呼ばふ聲こちごち聞ゆ

わたつみの神をいはひて引く網に海幸多くあらざらめやも

引く網に幸やあるらむ呼び立てて海人さわぐ浦もとゞろに

天保五年甲午正月元日試筆

よそのみに思ひてありしを四十餘り四つちふ歳の春は來にけり

二月八日、幡多郡上川口安光敬八家作

○新枕云々　萬葉集卷十一「若草の新手枕をまきそめて夜を隔てむにくくあらなくに」

○新治の云々　萬葉集卷九「筑波嶺に登りて見れば……新治の鳥羽の淡海も秋風に白浪立ちぬ云々。」新治は郡名。鳥羽の淡海は常陸風土記「郡西十里在二騰波江一長二千九百歩。廣一千五百歩。」とある。

○網引すと云々　萬葉集卷二「大宮の内まで聞ゆ網引すと網子とゝのふる海人の呼び聲」網子は網曳く者。

○わたつみの神云々　萬葉集卷七「大海の波はかしこし然れども神をいはひて船出せば如何に」

○いはひて　忌み愼んで祭り。

○よそのみに　四十に關係を持たす。

昔見し小櫛の山は神さびて小高く繁くなりまさりけり

山高み瀬の音さやけみ旅衣たたむたどきも思ほえぬかも

同十一、窪津浦作

勇細鯨寄り來と大海の磯もとゞろに船ぞとよめる

わたつみの海幸多みうべしこそ海人の子すらもゑみ榮えけり

わたつみの神の惠みは漁する海人の子どももあぶさはずけり

同十六日、送下奥宮氏、自二窪津一歸上二津呂一

榜ぎ別れ君しいまさば人皆は濱に竝み居て戀ひや暮さむ

同二十一日、家妻來書曰、比日此地櫻花滿開、仍聊述レ思

咲き出ぬと吾に告げ來し家妹と櫻とふたつ面影に見ゆ

三月十日朝、會同志來、語二旅館一曰、津呂山櫻滿開　旁午請欲下共二行驅一盡上二賞遊一、予レ時、俄頃天陰雨降、不レ堪レ歩、徒述二遐想之意一作歌

今日ゆきてかざさぬい間に櫻花この春雨にうつろはむかも

かき曇り雨し降らずば草枕旅の憂けくを慰めましを

應二橘大枝之需一、詠二風光日新之題一

梅の花開きぬる見ればいや日けにうべ吹く風ものどにしありけり

---

○山高み瀬の音さやけみ　萬葉集卷六「河はやみ瀬の音ぞ清き神さびて云々。」
○旅衣　「たつ」の枕詞。
○たどき　たづき。方法。
○窪津　土佐國幡多郡の南方。
○勇細　鯨の枕詞。
○船ぞとよめる　船人が大騒をする。
○ゑみ榮えけり　嘻々とうれしがる。
○あぶさはずけり　見捨てない。
○津名　窪津の南方。
○かざさぬい間　「い」は助詞。
○草枕云々　萬葉集卷九「草枕旅の憂けくをなぐさもることもあらむと云々。」草枕は旅の枕詞。
○いや日けに　日々愈まさりて。
○のどに　のどかに。

四月十七日、聞二霍公鳥喧一作

大手祭小手祭山の山彦の相とよむまで鳴くほとゝぎす

池蓮

花はちす開きぬる池の島山のしば〳〵見とも飽きたらめやも

八月十五日夜、維津、遙見二布埼一作

妹名根し曝す布埼いちじろくたゆたふ浪に照る月夜かも

十一月三日朝、見レ雪作

吾妹子が使來むかと門に出でて吾が松の樹にみ雪降りたり

十一月還二幡多郡一之後、贈二鰒貝子某氏一副歌

幡多の海奥つ島山奥まへて思はざりせば潛きこめやも

天保六年乙未正月元日作

里長に課役を徵られし昨日にも似ぬ今朝の面持

正月、應二橘大枝需一、詠二早春柳之題一

鶯の今朝啼くなべに出でてみれば門の青柳萌えそめにけり

題二梅花畫一

鶯の待ちも歡べる春の日にうべも咲きたる梅が花かも

○山彦の云々　萬葉集卷八「山彦の相とよむまで妻戀に鹿鳴く山邊にひとりのみして」

○花はちす云々　萬葉集卷二十「君が家の池の白波礒に寄せしば〳〵見とも飽かむ君かも」

○妹名根し曝す　妹が曝す意で布の序詞。

○たゆたふ浪　搖きたゞよふ波。

○幡多の海云々　萬葉集卷十一「淡海の海奥つ島山奥まへてわが思ふ妹が事のしげけく」奥まへては奥まけてと同じで、奥深く又は心を深めこの意。

○潛きこめやも　水を潛つては來ない。

○課役　租稅と勞役。

○春の日に云々　萬葉集卷五「春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふさよいも寐なくに」

愛レ菊待レ客　應二森下氏需一

希將見人さへ待てる菊の花色さへ香さへなつかしき屋戸

四月二十一日朝、始聞二霍公鳥一作　四月十一日立夏節ニ應ル十一日目ニ鳴ク

居り明し待ちしもしるく里とよめ今朝來鳴きそむ山ほとゝぎす

題二鯉魚登瀧畫一　應二岩鄉氏一

み空ゆく雲につくとも水上を見ずてやむべき吾にあらなくに

題二梅花畫一　同上

繩延へて守りつゝ居らむ鶯の心相思ふ梅咲きにけり

同前　應二宮崎八矛需一

うつろはむ時はなくとも人間あけて目離れむと思ふ花にあらなくに

爲二八月十五日夜月宴一、應二大學君命一、詠二月不レ擇レ處之題一

八重葎おほへる庭に置く露を珠になしたる此の月夜かも

爲二九月十三日夜月宴一、應二大學君命一、詠二池上翫レ月之題一

この夜らの月のためとぞ掘りけらし底もなぎさも淸隅の池

九月、應二君公命一、詠二菊三首一

菊名小島崎

○里とよめ　里を鳴き響かし。

○繩延へて守りつゝ居らむ　大切に守護する意。

○鶯の心相思ふ　萬葉集卷十「さを鹿の心相思ふ秋萩の時雨の降るに散らまく惜しも」

○人間あけて云々　古今集春貫之「暮るゝと明くと目離れぬものを梅の花いつの人間にうつろひぬらむ」人間は人の見ない間。

○八重葎云々　萬葉集卷十一「思ふ人來むと知りせば八重葎おほへる庭に珠しかましを」

○淸隅の池　大和國添上郡。淸き意を掛く。萬葉集卷十三「吾心淸隅の池の池の底吾は偲はず云々。」

山吹の色にまさりて身にぞしむ小島の崎の名には立つとも

　菊名霞山

色も香も隔てぬものを霞山何故かかる名には立つらむ

　菊名鞍馬山

鞍馬とは聞くものからに其の山の名に立てる春の花もしかじな

　十月五日、實阿上人還二于伊豫國松山一之時、作贈歌

松山の待つとし聞きて急ぐとも吾言とはむ暫し待て君

　岩井廣輔往二于安田一之時、作贈歌

春されば安田の河の河もせにさばしる鮎をとりて來まさね

　同八日夜、柳原家餞二安田浦宰岩井廣輔一之時、儲作二朝野之題一

朝立ちて旅行く人を松陰に羣れ居て鶴の聲さわぐなり

　二十四日夜、北原敏鎌家宿題寄レ衣戀

如何ならむ衣とり著て裝ひつゝ吾思ふ子等に老隱すべき

　十一月十日朝見レ雪作

朝戸出の庭もはだれに降りしきぬ昨夜の夜牀はうべ寒えにけり

吾畔ける麥の若葉埋れて畯白妙に雪ぞ降りたる

○小島の崎　橘の小島崎。山城國宇治郡。山吹の名所。

○色も香も隔てぬものを　菊の色も香も空を隔てることは出來ないからいふ。

○其の山の名に立て云々　鞍馬山は櫻の名所であるからいふ。

○松山の待つとし　新古今集雜二條院讃岐「ながらへてなほ君が代を松山の待つとせし間に年ぞ經にける」

○河もせに　河も狹に。河も一杯に。

○さばしる　「さ」は接頭語。

○朝立ちて旅行く　古今集離別讀人不知「すがる鳴く秋の萩原朝たちて旅行く人をいつとか待たむ」

○松陰に云々　旅の行手を壽ぐ意を含む。

○如何ならむ云々　古今集春東三條大臣「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」

○朝戸出云々　萬葉集卷十一「夜を寒み朝戸を開き出でて見れば庭もはだらにみ雪降りたり」朝戸出は朝外に出ること。

○畯　畑。

○八桑枝　叢、木の生え榮えること。
○櫻花散ると云々　古今集紀貫之「今年より春知り初むる櫻花散るといふことは習はざらなむ」
○うづなひて　承諾して。
○殖竹の本云々　八〇頁殖竹の項參照。
○生れかへる　還暦なればいふ
○水脈の　水脈の如く。
○童ともがも　童ともなりたい。
○老舌いでて　老人の齒がぬけて物いふ時に舌が出るのでいふ。萬葉集卷四「もゝとせに老舌出でてよゝむともわれは厭はじ戀はますとも」
○よゝみ　口つきのごもる。
○來啼かまく　來て啼くことを。

同十四日夜　宮崎八矛家會　宿題

子孫の八十の連屬は八桑枝の立榮ゆべき始めかも今日

題二櫻花盡一、應二島村雅風需一

誰人の言うづなひて櫻花散るといふことを習はざるらむ

寄レ竹祝、入交道齋七十賀

萬代を言祝ぐ聲は殖竹の本さへ枝さへとゞろ〳〵に

寄レ水祝、賀二市川秀碩六十算一

生れかへる今日の生湯に汲む水の水脈の絶えせず千代は經てまし

天保七年丙申元日作

正月たつ今日の此の日を指折り待ち歡べる童ともがも

同日齒脫、聊發レ嘆作

思ほえず老舌いでて初春の今日の吉詞ぞよゝみそめたる

同四日、始聞二鶯哢一作

吾家なる梅のはつ花開きしより待ちぞ暮しし汝が來啼かまく

同二十四日夜、會二宮崎八矛家一餞三北原敏鎌往二于江戸一之時、擧二折梅枝一作歌

今日のごと梅をかざして遊びなむ今來む春はとく歸り來ね

寄レ松祝、池上官助六十賀

常磐なる松が枝のみぞ長人の長くと結ぶ心知るらむ

三月二十一日朝、家婦告二霍公鳥喧一、發レ感述レ懷作　同二十二日應立夏四月節

ほとゝぎす啼くと告ぐれど一聲もいまだは聞かず耳か老いたる

同二十二日、聞二霍公鳥一詠

遙々に啼き過ぎわたるほとゝぎす誰が屋戸の間に草取らむとか

爲二八月十五日夜月宴一、應二大學君命一、詠下遊二浪速浦一看レ月之題上

月清み浦回めぐらば網引する難波壯子と人はいふらむ

贈二栗子於或娘子一之時、作歌

苛立ちて男々しく見えしそれすらも君によりては咲みて落ちけり

爲二九月十三日夜月宴一、應二大學君命一、詠下遊二須磨浦一看レ月之題上

月清み浦愛しみ須磨の浦人の鹽燒衣の來なれつゝ見む

家君賀二八十齡一之時、聊述二拙懷一　今年有レ故未レ誦

老人も童もいざや八千年の始めに今日は酒ほがひせむ

賀二清水氏母六十齡一

○今來む春　來春。

○屋戸の間　庭の中。
○草取らむとか　とまらうとするのか。

○苛立ちて男々しく見えし　栗の形狀をいふ。
○落ちけり　木から落ちる意と墮落する意とを掛く。
○須磨の浦人云々　萬葉集卷三「須磨の海人の鹽燒衣の藤衣間遠にしあれば未だ著なれず」須磨の浦人の鹽燒衣のは來なれの序詞。來なれは常に來て馴れ居る意で衣の緣語の著馴れを掛く。
○老人も童も　萬葉集卷十八「老人も女の童兒もしが云々」
○酒ほがひ　酒を飲んで祝ふ。

萬代に澄まむ清水の鏡には面變りせぬ影も見ゆらし

神祇　十一月十五日、會レ家之時、探レ題作歌

葛城の一言主の一言は懸けて禱らむ恐かれども

野雪　同上

物部川夕渡りきて香美野の今夜の雪になづみつるかも

名處戀　同上

みつれつゝ妹戀ひゆけば鏡河うつる影さへ面無かりけり

贈客　同日夜微雨降、因作二此歌詞一

わくらばに來ませる君を留めむに今夜の雨は重きて降らぬか

室津人齋藤文郁七十賀、題羽戸崎

ありつゝも五百世通はせ五百重浪來よる羽戸崎幸くいまして

弘岡人深瀬彦四郎母六十賀、無題。深瀬氏家鄰二新川一

新川川の瀬深みゆく水の流れて絶えず長人の齡は

天保八丁酉正月元日試筆

童等の人となるこそしかすがに歡ばしかる春にはありけれ

同六日、衞二城西門一之時、始聞レ鶯作

○葛城の一言主　雄略帝大和國葛城山に御登りの時顯はれた神。

○みつれつゝ　やつれつゝ。
○面無かりけり　恥かしい。

○わくらばに　たまさかに。
○重きて　頻りに。

○ありつゝも　生き長らへて。

○川の瀬云々　萬葉集卷七「かたかひの河の瀬淸く逝く水の絕ゆることなくあり通ひみむ」

○しかすがに　然しながら。

高阪の御垣の谿に今日來ずはまづ鳴く鳥の聲聞かましや

思二故人一聊述レ懐

春さらば摘みてたけむと妹が植ゑし垣津の青菜過ぎにけらずや

二月八日、到二手吉松氏一見二梅花一作歌。嘗其家號二鳥梅園一仍有二此歌詞一

古事を語らひがてり鳥梅園の梅の盛りを相見つるかも

折レ花供二故人靈前一聊述レ懐

歎きつゝ手折り來にけり翼なす在通ひつゝ見ませ吾妹子

見二櫻花一述レ懐

さくら花今を盛りににほへれど見すべき人の無きがさぶしさ

春さらば相かざさむと妹がいひし櫻の花は開きにけらずや

走出の一本櫻開きしより出でみる毎に無き人思ほゆ

妹と見し櫻の花は開きたれど何かもひとり手折りかざさむ

山崎古泉　山崎小景八架之一
宮地貞枝丈所レ誂

年深みもとの心は知らねども山崎の井を清みこそ汲め

賀二岩崎長門六十齡一作歌。長門高岡郡五社大明神神官也

○まづ鳴く鳥　萬葉集卷十「春されは先づ鳴く鳥の鶯のことさきたちし君をし待たむ」
○故人　澄雅の妻。
○春さらは云々　萬葉集卷二「妻もあらはとりてたげましさみの山野の上のうはぎ過ぎにけらずや」
○たけむ　食べむ。

○語らひがてり　語らひがてら。

○翼なす云々　萬葉集卷二「翼なすあり通ひつゝ見らめども人こそ知らね松は知るらむ」翼なすは通ふの枕詞。在り通ひは續いて通ふ意。

○もとの心云々　古今集雜讀人不知「古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ」

靈ちはふ五社の何時も〳〵眞幸くまして幣は手向けよ

見二前庭躑躅一述レ懷

四月五日平旦、始聞二霍公鳥喧一作　昨四日丁立夏節

吾屋前の庭の丹躑躅咲くも厭し共にかざしし人し無ければ

朝牀に聞けばなつかし紀の嶺の小嶺とよもし啼く霍公鳥

四月二十六日祖母君七回忌、母君三十三回忌。同會二行之時、聊述レ懷

眞玉つく遠近かねて古をいやしく〳〵に偲ぶ今日かも

孟蘭盆會之時、聊發二感傷一作歌

夢にだに思はずありき祭られむ人の御靈を祭るべしとは

題二鶴畫一

本牟智別御子の命の眞言問ひあぎとはしけむ古思ほゆ

爲二八月十五日夜月宴一、應二大學君命一、賦下遊二觀海亭一看レ月之題上

月もよし濱もさやけし秋さらば來入り參ゐ來む今も見るごと

喪レ妻明年八月十五日夜、天陰、仍聊述二拙懷一

照る月は照らずともよし照れれども見すべき人のありといはなくに

爲二九月十三夜月宴一、應二大學君命一、賦下遊二呑海亭一看レ月之題上

○靈ちはふ　人の靈に幸を與へて助ける。

○朝牀に聞けば　萬葉集卷十八「朝牀に聞けばはるけし射水河朝こぎしつゝうたふ船人」

○眞玉つく　をちの枕詞。萬葉集卷四「眞玉つくをちこちかねてことはいへど逢ひて後こそ悔いにはありといへ」

○遠近かねて　過去現在未來を通じて。

○祭られむ人　亡妻を指す。

○本牟智別　垂仁帝の御子で、御成長後鵠聲を聞かれて初めて片言をいはれたといふ。

○眞言問ひ　正しい物をいふ。

○あぎとはしけむ　「あぎとふ」は片言をいふ意。

○見すべき人云々　萬葉集卷二「磯の上に生ふるあしびを手折らめど見すべき君がありといはなくに」

小簾巻きて呑めども飽かず孕の海とわたる月の影浮べつゝ

十二月四日亡妻一周忌、發二哀情一

去にし年の今日の今夜に見し夢は一日一夜もまだ覺めずけり

昨日今日と思ひしものを何時の間に此の一年を吾は經ぬらむ

天保九年三月、賀二竹陰主人八十齢一之時、聊應レ需詠下寄レ竹祝之題上

み園生に植ゑ生ふしたる伊久美竹幾世をかねて立榮ゆらむ

四月十七日平旦、始聞二霍公鳥喧一作　一昨十五日丁立夏節

木闇の四月はたちぬ霍公鳥など來啼かぬといひつゝありしを

伊豫國松山大林寺實阿上人、賀二七十齢一之時、聊應レ需

來む世をば懸けて思ふな松山の松の常磐に肖えむ身をして

備後國福山領笠井治右衞門家藏二一奇石一號二鳩化石一也、仍需二歌詞于余一、聊賦二小什一贈レ之云

萬代に搔撫で見せと公が家に常石堅石と化して住むらむ

或人慮外得二鑄惠美須命漁幸之像一、錢之時應レ需作

かくのごと幸多かれと奧つ浪君があたりを指してよるらむ

伊都萬低草之歌　此草本生二于北山中一、嗣君得レ之見レ惠二大學君一、仍應レ命云

---

○伊久美竹　幾見竹。一九頁彼方の歌參照。

○木闇の四月云々　萬葉集卷十九「木闇の四月し立てばよごもりに鳴く時鳥云々。」木闇のは四月の枕詞。

○肖えむ身　あやかる身。

○伊都萬低草　岩蓮華。

○時しあらば　時機が來れば。
○壺菫云々　夏季に白色で少し青紫色を帶びた花の咲く菫。萬葉集卷八「春の野に菫摘みにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寢にける」
○露霜に染まぬ朽葉　七月朔日なれば露霜に染まぬといひ、朽葉は自分に喩ふ。
○散りも散らず　辛うじて散らず
○秋かたまけて　秋に向つて。
○事ぞ通はぬ　萬葉集卷八「風雲は二つの岸に通へども吾が遠づまのことぞ通はぬ」魂の言傳が通つて來ない。
○大橋の云々　萬葉集卷九「大橋の頭に家あらばまがなしくひとりゆく兒に宿かさましを」頭は橋詰
○一とせに二たび逢はぬ　萬葉集卷七「一年に二たび逢はぬ妻戀に云々。」
○月の御面の食ゑまく　月食。
○玉くしげ　「ふた」の枕詞。

時しあらば花開かましを草の名のいつまでとかも下萌えにけむ

旅本菫　下島十八社大明神奉納

壺菫つみつゝ來れば日は暮れぬ名に負へる野に吾は宿らむ

七月朔日述懷　去秋來臥レ病、仍有ニ此歌詞一

露霜に染まぬ朽葉の散りも散らず又も今年の秋に逢へるかも

盂蘭盆會之節、聊述レ懷作

二年の秋かたまけて魂まつり吾はすれども事ぞ通はぬ

爲ニ八月十五夜月宴一、應ニ大學君命一、詠下遊ニ鏡河一看レ月之題上

大橋の頭の遊びは鏡河月可怜き今夜なりけり

同十五日夜月食、則作

一とせに二たび逢はぬこの夜らの月の御面の食ゑまく惜しも

爲ニ九月十三夜月宴一、應ニ大學君命一、詠下遊ニ二見丘一看レ月之題上

玉くしげ二見の丘に照る月を一つ心に偲び來にけり

十二月四日、亡妻三回忌、聊述レ懷作

家さかり去にし吾妹はあら玉の年の三とせを待てど來まさぬ

天保十年己亥正月元日試筆

わゝけたる肩のかゝふも今よりは脱ぎ棄てつべき春になりけり

寢屋外まで來立ち喚ばひし里長が聲は不欲々々今旦の鶯

三枝

百種の花はあれども春されば先づ三枝の花の名のよさ

怨二鶯晩哢一

鶯の聲を聞かむと待ちがてに吾がせし梅も開きにしものを

詠蘿

葎はふ庭にはあれど苫筵敷き延へてけり來む人もがも

寄レ山相聞

吾妹子し待つとし聞かば荒熊の住むちふ山も越えがてめやも

早春鶯

正月立つ今日の壽詞にさきだちて來鳴く鶯聞かくしよしも

寄柳戀

春の日に張れる柳も吾妹子が細き眉根に倚しかずけり

殘雪

瀧の上の雪も消なくに白雲の立田の山は何時か開き出む

---

○わゝけたる肩のかゝふ　破れ亂れた、肩にかゝれる袴のぼろ。萬葉集卷五「布かたぎぬのみるのごとわゝけさがれるかゝふのみ肩に打ちかけ云々。」

○寢屋外まで云々　萬葉集卷五「しもとごる里長が聲は寢屋外まで來立ちよばひぬ云々。」

○寢屋外　臥牀。

○來立ち喚ばひし里長　租税を催促する爲に來て呼び立てた村長。

○不欲々々今旦の鶯　聞かないで初春の鶯の聲を聞く意。

○春されば云々　萬葉集卷十「春されば先づ三枝の幸くあらば後にも逢はむな戀ひそわぎも」

○三枝　山百合であらう。先づ「咲き」さか「幸く」さかの意を掛けた。

○待ちがてに云々　萬葉集卷六「待ちがてにわがせし春を云々」

○苫筵敷延へてけり　苫が庭一面に生え擴がつた意。

○吾妹子しの歌　吾妹子がさして前出。十五頁參照。

○春の日に云々　萬葉集卷十九「春の日に張れる柳を取りもちて見れば都の大路思ほゆ」

○白雲の　立田の枕詞。萬葉集卷九「白雲の立田の山の瀧の上の小鞍の嶺に開きをゝる櫻の花は云云。」

梅風

屋戸の梅の下吹く風ぞ香はしき妹が袂に觸りて來ぬれか

山霞

冰りゐし谷の薄冰うちとけて吾が山の上に霞輕曳く

待花

手束杖つきもつかずも足曳の山櫻花開くと告げ來ば

春日登二朝峯一

參ゐ昇り此の朝峯の皇神に手向くる幣と散る櫻かも

浦戸懷古

古を誰に問はまし浦戸瀉榜入り榜出る船は多けど

遊二鏡川一

思ふ子が影や見ゆると鏡河かはの瀨落すいや河上る

安田人某六十賀

安田川安くいまして萬代にさ走る鮎を漁りて食しませ

花盛

いざ子ども野に出山に入り遊びてむ咲ける櫻の花に飽くべく

---

○下吹く風云々　萬葉集卷二十「橘の下吹く風の香はしき筑波の山を戀ひずあらめかも」
○妹が袂に云々　萬葉集卷十「吾が袖に降りつる雪も流れゆきて妹が袂にい行き觸れぬか」
○觸りて來ぬれか　觸れて來たからであらうか。
○手束杖　手に執り持つ杖。
○つきもつかずも　杖にすがつて見に行かうの意。
○參昇り云々　萬葉集卷六「參昇る八十氏人の手向すとかしこの坂に幣奉り云々。」
○思ふ子が云々　萬葉集卷七「佐保河に鳴くなる千鳥何しかも河原を思ひいや河上る」
○かはの瀨落す　河の瀨殘る所なく。
○野に出山に入り　萬葉集卷十「卯の花の散らまく惜しみ霍鳥野に出山に入り來鳴きとよもす」

惜花

足曳の山櫻花思ふどちかざさぬい間にうつろはむかも

春祝

天地に照りたらはして萬代に開かむ櫻や花の大王

寄鳥戀

はしきやし妹があたりに飛び還る心空なる鳥にしあらねど

佐川人明神清惇六十賀、詠下花契二多春一之題上

長人の插頭のための花なれば春なき時や開かであるべき

松上藤

藤の花開きて纏へり吾背子をあが松の木の枝もたわゝに

暮春浦

海原のゆたけき見つゝ御穂の浦に遊ぶ春べの過ぐらく惜しも

新樹

昨日こそ花は散りしか水鳥の青葉の山と早なりにけり

霍公鳥

田葛ひくと夏野を來ずば足曳の山ほとゝぎす聞かましやそれ

---

○照りたらはして　照り足りて。

○心空なる鳥　「心空なり」と「空なる鳥」とを掛く。

○春なき時や云々　古今集秋在原業平朝臣「植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや」春の季節のないことはあり得べきでないから、結局は永久に咲く意。

○藤の花　女に喩ふ。

○あが松の木　我が待つ松の木。松の木は男に喩ふ。

○海原の云々　萬葉集卷二十「海原のゆたけき見つゝ蘆が散る浪速に年は經ぬべく思ほゆ」

○御穗の浦　紀伊國日高郡三尾浦

○遊ぶ春べ云々　萬葉集卷八「ももしき集の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今宵は開けずもあらぬも」

○春べ　春の季節。

○水鳥の　「青」の枕詞。

○田葛ひく云々　萬葉集卷十「時鳥鳴く聲聞くや卯の花の咲き散る岡に田葛ひくをとめ」

同前、餘思二故人一、聊述二拙懷一作

ほとゝぎす今來啼きそむ起きよ〳〵早く起きよといひし子等はも

四月五日平旦、始聞二霍公鳥喧一作　三月二十五日丁立夏節

卯の花の開きにし日より霍公鳥かけてぞ待ちし汝が初音を

七月二十九日、松本弘蔭始入二吾門一之時、作贈歌

今よりは繼ぎて汲みみむ古の心淸かる飛鳥井の水

答歌

君なくば誰か汲みみむ年深み水草生ひたる飛鳥井の水

八月五日、告二病愈之由于官一、仍聊述レ懷作

道反の神のちはひか又更に官の道を踏みならしつる

爲二八月十五夜月宴一、應二大學君命一、詠下對レ月述二心緒一之題上

天地の榮ゆる時と望月の照り足らはせる光はもあなに

同時、應二福岡氏需一、詠二對レ月待レ友之題一

立ちてゐて待てど來まさずこの夜らの月の光をひとり見よとや

爲二九月十三日夜月宴一、應二大學君命一、詠下夜夜響二松月一之題上

梓弓爪引く夜音の音さえて君松の葉に月ぞゆれつる

---

○故人　亡妻を指す。
○ほとゝぎす今來啼きそむ　萬葉集卷十九「時鳥今來啼き初むあやめ草かづらくまでにかるゝ日あらめや」
○かけてぞ　心にかけてぞ。
○松本弘蔭　雅澄の門弟、古義註釋目錄の編者。
○飛鳥井の水　六四頁飛鳥井の項參照。
○年深み云々　萬葉集卷三「古の古き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり」
○道反の神　千引石。伊邪那岐命が黃泉國より遁れて黃泉比良坂に來た時、千引石を道に塞いで伊邪那美命の追ひ來るのを防いだ事が古事記にある。
○ちはひ　幸を與へ給ふこと。
○官の道云々　復職する意。
○梓弓云々　萬葉集卷四「梓弓爪引く夜音の遠音にも君がみ言を聞くはしよしも」梓弓爪引くは夜音の序詞。
○君松の葉　君を待つ意を掛く。
○ゆつれる　移れる。

同時、應二福岡家之需一、詠二翫月之題一

九月の今夜の月の影浮けて思ふ人どち飲まくしよしも

十月晦、賀二荒尾壯作翁六十齡一之時、應レ需題二梅花畫一

み園生の冬木の梅のはつ花は千代の插頭にまづ手折れとか

十一月十九日、宮地貞枝翁家會、兼題朝霜

夕凝の霜さはに置けり若草の足結よくしていませ朝夫

山家歳暮　十二月十九日村岡直道家會兼題

打靡く春を近みか吾が門の片山海石榴開かむとすらむ

十二月晦夜、侍宿作歌

里長が徵る役課を不許といひて出でて來めやも侍宿しにこそ

天保十一年庚子正月元日作歌、侍宿之翌朝也

高坂の城の邊靜けみ侍宿して春たつ今日に逢ひしうれしさ

同春至二于五十歲一仍聊述レ懷作

百年は半ばばかりになりぬるをなど吾が髮の黑き筋なき

重作

白髮生ひ膚も皺みぬ吾身をら舊りたる良しと誰かいふべき

---

○飲まくしよしも　飲むことは樂しい。

○はつ花　春第一に咲く花。

○夕凝の云々　萬葉集卷十一「夕凝の霜置きにけり朝戶出にいとこあつけて人に知らゆな」

○夕凝の霜　夕方に結ぶ霜。

○さはに　澤山に。

○若草の云々　萬葉集卷十七「若草の足結たづくり云々。」若草のはつまの枕詞。足結は袴を揭げて膝の邊で結び固める帶のやうなもの

○朝夫　人目を憚らず朝まで逢ふ夫。

○打靡く　春の枕詞。萬葉集卷二十「打靡く春を近みかぬば玉の今宵の月夜霞みたるらむ」

○吾門の片山海石榴　萬葉集卷二十「吾門の片山椿まことなれ我が手ふれなな上に落ちめかも」

○里長が云々　九〇頁里長にの歌百頁窮居外の歌參照。

○吾が身をら　「ら」は助辭。

○舊りたる良し云々　萬葉集卷十「物皆は新しき良したゞ人は舊りたるのみぞ宜しかるべき」

唯人は舊りたる好しと古にいひし人こそあたら戀しき

久萬村住人某母、賀二七十算一之時、應レ需詠二寄レ松祝之題一

垂乳根の母の齡にくらべなむ百久萬山の松の葉數を

正月十九日、惟宗氏家會、兼題若菜

向崗に霞霧合へりいざ子ども野の上の春菜ゆきて採まし

二月十九日、苅谷氏家會、兼題初花

吾が背子が屋前に先づ開く櫻花今日の遊びのためにしあらずや

四月七日申時、始聞二霍公鳥一作歌　六日丁二立夏節一

おとつ日も昨日も待ちしほとゝぎす今日は初音を聞くがともしさ

爲二八月十五夜宴一、應二大學君命一、詠二浦月之題一

吾が船の牂牁ふりたてよ月清み御座の浦に今夜宿らむ

八月十五日夜、造二福岡家一、輒語レ余曰、頃日出二依レ處月明之題一、令二諸士賦一レ之、以賞二良夜一、請裁レ之、卽應レ聲作歌

塵をだに据ゑぬ御池の鏡には光異にこそ月もうつりたれ

九月朔日、蒼鷹入二惟宗宜家一之時、應レ需賀レ之歌

夢にすら見まく欲りする秀鷹の直に入り來し家の内はも

---

○垂乳根の　母の枕詞。

○松の葉數　千載集賀藤原孝善「君が代にくらべていはば松山の松の葉數はすくなかりけり」

○春菜　若菜。

○屋前に先づ開く云々　古今集賀貫之「春くれば宿に先づ咲く梅の花君が千年のかざしとぞ見る」

○吾が船の云々　萬葉集十五「大船に可之ふりたてて濱清きまりふの浦に宿りかせまし」

○牂牁ふりたてよ　船を繫げよ。牂牁は船をつなぐ杙或は棹。

○塵をだに据ゑぬ　古今集夏躬恒「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわが寢る牀夏の花」

○夢にすら云々　一富士二鷹三茄子といつて鷹の夢は吉夢といふ。

○秀鷹　最上の鷹。

○直に入り來し云々　直接飛び込んで來た家は如何に幸福であらう

爲二九月十三日夜月宴一、應二大學若命一、詠二山月之宜一

夕さらず大島山に啼く鹿の吾が身にしあらば月夜飽かましを

山　月

天の原とわたる月を此の山の嶺に近しと打見つるかも

月前鴈　九月十三日夜福岡家宿題

吾が待ちし鴈が音きこゆ月夜よしと誰か告げてやりけむ

丁野實母名松女、今茲九十五焉、時東殿若聞レ之、忝賜二御詠一壽二其高年一焉、仍此聊述二歡情一作

榮えゆく千年を松の名もしるく花開く春に逢ひし歡しさ

春二納于小筑紫天神宮一歌　願主羽田信英

いにしへの調殘りて代々遠く今も響の松風の音　響松者彼地之名木也

十二月晦述レ懷作

楚取る里長の聲をしづめむに今助けに來む久我禰麿もだ

天保十二年辛丑元日試筆

初春の初若水をむすび上げて心も身さへさやまりにけり

正月九日、北原敏鎌往二于江戸一之時、贈二生鯛一且副歌

○天の原云々　萬葉集卷六「山の端のさゝらえをとこ天の原とわたる光見らくしよしも」同卷十二「此の山の嶺に近しと君が見つる月の空なる戀もするかも」

○月夜よし云々　古今集戀讀人不知「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」月夜よし夜よしは月夜よしの意。

○花開く春　松は千年に一度花咲くといふので、御詠を賜はつたことを祝つていつたのである。

○楚取る云々　萬葉集卷五「楚取る五十戸長が聲は寢屋外まで來立ちよばひぬ云々。」楚は笞で、罪人を打つ刑杖。

○久我禰麿　黄金麿。黄金を擬人したのである。

○さやまりにけり　清まつた。

眞幸くて早かへり來と水下經魚も浮き出でて鰭を振りつゝ

應二松本弘蔭需一、題二梅畫一

みやびたる人の心と常磐なす此の常花と移る世あらめや

柳絲隨レ風

妹名根し蘰く日まで春風は柳の絲を然な亂りそ

二月下旬、福岡君自二江戸一還之時、沈臥遷病、醫藥無レ驗、居三四日、忽逝歿也、因レ斯悲傷作

今日々々と日を數へつゝ御園生の花に心を盡せしや何

葬二于同君隈山一之夜、甚雨、因レ斯述二拙懷一作

かきくらし雨も涙も降りしきぬ手に取る手火の光いづらぞ

二月、宮地翁死去之後、哀傷作

在り通ふ魂はあらめど古言を問ふべき緣の無きがさぶしさ

三月十五日朝、始聞二霍公鳥喧一作　三月十七日應立夏節

うもの葉もいまだ萌えねば思はぬに山ほとゝぎす來鳴きとよもす

爲二八月十五日夜、月宴一、應二大學君命一、詠二野亭月之題一

月讀の光にめでて標野行き野守の庵に宿りす吾は

---

○眞幸くて早かへり來と　萬葉集卷二十「眞幸くて早かへり來と眞袖もち云々。」
○水下經　魚の枕詞。
○みやびたる人云々　萬葉集卷五「梅の花夢に語らくみやびたる花とあれもふ酒に浮べこそ」
○常花　いつまでも散らない花。梅の畫であるからいふ。
○移る世　衰へかはりゆく時。

○今日々々云々　萬葉集卷五「出で行きし日を數へつゝ今日々々と吾を待たすらむちゝ母らはも」

○手火　松明の類。

○うもの葉　芋の葉。
○萌えねば　萌えぬに。
○標野行き云々　萬葉集卷二「茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖ふる」
○標野　御獵の爲に占めおく野。

同前、應二内膳君命一、詠二松間月之題一

玉敷きて吾が松かげに木の間漏き今夜來ませる月人壯子

爲二九月十三日夜、月宴一、應二大學君命一、詠二社頭之月之題一

住吉に月おし照りて祝等が齋ふ神言聲すみわたる

爲二九月十三日夜、月宴一、内膳君晉賜二月前菊之題于諸人一、豫令レ作レ之、而大過レ期之後、題至二于予一焉、蓋傳レ命之人失二誤之一者也、仍詠二左件歌詞一、奉レ謝レ之云

久堅の月の照る夜を菊の花花に散らさず待ちてけらずや

題二牡丹花圖一

あら玉の年は百世に來經れどもいや常花の色深見草

或人一日誂レ余曰、請書下關二文武一之歌詞上貺レ之、因作與

劒太刀磨ぎし心のくもらずば我が皇神の道は惑はじ

十二月晦、聊述レ懐

年のはて無かる國もが百種に責め寄せきたる今日の苦しさ

天保十三年壬寅正月元日作

新しき年の始めの今日の日の千歳と長くありこせぬかも

---

○住吉　攝津國住吉神社。

○深見草　牡丹。

○劒太刀　磨ぎの枕詞。萬葉集卷十三「劒太刀磨ぎし心を云々。」

○年のはて云々　萬葉集卷八「時爲無かる國にも行きてしがその鳴く聲を聞けば苦しも」

○百種に云々　萬葉集卷五「年月は流るゝ如しとりつゞき追ひ來るものは百種に責め寄りきたるをとめ云々。」

○今日の日云々　萬葉集卷十二「日暮れなば人知りぬべし今日の日の千年のごともありこせぬかも」

同日聞レ鶯作

初春の初壽言を先づ告げて初鶯ぞ來啼きとよもす

春到氷解

さ蕨の萌え出る春になりけらし垂水の水ゆ薄冰ながる

松上霞

手向草白木綿しぬぎ白浪の濱松がうれに霞棚引く

夜行路上詠レ梅

梅の花にほへる香かも否をかも夜道を來ます妹が袖かも

二月八日、累日到二永德寺一見レ花作

薪伐り水汲むことを手忘れて櫻の愛でに今日も昨日も

春色浮レ水

鏡河きよき湍毎に此の朝け霞流らふ春といはむとや

香美郡人水野常總、賀二六十齡一之時、應レ需詠三寄レ山祝之題一

春の花秋の紅葉を美良布山飽くまで見らむ長人や誰

二月十一日、過二久萬村一、路上作

百千たび顧みすれどあかぬかも百限山の山櫻花

---

○さ蕨の云々　萬葉集卷八「石走る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも」

○垂水　瀧。

○手向草云々　萬葉集卷九「白波の濱松が枝の手向草幾世までにか年の經ぬらむ」。

○手向草白木綿しぬぎ　白木綿波さか白木綿花に涙立ちさかいふから、白波の激しく押寄せる趣を神への捧物の白木綿に見立つ。

○白浪の　濱の枕詞。以上は序詞

○梅の花云々　萬葉集卷十四「筑波嶺に雪かも降らる否をかもかなしき兒ろがぬさほさるかも」と同調。

○薪伐り云々　拾遺集卷二十空也上人「法華經を我がえしことは薪伐り菜摘み水汲み仕へてぞえし」釋迦求法の爲、阿私仙人に仕へて千年間薪を伐り水を汲み苦行して法華經を得たさいふ。

○手忘れて　「手」は接頭語。

○櫻の愛で　日本書紀「花ぐはし櫻のめでことめでは早くはめでず云々。」

○百千たび云々　萬葉集卷二「この道の八十隈ごとによろづたび顧みすれどいや遠に云々。」

伊藤勘右衛門壽六十算之時、應レ需詠二春祝之題一

今日のごと藤の裏葉をうら安にかざして遊べ立つ年のはに

四月四日朝、始聞二霍公鳥喧一作　三月廿七日　丁二立夏節一

萬代に聞きて慕へと霍公鳥この龜岡に來啼きとよもす

一聲は今か〳〵と霍公鳥ほと〳〵しつゝ待ちてけらずや

惟宗宜母壽二七十齡一之時、詠二寄レ巖祝之題一

御壽の鎭めとなりてとこしへに神さび立てりこれの巖は

五月十九日、家君長逝之後、哀傷作歌

千年祝ぎ祝ぎめぐらして捧げてし瑞玉盞を見れば悲しも

又或時作歌

物思ふと寐をねず居れば夏の夜も短しとだに思ほえなくに

秋月入レ簾　十五夜　大學君御兼題

玉垂の小簀の間とほし照る月は妹がかざしの萩を見よとか

湖上翫レ月　十五日　内膳君御兼題

石花海にうつれる影のつゝまれて月も寶となれる今夜か

對レ月問レ昔　十三夜　内膳君御兼題

○藤の裏葉の云々　萬葉集卷十四「春べ咲く藤の裏葉のうら安にさ寢る夜ぞなき兒ろをし思へば」

○ほと〳〵しつゝ　殆んど死ぬばかりに。

○鎭　鎭護。

○千年祝ぎ云々　天保七年父の八十歲の賀宴を開いたことを指す。

○瑞玉盞　美しい杯。

○物思ふと云々　萬葉集卷十「心なき秋の月夜の物思ふといの寢られぬに照りつゝもとな」

○石花海云々　萬葉集卷三「せの海と名づけてあるもその山のつゝめる湖ぞ……日の本のやまとの國の鎭ともいます神かも寶ともなれる山かも云々」石花海は新考の說では富士八湖中の西湖、精進湖を指す。

蒼海原いで來る月にこと問はむ潮の八百重の昔語を

八月十五夜、居二父喪一、述二拙懷一作

さやに見む月の光を蓋しくも雲か隱せる吾が涙かも

江上月 十三夜 大學君御兼題

さもらふと浦隱り居てこの夜らは都多の細江に月夜足りてむ

九月四日、辱二寵命一、繼二先考之祿秩一、仍十三日夜望二月色一、聊述二拙懷一

常ゆ異に月の光ぞ照りわたる惠みの露の玉敷ける庭

喪二父君一之後、叔父君死去之時、哀傷作歌 實十一月十九日也

いとのきて吾が身の傷し痛けくに又辛鹽を灌ぐ比日かも

十二月晦、述懷

取懸けし肩のかゞふの海松なすわゝけながらに年は竟てにき

天保十四年癸卯正月元日作

數ふれば五十三まで豐つ日の初日の光仰ぎ來にけり

子日 正月九日

鶯の聲聞きがてり初春の初子の小松出でて引かまし

名所春興 伊部中世所レ詠

---

○蒼海原云々 神代紀「蒼海原潮の八百重云々。」
○蓋しくも 蓋し。
○雲か隱せる云々 萬葉集卷七「まそかゞみ照るべき月を白妙の雲か隱せる天つ霧かも」雲が隱したのか吾が涙の曇りで隱したのかの意
○さもらふと云々 萬葉集卷六「風吹けば浪か立たむとさもらふに都多の細江に浦隱り居り」
○都多の細江 播磨國飾磨郡。
○浦隱り 浦邊の陰に隱れる。
○さもらふと 待ち伺ふ爲に。
○月夜足りてむ 月夜飽きてむの意。
○常ゆ異に 平生よりも一段勝つて。
○先考 亡父。
○いとのきて云々 萬葉集卷五「世の中のうけくつらけくいとのきて痛き傷には鹹鹽を灌ぐちふ如く云云。」いとのきては甚だしくの意。
○吾が身の云々 諺曰、痛瘡灌レ鹽短材截レ端。
○取懸けし云々 一〇〇頁わゝけたるの歌參照。
○海松なす 海松の如く。梅松は海藻。
○豐つ日 豐は物の充ち足りたことを示す美稱。
○子日 子の日の遊び。
○初春の初子 萬葉集卷二十「初春の初子の今日の玉はゝき手に取るからにゆらぐ玉の緒」
○出でて 野に出でて。

梅柳折りも折らずも狹穗の山上り下りて遊ばくよしも

或人、除夜夢ニ不盡山一、明旦、令ニ畫工圖レ之、乃需ニ予賀辭一因歌曰

玉くしげあけてをちより月に日に高き榮えを仰ぎ見ふとぞ

題ニ芽子花畫一

左牡鹿の妻問ふ聲にあらそひて先芽子の花まづぞ手折りし

題ニ蔓草花畫一、草名未詳

花の名は都ても知らずしかすがにつらく見れど飽かぬ色かも

題ニ菊花畫一

色深きいや常花は誰人の世を長秋の插頭なるらむ

題ニ牡丹花畫一

咲きしより散るちふことを知らずして二十日は花の名のみなりけり

朝にけに見れどもあかず咲きしより常初春の色深見草

題ニ夏田畫一

いざ子ども明日は標結へ吾植ゑし小田の薭苗立ちはえにけり

三月十六日、南部巖雄往ニ于江戸一之時、作贈歌

南部巖雄子、奉レ命赴ニ于江門一之時、聊陳ニ寸情一、敢投ニ坐右一矣、醜翁、頓

○梅柳云々　萬葉集卷六「梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もとゞろに」
○折りも折らずも　萬葉集卷十九「時ごとにいやめづらしく咲く花を折りも折らずも見らくしよしも」
○狹穗の山云々　萬葉集卷十「答へぬになよびことよめそ呼子鳥佐保の山邊を上り下りに」
○玉くしげ云々　萬葉集卷十五「この頃は戀ひつゝもあらむ玉くしげあけてをちよりすべなかるべし」
○玉くしげ　「あけ」の枕詞。
○あけてをちより　夜明けて以後は。
○先芽子の花　早く咲く萩の花。
○都も知らず　全く知らず。
○長秋　永久。
○二十日は云々　牡丹の異名は二十日草。詞花集後關白前太政大臣「咲きしより散りはつるまで見しほどに花のもとにて二十日經にけり」
○朝にけに云々　一〇八頁あら玉の歌參照。
○標結へ　繩を張れ。
○薭苗　薭り生えた苗。
○立ちはえにけり　生え育つた。
○南部巖雄　雅澄の門弟。萬葉集人物傳に助力した人。

○古義軒　雅澄の家號。
○稚室　新室。新築の家。
○弱薦疊　新しい薦疊。
○敷きまけて　敷き設けて。
○十五夜月の云々　萬葉集卷九「望月の足れる面わに花のごと云々。」
○たけませ其のをち水を　其の若返る水を飲み給へ。萬葉集十三「月讀の持てる越水いさり來て君にまつりてをちえしむもの」
○音に聞き云々　萬葉集卷七「音に聞き目には未だ見ぬ吉野河むつたの淀を今日見つるかも」
○常しく　永久に。
○憂けくつらけく　憂いこと辛いこと。「けく」は「き」の延音。
○又更々に　又重ね〲て。
○見る人　西行を指す。
○高嶺の　高山の如く。
○朝づく日　朝日。

者有下新營二古義軒一之志上、而匠巧未レ成、前日、忽辱二若干之豊助一、是以宿心殆遂、感謝何事如レ之、仍而意及レ此云

稚室の弱薦疊敷きまけて宴せむ日は早歸りませ

四月十日曉、始聞二霍公鳥一作　昨九日丁二立夏節一

汝を思ふと寢覺めて聞けば霍公鳥さやかに名のる曉の聲

柳亭嫗六十賀之時、應レ需詠二寄レ水祝之題一

十五夜月の足れる面わの面がはりせずてたけませ其のをち水を

題二龜畫一

音に聞き日には見ねども常世島常しく龜はこゝに遊べり

父君一周忌之時、哀傷作歌

年頃の憂けくつらけく搔き集めて又更々になげく今日かも

ほとゝぎす吾が岡に來て去年のごと啼く聲聞けば涙ぐましも

題下西行見二不盡山一圖上

見る人の名さへ言さへ神さぶる不盡の高嶺のいや高にして

題下日出二一見浦一圖上

玉くしげ二見の浦の朝づく日一つ心に仰がざらめや

爲二八月十五日夜、月宴一、應二大學君命一、預詠二關月之題一

關守いとゞめざりせば紀の山に今夜の月夜飽かましやそれ

頃者初造二古義軒墻壁一、雖レ未レ理、獨坐賞二十五夜月光一、作歌

白玉を敷きも敢へねば稚室に今夜來ませる月讀壯士

江戸人堀練誠贈歌

雲井なす遠き土佐路を慕ふかも古き手振の教へきかむと

奈良の葉の名に負へる御代の古言のこゝろ解かせるまねびうれしも

報贈歌

雲井なす遠くはありとも古言を語らむこゝろ隔りて思へや

おふけなしと且は知れども古言の義解かせる事のかしこさ

爲二九月十三日夜月宴一、應二大學君命一、預詠二渡月之題一

楫の音さやにさやかに麻久良我の許我の渡を月照りわたる

同夜、獨仰見二月光一作

眞十鏡清き月夜の飽かなくに內へは入らじ小夜は更くとも

鶯梅　吉松萬齡需二畫讚一

春されば先づ開く花の枝に居て先づ鳴く鳥の聲のよろしさ

---

○關守い云々　萬葉集卷四「吾が背子があとふみ求め追ひ行かば紀の關守いとゞめてむかも」「い」は助詞。
○敷きも敢へねば　敷きおほせないのに。未だ墻壁の完成しないことを指す。
○雲井なす　空のやうに。萬葉集卷三「隼人の薩摩の迫門を雲居なす遠くも吾は今日見つるかも」
○奈良の葉の云々　萬葉集を指す
○まねび　學問。
○隔りて思へや　遠く離れてゐるとは思はない。
○おふけなし　身分不相應。
○且は　一方では。
○楫の音云々　萬葉集卷十五「麻久良我の許我の渡のから楫の音高しもな寢なへ見ゆゑに」
○さやに　さやかに。
○麻久良我の許我の渡　下總國猿島郡。麻久良我も地名で、許我の渡はその邑內にあつたからいふ。
○眞十鏡　清きの枕詞。
○內へは入らじ　萬葉集卷十二「待ちかねて內へは入らじ白妙の吾が衣手に露はおきぬとも」
○先づ開く云々　萬葉集卷十「梅の花先づ開く枝を手折りてはつとと名づけてよそへてむかも」
○先づ鳴く鳥　萬葉集卷十「春されば先づ鳴く鳥の鶯のことさきだちし君をし待たむ」

鶯の初音と梅の初花と何をわかちて吾は偲はむ

諸鳥櫻　同上

朝にけに來啼く百鳥汝すらも花に戀ふらく吾にまさめや

霍公鳥　卯花　同上

卯の花の薫らむ時を待ちがてに吾がせしことも汝故にこそ

鴈芽芒　同上

鴈がねの來啼かむまでと花にのみ落らさずおきし芒秋芽子

鶴稻　同上

吾が門の穗田を刈れとや此の朝け鶴が音寒く來鳴きとよもす

千鳥河　同上

清き瀨を馬打渡し何時しかも千鳥聞きにと君は來まさむ

閏九月十三日夜、月光清明、聊述レ懷

眞十鏡清き月夜を三たびまで今年は見れど尙足らずけり

題鶴

朝雲に吾が子はぐゝむ鶴羣のその覆羽に霜や降るらし

天保十五年甲辰正月元日試筆

○何をわかちて云々　何れをも優劣なしに慕ふ意。

○花に戀ふらく云々　櫻を慕ふことは我よりも勝るまい。

○鴈がねの云々　萬葉集卷十「雁がねの來啼かむ日まで見つゝあらむこの萩原に雨な降りそね」

○穗田　稻穗の刈り頃の田。

○清き瀨を云々　萬葉集卷四「千鳥鳴く佐保の河門の清き瀨を馬打渡しいつか通はむ」

○何時しかも　何時になつたらば

○三たび　八月十五夜、九月十三夜、閏九月十三夜。

○朝雲に云々　萬葉集卷三「朝雲に鶴は亂れ云々。」

○覆羽に云々　萬葉集卷十「天飛ぶや雁のつばさの覆羽のいづこ洩りてか霜の降りけむ」

まゐらする初若水や吾が君の初國しらす始めなるらむ

三月九日　國君發レ駕、是日天陰忽霽。恭述二卑懷一

出で立たす高坂山のいや高き國の光を仰がざらめや

山吹　三月十四日、古義軒會宿題

妹に似る屋前の山吹來ては見よ手をはな觸りそうたかた吾が兄

春　祝

馬醉木なす榮え入り居りて萬世に古事語れ古事の屋に

同日即事題　三月待二霍公鳥一

ほとゝぎす今夜は來啼け卯の花の四月立つ日を明日といふなり

同日松本弘蔭攀二折山吹花一、且贈レ歌曰、「大方似咲晩有山吹者今日之遊乎待而不來也」即報曰

吾が夫子が手折りけらずばかくの如今日の遊びし樂しからめや

弘蔭又歌曰「萬葉丹勸屋外之向許曾龜崗之名者負來敷」即報

萬葉に相語はむ龜岡の常石堅石に君は通はせ

三月二十一日朝、始聞二霍公鳥一作、去十八日丁二立夏節一

藤波の散り往く見つゝほとゝぎす汝が初音のみ待ちてけらずや

○初國しらす　初めて建設された國を治め給ふ。
○國君　第十三代山內豐熙。
○妹に似る云々　萬葉集卷十九「妹に似る花と見しよりわが標めし野邊の山吹誰か手折りし」同卷十七「鶯の來啼く山吹うたかたも君が手觸れずは花散らめやも」うたかたは暫しの間もの意。
○馬醉木なす云々　萬葉集卷七「馬醉木なす榮えし君が掘りし井の石井の水は飲めど飽かぬかも」馬醉木なすは榮ゆの枕詞。
○古事の屋　古義軒。
○卯の花の　「う」の枕詞。
○藤波　藤の花。

森茂成、贈二不老長壽圓一、副レ歌曰、「長人之名乎母立核古事乎解明日而勸在君」卽和歌

長人と醜つ翁もいはれまし老いず死なずの藥得つれば

螢　四月十四日夜古義軒會

いざ子ども夜道は行かむ足曳の山下ひかり螢すだけり

夏相聞　同上

山畑の麥みのりたり刈りばかにかよりあはむと待ちてけらずや

小野直敬、夢得二金銀寶錢一、覺後、圖以乞二褒詞于四方一、因レ是聊述二小什一敢題二著歌一

眼ぎろふこれの御寶夢のみに得しめしものと思ほえめやも

五月十四日夜、集二會于古義軒一、敢具二楊梅一盃一、客曰、隱二此物名一、爭賦二卽事一、卽應レ聲作歌、于レ時、梅天雲雨頓霽、月光淸明也

をり明し見ずてや止まも諸々の風流士集ふ今夜の月を

五月十九日、父君三回忌、哀傷作歌

ほとゝぎす汝のみもとな新玉の年の三年を在り通ひつゝ

六月十五日夜、集二會于古義軒一、詠二甕中物名一、可須底伊良（餅名）也一

○不老長壽圓　藥の名。

○醜つ翁　醜い老人卽ち自分。

○足曳の山下ひかり　萬葉集卷十五「足曳の山下光るもみぢ葉の散りのまがひは今日にもあるかも」

○山畑の云々　萬葉集卷四「秋の田の穗田のかりばかかよりあはばそこもか人の我をことなさむ」

○眼ぎろふ　眼霧ふ。眼も眩むばかりの意。

○楊梅一盃　盆栽のやまもゝ一鉢。

○梅天　梅雨空。

○止まも　止まむ。止まももろもろの上四文字にやまもゝを讀みこむ。

○もとな　徒に。

筆の柄を手には取れども動かずて苛立つものは心なりけり

武奈岐　物名

謝二植田直道贈一

大寺の餓鬼と見えしも明日よりは金剛力士といはれむな君

七月六日の夜、吾古義軒に集ひて、人々七夕の歌詠みけるに

今夜は寢をねかねつも天の川はや榜ぎ出でむ明日のいそぎに

八月二日、古義軒に集ひて、人々歌よみけるに

古事を語らふ小屋のあやむしろあやに樂しき今日にもあるかも

北原敏鎌が官事によりて幡多郡柏島に行かむとする時

愛妻にたねすゑ置きて柏島子安の木の葉とりてはや來ね

子安の木、柏島の名產也

八月十五日の夜、大學君の仰せによりて、都月といふことを詠みて奉れる

この夜らの月讀男こほしみしなまめき遊ぶ宮女ども

九月十三日の夜のまけに、濱月といふことを詠めと、大學君より仰せられければ、豫めよみて奉れる

山越えて來しくもしろく霰ふり遠つの濱は月夜さやけし

---

○動かずて苛立つ　「かすていら」を讀みこむ。

○大寺の云々　萬葉集卷四「相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへにぬかづくがごと」

○いはれむな君　「むなき」を讀みこむ。

○あやむしろ　綾蓆。文を織出せる蓆。

○あやに　非常に。

○たねすゑ置きて　孕ませて。

○子安　安產の意。

○こほしみし　戀しみ。「し」は助詞。

○山越えて云々　萬葉集卷七「山越えて遠つの濱のいはつゝじ吾が來るまでよふみてあり待て」

○しろく　著しく。目に立つて。

○霰ふり　遠の枕詞。

八月十四日の夜、わが古義軒につどひて人々歌よみけるに、空くまなく晴れわたりて、月いと淸し

あすの宵照らす月夜はあらめども今夜のめでに豈勝らじか

八月十五日、雲霧いとよく晴れわたりて、隈なく澄みのぼるべき空のけしきなれど、病みしれたる身の、野山を分けむことは思ひ絶えたれば、あたら今宵は、草の庵に唯獨りや見つゝ明かさむと、思ひつゝ居る程、ゆくりなく横山直方ぬし、酒さかな調じて、今宵の空を俱に見むとて出來にしと、のたまへることこそいと嬉しけれ。稍ありて、さし昇る月、げにいと隈なし。さて詠める

さやに照る今宵の月の影浮けて相し飲まむと思ひきや君

直方「照る月の光にさへも飛鳥井の深き心はかつ知られけり」とありければ

照る月の光もあらじ飛鳥井の底の心を君し汲まずば

「秋ごとの月の夜ごろはかくしこそ來つゝを汲まぬ飛鳥井の水」と直方の云へるに答へて

飛鳥井の水草かきそけ秋さらば月を君をも待つべかりけり

---

○あすの宵云々　萬葉集卷七「あすの宵照らむ月夜はかたよりに今宵によりて夜長からなむ」
○めでに　月の翫賞よりも。
○病みしれたる身　病み癡れたる身。
○ゆくりなく　意外にも。

○浮けて　杯に浮べて。
○相し飲まむ　「し」は助詞。
○飛鳥井の深き心　六一頁飛鳥井の歌參照。

○月の夜ごろ　月のある毎夜。
○かくしこそ　斯樣にして。
○かきそけ　取り除き。
○月を君をも　月をも君をも。

○飛鳥井にやどり云々　催馬樂飛鳥井「あすかゐに、あすかゐに、宿りはすべし、蔭もよし、みもひも寒し、御秣もよし。」
○みまくさ　秣の敬稱。

○登五郎君　山内豐樹。

○月讀の光云々　萬葉集卷十五「月讀の光を淸み夕なぎにかこの聲よび浦ま漕ぐかも」
○式部君　十四代山内豐惇の通稱
○磐余の池　大和國磯城郡。

○聲知る君云々　伯牙鍾子期の故事を踏まへたのであらう。

---

兎角するほど夜も更けければ

飛鳥井にやどりていませ月をよみ君がみまくさ我がとり飼はむ

といへりければ直方「宿るとも思ひは盡きじ照る月のさやけき程に駒はやりてむ」といひつゝ立別れてしこそいとゞ殘り多くおぼえしか。

八月十五日の夜、登五郎君より、里月の題を給はりければ

月讀の光を淸み里ごとに稻つく子等が聲もとゞろに

同夜、式部君より池邊月といふこと詠めと仰せられければ

水下經魚も今宵は數見えて磐余の池に月照りにけり

九月十三日の夜のまけに、月前鹿といふこと詠めと、同じ君より仰せられければ豫めよみて奉れる

この夜らの月の光と妻戀ふる牡鹿と二ついつか忘れむ

月明らかなる夜、笛吹きけるを聞きて、寺田保が、「久方の月夜を淸み常ゆけに君が小笛ぞさやに聞ゆる」と詠みておこせたりければ

月淸み吹き鳴す笛もなにならむ聲知る君が聞かずありせば

松本弘蔭が酒壺を携へ來て、「はしきやし君を待酒待ちかねてあれは持ちきつその待酒を」と書きて出したりければ

○待酒　人を待ちて飲ませる爲に造って置いた酒。萬葉集卷四「君がためかみし待酒安の野にひとりや飲まむ友なしにして」
○みながら　すべて殘らず。
○音に聞き云々　萬葉集卷五「音に聞き目には未だ見ずさよ姫がひれふりきとふ君まつら山」
○わたつみの　潮の縁語。
○さわたる　「さ」は接頭語。
○衣かりがね　衣を借りと雁が音とを掛く。
○散るといふこと云々　七二頁咲きしよりの歌參照。
○西の御館　山内豐樹。
○山越に云々　萬葉集卷一「朝日影匂へる山に照る月の飽かざる君を山越におきて」同卷十一「行きて見て來れば戀しき朝香がた山越におきて寢ねがてぬかも」
○あさか潟　淺香潟。和泉國泉北郡。
○山をよみ　山を樂しんで。
○山ながら　山に住みながらも。
○山のときはに　山の如く永へに

---

待酒を行きて賜らばたゞ一日うれしや今日も明日も明後日も

秋田蕗の莖葉をみながら摺りうつしたる紙に、歌かきてよと、吉松萬齡がいへりければ

音に聞き目にはまだ見ぬ秋田蕗こゝに寫して見るがあやしさ

九月のはじめ、潮江のほとりにて初鴈を聞きて

わたつみの潮江山の山とよめ啼きてさわたる衣かりがね

南の御館の殿の御女つ子の君の、菊の繪かける扇に歌書けと仰せられければ

我が君の御代長秋の花なれば散るといふことを豈知らましや

九月十三日の夜、西の御館の殿より、潟月といふことを詠めと仰せられければ

山越に月おし照れりあさか潟夜らさへいでて玉藻刈れとや

山岡衞七郎七十賀に、山家祝といふことを詠めとありければ

山をよみ山に住む人山ながらやまずいで見よ山のときはに

九月十五日の夜、古義軒につどひて歌よみしける時、人々酒を携へ、菊と紅葉を折りて來にければ

○思ふどち云々　萬葉集卷八「もみぢ葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今宵は明けずもあらぬか」「杯に梅の花浮けて思ふどち飲みての後は散りぬともよし」
○ふさ手折り　澤山手折り。
○安立雅景　谷眞潮の外孫。短歌に秀づ。
○玉敷きて云々　萬葉集卷六「玉敷きて待たましよりはたそかけに來る今宵し樂しく思ほゆ」
○相もかざさず　互に插頭さず。
○賜りたる云々　萬葉集卷十八「時じくの香の果實をかしこくも遺したまへれ云々。」
○かぐの木の實　香細しい木の實で橘をいふ。
○ときじくがごと　實が年中枝について居る如く。萬葉集卷四「河の上のいつもの花のいつも〳〵來ませ吾が背子時じけめやも」
○いそばひ騷ぐ　遊びさわぐ。
○いちじろく　著しく。

思ふどち紅葉かざして菊の花浮べのむ夜の明けずもあらぬか

野村御楯が、くさ〴〵の色に咲きたる菊を折り持ち來て、「いづれをか分きてしぬぶとふさ手折りあれは持ち來つ花の色々」といへりければ

とりても見かざしても見つ哀れさは分くこと難き花のいろ〳〵

家にあらざりし程、安立雅景翁の訪らひ來給ひしと聞きて、のちに詠みて贈れる

玉敷きて待たまし君を初紅葉相もかざさず還しつるかも

南部嚴男が橘實をおこせければ

いつも〳〵來ませ逢ひ見む賜りたるかぐの木の實のときじくがごと

國　應二内膳君一初雪十景

降る雪を待ちよろこびて兒童のいそばひ騷ぐ河中國原（河中今云高智里）

社　同上

降りそむる今日のみ雪にいちじろく丘谷映えたる高鴨の神社

里　同上

希將見今日降る雪のいやましに樂しき里ぞ高坂の上は

河　同上

神河（二淀川舊名）の川の瀬光りをちこちに降れるはだれのいやめづらしも

野　同上

希將見沫雪降れり朝な〳〵向ふ眞澄の鏡野の原

山　同上

今旦見れば見らくも飽かず韮生山峯しろたへに泡雪降れり

嶺　同上

昨日こそ黃葉折りしか此の朝開大島が嶺は雪ふりにけり

島　同上

海中にかゞよひ立てり降りそむる今日のみ雪の眞白玉島

濱　同上

山越の風にたぐひてまだしけど遠つの濱にはだれ散り飛ぶ

埼　同上

降りそむる雪斑なる鹿兒の崎幸くいまして在通ひませ

秋山の圖畫ける扇に、紅葉花に勝れる心の歌書きてよと、藤岡文藏乞ひければ

秋山ぞわれはといひし古言を今も聞くごと偲びつるかも

---

○川の瀬光り　萬葉集卷五「まつら河河の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾ぬれぬ」
○はだれ　斑雪。
○朝な〳〵向ふ眞澄の　鏡の序詞
○かゞよひ云々　萬葉集卷六「見渡せば近きものから磯がくりかゞよふ珠をとらずはやまじ」かゞよひは耀きの意。
○山越の風云々　萬葉集卷七「山越えて遠つの濱の石つゝじ吾が來るまでよふみてあり待て」
○降りそむる云々　萬葉集卷三「矢釣山木立も見えず降り亂る雪斑なる朝樂しも」
○秋山ぞわれは　萬葉集卷一「秋山の木の葉を見てはもみぢをばとりてぞ偲ぶ靑きをばおきてぞ歎くそうこし恨めし秋山吾は。」

置きて歎きとりて偲びてかにかくに心よそれる秋の山かも

下代督右衛門六十賀に、寄桃祝といふことを詠めといふに

酒みづきゑらぎ榮えて桃の花下照りいませ百世ふるまで

赤堀源藏六十一賀に、その子に孫に三人の夫妻そろひたれば、その心にて詠みてよといふに

相とよむそのことほぎの聲さへもとりよろふ山ぞこの三山は

師走二十五日、御墓守の司によさされければ詠める

天がける御靈に近き御墓守をさ〳〵しくも人は言はずとも

おのれ年久しく古ことのまねびを勸みて、古の心を種々の書に書きあらはし、四方の人をも教へさとし、はた常の振舞昔樣にかなひて、事そぎ勝ちなるなどを、賞めさせ給ひて、公より黄金給はりけるを喜びて詠める。時は十二月の晦日かたなりければ

榮ゆべき春を近みか分けのぼるこの古道に黄金花さく

年のはてに詠める

春近み春べ戀しも春來ばと春待つ吾ぞ春に早なれ

天保十年あまり六とせといふ年の元日に筆とりて

○置きて歎き云々　右の引用文參照。
○かにかくに　兎に角に。
○心よそれる　心の靡き從ふ。
○酒みづき　酒宴を催し。
○ゑらぎ榮えて　愉快に笑ひ樂しんで。
○桃の花下照りいませ　桃の花の色が地上に映るやうにいませ。萬葉集卷十九「春の園紅匂ふ桃の花下照る道に出で立つをとめ」
○とりよろふ　具り竪ふ。
○よさされければ　任命されたから。
○をさ〳〵しく　立勝つたやうに　古今集卷十九「近き守の身なりしを……殿上もる身のみかき守をさ〳〵しくも思ほえず云々。」
○事そぎ勝　簡單に傾くこと。
○榮ゆべき云々　萬葉集卷十七「すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山に黄金花咲く」
○春べ戀し云々　萬葉集卷九「冬ごもり春べを戀ひて植ゑし木の實になる時をかた待つ我ぞ」
○春べ　春の頃。

春べ戀ひ春待ちをれば春來ぬと春がすみ立ち春鳥鳴くも

いと子の君いは子の君へ、若菜をまゐらすとて

雲雀あがる春野のすがた示さまく思ふ心を摘みこめてけり

端山郷楠日爲作六十賀に

端山祇神のちはへる人なれば五百津岩羣の動く代もあらじ

四月五日始聞二霍公鳥一　朔日丁二立夏節一

不如歸聞かまくほりて汝がためと宿の橘植ゑてけらずや

讃岐人某が四十賀に歌乞ひおこせければ

足りゆかむ神の御面と天地のともに榮えむ人をしぞ思ふ

八月十日夜、大學君の仰せによりて月夜興といふことを詠みて奉る

秋の野の男女の花にほひ吾もいで見む月夜さやけみ

同夜、登五郎君の仰せによりて島月といふことを詠みて奉る

浪の上ゆ月押照れり島傳ふ足速の小舟楫しばし止め

同夜、式部の君の仰せによりて社頭月といふことを詠みて奉る

木綿かけて祝ひまつれる此の杜にすが〳〵しくも照る月夜かも

八月十五日夜、清く晴れたり。時の興によめる歌を奉れと　內膳の君の

○雲雀あがる　萬葉集卷二十「雲雀あがる春べとさやになりぬれば都も見えず霞棚曳く」
○神のちはへる人　神が幸を與へ給へる人。
○五百津岩羣の　夥多の岩羣の如く。
○不如歸云々　萬葉集卷十九「時鳥未だ來鳴かず鳴く聲を聞かまく欲しと云々。」同卷八「吾が背子が宿の橘花をよみ鳴く時鳥見にぞ吾が來し。」
○足りゆかむ云々　萬葉集卷二十「天地日月と共に足り行かむ神の御面と云々。」
○秋の野の云々　萬葉集卷二十「秋野には今こそ行かめもの〻ふの男女の花にほひ見に」
○男女の花にほひ　をとこへし、をみなへしが花やぎてなまめき匂ひ。
○島傳ふ云々　萬葉集卷七「島通ふ足速の小舟風守り年はや經なむ逢ふとはなしに」
○足速の小舟　速力の早い小舟。
○止め　止めよ。
○木綿かけて云々　萬葉集卷七「木綿かけて齋むこの杜も越えぬべく思ほゆるかも戀のしげきに」
○杜　神社。

仰せられければ奉れる旋頭歌

秋風の吹きこきしける露の白玉照る月を待ち喜びて敷ける白玉

中秋月光淸明、恨ニ友不ㇾ來作歌

高々に君待ちかねてたゞ獨りあたら此の夜を明かしなむかも

九月十三日夜　大學君、關山月といふことを詠めとあるに

山の端のさゝらえ男君をおきてこのわが里を誰か訪はまし

同夜、式部君より關路月といふことを詠めと仰せられければ

こととめば紀の關守い野干玉の夜渡る月をこゝにとめてよ

同夜、登五郎君より濱月といふことを詠めとあるに

松が根を枕きて今宵は大伴の高石の濱に月夜飽きてむ

九月十三日夜、松本弘蔭訪ひ來れり。さて詠める旋頭歌。かくて時の興に詠める歌を奉れと、内膳の君の仰せられし事のありければ、この歌を奉れるなり

月夜よし夜よしといひて來し人もよしよしゑやし更けぬともよし明けぬともよし

九月十八日、初雁を聞きて松本弘蔭に贈れる

○秋風の云々　萬葉集卷二十「秋風の吹きこきしける花の庭淸き月夜に見れど飽かぬかも」
○吹きこき　吹き扱き。吹き落す意。四三頁大殿の歌參照。
○山の端の云々　萬葉集卷六「山の端のさゝらえ男天の原と渡る光見らくしよしも」
○君をおきて　月以外には。
○こととめば　關守は通るものを皆止める役であるから。
○紀の關守い云々　萬葉集卷四「吾が背子があと踏み求め追ひ行かば紀の關守いとゞめてむかも」關守いの「い」は助詞。
○松が根を云々　萬葉集卷一「大伴の高師の濱の松が根を枕きてし寢れど家し偲はゆ」
○枕きて　枕として。
○大伴の　高石の枕詞。
○高石の濱　和泉國泉北郡。
○月夜よし云々　一〇六頁吾待ちしの歌の引歌參照。
○よしゑやし　よしまゝよ。

秋山のにほひにめでて雲の上よさ渡る鴈の聲は聞きつや

同月二十四日、猪野村なる杉本社に詣でし道すがら、山を見て

もみづをも青きをも見つ秋山はまこと樂しきものにぞありける

社に近き波川は、國中の大河なり。波川はいにしへに所謂吾川の訛れるものにして、風土記に見えたる神川これなり。此の河の水清きが故に、大神の御爲に神酒醸みしより河の名となれる由などを思ひ出でて詠める

大神の神酒に醸しゆよろしなへ名におふ河の瀬見ればさやけし

左川人山田平八、八十賀

梓弓手挾みそふる矢筈山高きは人の壽なりけり　續紀卅六詔に復年毛彌高成衛弖餘命不幾

田内彦四郎、七十賀

蕃息りし孫に曾孫に長人と仰がれいませ今も見るごと

土方喜三、六十賀

栲繩の千尋の繩の長人や老いらく知らに釣つとむらむ

濱田千東死去之後、哀傷作歌

千東初監ニ幡多郡清水浦一之時、遇遊ニ彼地一、交レ臂縦觀、仍意及レ之

手携へ清水七浦たもとほり遊びし思へば涙し流る

---

○にほひにめでて　美しさを愛して。萬葉集卷十五「もみぢ葉の散らふ山べゆ漕ぐ舟のにほひにめでて出でて來にけり」

○雲の上よ　雲の上より。

○もみづをも云々　一二三頁秋山ぞの歌の引歌參照。

○醸みしゆ　かもしてより。

○よろしなへ　宜なるかな。

○名におふ河　神川。

○梓弓　矢筈山までは高きの序詞

○蕃息りし　蕃殖す。

○栲繩の云々　萬葉集卷五「水沫なすもろき命も栲繩の千尋にもがと願ひくらしつ」栲繩のは千尋の枕詞。

○老いらく知らに　老いることも知らずに。

やごとなきあたりより、福壽草といふものを物に植ゑて給はりてありけるが、師走の晦日の日、ほと／＼咲き出でぬべく見えければ詠める

こゝだくに吉事持ち來て萬代を含める花の明日咲かむとす

弘化三年丙午正月元日試筆

春來ぬと今日三枝の花咲みにゑみて千歳を幸く經てまし

福岡氏より、紅梅のさかりなるを、物に植ゑて給はりければ

うま人に袖に觸れれか梅の花色さへ香さへむかしくあるらむ

福岡氏より沉丁花といふものを、物に植ゑて賜はれり。これなむ、古にいはゆるさきくさの類なるべく、かねて考へおきたることあり。さて詠める

咲き出來しこれのさき草まさきくて春待ちをりしるしならずや

德弘文次郎母六十賀に、龜の盃吸ひたる繪の贊

酒みづき榮ゆる今日と常世島たちてまづ來し龜姬や汝

病に臥したる程、やごとなきわたりより、祝して祈りごとせしめ給ひたりけるが、やゝ怠り心地になれれば詠める

魂ちはふ神にうけひし身にしあれば喪なく事なくならざらめやも

○やごとなきあたり　貴のお方

○こゝだくに　澤山。

○含める花　萬葉集卷十一「吾が背子が如何にとも吾を思はねばふふめる花の穗に咲きぬべし」

○三枝　一〇〇頁百種のの歌參照

○うま人　家柄のよい人。

○むかしく　賞愛すべく。

○これのさき草　このさき草。さき草が沉丁花といふのも一說である。

○常世島　七六頁常しへにの歌參照。

○祝して　神官を以て。

○喪なく事なく云々　萬葉集卷五「事もなく喪なくもあらむを云々。」凶事もなく無事でない筈はない。

壽ニ晩翠亭松ニ母八十八算一

萬代をことほぐ聲のむかし見し千代松かげにいでてこそ來し

三月十日餘りひとつの日、品賜はりければ喜びて詠める

思はぬに矛取るつらの數にしも召上げたまへることの畏さ

おふけなくかつは思へど八ひろ矛廣き惠みに逢ふが嬉しさ

その程人の歌よみておこせけるに應へて

しかばかり薫ふとなけど春の日の光にもれぬ花の下枝ぞ

賀ニ島與右衛門六十算一　島氏其性嗜レ茶、仍歌詞及レ之

萬代を目醒草の功にて夢にも禍は見え來ざるらむ

入交道齋八十賀、應レ需詠ニ寄レ梅祝之題一

今日のごと酒に浮べて飲みてまし萬代匂へ宿のこの梅

賀ニ高橋廣作祖母九十算ニ之時、詠ニ寄レ梅祝之題一

百世をば更にも言はじ萬代をかざして遊べ宿のその梅

四月十二日、始聞ニ霍公鳥一作　昨十一日丁ニ立夏節一

古に戀ひつゝ居れば霍公鳥汝さへ來鳴く心しあるらし

登時、繙ニ閲古典一、仍歌詞及レ之

---

○品賜はり　初めて士格に列る。

○矛取るつら　武士の階級。つらは列。

○八ひろ矛　長い矛で廣きの緣語

○しかばかり薫ふとなけど　左程までに芳しくもない我ではあるがの意。

○春の日の云々　古今集春文屋康秀「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」春の日の光は主公の恩寵をいふ。

○目醒草　茶。

○百世をば更にも言はじ　百世は勿論のこと。

○心しあるらし　萬葉集卷八「獨り居て物思ふ宵に時鳥こゆなき渡る心しあるらし」

○登時　當時の意。

五月六日、東の御館にて歌合し給へる時、召されたるに、ほとゝぎすを聞きて詠める

ほとゝぎす汝も此の日をうれしみかこの殿さらず來鳴きとよもす

報二秦正前折レ蕨來贈副歌一

常知らぬ山路の奥處おくまへて思ひし心蓋し通ひきや

朝日に蘆に鶴の像かける掛物といふものに、歌乞ひければ書きつけける。折しも新室あそびの時なりければ

朝づく日豐榮登る今日とかも蘆邊の鶴の常ゆ異に鳴く

閏五月十一日、贈二松本弘蔭一歌

今日々々と君待つい間に石竹のあたら盛りの過ぎにけるかも

矢野川龍衞門祖母七十賀、配題得二龍串一作

龍串の奇しぶる磯の石根には常世の浪も重きて依すらむ

八月十五日神祭歌　吉田左平所誂

早飯を水に醸みなし甕の腹滿てて雙めまつる今日の貴さ

八月十五日爲二月宴一、應二大學君命一、預詠二水樓觀月之題一

高殿の下ゆく河の細石も玉敷く庭と見ゆる月夜か

---

○常知らぬ山路の奥處　萬葉集卷五「常知らぬ國の奥處を百重山云云。」
○おくまへて思ひし　心深く思つた萬葉集卷十一「淡海の海沖つ島山奥まへてわが思ふ妹がことのしげけく。」
○豐榮登る　美しく榮え昇る。
○君待つい間　「い」は助詞。
○奇しぶる　奇しき樣をいふ。
○重きて　頻りに。
○早飯　早稻の飯。
○水に醸みなし　酒に造り上げ。萬葉集卷十六「うま飯を水に醸みなし吾が待ちしかはりはぞなきたたにしあらねば」
○甕の腹云々　瓶に酒を一杯入れてならべ奉る。祝詞「甕の上高知り甕の腹滿て雙べて云々。」
○河の細石も云々　萬葉集卷十四「信濃なる筑摩の河の細石も君し踏みてば玉と拾はむ」

同前、應㆓式部君命㆒、預詠㆓國月之題㆒

螢なす光く神の事避けし國の威德と照る月夜かも

中秋訪㆓松本氏㆒、賞㆓月光㆒作　累月主人沈㆑痾、至㆑今愈快、因作㆓此歌詞㆒、聊述㆓祝意㆒

時待ちて咲まひ榮ゆる屋戸なれば月の光も常ゆ異に見ゆ

中秋月光淸朗、至㆓夜半㆒少陰、聊述㆓所心㆒　內膳君豫命曰、獻㆓中秋賞興之詠㆒、因作㆓此歌詞㆒

かしこくも問はす今夜の月の面に雲なたなびき飽くまでは見む

九月十三日夜、爲㆓月宴㆒、應㆓大學君命㆒、預詠㆓山館賞㆑月之題㆒

石根踏み人し來ずとも月淸み眞木の板戸を今夜閉さめや

同前、應㆓式部君命㆒、預詠㆓水上月之題㆒

いで須臾馬おし止めよ彼方に渡らば月の影や亂れむ

竹あるところに鶴あまた鳴きたる

千歲祝ぐ屋戸ともしるく殖竹の本さへとよめ鶴さはに啼く

秋野のかた、花鳥もあり

秋の野の花の盛になりぬれば鳥の音さへも常ゆ異に啼く

九月十三日夜、月光少陰、聊述㆓拙懷㆒

何人か言擧しけむ九月の今夜の月のこゝだ霧合へり

○螢なす云々　日本書紀「遂に皇孫天津彥火瓊々杵尊を葦原中國の主とせむと欲しき。然れども彼地は螢なす光く神蠅なす荒ぶる神ども多にして云々。」夜は螢の如く光つて暴ぶる神の意。

○時待ちて　時機を待つて。

○雲なたなびき　雲がかかることを勿れ。

○眞木の板戸云々　古今集卷十四讀人不知「君や來む我や行かむの十六夜に眞木の板戸もさゝず寢にけり」

○眞木は　杉檜の類。

○千歲云々　萬葉集卷十九「青柳のほつえよぢとりかづらくは君が宿にし千年祝ぐとぞ」

○殖竹の云々　萬葉集卷十四「殖竹の本さへとよみ出でて去なばいづしむきてか妹が歎かむ」

○さはに　夥しく。

○言擧げし　いひ立てる。

稻毛實、賀六十齡ニ之時、應レ需題ニ巖生レ蘭之畫一

巖なす常磐に見せと開きしより散らまく知らに花もにほへり

十二月朔日、述ニ拙懷一

明立たばふゝめる梅も開きつべし先づ吾が屋外に來鳴け鶯

弘化四年丁未正月元日試筆

今日よりは千萬玉をかづかまし硯の海の盡くる世なしに

是は、此の度新に得し硯に向ひて、初めて物せるによりてかくは詠めるなり。

正月八日、賜ニ初子一

玉帚手には取らねど言靈の玉の緒絶えずゆらぐ今日かも

春鶯呼レ客

開く梅は何處はあれど鶯の聲する屋外を先づぞ問はまし

和下松本弘蔭副ニ煙草一贈歌上

春山の霞壯士と見つれこそ煙草さへ靡き依りけめ

江口村小川緣、川村助七六十賀

鷲山の小川の水と長人の命とともに何時か絶えせむ

---

○巖なす常磐　萬葉集卷六「春草は後はうつろふ巖なす常磐にいませ貴き吾が君」

○知らに　「芝蘭」とあるから「蘭」を讀みこむ。

○明立たば云々　萬葉集卷二十「新玉の年ゆきかへり春立たば先づ吾が宿に鶯は鳴け」

○かづかまし　水中に潛つて取りたい。

○玉帚云々　萬葉集卷二十「初春の初子の今日の玉帚手に取るからにゆらぐ玉の緒」

○玉帚　子の日に臣下に賜はるもので、目利草の枝に珠をつけた帚

○言靈の玉の緒絶えず　歌の心が絕えずの意。

○何處はあれど　何處も趣はあるが。

○鶯の聲する云々　玉葉集卷一春公通「春霞隔てぬものを鶯の聲する方をなぞか問ひ來ぬ」

○春山の霞壯士云々　古事記にある、秋山之下氷壯夫と春山之霞壯夫との兄弟の二神が伊豆志登賣神の女神を互に得ようとする神話を下心においた。

里蚊居田村、小松千七六十賀、旋頭歌

太刀が緒の神の知らせる人の命は打ちかため打ちし劍の廉の堅らに

二月十五日、孕の花見に行きて

あへぎつゝ海に來つれどなか／＼に孕言葉も出でぬ今日かも

二月十九日、朝倉なる尾池氏山莊なる花を見てよめる

一昨日も昨日もめでし花はあれど今日の櫻になほしかずけり

同じ日、伊野村、杉本大明神の社司杉本榮膂が家にやどりて、そのつとめて庭の花を見て

み幣とる祝が家の朝戸出に朝目よろしく花を見るかも

三月朔日、長濱なる福富氏にて

咲く花のゑまひはあれど時じくに君がゑまひはかはらざりけり

同じ日、常吉顯が家にて

長濱に來よする浪のなみ／＼に君をし思はばなづみ來めやも

同じ日、大久保右京が家にて

あひ見ずて年の八十年經し程にいよゝます／＼若變ませる君

同二日の朝、同じ家にて

○神の知らせる　神の司り給ふ。
○劍の廉　劍のしのぎ。

○孕言葉　腹案の文句。地名を詠みこむ。

○み幣とる云々　萬葉集卷七「み幣とる三輪の祝が齋ふ杉原たきぎ伐りほと／＼しくに手斧とらえぬ」
○朝目　朝起きて眺めること。
○ゑまひはあれど　笑勾（咲き匂ふこと）は限りあれど。
○長濱に來よする浪の　なみ／＼にの序詞。
○なみ／＼に　普通の通りに。
○君をし思はば云々　萬葉集卷十「卷向の檜原に立てる春霞おほにし思はばなづみ來めやも」

櫻花にほへるやどに來ざりせばいかで一夜を明すべしやも

三月廿六日、始聞二霍公鳥一作　廿二日臍二立夏節一

卯の花を昨日見しより立ちて居て戀來し心今日ぞなきぬる

山家梅　武馬貞六翁七十賀題

萬世に浮べ飲まむと梅の花開ける山邊に家居するらし

題二歸鴈畫一　爲植木直清所誂

心なき鳥にぞありける春花のにほはむ山を置きてか行くや

題二月前霍公鳥畫一　同前

霍公鳥なかる國にはかくばかり照れる月夜もさぶしからまし

八月十一日、福岡孝茂主の京にのぼり給ふ時小綱に副へてまゐらせたる歌

久堅の王都の天を仰ぎつゝ領巾ふりいでし鰭の狹物ぞ

湖橋立レ月　大學様　八月十五夜御兼題

こゝに來て今夜の月夜見ざらむや瀬田の長橋絶えぬ限りは

野徑月　登五郎様　同前

白檀鯨野を來れば蹉跎の埼暮霧はれて月夜さやけし

○立ちて居て　立つても坐つても始終。

○梅の花開ける云々　萬葉集卷十「梅の花開ける岡邊に家居れば乏しくもあらず鶯の聲」

○心なき鳥にぞありける　萬葉集卷十五「心なき鳥にぞありける時鳥物思ふ時に鳴くべきものか」

○霍公鳥なかる云々　萬葉集卷八「時鳥無かる國にも行きてしがその鳴く聲を聞けば苦しも」

○久堅の　みやこの枕詞。

○領巾ふりいでし鰭の狹物ぞ　日本书紀伊企儺妻大葉子「からくにのきのへに立ちて大葉子は領巾ふらすもやまとへ向きて」領巾（昔婦人が頸に掛ける飾）に鰭を掛く。鰭の狹物は小魚の意。大魚を鰭の廣物といふ。

○白檀　「い」の枕詞。

○蹉跎の埼　土佐國の南端。

○暮霧はれて云々　萬葉集卷十「思はぬに時雨の雨は降りたれど天雲はれて月夜さやけし」

八月十日あまり五日の夜松本弘蔭がもとにて

去年も見つ今來む年も秋の夜のこよひの月夜かくしあひ見む

こは南の御館の殿より十五日夜の賓興の歌召されければ奉れるなり

同じ夜、亥のときばかりより月はゑえれば

思ふどち見れども飽かぬ月の面のしろゑや惜し蝕ゑまく思へば

菊園月夕　九月十三夜　大東御館御兼題

晝見れど見あかぬ園の菊の花夜さへ見よと月は照るらし

江　月　同前　西御館御兼題

なまりをる吾すら今宵いでて來つ難波の小江に照る月を見て

九月十日あまり三日の夜、笛吹き遊びけるに更け行くまゝに稍曇れる空の淸く晴れわれたり、さてよめる

吹き鳴すや手馴の笛の聲のむた澄める月夜のあな面白き

某の殿より歌奉れと仰せられければ、よみて奉れる

世間に生きとし生ける物みれば産日の神のみむすびと知れ

情進に言擧するは言擧せぬ國とも知らぬ鈍の博士ぞ

九月二十三日、御卽位まします由奉拜承

---

○しゑや惜し　萬葉集卷十「秋萩に戀ひつくさじと思へどもしゑやあたらし又逢はめやも」
○晝見れど云々　萬葉集卷三「晝見れど飽かぬ田子の浦大君のみことかしこみ夜見つるかも」古今集秋讀人不知「佐保山のはゝその紅淚散りぬべみ夜さへ見よと照す月影」
○なまりをる　引籠つて居る。萬葉集卷十六「打照るや難波の小江に廬作りなまりてをる云々。」
○小江　「小」は接頭語。
○むた　と共に。
○産日の神　萬物を産み給ふ高皇産靈神。
○みむすび　產み出し給ふこと。
○情進に　利口ぶつて。
○言擧げする云々　萬葉集卷十三「葦原のみづほの國はかむながら言擧げせぬ國しかれども言擧げぞ吾がする云々」。
○御卽位　孝明天皇御卽位。

草も木も皆ことやめて久堅の天の御空を仰ぐ今日かも

九月二十七日、大津村信義明神祭日参拜、一柳健作家にやどる、そのつとめて

大神のしきます山にやどりしてたゞさす朝日みれば尊し

同二十八日、小篭村北岡儀之助を訪ふ。十月朔日朝歸る。その程酒折山の紅葉を見て詠める。山はその家にさし向へり

八鹽折の酒折山の初もみぢ見つゝ飲む間に日数經にけり

儀之助二郎、歳九なるが賢しき性にて、書よく讀むをききて

種居ゑし其の時よりし思兼の神や蓋しく御靈賜びけむ

歸りの程、布師田村なる高積神社を拜みて

こも枕高御むすびの神社仰げばいよゝ高く尊し

同村葛木男女神社を拜む

瑞垣の久しき時ゆ二ならび鎮りますか男咩の大神

即位は九月二十三日なり。故ありて國君は十月七日に御例の御遙拜あり。依之、御城内諸番所、麻上下著也

吾が君の御心のまに久方の都の空を仰ぐ諸人

○ことやめて　物をいふことをやめて。祝詞「草間之磐根木根立知可岐葉毛乎言止氏云々。」

○しきます　敷くの敬語。しろしめす。

○たゞさす朝日　直接に照らす朝日。古事記「朝日之直刺國、夕日之日照國。」

○八鹽折　八鹽折の酒とは何度も醸した美酒。古事記「醸二八鹽折之酒一。」

○二郎　次男。

○種居ゑし　子種を得たこと。

○思兼の神　高御產巢日神の御子で、優れた才能を持たれた神。

○こも枕　高の枕詞。

○瑞垣の久しき時ゆ　萬葉集卷四「少女等が袖振る山の瑞垣の久しき時ゆ思ひき我は」瑞垣のは久しきの枕詞。

○御心のまに　御心のまゝに。

十月十日ばかり、守の殿、國めぐりせさせ給ふほど、小籠の里なる北岡ぬしの二郎の、歳九ばかりなるが、さとり深くて、多くの書ども讀みおぼえたることを聞召して、辱なくも道のかたへに召して、物賜はれる由聞きて

今ははや空にぞ高く響きぬるなどかたなりの聲と聞きけむ

川原塚芳枝が母の七十賀に詠みておくれる六首の歌

人の親の命幸くと皇神に萬代かねて幣は手向けむ

人の親の酒みづきせず今日のごと萬代かねて榮えまさなむ

人の親のかざしの爲と手折りきつ萬代かねて咲かむ櫻を

人の親の今も聞くごとほとゝぎす萬代かねてかれず啼かなむ

人の親の咲める面わと月の面萬代かねて面がくりせじ

人の親の吉事積むごと白雪も萬代かねて五百重積まなむ

十月ばかり・守の殿、國めぐりせさせ給ふほど、改田の里なる小松榮盛が、年久しく古ごと學びをいそしみ、はた近きわたりの人々をも敎へさとしなどせるを褒めさせ給ひて、かたじけなくも道のかたへに召して、物賜はれる由聞きて、詠みておくれる

○空にぞ高く響きぬる　守の殿の耳に入つたことをいふ。

○皇神に云々　萬葉集卷十三「石田の杜の皇神に幣取り向けて云云。」

○かれず啼かなむ　絕えず啼いてほしい。

○面がくり　顏をかくす。

○吹く風の云々　萬葉集卷一「一つ松幾代か經ぬる吹く風の聲の澄めるは年深みかも」
○神の御書　古事記日本書紀等を指す。
○もとつ人　本つ人。昔相知れる友で、時鳥の聲を聞き馴れてるから昔の友といふ。萬葉集卷十「本つ人時鳥をや稀に見む今や汝が來し戀ひつゝ居れば」
○もとほとゝぎす　もとから聞き馴れた時鳥。萬葉集卷十七「青丹よし奈良の都は古りぬれどもと時鳥鳴かずあらなくに」
○もとの心云々　古今集雜讀人不知「石の上ふるから小野のもとがしはもとの心は忘られなくに」
○言問ひより來　質問に來れ。
○千重の一重　澤山の中の一部分の意。
○片方　一部分或は半分。
○片待つ春　片心に待つ春。
○年のはに　毎年。
○齋瓮云々　萬葉集卷十七「草枕旅行く君を幸くあれといはひべすゑつあが牀邊に」齋瓮は祭に用ゐる土器又は陶器の甕。
○二十餘一つの神社　伊勢、石淸水等のが二十二社を指すのであらう。
○千代松云々　萬葉集卷六「茂岡に神さび立ちて榮えたる千代松の木の年の知らなく」

吹く風の音さへ澄みて年深き小松がうれに玉しつけるも

門人松浦高之が四季の歌を乞へるに書きてつかはしける

春山に咲ける櫻の花のみに思ひて讀むな神の御書を

もとつ人もとほとゝぎす彼すらももとの心は忘れぬものを

秋山に匂ふもみぢ葉しげくとも蹈みな惑ひそ神の直路を

白雪の千重に積れる古言を言問ひより來千重の一重も

十二月晦、述二拙懐一　此冬煩名代勤願濟

おふけなき重荷の片方下に置きて片待つ春の明日たたむとす

弘化五年戊申正月元日試筆

年のはに春はあれども常の異に心ゆたけき春に逢へるかも

三月十七日、內膳君江戸御發馬之時、獻歌

齋瓮を牀邊にすゑて明日よりは祈りつゝ居らむ東へ向きて

二十餘一つの神社の皇神も萬代かねて知らさざらめや

寄木祝　北川善淵七十賀

長人の出で立ち遊ぶ島廻には千代松の木も繁み榮えつゝ

寄弓祝　多田助左衛門六十賀

○葛城の襲津彦　武内宿禰の子で武將であつたから、其の人の持つた强弓を襲津彦眞弓といつた。萬葉集卷十一「葛城の其津彦眞弓荒きにもよるとや君が吾が名のりけむ」
○松といへど云々　まつというて人の來るのを待つのでなくて、松の木陰に千年の齡を待つ意。
○霍公鳥云々　萬葉集卷十九「朝牀に聞けば遙けし射水河朝漕ぎしつゝうたふ船人」
○朝牀にして　朝牀にて。
○標めし野なれば　萬葉集卷八「明日よりは若菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつゝ」
○瑞枝さす若楓の　歸りの序詞。瑞枝は若枝。
○吾が背子に楝は　吾が背子に逢ふ意を掛く。萬葉集卷十「吾妹子に楝の花は散り過ぎぬ今咲けるごとありこせぬかも」
○花の名にあらじ　逢ふといふ意を持てる楝の花にふさはしくもない。

葛城の襲津彦眞弓取り持ちて著せし絃緒のゆるむ日あらめや

寄松祝　多田助左衞門母七十賀

松といへど待つ人はあらず松といひて待つは千歳を松の木の本

四月九日朝、始聞二霍公鳥一作　三日丁 四月節

朝雲にたぐひて名告る霍公鳥きけば遙けし朝牀にして

賀二池田屋孝十郎者六十齡一之時、應レ需、題二若菜籠畫一

年のはに摘めども盡きじ君がため千歳をかねて標めし野なれば

汝がためと千歳をかねて標めし野の春の榮えを先づぞ示さむ

四月二十日ばかり、神田なる山岡盛之進を訪ひけるに、かきつばた、つつじ盛りなりければ詠める。此の家櫻の多き所なりければ

かきつばた丹躑躅さへに咲く宿を櫻とのみは何思ひけむ

その時吉松光德來合ひたりけるが、「瑞枝さす若かへるでも珍らしき君を待ちえて嬉しからまし」とか云へりければ答へがてり詠みて遣はしける

瑞枝さす若楓の歸りきて訪ふべき君に逢へる今日かも

家なる楝の咲ける頃、吉松萬齡のもとへ

吾が背子に楝は家に咲きてあれど見にも來まさず花の名にあらじ

五月五日、村岡弼直が孫の初節供に行きて

萬代(よろづよ)の初めの今日のあやめ酒あやに樂(たぬ)しき宴(うたげ)なりけり

八月十五夜、雲霧蒙昧、月光不レ明焉。邦君去七月十日逝二于江戸邸一、因玆悲涙未レ乾、怏々獨仰二中天一、聊述レ懷作歌

照る月に雲か棚曳く照りたれど吾(あ)が泣(な)く涙目かも迷はす

邦君今玆七月十日、江戸邸にて逝き給ふ、九月三日御遺骸御歸著。同四日御葬禮。同六日より八日まで眞如寺に於て設齋、仍レ之八日御墓を拜す

石隱(いはこも)りいます坂路(さかぢ)を歎きつゝ上(のぼ)り下(くだ)りに涙拭(のご)ひつ

賀二葛西新太郎八十算一

八百世(やほよへ)經て八十神(やそかみ)たちに八十路(やそぢ)より八十玉串(やそたまぐし)を八百世(やほよ)手向けよ

十二月二十九日、暖如二春日一、仍述二拙懷一作

うべ今日は雪退(の)くらしも鶯の啼かむ春べの明日たたむとす

○あやめ酒　菖蒲の根を漬けた酒

○邦君　山内豐熈。

○石隱りいます　墓下に埋もれ給ふの意。

○上り下りに　萬葉集卷十「答へぬにな呼びとめそ呼子鳥佐保の山邊を上り下りに」

○八十玉串　澤山の玉串。玉串は榊の枝に木綿又は紙を附けて、神に捧げるもの。

# 下

嘉永二年己酉正月元旦試筆

人舊らす古言の屋もしかすがに春立つ今日は改まりけり

三月七日、手島俊藏𥡴魚入門之時報ニ來贈一之歌

わくらばに靈合ふ友を待ちえしは吾が言靈のちはひならずや

四月十四日朝、始聞ニ霍公鳥一 今日丁ニ立夏節一

朝雲に啼く霍公鳥朝牀に遙かに聞ゆ朝戸開きね

五月十四日上書後記歌

天地の神し和まば萬代に國とも家と榮えざらめや

賀ニ讃岐國高松家士神崎市郎大夫七十齢一

粟島に來よする浪の五百重浪五百世も千世も見つゝ偲ばせ

末廣といふ猿樂の圖

末廣き御世の榮えを春日山神に祈りて吾も諾はむ

和ニ廣瀨典膳正仍入門之時贈來歌一

松の花花かずにしもあらぬ身を誰か慕はむ君にしあらずて

---

○人舊らす　自分を古物にする。
○古言の屋　昔の事を研究する自分の家。
○靈合ふ友　氣がある人。
○朝戸開きね　萬葉集卷八「事しけみ君は來まさず時鳥汝だに來喧け朝戸開かむ」
○粟島　讃岐國屋島の北方の島（仙覺抄）
○末廣き云々　狂言末廣「傘をさすならば春日やんま、これもかみのちかひこ、人がかさをさそならおれもかささそうよ云々。」春日山なる三笠山に傘を掛く。
○松の花云々　萬葉集卷十七「松の花花數にしも吾が背子がおもへらなくにもこな咲きつゝ」松の花は見所もないから花の數にも入らない、それこ同じ樣に物の數にも入らぬ自分こいふ意。

飯沼直澄に誂へられてよめる藤、山吹、躑躅の歌

藤の花見つゝぞ人は人習ふ吾は書見て神ならふなり

色深く心にしめて山吹のやむ時もなくみ書をば見よ

白躑躅知らぬ山路は問ひてまし誰に問はまし吾が古言を

不盡山圖　野口直馨需

書き取りしその圖としも思ほえず直向ふごと仰ぎ見るかも

壽老人圖　同上

掻垂りし八握鬚さへ神さぶる翁や何ちふ世の長人ぞ

幾世經て天道かよひし八握垂る髯さへうたて神さぶる翁

胸前に垂りし八握の眞白鬚知らぬ昔のこと語れ翁

賀二若村九兵衛七十算一之時、題二若松之圖一

何時も〳〵常若松の若えませゆつ岩群に草むさずして

題二菊蕋一

吾が背子が世を長秋にかざせとか散らくも知らに白菊の花

立ちかへる心も知らに白菊の花開く園に此の日くらしつ

原　月　大學君八月十五夜御兼題



○習ふ　學ぶ。

○山吹のやむ時もなく　萬葉集卷十「斯くしあればいかで植ゑけむ山吹のやむ時もなく戀ふらく思へば」

○山吹の　やむをいふ爲においた。

○白躑躅知らぬ　萬葉集卷十「をみなへしさき野に生ふる白躑躅知らぬこともていはれし吾が背」

○白躑躅　知らぬをいふ爲においた。

○うたて　普通ならず奇しく。

○常若松の　常に瑞々しい松の如く。

○ゆつ岩群云々　萬葉集卷一「河上のゆつ岩群に草むさず常にもがもな常處女にて」

○立ちかへる　家へ歸る。

兒負原おして照りたる此の月にかゞよひわたるその奇御玉

山月　登五郎樣八月十五夜御兼題

照り出づる月の面わもこの夜らは取りよろひけり天の香具山

寄蟲祝　桑名權藏母六十賀

長人をことほぐ今日の壽言に競ひて鳴く蟲の聲かも

寄菊祝　同上

引きうゑし屋前のふさへや一本の菊は千本にいや榮ゆらむ

浦鶴鳴レ月　大學君九月十三夜御兼題

百船の楫の音やみて月夜よき三犬女の浦は鶴のみぞ鳴く

野亭月　登五郎君九月十三夜御兼題

月により野守に今夜宿借りてまことも露を玉とぞ吾が見る

九月ばかり、西の御館の殿より、九首の題を賜りて、近き世風によめと仰せられければ

山館月

のかれこしみ山の奧も眺めやる月は浮世のほかならぬかな

野徑曉月

○兒負原云々　萬葉集卷五山上憶良の鎭懷石の歌の序「筑前國怡土郡深江村子負原臨海丘上有二二石一……古老相傳曰、往者息長足日女命(神功皇后のこと)征二討新羅國一之時、用二茲兩石一、插二著御袖之中一以爲二鎭懷一云々。」「天地のともに久しくいひつげと此の奇御玉しかしけらしも」

○取りよろひけり　よい眺めを備へる意。萬葉集卷一「大和には羣山あれどとりよろふ天の香具山云々。」

○引きうゑし　引き拔いて來て植ゑた。

○ふさへ　自慢する意。おさへ(鎭)の誤り(古義)。

○百船の云々　萬葉集卷六「まそかゞみみぬめの浦は百船の過ぎてゆくべき濱ならなくに」

○三犬女の浦　敏馬。攝津國武庫郡。

○露を玉と云々　萬葉集卷十「秋萩に置ける白露朝な〳〵玉とぞ見ゆる置ける白露」

○のがれこし云々　新續古今集雜淨阿上人「遁れ來し深山の庵や中中に寂しからずは浮世ならまし」

照る月の影か玉かとたどるまに露けさまさる野路のしのゝめ

山家紅葉

里遠み柴のあみ戸の明けくれにひとり御山の木々のもみぢ葉

南海月

照る月のはつる港は海なれば逃げよといはむ山の端もなし

野亭聞レ蟲

草まくら結ぶ野中の庵ちかくよすがら友とすだく蟲の音

關路秋風

秋風の身に寒ければ戸ささねど夜半には越えじ白河の關

雨中燈

夜もすがら雨のふる屋の閨の中にかゝげて友と對ふともし火

寄鶴戀

あしたづの鳴く音に我もおとらじな波のよる／＼妻を戀ふとて

山家戀

契りをばよもたがへじと松の戸のあけぬ限りをなほたのむかな

十二月十八日、夜半に雪の降れるを見て

○たどるまに　迷ひ思ふうちに。
○柴の編戸の明けくれに　新古今集雑□圓法師「眺めわびぬ柴の編戸の明方に山の端近く殘る月影」
○ひとり御山　新古今集雑鴨長明「終夜ひとりみ山のまきの葉に曇るもすめるありあけの月」
○照る月の云々　土佐日記「照る月の流るゝ見れば天の川出づる港は海にざりける」はつるは泊つるで、行きつく意。
○逃げよと云々　伊勢物語「飽かなくにまだきも月の隱るゝか山の端逃げて入れずもあらなむ」
○雨のふる屋　雨の降ると古屋とを掛く。
○友と　友として。
○波のよる／＼　波の寄ると夜々とを掛く。新古今集讀人不知「うと濱の疎くのみやは世をば經む波のよる／＼逢ひ見てしがな」
○あけぬ限り　夜の明けないうちの意を掛く。

○くだち行く齢　衰へ行く齢。

○すり木　すりこ木。

○三島江の玉江の菰　萬葉集卷七「三島江の玉江の菰を標めしよりおのがとぞ思ふ未だ刈らねど」三島江は攝津國三島郡。

○うたてけに　いよ／＼ます／＼

○歎くなげき　萬葉集卷七「琴とれば歎き先立つ蓋しくも琴の下樋に妻やこもれる」

○苔むさぬ云々　萬葉集卷一「河のべのゆついはむらに草むさず常にもがもな常處女にて」

○この丘に云々　萬葉集卷一「この丘に菜摘ます兒家のらへ名のらさね云々。」

---

夜を寒み寝をねかねつゝ出で見れば小竹葉眞白にみ雪降りたり

　十二月三十日、述二拙懐一

くだち行く齢も知らに童等と明日の春べを片待つ今日ぞ

　嘉永三年庚戌正月元旦試筆

吾が公の御代しろしめす萬代の春の始めは今日にしあるべし

　畫題　すり木に羽生えて飛び行くかた

いかにせむ汝故われもかくばかり練りし心の天つ空なる

　正月十一日、弘瀬某の家に女子生まれけるが名を玉江と付けたるよし、
　歌乞ひおこせければ詠みて遣はしける

萬代の春をこめつゝ三島江の玉江の菰は萌えそめにけり

　題二娘子彈琴畫一

うたてけに歎くなげきの先だつは聲知る人を待つ身なればぞ

　慶賀一首

苔むしし神のちはひと苔むさぬ常壯子にて常石にもがも

　詠二若菜一首

この丘に春菜採ます兒家問はば不禮と吾を思ほさむかも

詠レ月一首

月讀の持たる越水得てしあらば醜の翁もまた變若なむか

吉川直繁七十賀、寄二太刀一祝

燒太刀の稜の堅らに打ち堅め鍛ふ壽は妹名根がため

同人妻六十賀、寄レ絲祝

荒染の手染の絲の長き世に吾も幸はむ夫ながみために
鍛へてし夫なにたぐひて延ばへまし手染の絲の長き壽を

三月二十九日、始聞二霍公鳥喧一作　去二十六日丁二首夏節一

春の日も未だ盡きねば思はぬに山霍公鳥來鳴きとよもす

湊　月　大學君八月十五夜御兼題

吾が船は中の湊に榜ぎ泊てよ足れる今夜の月の面見む

水上月　登五郎君八月十五夜御兼題

この川の水を清みかこゝにしも月讀壯子天降りましけむ

渡　月　大學君九月十三夜御兼題

何ものか今はとがめむ居明かして穴の渡に月夜飽かまし

瀧　月　登五郎君九月十三夜御兼題

○月讀の云々　萬葉集卷十三「月讀の持てる越水い取り來て君にまつりてをちえしむもの」
○燒太刀　燒いて刃をつけた太刀
○荒染　淺紅に染めること。
○手染の絲云々　萬葉集卷七「河内女の手染の絲をくりかへし片絲にあれど絕えむと思へや」「絲の」までは「長き」の序詞。妻なれば絲に寄せて祝つた。
○幸はむ　幸福を祈らう。
○鍛へてし　夫の方は太刀に寄せて祝つたのでいふ。
○夫なにたぐひて　夫と共に。
○延はへまし　長生を希ふ意。
○盡きねば　盡きないのに。
○中の湊　讃岐國仲多度郡。萬葉集卷二「中之水門ゆ船浮けて吾が榜ぎ來れば云々」
○足れる今夜の月　滿月なればいふ。

吉野河よしゑ更くともよくそ見す流るゝ瀬もよし照る月もよし

爲二森本維善一書下寫井二爽神一詞上之時、聊附二于紙尾一歌

稱辭かくし竟らば大穴牟遲少御神のちははざらめや

爲二島崎正徵愛レ龜述二祝意一歌

言壽の多かる屋戸の徵とし龜さへこゝた集ふ此の池

十二月三十日述懷

明立たば先づ開く花の枝に居て先づ鳴く鳥の聲を聞かむぞ

嘉永四年辛亥正月元旦試筆

春されば先づ鳴く鳥にさきだちて先づ咲草のにほふわが屋戸

四月朔、述二拙懷一

昨日こそ春は立ちしか霍公鳥鳴くべき月にはやなりにけり

題二菊花畫一　横山某需

開きしより散るちふことを習はずて世を長秋の花ぞこの花

四季歌　顯需

咲く花は見ずてありとも恐きや神の御典を見ずてあらむかも

はしきかも本霍公鳥幣はせむもとの心を吾に聞かせよ

---

○吉野河云々　萬葉集卷一「よき人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」
○よしゑ　よしや。
○稱辭云々　「稱辭竟へ奉らくと宣る。」との祝詞の用語を指す。
○先ず開く花　梅。萬葉集卷八「今のごと心を常に思へらば先づ開く花の土に落ちめやも」
○先づ鳴く鳥　鶯。萬葉集卷十「春されば先づ鳴く鳥の鶯の事先きだちし君をし待たむ」
○先づ咲草の　萬葉集卷十「春されば先づさきくさの幸くあらば後にもあはね戀ひそ吾が妹」
○霍公鳥云々　萬葉集卷十八「藤波の咲きゆく見れば時鳥鳴くべき時に近づきにけり」
○はしきかも　いとしい。
○本霍公鳥　古馴染の時鳥。
○幣はせむ　御禮として何かあげよう。

もみぢ葉はうつろひぬとも古言に染みし心のうつろはめやも

降る雪は千重に降りしけ古言の千重の一重を問ふ人もがも

大野某母七十賀

巖なす常石堅石に座せ君石長姫に手向よくして

四月十四日朝、始聞二霍公鳥一作　六日丁二立夏節一

旦雲の輕曳く峯の彼方に鬱にし名のる霍公鳥かも

賀二大町正矩翁七十算一　國君、嘗褒二賞正矩之夙勵、武技至レ老不レ慢賜以二金子若干一、仍歌詞及レ之

建布都の神の幸ある身にしあれば黃金の花の常花にして

謹題二八幡宮圖一　應二松本弘蔭需一

たまきはる幾世を經てか八幡山木末あまねく神さびにけむ

月　明　登五郎君八月十五夜御兼題

今夜らの月の光に片去りて天にかゞよふ星もさね無し

年々見レ月　大學君八月十五夜御兼題

八十秋の月をばめでき今の如八百秋の夜に見とも飽かめや

船中見レ月　福岡家出題

吾が船に月人壯子乘りてこそ舳向け滂ぎつゝ樂しき竟へめ

---

○降る雪は云々　萬葉集卷二十「降る雪は千重に降り重け戀しくの多かる我は見つゝ偲はむ」

○巖なす云々　萬葉集卷六「春草は後はうつろふ巖なす常磐にいませ貴き吾君」

○石長姫　大山津見神の子で、木花咲耶姫の姉。古事記「石長比賣を使はしては天神の御子の命は雨零り風吹けども恆へなること石の如く常堅に動かずましませむ云云。」

○鬱にし名のる　疎かに鳴く。

○建布都の神の幸ある身　武藝に惠まれた身の意。建布都の神は建御雷之男神。

○黃金の花の　金子を指し、その如く。

○たまきはる　世の枕詞。

○幾世を云々　萬葉集卷十五「吾が命をながくこのしまの小松原幾世を經てか神さびわたる。」

○片去りて　片方へ離れ去って。

○さね無し　まことに無い。

○八十秋　八百秋と同じく數多くの秋をいふ。

○舳向け滂ぎ　萬葉集卷二十「朝凪に舳向ひ滂がむと云々。」

○樂しき竟へめ　樂しさの限りを盡くさう。

毎家賞レ月　大學君九月十三夜御兼題

階別に家は異なれど照る月をめづる心は同じからずや

海邊月　登五郎君九月十三夜御兼題

大海の邊に向き立ちて見る月のあな面白し乘らば如何ならむ

嶺月照レ松　福岡家出題

立出て尾の上の木末照る月に嬬松原も隱れざりけり

詠松

足曳の山松が根のねもころに常に見れども珍らし御典

詠竹

彼方のいさゝ竹村いさゝかも虚言いふな神習ふ人

詠梅

吾が屋外に咲きたる梅の花のみに思ひて御典讀むな世の人

應ニ釋宥識需一詠レ菊

知らさねば知らずて來しを白雲の立たまく知らに白菊のもと

賀ニ平井金進六十算一

八千年の齡くらべて高坂の山松かげに住む人や誰

○階別に　階級別に。
○足曳の山松が根の　「ねもころに」の序詞。
○常に見れども云々　萬葉集卷三「青山の嶺の白雲朝にけに常に見れども珍らしき吾君」
○彼方のいさゝ竹村　「いさゝかも」の序詞。
○神習ふ人　神典を學ぶ人。
○梅の花のみに　萬葉集卷八「吾妹子が形見の合歡木は花のみに咲きて蓋しも實にならじかも」
○白雲の「立つ」の枕詞。
○立たまく知らに　立ち去ることも忘れて。

那須宗高對扇的　應久萬氏需

那須の子が名さへ功も浪のむた磯本ゆすり立ててけらずや

源兵庫頭對鵺　同上

鵺といふ大妖物も大王の任のまに〳〵唯一矢にて

佐々木高綱務道川先驅　同上

物部の八十氏河は絶ゆるとも佐々木建士が名は絶えめやも

讃竹叢　應山口來青需

吾が屋外のいさゝ村竹いさゝめに慕はむ爲と生ひさせめやも

十二月晦日述懷

月日讀み吾が待ちこひし佐吉草の開かむ春日を明日といはずやも

嘉永五年壬子正月元旦試筆

かくのごと先づ開く花の裏咲みにゑみつゝ今日を待ちてけらずや

都立春

春立つと拜む朝にいそはきて參る容儀を見れば貴し

初春霞

降りおけるはだれも消えて向峯に霞きらへり春といはむとや

---

○磯本ゆすり云々　萬葉集卷七「大海の磯本ゆすり立つ波の寄らむと思へる濱のさやけく」
○浪のむた　浪と共に。
○磯本　磯の、波打ち際。
○源兵庫頭　源三位頼政。兵庫頭は兵庫寮の長官。
○大王の任のまに〳〵　萬葉集卷三「ものゝふの臣のをとこは大王のまけのまに〳〵聞くといふものぞ」
○任のまに〳〵　任命のまゝに
○物部の八十氏河　萬葉集卷三「物部の八十氏河の網代木にいざよふ浪の行方知らずも」「物部の」は八十氏の枕詞。八十氏河に宇治河を掛く。
○吾が屋外のいさゝ村竹　いさゝめにの序詞。萬葉集卷十九「我が宿のいさゝ村竹吹く風の音のかそけきこのゆふべかも」
○いさゝめに　假初に。
○月日讀み云々　萬葉集卷十七「春花のうつろふまでに逢ひ見ねば月日讀みつゝ妹待つらむぞ」讀みは數へる意。
○花の裏咲みにゑみつゝ　花の如く心の中にうれしく思ひながら。
○いそはきて　爭ひ勤めて。

橋邊柳

靑柳折りて縵き大橋の頭の遊びに此の日暮さむ

雨中柳

春の雨は然な降りそね吾が屋外の梅咲きたりと告げてやりしを

川上春月

馬駐めて暫し水かへ春霞流る川湍に月夜ゆづれり

風前梅

春風し散らさばよしゑ梅の花妹があたりに吹きて散らさね

關路鶯

とゞめてし紀の關守は斯くのごと初鶯の鳴くを聞けとか

瀧邊霞

磐牀と凝りし冰解けて落ちたぎち瀧つ河瀬に霞流るも

旅泊夕鶯

鶯の聲聞きがてり泊てをりて此の島陰にこの日暮しつ

夜梅

梅の花かぐはしき夜はいとのきて往き過ぎかねつ妹が家のあたり

○大橋の頭の遊び　九九頁大橋の歌參照。
○梅咲きたりと　萬葉集卷六「吾が宿の梅咲きたりと告げやらば來ちふに似たり散りぬともよし」
○馬駐めて云々　古今集卷二十「ささの隈ひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む」萬葉集卷十二では「さひの隈檜隈河に駒とめて駒に水かへ我よそに見む」とある。水かへは水を飮ませよの意。
○春風し　「し」は助詞。
○散らさばよしゑ　散らすならば仕方がないが、散らすにしても。
○散らさね　散らせ。
○とゞめてし云々　萬葉集卷四「吾が背子があとふみ求め追ひ行かば紀の關守いとゞめてむかも」
○磐牀と凝りし氷　萬葉集卷一「磐床と川の氷凝り冴ゆる夜云々。」
○落ちたぎち云々　萬葉集卷六「山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも」
○いとのきて　甚たしく。
○往き過ぎかねつ云々　萬葉集卷十四「かみつけぬ伊香保のねろにふろよきの往き過ぎがてぬ妹が家のあたり」

初春雨

ふゝみつゝ今日か〳〵と梅柳ふる春雨を待ちてけらずや

田家鶯

鶯のしば鳴く聞けば金門田を荒すきかへす時近づくも

春月越ㇾ關

關守は目かれもせぬを春の夜の霞がくりに月は越えけむ

早春眺望

をち方のあらゝ松原今日見れば霞きらひて眉曳なすよ

遠山殘月

この夜らは早明けぬるを關しありや西の山邊に月のいさよふ

梅　大黒巖出題

開き出たる末枝の梅は鶯の待ち歡べる花にしあらずや

寄松祝　伊藤某母七十賀

長人の長き壽とみ園生の松の常磐をいかゞ分たむ

三月十六日朝、始聞二霍公鳥一作　十七日丁二立夏節一

夏もまだ立ちも敢へねば思はぬに山ほとゝぎす來鳴きとよめつ

---

○ふゝみつゝ　つぼみつゝ。
○しば鳴く　頻りに鳴く。
○荒すきかへす　最初に鋤くをあらすきといつて、あら〳〵と鋤く意。
○目かれもせぬを　目離れもせぬを。目を離す事なく、始終注意してゐるのに。
○霞がくりに　霞に隱れて。
○をち方のあらゝ松原　日本書紀「遠方のあらゝ松原松原に云々。」あらゝはまばらの意。
○眉曳なすよ　眉曳のやうだ。眉曳は眉毛を剃つたあとに、眉墨で描いた三日月形の眉。
○關しありや　人を引留める關があるのであらうか。
○いさよふ　進まずためらふ。
○末枝　上の枝。

○松のさ枝　松に待つを掛く。萬葉集卷二十「八千草の花はうつろふときはなる松のさ枝を我は結はな」
○我が門に　萬葉集卷十「我が門に禁田を見れば穗の内の秋萩すゝき思はゆるかも」
○禁田　守る田。
○山越えて云々　萬葉集卷七「山越えて遠つの濱のいはつゝじ我が來るまでふゝみてありまて」
○來しくもしるく　來たことも事實に現はれて。
○靡け前の繁山　萬葉集卷二「夏草の思ひしなえてしぬぶらむ妹が門見む靡けこの山」靡けは横に伏せの意。
○舊りたれど云々　萬葉集卷六「しまらくも行きて見てしが神名火の淵はあさびて瀨にかなるらむ」同卷三「吾が行きは久にはあらじ夢のわた瀨とはならずて淵にあるかも」
○神名火の淵　大和國生駒郡。
○楚取る云々　一〇六頁楚取るの歌參照。
○曲廬　曲りゆがんだ小家。
○明闇の云々　萬葉集卷十「明闇の朝霧がくり鳴きて行く雁は我が戀ふる妹に告げこそ」明闇は夜の明けようとして未だ少し闇い頃。
○將軍家之喪　第十二代家慶を指す。

寄松祝　爲二釋有識一所レ詠

萬代を松のさ枝を引結ぶ心は君を幸はひませと

田家月　大學君八月十五夜御兼題

我が門に禁田は刈らじ秋の穗を照りたる月夜飽くまでは見む

濱月　登五郎君八月十五夜御兼題

山越えて來しくもしるく霰降り遠つの濱は月夜さやけし

山家月　大學君九月十三夜御兼題

妹があたり照れる今夜の月も見むしばしは靡け前の繁山

淵月

舊りたれど瀨とはならずて照る月は今もゆづれり神名火の淵

嘉永六年癸丑正月元日

楚取る里長の聲いまは止みて曲廬のうちも春立ちにけり

四月朔曉、始聞二霍公鳥一作　三月二十九日丁二立夏節一

ほとゝぎす待ちしもしるく明闇の朝雲がくり今ぞ鳴くなる

八月十五日、此夜月光清明也。乃聊述レ懷作

比日居二將軍家之喪一不三與レ人樂二之、因レ是會二此詠一也。源公薨者實去

七月二十七日也。

さやに照る今夜の月を櫪の實のたゞ獨りにて見らくし惜しも

九月十三日、此夜月光淸明也。仍聊述懷作　同前

眞十鏡照れる月夜の淸けくにしゑや今夜も吾が獨り見む

磯　月　登五郎君八月十五夜御兼題

明日の夜ゆ夢のみに見む竹島の磯越す浪に照れる月夜を

月前鹿　同前

この夜らの月おもしろみ出でて來て鹿鳴く山邊に近づきにけり

海邊鹿　西御館御兼題

大島の磯もとゞろに鳴く鹿の聲聞かすやも夜舟榜ぐ兒等

江林にやどる小牡鹿の鳴く聲を夜舟に乘りて榜がくしよしも

岡初霜

今旦見れば初霜白し今よりは岡の葛葉も色づきぬべく

飛鳥風うべも寒えけり此の朝け行廻岳に置ける初霜

船路時雨

竹敷の黄葉めでつゝ榜ぎ來れば上方山ゆ時雨降りくも

---

○櫪の實の　獨りの枕詞。

○眞十鏡　照るの枕詞。

○明日の夜云々　萬葉集卷七「夢のみにつぎて見ゆれば竹島の磯越す波のしく〳〵思ほゆ」

○明日の夜ゆ　明晩から。

○竹島　近江國高島郡。

○鳴く鹿の云々　萬葉集卷十「足曳の山のさかゆに鳴く鹿の聲聞かすやも山田守らす兒」

○江林に云々　萬葉集卷七「江林に宿れしゝやも求むるによき白栲の袖まきあげてし待つ吾が背」江林は奥深くない林。

○榜がくしよしも　聞かくしよしもの誤りか。

○行廻岳　ゆききの岳。萬葉集卷八「飛鳥河行廻岡の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ」行き廻れる岳ともいふが、地名として大和國高市郡の市往岡ともいふ。

○竹敷の云々　萬葉集卷十五「竹敷の上方山は紅のやしほの色になりにけるかも」竹敷は對馬國。

朝開き榜ぎ出てくれば風早み時雨の雨に衣濡れにけり

名所千鳥　西御館御兼題

起きよ〱さ夜は明けぬと佐保わたり吾家の上に鳴く千鳥かも

國引の昔慕へや飫宇の海の河原の千鳥汝もしば鳴く

名所時雨　同上

笠島をよそのみ見つゝ久堅の天の時雨にぬれて行く吾は

四極より時雨ふりくも吾が船を早榜ぎよせよ笠縫の島

風まじり時雨ふり來つ笠の山著ずては過ぎじ許しなくとも

十一月十五日、賀二大倉氏男名龜袴著、女名米背合一歌

いざさらば龜の齡にくらべてむ百の俵の米のあり數

冬戀　西御館御兼題

吾が門の淺茅が上に降る雪の消ぬ心がに思へど逢はぬ君かも

小竹の葉に降れるはだれのいちじろく吾が戀ひめやもその隱妻

朝氷　同上

朝戸開けて出で見る庭に木の葉落ちて池の薄氷凝りわたれり

磐牀と河の氷いたく冰れればこれの朝川わたりかねつも

---

○朝開き云々　萬葉集卷十五「朝開き榜ぎ出て來れば武庫の浦の汐干の潟に鶴が聲すも」朝開は朝の船が港を出て行くこと。「朝開き」が「眞楫ぬき」とある本もある。
○起きよ〱云々　萬葉集卷十六「我が門に千鳥しば鳴く起きよ起きよ我が一夜妻人に知らゆな」
○國引の昔　八束水臣津野命が、國新羅の一角に三身の綱を掛けて、國來國來と引き寄せて出雲國が出來たといふ出雲風土記の話。
○飫宇の海云々　萬葉集卷三「飫宇の海の河原の千鳥汝が鳴けば吾が佐保河の思ほゆらくに」飫宇は出雲國八束郡。
○笠島　武藏國荏原郡で、荒藺崎の笠島を指すか。被る笠に縁を持たす。
○四極より云々　萬葉集卷三「四極山打越え見れば笠縫の島榜ぎかくる棚無し小舟」四極、笠縫は攝津國東成郡。
○笠の山　三笠山。萬葉集卷三「雨降らば著むと思へる笠の山人にな著せそ濡れはひづとも」
○淺茅が上云々　萬葉集卷八「松影の淺茅が上の白雪を消たずて置かむことはかもなき」「降る雪のまでは「消ぬ」の序詞。
○消ぬがに思へど　消えむばかりに思ひ戀へど。消えは雪の消える意に心の消え失せる意を掛く。
○小竹の葉に降れるはだれの「いちじろく」の序詞。
○いちじろく　目に立つて。
○隱妻　親が嚴しく守つて逢ひ難い女。
○木の葉落ちて　萬葉集卷四「鴨鳥の遊ぶ此の池に木の葉落ちて浮

古寺雪　同上

雪により吾は立ち寄らむ橘の寺の長屋に兒等はなくとも
櫻井にしづく白玉しらじらと豐浦の寺の雪にかゞよふ

海邊雪　同上

遠近の磯山きらひ降る雪に袖さへ濡れて浮寢す吾は
降りおける雪のはだれは荒磯邊に依りくる浪を亂しつるかも

十二月晦日、述懷

梅の花酒に浮べて思ふどち飮まむ春べを明日といはずやも

嘉永七年甲寅正月元日

親族どちい寄り集ひ來新しき年の始めの酒ほがひせむ

正月五日朝、始聞レ鶯作

春されば先づ待つ吾と知ればか先づ鳴く鳥のこゝにしも來し

題二乞巧奠畫一　宮地守遠所誂

折延へし絲の絶えずて長き世を棚機女に吾も借らまし

賀二松村善平母六十齡一

常磐なす松のさ枝を結びつゝ千代をぞ祈る人の祖のため

---

べる心吾が思はなくに」
○磐狀と云々　一五一頁盤狀との歌參照。
○朝川　朝の川。
○橘の寺云々　萬葉集卷十六「橘の寺の長屋にわがゐねしうなゐはなりよ髮あげつらむか」橘の寺は大和國高市郡。
○櫻井に云々　續日本紀「葛城寺の前なる豐浦寺の西なるや……櫻井にして白璧しづくや好き璧しづくや云々。」豐浦寺は大和國高市郡
○きらひ　霧らふ。打ち霞る意。
○浮寢す　寢所の一定しないこと
○梅の花云々　萬葉集卷九「杯に梅の花浮けて思ふどち飮みての後は散りぬともよし」
○親族どち云々　萬葉集卷九「親族どもい寄り集ひて長き代に云云」い寄りの「い」は助詞。來は來れの意。
○酒ほがひ　酒宴。
○乞巧奠　七夕祭。
○折延へし　長く續く。
○常磐なす云々　一五一頁萬代をの歌參照。
○千代をぞ云々　伊勢物語「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため」

賀二諸木村八幡宮祠官高橋越後六十算一

大神のちはひのまにま萬世に眞幸くまして幣は手向けよ

朝さらず神の御前に齋串立て幾世をかねて持ち齋はらむ

賀二朝倉村長田小四郎六十壽一

天津羽々神のちはひと千代は經む祈る御民等の心足らひに

述二拙懷一

頑狂れさどひし罪を早知りて贖ひ奉れ亞米利加奴

神風のかしこき事を知らずかもたはれ言いふ狂亞米利加

あなあはれ鈍や亞米利加神風の恐こきことを汝は知らずやも

神風に息吹きやらはれ石著きつゝ後悔いむかも鈍の亞米利加

慨きや醜亞米利加い又も來て醜の醜言囀るなゆめ

神風を和め奉りて皇邊に吉くして參る來亞米利加奴

神風を和め奉れと諭せども豈悟らじが鈍の亞米利加

四月十三日、偶出二于草園一摘レ茶之時、始聞二霍公鳥一作　十日丁二立夏節一

ほとゝぎす鳴きそむる音に驚きつ目覺草を出でて摘むなべ

賀二徳永某妻六十齡一之時、應レ需賦二寄レ鏡祝之題一

○ちはひのまにま　幸福を與へ給ふに從つて。
○齋串　幣や玉を懸けて神に捧げる串。榊や小竹等で作る。
○持ち齋はらむ　物忌みする。
○天津羽々　土佐國土佐郡朝倉村に鎭座する朝倉神社の祭神、天津羽々の神。
○心足らひに　滿足するやうに。
○拙懷　嘉永六年六月ペルリ浦賀に來り、安政元年正月再來したので、憤つて歌つた。
○頑狂れ　續紀にある語。頑愚。
○さどひし罪　惑ひし罪。
○たはれ言　たはけた言。
○鈍や　馬鹿な奴だ。
○息吹きやらはれ　吹き追ひやられ。
○石著きつゝ　沈沒しての意。
○慨きや云々　萬葉集卷十「慨きや醜時鳥今こそは聲のかるがに來喧きとよまめ」醜は惡み罵る意。「い」は助詞。
○摘むなべ　摘むやさき。

長人の朝影うつる鏡には萬代經ともちりもすゑざり

題二酒瓢一

銀も黃金も玉もよしゑやし飲みての後は欲しけくもなし

少將公賞二野村御楯之奇齡一（于時九十二歳）賜以二金若干一聊陳二賀辭一贈

くがね花いや常花をとこしへに插頭せとにあらし今も見るごと

初春鶯

吾が屋どの植木の木間を木傳ひて鶯鳴くも春と言はむとや

初春鶯

春さらば先づ咲く梅を手折り持ちて千代の頭刺の初めにはせむ

惜花

さくら花咲き散りすぎぬ唯一目君に見せむと思ひしものを

池蓮

御佩を劍の池の花蓮咲くと人告ぐ馬に鞍おけ

納涼

吹く風の聲をすゞしみ松陰に紐解き放けて遊ばくよしも

初秋霧

---

○朝影　朝の姿。
○銀も黃金云々　萬葉集卷五「銀も黃金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」
○少將公　山内豐信。
○くがね花　黃金花。金子のこと。
○いや常花　愈永久に咲く花で金子のことを指す。
○植木の云々　萬葉集卷二十「打靡く春ともしるく鶯は殖木の木間を鳴き渡らなむ」
○さくら花云々　萬葉集卷十「梅の花咲き散り過ぎぬしかすがに白雪庭に降りしきにつゝ」
○唯一目云々　萬葉集卷十七「山峽に咲ける櫻を唯一目君に見せてば何をか思はむ」
○御佩を云々　萬葉集卷十三「御佩を劍の池の蓮葉に云々。」御佩をは劍の枕詞。劍の池は大和國高市郡。
○馬に鞍おけ　賴政「花咲かば告げよといひし山守の來る音すなり馬に鞍おけ」
○紐解き放けて　容態などはかまはず打寛いで。

○今よりは云々　萬葉集卷十五「今よりは秋づきぬらし足引の山杉陰に日ぐらし鳴きぬ」
○女郎花云々　萬葉集卷十七「日ぐらしの鳴きぬる時はをみなへし咲きたる野邊を行きつゝみべし」
○露負ひて云々　萬葉集卷十四「大殿の砌しみゝに露負ひて靡ける萩を云々。」
○しみゝに　繁く。一杯にの意。
○手束杖腰にたかねて　萬葉集卷五「手束杖腰にたかねて云々。」杖を腰に束ねて。
○なりてしが　なりたいものだ。
○夜ならべて　幾夜も。
○した悒鬱かりし心　心中鬱陶しかつた心。

今よりは秋づきぬらし妹が家の門田の穂の上今旦はきらへり

女郎女

秋の田を見にこそ來しか女郎花咲きたる野邊に此の日暮しつ

朝萩

朝戸あけて出で見る庭に露負ひて枝もしみゝに萩が花咲く

見月

この夜らの月おもしろみ手束杖腰にたかねて出でて來にけり

田月　登五郎君八月十五夜御兼題

山田守る翁に今夜はなりてしが穂の上を照らす月夜飽くべく

比日陰雨、至二三五夜一天清明、月色無レ雙、對二此美興一聊述レ懷

夜ならべてした悒鬱かりし心さへ今宵はなぎぬ照る月を好み

田月　八月十五夜福岡家兼題

秋の穂の八束穂の上に照る月を如何に偲べや山田守らす兒

月前眺望　登五郎君九月十三夜御兼題

天の原とわたる月の光には影とも背とも隈も落ちずけり

九月十三夜、少陰、仍聊述レ懷作

幣はせむこの月の面に居る雲を氣吹き拂ひぬ科戸邊の神

同夜臨レ更、陰雲稍晴、仍又作

乞ひ祈みし心もしるく今しきは天雲晴れて月の面見ゆ

山月　九月十三夜福岡家兼題

新玉の新年山に照る月は國の榮えを見よとにあるべし

橋上月　西御館御兼題

月もよし瀨の音も淸し狹丹塗の大橋の上に此の夜明かさむ

近江の海押照る月を面白み瀨田の長橋過ぎがてぬかも

名所鹿　同上

彌彥の神の麓は鳴く鹿の聲すら〲に神さびにけり

いにしへに戀ふとにしあらしさを鹿は今も鳴きけり高野原の上

海上霧　同上

大海の邊にも沖にも霧立ちぬ吾が船泊てむ磯の知らなく

秋旅行　同上

はろ〲に家を思ひ出秋山のしたびが下に立ち歎くかも

旅泊秋雨　同上

○幣はせむ　御禮の捧物はするから、さて、科戸邊の神に祈る意。
○この月の面云々　萬葉集卷十一「遠妻のふりさけ見つゝ偲ぶらむこの月の面に雲なたなびき」
○科戸邊の神　大和國龍田に鎭座する風神。
○今しきは　今は。「しき」は强め詞。
○新玉の　「とし」の枕詞。
○新年山　土佐國長岡郡。
○狹丹塗の大橋　萬葉集卷九「しなてる片足羽河の狹丹塗の大橋の上ゆ云々。」狹丹塗は赤塗。
○彌彥の神云々　萬葉集卷十六「彌彥の神の麓に今日らもか鹿の臥せるらむ皮衣著て角つけながら」
○彌彥の神の麓　越後國西蒲原郡彌彥の山の麓。
○聲すら〲に。同じ彌彥を歌つた萬葉集卷十「彌彥はおのれ神さび青雲の棚引く日すら小雨そぼふる」の「日すら」に倣つて、すらを重ねたであらう。
○戀ふとにあらし　戀ふる爲であらう。
○高野原の上　萬葉集卷一「秋さらば今も見るごと妻ごひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上」大和國添下郡。
○大海の邊云々　萬葉集卷五「海原の邊にも沖にも……たゞ泊てにみ船泊てむ云々。」邊は磯邊。
○はろ〲に云々　萬葉集卷二十「はろばろに家を思ひ出おひそやのそよとなるまで歎きつるかも」同卷十「秋山のしたびが下に鳴く鳥の聲だに聞かば何か歎かむ」
○したび　木の葉が秋に色づくことをいふ。

大船の牂牁振りたてて吾が居れば時雨の雨の間なく降り來も

閑居蟲　同上

庭草に來啼く蟋蟀汝をおきて言問ひかはす人もさね無し

山家蟲　同上

蟋蟀の鳴く秋山の小垣内を掃きは清めじ木の葉散るとも

曉山月　同上

足曳の山本さらず月見つゝ曉露に衣濡れにけり

山寺鹿　同上

山寺の鐘の響きにいつぎ〳〵鳴くなる鹿の聲のさやけさ

野徑月　同上

月讀の押して照りたる野邊なれば夜道を行けど行きよかりけり

雨中砧　同上

風まじり雨の降る夜を手もすまにとゞと打つなり解洗衣

旅泊聞鹿　同上

島かげに吾が船泊てて戀ひ居れば磯山とよめさを鹿鳴くも

旅宿擣衣　同上

○大船の云々　一〇五頁吾が船の歌參照。
○時雨の雨云々　萬葉集卷八「なら山の峯のもみぢ葉取れば散る時雨の雨し間なく降るらし」
○庭草に云々　萬葉集卷十「庭草に村雨降りてこほろぎの鳴く聲聞けは秋づきにけり」
○小垣内　「小」は接頭語。
○曉露に云々　萬葉集卷二「吾が背子を大和へやるとさ夜更けて曉露に我が立ち濡れし」
○いつぎ〳〵　「い」は接頭語。
○夜道を行けど　萬葉集卷十二「石根踏み夜道は行かじ思へれど妹によりては忍びかねつも」
○風まじり雨の降る夜　萬葉集卷五「風まじり雨降る夜の雨まじり云々。」
○解洗衣　解いて洗ひ張りする衣
○島かげに　萬葉集卷二十「島陰に吾が船泊てて告げやらむつかひをなみや戀ひつゝ行かむ」
○とよめ　とよもし。

○乏しかも　うらやましきかな。
○旅のやどりに　萬葉集卷六「蜑少女棚無し小舟榜ぎづらし旅のやどりに梶の音聞ゆ」
○うらさぶる　心が鬱する。
○うらぐはし　心が樂しい。
○貴人に云々　萬葉集卷二「みやびをに吾はありけり宿かさず歸せる吾ぞみやびをにはある」
○ほとゝぎす今來鳴きそむ　萬葉集卷十九「時鳥今來鳴きそむあやめ草かづらくまでにかるゝ日あらめや」
○草かも取らむ　とまるであらうか。
○磐長媛の神　一四八頁巖たすの歌參照。
○まがごと　禍事。
○祓ひもし壽ぐさきはひ　「らしほぐさ」を含む。

---

乏しかも夫なに著せむと洗衣うつ音聞ゆ旅のやどりに

十二月晦述懐

うらさぶる神も和ませうらぐはし春立つ日をば明日といはずやも

安政二年乙卯正月元日試筆

うらぐはし春になれるをうらさぶる神の心も和まざらめや

上作二首、去年十一月五日大地震、至レ于レ今小震不レ止、仍意及レ之

同四日、始聞レ鶯作

青柳の萌ゆる登時鶯の先づ鳴く聲を先づ待ちにしを

無事是貴人　應二横山氏需一

貴人に我はありけり事もなく喪なき吾が身ぞ貴人にはある

三月二十三日、始聞二霍公鳥一作　二十日丁二立夏節一

ほとゝぎす今來鳴きそむ誰が家の卯の花垣に草かも取らむ

高橋勝水母六十賀

人の子の眞幸くと祈る萬世は磐長媛の神し知らさむ

母斯本具佐　物名

まがごとは去ねと忌みもし祓ひもし壽ぐさきはひの吉事入りこね

親魂の逢ひし逢へばや常磐なす千代松陰をさらず住む鶴

某氏拾二得富士形石一之時作

雲だにもはゞかるちふを手末にさゝげ持て來し人のあやしさ

野　月　登五郎君八月十五夜御兼題

妻戀に鹿鳴く山邊ゆ照る月の光さやけき高野原の上

題二鞍馬僧正房者圖一

圖見ればあやに奇しく思ほえて鞍馬の山の古偲びつ

奉レ賀二大隅君六十算一之時、題二松圖一獻レ歌

高坂の山松の木は本も枝も同じ常磐に立ち榮えませ

月前秋野

この夜らは秋霧はれて天の原壁立つきはみ月照りにけり

十二月晦述懷

遠山の雪も消にけり陽炎のもゆる春べを明日といはむとや

安政三年丙辰正月元日試筆

初春を待ち歡びて鶯の先づ鳴く聲の先づぞこほしき

○親魂　あらみ魂の反對で、柔和なみたま。
○逢ひし逢へばや　逢ひ逢へばや
○雲だにもはゞかる　萬葉集卷三「富士の高嶺を天の原ふりさけ見れば……白雲もい行きはゞかり云云」
○妻戀に云々　一六〇頁いにしへにの歌參照。萬葉集卷八「妻戀に鹿鳴く山邊の秋萩は露霜寒み盛り過ぎゆく」
○本も枝も云々　萬葉集卷十七「立てるつがの木本も枝同じ常磐に云云」
○壁立つきはみ　空の何處を見ても遠く壁の立つてゐるやうであるから、其の際涯の處までをいふ。祝詞式「皇神能見霽志四方國者天能壁立極國能退立限云々。」
○陽炎のもゆる春べ　萬葉集卷十「今更に雪降らめやもかぎろひのもゆる春べとなりにしものを」
○こほしき　戀しき。

正月十二日始聞レ鶯作

しぬのめに尾羽うち觸りて野づかさに來鳴く鶯聞けど飽き足らず

畫題　内藤豐前守侯藩中槍術家今西喜藏所レ需

茂槍己が本末をかたぶけず清き其の名をいよゝ研ぐべし

應二或人需一題二富士山畫一

畫きとりし其の圖さへも神さびて高く貴くおもほゆるかも

贈人

門田某の弟武なにといへるが、砲術といふものの手わざに長けたるを選ばれ、新に召上げられて、家門を殊に廣められけるをよろこびて

櫻花見すらむ君が懸け佩きし太刀の緒にだにならましものを

折出にし今日のこの日は武き名の世に轟かむ始めなるべし

右者、先年門田專平弟武次郎、砲術に依り、新規御足輕に被召出。其節祝歌預二所望一處、許諾に及ぶと雖も、遲延になり、右武次郎は去歲江戸に於て死去。然るに右跡目養子願出有之に付、矢張被召出候之立りを以て祝歌詠出被贈下度、左候時は彼者の家、初代よりの家藏に仕り、子孫に相傳可申段、專平より達而申出づるに依り、口上作

---

○しめのめ　しのゝめ。曉。
○尾羽うち觸り云々　萬葉集卷十「打靡く春さり來れば筱のうれに尾羽打觸りて鶯鳴くも」
○野づかさ　野中の丘。
○茂槍　嚴めしい矛。
○己が本末をかたぶけず　其の本領を誤らずの意。槍道の本領を守つて誤らざる意。中臣壽詞「本末傾かず茂槍の中執り持ちて仕へ奉る云々。」
○研ぐべし　槍の緣語。萬葉集卷二十「劒太刀いよゝ研ぐべし古へゆさやけくおひて來にしその名ぞ」
○手わざ　技術。
○折出にし　機會を得て仕へる意であらう。
○轟かむ　大砲の緣語。
○被召出候之立りを以て　誤りであらう。

○夏陰　夏陰つた木陰。
○水枝　若枝。
○思ふ子が云々　萬葉集十「梅の花吾は散らさじ靑丹よし奈良なる人の來つゝ見るがね」同卷十五「歸り來て見むと思ひし吾が宿の秋萩すゝき散りにけむかも」
○散りこすなゆめ　決して散らないやうにして吳れよ。こすは希望の意のこその轉(古義)。
○取持ちて　手に取って。
○見がほし　見たい。
○この夜らの云々　萬葉集卷一わたつみの豐旗雲に入日さし今宵「の月夜あきらけくこそ」
○旗雲　雲の棚曳いた形を旗に見なしていふ。
○穗向見せとかも　穗が靡き向ってゐる有樣を見給へといふのであらうか。萬葉集卷十七「秋の田の穗向見がてり吾が背子がふさ手折りける女郎花かも」
○いやをちに　愈遠く久しく。
○御變若いませ　若返り給へ。
○天つ神云々　萬葉集卷五「天つ神仰ぎ乞ひ禱み國つ神云々」

---

ほとゝぎす今日の初音ぞなつかしき明日の吉事を待ちつゝ居れば

四月二十日、爲二吉松氏一所レ誂、賀二高木六藏六十算一

夏陰を競ひ寄れば常磐なす高木の松に水枝さしけり

芽子、芒　畫題

思ふ子が來つゝ見るまで吾が屋前の秋芽すゝき散りこすなゆめ

藤花　同上

取り持ちて見れど見がほし藤の花誰かもこゝに手折り來にけむ

月明　登五郎君八月十五夜御宿題

この夜らの月押照れり海の原うべ旗雲に入日さしけむ

山月　登五郎君九月十三夜御宿題

みのりたる秋田の穗向見せとかも祈年山ゆ月は照るらし

君公親畫二竹圖一、恩二賜于岡上某一、因而乞二歌詞一之時、作贈

いくみ竹榮ゆる陰に隱り居て幾代までにか生藥煎む

賀二柴田大翁六十壽一之時、爲二或女一所レ誂作

いやをちに御變若いませと天つ神仰ぎ乞禱み吾は來にけり

九月廿四日夜、始聞二雁鳴一作

狹夜降ち秋風寒く吹くなべにこゆ鳴き渡る衣かりがね

賀二柴田織部丈六十齡一之時、爲二某女一所レ詠題二梅壽一

今日のごといや常花の花咲ゑに相しゑみてむ面變りせず

寄梅祝　幡多郡藪岡大莊屋桑原久米丞六十賀

み園生の百木の梅の花咲ゑにゑみつゝいませ百代經るまで

田家立春

打靡く春立ちぬらし金門田の澤の薄冰とけゆく見れば

水邊霞

走出の堤のみ雪今朝は消えて小川の上ゆ霞流るも

山館柳

里遠き山にしあらずば思ふどち柳かづらき遊びてましを

曉雉子

もの思ふと寐の寢がてねば向峯に雉子鳴くなり小夜明けむとす

舟中春望

---

○狹夜降ち　夜が更け
○こゆ　こゝから。
○相しゑみてむ　相笑みてむの意
○み園生の云々　萬葉集卷十七「み園生の百木の梅の散る花の天に飛びあがり雪と降りけむ」
○打靡く春云々　萬葉集卷十「打靡く春立ちぬらし吾が門の柳のうれに鶯鳴きつ」
○柳かづらき云々　萬葉集卷十八「しなざかるこしの君のとかくしこそ柳かづらき樂しく遊ばめ」
○もの思ふと云々　萬葉集卷十「心なき秋の月夜のもの思ふといの寢られぬに照りつゝもとな」
○眞楫　楫。

春の雨の續きてし降れば三島江の菅の若苗たち延へぬべし

雨中歸雁

しかばかり國偲ぶとも鴈がねはよくしてい行け雨の降らくに

夜花

足曳の片山櫻手折り來て妹と插頭しつ此の夜すがらに

關路春月

待乳山霞隱りて行く月は紀の關守も留めかねしか

曙花

小夜は明け夜は明けぬらし打向ふ高根の櫻白々と見ゆ

夜落花

妹許と夜道を來れば吾が乘れる馬の足掻に櫻花散る

橋上落花

二丘から散り來る花を谷狹み一つに受くる一つ棚橋

暮春風

今日のみと春はなれるを花故に恨みし風も今はうらみじ

集九「春雨しつぎて降れれば云々。」

○國偲ぶ　故郷の越路を慕ふ。

○よくしてい行け　注意して行け　萬葉集卷三「家思ふと心進むな風待ちてよくしていませあらき其の路」

○片山櫻　片山に咲く櫻。

○待乳山　大和國宇智郡。

○小夜は明け云々　萬葉集卷十三「家つ鳥鷄も喈きさ夜は明け此の夜は明けぬ云々。」

○妹許と云々　萬葉集卷十「妹許と馬に鞍おきて伊駒山打越え來れはもみぢ散りつゝ」

○棚橋　板で棚のやうに架けた橋

○多枯の浦云々　萬葉集卷十九「いさゝかに思ひて來しを多枯の浦に咲ける藤見て一夜經ぬべし」多枯の浦は越中國氷見郡で、昔は布勢湖畔にあつた。
○人とならむ　大人とならう。
○言壽がすもの　祝ふものを。
○あり立てる云々　萬葉集卷十三「近江の海とまり八十あり八十島の島の埼々ありたてる花橘を云々。」
○あり立てる　生ひ立てる。
○花橘の云々　萬葉集卷十八「大君は常磐にまさむ橘の殿の橘直照りにして」直照りは眞赤に照り輝くこと。
○島の埼々　島崎の姓を含む。
○玉ならば云々　萬葉集卷三「人言の繁きこの頃玉ならば手に卷き持ちて戀ひずあらましを」
○腋上の嗛閒丘　神武帝が國見をせられた所で大和國の國見山。
○秋津島　大和國。
○淺坂を云々　萬葉集卷十三「山科の石田の杜のすめ神に幣取りむ

浦暮春

多枯の浦に咲ける藤見て一夜經ば鳴く霍公鳥明日は聞かむかも

十二月三十日、述懷作

一夜經ば人とならむと明くる日を戀ひつゝ待ちし時もありしを

安政四年丁巳正月元日試筆

あらたまの年立つ毎に老いらくを且は知る〳〵言壽がすもの

正月二十六日、始聞二鶯鳴一作

朝日さす吾が山の上に霞立ち來鳴く鶯聞かくしよしも

賀二島崎南窗六十一齢一

あり立てる花橘の直照りに島の埼々さきくあらなむ

四月二十二日朝、始聞二霍公鳥一作　十一日丁二立夏節一

ほとゝぎす汝が初聲の玉ならば手に纏きもちて居らましものを

月前眺望　登五郎君八月十五日夜御兼題

腋上の嗛閒丘ゆ照る月の光を清み秋津島見ゆ

杜月　登五郎君九月十五日夜御兼題

金門田にあさる蘆鶴汝すらも言はぎするか常ゆ異に鳴く

思戀　應二鎖三郎君命一

思ふごと思はぬ人を思ひなし思ふに如かじ思ひはてなみ

待戀　同上

待ち〳〵て待ちわびぬとも待てといひて待たせしものを待たずあらめやも

十二月十一日、賀二依岡貞靜六十壽一

萬世に上枝の梅を殘し置きて下枝よりをか先づ手折るらむ

賀二陸奥守梅原某八十算一

東なる陸奥山の黃金花なす石竹はゆめ花散るな常石堅石に

題二國尾銅山圖一、當山鎭守大山積神也

大山祇神の領く國尾山國の寶となれる山かも

十二月晦述懷

火桶撫で皺押しのばす業をおきて年は果つとも何をか吾がせむ

安政五年戊午正月元日試筆

打靡く春立ちぬちふいで吾も咳かひ出でて日向ほこせむ

---

○あさる　餌を搜す。

○思ふごと云々　後撰集戀讀人不知「思ふ人思はぬ人の思ふ人思はざらなむ思ひ知るべく」

○上枝の梅云々　萬葉集卷十「妹が爲に上枝の梅を手折るとは下枝の露に濡れにけるかも」

○下枝よりをか　依岡を讀みこむ

○東なる云々　萬葉集卷十八「すめろぎの御代榮えむと東なる陸奥山に黃金花咲く」陸奥山は陸奥の山。

○領く　主宰する。

○咳かひ　咳き。

○鳴かざりし鳥も來鳴き　萬葉集卷一「冬ごもり春さり來れば鳴かざりし鳥も來鳴きぬ云々。」
○朝づく日　向ふの枕詞。
○たぐひて　竝んで。
○五十猛の神　素戔嗚命の御子、大八洲國に洽く樹種を播かれたといふ。
○うつせみの人の枕詞。
○人目忌まずば　人の見ることをかまはないならば。
○菜摘ます云々　萬葉集卷一「此の岳に菜摘ます兒家聞かな名のらされ云々。」
○うつせみの　世の枕詞。
○おほろかに　疎に。

又聞二鶯屢鳴一作

諸人の今日の壽詞はあらそひてこゆ鶯のしば鳴きわたる

初春霞　福岡家出題

鳴かざりし鳥も來鳴きて朝づく日向つ峯の上に霞ながるも

寄鳥戀　同上

鶯に吾が身をなさば妹が家の花にたぐひて鳴かましものを

嶺松　同上

神さぶる高嶺の松は五十猛の神や蓋しく種生ふしけむ

正月十五日、過二田野一之時、見三美女採二レ菜作

うつせみの人目忌まずば此の野邊に菜摘ます兒等が家問はましを

賀二桑原禮作者六十齡一　禮作家二于幡多郡楠島一

うつせみの世人皆に楠島の奇しかるべき長人や誰

田口求道摸下得圖二大國主尊像一扇上之時、應レ需作贈歌

大神のその大御像おほろかに仰ぎて見むやその大御像

福島岡本屋某者、應二甲寅仲冬大地震之時一、盡レ力賑二其地之窮民一矣。上嘉レ之、賜二累々之寵一、功名於レ茲准焉。仍擬二詩分言一則陳二歌辭一云

福島の磯もとゞろに功しき人のその名の立ちてけらずや

賀二波多正前五十算一

萬葉の歌の祖書よく讀みてよく明らめよ萬代までに

同時、依レ需、詠二寄レ磯祝之題一

五百重浪千重浪しきに打ちあげて言祝ぐ聲は磯もとゞろに

賀二野村正全六十壽一之時、應レ索詠二寄レ竹祝之題一

み苑生に立繁竹生ひたしゞに繁み榮えませ五百世經るまで

蚊居田村溝淵松藏者家、一日白鶴忽焉飛二來庭前一、仍需二祝辭一

あらかじめ兼てぞ千代を告げ來つるこれや壽の堅めなるらむ

御數弓助丞者六十賀

母刀自は五百世出でませ白眞弓起きふし禱る人の子のため

潮江新田住人島村雅足六十賀

萬代を待ち歡びて今日のごと蘆邊の鶴も鳴き渡るべし

幡多郡下加江浦長沖友右衞門良虎八十賀

神さぶる伊都多の神社にいつもくく幣取りむけよ八千代經るまで

三月十六日、自二仁井田一還之時、至二池村一投二于青木菜家一。家婦煎レ茗供

---

○功しき人　功勞のある人。

○萬葉の歌の祖書　萬葉集。

○五百重浪云々　萬葉集卷十二「沖つ藻を隱さう浪の五百重浪千重しくしくに戀ひわたるかも」

○しきに　頻りに。

○立繁竹　繁く生ひ立てる竹。

○たしゞに　饒に。

○あらかじめ兼て　萬葉集卷六「あらかじめ兼て知りせば云々。」

○告げ來つる　鶴を讀みこむ。

○白眞弓　起きふしの序詞。

饌厚情無レ比焉。仍翌日暢レ謝作贈歌

御饌津神ちはひに依りて樹梯の嵯峨しき山も安く越えけり

同二十五日、於二杉本清蔭仁井田山莊（號千代垣内）一見二燕子花一作

吾が背子が千代の垣内のかきつばた千代に來て見むいや毎年に

在二同山莊一之時、中城直守訪來贈レ歌、即和レ之曰

大海の邊による浪の間なく吾も偲ばむ逢ひし此の日を

同二十九日早旦、始聞二霍公鳥喧一作　廿三日丁二立夏節一

本つ人ほとゝぎす汝一昨日の前の日よりぞ吾が待ちこひし

四月九日、宿二里改田村故小松榮盛家一、明旦作歌

いにしへの香を慕ひ來て橘の薫れる陰に一夜寢にけり

賀二英實院尼公七十齢一、詠下寄二紅葉一祝題上　尼公在二于鹿兒山莊一

鹿兒の崎幸くいまして千五百秋磯山紅葉見む人や誰

題下孟宗入二竹林一之圖上

楚國先賢傳曰、宗母嗜レ筍、冬節將レ至時、筍未レ生、宗入二竹林一哀歎、而筍爲レ之出得二以供一レ母。皆以爲二至孝所一レ感

たらちねの母しいたはし降り置ける雪掻き分けていざ掘りて見む

---

○御饌津神云々　食物を主宰し給ふ神、御馳走に預つての意。

○樹梯の　「さかしき」の枕詞。仁徳紀「はしたてのさかしき山もわぎも子と二人越ゆればやすむしろかも」

○嵯峨しき山　嶮しい山。

○大海の邊による浪　萬葉集巻十「春草の繁き吾が戀大海の邊に寄る浪の千重に積りぬ」

○本つ人云々　萬葉集巻十「本つ人時鳥をや稀に見む今や汝が來し戀ひつゝ居れば」

○たらちねの　母の枕詞。

○早蕨の云々　萬葉集卷八「石走る垂水の上の早蕨の萌え出づる春になりにけるかも」
○神南備　神の森。
○齋く祝云々　萬葉集卷十九「住吉に齋く祝が神言と行くとも來とも船は早けむ」
○讀みと讀む閒　熱心に讀む閒。「と」は物の重なる意。
○月夜よし云々　古今集戀讀人不知「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」
○鑑　磨くの緣語鏡の意を掛く。
○雅慶　飛鳥井雅慶、雅望の嗣子。

題二初春伶人圖一　臨下應二宮地氏需一題上畫、適會三巖君辱二榮進一仍意及レ之

舞へや舞へ歌へや歌へ早蕨の萌え出る春に成れるこの日ぞ

社頭月

神南備に齋く祝が神語の聲さへ清めり月の光に

詠千鳥

神御典讀みと讀む閒に思はぬに千鳥しば鳴き小夜明けむとす

月前鶴　登五郎君九月十三夜御兼題

月夜よし夜よしと人に戀ひ居れば來ちふに似たる鶴の聲すも

贈二川原塚某一

いや益に磨く心のみがかれて人の鑑となりにたらずや

右一首年月未詳因姑載レ玆

雅慶云、こは川原塚芳枝が公事にいそはき仕うまつることの、おしたべたらぬ功を公よりいたう褒めさせ給ひて、常の俸祿の員さへに增して賜はりけるよし歌乞ひおこせければ詠みて贈られし由なり。

# 山齋歌集終

# 柹園詠草

加納諸平

# 柿園詠草

加納諸平

春の歌の中に

鶯のけさなく聲を絲にして霞の袖に花ぞぬはまし

初瀨女が手玉おぼえて露ひかるしだり柳に春雨ぞふる

閑居菫

春しらぬ宿にな咲きそ菫ぐさよしや胡蝶の袖はするとも

人しれず住めばすみれの花すらも軒の蓬にかくれてぞ咲く

春風

雪とのみまちし櫻や散りぬらむすだれゆらぎて春風ぞ吹く

雉

つばなぬく淺茅が原にあさりても猶戀ひやせてきゞすなくらむ

海邊霞

沖かけて霞みにけりなそなれ松なれのみ春の色とみしまに

○霞の袖　霞の衣。霞を衣と見立てた。

○初瀨女が手玉おぼえて　初瀨女の手玉に似て。初瀨女は大和國初瀨の女。手玉は手の飾りにつける玉。

○すだれゆらぎ云々　萬葉集卷四「君待つと吾が戀ひ居れば我が宿のすだれ動かし秋の風吹く」

○つばなぬく云々　萬葉集卷八「つばな拔く淺茅が原のつぼすみれ今さかりなり吾が戀ふらくは」つばなはちがや。

○あさりても　餌をさがしても。

待時鳥

杜宇まつにしも咲く藤の花人の心のなびくなりけり

まだ待と心ゆるしてほとゝぎす待ちあへぬ空に初音もらせり

草花

春日野や野守もしらぬ花はあれど夕の露のかゝらぬはなし

遠江にありける頃河霧を

かしま川鳥羽山かけてたつ霧に舟まつ袖の見えずやあるらむ

浦月

浪こゆるまりほの浦の秋の月柳櫻のかげもさはらず

名所紅葉

あすきらむ舟木か中にもみぢ葉のこがれて見ゆる足柄の山

落葉

心して風ののこせる一葉すら鵙のはぶきにさそはれにけり

冬朝

霜とくる枯生（かれふ）の茅生（ちぶ）の朝じめりやがて春めく日影ならまし

水鳥

○待ちあへぬ空　待ちおほせない空。

○春日野や云々　古今集春讀人不知「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜つみてむ」

○まりほの浦　周防國玖珂郡。

○あすきらむ云々　萬葉集卷三「とぶさたて足柄山に船木伐り木に伐りゆきつあたら船木を」拾遺集雜秋惠慶法師「奥山に立てらましかば渚こぐ船木も今は紅葉しなまし」舟木は舟に作る材木。

○こがれて　焦れてに船の縁語漕がれての意をも掛けたであらう。

○心して云々　風雅集冬四條太皇太后宮下野「心して風の殘せるもみぢ葉を尋ぬる山のかひに見るかな」

○はぶき　羽はたき。

○霜とくる云々　風雅集冬後伏見院中納言典侍「霜とくる日影の庭は木の葉ぬれて朽ちにし色ぞ又かはりぬる」

蓮葉のうかびし水にうかぶとも契りなかれそ池のをしどり

年頃心かけたりける女彼方此方遮へて逢はざりけるを長月のつごもり方ゆくりなく物語してこし方の事ども何くれといひあへる折そこにたてりける菊の花を折りて詠みて出しけるといふ心を

月と見え霜とまがひし菊の花をれば折るよもあればありけり

四月末ばかりにや遠江をたちいでて伊勢國松坂の郷より川俣越といふ山路をへて木國にこし道すがらよめる歌の中に

少女らが花の袂を八重山の木々のみどりにかへてこそみれ

東路によたゞなれぬる松陰は旅のうけくもしらで過ぎしを

あふぎみし庵の煙の末よりも高き山路をのぼりきにけり

故里をたちし日數とつげてまし七日の市に人もあはぬか

文政九年の春夏かけて遠江にまかりける時道にてよめる歌の中に

春霞たちいづるからに里の犬の夜聲はたえてきゞすなくなり

旅衣わゝくばかりに春たけてうばらが花ぞ香ににほふなる

春すぎて夏さく花のうの花のうきはかさなる日數なりけり

鈴鹿山を越えけるに花なほ盛りなりければ

○月と見え霜とまがひし菊の花　白菊を月光や霜の白さに比較することは古歌によくある。

○木國　紀伊國。

○よたゞ　夜もすがら。

○旅のうけく　旅の憂いこと。

○七日の市　地名とも思はれるが毎月七日に市がたつ意であらう。

○人もあはぬか　故里に告げてやる人にあへばよいがの意。

○春霞　たちの枕詞。

○わゝく　ほつれ亂る。

伊勢なれど都をとめが袖の香を梢にしめて花は咲きけり

若山にうつり住みける又の年の元日に若水をくむとて

すみそめて思へばけさの若水は千代の契りをむすぶなりけり

遠江國にありける時石川依平門ひきて歌よみけるに鼠花火といふ物の名を六月ばかり

呉竹のよわたる月をいねず見ば靡く葉風の身にやしままし

依平がもとに宿りける頃佐夜中山に秋を惜しみにいでて

谷の菊峯の紅葉のふたかたにわかれて見ゆる秋のいろかな

定家かづらといふ草を

いかにみていかにめでてか君が名を蔓(かづら)の草の上にかけけむ

伊勢物語をよみける時

都へと思ふこゝろも埋もれて雪にこもれる小野の山里

源三位頼政

風やどるみたけの野鵼矢にはぎて射つらむ夜半の響高しも

二十まり一つになりぬる年の春

ますらをがうちもかへさぬ山陰のはた年何に過しきつらむ

---

○しめて　染みこまして。

○むすぶ　掬ぶと結ぶとを掛く。

○呉竹の　「よ」の枕詞。玉葉集夏前關白太政大臣「小枝もる影ぞほどなき呉竹の夜わたる月の明けやすき頃」

○いねず見ば靡く　ねずみはなびの語を含む。

○わかれて見ゆる云々　玉葉集秋僧正實超「三室山ふもとの松のむらむらに時雨わけたる秋の色かな」

○定家かづら　絡石。夾竹桃科の常綠灌木。

○都へと云々　伊勢物語小野の雪の段參照。小野は山城國愛宕郡。

○風やどるみたけの野鵼　鏑矢。

○二十まり　二十あまり。

○うちもかへさぬ山陰のはた年　鋤きかへしもしない山陰の畑と再び戻らぬ光陰の二十年とを掛く。

故郷をいでたつ折おもふことありて

かくながらなどすむ事のかたつぶりそれさへ（それだに　傍註）家のあればある世に

本生父翁の靈祭に寄萩懷舊といふ題にて人々と共によめる

我が身こそよそにもうつれ萩が花もとの垣根にやつれてぞ咲く

獨述懷

とあらばやかくあらばやと我が思ふ心よ誰に聞きかさだめむ

懷舊

思ふ人なきがおほくの年をへて今はたぬらす袖やなになり

寄橘懷舊

橘のたちかへるべき昔にはあらじと思へど袖の香ぞする

家會はじめに立春の題にて年々よめる中に

淡路島かすみそめけり木の海の沖は神代の春やたつらむ

空蟬の世にあらたまる物もあらじ春たつけさの心ばかりは

思ふどち梅のはつ花をりかざしみ代の盛りにまとゐしてまし

鶯の花のくしげをあけてまつ宿としればや春のとめこし

今切懷古

---

○すむ事のかたつぶり　住むこと難しの意を掛けて蝸牛に續く。
○それさへ　蝸牛ですらも。

○とあらばや云々　あゝしたいかうしたいと。

○思ふ人なきがおほく　拾遺集哀傷藤原爲賴「世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな」
○なになり　何物であらう。
○橘の云々　古今集夏讀人不知「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

○心ばかりは　心ばかりは改まるであらうの意。
○思ふどち云々　萬葉集卷五「梅の花今盛りなり思ふどちかざしにしてな今盛なり」
○くしげ　櫛筥。
○とめこし　尋ねて來た。

高師山松は昔の春ながら濱名の橋ぞかすみそめぬる

海邊立春

天つ風花にふきなすわたつみの浪よりおくも春はたつらむ

閑居早春

うちはらふ草の（傍註 竹）あみどの塵ばかり霞める山は何處なるらむ

春の歌の中に

こよなくも朝いせしかな花鳥といまよりいそぐ心ながらに

白馬節會

おどろかす舍人が弓に青馬のいなゝくこゑも春めきにけり

野若菜

いつしかも春日長閑になりぬるかけふは北野の若菜つままし

都若菜

朝風にわか菜うる子が聲すなり朱雀の柳眉いそぐらむ

鶯

若菜つむ野邊いかならむ鶯のこゑする窗は雪とけにけり

うゑたてし園の梢はうぐひすの木づたふ聲に花もよひせり

○高師山　三河國渥美郡。

○花にふきなす　浪を花のやうに白々と吹き立たせる。

○塵ばかり　塵程わづかに。

○こよなくも　非常に。

○おどろかす舍人が馬　枕草紙三段「舍人の弓ども取りて馬ども驚かして笑ふを云々。」白馬の節會の行列の馬を打つのは當時の習慣であつた。

○舍人　近衞府の舍人。

○なりぬるか　「か」はかなの意。

○眉いそぐ　綻びる意。

○花もよひせり　花が誘はれて咲いて來る。

社頭梅風

み山より通ふ嵐のつまやしろさてもやつれぬ梅が香ぞする

窗前梅

文机の塵はづかしくなりにけり梅さく窗をすぐるあらしに

華墻君のしめ給へる園に吉野の西行庵のかたうつしたる庵あり二月ばかり共のあたりをすゞろありきして

ふせ庵の雪げの道をとめくればうとくは梅も薫らざりけり

綠萼梅

いとゞしくあかぬかをりに鶯の上毛の色はたれかそへけむ

田家柳

うちいでてあら田ひらかむ我が門のしだり柳も春めきにけり

殘雪

梅が香をかざへる風のつたよひに雪の白山したくづれせり

木殘雪

みやま木のかげ野の艸も色めくをいつまでおつる雪の雫ぞ

餘寒

○つまやしろ　端社。小さい社。

○ふせ庵　伏庵。見すぼらしい庵。
○雪げ　雪消え。雪解。
○うとくは　疎々しくは。

○鶯の上毛の色　綠色であるからいふ。

○あら田ひらかむ　荒田を開墾しよう。

○かざへる風　誘ひ行ける風。
○つたよひに　さ迷ひたゞよふので。

○みやま木の云々　千載集春藤原基俊「み山木のかげ野の下のした蕨萠え出づれども知る人もなし」
○かげ野　山陰の野。

忘れては猶埋火のもとにのみはひかくれたる春かとぞ思ふ

夜餘寒

はしたなくさゆる袖かな梅が香もあやなき闇の夜牀わかれて

水郷霞

はゝこつむ淀野をかけて川水の色にながるゝ春がすみかな

野若草

雨そゝぐ春の野づらの若すゝきかゝれる露もなつかしきかな

春の歌の中に

小雨ふる垣ねのうはぎとりつみて憂世の外の人をこそまて

春雨

みどりそふ軒端の松のはごもりに籠りはつべき雨の音かな

田家春雨

負ひかへるえびらの露に雨見えて夕かげくらしこやのたか垣

桑とると霞わけこし里の子がえびらにかゝる夕ぐれの雨

春月

さきつゞく桃の林やくれぬらむその色ながら月ぞにほへる

○はしたなく　非常に。
○梅が香云々　古今集春躬恒「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ匂へ香やはかくるゝ」
○あやなき闇　區別のつかない闇
○はゝこつむ云々　後拾遺集巻二十藤原實方朝臣「三日の夜のもちひは食はじ煩はし聞けば淀野にははゝこつむなり」はゝこは鼠麴草。
○淀野　山城國　紀伊郡。
○うはぎ　よめな。
○憂世の外の人　遁世人。
○はごもりに　葉隱れに。
○えびら　蠶箔。蠶を入れて繭を作らせる器。散木集夏「山里はこやのえびらにもる月の影にも繭の筋は見えつゝ」
○こや　蠶屋。養蠶をする家。
○たか垣　竹垣。

かのゆくはなほ雁ならし春の夜の朧月夜もあかずとやゆく

雁かく・ひかかくばかり心のこまる朧月夜に　傍註

江上春月

かへる雁なくね霞みて大くらの入江にふけし春の夜の月

野春月

ふると見し小笹が原の泡雪は朧月夜のにほひなりけり

山春月

あす咲かむ花をかすめて山のはに影なつかしき月ぞかゝれる

河邊春月

三月まつ河ぞひ桃の木かげよりゑひ心なる月を見るかな

春月

二月のついたち頃の夕月夜こゝろにくくも霞みそめつゝ

くれぬめり菫さく野のうす月夜雲雀のこゑは中ぞらにして

二月の半ばの空のうすぐもり月の春こそこよひ見えけれ

春雨のなごりの風のうすにほひ尾上の月や花心なる

田家春月

影みえし燕やいづら水田より軒端をかけて月ぞかすめる

○大くらの入江云々　萬葉集卷九「巨椋の入江とよむなりいめ人の伏見が田井に雁渡るらし」巨椋の入江は山城國久世郡。

○にほひ　月の光の美しさをいふ

○花心　うはつく心。

春雨

もえそめし垣のにこ草露を重みふしめになれど雨の晴れせぬ

しをりせし吉野やいづら春雨にふみ見る窗は花さきにけり

草も木も花さく頃の雨づゝみ野山にぬらすわがこゝろかな

玉椿しづくながらやおちぬらむ巨勢の春野の雨のゆふぐれ（傍註　しづくと共におちぬめり）

雨はれぬ椿がもとのにはたづみ花のひゞきに驚かれつゝ

田家春雨

ゆだねまく苗代小田にふる雨の靜けきみよをあふぐ春かな

歸雁

露しらむ垣内（かきつ）の小田をたつ雁のつばさにかゝる絲櫻かな

忘れてもあらましものを春の雁なきつゝゆくか霞がくれに

限りなき空とも知らでながめけりなきて別るゝ雁のゆくへを

行く雁の聲をしきけば小雨ふる春のあさいも靜ごゝろなし

歸雁知春

たつ雁の聲はまさしき春ながらつもりの浦にうす雪ぞふる

湖上歸雁

○にこ草　はこねさう。
○しをりせし吉野やいづら　新古今集作西行法師「吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねむ」しをりせし木の枝を折つて道しるべをする意。
○雨づゝみ　雨のために籠り居ること。
○玉椿云々　萬葉集卷一「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つゝ思ふな巨勢の春野を」
○しづくながら　雨滴にぬれたまま。
○巨勢　大和國高市郡。
○花のひゞき　花の落ちる音。
○ゆだねまく　齋種蒔く。齋み清めた稻種。萬葉集卷七「ゆだね蒔くあらきの小田を求めむとあゆひ出で濡れぬこの川の瀨に」
○絲櫻　枝垂櫻。
○あさい　朝寐。
○まさしき春　正眞正銘の春。
○つもりの浦　大阪の郊外で、住吉郡に近い。

近江の海湊八十ありなにしかも思ひとまらで鴈のゆくらむ

關路歸鴈

關こえて鴈ぞゆくなる山風のあらちの櫻時もしらぬを

(あや垣のふはやま櫻觸りかも見む　傍註)

餘寒

鞍馬山かすめばかてにさえかへり木のめはる風雪さそふなり

鴈去燕來

二月の空ゆきかよふ聲きけばげにとり〴〵の世の中ぞかし

燕

いと櫻花さへかけてまつ宿をとふか燕のちぎり違へで

立ち出でしこその燕の音づれにかやのそゝぎぞかつはやさしき

河上霞

角田川夕日のにほひ身にしめて霞がくれに旅寢してしが

山霞

花やいつ鴈と燕のなかぞらに霞みて立てるふたかみの山

海邊霞

牟夜門(むやと)よりこぎ出でて見ればうづ潮の轟く音は霞まざりけり

○近江の海云々　萬葉集卷十三「近江の海とまり八十あり八十島の云云。」

○山風の云々　新後拾遺集卷七「矢田の野に打出でて見れば山風のあらちのみねは雪降りにけり」山風の荒い意と有乳山(越前國敦賀郡)とを掛く。關は愛發の關。

○かてに　一方では。

○木のめはる風　木の芽の張る意に春を掛く。後撰集春讀人不知「歸る鴈雲路にまどふ聲すなり霞吹きとけ木のめはる風」

○かやのそゝぎ　巣の茅が落ちて來ること。

○角田川　大和國宇智郡。

○にほひ　美しさ。

○旅寢してしが　旅寢をしたい。

○鴈と燕のなかぞらに　北へ歸る鴈とこゝへ來た燕との飛べる中空に。

○ふたかみの山　二上山。大和國北葛城郡。

○牟夜門　阿波國板野郡。

○うづ潮　渦まく潮。

○このもには云々　古今集東歌「筑波ねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかげはなし」○を筑波の山　「を」は接頭語。

○花いかだ　花筏。

○玉だれのをすの外山　外山を玉垂の小簾に見なす。○櫻がさね　表白、裏赤花又は蒲萄染。

○けしきある松　趣ある松。

○とめきつるかな　とめは尋ねる意。

春山

このもには花や散るらむかのもには花や咲くらむを筑波の山

春望

松島やあくる苫屋の朝霞波もあらさぬ春のいろかな

木川春望

胡蝶とぶ堤の草のめもはるに霞をくだす花いかだかな

春日望山

玉だれのをすの外山にゆらぐかな櫻がさねの東雲の雲

正月はじめつかた若菜つみにとて人々と共に野邊にいでてある人の許に立ちよりけるにけしきある松たてりしかばよみていだしける

色そへる野邊の若菜をしるべにて松の緑もとめきつるかな

野亭雲雀

雲雀たつ麥生を庵のまがきにて空の春さへ隔てざりけり

野遊

我が庵をまかせていでし鶯につけばや野邊は花も咲きぬと

[illegible]

春風に胡蝶の夢はさめながらあさ野の菫かたねぶりせり

蕨

春たちて蕨もえずばみ山木のかげ野の末をたれかわけ見む

春の野を小雨にわけてさ蕨の露の玉手はとるべかりけり

難波よりかへりて又の年の春佐々木春夫がもとへ

花さかばつげむとだにもいふ人のあらぬ方さへ眺められつゝ

花

夜をかけて昨日も見つる花ながらけふ又更にめづらしきかな

落花

かげろふのたち野のま柴をりしきてかへり見すれば花散りにけり

朝花

櫻さく岡のやかたに見し夢の名残まばゆきあさづく日かな

夕花

山のはをいづる朝日の花ゑみに空までみてる春のいろかな

夜花

さく花の色のさやかになりぬるか暮れゆく空や匂ふなるらむ

○かたねぶり　居眠り。

○玉手　玉のやうに美しい手。

○夜をかけて　夜になるまで。

○かげろふの云々　萬葉集卷二「東の野にかぎろふのたつ見えてかへりみすれば月傾きぬ」

○かげろふの　「たち」の枕詞。

○たち野　かげろふの立つと立野（大和國生駒郡）とを掛く。

○ま柴　「ま」は接頭語。

○岡のやかた云々　古今集卷二十「水莖の岡の館に妹と我と寢ての朝けの雪の降りはも」

○あさづく日　朝日。

○花ゑみに　花の咲いた様に花やかに美しく。

あかずのみ思ひすてたる夕闇を朧になして花にほふなり

花下言志

つちならば櫻の花と咲きいでてこむ世の春をつくしてしがな

根來の山寺の花見にまかりて

きゞすなく根來(ねごろ)の山の櫻ばな咲かずば今もやけ野ならまし

山路花

ひぢをりてゆかれむものか春山のほきぢの櫻いまさかりなり

山家花

うつりゆく世さへ隔てし松垣にまじりて咲ける山ざくらかな

人ごとに都のつとと折りとりて軒端をやつす花ざくらかな

花窟のかたに

さく花のいはやのみしめ打ちはへて風たたぬ世を祝ふ春かな

華埼君曉ふかくより花の宴したまひける時

名殘なくしらめる色をうしとみし花に朝日のかげ霞むなり

憐霞樓の新室壽に花の宴したまへるとき

二月のけふのたりひの花ぐもり思へば空も心ありけり

---

○ひぢをりての歌　保憲女集にある。跪つて入つたのであらう。
○ひぢをりて　肱を折つたやうに曲り〳〵て。
○ほきぢ　險しい山路。
○軒端をやつす　山家の軒端を見にくくする。花櫻の枝ぶりがわるくなるからいふ。
○みしめ　御注連繩。
○打ちはへて　繩の延ふ義と引き續いての意とを掛く。
○風たたぬ世　天下太平の世。
○新室壽　新築落成の祝。
○たりひ　足日。吉日。

櫻さくなぎさのまとゐさ夜ふけて遲れし鴈の聲ひゞくなり

其のころよみて奉りける

ゆるぎなく八十のつなねを打ちはへて久しかるべき殿造りかな

依花待人

鶯の聲をこずゑにさきだてて花のあさかげとふ人もがな

根來寺の花見にゆきける時かたはらの山に上りて

峯つゞき蕨をる子にこと問はむいづれの谷か花はまさると

安藤君のなりどころのうちなる櫻谷にて

さく花の梢をつたふ川風にみだれて寒しうぐひすのこゑ

故郷落花

故里を春しも何かとひつらむ人まちてこそ花は散りけれ

行路落花

きゞすなく野中ふる道こしかたの春もこひしくちる櫻かな

春の歌の中に

さくら人十町二十町かへすらしあゆちの水に花ぞたゞよふ

吉野にてよめる歌の中に

○遲れし鴈　北へ歸ることの遲れた鴈。

○つなね　柱根を結び固める葛の類。

○あさかげ　朝影。

○なりどころ　別莊。

○さくら人云々　萬葉集卷三「櫻田へ鶴鳴き渡るあゆち潟潮干にけらし鶴鳴きわたる」さくら人は尾張國愛知郡作良の人々。あゆち潟は熱田新田。

○十町二十町かへすらし　澤山の田を耕すらしい。

眞土山宇野の峠もたゞこえに越えずば花をつちにふままし

あだすぎて六田の淀にさす棹の雫のまにも花やわする丶

有明のかげはかくれし朝霧にやまふところの花かをるなり

舟長（ふなをさ）のいまぞさかりと棹さしてをしふる雲やわがこふる花

二十一日曉ふかく起き出て吉水院の花を遠く見わたして

吉水の花のしづくにぬれ〳〵てはてはしらめる月の影かな

朝まだきより千本の花を見つ丶よみける

春鳥のさまよふ花のしげみにもや丶露みえて朝日さすなり

吉野山花の香まどふ朝霧にしをれもはてぬうぐひすの聲

吉野山花うちはぶくてりうその聲にもゆらぐ朝ひこのかげ

み吉野をけふまでよそにすぐしきて花にやさしき我が心かな

面影に見つ丶偲ばむ行末の春もうれしき花ざかりかな

うら〳〵と匂ふ春日の朝かげを吉野の花にてらしてぞ見る

天の下うら〳〵匂ふ春の日は吉野の花のひかりなりけり

ゆくも花かへるも花の中道をさき散るかぎり行き歸りみむ

みよし野は竹の林も一ふしぞ千本の花にしばしめかれむ

○眞土山宇野の峠　大和國宇智郡
○たゞこえ　直に越え行くこと。
○あだ　阿陁。大和國宇智郡。
○六田の淀　大和國吉野川の下流
○有明　有明夜。
○舟長　船頭。
○まどふ　あたりにたゞよふ。
○吉野山花うちはぶくの歌　保憲女集にある。誤り入つたのであらう。
○てりうそ　照鶯。鶯の一種。
○朝ひこ　朝日子。朝日。
○一ふし　千本に對す。
○めかれむ　目離れむ。

## 芳野懐古

三代をへし都の櫻なにしかもつちに散れとは風の吹くらむ

鴈すらも北へかへりぬみ吉野の花のみさをは誰かしらまし

花の枝は手だにふれぬを吉野山たがかたぶけし宮柱ぞも

み吉野のうづの玉殿春をへて苔のむしろに花ぞちりしく

み吉野をあだなる山となしはてて花には人の何ならすらむ

さく花のあだなる方に移りゆく吉野の山の名こそ惜しけれ

ゆきかへり見れどかなしき花の上にかすむ春日も傾きにけり

翅なす花の雲居にとびかけり見るらむ人をしるよしもがな

み垣もる花は幾年さきちりてよしのの春にもの思ふらむ

昔おもふ吉野の山の遠近に花ふきわけてゆくあらしかな

いつとてか北は吹くらむみ吉野のみくまの櫻枝にこもれり

如意輪寺のとびらを見て

くち残る矢の根のあとを栞にて千代もつらぬく道求めてむ

西行庵にて

我だにも主人となりて花またむみくまの蕨あさりがてらに

○三代　後醍醐、後村上、後亀山の三帝。
○花の枝は云々　古今集春讀人不知「吹く風をなきて恨みよ鶯は我やは花に手だにふれたる」
○うづの玉殿　尊嚴なる立派の御殿。
○あだなる山　はかない山。
○翅なす云々　翅のやうな花が空に飛揚しつゝ地上を見下すであらう昔の人。昔の人の靈を空中に飛ぶ花と見る。
○み垣もる　吉野の宮の御垣を守る。
○北　北風。北朝を諷したのであらう。
○みくま　水隈。水の彎曲した所
○枝にこもれり　苔のかたいこと後撰集春讀人不知「吹く風や春立ちきぬとつげつらむ枝にこもれる花咲きにけり」
○栞にて　しるべとして。
○千代もつらぬく道　至誠の道。つらぬくは矢の緣語。
○あさりがてらに　さがしながらに。

鶯のこゑよりつたふ山清水いくかむすばば花とかをらむ

あしびさく吉野の奥につながまし心の駒のほだしたえなば

吉野の山づとにかしこにてくめる花籠にそへて人のもとへ

山がつがくめる吉野の花がたみまなく昔をこひつゝぞこし

朝落花

朝髪のみだれにたぐふ櫻ばな春のかゞみとなにむかひけむ

池蛙

いりはくち堤はくえし池水のうきにたへても鳴くかはづかな

夕蛙

さくら人今はとかへる島つ田のゆふとゞろきや蛙なるらむ

吉野よりかへるさに樋口にやどりて

みよしのの瀧の都にかりねして蛙きく夜はうつゝともなし

蝶

くれてゆく春の旅路のぬさ袋ひもときけらし蝶のとびかふ

中村眞貫が江戸へかへる別れに人々歌よみける時蝶といふ題を得て

春霞たちもとまらぬあさ風にひとり胡蝶の袖かへしつゝ

---

○いくかむすばば　幾日掬はば。
○つながまし云々　我が心の拘束がなくなつたならば籠らうの意。
○くめる　組める。
○まなく　絶間なく。籠の編目の密であることの緣語。
○いり　樋口。埋め樋。
○くえし　崩れた。
○うきにたへても　憂きに堪へても。
○ぬさ袋　旅の道の神に捧ぐる幣を入れた袋。蝶のひら〳〵飛ぶ様を幣を散らした趣に見なした。
○春霞　「たち」の枕詞。

呼子鳥

象山（きさやま）のかすみのおくの呼子鳥むかしの春をこひつゝぞなく

岡躑躅

みどりそふ松に夕日の霞まずば躑躅の岡やまばゆからまし

燕子花

汀よりさしもへだてぬ垣つばたおよびてをらむ袖はひづとも

山振

芳野川岸の山吹いつよりか杉のしづくにぬれて咲くらむ

棹ふれし筏は一瀬すぎながらなほかげなびく山ぶきの花

松上藤

霞のみなびくと思ひし片岡の松の葉ごもり藤さきにけり

藤の花なびくを見れば松かげの賤が伏屋もとふべかりけり

湖上藤

たる姫に藤浪さけり今よりは霞の袖もこゝろしてたて

春川

木川や小田の大堰（おほゐ）の春の水かすみながらに誰かひくらむ

○象山　大和國吉野の象の小川に沿へる山。
○かすみのおく云々　新拾遺集雑法皇御製「春山の霞の奥の呼子鳥世のかくれがに誰さそふらむ」
○さしも　左程も。
○およびて　手をのばして。
○たる姫　垂姫、越中國氷見郡布勢湖畔。
○霞の袖　霞を衣に見立つ。
○木川　紀伊川。
○大堰　大きな用水を湛へた所。

春竹

下をれし竹のさ枝をこにくみて雪まの若菜あすぞつままし

春島

となみはる人になつげそ山縣の朝菜の花につぐみなくなり

暮春

散りはてむ後の形見と花の香をしめし袖にもあすや別れむ

山暮春

はつせ女がつくるを花のかたみにて檜原に籠る春の色かな

閑居花

大かたは春も人めのかれ花にさきていほもる山ざくらかな

首夏雨

夕かけて小雨こぼるゝ竹村の蚊の細ごゑに夏をしるかな

更衣

衣こそふたへもよけれ花染のあかぬが上にしらかさねせむ

惜更衣

かへまくは何をしむらむ移香の身にしもおはぬ花の袂を

○こにくみて　籠に組みて。

○となみはる　鳥の網を張る。
○山縣　山にある縣。縣は縣主の支配する土地。
○朝菜　朝の食事にする野菜。

○かたみ　筐と紀念とを掛く。

○人めのかれ花　人目の離れ（人の訪ねて来ることの絶えること）と枯れ花（枯れたやうに生氣のない花）とを掛く。
○いほもる　庵守る。

○花染　露草の花で染めたもの。
○しらかさね　白重。表裏共に白い。

夏かけの青垣淵に花見えてひとりしづけき山ざくらかな

山寺殘鶯

里遠き片山寺はうぐひすの老をやしなふ陰もありけり

新樹

咲けばちる花の木立も松杉もうらやみなげにしげる夏かな

新樹妨月

花ちりし山櫻戸はすみすてむ月のにほひもうとくなりにき

卯花

卯の花の露きよらかにさきしより胡蝶の袖のすさまじげなる

卯の花のさける宿とは見ゆれどもおぼつかなしや三日月の里

卯月ばかりそゞろありきして

あけ卷が笹舟はなつ川ぞひの卯のはながきは誰かしむらむ

神祭

我がまつる神の心もなびくらし卯のはな垣に朝風ぞ吹く

郭公

○青垣淵　垣のやうに取りまいた青々した深淵。
○片山寺　片山にある寺。
○山櫻戸　山櫻の澤山ある山家。
○月のにほひ　月の美しさ。
○うとく　葉櫻で月の妨げられることをいふ。
○すさまじげなる　見所のないことをいふ。
○三日月の里　伯耆と美作との國境の三日月の中山がある所であらう。三日月の薄明りであるから、おぼつかなしといふ。
○あけ卷　總角。小兒の髪の結方であるがこゝは子供の意。
○誰かしむらむ　誰のものであらう。「しむ」は「占む」

雨になき月にかたらふ時鳥いかに心のはれくもるらむ

大比叡の花つみいそぐ曉にまだきもなくか山ほとゝぎす

片岡のあふち花ちる夕ぐれはなくねさびしき時鳥かな

卯の花のいろなる雲に時鳥ひとこゑきえて夜はあけにけり

待郭公

手すさびにすだれかゝぐる夕暮の空なすぐしそ山杜宇

浦郭公

すゝきつる藤江の浦の夕汐に聲もとゞろくほとゝぎすかな

與女待郭公

もろともにまつ夜もつらき郭公なれしかごとと思ひなすらむ

雨中早苗

雨はれぬ小田の板舟いたづらにさ苗をさへや流しやるべき

五月のはじめつ方日ぐらしの芝といふ山より海原を見わたして

波たえし沖は夕日に雨かけてみなと田遠くさ苗とるなり

菖蒲

雲居まで薫る根ざしの菖蒲草うきぬにさへは生ひずもあらなむ

---

○かたらふ　鳴く。
○雨になき云々　續古今集夏蓮生法師「限りなき涙こ見せて時鳥おのが五月の雨に鳴くなり」
○まだきも　早くも。
○手すさび　手慰み。
○すゝきつる云々　萬葉集卷三「あらたへの藤江が浦にすゝき釣るあまとか見らむ旅行く我を」
○藤江の浦　播磨國明石郡。
○かごと　託言。
○板舟　薄板で作つた小舟。
○みなと田　港田。港にある田。新拾遺集夏平宣時朝臣「今日もまた浦風荒れて湊田に釣せぬ海士や早苗とるらむ」
○雲居　禁中。五月五日の節句に菖蒲を用ゐるからいふ。
○根ざし　根の生ひ出た。
○うきぬ　浮沼。

人の子の端午の祝に太刀に菖蒲そへたるかたに

劒太刀名をしたつべき萬世のねざしはけふの菖蒲なりけり

夏　狩

を鹿ふす小野の高萱しげくともゆずゑにわけて藥がりせむ

卯月ばかり在田郡にて

心なくあてをば過ぎじ橘のした吹く風にわかゆひれふる

樗誰家

さもこそはながめふるやのつまならめ雫にたぐふ花樗かな

旅五月雨　道成寺緣起による

旅人のふくだやしなふかけたえて日高のわたり五月雨ぞふる

五月雨久

とりふける萱のそゝぎにながめ降りあはれ我が身の果てもしられず

紫陽花

夕月夜ほのみえそめし紫陽花の花もまどかに咲きみちにけり

蘆垣のみだれをかこつ雨の中に色もくづれしあぢさゐの花

○劒太刀　「な」の枕詞。
○名をしたつ云々　萬葉集卷十九「大丈夫は名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語りつぐがね」
○ねざし　根本の意。
○ゆずゑ　弓末。
○藥がり　萬葉集卷五「卯月と五月のほどに藥獵仕ふる時に云々」。五月五日に夏獵とて山野に出で鹿の若角を取りて藥用とす。
○心なく　無分別に。
○あて　足代。紀伊國有田郡。
○橘のした吹く風　萬葉集卷二十「橘の下吹く風のかぐはしき筑波の山を戀ひずあらめやかも」
○わかゆ　若鮎。
○さもこそは　そのやうにも。
○ながめふるやのつま　長雨降るに古屋を掛く。
○雫にたぐふ　雫と共に落ちる。
○ふくだ　餅。道成寺繪卷物「ふくだ養はせ給へ」
○日高　紀伊國日高郡。
○そゝぎ　けはだつこと。

水鶏

うゐたてし田の面のさ苗うち靡き伏見の暮に水鶏なくなり

水鶏なく夜半こそ物は哀れなれ門たがへせしむかしおぼえて

夏月

夕されば若葉がくれの島かげに月さへおとす瀧の音かな

なでしこ

露ばかり結べる垣になでしこの花のいろ／＼盡してぞ咲く

庭草にそゝぎし水はくれなゐの種なりけりな撫子の花

夏菊

かこひおきし氷も露ときゆる日に千代を保ちて菊は咲きけり

夏花

里ちかき井手の柵風こえてあさゝゆふ子が袖かへる見ゆ

日をいたみ堤の草は色もなし咲きなほこりそおもだかの花

いでや刀自てる日をおほへ撫子のみつよつ五つ咲ける垣ねに

夏草

---

○伏見　山城國紀伊郡。

○月さへおとす　月が瀧水に映つて流れ落ちる狀。

○井手　堰。水を塞き止める所。

○あさゝゆふ子　眞淵の說では、あざね結ふ子で、髮に木綿を交へ結びたる子の意。

○日をいたみ　太陽がひどく暑いので。

○刀自　婦人の稱。

螢

あくたよる夕川風に雨はれて影めづらしく螢とぶなり

打ちまねく扇のつまもあるものをよそにこがれてゆく螢かな

刈りし穂の麥のあからほあからかに夜さへみえて螢とぶなり

田所顯房がもとにて水邊螢をよめる　建仁熊野御幸記による

田邊川あせにし淵やたづぬらむ岸の芝生に螢とぶなり

田邊川すだく螢はかり宮にふきしみ草やくちてなりけむ

江樓流螢

吹きのぼる夕川風にをすまけば雲居をかけて螢とぶなり

窗前螢

ともしびの望みむなしき窗なればすぐる螢もあはれとぞみる

照射

弓弦（ゆづる）こそ露をもかけめてり人のつよき心はしめらざりけり

水鷄

蚊遣火の煙にとざす草の庵を人しもとはば水鷄聞かせむ

氷室

---

○あくたよる　芥の寄り來る。
○扇のつま　端と妻とを掛けた。
○あからかに　赤味を帶びて美しく。天智紀「稻……垂穎而熟。」
○田邊川　紀伊國西牟婁郡。
○かり宮　行宮。
○ふきしみ草云々　屋根に葺いた芒が腐つて生れたのであらう。萬葉集卷一「秋の野の眞草刈り葺き宿れりしうぢの都のかりほし思ほゆ」
○をす　小簾。
○ともしびの望みむなしき窗　晉の車胤の故事に依る。
○照射　獵師が鳥獸を射る時、隱れて身を蔽ふ物。
○てり人　獵師の意であらう。

みだれつる袖も氷の白妙にいさたちかへてむろ開きてむ

岩代の松をためしにむすばねど世にとけがたきむろの氷や

鵜川

あはれ世は安太(あだ)の鵜飼の手馴縄(たなは)なれにし業も絶えにけるかな

水上螢

音だにもやゝなつかしき水の面に夜は螢の影ぞいさよふ

雨後夏月

しだらうつ聲さへ涼し夕立の雲よりもるゝ月よみのもり

海上夕立

はたゝ神なるとの沖をこぐ舟の跡かきくらし雨さわぐなり

扇

月をさへまねきいでたる扇かな風まつ暮のすさびなりしを

新竹

橘の花の香しめてわが園におひたつ竹の清くもあるかな

泉避暑

蟬のなく井のへの柱かけ深みもひとる袖に秋風ぞ吹く

○むろ　氷室。
○岩代の松云々　金葉集冬中納言女王「岩代の結べる松に降る雪は春もとけずやあらむとすらむ」
○岩代の松　紀伊國日高郡。
○とけがたき　むすぶと相對す。
○鵜川、鵜飼。
○安太　阿陀。大和國宇智郡。
○しだらうつ　手を拍つ。
○月よみのもり　伊勢神宮内の月讀の社。
○はたゝ神　激雷。
○なると　鳴る意と鳴戸とを掛く
○すさびなりしを　手慰に用ひたものであつたのに。
○かけ深み云々　玉葉集夏後京極攝政前太政大臣「かげ深き外面の楢の夕涼ひと木がもとに秋風ぞ吹く」
○もひとる　飲水を汲む。

海邊納涼

海人の子が釣の絲ふく夕風にたえずや秋もひかれよるらむ

夏曉

ながれ江の水影みえてしらむ夜を心とや咲くおもだかの花

夏船

常世もの花たちばなの追風にあてのみなとを朝びらきせむ

夏動物

杜鵑まつ夜ふけゆくたかむしろ蚊の細聲に名のりのみして

夏遠望

あづま路は夏さへ寒し夕立の雲間につもる富士の白雪

六月祓

みそぎする瀨々の白波秋かけて淸き河原に夕風ぞ吹く

百合

垣もとにうゑしさ百合は六月のてる日にゑみて花咲きにけり

立秋

露霜をむすぶの神の心よりたてばや秋は袖のしをるゝ

---

○心とや咲く　自分の心から咲くであらうか。

○常世もの云々　萬葉集卷十八「常世ものこの橘のいや照りに我が大君は今も見るごと」常世ものは橘の異名。

○あてのみなと　足代。紀伊國有田郡。

○朝びらき　朝船を出す。

○たかむしろ　竹席。

○露霜　薄霜。

○たてばや　秋が來るからであらうか。

初秋萩

うちなびく萩のさ枝のあさ露に花こそまじれ秋たちぬめり

七夕

天の川うき木の龜のまれならで萬代たえぬ逢ふせともがな

萩

風をだに戀ふればともし夕庭の萩のつゆ原かたなびきして

海邊萩

月にこぐ海士の舟歌こゑふけて秋風たかし伊勢の濱荻

荻風驚夢

さ夜ふけてとだえし夢の行末もなほ秋ならし荻のうは風

河邊草花

そに鳥の羽ぶきのつゆにさきにけり大川のべの月草の花　傍註

そびどりの浪うちはぶく朝かげに岸の月草花咲きにけり

萩

萩が花秋のおもひのなぐさめに見るとはすれど露亂れつゝ

風すさぶさ枝の露にさそはれて末ちりかゝる秋萩の花

わび人の袖にはすらじ萩が花ときめく色のやつれもぞする

○うき木の龜　法華經の盲龜が浮木に遇ふ故事によつて、出會ふことの容易でない意。
○こもし　珍しく面白い。
○かたなびきして　一方にのみ片寄り靡いて。
○月にこぐ云々　土佐日記「水底の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらし」
○そびどり　川蝉。
○風すさぶさ枝　風雅集雜前大納言資明女「風すさぶ竹のさ枝の夕づく日うつり定めぬ影ぞさびしき」
○すらじ　摺らじ。

### 野外萩

たが爲に蜑少女らがかざすらむ須磨の上野の秋萩の花

### 萩映水

あきつとぶ野中の水に影みえてふる枝のま萩今さかりなり

八月十五日憐霞樓にて

月をまつ袖にな散りそ萩が花かつらの露もかけて見るべく

川づらのま萩のにしき色はえて夕日をたゝむ波の秋風

綠窗君のはなれ屋の萩の宴にて

眞萩原むらさめはれて鈴蟲のなくねにゆらぐ夜半の白露

雨はれし籬の萩の露の上にまだきかたぶく夕づく夜かな

### 故鄕萩

秋たてば故里さむく野分して萩も昔のにしきなりけり

七月ばかり人の許をとぶらひて盛りなる萩の花を見出しける折しも鶯のなきければめづらしく覺えてたはぶれに

鶯は北やまよりやいでつらむわかむらさきの花に鳴くなり

### 薄

〇須磨の上野　攝津國武庫郡。
〇野中の水云々　新後拾遺集秋前大納言爲定「咲きてこそ野中の水にうつりけれ古枝の萩のもとの心は」
〇ま萩　「ま」は美稱。

すゝき原尾花になりぬ夏飼の手がひの小鷹野邊いそぐらむ

藤袴

こしぼそのすがるむれたつ朝風にその香も高き藤袴かな

朝顔

蟲のねは籬の露にうつろひて色わかれゆくあさがほの花

咲けばかつうつりもゆくか朝顔の花心なる世をかこつらむ

うなゐ子が心すさびにはかなくも八重かさねたる朝顔の花

月

天なるやさゝらの小野の菅原も心にわけて月を見るかな

月前蟲

月やどる萩のま垣にたちよれば蟲のこゑさへ近まさりして

湊川に舟を浮べて

夕月夜蘆の葉わくる川風にながれてきよき蟲のこゑかな

旅宿蟲

いづ方に假庵つくらむ賞津野は蟲のねならぬ露だにもなし

秋夕

○夏飼の手がひの小鷹　夏手づから飼つた小鷹。

○こしぼその　すがるの枕詞。萬葉集卷十六「飛び翔けるすがるの如き腰細に取りかざらひ云々」。

○すがる　似我蜂。

○咲けばかつうつりもゆくか　咲く傍から衰へ行くかな。

○花心　移り易い心。

○心すさび　慰み。

○天なるや云々　萬葉集卷十六「天なるやさゝらの小野にちがや刈りかや刈りはかに鶉を立つも」

○さゝらの小野　天上にある野の名。萬葉集卷三「天なるさゝらの小野のいはひ菅手に取り持ちて云云」で。

○わけて　識別して。菅原の緣語。

○近まさりして　近劣りの反對で近づくと愈其の趣が勝る意。

思ひかね籬の小萩たをりてもまぎるばかりの夕なりやは

天雲のゆきあひの間より月みえて夕暮さむき秋の空かな

霧の上に鴈がねなきて秋の日のかたぶく空を一人かも見む

海邊秋夕

棹さしてとふ人もなき夕かな秋風わたる松が浦島

故宅秋夕

野邊とのみあれゆく宿をいでがてに何ながむらむ秋の夕暮

秋風

色かへぬ籬の竹も秋風のうき音づれやなほかこつらむ

山霧

建仁の熊野御幸記に見えたるさまを繪にかける中に萩原のあたり

うちなびく小野の萩原風こえて鹿の脊山は霧はれにけり

のがるべき山さへきえて夕霧の深きおもひはやる方もなし

河霧

初瀨女が袖ふる川の音ながらうき霧なびく朝ぼらけかな

小鷹狩

○まぎるばかり云々　心が紛れるやうなそんな心やすい夕べではない。
○ゆきあひの間　新古今集神祇「夜や寒き衣やうすきかたそぎの行合の間より霜やおくらむ」
○松が浦島　陸前國宮城郡。
○脊山　萩原と共に紀伊國伊都郡鹿は萩に緣があると共に鹿の脊と脊山とを掛けた。
○のがるべき山　我が身を隱すべき山。
○夕霧の　「きえて」にも「深き」にも關係す。
○初瀨女が袖ふる川の音ながら　初瀨女が袖ふるに布留川（大和國山邊郡）を掛く。音ながらは音を立てながらも。

栗津野や紅葉みだるゝ夕風にあかぬとだちの名残をぞ思ふ
ゆきかへりあくよもしらぬみ狩野の尾花におつる夕日影かな

野分

月みむと思ひしものを夕ごりの雲まどはして野分ふくなり
木萩原さばかりおもき露ならし八月のあらし心して吹け
野分だつ夕の風にかげろふのおのがさまざまみだれてぞ飛ぶ

秋燕

月だに（かけ）もすみはつまじき朝影に伏屋をいづるつばくらめかな（明方に軒端を出でてゆくつばめかな　傍註）

九月ばかり山里よりかへるとて

夕けぶり軒の木立にむすぼれて贄さす鵙のこゑぞいとなき

浦秋風

しほたるゝ袖の浦波いたづらに八重をりかへし秋風ぞふく

霧

すゑうすき淺茅が原の朝霧や夜半の野分のゆくへなるらむ

雁

秋とすむ田面の澤の水の面にかげさへ見えて雁のおつらむ

---

○とだち　鳥立。鷹狩のために鳥の集まるやうに草むら又は澤などを設けた所。
○あくよ　飽く時。
○夕ごり　霜や雪等が夕方凝り固まること。
○木萩　野萩。
○野分だつ夕　風雅集秋前大納言爲兼「野分だつ夕の雲の足はやみ時雨に似たる秋の村雨」
○贄さす　鵙は小動物を捕へ來て枝などに吊して、そのまゝ忘れるのでいふ。
○いとなき　いそがはしい。
○しほたるゝ云々　續千載集夏祝部成賢「五月雨に煙たえても海士人のなほ汐たるゝ袖の浦波」
○しほたるゝ袖の浦波　悲しい涙に袖の濡れたのを浦の波に喩へた。
○八重をりかへし　幾重にも疊みかけて崩れ。
○すゑうすき　枝先のまばらなこと。野分に折られたからである。
○秋とすむ　秋であるので澄む。

月

折しもあれをす巻く袖に影さして雲のひまもる秋の夜の月

憐霞樓賞月

月やどる露の玉がきめぐりても猶あまりある花の色かな

露おもる島回（しまみ）のま萩影そひて園のうちはし月ふけにけり

小車のにしきをよそふま萩原いくめぐりしつ秋の月夜に

波の上に浮べる月の白たまをこよひかづけむ人やたれなる

さゝらがた露の絲もておりいづる萩の錦はたてぬきもなし

八月十四夜和夫正紹と共に中のしまの里わをそゞろありきして

夕露をわけいる草の袂よりあとよりなびく蟲のこゑかな

五百代（しろ）のわさ穂波よるところ津を月にみつゝや神代忍ばむ

待月

月をのみ思ふ心のゆくかたはあやなき闇もたどらざりけり

九月十五日清舍君月を見がてら鹿の聲もきかまほしきをと消息し給へるまゝに北山なる何がしのなり所にまかりて

さを鹿の聲する山にいるものは月みる秋のこゝろなりけり

---

○露おもる云々　玉葉集秋前大納言爲兼「露重る小萩が末は靡きふして吹きかへす風に花ぞ色そふ」
○うちはし　打橋。
○小車のにしき　小車の形をちがへて丸にした文を織れる錦。新千載神祇「君が代に又めぐりあふ小車の錦ぞ神の手向なりける」
○よそふ　擬す。
○月の白たま　月の白きを白玉に譬ふ。
○かづけむ　もぐつて取る。
○さゝらがた　細かな模樣。
○たてぬきもなし　萬葉集卷七「みよし野の青根が峯の苔むしろ誰か織りけむ經緯なしに」經絲も緯絲もない。
○里わ　里のほとり。
○夕露を云々　大和物語「露しげみ草の袂を枕にて君まつ蟲の音をのみぞなく」
○草の袂　草を衣と見た上でいふ
○五百代　代は田地の面積を度る語。廣い田地の意。
○わさ穗　早稻穗。
○こころ津　德勒津。紀伊國海草郡。
○ゆくかた　行方。心の晴れ行く仕方。
○さを鹿の云々　千載集雜俊成「世の中よ道こそなけれ思ひいる山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」

くるす原月の光やおもろらむおつる木の實の音ふけにけり

八月十一日楠見の寺よりかへるさに

薄墨の雲の一むらたちわかれくるゝもまたで月は出にけり

年々の八月十五夜若浦にてよめる歌の中に

玉津島きよき渚に圓居して神代のまゝの月はみてまし
山のはのあらゝ松原あらかじめ思ひのまゝに登る月かな
思ふどち小舟よせずば若の浦に今夜の月やひとりふけまし
秋の月すまむかぎりは松かげのきよき渚にまとゐしてまし
今こそあれ大宮人の舟うけしあたら島やま月さへぞてる
蘆が根の汐干の浪残所せきかげとも知らで月のみちたる
ふけにけり今はの心つきかげにうす雲なびき秋風ぞふく
われゐひぬ今はひさごを鼓ともうちてや月のかげに謠はむ
玉津島岩ねのむしろいざたたむ波にかげしく月も更けたり
月のおもは雨雲とぢて島かげの波にもそゝぐ蟲の聲かな
雨雲にねぶれる月をよびさまし夜深き波にかもめ啼くなり
袖ふれぬ秋こそなけれわかの浦の松も巖も月になれきや

○くるす原　栗栖原。山城國宇治郡。
○おもる　乘る。夜が更けて月光の冴える意。
○玉津島　紀伊國海草郡。
○あらゝ松原　まばらな松原。神功紀「をち方のあらゝ松原云々。」
○今こそあれ　今こそかくてあれども其の昔はの意。
○あたら　惜しい。
○所せき　窮屈な。
○今はの心つきかげに　今は歸らうと思ふ心が起る意に月影を掛く
○岩ねのむしろ　岩を座席とした のでいふ。

○洲さき　洲崎。
○眉引　眉毛を抜いたあとに眉墨を以て眉を引くこと。淡路がその眉引のやうにかすかに横たはつてゐる貌。
○さしわけて云々　後撰集雑讀人不知「玉江漕ぐ芦かり小舟さし分けて誰を誰とか我は定めむ」
○月の上　月の映れる水の上。
○いくかへり　白波とおなじとに掛かる。
○月かげの錦のいろこ　月光に照らされた美しい魚。いろこは鱗で魚の意。
○とりさきて　料理して。
○心ゆく瀬　愉快な瀬の上で。
○さかみづきせり　大いに酒を飲んだ。
○あず　崖。
○月をよみ　月がよいので。
○波のほ　波がしら。
○くゞひ　鵠。

わかの浦の月に昔のおもかげも浮ぶるばかり身は老いにけり

十七夜玉津島山上にのぼりて

一むらの洲さきの松にかげわけて内外の海の月をみるかな

漁火はくもるにきえて眉引の淡路の門なか月みちにけり

年々七月十五夜湊川にあそびて

水門川小ぶねの水棹さしわけて蘆まにもらす月のかげかな

とほじろき洲さきの松のかげながら月をひたせる波の上かな

月の上に杯をすゝぎてさゞなみの清き心もくみかはしつゝ

湊川せゞのしら波いくかへりおなじまとゐにふけし月夜ぞ

月かげの錦のいろことりさきて心ゆく瀬にさかみづきせり

あずの上の草の露原月をよみ千夜もきくべき蟲のねぞする

蓮葉のうき瀬の水棹さしすてて小夜の中洲に月をみるかな

海上月

沖つ洲に夕ゐる鷗むれたちて波のほあかし月やいづらむ

秋風にくゞひ羽うちて湊田の穂のへをこゆる月のしらなみ

舟窓の秋のともし火ほの／＼としらめる海に月はうかべり

難波人あしのほ舟に棹させばみだれて淸し波の上の月

山家月

蔦の葉に初霜かゝる山里のあかつき月夜たれに見せまし

鳴瀧の山寺にやどりける曉

あかゐくむ片山寺のつゞらをりたえ〴〵てらす有明の月

月前煙

山里はまだき夜寒になりぬらし眞柴のけぶり月にたつ見ゆ

月前筵

露ながらかたしく月のあや筵緒になるまでに夜頃へにけり

九月十三夜憐霞樓の宴にさぶらひて

月にまく臺(うてな)のうへの玉すだれ風のひゞきもきよらかにして

月にみる片山もとのうすぐもり霧かあらぬか鹿火(かび)の煙か

月になく籬の蟲も心せよ草葉にのみや露のおくべき

月にうくおまへの池のはなち鯉底の玉藻に影や見えけむ

月に吹く市の植木の風たかみ塵ものこらずはれし空かな

月にひく淀のつゝみのつなで繩長き夜あかぬ舟路ならまし

○難波人云々　壬生集「浦風の誘ふも知らず難波江の蘆の帆船に月を見るかな」

○あかゐ　閼伽井。佛に捧ける淸水を汲む井。

○つゞらをり　羊腸の坂路。

○眞柴　眞は美稱。

○かたしく　獨寢する。

○あや筵云々　萬葉集卷十一「獨りねぬとこも朽ちめやも綾むしろ緒になるまでに君をし待たむ」綾の筵が破れて編緒のみ殘るまで長く。

○夜頃　數夜。

○鹿火　蚊遣火。

月にたつ波間の煙たえ〴〵にあしやの火かげ秋ふけにけり

月にこぐ蜑のとも舟ほの見えてひゞくも淸し初鴈のこゑ

月にきく波のひゞきも更けにけり誰か浮寢の袖しぼるらむ

月にゆく千里のほかの心をもをり〳〵かへす波の秋風

月にとふ人こそあらめさを鹿の聲をしをりの杉たつるかど

月にうつ大城（おほき）の鼓しばしまてくだちゆく夜を誰かをしまぬ

月にねぬ人もありけり松風のふけてもすゝめる笛竹のこゑ

九月十三夜半天樓にさぶらひて

荻の葉の夜風のそよぎふきかへて月にしめれる笛の音かな

夜を寒みしばしとおろす高殿のをすの影さへ淸き月かな

八月十五夜月そくなればとて十三夜に宴し給へる年憐霞樓にて

影はゆる望（もち）をばめでじ長づきに通ふ今宵を夜よしとはして

九月十三夜いと寒かりける年

ひたすらにくゞむ尾花の袖の露わりなの月のすがり所や

深山月

一むらの杉の梢に山見えて月よりひゞく瀧のおとかな

〇あしや　蘆屋。

〇とも舟　友船。連れ立つて行く船。

〇月にゆく千里のほかの心　白樂天「三五夜中新月色。二千里外故人心。」

〇杉たつるかど　古今集雜讀人不知「我が庵は三輪の山本戀しくはとぶらひ來ませ杉立てる門」

〇くだちゆく夜　更け行く夜。

〇月そく　月遲。

〇長づき　長月。九月の異稱。

〇今宵を云々　古今集戀讀人不知「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」

〇くゞむ　かがまる。

〇わりなの月云々　分別なくも月が尾花の露に映つてゐる意。すがるは袖の緣語。

月前友

うとからぬ友とや月も思ふらむまとゐの袖に影をつらねて

八月十六日清遠舎君楠見の何がしの院にて萩の花の宴し給へるとき

こがらなく秋の野寺のひとへ垣ひま見えぬまで萩は咲きけり

を鹿なく峯の嵐やかよふらむ庭もまがきも萩が花ちる

芙蓉

あきつばのうす紅の花の色に夕日のかげを重ねてぞみる

楠見よりかへるさ舟にさぶらひて月をまついとけしきよし

ま萩原わけ見し色をしのべとや雲に入日のかげにほふらむ

くれ竹の長よの水棹さしめぐり清き瀬ごとに月はまたまし

草かげの岸の松蟲なくなべに月こそうかべ水棹とりてむ

あひにあひて棹さしのぼる月影を水底かけて浮べつるかな

さゝらがた錦の帶のひとすぢに川上とほく棹はささまし

八月十四夜わが高窗にて月見るいと寒かりける年

衣うつ夜風をはやみ白雲のたえ〲月の影ぞさえゆく

同じ夜いとくもりける年

○こがら　小雀。やまがら科の一種。
○峯の嵐やかよふらむ　拾遺集雜齋宮女御「琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒よりしらべそめけむ」
○あきつは　芙蓉。
○くれ竹の　「よ」の枕詞。
○長よ　長い節。
○なくなべに　鳴くと共に。
○あひにあひて　よくゝ揃ひゝ揃って。
○さゝらがた錦の帶の　ひとすぢにの序詞。
○衣うつ夜風云々　續後撰集秋雜成親王「烏羽玉の夜風を寒み古里にひとりある人の衣打つらし」

衣笠の遠山かげはなほ見えて雨雲かくれ月ぞふけゆく

もりかくす月と雲との中空をはてはうばひて雨ながれきぬ

月下客來

まねきあへぬ人もとひくる夕かな尾花が袖や月に見えけむ

擣衣

打ちわびてきくとはなしに更くる夜の衣の音（きぬた 傍註）の身にはしむらむ

うちしきる音こそ風にまかせなめ憂きは身にそふ衣なるらむ

心してうてやさ衣秋風のひゞきのすゑもやすからぬ夜ぞ

河上（かはのべ）の月になかるゝ音すなりときあらひ衣たれかうつらむ

もみぢ葉の陰にな打ちそから衣秋の思ひの色やかさねむ

菊

朝顔の花より見えし露の色もふかくなりぬる菊のかきねや

白菊の籬にむすぶ秋の霜うつりゆく世は花ぞしるらむ

半天樓の菊の宴にさぶらひて

かひならすたづの翅の白妙をまがきにかけて咲ける菊かな

初霜は今こそおかめ白菊の八重のくみがき月ふけにけり

○まねきあへぬ人　招きも出來なかつた人。

○ときあらひ衣　解洗衣。解いて洗張りする衣。

○くみがき　組垣。竹木を組み合はせて作つた垣。武烈紀「大君の八重の組垣かかめども云々。」

あしたづのおりゐる園の菊の花心に千代をかさねてぞ見る

河邊菊

釣の絲を風にまかせて水上の菊のかをりぞ袖にしめつる

海邊菊

まばらなるあしのかこひに菊を植ゑて蜑も千年は猶願ひけり
蜑の子がくゞつにさせる菊の花おなじ千年の種にやはあらぬ
吹上は秋こそゆかめ一むらの松より奥の菊のなかみち

紅葉

山深くさのみな戀ひそはしりでに立てる柞(はゝそ)も色ならぬかは
秋風にあらそひかねて朝雲のわかるゝ峯は色づきにけり
山隱すあしたの雲のたゆたひにほのめく色や紅葉なるらむ
立田山うす霧ごもり秋の日のかたぶく影をゆきてはや見む
そめわたす色をしみれば露霜の秋は末こそ盛りなりけれ
わけ〳〵し山又山のもみぢ葉を霧にうつしてけさは見るかな
あだへゆく山のたをりのもみぢ葉をくまなく照らす夕日影かな
切部(きりめ)山那木の木の間のうす紅葉かざしそへては色もそはまし

〇かこひに　垣の下にの意。
〇くゞつ　藁などで編んだ袋、藻や貝などを入れる。
〇山深くさのみは戀ひそ　奥山の紅葉を一概に思ふ勿れ。
〇はしりで　走出。門口。
〇色ならぬかは　美しく紅葉してゐるではないか。
〇あらそひかねて云々　萬葉集卷十「時雨の雨間なくし降ればま木の葉もあらそひかねて色づきにけり」
〇たゆたひ　ためらひ。搖きたゞよふこと。
〇露霜の　秋の枕詞。
〇わけ〳〵し云々　風雅集旅前大僧正道照「分け來つる山又山は麓にて嶺より峯の奥ぞはるけき」
〇あだ　阿陀。大和國宇智郡。
〇たをり　山の頂の撓んだやうな所。
〇切部山　紀伊國日高郡。
〇那木　竹柏。常綠の喬木。

夜たゞふくかざらき山の村紅葉いつの人まに露はそめけむ

若浦にて

たづがねは雲にみだれて磯山の梢をそゝぐ村時雨かな

紅葉淺深

誰しかもはゝその陰は過ぎぬらむ妹とぬるでの色にこがれて

紅葉深

山てらす梢の色をけふ見れば夜頃の月はくまもありけり

秋雨

はだ寒き秋のつまやのさし扇みだれてかゝる夜半の雨かな

草陰の松の枯葉に秋見えてこぼれし雨はやゝはれにけり

ま萩ちるあしたの雨となりにけりうらみし月の末のうき雲

（傍註　ながめ）

夕づく日てらしもあへずかき曇り柞が原に村雨ぞふる

雲霧のたゞよふ山の椎がもとけふもいくたび雨はこぼれし

かりふける尾花にそゝぐ秋の雨の夜深き音に袖はくたしつ

山路秋行

鶉のなく片山かげは暮れにけり霧ふく風のやむとせしまに

○夜たゞふく　夜通し吹く。
○かざらき山　風猛山。紀伊國那賀郡。
○村紅葉　羣れる紅葉。
○人ま　人閒。人の見ないうち。
○たづがね　鶴の聲。
○はゝそ　柞。
○妹とぬるで　妹と寢ることぬるで（ふしの木）とを掛く。
○くまもありけり　曇りがある紅葉の色の方が月色よりもあかるい意。
○つまや　閨屋。夫婦の寢室。
○さし扇　檜扇。
○けふもいくたび云々　新葉集冬　嘉喜門院「足引の山かき曇り神無月今日もいくたび時雨降るらむ」
○かりふける　刈り葺ける。
○くたしつ　腐しつ。

秋田

六月の有明のかげに見えそめし田居の早穂(わさほ)は色づきにけり

稲ほしたり

かま垣の昔の舟路へだたりて粉川の田るにをしね刈るなり

穎倉の其の戸ひらけりはての上にかけほす稲も今はこぶらし

山家秋

蜩のこゑもかれにし山かげになきてやひとり秋をつくさむ

半天樓下の西行庵にて

月見ばと契らぬ袖も露ちりてよし野のおくの秋風ぞふく

秋日過廢寺　詩題

吹きすてし秋の野守のうすひはだかさなる苫に村雨ぞふる

鹿

常磐山ときしもあれと有明のつれなき影に鹿のなくらむ

鳴瀧の山寺にやどりて

たぐへこし風はとだえて瀧の絲に結ぼほれたる鹿の聲かな

夜をかさね妻こひかねて有明の影となりぬるさをしかの聲

○田居　田。
○かま垣の云々　鎌垣は粉川村(紀伊國那賀郡)の古名で、鎌垣船といつて紀之川を通つた。
○をしね　小稲。稲。
○はて　八手。刈れる稲を懸けて乾す木。
○契らぬ袖　西行と契らぬ我が袖
○うすひはだ　薄檜皮。檜皮で薄く葺いた屋根。
○ときしもあれど　折も折とて。
○有明のつれなき影　有明月のよるべなく心細い光。續千載集夏權大納言實季「有明の月には待たじ郭公つれなき影にならひもぞする」
○鳴瀧　紀伊國牟婁郡。
○たぐへこし　伴ひ來た。
○瀧の絲に結ぼほれたる　瀧の水の音に交れるの意。絲といふので結ぶといふ。
○有明の影となりぬる　牡鹿が妻を慕うて夜明まで待ちつくすことをいふ。

山寺はかひふく人もたえにしをなくなく鹿の[illegible]

山寺はあけぼのかなし紫の雲路をつたふさを鹿のこゑ

あか棚の樒（しきみ）のさえだ霜見えてかれ〴〵にのみ鹿ぞなくなる

故郷紅葉

さを鹿の妻待山のたちどまでかたぶく月をかこちてや鳴く

閑居秋

うづらなくふりにし里の柞原うすき色こそ身にはしみけれ

かりそめの草の籬も小鷹人たちよるばかり花さきにけり

秋鳥

きり〴〵す涙なそへそ草の戸の露に袂はくたしはててき

鷹の巣の磯もとゆすりたつ波にむら〳〵なびくひえ鳥の聲

いづれの年にかありけむ九月ばかりいと長閑にてかへり花あまた咲きければ

とぶ蝶の羽袖を春にうちかへしたち舞ふばかり花咲きにけり

秋燈

よしや我たのむ火影はうとくとも秋の長夜を書（ふみ）につくさむ

○かひふく　法螺貝を吹く。

○あか棚　閼伽桶を載せる棚。

○かれ〴〵に　聲の嗄れること。

○さを鹿の妻待山　新後撰集秋兵部卿隆親「夕暮はわきてあはれや知らるらむ妻待山のさを鹿の聲」

○たちど　立處。

○小鷹人　小鳥を狩る秋期の鷹狩をする人。

○涙なそへそ云々　新古今集夏俊成「昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山時鳥」

○磯もとゆすり云々　萬葉集卷七「大海の磯もとゆすり立つ波のよらむと思へる濱のさやけく」

○とぶ蝶の云々　舞ふばかりまでは花の形容句。

鐘聲送秋

尾花ちる嵐の末は暮れにけり野寺のかねのひゞきのみして

暮　秋

小鷹人夕霜わくる笹の葉のさやは野邊にて秋をくらしし

風まつとながめそめつる夕づゝの光にのみものこる秋かな

暮秋露

霜はやきもずの耳原秋たけてあはれを鹿のあとだにもなし

さのみなど契りふかめし秋ならむ暮るゝまでこそ露はおきけれ

暮秋時雨

くれてゆく秋の日影もうす雲にたえ〴〵ぬれて時雨ふるなり

初　冬

もみぢ葉の陰をへだてし呉竹の窗もしぐれて冬はきにけり

かりのこす穂田の朝霧むすぼほれ覺束なくもきたる冬かな

さを鹿の聲のかへしに尾上よりおろす朝日の影ぞしぐるゝ

時　雨

神無月春をかすむる大ぞらのいづこよりふる時雨なるらむ

---

○嵐の末　嵐の吹き行くさき。

○さやは　「さ」は「そのやうに」、「やは」は反語。

○夕づゝの光　宵の明星の光。

○霜はやき云々　風雅集秋前中納言定家「もずのゐるまさきの末は秋たけてわらや烈しき峯の松風」

○もずの耳原　和泉國泉北郡にあつて、百舌鳥耳原中陵（仁徳）、同南陵（履中）同北陵（反正）の三陵がある。

○穂田　稲穂の刈り頃になれる田

○かすむる　ほのめかす。

○しきみが原　樒が原。
○わりなく　無理に。
○かこつ　歎く。

橋上時雨

風はやき矢作(やはぎ)の橋のなかばよりま袖にかゝるむら時雨かな

古寺時雨

高野山あかつきいそぐ雪にしもまじる時雨の定めなき世や

何がしの院にて曉時雨を

あくと見しよも定まらぬ時雨ゆゑしきみが原に袖ぬらしつゝ

落葉

そめはてし色こそあらめ木枯のわりなくさそふ薄紅葉かな

もみぢ葉の名殘よ何に慰めむ花はこてふをかたみとも見き

水邊落葉

水の上におちても深きもみぢ葉を移ろふ色とかつは見しかな

曉落葉

あくる夜をまたでも散るかもみぢ葉は老の寐覺の涙ならねど

夕紅葉

入りやすき日影をかこつ夕暮におつる木の葉の窗てらしつゝ

閑居落葉

苫の上にむら〳〵見ゆる紅葉かな稀なる人のあともたえしを

紅葉殘枝

白菊はそめかへしてもしをれしを操に見ゆる木々の色かな

冬の歌の中に

夕風のとだえにも散るもみぢ葉を空に數へてゆく烏かな

殘菊

色も香もなれはまさらで菊の花ねたしや霜に結ぼほれつゝ

さだめなき時雨の空やかこつらむ千年の菊も移ろひにけり

瓶裏殘菊

簾もる夕日の影はしぐれてもをがめの菊の香こそふりせね

霜

一むらの竹の葉しだりおく霜に書みる窓はしらみそめけり

あともなきさゝぎの聲に霜とけて野路の板橋上じめりせり

寒草

をがや原かれて後だに安からぬ霜のみだれをとふ嵐かな

鶴のなくあしたの雲のみだれよりうね野の薄霜がれにけり

○稀なる人　稀に來る人。
○なれはまさらで　いよ〳〵馴れることは出來ないで。
○をがめ　小瓶。
○ふりせね　古りせね。
○しだり　垂れ下り。
○さゝぎ　みそさゞい。
○をがや原　小萱原。
○鶴のなく云々　古今集卷二十「近江より朝立ち來ればうねの野に鶴ぞ鳴くなる明けぬこの夜は」
○うね野　近江國蒲生郡。

寒樹

秋をへて野中にたてる松だにもかげやすからぬ風の音かな

木枯

あら熊はゆくへも知らず杉山のうつぼにこもる木枯の聲

氷

風落（かざおち）の椎のさえだをよすがにて薄ごほりせり山の井の水

底ふかく秋の色香はとめつらむ菊のした水うはごほりせり

山寒月

もみぢ葉の小雨にくちし彌彦は月よりたかく神さびにけり

雪深みあゆひかたむとわけくれて鈴鹿の山に月を見るかな

閑庭霰

ちりつもる木の葉の上に霰ふりあなかま我が世たまもなにせむ

衾

狐なく木かげの庵のうす檜皮ふく風さむしふすまかさねむ

網代

村千鳥たなかみすぐる聲すなり今宵もひとり網代もれとや

○野中にたてる松　拾遺集雜戀人麿「岩代の野中に立てる結び松心もとけず昔思へば」
○うつぼ　空洞。
○風落　風に吹かれて落ちること。
○よすがにて　たよりとして。
○小雨にくちし云々　萬葉集卷十六「いやひこのおのれ神さび靑雲のたなびく日すら小雨そぼ降る」
○彌彦　越後國西蒲原郡。
○あゆひかたむ　脚袢をしつかりまきつける。
○わけくれて　踏み分け暮れて。
○我が世たまもなにせむ　萬葉集卷五「白金も黄金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」
○たなかみ　田上。近江國栗太郡
○網代もれとや　魚を取る網代を守れといふのか。

○霜まよふ　霜の降り亂れる。
○新防人　新に派遣された防人。防人は王朝時代に西海道の要所を守る兵士。
○あとかきくらしゆく　其の姿の見えず飛び行く意。
○夕月夜云々　萬葉集卷三「まつち山夕越え行きて庵崎のすみだ河原にひとりかも寝む」
○庵崎　大和國宇智郡。
○羽ぶく　羽打つ。
○ありそ越え云々　萬葉集卷十一「荒礒越え外ゆく波の外心吾は思はじ戀ひて死ぬとも」
○影まどはして　紅葉か千鳥かとその姿の見定めがつかない意。
○ゆくりなき　思ひがけない。
○さしもなど　其の如くも何故。
○あげ卷　子供。
○ふれ〳〵こ雪　徒然草「降れ降れ粉雪云々。」
○そばだてし枕の山　白樂天「遺愛寺鐘欹枕聽。香爐峯雪撥簾看。」枕は上下にかかる。枕の山は枕邊近い山。
○をす　小簾。簾。
○おぼつかなくも　おぼろにも。
○木路　紀路。
○心のあと　心中の印象。
○をち　遠く離れる。

### 千鳥

霜まよふ新防人(にひさきもり)が袖の上に夕波かけて千鳥なくなり
月おつるあかつき波に聲ふれてあとかきくらしゆく千鳥かな
夕月夜ひとりやぬべき庵崎の河原の千鳥霜羽ぶくなり
たちさわぐ波のまぎれにありそ越え外(ほか)ゆく千鳥誰さそふらむ
もみぢ葉のよどみもあへぬ河波に影まどはして千鳥なくなり

### 霰

ゆくりなき霰の音かさしもなど時雨の雲のこゝろさだめぬ

### 雪

あげ巻がうかるゝ聲もおもしろしふれ〳〵こ雪山つくるまで
そばだてし枕の山はへだゝりて袖に花ちるをすの白雪
朝ぐもりかすかみ山の峯ならしおぼつかなくもふれる白雪
雪つもる木路の遠山とほけれど心のあとをつけぬ日はなし
蘆鶴の子を思ふ空も安からじ松よりおつる夜半のしら雪
衣うつ音だにそことわかざりし里もあらはにふれる雪かな
烏鵲(かさゝぎ)の松よりをちの一むらは雪にとざさぬ窗だにもなし

雪のあした人のもとへ

島山のみ雪おもしろ出居(いでゐ)には君まちざけもあたゝかにして

松上雪

よせかへりさらでも淸き白波の濱松が枝に雪はふりつゝ

半天樓にさぶらひて雪見し時々の歌の中に、雪晴

竹の葉の雪は綠になりぬともゆふしでかけよ藤代の松

高窗より見わたして

袖かへす少女やいづら白雪のみだるゝ空に笛の音ぞする

寒鴈

ちりかゝる雪の浮洲になく鴈のたたむ空さへかきくらしつゝ

夕されば三日月おとす木枯に田づらの鴈のこゑぞしぐるゝ

櫻田のひつぢの枯葉雪ちりて鴈がねひゞく朝ぼらけかな

いつまでかなきまどふらむ鴈がねの雪の空にもなりにしものを

鷹狩

とがりする片野の茅原(ちはら)淺茅原たたむ空にもしめゆはましを

み狩たつみのの木枯寒ければ鈴のゆらぎに雪ぞちりくる

○島山　島の築山。
○出居　客に會ふ座敷。
○君まちざけ　君待酒。待酒は人を待つ爲に釀せる酒。
○白波の濱松が枝　萬葉集卷二「白波の濱松が枝の手向草幾代までにか年の經ぬらむ」
○ゆふしで　木綿四手。雪の形容
○藤代の松　紀伊國海草郡。
○袖かへす少女やいづら　五節の舞の故事を下においた。
○三日月おとす　三日月を吹き落すやうな。
○櫻田　尾張國愛知郡。
○ひつぢ　穭。刈つたあとに再び生ふる稻。
○とがりする　鳥狩する。
○淺茅原云々　萬葉集卷十二「淺茅原小野にひめゆふ空言もあはむときこせ戀のなぐさに」
○しめゆはましを　標結ふは標繩を張ることで、自分の所有とする意。
○みの　御野。
○鈴のゆらぎ云々　萬葉集卷十四「つむが野に鈴が音聞ゆかむしだの殿の仲ちしと狩りすらしも」

埋火

我がための手馴の琴とかきなづる桐の火桶ようとみだにすな

ことゝはぬ木もて造れる火桶だに哀れと思へ埋もれし身を

爐火

蟲のねのきゆる頃よりこりつみし榾(ほだ)さしそへて霜夜あかさむ

爐邊似春

わきかへりたつやかなへの湯のけにも春をかすむる窗の内かな

埋火

筆とれば墨こそこほれ夜もすがら窗の埋火かきおこしてむ

神樂

より板の音を霰にうちそへて白玉かけぬ舞人もなし

大原やせがゐの水のにごりなき心をくまぬ神はあらじな

早梅

我がせこが春のいそぎに衣たてば朝北さえて梅かをるなり

冬鳥

霜とくる田中の杜の朝じめり羽(はね)もほしあへずしとゞ鳴くなり

○手馴の琴と　手馴の琴のやうに萬葉集卷五「こととはぬ木にはありともうるはしき君が手馴の琴にしあるべし」
○こととはぬ云々　右の引用歌參照。
○こととはぬ　物を言はない。
○こりつみし　樵り積みし。
○榾　焚物とする木片。
○より板　神寄板。敲いて神を招請するに用ゐた杉板。琴の板ともいふ。
○白玉　霰を指す。
○せがゐの水　清和井の水。山城國乙訓郡。神樂歌「大原やせがゐの清水ひさごもて鳥は鳴くとも遊びてを汲め遊びてゆかむ」
○春のいそぎ　正月の支度。
○朝北　朝吹く北風。
○田中の杜云々　續後撰集夏參議雅經「里遠き田中の杜の夕日影うつりもあへず取る早苗かな」

小笹原夕霜さむみうぐひすの春まつ聲のむすぼほれつゝ
あか星のなごりもまよふ霜朝に杜のをちこち火燒なくなり

冬　花

菊わけし山路のはての里つゞき千年をかけてさく椿かな
かへりばな
つみて煮む木の芽の春を近みとやさ枝の花のまづ薫るらむ
神無月いとまなき世をうしとてや春にかへして獨りさくらむ

待　花

雪ばかり所もわかずさく花はあらじと思へど春ぞまたるゝ

雪中歳暮

世の中を雪にとざしてみし書のかずばかりには月もつもらず

歳　暮

雪をれのひゞきを年の別れにてたけし我がよも驚かれぬる
春いそぐ遠近人のむれたちて市の植木はゐる鳥もなし

戀の歌ども

---

いふ燕雀類の鳥。
○むすぼほれつゝ　聲の結んで流暢でないこと。
○あか星　曉の明星。
○火燒　鶲。燕雀類の鳥。
○つみて煮む云々　萬葉集卷十「春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ摘みて煮らしも」
○さく花　雪を花と見る。
○みし書の云々　讀んだ書物が一年十二ケ月の數より多い意。
○雪をれ　積る雪の重さで木や竹が折れること。
○たけし我がよ　年取つた自分の齡。
○市の植木　萬葉集卷三「東の市の植木の木だるまであはず久しみうべ戀ひにけり」

○かげ野　陰野。山陰の野。
○玉の緒　命。
○このかはかみ云々　萬葉集卷五「たましまのこの河上に家はあれど君をやさしみあらはさずありき」
○玉鉾の　「みち」の枕詞。
○みちゆきぶり　途中で行き逢ふこと。
○筑波山云々　常陸風土記「香島郡童子女松原……㛹歌之會云々。」萬葉集卷九にも「登筑波嶺爲嬥歌會日作歌。」がある。
○歌垣　男女集つて歌をうたひ交す遊。
○かゞふ袖　少女の頭く袖。
○いひ寄るふし　言ひ寄ること。「ふし」は竹の縁語。
○竹の葉分　竹の葉と葉との間を分けること。
○うたても　厭はしくも。
○槇柱　たつの縁語。
○我が宿をみき　古今集戀讀人不知「それをだに思ふことゝて我が宿をみきとないひそ人の聞かくに」
○はへなまし　延へなまし。
○よせ綱　引き寄せるための綱。
○夏草の云々　古事記下「夏草のあひねの濱のかきがひに足ふますなあかして通れ」
○夏草の　あひねの濱の枕詞。
○あひねの濱　相寢の濱。未詳。
○眞砂地云々　萬葉集卷四「八百日行く濱の眞砂も吾戀に豈まさらめや奥つ島守」
○うらなれぬ　心馴れぬ。うらは衣の縁語。

稻妻のかげ野の原の露ばかり見そめし宵を玉の緒にして

笛とりてたちよるからに梅が香の亂れし宿をいつかへりみむ

若鮎のひれふる姿見てしよりこのかはかみの家ぞこひしき

玉鉾のみちゆきぶりにたぐへてし心は身にも歸らざりけり

筑波山かすみがくれの歌垣にたちまじらずば思ひよらじを

筑波ねの新桑つみにこしものをかゞふ袖のみ眺められつゝ

いさやまだいひ寄るふしも知らなくに竹の葉分を聞きや咎めむ

顯戀

かきくらす闇のまぎれにいでこしをうたても騷ぐむら鳥かな

槇柱たつ名もしらで我が宿をみきとや人の人につげけむ

尋戀

尋ねわびまどふ戀路にはへなまし我が玉の緒をよせ綱にして

逢戀

夏草のあひねの濱の眞砂地は八百夜ゆくともあかじとぞ思ふ

夏草のあひねの濱によする浪千重のちぎりをかけな逢へそ

うらなれぬ中(なか)の衣のつゝましき思ひの色に袖やもえなむ

あふと見し夢を現のわかれにはいつかへしたる中の衣ぞ

幼戀

おひさきの契りも結べ若草のうらなつかしき子らがすさびに

等思兩人

わけかへて露にいさよふ影もみむ望をへだての道芝の月

おもかげもたち爭へる二上にたゞよふ雪やわが身なるらむ

寄松戀

くづれする片山岸の姫小松しらでぞひきし後のこゝろを

さよ深くいでし心の奥みえてあねはの松に秋風ぞふく

寄霧戀

高角の山の山霧ふかければわがふる袖もうちしめりつゝ

寄鳥戀

時すぎぬあはれ契りもしるしなき萱のあら野の鶪のくさぐき

寄竹戀

嵐ふくまがきの竹のおきもあへず朝の牀はふすべくもなし

○あふと見し云々　續千載集戀中原時實「はかなくもなほや賴まむあふと見る夢を現のなぐさめにして」

○若草の云々　伊勢物語「うら若み寢よげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ」

○わけかへて　異なれる道を分けて。今一人の女の方へ行く意。

○望をへだての　望月を隔ててをるで、兩女とも甲乙ない美しい意であらう。

○おもかげもたち爭へる二上　容姿の甲乙のない兩人の意。二上は二上山（大和國北葛城郡）。

○あねはの松　陸前國栗原郡。

○高角の山云々　萬葉集卷二「石見のや高角山の木の間よりわが振る袖を妹見つらむか」高角山は石見國の都農の山。

○時すぎぬ云々　萬葉集十四「信濃なるすがのあら野に時鳥鳴く聲聞けば時過ぎにけり」

○萱のあら野　信濃國東筑摩郡。

○鶪のくさぐき　鶪が草の間にくぐり入ること。

○いさ　いさ知らずの意。

○まだきひもとく　早くも綻ぶ意ひもとく即ち紐解くの意を含む。

○うき藻の云々　千載集冬花園左大臣家小大進「我が脊子が上裳の裾の水波にけさこそ冬は立ちはじめけれ」

○かげうとき云々　萬葉集卷七「片岡のこの向つをに椎蒔かば今年の夏の陰になみむか」

○まき寢し　手枕を相まきて共に寢る。

○ひとよのかげ　一節の陰と一夜の姿とを掛く。

○月見すさび　千載集戀和泉式部「有明の月見すさびにおきて去にし人の名殘をながめしものを」月を見て慰むこと。

○かへる燕　南へ歸る燕

はし近くうたゝねはせじ若竹の露にや袖の露をかさねむ

春　戀

梅もいさ柳もしらじつく〴〵と思へばいつの春かみそめし

契りおきし花の時しもふる雨のうき音づれに袖やくたさむ

藤浪のたけにあまれる花ぶさを我がみし髮におもひよせつゝ

見し人の面影なびく若草にすがることてふもなつかしきかな（傍注　よすがさだめずさぶこ蝶かな）

山吹のまだきひもとく花ならでひとへにつらき心をぞ見し

夏　戀

夏河のうき藻の裾の水なみに螢のかげをやどしてしがな

かげうとき今年の夏の椎がもとまき寢し妹がたつ影もなし

すゝき原露か螢か我が袖かしげき思ひのたそがれの宿

秋　戀

蘆がきのひとよのかげの戀しさに月見すさびもあはれ幾秋

色ながら袖はしぼらじもみぢ葉を霧の籬にたをらざりせば

あさ月夜かへる燕の聲すなりすみし軒端も秋風やふく

逢不逢戀

更に又その夜の夢を結びなばみしも現と思ひかへさむ

寄草戀

蘆垣のはこめのおもと思ふとも人しらましや色にいでずば

はかなくもしのび車のすきかげを思ひめぐらす朝顏の花

草文の中ひきわけしかへり言ねたしや我が身ゆひのはぢしつ

寄月戀

枕ゆふかたこそなけれ菅原や伏見にきてもをばすての月

戀の歌の中に

くれなばといそぐ契りもあるものを閒遠にひゞく鐘の音かな

底ふかく忍びしものを落鮎のはやくも人にくまれけるかな

ましらゝの濱の走り湯わくらばに逢ひ見し影のうつらましかば

面影をうきみにそへて太刀が緖のたえにし夢や更に結ばむ

夕さればねぐらとめゆく村鳥の爭ふつまにあはでやまめや

今はとて櫻ちる夜のありあけにいでこし宿の春ぞわすれぬ

院四條「小野山は燒く炭がまの下もえて煙の上に積る白雪」
○小野山　山城國愛宕郡。
○くゆるなげき　悔ゆる歎きと薫るなげ木とを掛く。
○芦垣のはこめのおもと　思ふとものの序詞。古今六帖「吾が思ひ人知るらめや蘆垣の中のにこ草下にもゆこも」おもとは葉隱りの萬年青で、内に隱つてゐる御許の意を掛く。
○草文の中ひきわけしかへり言　手紙の中を開けて見た先方の返事ひきわけは草の緣語。
○ゆひのはぢしつ　萬葉集卷二「山守のありける知らに其の山に標ゆひ立ててゆひのはぢしつ」相手を自分の者と誤認して恥をかいた。ゆひは草の緣語。
○菅原や云々　拾遺集戀重之「戀しきを慰めかねて菅原や伏見に來ても寢られざりけり」古今集雜讀人不知「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」菅原や伏見は大和國生駒郡。
○ましらゝの云々　夫木集「ましらゝの濱の走り湯浦さびて今はみゆきの影もうつらず」白良濱は紀伊國西牟婁郡。走り湯は溫泉。走り湯までは「わくらはに」の序詞。「わく」に「涌く」を掛く。
○わくらはに　たまさかに。湯の涌く意を掛く。
○太刀が緖の　たえにしの緣語。

○白崎の巖こす浪　たちかへりの序詞。白崎は紀伊國日高郡。
○ふく風の便りもうとくなり　扇が風を送る具合がわるくなつた意に女からの便りが少くなつた意を掛く。
○扇のつまをれし　扇の端が折れた意と妻との交りが絕えた意とを掛く。
○思ひあふぎ　思ひあふ意に扇を掛く。
○河上の云々　萬葉集卷十四「河上の根白高萱あやに〳〵さね〳〵てこそことにでにしか」根じろ高がやは水に洗はれて根の白く高くあらはれた萱。
○ゆきの蜑の云々　萬葉集卷十五「ゆきの蜑のほつてのうらへをかたやきてゆかむとするに云々。」ゆきは壹岐で、此の島人は龜卜（龜の甲を燒いて吉凶をトす）に長じてゐる。鹿骨を燒いて吉凶をトするを肩灼（かたやき）といふから、片戀もその緣語。
○朝づま　夜妻に對し、朝まで逢ふ妻。
○吉野川云々　萬葉集卷六「山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河內は見れどあかぬかも」
○柵かけて云々　新古今集戀二條院讃岐「涙川たぎつ心の早き瀨をしがらみかけてせく袖ぞなき」
○あだ波　人の心の定まらぬこと。
○影となる身　古今集讀人不知「篝火の影となる身の佗しきは流れて下にもゆるなりけり」
○舟しまく　舟を激しく吹きまくる。
○海とあれにし　海の如くあれたる。「あれにし」に荒れにしと疎遠になつた意とを掛く。

白崎の巖こす浪たちかへりふれにし袖をまたもまきねむ
何にかく根さへかれけむ菖蒲草よそのつまとは人も思はじ
ふく風の便りもうとくなりにけりならす扇のつまをれしより
ひたすらに思ひあふぎのつまよりも猶秋風はふく世なりけり
河上の根じろ高がや風をいたみ末のみだれも人やしらまし
ためしなき片戀やせむゆきの蜑のやくてふ龜のますらをにして
冰ゐる波ならなくに朝づまのあさしやちぎり遠ざかりつゝ
なぞへなくつゝむ心よ山吹の花こそ八重もあはれとは見め
沖つ風音づれたえしゆふ浪のひとりをりてもぬらす袖かな
たぎちゆく吉野の川を契りにてしらゆふ花のみだれてぞ思ふ
なほざりに柵かけて山河のはやくぞ人はとはずなりにし
逢ひ見てもあはぬ心の末にこそあだ波こゆる山はありけれ
あふと見し夢をかゝげて燈の影となる身や一人なげかむ
物思ひの花をよすがの露にしも袖は草葉とくちやはてなむ
舟しまく海とあれにし契りゆゑゆにかくばかり落つる涙か
世もつらし人もうらめし大方は世にも人にもうらはでやみなむ

つらしてふ事もしらぎの人なれやそむきてのみそよを重ねつる

寄木戀

忌みはてむあすはと人の賴めしはならぬ思ひの名にこそありけれ

寄名所戀

はしきりし袖も慰む形見かは道のまゝにや追ひつきなまし

戀夢

恨みつゝぬればや夢もたえつらむ現にむすべ末のちぎりを

祈戀

祈りてもはた戀しきかあす知らぬ身をうづまさの增る病に

しかりとて涙の袖やきりたたむ結ぶの神に幣もとりあへず

かげ深き檜原はしるや椿市(つばいち)の夕けにかへてこもる思ひを

寄山戀

世の中にありへてものを思へとや山もなげきの霧にかくるゝ

過門不入戀

さゝがにの絲をふきたつ夕風に笛の響ぞよそになりゆく

はしり出の槻のさえだに聲ふれてすぐるもつらき時鳥かな

○しらぎの人　知らずに新羅の人を掛く。

○あすはと　あすは檜の木に寄せたのである。

○ならぬ思ひ　叶はぬ戀。あすは檜の木の本名「あすならう」を掛けた。

○はしきりし袖　萬葉集卷五沉痾自哀文「諺曰、痛瘡灌レ鹽、短材截レ端。」此の歌は紀伊國海草郡の形見浦の歌枕を思ひ寄せたか。

○身をうづまさの增る病　うづまさるは埀り起る意。

○きりたたむ　切裁って幣の代りとする。

○椿市云々　萬葉集卷十二「椿市の八十のちまたに立ちならし結びし紐を解かまく惜しも」同十「卷向の檜原に立てる春霞おほにし思はばなづみ來めやも」椿市及檜原は大和國磯城郡。

○夕け　夕占。

○ありへて　生きながらへて。

○なげき　木を掛く。

○さゝがに　蜘蛛。

旅戀

露をおきて野守もみえぬ司(つかさ)よりわが振る袖に萩が花ちる

寄草戀

あふことはかた山菅の二むすび涙をのみやかけつゞけなむ

聞きしらぬ色としる〱耳無草(みゝなぐさ)いくたびつみて驚かすらむ

戀貴人

夕されば籬にすくふかやぐきの及ばぬ空をこひつゝぞぬる

寄火戀

高野山杉より奥にともす火の晝さへ夜さへもゆる我が戀

僞戀

ひたすらに思ひたのみて歩みゆけば舟にとそむく人の心よ

寄風戀

夕されば宮路にかよふ飛鳥風とゞめし袖の香さへたぐへて

初逢戀

新室のかべも現もうれしきはかたらひ草の根ざすなりけり

切戀

---

○露をおきて　露を殘し留めて。
○野守云々　萬葉集卷一「茜さす紫野行きしめ野行き野守は見ずや君が袖ふる」
○かた山菅　難しこと片山菅とを掛く。
○二むすび　二人の契りの意。
○聞き知らぬ云々　枕草紙「摘めどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり」
○かやぐき　かやくゞり。燕雀類の鳥。
○舟にとそむく云々　舟に乘つて陸から離れて行く人心の賴み甲斐なきをいつたのであらう。
○飛鳥風云々　萬葉集卷一「たをやめの袖吹き返す飛香風都を遠みいたづらに吹く」
○かべ　歌詞で、夢の意。賴政集「現にもかべにも同じ戀を見て寢てもさめても忘られぬかな」
○かたらひ草　男女互に契ること

涙さへかさねてしぼる夜半の袖うしや染木のしる人ぞなき

後朝戀

春の夜をあかしもはてず歸りきてこや鶯のなきぬべきなり

寄笛戀

笛竹のよに忍ばしきふしなくば吹きがたりせむ遊びならまし

寄書戀

墨の香も匂ふまゆみのたて文にひきわかれつる袖ぞ戀しき

寄花戀

夕霞わけてといひし人まつとわがたつ袖に花ちるべしや

來不留

蛙だに聞かでも人の急ぐかなかへりてつらき音をそへねとや

寄衣

池殿の奥のつまやにあやめすゑぬへる衣の色ぞあせゆく

天

おふけなく眺めてけりな久方の空にしられむ我が身ならぬを

思ふ空やすの川原もありときく雲の上こそこひしかりけれ

○よに忍ばしきふし　よは節と世とを掛け、ふしは節と事の意とを掛く。
○吹きがたり　吹語り。吹聽すること。ふきは笛の緣語。
○まゆみ　檀紙。
○たて文　立文。ひねり文。
○つまや　夫婦の寢室。
○あやめすゑ云々　萬葉集卷七「住吉のなみづまぎみが馬のり衣さにづらふあやめをすゑて縫へる衣ぞ」あやめは漢女で、裁縫に巧みの女。
○やすの川　天の川。

日

天つ日のかげのまに〳〵世の中の人の心もはれくもるらむ

月

久方の月の變若水(をちみづ)をちかへり我もよにこそすままほしけれ

星

人の親の心のやみのしるべする星の光はいつの世にみむ

風

世をいのる幣の追風はやければあたせし船は影もとゞめず

嵐

岩が根の朽葉を雪にこきまぜてしもとおしなみ嵐ふくなり

雨

打ちかづく笠のあさぢふ玉はやし田中の杜に雨きほふなり

曉

ひとりわがまくら靜けき曉によしのの夢の淵をこそ思へ

朝

あさな〳〵うつやひらでの音よりも清き心は神ぞしるらむ

---

○變若水　若返る水。萬葉集卷十三「月讀の持てる變若水い取り來て君にまつりごをちえしむもの」

○をちかへり　若返り。

○人の親の云々　後撰集雜篇輔朝臣「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」

○幣の追風　幣に吹きつける順風土佐日記「わたつみのちぶりの神に手向する幣の追風やまず吹かなむ」

○あたせし船云々　元寇の亂などを指す。

○こきまぜて　まぜ合はせて。

○しもとおしなみ　草木の叢を押靡かし。萬葉集卷一「岩が根のしもとおしなべ云々。」

○打ちかづく　かぶる。

○笠のあさぢふ玉はやし　笠は茅でも作るから、笠全體を淺茅生と見て、笠に盛に降りかかる雨を玉はやしといつた。

○夢の淵　大和國吉野郡吉野川にあつた。

○ひらで　開手。拍手。

夕

みそぎ川神代の幣のみだれよりいつまでくだつ夕日なるらむ

曉遠情

朝月夜うね野のたづの一聲にいくたび人の夢みだるらむ

薄暮松風

岡のべの入日の名殘うちなびき松風ながら暮るゝ空かな

竹風如雨

軒ちかき竹の葉分を枕にてきかぬ夜もなき雨の音かな

山

大原やをしほの山の松だにも神代の色をたがへやはする

峯の松ふもとの榊さかえずば山はひとりや常磐ならまし

小野山のたむけの神にぬさとるは木路に入りたつ都人かも

山雲

西ふけばせの山こゆる秋の雲さこそしぐれめ藤原がうへ

水

いぐしたて水口まつりはやせなむさ苗の露の玉ゆらぐみむ

○くだつ夕日　末に傾く夕日。祝詞式大祓「六月晦日夕日之降乃大祓爾云々。」祓は夕方から夜に行はれる。

○うね野の云々　古今集巻二十「近江より朝立ち來ればうねの野にたづぞ鳴くなる明けぬこの夜は」

○枕にて云々　風雅集旅泰輔「夜もすがら苫もる月を枕にてうちも寢られぬ浪の音かな」

○大原や云々　伊勢物語「大原や小鹽の松も今日こそは神代のことを思ひ出づらめ」小鹽の山は大原山ともいひ、山城國乙訓郡。

○たむけの神　峠の神。

○木路に入りたつ云々　萬葉集巻四笠朝臣金村作歌一首并短歌を踏まへてゐる。

○西　西風。

○せの山　三山の香久山を指す。

○藤原がうへ　藤原の宮は三山の間にあつた。

○いぐし　五十串。

○水口まつり　二月頃初めて苗代に水を引き、水口に幣を立てて祝ふ。爲忠百首「早苗取る門田の庵に齋串立て水口まつりいそぐ賤の男」

○ながれこし世の憂き瀬　過去の時代の憂きことの意。
○すみ増る　澄みと住みとを掛く
○石の上　「ふる」の枕詞。
○ふるの川　大和國山邊郡。
○すみそめし　澄むと夫婦の交らひをする意の住むとを掛く。
○姫島云々　萬葉集卷二「妹が名は千代に流れむ姫島の子松がうれに苔むすまでに」姫島は攝津國三島郡。
○八聲　屢鳴く聲。
○くるとあくと　日が暮れるといつては夜があけるといつては。始終の意。
○ながめ　永雨と眺めとを掛く。
○田にはる　田に芽ぐむ。
○雜賀野　紀伊國海草郡。
○そがひ　後方。
○三輪　大和國磯城郡。昔三輪市といひ造酒の名所。
○市女　市で物を賣る女。

河水久澄

吉野川ながれこし世の憂き瀬をもしらでや水のすゑ増るらむ

たちはきて忍ぶもひさし石の上ふるの川水すみそめし世を

海邊夕

姫島の松のゆふ日に鴈なきてわが子戀しき秋風ぞふく

崎浪　あしか島白崎にむかへり

島の上にけふもあしかは眠れるを何さわぐらむ波の白崎

聞鷄

逢坂の杉の下露あさ日さし鷄(とり)の八聲に雨はれにけり

幽居

くるとあくとながめかしはの雫落ちて岡邊のさ霧はるゝ日もなし

田

おしなべて今は田にはる雜賀(さいが)野のそがひをかけて穗波こそよれ

名所市

人まちて三輪の市女(いちめ)がうる酒のすむも濁るも神のまに／＼

城

廢宅

ふる池のひとつ棚橋けた朽ちてはすの枯葉に秋風ぞふく

清廼舍君神秀峯なる安藤君のなりどころに遊び給へる時さぶらひてよめる歌の中に

松の葉の青垣山のうすぐもに秋をめぐらす夕日かげかな

さしおほふ園の笠松かげ高みけふは時雨にくれぬともよし

くるす原落葉が中の花折らむこの身とともにくちもこそせめ

白雲のおくの山路をふみわけて憂世にしらぬ花もつままし

さを鹿もこがれよるべき笛のねを松の雫にそゝぎてぞきく

天つ鴈おちくる聲に花山のふもとの田井をかへり見しかな

目路(めぢ)遠き尾上の松の枝ながらかゞみにかゝるつたかづらかな

あかずみし櫨の立枝にいと早も時雨の雲はやどりしめてき

四月ばかり清舍君のみともにて丹後のからの殿の出水のなりどころにて歌よみける中に

みづ清みたちよる袖におのづからかげもすらるゝ杜若かな

○棚橋　板で棚の如く懸け渡した橋。

○くるす原　栗栖原。栗の木の澤山生えた原。

○かゞみにかゝる　鏡に映じて見る如く明かな。

○丹後のからの殿　丹後の守の殿

○すらるゝ　摺らるゝ。

水きよき島のそひ石はなれ石いづれによりて口そゝがまし

時鳥きてをなかなむ島かげの淺瀨の音のしのび／＼に

はなちても見ばやと思ひし中島の夕かげぐさに螢とぶなり

ふし岩のつゝじが本のいさら水夢を流して胡蝶とぶなり

古戰場

駒わたす人かげもなし犀川の岸のつかさはかたくづれして

晩秋過古戰場

笠置山あすの時雨をさきだててみだるゝ雲に嵐ふくなり

古戰場といふ題にて歌よみける中に賤が嶽を

いつまでか其の面影のなびくらむ月よりみえし天のよさづら

古城蹟

岩くえて磯囘(いそわ)の城門(きど)はあれにしを夜聲さむくもよする波かな

あはれ其の大城の跡に鹿火(かひ)たきて山田もるらむをぢはたが子ぞ

桶はざまを過ぐとて

もみぢ葉の血汐みだるゝ塚の上に今日もおりゐてなく鳥かな

---

○そひ石　添石。
○はなれ石　孤立して離れた石。
○きてをなかなむ　來て鳴いてほしい。「を」は嘆辭。
○夕かげぐさ　夕陰にある草。
○いさら水　いさゝかな水。細流。
○つかさ　小高い所。
○よさづら　蘿。
○くえて　崩れて。
○鹿火たきて云々　萬葉集卷十一「足引の山田守るをぢがおく鹿火の下こがれのみ我は戀ひ居らむ」
○もみぢ葉の　紅葉の如く赤い。

是れやこのさらぬ別れにますらをのかへりみしけむ櫻井の里

山家

谷川のしがらみ越えてゆく水にたぐふ心はたれかくむべき

奥山の巖が中につきたてしくろ木の柱苔むしにけり

山家水

軒端ゆく山下水にかずかきてはかなき世をや更にしのばむ

山家橋

妻木こるかたはしばかりとりかけて憂世に通ふ便りとはせじ

山家送年

時鳥なきていくとせかへるらむすみうき世には出でぬ増れり

弘化三年正月二十五日難波より都をかけていでたつともすれば雪ちりかひて例の年よりはいと寒し二十六日堺へゆく道にて

さしばかりあがる雲雀のわび聲も空にひゞきて沫雪ぞふる

道頓堀のやどりにて曉ふかく起き出でて春曉月といふ題をいだして歌よみけるに能代繁里がもとを誦ずるにつく

堀江川水影かすむありあけにうかれ心の果でぞやさしき

○さらぬ別れ　避けられぬ別れ。死別。

○つきたてし　築き立てし。

○くろ木　黒木。皮つきのまゝの木。

○山下水云々　古今集戀讀人不知「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」

○かたはし　片端に橋を掛く。

○さしはかり　「し」は强め詞。

同じ題にて
まだ寒き有明の月もかすみけり難波の春のけしきばかりは
中村良臣がもとにて、岡雉
折りやつす躑躅の岡邊春たけて聲もあらはにたつきゞすかな
石津亮澄が七年の忌に歌の會すとて圓珠庵につどひて春月を
ほのかには月もしるらむ春の夜の霞のうちにこもる思ひを
三月朔日伏見の梅眞盛りなり
梅が香をまがきにこめし呉竹のふし見の奥や春のかくれが
都のやどりは三條のはしつかたにて窗より嵐山さやかに見ゆ
朝ごちをかへす嵐の山の端はおほひかねたる春霞かな
三月十三日西田直養賀茂川のほとりの家に人々をつどへて馬のはなむけす、兼題花下別人
都のみかへりみせましさく花は柳にそへてかざしゆくとも
十四日難波にて佐々木春夫もはらこととりて人々おほくつどへておなじ題をまうけて馬のはなむけす
をしみあまり木のもとさらず語るかな花にまぎるゝ別れならぬな

○呉竹の　「ふし」の枕詞。
○朝ごち　朝吹く東風。
○こととりて　世話をして。

○こをだにと　せめてこれをと。
○且落ちて　折り取る傍から花が落ちて。
○かも　かもしか等の革で作つた敷物。
○生駒山　大和河内の國境。
○みわたし　見渡すこと。

天保九年三月昆陽の正覺院なる父翁の墓詣しける時たてまつらむ花もなかりければかたへのやぶ陰に咲きのこれる椿を手折りけるに一花落ちしかば

こをだにと折りとる袖に且落ちて露よりもろき玉つばきかな

昆陽寺の前に絲櫻の大木あり墓詣しける折しも盛りなりければ伊丹の人人と共に木かげにかも敷きて酒のみ歌よむ

夢さめて蝶はいぬめり花むしろたちも離れぬ酔のまぎれに

伊丹にて大塚寛制がはなれ屋にやどりゐける時朝まだき外の面を見いだして

生駒山かすむあしたのみわたしに思ひつゞくる花の上かな

かへりきて後伊丹人のもとへ

中山の岩がねつゝじ手折りこしおぼろ月夜ぞ今もこひしき

春旅

末遠き春のたび路よいくたびか花に別れて花にあふらむ

かげろふのもゆる野邊より見渡せば淺間が嶽は霞なりけり

夏旅

五月雨ははれにしものを大井川いつまで遠きわたりなるらむ

冬旅

嵐ふくさゝめのみのの雫よりなごりしぐるゝ旅のそらかな

羇中雨

椎の葉にかれ飯もるとやすらへば山風そへて雨こぼれきぬ

羇中關

鈴鹿川水も八十瀬はゆくものを何にたゆたふ關路なるらむ

旅泊

わたつみの浪もてかくす故里をうきねの夢に今宵見しかな

天王寺の舞樂例は二月なるを故ありて九月にたがへける年夕つかた見にまかりて

篝火のほかげ霞める夕とやつゝじも春に咲きかへりけむ

十月朔日箕面山の紅葉見にとて伊丹の蓼園より人々と共にまかりけるとき

神無月たちぬときけどもみぢ葉の秋はけふこそ盛りなりけれ

正紹と共にはじめて圓珠庵の契沖阿闍梨の墓にまうでて九月の末つ方

○さゝめのみの　茅の類であるしなやかな細小の草で編んだ蓑。
○椎の葉云々　萬葉集卷一「家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」
○かれ飯　餉。乾飯。
○鈴鹿川云々　萬葉集卷十二「鈴鹿川八十瀬渡りて誰が故か夜越えに越えむ妻もあらなくに」
○たゆたふ　ためらふ。
○うきね　浮寝。船中に寝ること。

あとゝめむ道こそしらね庭櫻秋の木の葉とちりつもりつゝ

紀伊國續風土記撰ばせ給ふ仰せごとにて三たび熊野の村々海山をめぐりける時は夜晝といはず古今の事ども尋ねとひて書きしるし暇なかりければ大方歌もえよまで過ぎにしかど一つ二つは懷紙のはしにかいつけおけるもありしを歸りて後同じくは今ひとつ二つとよみ添へける歌ども

那木の葉をかざして歸る人もがな世々の御幸のあとがたりせむ

荒熊のいでいる山の岩木にも秋をかなしぶ色は見えけり

むろの江を連ねて渡る鴈がねにたえし御幸の影をしぞ思ふ

山賤がけぶりふきけむ跡ならし椿のまき葉霜にこほれり

契りありて露もおくらむ賤がこる妻木のみちの大和なでしこ

いづる日の影も朧のあさけかな霧にしをれて山路わけまし

み熊野のあら山中に海なしてたつ朝霧をいくへわくらむ

朝霧のふかきを雨とおもひしはまだ山なれぬ心なりけり

みづちすむ淵を千尋の底に見て太刀の緒かためゆく山路かな

煙たつ峯の炭やきやどりかせ夕日のおくにましらなくなり

門すぐる風をしるべに樫の實の一人いでても拾ふうなゐか

○あとゝめむ　葉を尋ねる。

○那木の葉　熊野參詣に梛の葉をかざすことは軍記物語にも見えてゐる。

○あとがたり　話者の心を對して應答すること。

○むろの江　紀伊國西牟婁郡。

○まき葉　卷葉。初生の葉の卷いて未だ開かないもの。

○妻木のみち　薪を取りに行く道

○大和なでしこ　撫子。

○あさけ　朝明。

○み熊野の云々　萬葉集卷三「大君は神にしませば眞木の立つ荒山中に海をなすかも」

○海なして　海の如く。

○みづちすむ云々　萬葉集卷十六「虎に乘りふるやを越えて青淵に虬とりこむ劍太刀かも」

○うなゐか　うなゐかな。

夕されば山路の松のふさたきを岩根の蔦にてらしてぞゆく

袖かへす山風はやみ松の火もともにこぼるゝ夕しぐれかな

山賤がまとふつゞりのふる衣さしも思はずよそに聞きしを

大かたは秋ともしらぬ山賤がけにもる飯は木の實なりけり

山賤がもちひにせむと木の實つきひたす小川を又やわたらむ

あらをらが岩垣つくりつくる田もほにいで難き山の奥かな

み熊野の神の御田屋は花薄ほにいづるまで荒れにけるかな

つみとるもあはれ曾根田のやせ稻穗手に滿つばかりあらばこそあらめ

もろ人の心がまへを山かけて思ひめぐらす小田のくひがき

人傳もすゞろに寒し大たわのふもとの杜の鳥の夜聲は

岩がねの八十のくま野の川傳ひかちゆくばかり危きはなし

五百枝さす槻の木陰の岩むらは弓削(ゆげ)のたくみや眞鉋(まかな)ふれけむ

宮代としめひきはへしいはひ杉賤がをがみの聲もかれせず

岩かげのかゞひの場(には)はあれにけり葛の裏葉をかへす嵐に

靜川のおくにありてふ釣橋はたゞ玉の緒をかくるなりけり

足ふめば霜くづれするまそほ山たちやつかれむ霧のみ中に

---

○松のふさたき　松火を澤山焚くこと。
○松の火　たいまつ。
○つゞり　つゞれ。
○もちひ　餅。
○あらをら　荒男等。猛き男。
○御田屋　神領の田の番小屋。
○花薄ほにいづるまで　目につくまでの意。
○あらばこそあらめ　あるならば格別ありはしない。
○もろ人　田の番をする人。
○くひがき　杙垣。
○かちゆくばかり　徒歩して行く位。
○弓削　上古弓を造る人。萬葉集卷七「眞鉋もてゆげの河原の埋木のあらはるまじき事とあらなくに」
○眞鉋。鉋。
○宮代　宮を建てる材料。
○をがみ　拜むこと。
○かゞひ　歌垣と同じ。
○まそほ山　赤土山。

雲たゝむ岩ね松がねゆく水のよどせにかはるむら時雨かな

都まで誰かさそはむ岩垣にかざがくれしてのこる紅葉を

五百重波たてりと見ゆるむら山のはての緣や海路なるらむ

いたゞきに杣板のせて下る子がうしろ手寒き那智の山風

打ちおける板目にきれし黒髪をゆゝしと見つゝ背子や歎かむ

浪の音に枕さわがぬ夜半もなし山ふところを立ち出でしより

磯近くかりねする夜ぞ敷妙のまくらあらすな沖に居れ波

むろの海のにしきの袋せばけれど百船びとは雨づゝみせり

浪風のうちみだりたる我が髮をたれかかゝげむ櫛もとの浦

家ならぬかたもなきまでみわが崎佐野のわたりは賑ひにけり

雪ふらばたちやよらまし夕月のかげさへ淸き佐野の松原

沖さけて浮ぶ鳥船時のまにかけりもゆくか鯨見ゆらし

鯨とるくま野の船の八十つゞき花も紅葉も浦にこそあれ

ひし投げて鯨つく見ゆ逸鳥のつばさが上にたれかたつらむ

雲かゝるわたのみ中にあらしほを雨とふらせて鯨うかべり

八百日ゆく濱路を淸み磯松のつねにと思ふかげもありけり

○よごせ　淀みこ瀨。

○かざがくれ　風にあたらぬやうに物の陰にかくれること。

○うしろ手　うしろ姿。

○板目　板の合はせ目。

○ゆゝし　忌々しい。

○敷妙の　枕の枕詞。

○沖に居れ波　古今集卷二十「こよろぎの磯立ちならし磯菜摘むめざし濡らすな沖にをれ浪」

○むろの海云々　萬葉集卷六「大埼の神の小濱は狹けれど百船人も過ぐといはなくに」

○雨づゝみ　雨のために籠ってゐる。

○家ならぬ云々　萬葉集卷三「苦しくも降り來る雨か三輪が崎佐野のわたりた家もあらなくに」

○沖さけて　沖の方に遠ざかつて

○鳥船　上古の船の一種。速力の早い船をいふ。

○花も紅葉も云々　新古今集秋定家「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」

○ひし　雨岐の鐵に長い柄を附けた物。

○逸鳥のつばさ　鯨の鰭をいふ。

○八百日ゆく濱路　長い濱路の意萬葉集卷四「八百日ゆく濱の沙もわが戀に豈まさらじか沖つ島守」

有馬の海浪のゆふ花をりかけて神をまつらぬ時も日もなし

夕時雨袖にみだれし山こえて板屋の里を月にこそとへ

かり宮の錦のみ旗たちかへりしのぶむかしの夢にし見ゆる

み吉野の奥に思へる心さへ身さへ山路をわけたどりつゝ

山里のあさ木の柱あさよひにたつとはすれど細きけぶりや

宿とへば木柴をりさす熊野人あすはの神の道やつたへし

小楯(をだて)なすいはほてるまで高倉のかぶとの杜は紅葉しにけり

仰ぎみるおろちかぐらの松陰はいかなる神かおりたたすらむ

荒山の八十隈おちぬゆきかひに涙は袖の針目をぞもる

　熊野へゆく道の程にて周參見の御館を守れる淺井廣俊がもとへ薄に結びてつかはしける

花薄まねくまに〳〵我がせこが昨日の袖をとめつゝぞゆく

　近露の里にて寐覺して

驛長(うまやをさ)竹の小筒をふくからに山のかひこそ聲あはせけれ

　九月二十一日めをと坂を雨にこゆとて

たが中の秋の別れにならふらむ女坂男坂もしぐれふるなり

○浪のゆふ花　浪の白沫を白木綿に喩ふ。從つて神を祭るをいふ。
○をりかけて　疊みかけて。
○かり宮　行宮。
○あさ木　淺木。節のある惡い木。
○宿とへは云々　萬葉集卷二十「庭なかのあすはの神に木柴さしあれはいははむ歸りくまでに」
○あすはの神　阿須波神。足で踏んで立つ所を守る神。
○小楯なす　楯のやうな。
○おろちかぐらの松　大蛇神樂の意味のついた松の名か。
○荒山の云々　嶮山を沿く往來する爲にの意。
○針目をぞもる　萬葉集卷四「吾が背子がけせる衣の針目落ちず入りにけらしな我が心さへ」
○昨日の袖　千載集崇德院御製「戀ひわぶる今日の涙にくらぶれば昨日の袖はぬれし數かは」
○山のかひ　山峽。

○かた木　薪炭料の櫟樫等の堅い木。

○七こし　七越し。
○秋の雲云々　風雅集稱敎院御歌「雁の飛ぶ高嶺の雲の一なびき月入りかゝる山の端の月」

○つゞみの名殘　花の窟から花下の鼓を聯想す。

湯峯にやどりけるあした雨ふりていとくらし

瀧つ瀬のあたりの雨やいかならむ出湯の煙はるゝ間もなし

此の歌は近き頃那智の山奥にてかた木きるまゝに瀧の水昔よりはおとれりとて人々なげくを聞きてよめるなりかくて後その事やみぬときけば今より百年も經なば昔にも立ちかへるべくや

熊野川

熊野川いはほの中をゆく船のへだゝるものは憂世なりけり

熊野川八重をりたゝむ岩かげを水棹にわけて船はくださむ

本宮にやどりける夜

七こしの峯に夕ゐる秋の雲一なびきして月はのぼれり

十月二日花の窟の祭すと聞きて有馬村の旅やどりより人々と共に手ごとに菊鷄頭花などを携へてまうづ

神無月春心地にもなれるかな花のいはやに花まつりして

祭り來し世々を思へばぬさとおく菊のちとせも露の一とき

神まつる有馬の浦による波の音やつゞみの名殘なるらむ

波風のかはらぬ音を有馬人笛につゞみにいつかあはせむ

しめはへて結べる菊のひまごとに扇もひらく花祭かな

鬼が窟にのぼる里人田村将軍の故事などかたるを聞きて

あら浪のたちはなれたる窟戸に籠りし鬼もやらはれにけり

二木島にて

にきの海の千尋のうへの波枕山かげよりも靜けからまし

にきの蜑は櫛笥（くしげ）の鏡とりも見ず窗ながらこそ朝魚（あさな）つりけれ

安虞の二本松は紀伊志摩二國の堺なりしなごりなり

あご崎の二木の松をけふ見れば昔の色もさだかなりけり

楯が崎は増基法師が楯をつきたらむが如しといへるに違はずいとこゞしき巖なり

島の崎あだ波ふるゝいはほすら君がみ楯とつかへまつれり

曾根里より舟にのりて加太浦につきてやどる海部郡加太を思ひいでて

かたりあふ友が島をも見てしがな隔たるかたの泊ながらに

十月十六日巴嶽にのぼるとて多宇具良といふ谷の雪の上にかり庵つくらすとて大木をきらせけるに倒るゝ音山にとよみぬ

み山木のもときりたつと斧とれば空もとゞろに嵐ふくなり

○やらはれにけり　追ひ拂はれた

○櫛笥の云々　萬葉集卷三「しかの蜑はめかり鹽やき暇なみ櫛笥の小櫛取りも見なくに」

○朝魚　朝の食事のための魚。

○こゞしき　險しき。

○隔たるかた　方と加太とを掛く

○もときりたつ　根本を切斷す。

すさるはそこより朝日のかげに富士の山見ゆと里人いひ傳へけるにより
てなりけり

小笹原よごもる雪をわけすてて富士のねながら日の光みむ

遠婆が峯の堂を朝とく立ちいでて高瀬の里寺のかたはらなる自天王の御墓といひ傳へたる御墓をふしをがむに里人赤松が族のわざはひせし尊義王忠義王などの御上をかたるを聞きつゝ涙もとゞまらずかしこけれど菊を折りて奉るとて

君まさば八重の白菊今ひとへにほはむ秋もあらましものを

たが衣かくたさざるべき苔の上の野はり土はりうらがれにけり

秋津河中

秋津川いはねの松のかげ清み空ゆく鳥もはねやすめせり

たちならぶ巖が中の秋津川あくよもあらじをちかへり見む

牟婁津の千疊敷といふ巖を見て

むろの津の出湯の上の石だゝみ千重さへしけりみ幸待つらむ

橋杭

○よごもる雪　夜中の雪。
○富士のねながら　富士山ぐるみ
○たが衣かくたさざるべき　涙の爲に何人の袖も腐るであらう。
○野はり　野の草が芽ぐみ。

○巖すら蟲ばむばかり日數へぬ　旅の日數の多いことをいふ。
○紫のこさ　濃さと古坐とを掛く
○さく　裂く。千切る。
○いかづちや云々　古今集戀讀人不知「天の原ふみとゞろかし鳴神も思ふ中をはさくるものかは」
○思ひかけけむ　雷が瀧姫に思ひをかけて袖をちぎつたであらう。
○高機　堆く積み上げた織物。
○今はと思ひし　もうこれで見るものなしと思つた。
○すべし　束ねた。
○さへむ　障へむ。
○山すゝ　山煤で、山が荒れて塵煙をあげた意であらうか。
○あらび　荒び。

わたつみの宮路のかよひ中たえて巖となれる橋ばしらかも

古坐川の蟲喰岩一枚岩などを見て

巖すら蟲ばむばかり日數へぬ菊の花さく山づたひして

雲間もる秋の日かげも紫のこさのいはほにかたぶきにけり

那智瀧

壁たてるいはほとほりて天地にとゞろきわたる瀧の音かな

瀧姫の御衣の白たへ幅ひろみさくいかづちや思ひかけけむ

高機をいはほにたてゝ天つ日の影さへ織れるから錦かな

あしたづの翅のうへに玉しきて神やますらむ瀧のみなかみ

富士も見き近江の海も渡りてき今はと思ひし瀧にやはあらぬ

世の塵にまよふ歎きは聞きとめぬ神のみ聲や瀧にそふらむ

ますらをがすべしもとゞり解きはなつ瀧の響に雨みだるなり

神あれし五十年の秋の一つぶていつまで瀧をさへむとはする

此の歌は天明それの年山すゝなどいふあらびありて瀧の上より落ちたる大巖どもをあかぬことに思ひてよめるなり

熊野のむら山の中に大たうのもりといふ山あり神代よりわけ上りし人な

れとも定めがたきをほうしが嶽といふ高山そのあたりに天そゝりたちたるを見てその山とはしるべく人々いひあへるを聞きてたはぶれに

大たわをいづれと問へば傍にたてるほうしぞ教へがほなる

在田日高二郡をふたゝびめぐりし時この歌どもは日記にもしるさざりしを一つ二つ思ひいでて書きつく

水の音にはては心もすむばかりいはがね枕いくむすびしつ

若鮎の夕川のぼる一つれも假庵しめたる岸にやすらへ

あうらつく新藁ぐつの荒づくりいかゞはふまむ岩のかけ道

まそほ山八十氏人のつりならで流れし雨のあとを見るかな

鶯をしる人にして山ゆけば花よりのちも春の旅なる

とりふける（ける 傍註）軒のかやねに串さして鮎も手縄もかけ竝べつゝ

かたぶきし軒の筧のみづ船に涙も浮ぶむかしがたりか

筧もる庭のしみづにそゝがれて去年のほし鮎若がへるらし

たが文ぞはしりわらはに言とはむ竹の皮ぎぬ洩れて見ゆるは

もえ松につゝじ折りそへ賤の女が子ゆゑにいそぐ夕暮の山

○ほうし　法師の意を掛く。
○大たわ　たわは山の頂上などの撓んだやうな所。
○假庵しめたる　假庵占めたる。
○あうら　足裏。
○かけ道　嶮しい路。
○まそほ山　赤土の山。
○鶯をしる人云々　金葉集雑僧正行尊「もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」
○みづ船　水槽。
○ほし鮎　干した鮎。
○はしりわらは　徒歩の童女。
○竹の皮ぎぬ　竹の皮に文を包んだのであらう。
○もえ松　若芽の萌え出た松。

○たゞに　まつすぐに。

○ふゝみつる　つぼんでゐた。

○人まつかげ　人待つと松影とを掛く。

○武隈の松　陸前國名取郡。

○よこめ扇　横目扇。板扇の板が柾目でない扇。「よこ」は「直き」に對す。

○ひとむら竹　一叢の竹。

○友ずり　互に擦れ合ふこと。

○よをも知るかな　世と節とを掛

たゞにゆくものこそなけれ岩がねの八十隈川の水のしら波

神ならば岩おしわけてかへらまし山路の暮は家ぞこひしき

日高の枝谷なる鷲の川の瀧見にまかりけるとき龍田義陳雨ごひのことなどかたりて歌すゝめければ

あらわしの雨雲羽ぶく風はやみ岩きる瀧の音とよむなり

南部の熊代繁里が許をたちいづとて

ふゝみつる籬のつゝじ散りにけりあからさまにも宿りしものを

松

我が門の人まつかげし清ければ濁りは千代をしめじとぞおもふ

手すさびに植ゑし小松も萬代の聲きくばかり生ひ立ちにけり

名所松

さしいづる月をしるべに立ちかへり見てこそゆかめ武隈の松

杉

心せむ直きためしの杉すらもよこめ扇につくるてふ世は

竹

風ふく[illegible]ひとむら竹の友ずりの[illegible]よをも知るかな

竹の繪に

鶯も月もしたしくなりにけりひとむら竹のかげしめしより

茄子のかた

あはれこの賤が垣根のわかなすび實さへ花さへ紫にして

西瓜

もみぢ葉の色にと願ふ瓜つくり秋くる方の名はおほせけむ

幽徑苔

山賤がいつやすらひし道ならむ柴のくち葉に苔むしにけり

鳥がねもたえし山路の苔の上に我や憂世のあとはとゞめむ

苔ふかき谷のほそ道わけいれば流るゝ水の音づれもなし

むす苔に杉さへくちぬ何をかはわくる山路のしるしにはせむ

鳥

波の上に浮べる鵜すら鷗すらかたわきてこそ立ち騒ぎけれ

鶴

あしたづの高ゆく翅われにかせ月のをち水とりてこむため

月花の色をつばさにとりかけて千代ふる鶴やあかぬことなき

---

○實さへ花さへ　萬葉集卷六「橘は實さへ花さへ其の葉さへ枝に霜降れどいやときはの木」

○秋くる方の名　秋は西より來るといふ事に依る。

○かたわきて　方々に分れて。

○高ゆく　空を飛び行く。

○月のをち水　萬葉集卷十三「月讀の持てるをち水い取り來て君にまつりてをちえしむもの」

蘆鶴の翅の雪のあたゝかに見ゆるは千代を積めばなりけり

曉更鶴

なきてゆくたづの千年はたが中の曉おきにかこちよすらむ

繪に川に都鳥あり

都鳥あさる瀬きよしこよひもや月に吹くらむ賀茂の川風

猿

大江山さゝ栗おつる夕ぐれのあらしの末にましらなくなり

猿山のかひにさけぶ

もみぢ葉の秋の御幸を山猿もみたびまでとや鳴きてまつらむ

馬

若草の美豆のみまきの放ち駒たがとる鞭に千里ゆくらむ

猫

から猫もひきのまに〳〵のぼるてふ位の山は綱にこそよれ

犬

大かたはとはずなりにし我が門をまもれる犬の聲ぞかなしき

魚

---

○あさる　餅を捜す。

○大江山　丹後國與謝郡。

○若草の　「みづ」の枕詞。
○美豆のみまき　山城國久世郡。

○から猫　猫。
○ひきのまに〳〵　引つはる意と特別に目をかける意とを掛く。
○位の山　位のこと。
○綱　手づる緣故の意を掛く。
○とはずなりにし　訪問客のないこと。

釣すればうけのまに〳〵よりくなり魚も淵には潛みはてすや

龜

負ひきてふ文は何せむ脊にのりしはやすひなとの昔語らへ

あた守る城のへの水にうら安く浮べる龜は御代のしづめか

蛛

目にかけて拂へばすがく笹蟹のいとはしとのみ思ふ我が世や

笹蟹の絲のみだれもみるべきは花ちりかゝる夕なりけり

歸りこむ宿は野分にあれにしをいつまで蛛の夕ありきする

谷ぐゝの繪に玄不談妙不談といふ禪語をかける傍に

はらにこそ光はみてめ何しかもたぬきの鼓月にうつらむ

童の竹馬にのれるかた夕月あり

老となるものとも見えず竹馬のかげなつかしき夕月夜かな

布袋の月見たるかた

早くより心の水にすむ月のかげを空にはたがうつしけむ

官女のすだれまきたるかた

峯よりも高き心のあとつけて雪にかゝげしたますだれかな

〇うけ　浮木。
〇はやすひなと　速吸門、伊豫と豐後との海關。こゝは古事記の神武帝東征の「故其の國より上りいでます時に、龜の甲に乘りて、釣しつゝ打ち羽ぶり來る人速吸門に遇ひき云々。」をいふ。
〇城のへ　城のほとり。
〇目にかけて　目にとめて。
〇すがく　巣をかける。
〇いとはし　絲と厭はしとを掛く
〇花ちりかゝる　花が蜘蛛の巣に散りとまる。
〇谷ぐゝ　ひきがへる。
〇心の水　心の清いことを水に喩ふ。千載集釋教前參議教長「照る月の心の水にすみぬれはやがてこの身に光をぞます」

栗のかた

菊の露ふかき山路にさゝ栗のゑみもこぼれて秋風ぞふく

草花多くさかせたる花籠のかた

もらしけな鹿のねながら八千種の露にこもれる花がたみかな

ゆづる葉に鶯をり

鶯のこづたふ聲にゆづり葉のさえだの雪はのこらざりけり

遊女と起上り小法師と西行上人像とを伏見人形のまゝに寫したる繪に

風すさぶ江口の蘆のふして思ひおきてしをるゝ露の袖かな

おきあがり小法師ふたつあり

玉ひかるしだり柳の露のまはなまきも寢ばや人しれずして

猿の三番叟の舞するかた

ましらとてわびやはをらむ翁さび人めかしくも我はまひてむ

大津繪鬼の奉加帳もたる

目にみえぬ心の角もかつをれて鹿の園にやおもひいるらむ

若人鷹するゐたる

尾花川さゞなみしぶく夕風にあら鷹するゐてたつはたが子ぞ

---

○鹿のねながら　鹿の音を籠めたまゝ。
○花がたみ　花籠。

○風すさぶ云々　西行法師と江口の遊女との物語を下におく。

○なまき　生木卽ち地に生えて居る木であらう。

○ましらとてわびやはをらむ　古今集卷十九躬恒「わびしらにましらな鳴きそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ」
○翁さび人めかしくも　翁らしく人間らしく。
○鹿の園　鹿野苑（ろくやをん）　釋迦が成道後初めて說法した所。
○あら鷹　未だ人に馴れない雛の鷹。

猿の瓢箪もて鯰おさへたる

大原やせがゐにうつる月ならばかの瓢もてとらましものを

わらは福祿壽のかしらに梯たてて髪そる

はしだてをほくらにはせてさかしくも高天の山のかみやらふ子や

壽老人と大黒天とすまひとる

白金も黄金もつきじ玉の緒の長き世かけていざくらべてむ

藤花かざせる少女

藤波になびくすがたを春山のをとこさびすと人もこそ見れ

鎗もたる奴

笹の葉の露かゝらずば玉鉾の道のゆくてははえなからまし

辨慶の大鐘さゝげたる

むなてにてその曉をまつ人の法のちからは知るべくもなし

琵琶の法師のたふさぎに犬たはれたる

四つの緒の琴こそあらめ翁まろいかに違へて引きすさぶらむ

披書知古

かりそめにふみ見るべくも思ほえず鳴門の若芽撫養の濱栗

○はしだて　梯を立てること。
○ほくら　神寶を納めおく倉。
○高天の山のかみやらふ　高天原の神逐ひと頭の髪を刈る意とを掛く。
○すまひとる　角力を取る。
○玉の緒の　長きの枕詞。
○春山のをとこさびす　古事記「春山之霞壯夫云々。」をとこさびすは男らしくする意。
○玉鉾の　道の枕詞。
○むなて　素手。
○その曉を待つ人　悟りを待つ人
○たふさぎ　短き股引の類。
○翁まろ　枕草紙七段にある犬の名に依る。
○引きすさぶ　たふさぎを引きもてあそぶ。

吉備大臣

色も香もうすらにかゝみるきびの酒弓削の河水くみやそへけむ

歌

色香しる心をたねの花ざくら咲きこそにほへ大和しまねに

千載集の中なるよみ人しらずの歌をみて

忍ぶにもあまる心の音づれを色にうつせる山ざくらかも

連歌

立ちかへりぬひつらねずば綻びし衣の關のあとをとめめや

硯

見ぬ世をも筆にうつすと朝な〳〵向ふ鏡は硯なりけり

筆

眞弓にも梓にもかへて筆とれば國ぶりならぬ跡はとゞめじ

墨

たくぶすましらぎの墨の船かたも棹かぢほさぬ貢なりけむ

紙

世々をへて筆の力やよわるらむうすらにのみもすける紙かな

---

○かめる　醸める。
○弓削の河　河内國中河内郡。萬葉集卷七「まかなもち弓削の河原の埋木のあらはるまじきことゝあらなくに」
○綻びし云々　義家貞任贈答の連歌「年を經し絲のみだれのくるしさに衣のたては綻びにけり」を踏まへてゐる。衣の關は新舊二つあつて、陸中國白鳥村にあつたのが新關、中尊寺の北にあつたのが舊關といふ。
○國ぶり云々　和歌を殘す意。
○たくぶすま「しら」の枕詞。
○墨の船かた　舟の形をせる墨であらうが、こゝは古事記の神功皇后新羅征伐を下に置いてある。
○棹かぢほさぬ貢　絕えず獻る貢古事記「每年に船なめて船腹乾さず、棹乾さず天地のむたとこしはに仕へ奉らむ……卽ち墨江大神の荒御魂を云々。」
○すける　漉ける。

机

くるとあくと向ふ机の島ばかりよに心ゆく海山はなし

歌會

幅せばきわが文机の上ながら思ふかぎりは書きつたへてむ

彈琴

まとゐすとふむや筵のから織もわが敷島の道のほかかは

詠琴

月見つゝひきすませども身一つの秋の調べは聞く人もなし

三絃琴

みとらしの玉の緒琴の音すなりゆづるの響うちたえし世は

一絃琴

妹がひくみつの緒琴のかたおろし花やぎてのみすぐすべき世か

棊

もしほやく浦の煙の一すぢにおもふこゝろも晋にたてばや

將棊盤

日をつぎてうちすさぶかなのりものの花は散りごになりにしものを

○くるとあくと　暮ると明くと。

○ふむや　「みち」の縁語。

○身一つの秋　古今集秋大江千里「月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど」

○みとらしの云々　萬葉集卷一「みとらしの梓の弓のなが筈の音すなり云々。」

○みとらし　御手に執り給ふ意。弓の事をもいふ。

○玉の緒琴　玉のやうに美しい琴

○ゆづる　弓弦。

○かたおろし　片下。調の名で、本末の内、一方をおろして歌ふ。諸撥に對す。

○もしほやく浦の煙の　一すぢの序詞。

○のりもの　賭物。かけもの。

○散りご　散り期。散る時。棊を掛く。

すみわぶるくゝめ屋形と見らめどもさすがに賤が心をぞやる

二句久安百首に見えたる詞に盤面の八十一目をこめたれどさは聞えがたかるべくや

王将

右左ちかづくあたをふせがずば都にさへや流されなまし

金将

君をさておきや別れむあたどもの亂れ入りてはそふべくもなし

銀将

しりべしのえみしがともぞ騒ぐなるいざや歸りて追ひやらはまし

桂馬

たゝなへて圍める中にいらざらば一方ならぬいさをたてめや

香車

東人の遠きまもりにつかへけむたゞひとすぢを心とはせむ

飛車

我がむかふ直路（たゞぢ）の關をゆきとほり追ひしくばかり嬉しきはなし

角行

○くゝめ屋形　くゝめ即ち八十一目も隙間だらけの家。
○さすがに云々　そんなあはら家でも賤人は滿足する意に、盤面に對して打つ人が氣を晴らす意を掛く。
○久安百首　近衛帝の久安六年崇德院の仰によつて詠進した歌を集めたもので四卷ある。
○そふべくもなし　王將の傍にのみ侍ることは出來ない。
○たゝなへて　充ちみちて。
○直路の關　飛車が直すぐ進んで敵地に乘り込むをいふ。
○追ひしく　追ひつく。

まくらこそうたて心の儘ならね斜にふせるいくさとりこむ

歩

しかりとて露よりもろき我が身かはうち置かるゝも時にこそよれ

茶

なべて世にかをりみちたる木の芽かな栂の尾山に植ゑ繼ぎしより

茶室

櫻さへいまは咲かせて難波人梅が香そふる冬ごもりかな

劒

雲はなちふるや霰の玉まきて霜よりさむき太刀ははかまし

ともすれば劒のたがみとる人のおぞき心はとぐべくもなし

衣

葛城や雲にやつるゝ山伏のすゞかけ衣たれかとりみむ

さ夜ふけて絲よりほそき燈の影をたのみに縫ふはたがつま

衣をよめる五首曾丹集に見えたるつらね歌のさまにもあらねど

から衣袂ゆたかにたつ人の心のしなはさだめかねつゝ

筒袖のもろこしぶりのうらせばき衣に似たるなげきのみして

---

○ふせる　伏せるさ寝る意とを掛く。

○木の芽　茶をいふ。

○栂の尾山に云々　茶は栂尾上人が植ゑ初めたといふので、かくいふ。

○櫻さへいまは咲かせて　茶室の爐中の櫻灰の美しさをいふのであらうか。

○難波人云々　王仁の作といふ「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」

○たがみ　手上。劒の柄。

○おぞき心　鈍い心。

○葛城や云々　大和の金峯山は山伏の修行所なればいふ。

○曾丹集　曾根好忠の歌集。

○つらね歌云々　つゝ、筒袖、して、しで田長といふ風に尻取に作る。

○から衣袂ゆたかにたつ　古今集雜體人不知「うれしきを何につゝまむから唐袂ゆたかにたてといはましを」から衣は袂の枕詞。ゆたかには廣く大きくの意。

しで田長唄ふ衣のひとへぎぬたちやまじらむ雨ははるとも

ともすればかけていはるゝ神御衣のそのたち縫ひを知るよしもがな

悲しくもうき世の外の衣手をはえある色にそめむとぞする

鏡

足乳根の母が形見のひもかゞみむかしの影ぞかけて戀しき

うつりゆく姿もしらずひたすらに照らす鏡を我が世ともがな

燈

曉をかけて傳ふるともしびの光もちゞに亂れけりとや

船

何事かおもひのこさむ朝びらき漕ぎゆく舟の眞帆の追風

青黄白

小篠原それともわかぬ葉がくれにかつ〴〵さける月草の花

よつの緒の名に引かれてやなり出づる木の實も絲の色にみゆらむ

一帆見え二帆つらねてあくる夜のしらゝの沖に船きほふなり

夏と冬と

風にのる夏の月夜もあるものを氷るうき瀬に棹やさすべき

○しで田長　時鳥。
○かけて　口の端にかけて。
○神御衣云々　神の御衣は縫はないで作るからいふ。
○うき世の外の衣手　僧衣や世捨人の衣をいふ。
○ひもかゞみ　鏡の裏のつまみに紐の附いた鏡。
○うつりゆく　衰へ行く。
○朝びらき云々　萬葉集卷三「世の中を何にたとへむ朝びらき漕ぎにし船の跡なき如し」
○よつの緒の名　琵琶で、枇杷を掛く。
○なり出づる　生育する。
○しらゝの沖　ましらの沖と同じく、紀伊國西牟婁郡。
○風にのる夏の月夜　月夜の夏の涼しい風の中に舟を進むること。

柿本大神

鴨山のたかきすがたにうち靡く言の葉ぐさは神ぞしるらむ

大中臣右大臣のかた

心さへ身さへ淸くやつかへけむ神と君とのまけのまに〳〵

業平中將

煙たつ淺間が嶽のあさましくまどふゆくへも人やとがめむ

河内女の手染の絲のうきふしにおもひたえけむ高安の里

文屋康秀

唐織をたちまじへしやあき人にふさはしからぬ衣と見えけむ

田道

古塚の草の葉さやぐ神風にあだ野の露は残らざりけり

楠贈三位

湊川そこの埋木えてしがなつかふる道のしをりにをせむ

常磐御前

右ひだりわくる心もしら雪のはだへをとほす聲ぞかなしき

紫式部机によりて月見いだしたるかた

○鴨山　石見國那賀郡。

○まけのまに〳〵　任命に隨つて

○煙たつ云々　嶽のまではあさましくの序詞。伊勢物語「信濃なる淺間の嶽にたつ煙をちかた人の見やはとがめぬ」

○河内女の云々　續後拾遺集戀後一條入道前關白左大臣「忍ぶれば苦しきものを河内女の手染の絲の色に出でなむ」

○高安の里　河内國中河内郡。

○あき人に云々　古今集序「文屋康秀は詞はたくみにてそのさま身におはずいはば商人のよき衣著たらむが如し。」

○心もしら雪　常磐の心も兒は知らずの意を掛く。

○はだへをとほす聲　懷に抱かれた赤兒の泣聲をいふ。

囘りあひて見し夜の空もみづ甕に月影ながら寫しとめけむ

福祿壽老人一巻の書もたるかた

いかで其のみつの寶を我もえて月花雪にうかれてしがな

大路に捨てたる子

綠子のちぶさたづねてなく聲に大路の塵もうちしめりつゝ

うなゐ子

笹の葉を小舟につくりうなゐ子が心たらひの水あそびせり

達磨

天つ日の影もそがひの古壁にいつまで枯れぬ草の根ざしぞ

美人

すきかげもこぼれて匂ふ花櫻をすのうちには誰かうゑけむ

いさやまた憂世にしらぬ姿かな竹よりいでし少女なるらむ

農夫

春田のみ人はいへども稻筵うつ手もさやは安けかるべき

乳

うなゐ子がすがる乳房や世の中のめぐみの露の始めなるらむ

○囘りあひて云々　新古今集雜紫式部「めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲隱れにし夜半の月影」
○みづ甕　文子。
○みつの寶　福と祿と壽。
○心たらひ　滿足。
○そがひの　うしろにする。
○すきかけ　透影。
○竹よりいでし少女　竹取物語のかぐや姫。
○春田のみ云々　春田を耕すのは辛いと人はいふが。
○稻筵　稻殼で編んだ席。

○矢のかず　五十本がその定め。
○ながめいみ云々　萬葉集卷十六「飛ぶ鳥の飛鳥をとこがながめいみ縫ひし黑沓さしはきて云々。」
○ながめいみ　長雨を嫌ふ。眞淵の說では、飛鳥氏は縫作りに名高く、又革靴を作るには雨が禁物であらうといふ。
○くつをれて　沓と意氣消沈しての意とを掛く。「聞く」までは序詞。
○みつあひ　三すぢをよりあはせること。
○ながらへて　流れてと長らへてとを掛く。「水」のまではながらへての序詞。
○たなうら　掌。
○石井　岩の間から涌き出る泉の井。
○わらはやみ　瘧。おこり。
○いさや川云々　古今集卷二十「犬上のとこの山なるいさや川いさとを答へよ我が名もらすな」
○いさや川　近江國犬上郡の犬上川。
○みをさかのぼる　水脈溯る。
○とこの山　牀の意を掛く。

述懷

益良夫がとりおへる靫(ゆぎ)にもれる矢のかずも昔の定めとはなし
ながめいみ飛鳥男子がぬふと聞くくつをれてのみ世をば盡さじ
見れどあかぬ月雪花のみつあひに我が玉の緖はよりやかけまし
み熊野のみ崎の汐の一方に下りもはてぬ世にこそありけれ
思へ人世はうの花のくづれ垣ひとへにのみもたのみ難きを
櫻川春ゆく水のながらへて心のどかに世をわたらばや

しばしば家居をかへける事を思ひいでて

たなうらにつくりもたてむ庵ながら七種うゑて月をみしかな
榎の葉ちる石井(いはゐ)のもとに我がまきし玉は誠のたまかあらぬか

わらはやみにて打ちふしける頃

いさや川みをさかのぼる浮舟のゆられて寒しとこの山風

青木永章みまかりぬと中島廣足が許よりいひおこせける文のはしに其の
墓詣して思ひきや秋風寒き片山に君を此の秋とはむものとはとよめりし
歌をもかいつけたるが十月の末つ方こゝに來つきしかば返りごとすとて
思ひやる其のかた山の松風に散るとはしるや窗の木の葉も

羽根田良裕八月ばかりみまかりぬと尾崎正明が許より告げおこせけるに

此の春かしこにて始めてあへりしことを思ひ出でて

今や夢わかれし春やうつゝなるなきてをしへよ天つ雁がね

岩崎美隆みまかりぬと光平のもとより告げおこせけるにいとおどろきて

この人の晩鴉の歌などを誦して

涙さへみだれてかなし夕がらすたゞ一聲のなごりたらねば

幼子をうしなひて七日にあたりける日寺詣して歸りけるに年平が來居たりしかば

年月をへだてし人も音づれぬあすや我が子のかへりきなまし

又の年の其の日に

ゆきかへりたはるゝ蝶の袖すらもけさは露けき撫子の花

撫子のかれにし日より一年の露はみながら袖にかけてき

あし垣に螢はなちし面かげはひるさへ見えて露ぞみだるゝ

馬尾風といふ病にてうせければ

聲かれてうせし子ゆゑに時鳥なけばかたみと何しのぶらむ

山田久秋が一周忌に、冬懷舊

---

○今や夢云々　風雅集雜右京大夫「今や夢昔や夢と辿られていかにと思へど現とぞなき」

○たはるゝ　戲れる。

○撫子の花　撫でし子の意を掛く

○みながら　悉皆。

○馬尾風　ぢふてりあ。

○友をなみ　友を無み。
○昔の影の云々　今鏡村上の源氏「ありす川同じ流れと思へども昔の影の見えばこそあらめ」昔の姿が見えるならばうれしいがの意。
○なか／＼　反對にの意。
○八坂瓊　長い緒に貫いた澤山の玉。
○天地の云々　萬葉集卷十五「天地のそこひのうらに我が如く君に戀ふらむ人はさねあらじ」天地の極まる内の意。

かしましの霞のおとや友をなみ昔を戀ふる夜とはしらずて

藤垣内翁の影前會に、曉懷舊

まどさむき曉月夜はつかにも昔の影の見えばこそあらめ

夜懷舊

更けゆけば昔のよにやかへるらむ見し俤のさだかにぞたつ

父翁の十七回忌に夏懷舊といふ題にて人々に歌すゝめける時

時鳥親に似てなくこゑならば五月の空もながめせましや

高橋勝房が一周忌に、寄菊懷舊

香をそゝぐ秋の時雨のひとめぐりしをるゝ菊も心ありけり

本居永平が一周忌に、寄笛懷舊

ふけばこそ袖には露のみだるらめ形見の笛も今はとり見じ

祝

君が代の惠みのつゆに濡れてこそなか／＼民の袖はほしけれ

八坂瓊の光をきよみ天地のそこひのうらは浪風もなし

幸遇泰平世

君が爲花と散りにしますらをに見せばやと思ふ御代の春かな

つかへ人きのふは鳥狩（とがり）けふは釣いとまある世ぞ暇なげなる

人の賀に

何ばかり千年のさかえかたからむ巖にねざす松もありけり

山内繁樹が七十賀に、寄松祝

三名部（みなべ）の海むかふ鹿島の島松や千代のかげみる鏡なるらむ

寄小松祝　年賀

春毎に引きては植うる若松の千代をあまたの宿にもあるかな

寄竹祝　同

呉竹のふしにこめてもあまりある千代の榮えや色にみゆらむ

春祝

庭の梅はひりの柳千代ふともゑまひ眉びきふりせざるらむ

冬祝

風たたぬ御代の光や積るらむあたゝかげなる松の白雪

器

近江のや鏡の谷のすゑつくり神代のかたをうつしたがふな

髮

○巖にねざす云々　新勅撰集賀小野宮右大臣「萬代の秋を待ちつゝ鳴きわたれ岩ほに根ざす松蟲の聲」

○三名部の海云々　萬葉集卷九「三名部の浦汐な滿ちそね鹿島なる釣する海人を見て歸り來む」三名部は紀伊國日高郡。鹿島もその附近。

○はひり　入口。和泉式部集「見にと來る人だにもなし我が宿のはひりの柳下はらへども」

○ゑまひ眉びき　ゑまひは梅、眉びきは柳の方にいふ。

○ふりせざるらむ　古びないであらう。

○鏡の谷　近江國蒲生郡。日本書紀「新羅王天日槍。入近江吾名邑暫居。是以近江國鏡谷陶人。則天日槍從人也。」

○すゑつくり　陶工。

○延元の帝　後醍醐帝。
○榎の實もりはむ　萬葉集卷十六「吾が門の榎の實もりはむ百千鳥千鳥は來れど君ぞ來まさぬ」より　はむは枝を離れず食べる意。
○雪の光に云々　晉の孫康の故事
○ひきかへしより　改める意と弓の緣語引きとを掛く。
○餅花　小さい餅片を柳の枝などに花の姿につける正月の玩物。
○うゑ人　飢ゑ人。
○玉の緒を云々　生命をつなげる一葉もない。
○繪たくみ　畫工。

我が身かくもとゞり落ちて老いぬるをなど總角の心地のみする

車尾村の榎は延元の帝の御輿よせたまへる陰とて伯耆人の歌こふに

天つ日の影さす方に打ちむれて榎の實もりはむ鳥もなくらむ

永久百首題にて一夜百首よみける中に、唐人

日の本にありといふなる不二のねの雪の光に書見てしがな

竹垣主の元服の祝に

とる弓の末たのもしく見ゆるかなわらは姿をひきかへしより

餅花とて柳につくるを武藏國にては眉玉といふとぞ

下めぐむ柳がえだの眉だまにまだき籠れる春の色かな

天保八年の春うゑ人多かりと聞きて其の心をかなしびつゝ

春の野の露とやきえむ玉の緒を結ぶたよりの草の葉もなし

人の子うませたる祝に菖蒲とかぶとのかたに歌こひければ

若松の緣にかよふ色なれば菖蒲も千代のためしにぞひく

夢

去年も夢今年も夢とたどりきていつを現のはじめにはせむ

繪たくみ文頴みまかりける時寄草花哀傷の歌とて沼野直道がこひければ

うつしつる人こそしのべ薄墨のゆふ露ふかき秋萩の花

　縣居翁の靈社に奉らむとてくさ〴〵の歌よみける中に

古鄕の岡邊の菫手につみていとゞ昔の春ぞこひしき

櫻花散らばちらなむ遠つ神わがおほぎみのきぬ笠の上に

染めざらむものとはなしに秋山の青きをおきてなげく頃かな

風こゆる妹が垣根の山吹の花にたぐひて春もいぬめり

古に戀ふらむ鳥のこゝろまちて花橘は花咲きにけり

みしぶつく植女（うゑめ）が袖に夕月のやつれし影をあはれとぞ見る

ともしびの光すゞしき中川は月をもまたじ秋も思はじ

山里はうの花がきのひまをあらみしのび音もらす時鳥かな

榊葉の香をかぐ山にのぼりても神代の空は遙けかりけり

馬草かる荒野とこそは思ひしか大和撫子咲きそめにけり

故里の岡邊にたちてわが見てし富士のみ雪のと（ぞ傍註）はに戀しき

故里のなつめがもとの萩が花こぼれにけらし秋風のふく

世の中はかなしかりけり世の中のなにか悲しき賤の男にして

○○縣居翁　岡部眞淵。
○いとゞ昔云々　雜勅撰集新土御門内大臣「九重にかはらぬ梅の花見てぞいとゞ昔の春は戀しき」
○櫻花散らばちらなむ　古今集春惟喬のみこ「櫻花散らば散らなむ散らずとて古里人の來ても見なくに」
○きぬ笠　衣笠。絹又は織物を張つた長柄の傘。萬葉集卷三「久方のあめゆく月をつなにさしわが大王はきぬ笠にせり」
○秋山の云々　萬葉集卷一「秋山の木の葉を見ては黄葉をば取りてぞしぬぶ青きをばおきてぞ歎く云云。」
○風こゆる云々　萬葉集卷十「春されば卯の花くだしわが越えし妹が垣間は荒れにけるかも」
○古に戀ふらむ鳥　萬葉集卷二「古に戀ふらむ鳥は時鳥けだしや鳴きしわが戀ふるごと」
○みしぶつく云々　萬葉集卷八「衣手にみしぶつくまで植ゑし田を引板我はへ守れる苦し」みしぶは水澁で、水面の水垢。
○ひまをあらみ　隙間が荒いと會ふ機會の尠い意とを掛く。
○香をかぐ山　香を嗅ぐと香具山とを掛く。
○馬草かる云々　萬葉集卷一「まぐさ刈る荒野にはあれどもみち葉

時鳥矢作の市をすぎぬなり沓代いださぬ門やとふらむ
夕さればやまとへこゆる鴈がねの聞ゆるからに秋ぞ悲しき
蘆がちる難波のわたり今ぞせむ鴨の羽がひに初雪ぞふる
あらゐの海百船人はさわげども濱名の橋のあとし知らずも
引馬野(ひくまの)の木の芽はり原いりみだれ春日くらすはむかし人かも

風鈴の歌あまたよみける中に

山里のそとものゝみ篶(すゞ)ふく風の音もさやかになりにけらしも

小浦廣名が熊野へゆく折々馬の餞の會せし時よめる歌ども大かた忘れたりされど

水清き安氐(あて)の堤のはじ紅葉うつろふかげや過ぎがてにせむ
とくゆきて君をりかざせ月の瀬の夕川づらは紅葉ちるらむ

かしこへいひ遣はしける中に

荒鷹のすさみの海のおきつ風袂をのみやとめて吹くらむ

清介君湯崎の出湯あみにものしたまふ時

君がゆく野山の薄みま草にかりてつかへむわが身ともがな

三月ばかり海路へてゆく人に

○矢作　三河國碧海郡。催馬樂貫河の二段に「親さくる夫は、ましてるはしも、しかしあらば、矢矧の市に沓買ひにかん」
○夕されば云々　萬葉集卷六「朝には海邊にあさりし夕されば大和へ越ゆる鴈しともしも」
○蘆がちる　難波の枕詞。
○鴨の羽がひ　鴨の左右の翅の打ちちがふ所。萬葉集卷一「蘆邊行く鴨の羽がひに霜ふりて寒きゆふべは大和しおもほゆ」
○あらゐの海　遠江國濱名郡。
○引馬野　遠江國濱名郡。萬葉集卷一「引馬野に匂ふ榛原入り亂り衣にほはせ旅のしるしに」
○木の芽はり原　木の芽の張る榛原。
○安氐　足手。紀伊國有田郡。
○荒鷹のすさみの海　紀伊國西牟婁郡。周參見。荒鷹のは枕詞。
○みま草　秣。萬葉集卷七「この岡に草刈る童しかな刈りそねありつゝも君がきまさむみま草にせむ」

うら／＼と霞みわたれるわたつみの春のあさ庭静かにをたて

落花

心からけふしも散るか櫻花あらしの風を待ちがてにして

初冬山

神無月たちにし日より足びきの山さへもろき色にみえつゝ

雪中鷹狩

白鷹の小鈴もゆらにゆくみれば野山の雪は色なかりけり

詠鶴樓の月の宴に玉つ島の釣殿の笛の音きこえければ

たちのぼる霧より上の高どのに笛のねながらすめる月かな

竹徑通幽處

村竹の葉分に薫る花の香をとめくる間にも千代はへぬべし

椿

年月のさかりも知らず花さきて春をつらぬる玉椿かな

湖上寒鴈

たる姫のうき洲の雪にふしわびて常世戀しく鴈のなくらむ

時雨

○あさ庭　朝の凪いだ海面。
○靜かにをたて　「を」は咏嘆。

○とめくる　尋ね來る。

○春をつらぬる　幾年月を經る意。つらぬるは玉の縁語。

○たる姫　越中の布勢湖畔。

○西寺　山城國葛野郡。

○若草の　「つま」の枕詞。

○草とる　鷹が草の中で鳥を捕へる。

○片野　河内國北河内郡。

○眉刀自女　眉を拔かず生やす女

○さはだ　澤山。

夕時雨

しぐるゝか松の色だに見るべきを外山はまだき暮れ初めにけり

西寺は夕日のかげにかたぶきて御笠のうへをゆく時雨かな

冬月

影きえし雪げの雲をふもとにて松におもれる山のはの月

枕

若草のつま屋の枕つく〴〵と見しよの春の夢をしぞおもふ

秋海棠の歌

露ふかき秋のよもぎが島陰に玉の枝こそ花さきにけれ

狩野雪

白鷹の草とるばかりありしより片野は雪に埋もれにけり

冬衣

毛衣に綿とりいるゝ眉刀自女(まゆとじめ)我が子のまけか綿さはだいる

冬鳥

島かげにうかべる鴦の二ならび昔をこひて幾めぐりせし

天王寺かぶらと烏芋とをかけるに

鳥羽よりの使こさらば難波寺なにを夕けのあはせにはせむ

千鳥

磯山のもみぢを葺ける船屋かたこがるゝ波に千鳥なくなり

曉千鳥

曉は夢もみだるゝ白髪に老をかぞへて鳴く千鳥かな

山家

遲くとく世に似ぬ色を見するかな花も紅葉も山ごもりして

山家秋深

都人たけ狩すらし片山のすゞ吹く風にこゑの聞ゆる

嘉永元年の秋遠江懸川驛にて父翁の二十七年忌の爲に歌會せしよし聞きて其の題秋懷舊を

人しれず思ひみだれて偲ぶかな萩の下葉のうつりこし世を

嘉永二年九月弟のとひきて懸川の會のことどもこまやかに語りければ

掛川の里わのま葛くりかへしとへど語れどうらぶれにけり

---

○夕けのあはせ　夕食の菜。

○こがるゝ　漕がると焦がるとを掛く。

○うつりこし　下葉の衰へ行く意と月日の經過する意とを掛く。

○くりかへし　葛は蔓草であるから手繰り取る意と繰り返しと掛く

旅

小鼠のよゝのさわぎにはしやれて内外へだてぬ古すだれかな

嘉永元年の四月ばかりにや心地そこなひて臥しゐけるころ螢のとぶを見て古陰らと歌がたりしつゝ

水枝さす楓のかげに秋またでこがるゝ色は螢なりけり

川づらの庵にありける時正月の始めつかた南の山々を見わたして

静かなる山の姿をほのぼのと浮べてたてる春がすみかな

心地そこなひける頃岡川に船を浮べて

桃の花うつろふ陰をゆくほどはうき瀬に沈む我が身ともなし

秋川

泉川わきて秋こそかなしけれ拂へばむすぶかせの山霧

萩

露ながら袖にやかけむ藤原のあれしみやこの秋萩の花

菊の花うるはしくかけるかたに

花ふきしよゝの杯いくかさね重ねて菊のいろはそひけむ

○はしやれて　端破れて。

○水枝　みづみづしい若枝。
○こがるゝ　焦がるゝと日に照らされて色のかはる意とを掛く。
○川づら　川のほとり。

○うつろふ　水に映る意。

○泉川　山城國相樂郡。
○かせの山　同上。

○藤原のあれしみやこ　大和國香具山の西北鴨公村大字高殿の邊。

○かたき心　むつかしい意味。
○くみ見てしがな　くみはさかづきの縁語。
○をがや原　小菅原。
○こがらめ　小雀。
○天草　肥後國天草郡。
○から山　唐山。支那の山。
○沼島　淡路國津名郡。
○雪のうはぶき　篠屋の屋根を更に雪で覆ひ葺くこと。
○杏いれし云々　拾遺集雜讀人不知「昔に聞くこまのわたりの瓜作りさなりかくなりなる心かな」
○こま　狛。山城國相樂郡。昔は瓜の產地。
○なべてと　色々の色と。

---

十日菊

千代をまつ色こそさめね白菊の花の杯けふもとり見む

重陽

さかづきに菊は浮べつから歌のかたき心もくみ見てしがな

秋鳥

をがや原野分をわたるこがらめの聲の亂れもうらぶれにけり

海上眺望

天草や天よりをちのから山も雲になびきて日はくれにけり

紅葉

波間より見ゆる沼島(ぬしま)のもみぢ葉は霧の雫をてらすなりけり

雪

むら鳥はねゆく雲にあとつけて明けはなれたる雪の空かな

深き夜の夢の亂れも今ぞしるすゞの篠屋の雪のうはぶき

杏いれし瓜生やいづら山城のこまのわたりの雪の朝あけ

植ゑまぜし菊もなべてと思ひしをまき垣にみてる雪の色かな

籬花似雪

○ひつじはくだちぬ　午後二時三時頃が過ぎた。
○走りくらぶる　競走する。
○朝宮づかへ　朝神社に奉仕すること。
○いちじろき跡　白雪の上に印された日にたつ足跡。

○せちぶ　節分。
○なよしのかしら　なよしはぼらの小さいもの。土佐日記「こへの門のしりくべなは、なよしの頭ひひら木らいかにぞ云々。」

○ちりかひし　互に散り亂れる。

村蘆の穂の上に寒き白雪を海人は綿とも身にやそふらむ

朝殘菊

霜ふみて人はとふとも白菊の今朝のやつれは見せじとぞ思ふ

冬人事

道遠みけふもひつじはくだちぬと走りくらぶる神無月かな

社頭雪

初雪の朝宮づかへいちじろき跡こそ神の道にはありけれ

早梅

くちのこる窓の木の葉や拂はまし梅も枝にはこもらざりけり

せちぶとて人々さわぐに

我が門のなよしのかしらよしや世は春の光のさすにまかせむ

春の歌の中に

雪をれし松より奥も春なれや斧の響のとだえがちなる

誰しかもあふぎのつまは折りかけし移ろひがたの花の下枝に

正月ばかり若浦にて

ちりかひし雪はすゝけて蘆の屋のけぶりにまじる朝霞かな

蜑の子がつむや菜草の山かづらかけさへ霞む波の上かな

野若草

浦風は春をそがひの左日鹿野もや丶波よする草のいろかな

笛のねもまだと丶のはずあげ巻が通ふ野のべの草や短き

野外春風

をがや原雪をふきとく風よわみ野火の煙のむすぼほれつ丶

紅梅

をぐしとるたぶさも寒き朝風につまくれなゐの梅が香ぞする

三月はらへしたる所に松原あり

みそぎすとおりたつ袖も霞むらしなごやかに吹くあら丶松風

上巳

桃の花麻笥にうつして賤の女もけふはひ丶なの宮仕せり

待花

鶯のしの丶めいそぐ綻びにねぐらの花も遲れざらなむ

春祝

こきうすき花の色香のあらそひも[illegible]のどかなる宿の春かな

○菜草の山　紀伊國海草郡。

○春をそがひ云々　萬葉集卷六「さひかぬゆそがひに見ゆる奥つ島云云。」

○そがひ　背向。

○左日鹿野　紀伊國海草郡。雑賀野とあるに同じ。萬葉集卷六「左比鹿野ゆそがひに見ゆる沖つ島清き渚に風吹けば白波さわぎ云々」

○笛のね　子供の吹く草笛の音。

○あげ卷　子供。

○をぐし　小櫛。

○つまくれなゐ　端の紅。

○おりたつ　水邊に下り行く。

○あら丶松風　疎らな松風。

○麻笥　績物。薄い木を曲げて作れる圓形の器。

○酒殿　酒を釀す所。

○つれなく見ゆる　よそ／＼しく見える。

○しでかくる　四手懸くる。
○山田の原　伊勢國度會郡。
○なびき仕へぬ　なびきは白木綿の縁語。

三月ばかり日前宮にまうづる道にて

酒殿は夢ばかりなる春の野にいつまでさめぬ蝶のねぶりぞ

月前花

うち霞む月にみしよの宿とへばおもかげばかり花にほふなり

山東正周と共に名草山の千樹谷の花を見て

花さけばつれなく見ゆる松もなしみ山を春の住所とはせむ

直川寺の花を見てかたへの谷におるゝにいと寒けれど鶯のなきければ

谷の戸は松の煙もとぢあへず花のふゞきにうぐひすぞなく

人の家に花園あり今植木す

袖ふるも折あはれなる胡蝶かなけふより園の花守にせむ

山田原

しでかくる山田の原の眞白木綿なびき仕へぬ賤の男もなし

櫻ちる山田の原はたをやめの袖うちかへし春風ぞふく

木綿(ゆふ)つくる山田の原の五百枝杉つれなき色はいつをせにせむ

遲日

こしかたを思ひあつめて櫻花八重さく宿に春日くらしつ

井溪とから名つきたるは善水が弟なりそれが許より螢をあまた籠に入れておこせつさるはかの山里の江川にいと多ければ我が學びの窗を驚かさむとてなるべし又の年の春善水のとひ來し時弟のもとへ此の歌や忘れざりけむ四月の末つ方あまた得させつるを夜毎に見つゝ思ふ事ありて

青柳の枝川のそひにゆだねまき苗とりいそげ螢早みむ

くちはてし草も光をはなつ世にいつまで我が身うちしをるらむ

神のけにやありけむ嘉永とあらたまれる年のくれなむとする頃より心地そこなひてかき籠りけるを悲しびて常朝良喬美孝ら玉つ島御社に百たび詣といふことをして疾くさわやぎなむことを祈りけるに其のしるしまさしくて月毎日毎にさわやぎゆくを喜びつゝかの人々更にかへりまうししけるとて其の折よめる歌ども見せけるに筆加へて厚き心をあまなふまゝに共によみて奉りける

ねぎごとをうけてふたゝび世の中にかへしし神の道は忘れじ

寄鳥戀

---

○から名　唐名。
○青柳の　枝川の緣語。
○そひ　傍。
○ゆたね　齋種。齋み清めた稻の種。一說に澤山の稻種。
○くちはてし草も光をはなつ　螢は朽草から生まれるといふ。
○神のけ　神の憑る氣色。
○さわやぎ　快くなる。
○まさしくて　たしかであつて。
○かへりまうし　御禮參り。
○あまなふ　甘んじて受く。
○ねぎごと　祈事。

五月雨

眉こもるこやのひさしの雨しだりいぶせき音かとだえだにせで

夏田

うゑたてし田のもの稻葉そよやその露ふく風も秋いそぐめり

山家夏月

山百合のおのづからなる花の香も松の戸もれて淸き月夜か

八月十五夜

さし櫛とほの三日月の秋の影みがきいでたる增かゞみかな

初秋風

古池の菱のうき葉もひま見えて小波よする秋の初風

菊交薄

笹栗をおとす嵐のふきわけし尾花がなかに菊もまじれり

尋花

こととへばいさや彼方にまだしとて麓へくだる花の山がつ

零餘子

いとか山積る落葉に風ふけばそよいもが子のはひ隱れたる

○眉こもる　蠶が繭の中に籠ること。
○こや　蠶屋。養蠶をする家。
○雨しだり　雨が垂れ落ち。
○音か　音かな。
○そよや　風の靜かに吹く音。
○松の戸　賤しい家の意。
○淸き月夜か　「か」は「かな」
○さし櫛と　挿櫛のやうに。新續古今集雜上御門内大臣「秋來ぬとほの三日月の光にぞかねてくまなき影は知らるゝ」
○みがきいでたる云々　漸く大きく光りみちて滿月となつた意。增かゞみは眞澄鏡で滿月を喩ふ。
○こととへは　花のありかを問へば。
○山がつ　山賤。
○いとか山　絲鹿山。紀伊國有田郡。
○いもが子　むかごを指す。

○射目　射手の隱。萬葉集卷四「み山には射目立てわたし朝狩にししふみおこし云々。」
○とみの岡べ　萬葉集卷八「射目立ててとみの岡邊のなでしこの花房手折り我は持ちいなむ奈良人のため」とみの岡は大和國磯城郡。
○露はぶく　露を羽はたく。
○こぞめ　濃染。
○をちつ方　彼方方。以前。
○井筒　井戸がは。ゐげた。

朝霜

かきこもる那智のみ山の霜ながらけさの朝菜に菊やつまゝし

射目たてゝ朝狩せばやさを鹿のとみの岡べは霜さむくとも

野雉

露はぶく野邊のきゞすの聲すなり春の雨夜は明けにけらしも

烏瓜　此の種むすび文に似たれば玉づさといふとぞ

紅のこぞめの袖につゝみつるたが玉づさのかたみなるらむ

石といふ題にて歌よみける時十年ばかりをちつ方和泉の堺なる御陵山にたてむとせし碑文こゝに彫りたるを船にて彼處にのぼせけるに尾里とかいふ浦にて船くつがへりて波に沈める事を思ひいでて

泉の海沖にしづめる石文はいかなる龜の脊にか負ふらむ

田家初冬といふ題にて歌よみけるときわが國にてはなべてすることにやあらむ北山の紅葉狩せしとき刈りたる稻を木にかけわたして井筒のやうにしてほしけるが遠江などにては見なれざりければふと目にとまりしことを

水かれし田づらを見れば里の子が井筒にくみてをしね干すなり

高野の僧のこへる閑居雪の歌

むろの戸に籠りて人もまちつらむこの曉の雲のひかりを

秋田

おくと見し鹿火も消えけり山本の小田の高垣風やこゆらむ

初春

松風に竹の緑もうちなびく春こそ千代の始めなりけれ

子日

行末をまつてふ名こそ嬉しけれいざ子の日して宿にうゑてむ

寺

春日さす花の上野のむな瓦むなしき世とは誰かさだめし

廢寺

橘のときはの陰となびき寢しその夜も夢かあとの若草

蝶

夢たえしうきねの袖か波のほの朝日にぬれて胡蝶とぶなり

窗すぐる子らにまじりて蝶とらむ筆の林は花もにほはず

したひゆくこてふの袖にまつはるゝ親の心も且はをさなし

○山本　山の麓。

○子の日して　子の日の遊びして子の日に郊外に出て小松を曳いて遊ぶ。

○むな瓦　棟瓦。

○若草　若草。妻の意を掛く。

○波のほ　波がしら。

○筆の林　書く歌文の數多いこと

○花もにほはず　秀逸の歌文のないこと。

秋人事　丹生告門による

あてびとは夏瀬の丹生に杖さすと紅葉をわけて榊とるらし

梅の花さけり女ながめをり

梅さけどまだ袖さむき春風やかたみの水もこほるばかりに

京

朝日かげのぼる梢をから人の仰ぎそめても幾世へぬらむ

水邊柳　丹生告門による

杖さしし江川の丹生の柳かげ水葉もわかに春風ぞ吹く

爐邊閑談

初雪のあとがたりこそはかなけれ庵の落葉ををり松にして

又更にをりたく柴のしひがたりさすがに夜さへあくべくはなし

和光院にて同じ題を

こりつめる薪はつきじ移りゆく三代を思ひのもとな離れそ

爐火似春

をりてたく萩の古枝の下もえに野守が庵は春めきにけり

草庵雨

---

○あてびと　貴人。
○丹生　大和國吉野郡。この歌及び下にある水邊柳の歌も丹生川上神社の縁起によつた。
○から人　唐人。支那から見て太陽は日本より出づといふことを踏まへてゐる。
○をり松にして　薪にするために折つた松のかはりに焚いて。
○しひがたり　自分から强ひて語り出すこと。
○こりつめる薪はつきじ　法華經序品「佛此夜滅度、如薪盡火滅」とあるから、佛の道の亡びない意。
○三代　過去現在未來の三世。

昔見し少女のすがたふりぬらむ草のたもとに雨なびくなり

行路時雨

我がゆきは遠き道にもあらなくに晴れみ晴れずみふる時雨かな

海邊雪

たく衾しらぎの國をひきよせてぬはしし濱び雪ふりにけり

歳暮

暦なき松の柱の庵ならばよるとも知らじ千代の年なみ

村雨いとはげしかりける夜

笹の葉のわたくし雨と聞きしまに風さへぬれて窗叩くなり

松尾綾平が兄の五十賀に、寄梅祝

さかづきに浮べざりせば梅の花樂しき春の色をそへめや

熊野人の賀に

み熊野のまこと蓬が島ならば波に越えたる世をぞへなまし

原

淺茅生の虎毛の駒のいなゝきにちる露しげしもろこしが原

春日

○ふりぬらむ　古びたであらう。ふりは雨の緣語。

○我がゆきは　我が旅は。

○たく衾　「しら」の枕詞。此の歌出雲風土記にある國引の故事による。

○濱び　濱邊。

○暦なき松の柱の庵　山中暦日なしで、世を離れ時に超越した隱遁者の庵をいふ。

○わたくし雨　私雨。不意に降る村雨。

○蓬が島　蓬萊島。

○波に越えたる　波に竝を掛けて世間普通以上の意を掛く。

○もろこしが原　相模國大磯の海邊から同國大住郡の邊まで。もろこしさ虎さの歌は拾遺集戀くにもち「ありさても幾世かはふる唐國の虎伏す野邊に身をも投げてむ」等がある。

○山鳥のはつ尾の雪　山鳥のしたり尾の意に山の尾の雪を掛く。夫木集「春きぬと見ゆばかりにや山鳥のはつ尾の霞けさは立つらむ」

○すさめとや　心にとめて愛せよとてか。

○雲のつぎはし　雲の速り重なれる種を繼橋に見たつ。萬葉集卷十四「足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋やまず通はむ」

○まゝの浦　下總國東葛飾郡。

○世にたたぬ竹のあみど　世に交らぬ隱遁者の庵。「たたぬ」は竹の緣語。平家物語小原御幸「世に立たぬ身の習ひとてうきふししげき竹柱云々。」

○ほだ　楠。

○たたずを語れ　席を立ち離れずいつまでも話せ。「を」は歎辭。「たたず」は煙の緣語。

うら〳〵と霞める空を渡る日の影のまに〳〵野山わけまし

山霞

山鳥のはつ尾の雪のうすにほひ隔てもあへぬ朝霞かな

ときおそき春を霞のうす墨にたゝみわけたる雪のむらやま

鳴瀧へゆく道にて

野邊みれば若草むすぶあげ卷が袂はなれてこてふ飛ぶなり

夕花

夕かげに移しおきてもすさめとや水上白く花のみゆらむ

蝸牛

野邊とのみ荒れし籬の蝸牛とゞむる跡もあはれいつまで

五月雨

五月雨の雲のつぎはし誰かゆくまゝの浦わはこぐ船もなし

幽栖秋來

世にたたぬ竹のあみども朝顏の花をしるべに秋やとふらむ

爐邊閑談

心して埋めるほだのうす煙たたずを語れさ夜はふくとも

遊絲

春されば山なつかしも埴安(はにやす)のつゝみの上になびくかげろふ

木川春望

若鮎ののぼればくだす花筏はれしやいづらみよし野の雨

水だにも急ぐとはなき春の日に木の川づらを鴈のたつらむ

夏菊

夏の夜の月の霜こそさえけらし菊の下葉のけさしをれたる

野常夏

虎ふさばはぐゝまましを撫子の露にやつるゝもろこしが原

暮林鳥歸　紀伊國造家御會

おくれこしやもめ烏の一聲は空にくれゆく日のくまの森

夏魚

ちる花のうき瀬をはしるかつら鮎何か若葉のかげは戀しき

初冬月

しぐれこし雲より西に夕月のほのめく影も秋の空かは

浦

○埴安　大和國磯城郡。

○春の日に　この下に「何故に」の意を補つて見る。鴈のあわたゞしさをいつたのである。古今集の「久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらむ」に似てゐる。

○月の霜　月光の冴えて白いのを霜に見立つ。後撰集夏讀人不知「今宵かくながむる袖の露けきは月の霜をや秋と見つらむ」

○日のくまの森　紀伊國海草郡。

○かつら鮎　山城國桂の里から產する鮎。

よもの海の靜けき御代にきて見れば錦の浦はあだ浪もなし

不邪淫戒

つくま江のをしの衾はうすくともかづかむ鍋の數な重ねそ

壽老人のかたに

人の世の夢も現もうれしきは遠きさかえを願ふなりけり

草

よみがへる玉こそしらめおほばこの露の言葉も世々にとめては

五月ばかり靑藜堂の文庫をあさりけるとき湊川懷古の詩どもをよみつゝ庭のさつきの枝に結びつけける

一むらの五月のつゝじ色ふかく匂ふころしも雨のはれせぬ

あはれなるもの

追ひ捨てし栗栖（くるす）の小野のかた鶉あしたの露も羽ぶきかねつゝ

山家夜話

數さすとま柴をりたき山里のなぞ〳〵がたりさ夜更けにけり

春木

村鳥のこゑこそ霞め熊野山あらしもなぎのふる葉がくれに

---

○錦の浦　紀伊國東牟婁郡。後拾遺集僧道命法師「名に高き錦の浦をきてみれば霞かぬあまはすくなかりけり」きてみればは錦の緣語着て見ればを掛く。
○つくま江　近江國坂田郡。
○をしの衾　鴛鴦の衾。男女共寢の事に喩へる。
○かづかむ鍋云々　伊勢物語「近江なる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋の數見む」筑摩祭とて近江國坂田郡筑摩の神の祭（四月一日）に、村の婦女が婚した男の數だけ鍋を戴いて參詣した風俗があつた。
○よみがへる玉　蘇へる魂。玉は露の緣語。
○おほばこ　車前。草の名。
○とめては　致しては。
○栗栖の小野　山城國宇治郡。
○かた鶉　雌雄添はずして離れ居る鶉。
○數さすこ　勝負爭の時勝つた度數を計る爲に數取の串、枝を數立てに挿み入れる爲に。
○なぞ〳〵がたり　謎々合。
○あらしもなぎのふる葉　嵐も凪ぎと梛の古葉とを掛く。

○うきふしもなし　「ふし」は竹の緣語。

○江帥　大江匡房。

○空かぞふ　大の枕詞。
○筆のあや　文飾。
○かまけ　感心し。
○廣幡の云々　八幡太郎義家であることをいふ。
○まけのまに〳〵　任命に從って
○まつろはぬ　服從しない。
○やはし　やはらけ。萬葉集卷二十「まつろはぬ人をもやはし云々。」
○眞木柱　たてしの緣語。
○玉襷　「かけ」の枕詞。
○文机に　義家の歌才を指す。
○弓庭　弓場。射術を習ふ所。
○物部の道のおくか　武士道の蘊奥。
○よりこむ　服從し來らむ。
○習ひえてしが　「が」は希望の意

室谷賀親が桐園の歌こひければ

吳竹のかげより高く生ひのぼる園生の桐はうきふしもなし

## 長歌

義家朝臣江帥に物學び給ふかたによみてそへける歌

文庫は　わがにはあらず　大み代の　鎭めの庫と　いひたてて　朝典よみとき　世々の式　傳へ給へる　空かぞふ　大江の君の　筆のあやは　韓人かまけ　廣幡の　八幡の神の　大み名を　名に負ひもちて　大君の　まけのまにまに　まつろはぬ　國をやはしし　源の　いくさ建男か　弦の音は　えみしもおぢぬ　宜しこそ　今のをつゝに　眞木柱　たてし功は　玉襷　かけぬときなく　文机に　弓庭にみちて　天の下　語り傳ふれ　傳へたる　事が中にも　列みだる　雲居の鴈に　敵どもの　ふせりとしれる　ふることは　たゞ一言ぞ　しま〴〵に　とひ明らめて　物部の　道のおくかを　學びけむ　君しともしも　敎へつる　君しともしも　あはれこの　跡ふみもとめ　筆とらば　み代ぞ榮えむ　弓とらば　國ぞよりこむ　筆の幸　ま弓の幸を　神ならび　習ひえてしが　大御代のため

詠眞嬬山歌

此の山日高郡の高山にして丹生津比賣大神の天降りましし山といひ傳ふ丹生告門に江川の丹生に忌杖刺し給ふと見えたる時の事ども思ひよせて郷長瀬見善水にあたへたる歌なり

かけまくも　畏けれども　丹生津姫　神の命　から國を　ことむけまして朝もよし　木の此の國に　齋杖を　ささせ給へる　宮所　さはにあれども日高のや　江川の丹生は　溪川の　清き瀬の音と　御心を　よせ給へばか里々に　こゝだまつれる　けだしくも　故かもあると　郷長に　わがとひ聞けば　郷長の　我に語らく　いにしへの　事はしらねど　天とぶや　鳥の翅に　其の神の　乘らしたまひて　かの見ゆる　伊豆の高山　はしづまの　眞妻の山に　奇しくも　天降りましし　つがの木の　繼ぎてもろ〳〵　齋くとし　聞きつたへぬと　かつ〳〵も　我にかたりき　眞妻はや　はしき山かも　青雲に　そばだつ峯は　をとこさび　巖だゝなみ　よぢのぼる　麓の小野は　少女さび　あき萩しなひ　朝よひに　見がほし山ぞ　いにしへも　しかにあれこそ　ことむけし　神の命の　奇しくも　天降りましけめ　はしき神山

○ことむけまして　從はしめ給ひて。
○朝もよし　「き」の枕詞。
○木の此の國　紀伊國。
○さはに　澤山。
○こゝだ　數多く。
○はしづま　愛妻。
○つがの木の　繼ぎの枕詞。
○もろ〳〵　多くのものが。
○齋くとし　あがめ奉ると。「し」は强め詞。
○眞妻はや　「はや」は感歎詞。
○はしき山　愛しき山。
○青雲　青空。
○をとこさび　男性的であり。
○少女さび云々　少女らしは秋萩が撓み垂れ。
○見がほし山　見たい山。

○かゞふり　被り。
○赤駒　赤毛の馬。萬葉集卷五「赤駒に倭文鞍うちおき云々。」
○延ふ葛の　わかれの枕詞。
○和妙　織りの細かい栲。
○ひづち　濡れて。
○かすゆ酒　酒の糟を湯に入れた物。萬葉集卷五「かすゆ酒うちすろひてしはぶかひ云々。」
○うち啜ろひて　啜りて。
○おのもおのも　各々。
○うらびれをれば　心憂く思ひ居れば。
○をしね　稻。
○かつをつり云々　萬葉集卷九「かつを釣り鯛釣り誇り云々。」
○まもらひ　守り。
○つゝみなく　恙なく。
○もなくありへて　わざはひもなく年月を經て。
○ふさ　澤山。
○おほゝしく　心晴れやらず。
○かげとも　南の面。
○かへるで　楓樹科の落葉喬木。
○ぬるで　漆樹科の落葉喬木。
○ぬる夜もおちず　連夜。

---

淺井廣儉が熊野の館まもりにゆくにわが七草の假庵にて馬の餞のつどひしける時うたへる歌

かしこきや　御言かゞふり　長月の　しぐるゝ空に　鴈がねの　來なく朝けに　赤駒に　倭文鞍おきて　眞熊野の　御館守ると　吾が兄子が　たつ日を近み　延ふ葛の　別れを惜しみ　みやび男ら　いむれ集ひて　七草の　假庵の露に　和妙の　衣手ひづち　かすゆ酒　うち啜ろひて　おのも〳〵　うらびれをれば　めぐらはす　杯とりて　下座ゆ　我うたへらく　鞭うちて　ゆけや我が兄子　をしねかり　貢はこぶと　里人の　まちか戀ふらむ　かつをつり　鯛つりほこり　海人の子が　今かまつらむ　とくゆきて　御館まもらひ　つゝみなく　もなくありへて　朝さらず　見さくる海の　春霞　たちなむ時に　夕さらず　見渡す山の　櫻花　ふさ手折りきて　おほゝしく　まちなむ友の　土産にしめさね

藤垣内翁の一周忌に紅葉によそへてしぬぶ心を人々短歌によみける時よみてそへける歌

かげともに　かへるでを植ゑ　外面に　ぬるでをうゑ　かへるでの　歸りますやと　ぬるでの　ぬる夜もおちず　待てれども　かへりもまさず　ぬれど

も　いをしねかねて　去年をしぬばく

又

てる月の　雲がくるなす　おく露の　けぬるが如く　はしきやし　我が師の
大人(うし)の　過ぎましし　去年を思ひ出て　秋の葉の　もみだふ園に　夜晝の
たどきもしらず　まかなしび　うらびれをれば　秋山の　したぶる妹が　紅
に　衣よそひて　たもとほり　我に告ぐらく　汝が偲(しぬ)ぶ　垣内のうしは　新
玉の　年の一とせ　しゞくしろ　よみの國邊に　菅の根の　長居しまして
けふこそは　歸りますなれ　いざわ〳〵　迎へまつれと　まつぶさに　告げ
つるはしに　我がねたる　枕の上ゆ　朝風の　いぶきすゝみて　ぬば玉の
夢はさめぬれ　夢かもや　現かもや　夢ならば　さめざらましを　現にし
見らくをしらに　正目(まさめ)にし　見らくをしらに　なく涙　ひさめにふれば　敷
妙の　袂のくだり　さにづらふ　秋の木の葉の　こゝだちりたる

木川にみそぎすといふことを

たなすゑの　みつぎの布を　ひまなくぞ　妹はあらへる　時なくぞ　妹はさ
らせる　其の布の　白きが如く　其の布の　さやけきなして　我が心　すが
すがしもよ　みそぎしつれば

○いをしねかねて　安眠も出來ないで。
○しぬばく　忍ぶの延音。
○雲がくるなす　雲隱れる如く。
○もみだふ　紅葉する。
○たどき　たづきと同じ。方便。
○秋山の　したぶるの枕詞。
○したぶる妹　紅葉した色の如く麗しい妹。
○たもとほり　徘徊し。
○しじくしろ　「よし」の枕詞。
○よみの國邊　黃泉。
○菅の根の　長の枕詞。
○いざわ〳〵　いざ〳〵。
○まつぶさに　つぶさに。
○はしに　間に。
○いぶき　息吹。風を人の息に見立つ。
○ぬば玉の　夢の枕詞。
○夢ならば云々　古今集戀小野小町「おもひつゝ寢ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」
○現にし見らくをしらに　現實に見ることは出來ず。
○正目にし　まのあたりに。
○ひさめに　大雨に。萬葉集卷二「道來る人の泣く涙ひさめに降れは云々。」
○袂のくだり　袂の上から下まで
○さにづらふ　紅色に匂ふ意。紅葉の枕詞ともなる。
○たなすゑのみつぎ　手末の調。女子の手先で作つた布帛を調として奉ること。
○さやけきなして　清きが如くに

螢火透簾

我が島は　梢繁らひ　夏かげの　よろしき島と　終日に　おりゐ遊ばひ　夜さへに　見まくほしけど　夕闇は　せむすべをなみ　おほゝしく　思へるはしに　玉だれの　をすの間通し　薄ものの　かとりの袖に　ま輝く　光うつして　夏蟲の　とびかふ見れば　水際の　岩むらてらし　草の葉の　露も匂ひて　終夜　見のまぐはしも　蟲すらも　島好めばや　ぬば玉の　闇もたどらず　飛びかふらしき

瀧おとし水はしらする島山をよるさへ見よと飛ぶ螢かも

橘薫風

木の國の　在田縣の　山がたに　しゞに生ひたる　常世もの　花橘の　時じくの　かぐの木の實は　天の下　四方の國内に　人皆の　めでにめづとふ　木の實のみ　しかめづべしや　この花の　さきのをゝりの　香をこそは　めづべかりけれ　いはまくは　あやしかれども　さ苗とる　頃にしなれば　東雲の　ほがら〳〵と　明け渡る　あしたの風の　海原を　吹きのすゝみに　荒汐の　八百會をすぎて　眉引の　阿波の島囘に　はろ〴〵に　薫らひゆくと　島人ぞ　我につげつる　あやしくも　薫る花かも　くすしくも　薫る花

○繁らひ　茂り。
○夏かげ　夏物陰の涼しい所。
○おりゐ遊ばひ　下り居遊び。
○玉だれの　「を」の枕詞。
○をす　小簾。
○かとり　縑。地を細かに薄く固く織つた織物。
○夏蟲　螢を指す。
○岩むら　岩の羣。
○見のまぐはしも　目に見て美しい。
○ぬば玉の　闇の枕詞。
○山がた　山縣。山にある田舍。
○しゞに　繁つて。
○常世もの　橘の異名。
○時じくのかぐの木の實　萬葉集卷十八「この橘をときじくのかぐの果實と名づけらしも」年中果實が枝についてゐる香細しい木の實。
○さきのをゝり　吹き撓む。
○東雲の云々　古今集戀讀人不知「東雲のほがら〳〵と明けゆけばおのがきぬ〴〵なるぞ悲しき」「東雲の」はほがら〳〵の枕詞。
○吹きのすゝみに　吹き進んで。
○八百會　八百重。

かも　春風に　梅ちる野邊も　秋風に　菊さく谷も　かばかりの　薫ならめや　くしき花の香

愛菊

こきうすき　色香の限り　七重にも　八重にもしめて　七重花　八重花さける　あし垣の　籬の菊は　朝風に　薫をみてて　夕露に　色をふかめて　朝さらず　見れどもあかず　夕さらず　見れどもあかず　年のはに　かくこそは見め　年のはに　めづとはすれど　年のはに　いや珍らしと　菅原の　神の龕の　うたはしし　ことのまに〳〵　めでのまに〳〵

松田直愛が翠園の歌をとしば〳〵こひおこせければよみて遣はしける

貴人(あてびと)の　衣そむとふ　紫の　色はかしこし　をとめらが　末つみはやす　紅の　色はまばゆし　打ちなびく　春の若草の　なつかしき　緑の色は　とことはに　見がほし色と　遠つ人　松田の兄子(せこ)が　朝よひに　書見(ふみみ)うたよむ　窓の名に　かけてめづれば　みやびたる　友もとひ來て　花鳥に　心をうつし　月雪の　折をすぐさず　むつまじき　窓にもあるかも　あはれ其の　松の緑の　常磐なす　かくし遊ばむ　心たらひに

小浦廣名が熊野へゆく馬のはなむけに

○七重花八重花　萬葉集卷十六「七重花咲くや八重花咲くと云々。」

○年のはに　年每に。

○紫の色　禁色で勅許なくは用ゐられない。

○末つみはやす　末から摘み切る

○打なびく　春の枕詞。

○遠つ人　「まつ」の枕詞。

○書見うたよむ窓の名にかけて翠園を指す。

○常磐なす　常磐の如く永久に。

○心たらひに　思ふ存分に。

沖つ浪　天雲はふる　海若(わたつみ)の　神の御面(みおも)に　たゞむかふ　すさみの館は　八重山の　をちにはあれど　年まねく　いゆきまもれば　海山も　むつ玉あひて　霧のむた　葉山なびき　波のむた　鯨(いさな)ぞよらむ　海原も　山も平らに　まもりたれこそ

安御代は浪しづかなり周参見(すさみ)の海稲積島につりしあそばへ

又

眞熊野の　熊野の山は　さかしみと　人はわぶれど　人みなの　ことは何せむ　君がまに　我はならむと　山霧を　眞袖にわけて　いでたたす　あせがいそしさ　益良夫の　ゆくべきみちの　すゝむべき　旅にはあれども　はし妻の　手をたづさはり　母刀自を　負ひもゆかねば　時雨ふり　霜のふる夜を　天雲の　五百重のをちに　さぶしみか　思ひて寝(ね)らむ　其の心いたし

錦園歌

山吹の　うつろふ川の　清き瀬に　妻よびたつる　蝦手(かへるで)の　色なつかしみ　園もせに　こゝだほり植ゑて　堀口の　あせが見はやす　はしきやし　園の木むらは　露霜の　秋にしなれば　朝露に　ほつ枝もみだひ　夕霜に　しづ枝にほひて　下陰の　草のかき葉も　いやてりに　照りかゞやけり　あなめ

○はふる　溢る。
○年まねく　多年。まねくは年月を積むことの多い意。
○むつ玉あひて　睦じい心々になつて。
○霧のむた　霧と共に。
○安御代　安らの御代。
○周参見の海稲積島　紀伊國西牟婁郡。
○君がまに　君がまゝに。
○あせ　吾兄。
○たづさはり　携へ。
○いたし　いたはし。
○蝦手　楓樹。つまごひ草ともいふから「よびたつる」までは序詞。又錦草ともいふから、錦園にも關係がある。
○せに　狹に。
○あせ　吾兄。
○見はやす　見てもてはやす。
○露霜の　秋の枕詞。
○もみだひ　紅葉し。
○かき葉　片葉。一片の葉。

でた　是れの錦は　久堅の　天の河原に　棚機の　五百機(いほはた)たてて　千五百むろ　織りかもすらむ　照妙(てるたへ)の　衣にぞあるらし　秋毎に　見れどもあかぬ　唐錦はや

那賀郡鎌倉谷の雌雄の桂を見てよめる

兄(せ)の山は　妹(も)をし思ふと　妹山は　兄(せ)をししぬぶと　道のべに　竝ばひをれば　妹も兄も　類よろしみ　皆人の　賞(め)でつゝゆくを　をしねかる　鎌倉谷の　こちごちの　雌雄の桂は　松だにも　生ひぬみ谷に　杉だにも　生ひぬみ山に　年久に　しみさびたてど　五百枝さし　千枝さし覆ひ　珍らしく　竝びをれども　山高み　ほき路さかしみ　人の見ぬ　事ぞくやしき　あはれあはれ　是れのめかつら　妹山に　うゑむよしもが　目細(まぐは)しき　是れの雄かつら　兄の山に　植ゑむよしもが　麻萠えむゆは

待花

くらおかみ　雪をふらしめ　立田彦　嵐をふかせ　とし月の　くれゆくはしに　あらびてし　神御心も　春されば　なごみますらし　此の岡に　若菜萌えいで　彼の山に　霞きらへり　いきの緒に　我がもふ櫻　花に咲かぬか

九月十七夜味鶴に樓さぶらひて

---

○五百機　多くの機。萬葉集卷十「たなばたの五百機たてて織る布の秋さり衣誰かとりみむ」
○千五百むろ　むろは室。
○照妙　光澤の美しい白栲。

○をしねかる　鎌の緣語。
○こちごちの　あちこちの。
○しみさびたてど　茂く古び立てど。
○ほき路　嶮しい山路。
○めかつら　肉桂。雄かつらは楓。

○くらおかみ　闇淤加美神。此の神は龍で雨を降らす神。
○立田彦　風の神。

古の 人のまきねし こも枕 高殿の上に 月見つゝ さもらふ時し なく蟲の 聲にもたぐひ たつ波の 音にもそひて 此の見ゆる 野らよりをちの 玉津島 入江のくまの 釣殿に たつごもしきて 雅樂人の ふきあはすとふ 笛のねきこゆ

北山にきその夜なきしさをしかと笛との音し忘らえめやも

清舍君安藤君の山齋神秀峯に遊びたまへる時よみて奉りける歌幷に短歌

岩がねの はしきたちはや わけ上る 山路のそひに いくみ草 よたけ植ゑおほし あしたの雨 夕の露を むす苔の 筵にたゝみ 青垣を 四方にめぐらし 高山の 峯も平らに ならの葉の 眞廣にしめて まぐはしき 館にもあるかも ふりさけて 國がた見れば 横ほれる 外面の山は 秋山と 紅葉かざせり 棹鹿の ねごろの寺は 薄霧に 蔭隱さひ 八束穂の 長穂の田居は 堤ふく 風にあらはえ 引きのぼる 木の川舟は 松原の 線に隔て 初鴈の 渡らふ空は 雄山の 雲に連ねて 歌おもふ 心たぬしも 今日の此の いく日のたり日 打靡く 竹村なして 常しへに 萎れずてをあれ 青垣の 玉松なして 千世もみるがね

五百代や千代の穂の上霧こめて秋の日はやくかたぶきにけり

---

○まきねし　手枕を相まいて共に寢た。
○こも枕「たか」の枕詞。
○たつごも　立薦。席を壁に添へつけたもの。
○雅樂人　雅樂寮に屬して國風を謠ふ者。
○きその夜　昨夜。
○はしきたちはや　愛しき館かな
○そひに　傍に。
○いくみ草よたけ　繼體紀「はつせの川ゆ流れくる竹のいくみ竹よだけ云々。」
○植ゑおほし　植ゑはやし。
○國がた　國土の形勢。
○横ほれる　横たはれる。
○棹鹿の　根來寺の根に通ふ音の緣語。
○隱さひ　隱し。
○今日の此のいく日のたり日　日は多い中でも今日こそ吉日の意。祝詞式「八十日日波在止毛今日能生日能足日爾云々。」
○竹村なして　竹藪の如く。
○萎れずてをあれ「をあれ」は歎辭。
○青垣　青垣山。
○みるがね　見るやうに。
○五百代　代は田地の面積を度る語。

詠史

西寺の　老鼠こそ　おむもつみ　袈裟もつむとへ　みえし野に　はなてる虎は　何しかも　鼠のもころ　おむもつみ　袈裟もつむらむ　其の虎の　いぶきのさ霧　天が下　すでにおほひて　鯨とり　あふみの海を　ひた土に　ふきまどはせば　沖さけて　舟はこげども　へつきて　舟はたけども　沖にへに　まかぢひきをり　たどきしらずも

又

鯨とり　淡海の海は　名のりそや　みるめや生ふる　みえし野の　芳野の山は　潜女(かつきめ)や　あまめやつどふ　いかなりし　時にあればか　天のした　國内(くぬち)ことごと　うづしほの　いわき騒ぎて　えし野には　潮をみたしめ　淡海には　潮をひしめし　うつそみの　これの世の中　二ゆくなして

宮部美臣が遠祖善祥房といふ人の二百五十回の靈祭すとて歌こひければよみて手向けける歌

河上に　生ひをゝれる　高萱(たかがや)の　根白の城(き)には　旗雲か　今なびくらし　鉾杉か　生ひしげるらし　亂り世の　昔おもへば　内日刺(うちひさす)　宮部建雄が　あたまもり　守らふはしに　薩摩人の　たばかりけらく　ぬば玉の　此の夜のほ

---

○西寺　山城國葛野郡。備馬樂老鼠「西寺の老鼠若鼠御裳つんづ袈裟つんづ〳〵法師に申さん師に申せ法師に申さん師に申せ。」
○おむもつみ　御裳を嚙る。裳は僧の腰に附ける衣。
○つむとへ　つむと言へ。
○鼠のもころ　鼠の如く。
○鯨とり　「あふみ」の枕詞。
○ひた土　ぢべた。
○沖さけて　沖の方へ遠ざかつて
○へつきて　海邊に寄つて。
○たけども　力を極めて漕いでも
○名のりそや　馬尾藻屬の褐色藻類。
○みるめ　海松。水松屬の綠色藻類。
○あまめ　海人女。
○うづしほ　渦まく潮。
○いわき　騒き。
○えし野　見えしと云芳野とを掛く。
○うつそみの　世の枕詞。
○二ゆくなして　二行は心を二方に寄せること。
○河上に云々　萬葉集卷十四「川上の根白高萱あやに〳〵さね〳〵てこそことにでにしか」高萱は篠藻。
○旗雲　旗の如く棚引いた雲。
○鉾杉　鉾の如く立てる杉。
○内日刺　宮の枕詞。
○あた　仇。賊兵。
○ほどろ　程。

○旗薄　旗薄の如く靡かす樣をいったのであらう。
○はふりわけてむ　屠り分けてしまはう。
○我にいしけと　我に及べと。
○村肝の　心の枕詞。
○いよせ攻む　寄せ攻む。
○おそのたふれ　愚かな狂心。
○かけらふなして　翔けるが如く
○こやし　臥さしめ。倒し。
○けのこれる　消え殘れる。
○いくさ　兵士。
○犬じもの　犬の如くに。
○むかしび　喜ばしく思ひ。
○いそし　忠實なる意。
○建雄　猛男。
○風の音の　遠きの枕詞。
○樫の實の　「ひとり」の枕詞。
○たびて　賜ひて。
○かくろへる　隱れた。
○大日枝　比叡山。
○へなり　隔たり。
○生みの子　子孫。
○はつ子　後裔。

どろ　かの山の　城門ふみしだき　たて籠る　あたのこと〴〵　旗薄　はふりわけてむ　おのも〳〵　我にいしけと　村肝の　心ふり起し　諸聲に　をらびさけびて　荒浪の　いよせ攻むれば　いなしこ女　おそのたふれか　豫てより　かくとはしれり　今こそは　時しもよけれ　いざ子ども　はやもむかへと　青淵に　潜める龍の　天雲に　かけらふなして　夕立の　雨より繁く　玉うてば　五百人こやし　箭はなてば　千人しぞきて　虎のごと　立ち向ひしも　淺茅生の　露とけぬれば　けのこれる　千々のいくさは　犬じもの　逃げてうせぬれ　豐臣の　いつの大臣　そこをしも　むかしび給ひ　あないそし　いそしき臣か　雙なき　建雄は汝ぞ　風の音の　遠音におぢて　たゆたひし　奴もあるを　樫の實の　ひとりぬけ出て　たてし名は　千代に傳へむ　これぞ此の　しるしの文と　み手づから　たびて稱へし　功さへ　名さへ朽ちせず　知る人の　しりて語れば　聞く人の　聞きてつげども　かくろへる　其のおくつきは　大日枝の　雲にうもれて　あら玉の　年月へなり　五百年の　半ばになれば　生みの子の　はつ子の兒子が　祖思ふ　誠つくして　ねもごろに　跡をしとふと　かにかくに　いそしむ見れば　其のいさを　ましてしぬばゆ　たま〳〵に　人と生まれて　穢れたる　名や流すべ

○益良夫は云々　萬葉集卷十九「ますらをは名をしたつべし後の代に聞きつぐ人も語りつぐがね」
○たなひぢ　手の肱。
○くだつ世　末世。
○新羅墨　新羅から渡來の墨。
○みぎり　右。
○みつの緒の琴　三味線。
○さかみづき　酒に醉ひくづれ。
○たふさきほはす　たふさ競はすで、踊る意であらうか。或はたふさぎを犢鼻褌の意とするも「ほはす」の意が不明。
○から振の　支那風の。
○手草　歌舞に於て手に執り遊ぶもの。
○まさきづら　まさきのかづら。
○月草の　「うつり」の枕詞。
○秋さり衣　秋が來て著る衣。
○風を時じみ　風が其の時節に外れてをるので。
○もみぢ葉の　「すぎにし」の枕詞

き　益良夫は　かく清らなる　名をしたつべし

うち日さす宮部たけをがたけびけむそのあと所苦むさめやも

十一月二十四日風あらく吹きていと寒かりける夕つかた筆さしおきてうちふし居てよめる

文机の　塵ふきまきて　嵐たち　寒き夕に　書かくと　我をるときに　たなひぢを　つくや左は　鼓うち　笛ふきたてて　謠ひかも　舞ひかもすらし　くだつ世の　物の音高し　新羅墨　するやみぎりは　みつの緒の　琴とりさして　さかみづき　たふさきほはす　から振の　宴すらしも　かしましき　此の夕暮か　古に　今もありせば　千早振　神の御前に　物部の　八十氏人の　榊葉を　手草にとりて　まさきづら　かづらにかけて　遊びけむ　時ならましを　御火白く　たかましものを　月草の　うつり來し世は　せむすべの　たどきをしらに　筆とらむ　心もしらず　風の音の　遠き昔を　しぬびつるかも

中村良臣が身まかりける年の九月の末つかた秋哀傷といへる心をよみてと其の子良弼がこひおこせければ

露霜の　秋さり衣　吹きかへす　風を時じみ　籬垣の　まがきに立ちて　も

みぢ葉の　すぎにし人を　うつら／＼　戀ひつゝをれば　蓼(たで)の穗に　夕日く
だちて　鴈なきわたる

　九月二十九日鈴屋翁の肖像をふしをがみて　（蓼は良臣の家の名によしあり）

みよし野の　水分山(みくまり)を　あしたには　仰げもろ／＼　水分の　神の御前を
あしたには　いつけもろ／＼　水分(みくまり)は　くしき神かも　古事を　大人に傳へ
て　鈴が音を　四方にひゞかせ　花ぐはし　櫻が枝に　朝づく日　たゞさす
如く　日の本の　國の八千卷　まさやかに　說かせる限り　ねもごろに　見
つゝかしこみ　のこれるは　おきてぞなげく　かくこそは　神代しぬばめ
仰げもろ／＼

　み吉野のさくらが枝に朝日さしにほへるいろは神のみけしか

　　夢心地に思ひつゞけける歌　嘉永二三年ばかりにや

みなとの　うしほのくだり　いかさまに　くだりゆく世ぞ　なゐふりて　屋
庭(には)をかへし　山さけて　水田をうづみ　飯に飢ゑて　人はこやせど　よき人
の　かきて傳へし　古の　書とりはしく　玉をしも　ことと數へて　しがあ
まり　うてなにたて　川竹の　よ聲ぞゑらぐ　鳥のごと　たちか舞ふらむ
のろのごと　守らひをるか　荒金の　土にうづゐし　人さはに　歎かふもの

○くだちて　傾きて。
○鈴屋翁　本居宣長。
○みよし野の水分山　萬葉集卷七「神さぶる岩ねこゞしき三吉野の水分山を見れば悲しも」
○いつけ　齋け。
○鈴が音を云々　神ながらの道を天下に流布させる意。
○八千卷　澤山の書物の意。
○まさやかに　明に。
○みけし　御衣。
○みなとのうしほは云々　日本書紀「みなとのうしほのくだもうなくだりうしろもくれにおきてか行かむ」くだりは下る意。
○くだりゆく世　末世。
○なゐふりて　地震が起つて。
○屋庭　家のある所。
○こやせど　臥せど。倒れたが。
○ことと數へて云々　古事記「枯野を鹽に燒きしがあまり琴につくり云々。」に傚つたのであらう。
○川竹の　「よ」の緣語。
○よ聲　夜聲。
○ゑらぐ　滿悦す。
○のろ　野。
○荒金の　土の枕詞。
○うづゐし人　踞つてゐる人。

を　人さはに　悲しぶものを　大直日（おほなほび）　直日の神の　神みたま　おふびにけらし　少女らに　男たちそひ　たなそこの　音もやらゝに　うちなふす　左右を　田にはり　種まく見れば

春戀

家ちかき　野の邊に生ふる　若草の　縁が中の　つくぐくし　我が手にとりて　思ふこと　書きやらましを　翅にも　かけましものを　昨日かも　霞のをちに　鴈は歸りぬ

三月四日松原のたきにて鮎のむらがれるを見て

安氏川の　そひの巖の　苔筵　八重しく上に　翁らは　少女にすがり　中ち等は　おむなをたすけ　うたげして　並みゐるゐれば　川のぼり　のぼる鮎子の　百千屯（むら）　こゝにつどへど　落ちたぎつ　瀧の岩瀬の　岩高み　のぼりもあへず　瀬を早み　はしりもあへず　みすまるの　玉かとみれば　空にとび　淵に隱ろひ　まきあぐる　谷の嵐に　秋の葉の　ちりかふなして　さく花に　睦るゝ蝶の　雨のむた　亂るゝなせり　そをとると　巖の上に　さでとりて　立てる男子が　手もたゆく　綱もやるべく　あまたたび　くめる鮎子を　盆にみて　かたまにあかち　遠近の　岸に並み居て　見る人の　さか

○大直日直日の神　伊邪那岐神が夜見の國から歸られて、その禍を直す爲に成りませる神直毘、大直毘神の事が紀記にある。
○たなそこ　掌。顯宗紀「手掌やらゝに拍上賜。」
○やらゝに　さやかに。
○安氏川　紀伊國有田郡。
○中ち　兄弟の中の仲に當る人。
○おむな　嫗。
○みすまるの玉　緒に貫き通した玉。
○さで　形箕に似た網。
○たゆく　たるく。
○かたま　竹で目を細かく編んだ籠。
○あかち　わかち。

の　桃のあそびも　うま人の　櫻のめでも　夢にだに　しらず思はず　苔の
上の　夕日をしきて　岩枕せり

わか鮎のむれくる見ればおちたぎつ白木綿花は今さかりなり

大社の上官島重老が六十賀に歌よみて時こひおこせける時よみて遣はしける歌五首

八平手(やひらで)を　うてや我が叟(をぢ)　うちなすは　神代のてぶり　朝よひに　とるやわ
が筆　筆とるは　おとつ世ぶり　弟の世の　我がとる筆を　古の　歌にうち
なし　神宮に　まをせ我が叟　大八洲　清き國内(くぬち)に　國へなり　をりはをり
とも　年月に　こととひかはす　古の　道はまぢかし　眞熊野の　神のはじ
めし　古道は　やすく行きよし　しかばかり　行きよき道も　かりばねに
足ふみまどひ　神ならふ　心をしらに　人ぐさの　しこのから草　うつたへ
に　かりもえかねて　秋の田の　穂の上の風の　憂はしき　歎きぞやまぬ
なげきして　世をやつくさむ　玉ちはふ　神ならはずて　足乳根(たらちね)の　親を思
はぬ　ふくろふの　むさぼり心　あら垣の　籬たちぐく　かやぐきの　ちひ
さこ心　村肝の　むきのまに〱　おのも〱　心はあらめど　妻も子も

---

○うま人　位高き人。
○めで　愛づること。
○岩枕せり　岩を枕とした。
○おちたぎつ云々　萬葉集卷六「山高み白木綿花に落ちたぎつ瀧の河内は見れど飽かぬかも」
○八平手　神を拜むのに八度拍手を打つこと。
○叟　老翁。
○うちなす　打ち鳴らす。
○てぶり　風習。
○おとつ世ぶり　末の時代の風。
○かりばね　刈つたあとの株。萬葉集卷十四「信濃路は今のはり道かりばねに足踏ましむな沓はけ我が兄」
○ならふ　學ぶ。
○しこのから草　惡く厭はしい唐草で、儒道を罵つた詞。
○うつたへに　ひたすらに。
○玉ちはふ　人の靈魂に幸を與へて助け保つ。
○足乳根の　親の枕詞。
○ふくろふのむさぼり心　和名類聚抄「梟食二父母一不孝鳥也。」
○あら垣　荒く疎に作れる垣。有らを掛く。
○たちぐく　間をくゞる。
○かやぐき　茅潜。燕雀類の一種。
○ちひさこ心　小さい子供心。
○村肝　心。

友なふ鶴の　眞鶴の　直く正しく　豐かなる　心ともしも　春されば　さひづる鳥の　鶯の　花に柳に　なれなるゝ　心ともしも　花になれ　柳にむれて　豐かなる　鶴の齢を　萬たび　千度かさねて　龜の上の　蓬か島の　島子とし　榮えたれこそ　大神に　つかへたれこそ　神ならふをち

空の海に　小波よせて　朝霞　四方に棚びき　春風の　ふきのよろしも　若浦の　鶴にやのれる　意宇の海の　龜にやのれる　木の海と　出雲の海は　神代より　あひてしあれや　むつ玉の　あひてしあれや　つばらかに　こと通ふらし　島の叟　我に語らく　我が島は　神のます島　島をよみ　松かげ淸し　萬世の　ことほぎしつゝ　うたげして　けふは遊ばな　堅魚つり　鯛つりもてこ　我はもよ　鱒とりえたり　出雲のや　八雲の雲の　八重垣の　うまし雲わた　こしよろし　いざ御酒栄に　然れども　我が鯛このむ　三吉野の　山の峯の　木の海の　花さくら鯛　それよけむ　いであつものに　鰹こそ　ひえめつくらめ　弱肩に　襷とりかけ　いざ率の　眞名井にすゝぎ　きたわきて　さかみつぎして　けふは遊ばむ

○さひづる　囀る。
○蓬が島　蓬萊島。
○空の海　蒼空を海に見立つ。
○意宇の海　出雲國八束郡。
○むつ玉　睦じい心。
○こと通ふ　意志が疏通す。
○出雲のや云々　古事記「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」
○うまし雲わた　味のよい鱈の腸
○こしよろし　出雲國簸川郡。
○いざ御酒栄云々　催馬樂我家「わたいへんは帷帳をも垂れたるを大君來ませ壻にせん御肴に何よけん鮑さだえ石陰子よけん鮑さだえかかぜよけん」
○三吉野の山の峯の　木の縁語で下の花さくらに緣がある。
○さくら鯛　浮鯛の異名。
○弱肩に云々　祝詞式「忌部能弱肩爾太多須支取掛氏云々。」
○率の眞名井　大和國添上郡にあるか。眞名井は井の意。この邊の文は古事記の宇氣比の神話中「十拳劒を乞ひわたして三段に打ち折りてぬなこもゆらに天の眞名井にふりすゝぎて云々。」を下心にした

○よちよさいふからである。
○言はがひし　祝賀し。
○ゆひがき　結ひ垣。
○はふり　神主や禰宜等をいふ。
○歌垣ゆはな　歌垣をせんかなの意。ゆはなは垣に緣ある語。
○もだはあらじ　默しては居ない
○かづらぎ　蘰として著ける。萬葉集卷十九「君がゆき若し久ならば梅柳誰と共にか我がかづらかむ」
○若子さび　若者らしく。
○かき數ふ　數ふ。
○をち返り　若返り。
○みやごかに　みやびやかに。
○ことしぬびせよ　歌詞を案ぜよ　萬葉卷三「いさにはの岡に立たして歌思ひことしぬびせし云々。」

飾守り　其の川千鳥　千代とほき　八千世とほきて　今日もかも　圓居す
らしも　言ほがひ　酒ほがひして　今もかも　うたげすらしも　玉松の　は
しき島山　ゆきめぐる　月日もしらに　うたげすらしも

八重垣は　神のゆひがき　はふりらは　歌垣ゆはな　翁とて　わびやはをら
む　島隱り　もだはあらじと　梅かざし　柳かづらき　手弱女に　手をたづ
さはり　若子さび　我もまひてむ　舞ひ出でし　尾張の叟（をぢ）は　うまごとや
我を思はむ　かき數ふ　年の六十は　萬代の　一日にたらじ　琴とりて　遊
べ少女ら　笛ふきて　遊べをとこと　をち返り　立ちまふ見れば　神山に
鶴も遊べり　龜もあそべり

事なさば　十年も千年　なさざらば　千年何せむ　なすといふ　事は何事
花にさく　出雲の神の　國土を　つくらひたまひ　みやびかに　成しをへま
しし　幽事（かくりごと）ぞ　なせりちふこと　叟がせむ　わざは何わざ　幽事を　仰ぎか
しこみ　つかへくる　あとのまにまに　萬代に　宮路通ひて　歌おもひ　こ
としぬびせよ　横道の　小道ありとも　小道何せむ

菅原大神をしぬびまつる歌

天なる　ひめ菅原　菅原の　草な刈りそと　あらかじめ　歌へるものを　黑髪に　あくたをつけて　白浪に　玉はなげけむ　其の光　其のくしみ玉　天にみち　國にとほりて　久方の　天のます人　百八十の　國のますらを　ますますに　とりてきほへる　筆の束　机にたてて　誰かなげかぬ

登巴嶽時作歌

大麻を　引本いでて　もゝ船の　舟津をすぎ　八峯たさかり　神無月　夕日かげろふ　くら谷の　雪かきならし　黑木たて　刈庵つくり　柞葉に　槻をりまじへ　越方の　萱に葺きなし　我がねたる　衣の上に　むら時雨　ふるかとすれば　朝月夜　さやかにさせば　劒太刀　腰にとりはき　堅ゆひに　あゆひかためて　しもと原　おしなみゆけば　叟がとる　手火(たひ)の光は　吹き下す　嵐にきえて　せむ術の　たどきもしらす　山陰に　歎かひをれば　ほがら〱　夜こそあけぬれ　怪しくも　惑へる道か　此の方は　行く方ならず　かの方ぞ　入るべき道と　杖とりて　数ふるまにま　向股(むかもゝ)に　霜はらゝかし　たな臂に　小笹かきわけ　はろ〲に　登り來にける　高鞆

○天なる云々　萬葉集卷七「天なるひめ菅原の草な刈りそねみなのわたかぐろき髮にあくたしつくも」ひめ菅原は天上にあるか地上にあるか不明。
○天のます人　天神の惠みを受けて生れた蒼生。
○筆の束　筆軸。
○大麻を　引の緣語。
○引本　志摩國北牟婁郡。
○もゝ船の　舟津の緣語。
○黑木　皮つきのまゝの木。
○あゆひ　足結。袴をかゝげて膝の邊で結び固める帶のやうな物。
○しもと原　枝茂き若い木立の生えつゞいた原。
○おしなみ　押し靡かし。
○手火　松明の類。
○向股　股。古事記「堅庭は向股に蹈みなづみ沫雪なす蹶ゑはらゝかして云々。」
○はらゝかし　散らし。
○こ[illegible]。

むしろ　五百重おりしき　さぶしけき　峯にはあれども　天地の　始めの時
に　皇神の　うづの御手より　はなりきて　成れる山かも　熊野川　岩垣淵
も　吉野川　たぎつ河内も　わたらひの　清き瀨の音も　此の山の　霧の雫
ぞ　山霧に　袖うち濕り　臣の木の　からきがもとの　笹の葉の　さやぐが
上を　ゆけど／＼　限りもしらず　平らけき　山にしあれば　おりたゝむ
谷を遠みか　結ぶべき　清水をなみか　先だてる　長も翁も　おのも／＼
杖つき疲れ　おほゝしき　さ霧が中に　夕けして　棄てし梅の實　夏山と
おひいづるまで　春山と　花さくまでに　年久に　入りはをりとも　つばら
かに　わけはつくさじ　飛驒人の　うつ墨繩の　ひと筋に　大和へいそげ
ゆく鳥の　影こそ見えね　怒り猪の　ふしし刈藻は　山淺く　なれるしるし
ぞ　くれぬとも　急げや子らと　道もなき　篶の高原　菅笠の　小笠にわけ
て　畝尾越え　いゆきいたりて　雲がくり　大蛇すむとふ　岩倉の　麓の峯
の　玉だれの　小薬の高嶺の　八束たる　すゞの篠屋に　ほだたきて　さ夜
を守らひ　かけ道の　まなごのくだり　下りつく　巨瀨の里回に　佛さび
たてる古寺　これや此の　松のしこねの　ひきはへし　河内の宮の　かり宮

○おりしき　織り敷き。
○さぶしけき　寂しい。
○うづの御手　伶嚴なる御手。
○はなりきて　離れ來て。
○わたらひ　渡り。
○臣の木　樅の木。
○からき　枯木。
○おりたゝむ谷　重なりつゞける谷。
○結ぶべき淸水をなみか　掬ぶべき淸水のない故か。
○夕けして　夕食を食べて。
○わけはつくさじ　跡分け盡くす事は出來ない。
○飛驒人の云々　萬葉集卷十一「かにかくに物は思はず飛驒人の打つ墨繩のたゞ一道に」
○刈藻　枯草。猪は枯草を搔き集めて臥すので「かるもかく」「かるもの牀」といふ語もある。
○玉だれの　「を」の枕詞。
○すゞの篠屋　篠竹で葺いた家。
○まなご　眞砂。
○里回　里のほとり。
○しこね　醜根。
○かり宮　行宮。

の　櫻の花の　雪の中に　ちりにし跡と　梓弓　今の現に　いひつげる　おくつき處　旅なれば　はしきる衣の　短衣　ゐやなけれども　膝をりて　我ぞをろがむ　冬なれば　霜おく花の　菊の花　色なけれども　折りとりて　我ぞ手向くる　花だにも　千年まもらへ　つら〱に　昔思へば　久方の　天雲さけて　南ふき　北吹きかはり　岩垣の　熊野の淵は　荒男らが　立居さわがし　おち瀧つ　吉野の瀧は　玉よろひ　巖にくだけ　清き瀬の　神宮川は　ひぢりこに　神かき濁し　あらびたる　世さへありしを　かの嶽のをてもこのもに　生ひをゝる　臣の木はしるや　笹の葉はしるや

反歌

手束杖三きだにをりてなげうてし巴が嶽に霧たちわたる

神風歌

あなたふと　風のたふとさ　神風と　いひつぎ來たる　中つ世の　いづの風はや　言さへぐ　唐のこにけし　さかしらに　皇國せめむと　百千船　あるみに出し　大旗に　小旗立て竝め　筑紫潟　博多の海の　沖さけて　攻め來るはしに　邊つきて　いむかふ時に　神風の　あからしま風　いや吹きに

○梓弓　「い」の枕詞。
○ゐやなけれども　いやは「ゐや」であらう。無禮ではあるが。
○玉よろひ　水の飛び散る顔。
○ひぢりこ　泥。
○手束杖　手に執に持つ杖。
○三きだ　三分れ。
○いづの風　嚴の風。嚴は稜威。
○言さへぐ　唐の枕詞。
○こにけし　王。
○あるみ　荒海。
○邊つきて　海岸近くに。
○あからしま風　暴風。

○石弓　石を發射する武器。
○はじかえ　彈き。
○いくり　海中にある巖。
○たふれ奴　狂人。罵る意。
○天雲の云々　萬葉集卷十九「天雲のそきへの極みわが思へる君に別れむ日は近づきぬ」そきへは遠く離れた方。
○もへば　思へば。

廣桙は　いくりに折れて　千萬の　たふれ奴ら　せむすべの　たどきをしらに　沖にへに　おぼれ漂ひ　玉藻なす　浮ける屍は　あらがねの　土にふみなし　天雲の　そきへのきはみ　はろ〲に　ゆくべくなしぬ　其の風の　音をかしこみ　其の風の　響を高み　心さへ身さへをのゝき　神風の　くすしき國と世々久(ひさ)に　つかふるもへば　神風の　風の尊さ　あはれたふとさ

○父翁のをだにとて　父翁の歌なりともとて。
○見えしらがふ　目に觸る。
○事とりて　主宰者となつての意
○いたづきける　病氣になつた。
○さわやぎて　快くなつて。
○さまかへたる　剃髪した。
○よみひがめ　よみちがへ。
○弘仁　嵯峨帝の年號。
○めゝしき方　歌調の弱いこと。

をさなき時より歌よむことを好みはべれど、はか〴〵しきふしも侍らざりければ　父翁のをだにとて、鰒玉集にのせて萬世につたへ侍れど、みづからのは詠草とて、殊更に人に見すべき心がまへも侍らざりしを、折々の會などによめる中より、十二十とうつしとりてもたる人もまれ〳〵には侍るに、さいつ年いなばの年平こゝにありける頃、ともによめる歌、さらでも見きくまにまに懐がみなどにや書きとゞめけむ、光平が許に河内に冬ごもりして書きあつめける一巻に、又人々數そへ侍るもこれかれ見えしらがふとか。それより十年餘りを經て、心地そこなひ侍りし時、なからむ後の形見にもとて、義信が事とりて、古蔭らと共に、こゝかしこの人々の許に傳はれる、はた書櫃の奥におしやられしはしりがきのほごどもをもあつめて、同じさまにいたづきける事と、さわやぎて後にこそ語り侍りしか。拙き歌をしもさばかりあつめつる志の淺からぬに、一昨年の秋ばかり其の人うせにければ、さまかへたる形見として常に見つゝ、よみひがめ寫し違へなどを改めて、千歌ばかりをついでも定めず抜き出し侍れど、弘仁よりこなたのめゝしき方に流れて、神

○ひたせめにせめて　只管に催促して。

せめにせめて、かく板にさへゑらせ侍るよ。嘉永六年霜月二十三日加納兄瓶しるす。

# 柹園詠草 終

# 橿園歌集 附 長歌集

中島廣足

# 櫨園集序

歌のよさあしさも、さま〴〵ありぬべし。梅のごと匂ひ高く薫り來て、見劣りのせらるゝもあり、やへ櫻のふさやかにして、遠目の劣れるもあり、又なだらかには見ゆめれど、山吹の妹に似、撫子の兒めきて、おほどかならぬもあり。其の中には萩すゝきの、かき數ふべきも有るべけれど、大かたは花もみぢの、はかなき色をあらそふめるが多くして、いつもときはなるべきなむ、世に稀らなるわが友、肥の道の口長崎の津に、其の名くはしき櫨園のあるじの、採り出でられたる此の言の葉どもよ、家の名におふ熊がしが葉の、うら見こそは華々しくも見えざらめ。これぞ此の霜の後まで、ふりゆくまじき常葉にして、色をも香をもしる人のうずにさすべき手ぶりぞかし。天保の十とせまり一とせむ月の十日の日、よくうちよみて思ふまゝにしるす。

橘　守　部

○ふさやか　ふさ〳〵としてゐる
○見めきて　子供らしくて。
○おほどか　おほやう。
○かき數ふ　數へ擧ぐ。推擧す。
○ときはなるべき　其の歌の價値が永久的なること。
○肥の道の口　肥前。
○くはしき　美はしき。
○家の名におふ熊がしが葉　櫨園といふ家號にふさはしい熊がしの葉。
○うら見　恨みと葉の裏見とを掛く。
○ふりゆくまじき　舊りと霜の緣語降りとを掛く。
○色をも香をも云々　古今集春友則「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」
○うずにさす　冠の飾に挿す。古事記「くまがしが葉をうずにさせその子。」奉藏すべき意で守る意。
○手ぶり　風俗の意から歌調の意
○まり　餘り。

# 櫨園集序

わが友かしぞののあるじ、この里に旅居せらるゝこと、今は二十とせにもなりぬべし。今かく歌人の多く盛りになりぬるは、またく其のいざなひによりてなむありける。さるは此の人の歌文のさまよ、阿蘇のたかねの高きこゝろばへは、野坂浦による波の、なみならずなむあるを、うつせみの世にしられぬこそ、いとあかぬわざなりけれ。かくて月花の折にふれたるすさみ、長き短き歌どもは、さるものにて、いにしへ文のいとあがれる世のさまなる、あるは物語になぞらへたるたぐひ、なにやくれやと、としごろものせられたるが、いまは濱の眞砂かず積りて、いと多かるを、筑紫の海のしづく白玉いたづらに年へぬるは、あたらしともあたらしくなむ。されどもしほ草かきあらはさむことは、いまだしきものをやとて、うべなはれざりつるを、こたびいかで〳〵と、庭すゞめすゝむる人のあるに、辭みあへず、いさゝむら竹、いざさらばとて、まづみじか歌の中より、いさゝかばかりかきいでられたる

○またく　全く。
○いざなひ　勸誘。
○野坂浦　肥後國葦北郡。
○なみならず　竝ならず。平凡でない。
○うつせみの　世の枕詞。
○すさみ　慰み。
○さるものにて　いふまでもなく
○あがれる世　上代。
○なにやくれやと　何やかや色々と。
○しづく白玉　この秀歌の埋れて世に知られないこと。
○あたらし　惜しい。
○もしほ草　藻鹽草は搔き集めるもの故「かき」の緣語に用ゐる。
○かきあらはす　世間に發表す。
○うべなはれざりつる　承諾されなかつた。
○庭すゞめ　語調上から又雀の饒舌から「すゝむ」の緣語。
○いさゝむら竹　庭雀の緣語であると共に「いざさらば」と語調上から用ゐた。

はなほあかぬこゝちすれど、園の名におふかしの實の、ひとり世にぬきいでたるは、見む人の見て知りぬべしとて、とりあへず摺巻になしたるなりけり。なほつがの木のつぎ〳〵も物せむとこたびはかくなむ。

天保十年二月

丹波守藤原朝臣永章

○摺巻　版本。
○つがの木の　つぎ〳〵の枕詞。

# 橿園歌集

中島廣足

## 春歌

年内立春

年のうちに春のきたりて春のうちに殘れる年となりにけるかな

春たちけるあした

思ふことみな無くなりぬうべしこそ老もわかゆと今朝はいひけれ

正月ついたちの日

あらたまる今朝のけしきは一年の老を重ねしこゝちやはする

正月元日雨いみじうふりければ

年たちてけさかきくらし降る雨は世のうるふべきしるしなりけり

立春

夢さむる枕のどかに聞ゆなり長鳴鳥の春のはつこゑ

---

○年のうちに云々　古今集春在原元方「年のうちに春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ」

○うべしこそ老もわかゆ　豫想が全く裏切られた。道理で年取る豫想と反對の結果として若やいだ。

○けしき　氣色。心持。

○かきくらし　あまり暗くなるまでも。

○うるふべき　潤ふべき。恩惠を蒙る意。

○長鳴鳥　鷄。

○いせを　伊勢の男。

○まじらむ君　踏み入つゝ櫻を見ようとする君の意。

○いつはあれど　何時といふ中でも取りわけて。

くらふべき物こそなけれ花鳥の春をまちえしけさの心は

處々立春

難波女もいせをのあまも春にあふけさの心はのどけからまし

青木永章が世をのがれてまたの年のむつきのはじめに此の春はおもふばかりもあそばまし野にも山にも櫻かざしてとよみておこせたるに

野に山にまじらむ君を此の春はたづぬか我やいとまなからむ

都初春

門ごとにたてたる松もいつしかと都の春のいろにかすめり

初春松

けさ見れば春のみどりの一しほに霞みそめたる峯の松原

初春見鶴

春まちてなれも若菜やあさるらむ雪まにたてる野べのあしたづ

都早春

いつはあれど都大路のにぎはひは春のはじめに見つべかりけり

早春霞

可上こなくきのふの冬こかまりぬる野山の色やかすみなるらむ

早春鶯

あけぼののまだほのかなる春の色をひとりしめたる鶯のこゑ

春風解氷

今もかも冰とくらし春風のひゞきにかよふ峯のたぎつ瀬

こほりゐしいはまの清水流るめり春たつ風やしるべしつらむ

風光日々新

雪きえし遠山眉の淺みどり日をへて深くかすむ春かな

子日に野べにあそびて

松にさへ今日はちぎりぬさらでだに千世もへぬべき春の心を

雪中子日

ふる雪にうもれし松の八千とせを引きあらはすは子の日なりけり

若菜

うなゐ子におくれぬものは若菜つむ春の野原の遊びなりけり

鷺のゐるかたや冰のひまならむゑぐのわかだちいざあさりてむ

原若菜

きのふ見しけぶりのなごり打ちかすみ荻の燒原若菜つむなり

○ひとりしめたる　獨占した。
○今もかも云々　古今集冬讀人不知「ふる雪はかつぞけぬらし足引の山のたぎつ瀬音まさるなり」
○峯のたぎつ瀬　谷川の流れをいふ。
○しるべしつらむ　水流の案內をすることは冰つた水を解かした意
○遠山眉　遠山の端のかすかな有樣を眉墨に見立ていふ。
○ちぎりぬ　千代を契つた。
○さらでだに　契らなくてさへ。
○引きあらはす　表面に現はす意に松を「引く」意を掛く。
○冰のひま　冰の隙間。
○ゑぐのわかだち　くろぐわゐ(塊莖を食用とす)の新らしく生えたもの。
○きのふ見し云々　後撰集春兼盛王「今日よりは荻の燒原かきわけて若菜つみにと誰かさそはむ」新勅撰集維人道二品親王道助「春日野にまだもえやらぬ若草の煙みじかき荻の燒原」

残雪

いはそゝぐ瀧のひゞきは春ながら猶雪しろし谷の松ばら

鶯

うちなびく春はきにけり朝霞にほふ岡べに鶯のなく

あかなくにたれ絲竹のしらべにもうつしそめけむ鶯の聲

鶯告春

われゆきてよそには告げむかくながら春をさへづれ庭のうぐひす

曉鶯

さく花のねぐらに風やわたるらむ曉ふかくうぐひすの鳴く

霞中鶯

梅やなぎ梢もわかぬあけぼののかすみをつたふ鶯の聲

窗前鶯

うぐひすのなく聲近み朝日影にほへる窗もあけがてにして

朝ぼらけ竹の葉しだり降る雨のしづけき窗にうぐひすの鳴く

故郷鶯

花なしし昔こふらむふるごろもきならの里のうぐひすの聲

○いはそゝぐ　瀧の枕詞。

○うちなびく　春の枕詞。

○絲竹のしらべ　管絃の調子。春鶯囀をいふ。

○よそには告げむ　他所の人の許に鶯のないたことを即ち春の來たことを知らせよう。

○かくながら　このまゝ。

○さく花のねぐら　鶯の塒がある梅の花の枝の意。

○近み　近いので。

○あけがてにして　窗を開ければ鶯が逃げて行くから躊躇する。

○ふるごろも　「き」の枕詞。

○きならの里　奈良の里。萬葉集卷六「から衣きならの里の島まつに玉をしつけむよき人もがな」

○あさくらの關云々　新古今集雜天智天皇「朝倉や木の丸殿にわが居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」朝倉は筑前國朝倉郡。
○聲たえず云々　古今集春典侍洽子朝臣「散るはなの鳴くにしとまるものならは我が鶯に劣らましやは」
○梅のしたがき　梅の下垣。
○なきもとむやと　とまつて鳴くかと。
○渭水　黄河の支流。陝西省にある。
○きえぬみなわ　水に流れゆく梅の花を指す。

關路鶯

あさくらの關の名のりにさきだちて谷の戸出づる鶯のこゑ

殘鶯

聲たえずなくにしばしもとゞまらぬ春なしたひそ園のうぐひす

梅を見ありきて

鶯の翅に袖をくらべ見むいづれか梅のにほひふかきと

山家梅

やま里の梅のしたがき行きめぐる道なつかしくにほふ春かぜ

きさらぎのなかば江戸にて不忍池のほとりなる家にやすらひて

南ふく風のまに〳〵よる波の池のおも遠くかをる梅が香

落梅

うぐひすのなきもとむやと思ひつる軒端の梅はうつろひにけり

梅浮水

しづの女がくみあぐる手もかをるなり梅散りうかぶ山の井の水

梅浮渭水

梅の花散りにし日より谷川にきえぬみなわの香ににほひつゝ

柳

柳絲緑新

さほひめの霞の衣はるくればまづ染めかくる青やぎのいと

青柳の絲のみどりは朝な〳〵吹きくる春の風やそむらむ

故柳

しづのをが末かりすてし小山田の故木(ふるき)の柳もえいでにけり

門柳漸緑

日をへつゝ絲そめかくる青柳は春くる門のしるしなりけり

水邊柳

春くれば瀬々の玉藻のおもかげに川ぞひ柳打ちなびきつゝ

岸柳

ぬるみゆく水のこゝろも知られけり川ぞひ柳なびく煙に

白川のいほにて

もえわたる柳のいろもひとつにて煙ながるゝ春の川水

餘寒

春もいまなかばはすぎの下庵に山風さむみ向ふうづみ火

○さほひめ　佐保姫。春の女神。
○霞の衣云々　霞を衣と見たて青柳の枝を絲に見立てて、春が來て霞みわたつた所に青柳が青々と芽ぐむ意。「はる」に「春」と衣の緣語「張る」とを掛く。

○末　梢。

○絲そめかくる青柳　枝の葉が次第に綠色を增して來る青柳。詞花集春平兼盛「佐保姫の絲そめかくる青柳を吹きなみだりそ春のやま風」
○春くれば云々　萬葉集卷十三「飛鳥川瀬々の玉藻のうちなびき心は妹によりにけるかも」玉藻を美女に、柳を美男に喩ふ。
○川ぞひ柳　河邊の柳。
○煙に　柳の葉の芽ぐんだ趣をいふ。
○いほ　庵。

○すぎの下庵　過ぎと杉とを掛く

### 餘寒氷

春風に打出し浪もたえ〴〵にまたこほり行く谷川のみづ

### 初午いなりまうで

いなり山杉のしたみち打ちつれて霞をかざす春のもろ人

耳とくや神も聞くらむ初午の今日のまつりのちゞのねぎごと

### 朝霞

さし出でむ峯の日影ののどけさもまだき知らるゝ朝がすみかな

### 山霞

朝日さす松のむらだちむら〳〵に霞いさよふ春の山のは

### 遠山朝霞

はる〴〵とかすむ浪間を出づる日の光にうかぶ沖つ島山

### 暮山霞

山の端はうづみはてぬるゆふぐれの霞や鳥のねぐらなるらむ

### 野外霞

菫つむゆふべの野べを立ちこめて霞も人をとゞめがほなる

袂よりあがるひばりの行くへさへ見えぬばかりに霞む野邊かな

○春風に打出し云々　古今集春源當純「谷風に解くる氷のひまごとに打出づる浪や春の初花」新拾遺集春芬陀利花院前關白内大臣「立歸り猶春寒し谷陰や打出でし波の又氷るまで」。
○いなり山杉のしたみち　稻荷山の杉の枝を折つて家に持ち歸り稻荷の靈驗をたまはる風習がある。知家で、杉は稻荷山に附物である。「稻荷山杉の青葉をかざしつゝ歸るはしるきけふのもろ人」稻荷山は山城國紀伊郡。
○もろ人　諸人。澤山の人。
○耳さくや　聞くことの鋭い意。
○ちゞのねぎごと　數多くの願ひごと。
○まだき知らるゝ　早くも知られる。
○むら〳〵に　此所彼所に靉れる觀。
○いさよふ　停滯する。
○袂より　身のすぐ傍から。

海邊霞

よる波のひゞきもたえてすみの江のあらゝ松原かすみこめつゝ

すみよしの春の海邊はしきわたす霞ぞ濱のまさごなりける

浦霞

ゆふなぎにしほひの浦ははる〴〵と霞にあさる春のあま人

都霞

けさみれば都のちゞの家むらに一むらおほふ春がすみかな

さちのやにて

出づる日の光の奥になりにけり霞める山の松のむらだち

馬田永成が歌に筆くはへてつかはしけるに春の日のめぐみくまなきをしへにはことの葉ぐさももえや出づらむとありければ

おのづから春をしりつゝもえ出づることのは草のいろぞことなる

春雨

さゝのやの軒端にすがる朝露もおつとは見えぬ春雨のそら

音もなく霞のそらに降る雨を山のみどりに染めてこそ見れ

夜春雨

○あらゝ松原　疎らな松原。

○しきわたす云々　敷き渡す。一面に擴がつてゐる。濱の白砂を霞と見立つ。

○霞にあさる　霞の中に漁る。

○家むら　家聚。家の澤山たちこめた所。

○春の日のめぐみ云々　忝き御加筆で拙歌も見榮えがする意。

○おのづから云々　加筆の爲ならずして、歌自體が立派である素質を持つてゐる意。

○さゝのや　笹葉で屋根を葺いた家。

花のうへに心おかずはいをやすく寢てやあかさむ夜半の春雨

庵春雨

聞きわびし松のしづりの音かへて雨のどかなる山かげの庵

白川のいほにて

立ちわたる霞も深き川波のあや織りそへて春雨ぞふる

海春雨

月まちて船のりすべき夕庭のしづけき海に春雨ぞふる

春月

ゆふかげの花の木の間に見えそめてにほひ添ひ行く春の夜の月

夕春月

散りまがふ花のところを立ちがてのたもとににほふ夕月の影

山里をありきて

春の夜の月のくもりとなるものは柳櫻のにほひなりけり

花間月

くるゝ日もわかぬ櫻の木の間より袖ににほへる春の夜の月

河上春月

○いをやすく寢てやあかさむ　ぐつすり寢て夜をあかさう。
○聞きわびし　聞いて心を惱ました。
○松のしづりの音　松の枝から雪の落ちる音。
○霞も深き川波　深きは霞と川との兩方にかゝる。
○あや織りそへて　春雨が降るので川波に波紋の出來るのを文模様に見立つ。詞花集秋道命法師「春雨のあやおりかけし水の面に秋はもみぢの錦をぞかく」新古今集春伊勢「水の面にあや織りみだる春雨や山の緑をなべて染むらむ」
○夕庭　庭は波靜かな海面をいふ。
○ゆふかげ　夕陰。
○花の木の間云々　新葉集春前内大臣「朝日さす嶺の霞のたえまよりにほひそへたる山櫻かな」
○立ちがての　立ち去り難き。
○わかぬ　識別の出來ない。

春の夜はいさゝ小川の流れさへみなそこ深く霞む月影

白川のいほにて

大空になきしひばりも落ちはてて光そひゆく春の夜の月

みをとほくかすめる月の影ふけて猶風さむし川づらのやど

關路春月

明けぬとていかゞはこえむ春の夜の月は霞にとまる關路を

歸鴈

あしの葉もふくむほどにやなりぬらむ田のものさはの鴈歸るなり

かりがねの歸る聲には春の夜の曉ふかき夢もさめつゝ

うちつれて歸る鴈さへわかれぢの心細さをねにやなくらむ

ひめじまのいそわにすだく鴈さへや同じとこよにさそひ行くらむ

さく花につらきわかれの鴈がねを春くるものと思はましかは

燕

なれもさはつまをこひぢの巣をくひてふせやの軒に行き通ふらむ

簾外燕

いよすだれたれも音せぬ春の日は軒のつばめぞむつがたりする

○いさゝ小川　水のいさゝか流れる川。

○みをとほく　水脈遠く。

○川づらのやど　川畔の家。
○ふくむ　ふくらむ。
○曉ふかき夢　深夜の夢。
○ねにやなくらむ　聲を立てて鳴くであらう。
○ひめじま　姫島は攝津國三島郡
○いそわにすだく　磯邊に集る。
○とこよ　常世。常世國。常世の國より飛來せる鴈を常世の鴈といふ。
○さく花につらきわかれ　鴈は花が咲けば北へ歸るから、花に辛い別れをするのでいふ。
○思はましかは　「かは」は反語。
○なれもさは　汝も亦左樣に。
○つまをこひぢの巣をくひて　妻を戀路の意と塒に泥(こひぢ)の巣を作つての意とを掛く。
○ふせや　伏屋。賤屋。
○行き通ふ　妻を戀路の緣語。
○むつがたり　睦じく語ること。

白川のいほにて

吹きわたる風ものどけき川波にはねうちふれて飛ぶつばめかな

江上春望

朝潮(あさしほ)の入江の浪もうらゝかにみちたゝへたる春霞かな

樂志園にて

夕ぐれはあまの煙もひとつにて霞をわたる春の浦船

春駒

もえわたる小草の緑はる〴〵と霞める野べに駒あさるなり

うち羣れてあさるけしきは疾きおそき心もみえぬ野べの春駒

うらゝなる日影に高くいばゆるも生ひさきしるき野べの春駒

雉

花散りし山路はかよふ人もなしきゞすつまよぶ聲ばかりして

島原路にして

からこより朝たちくればゆはき山ふし柴がくれきゞす鳴くなり

山寺にやどりて

ぬばたまの夜は明けぬらし軒ちかくきゞすつまよぶ聲しきるなり

○あまの煙　漁夫の燒く煙。
○浦船　浦に泛べる船。

○あさる　餌を捜す。

○うち羣れて云々　野邊に羣りあさる春駒を見ると速力の早い遲いの差別があらうとも思はれず皆同じ趣である。
○生ひさきしるき　將來逸物たることが著しくわかる。

○ふし柴　柴。

○しきる　頻りに聞ゆ。

○明けわたる云々　新拾遺集雜後一條前關白左大臣「天の戸の明くる程なく來る春に立ちもおくれぬ朝霞かな」
○かげろひ　陽炎。
○春にひかるゝ　春に憧憬がれる「ひかる」は絲の縁語。
○あそぶ絲　遊絲の意。
○絲　絲遊の意。
○たまきに云々　たまきは上古玉で飾り手に纏って裝飾とする物。絲遊を春の女神の飾の餘りが垂れ下つたと見なす。
○かりくらし　終日花を見て歩いての意。
○とゞめがほにも　引き留めるやうに。

雲雀

百鳥はまだ聲たてぬありあけの空さやかにも鳴くひばりかな
明けわたる春の野原のかげろひに立ちもおくれずなくひばりかな
かぎりなくあがる春野のひばりかな霞の空につまやこもれる

いほにして

春雨ははれにけらしな朝ぼらけひばり鳴きたつ聲きこゆなり
春雨のはるゝけしきを見せがほにうらゝになきて立つひばりかな

雨ふりける日

いかばかり翅しをれて夕ひばり春雨かすむ空になくらむ

遊絲

みな人の春にひかるゝ心こそ雲ゐにあそぶ絲となるらめ
大空にみだるゝ絲はさほひめのたまきにかけし餘りなるらむ

野遊

かりくらしあかぬ春野の花かげにとゞめがほにもなくきゞすかな
なきかはす野邊のきゞすの聲のうちに今日も菫をつみくらしつゝ

菫花

日ぐらしにつめども飽かぬすみれかなうべもひばりの牀をしめける

庭菫

なかなかに野となりはてし庭ならばすみれつみにと人も來ましを

蕨

とめて行く春の山路のやすらひはをりしく草もわらびなりけり

みちの邊の松のかげ野のしたわらびやすらふまにも折りはやしつゝ

岡早蕨

きゞすなくむかひ岡の松かげにわらびをる子の今日もかよへる

阿蘇の山路にして

おしなべてほどろとなりぬ里とほみ人もすさめぬ野べのさわらび

やよひのはじめ雪ふりければ

咲く花や友まつ色にまがふらむやよひの山に降れる白雪

風のやまひ世におこりてみな人やみふしけるに花盛りも近くなれば

人の身もあへずしをるゝ山風の花にはいかに吹かむとすらむ

花

朝日影にほふ高峯も櫻いろにかすむや花のさかりなるらむ

---

○日ぐらしに　終日。
○うべもひばりの牀をしめける　雲雀の牀を我が牀として臥すまでになるのも當然である。
○なかなかに　私有の庭でなくて却つて。
○とめて行く　尋ねて行く。
○やすらひ　休息。
○をりしく草　折つて下に敷く草
○かげ野　陰野。
○やすらふまにも　休息中にも。
○折りはやしつゝ　折り榮えあらしめる意で、一つの物を折つて二つにも三つにもなす意。
○むかひ岡の　「むかひの岡の」の誤りであらう。
○おしなべて云々　散木集「春くれは折る人もなき早わらびはいつかほどろにならむとすらむ」ほどろは蕨の穗の延びてほゝけたもの
○里とほみ云々　古今集春讀人不知「山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我が身はやさむ」
○すさめぬ　賞翫しない。
○咲く花や友まつ色にまがふらむ　櫻の花の白いのが雪の白さに見誤られる意。友まつ色とは友まつ雪こて次に又降るまで消えず殘れる雪の色をいふ。
○人の身もあへず云々　人の健康も堪へられず犯し行く山風は。

社頭初花

まだき咲くみしめのうちの初花に神の待ちけむ心をぞしる

曙花

大空に立ちもわかれずしらみ行くをのへの雲や櫻なるらむ

玉閑山に朝とくまうでて

百鳥の聲もうらゝににほふなり外山の花のあけぼのの空

月前花

くるゝ日を何をしみけむ月影に匂ひくははる山櫻花

霞中花

立ちそへば霞の底に花の色をしづめもはてぬ春の夜の月

ゆたかなる春の霞のたもとよりあまるは花のにほひなりけり

雨ふる日花のもとにて

春雨はそゝぐともなき木のもとの花のにほひにぬるゝ袖かな

雨後花

あまづゝみおもひしをれし心さへはるゝ高嶺の花のいろかな

物へゆくみちにして

---

○まだき咲く云々　早くも咲く社内の初花。みしめのうちは注連縄を張つた内即ち神社の境内。

○立ちもわかれず　飛び離れて行かず。續千載集春權大納言經繼「白雲は立ちも別れで吉野山花の奥より明くるしのゝめ」

○霞のたもと　霞の袖と同じで、霞の空に張れるを袂と見なす。

○あまるは花のにほひ　霞の色と櫻の色の美しさとを同じと見なす

○あまづゝみ　雨のために籠居すること。

○おもひしをれし　「しをれし」は雨の縁語。

○はるゝ　心の晴れると高根の晴れるとを掛く。

〇あやにくの雨けの空　意地わるい雨模樣の空。

〇ことかたの花　別方面の花。

〇いざてふ人　いざと誘ふ人。

〇心のゆくにまかせて　充分滿足が出來るだけ。

〇わが世　我が命。

〇かげ立ちならし　親しく姿を竝べて。

〇花さそふ云々　花を散らす風を今まで何で恨んだであらうか恨むにもあたらなかつた。

〇うつろはば　散らば。

〇さしもなづさふ　それ程も馴れ親しくする。

---

あやにくの雨けの空や日ぐらしに見ても行くべき花の盛りを

山里に花見にゆきて

世のことは忘れはてけり春はたゞ花と我とのこゝちのみして

あすもまたこゝに來て見むことかたの花にいざてふ人はありとも

行路見花

のどかなる春の山路のさくら花心のゆくにまかせてぞみる

見花延年

さくら花あかぬ心ののどけきにわが世をさへもまかせてぞ見る

長瀬翁の一周の忌に見花思故人といふことを

もろともにかげ立ちならし見し人の昔を花もおもひ出づらむ

人の花を折りもてゆくを見て

花さそふ嵐をなにに恨みけむ枝ながらこそ人は折りけれ

馴花

うつろはばいかにせむとてさく花にさしもなづさふ心なるらむ

花未飽

さくら花うつし植ゑても野に山にまどふ心はかはらざりけり

花處々

山ごとに野ごとに雲のおりゐるや花てふ花の盛りなるらむ

春入千林處々花といふことを

日の光さしもあまねき春の色をよもの林の花にみるかな

深山花

荒鷲のかゞなく山も櫻花にほふかげには旅寢してまし

山路花

ふみわけてやすらふ山の木の間よりむかふもおなじ花のしら雲

暮山花

百鳥のねぐらしづまる山のはに猶くれがての花のいろかな

峯花

雲に入る鳥の翅もにほふらむ吉野高峯の花のさかりは

瀧花

瀧つ瀬のいはもとざくら咲きしより梢をさらぬ水の白波

岩ばしる瀧の上しもあやにくに手折りよげなる花の枝かな

瀧の音はまさるとなしに岩波の立ちかさなるや櫻なるらむ

---

○おりゐる　下り居るゝ垂れ下る。

○かゞなく　鷲が聲を怒らして鳴く聲をいふ。

○猶くれがての花のいろ　櫻の花の夕闇のうちにほの白い有様。續千載集春内大臣「花の色は猶暮れやらで初瀬山尾上の鐘の音ぞ聞ゆる」

○瀧つ瀬の云々　續後拾遺集春光明峯寺人道前攝政左大臣「吉野河岩もと櫻咲きにけり峯よりつゞく花の白波」萬葉集卷十「み吉野の岩本去らず鳴く蛙うべも鳴きけり川をさやけみ」いはもとは岩の下

○梢をさらぬ水の白波　梢の櫻の花の白さをいふ。

○岩ばしる　瀧の枕詞。

○岩波の立ちかさなる　櫻の白さを水の色に見立つ。

○しづく　透き通つて映る。
○したに　水底に。
○庭のおもてをおこしつる　庭の面目を施した。今鏡みこたちの卷讀人不知「散る花を君踏み分けて來ざりせば庭の面もなくやあらまし」
○みぎりの花　砌の花。庭の花。
○よその盛り　我が庭以外の花盛り。
○たちはてて　裁ちをへて。
○山しなのいはたのもり云々　萬葉集卷十三「山科の石田の森のすみがみに幣取りむけて云々。」石田の森は山城國宇治郡。
○散る花ごとに云々　古今集春躬恒「とゞむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か」
○たぐひゆく　附き添ひて行く。

河上花

川水にしづく櫻を岩浪のしたにさわぐと思ひけるかな

山家花

心あるみやこの人も待ちやみむ花をあるじの春のやま里

庭花

うつし植ゑて人まちえたる花ゆゑに庭のおもてをおこしつるかな

庭花盛

けふもまたみぎりの花に人まちてよその盛りは見ずやなりなむ

花錦

さほ姫は霞のころもたちはてて花の錦を今ぞ織りける

花手向

山しなのいはたのもりにちる花や春のあらしの手向なるらむ

寄花夢

たぐひなく見えし花かな夢のうちに分けし野山やいづこなりけむ

惜花

吹きかへせ散る花ごとにたぐひゆく心はてなき春の山風

花の香のほだしとならば春霞ちりまよふをもかげとゞめなむ

花の歌の中に

春雨のはるれば風の吹きたちて見るますくなき花盛りかな

落花

はかなくて散る花ゆゑに待ち／＼し心あまたもつくしつるかな

ちる花のあまひなす世のことわりを思ひしらする山櫻かな

雨中落花

くれふかき霞のうちに降る雨のすがたを見せて散るさくらかな

何しかもとく散らすらむ春雨のさそひ出でたる花にやはあらぬ

山落花

春ふかきあをねがみねの苔の上にはだれふりしき散る櫻かな

河上落花

よしの川櫻吹きまく水上のあらしをたゝむ瀬々の白波

社頭落花

神垣に八重ひくしめも花さそふあらしはえこそ止めざりけれ

二月の末つかたより風のこゝちにてやよひのなかばまでこもりゐて

---

○ほだし　障り。

○ちる花のあまひなす世　散る花のもろいやうな浮世。

○何しかもとく散らすらむ　何故春雨は花を早くも散らすのであるか。

○春雨の云々　花を咲かすやうに導いたのは春雨自身ではないか。

○あをねがみねの苔　萬葉集卷七「み吉野の青根が峯の苔むしろ誰か織りけむたてぬきなしに」青根が峯は吉野山中の金峯山の北。

○はだれふりしき　斑に一面に敷いて。

○吹きまく　吹き亂す。

○あらしをたゝむ瀬々の白波　瀬に夥しく流れ來る落花は風が散らしたので疊む(積み重ねる意)といふ。

…む風を我が身に得たので厭ふさいふ。

○おそくさへ　時期は後れても。

○春のつれ〴〵　後拾遺集春上東門院中將「思ひやれ霞こめたる山里に花まつほどの春のつれ〴〵」

○めぐる　廻らす。

○ほのめきにけり　ほのかにさす

○くむや心のうきはなるらむ　汲めば心の憂さも去るであらう。

○杯をうかぶる云々　和漢朗詠集菅雅規「醽行遲來心竊待、蘂流遙過手先遮。」曲水の宴の時は流水に流れ來る杯が自分の面前に來るまでに詩を賦するのが規約であるから、人の賢愚によつて作詩の遲速もあるわけである。

正覺寺のおそざくらを見て

おそくさへ櫻しなくばこの春は花見ぬ人になりてしなまし

櫻のいみじう散るを袖に拂ふ女あり

ゆくへなきものとも知らで吹く風にはかなく花のたぐひそめけむ

鳥崎のいほにて

百ちどりとひなぐさめよ花ちりし片山里の春のつれ〴〵

春興

ちる花を浮べてめぐる杯に月のかげさへほのめきにけり

曲水宴

もゝちとせたえぬながれを花かげにくむや心のうきはなるらむ

杯をうかぶる水にときおそき人のこゝろの花も見えけり

桃

山もとの霞をもるゝくれなゐは賤が垣根の桃のさかりか

苗代

ひく水に聲たてそむる蛙さへまだめづらしき小田の苗代

今よりはしづもいとまのなかるべし小田の苗代生ひたちにけり

なはしろはやゝしげらひぬおりたちてあさる雀も見えぬばかりに

夕蛙

すがのねの永き春日もくれ深くかすめる小田に蛙なくなり

喚子鳥

とはるゝを厭ふすみかと知らねばや人よぶこどりやまずなくらむ

世のなかをおもひはなれし我が宿にあやなく誰をよぶこどりぞも

杜若

かきつばた花咲きそめて澤水のあたりゆかしくなりにけるかな

款冬

雲とのみにほふ櫻はさもあらばあれたゞなつかしき山吹の花

思ふこといはずて我もやまぶきの花に心をうつすころかな

藤

おもしろき春の盛りをことさらにすぐして咲けるふぢなみの花

折藤

藤の花袖ふりかけて折るばかりたわめる松はこゝろありけり

○しげらひぬ　茂りぬ。
○あさる　餌を拾ふ。
○すがのねの　「永き」の枕詞。
○あやなく　詮なく。甲斐なく。
○さもあらばあれ　どうでもよろしい。
○思ふこといはず云々　古今集巻十九素性法師「やまぶきの花色衣ぬしやたれ問へど答へず口なしにして」山吹の花は黄色であり、梔子(くちなし)の實は黄色の染料となる關係から山吹と口なしと聯關す。
○藤の花袖より云々　古今集春僧正遍昭「よそに見て歸らむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも」
○折るばかり　折れる位に。

泊船

藤なみの花のしなひをつなでにてなぎさによする春の浦船

池藤

藤なみのかげさへふかき池水にくれ行く春もよどむとぞ見る

春風

吹かれくる醉ひのおもてもこゝちよき春の大路の青柳の風

春雲

あまの原のどけき風のいろみえて霞になびく春のうす雲

水前寺にあそびて

おりたちてねぜりつむにも寒からぬやよひの野邊の淺澤の水

うきの浦にやどりて

春の夜もねざめのみこそせられけれ馴れぬ浦わの浪のひゞきに

志方之倫が石村の庵にやどりけるつとめて

旅人の駒打ちわたすけしきさへのどかに見ゆる春の川橋

春魚

春深みながるゝ花のいろながらまなくくみとる瀬々の若鮎

○藤なみの花云々　藤なみの「なみ」は浪の「波」の緣語。
○しなひ　撓み垂れること。
○つなで　綱手。引綱。
○ふかき　よどむに對す。

○おりたちて云々　續後拾遺集春曾禰好忠「根芹つむ春の澤田に下り立ちて衣のすその濡れぬ日ぞなき」

○いろながら　色と共に。色ぐるみ。

春のくれに

春は今いくかもあらじ梅さくら青葉のかげもふかくなりにき

海邊暮春

漕ぐ舟のうらおもしろき綱手にはくれ行く春もこゝろひかれむ

暮春郭公

花ちりし後の日かずを郭公夏になりてやはつねなくらむ

三月の末つかた庵にて

しら川の瀬々のしがらみ春かけてはやくも來鳴くほとゝぎすかな

惜春

をしむにもとまらぬ春をさしもなど心のどかに思ひすぐしし

## 夏歌

首夏

ちる花のなごりかすみし峯はれて夏あらはるゝ木々のむら立

竹亭夏來

うぐひすのよどこかれにし軒の竹風やどすべき夏は來にけり

---

○漕ぐ舟の云々　新勅撰集羇旅鎌倉右大臣「世の中は常にもがもな渚漕ぐ蜑の小舟の綱手かなしも」
○うらおもしろき　心に面白いと思ふ。「浦」を掛く。
○こゝろひかれむ　「引かれむ」は綱手の緣語。
○夏になりて　夏の季節と思ひ決めて。
○しがらみ　柵。

○をしむにも云々　古今集春元方「惜しめどもとゞまらなくに春霞歸る道にし立ちぬと思へば」

○よどこかれにし　夜牀(臥牀)が離れた。今まで鶯が竹に塒を構へて居たが、もう其の所を去つてしまつた意。
○風やどすべき　鶯の代りに風がそよ〳〵と吹く意。夜牀離れとかやどすとか色めいた語であやなす

たちかへし妹がうすもの水なみのすゞしく見ゆる夏のいろかな

新樹

青葉そふ梢さやかになりにけり花にくもりしみよしのの山

花ゆゑは思ひわきしもおしこめてひとつ若葉になつかしきかな

新樹露

かげひろくしげる若葉におく露の光すゞしき玉がしはかな

卯花

夏の來て花さく見れば山里の垣根はなべてうつぎなりけり

里卯花

くみわたすあらても見えず山里の垣根のうつぎ花さきにけり

山家卯花

夏の來て卯の花ぶきに成りにけりかた山岸のしづがふせ庵

船路卯花

かちならばいくたび陰にやすらはむ卯の花づたひ下る川ぶね

卯月ばかり綠川のほとりにて

○たちかへし　更衣した。
○うすもの　羅。薄い絹の類。
○水なみの　水波の如く。
○花ゆゑは思ひわきしも　花の爲には卽ち木に花が咲いてゐる時には、あの花の木がよいわるいさ好し惡しを分けたが。
○おしこめて　好惡心をば押し籠めなくしてしまつて。
○玉がしは　玉柏。玉は美稱。
○なべて　大方。
○くみわたすあらても見えず　卯の花が垣根に眞盛りであるので、一面に組んだ垣根の疎らな樣子も隱れて見えない。
○卯の花ぶきに成りにけり　卯の花で庵が葺かれてしまつた。
○かた山岸のしづがふせ庵　片山のほとりにある賤者のみすぼらしい庵。
○かちならば　徒步ならば。

卯の花の咲きちる岸をとめくればいはせの浪に小鮎さばしる

若竹

きのふ今日やどりそめぬる風の音もまだうらわかき軒のなよ竹

月影にさはらぬほどをすがたにて繁りなそひそ窗の若竹

郭公

百鳥の春のなごりをほとゝぎすたゞ一聲にかすめはてつる

あり明の月さしのぼる山のはに一こゑ高くなくほとゝぎす

むらさめの雲吹き送る夕風に山ほとゝぎす聲むせぶなり

待郭公

さのみやはしのぶの山のほとゝぎす今年すだちし初音なりとも

宿やあらぬ夏やはかはる郭公こぞかたらひし聲のきこえぬ

人傳郭公

ほとゝぎす鳴きぬとつぐる山守やきのふの春の花にならへる

ほとゝぎす聞きつといふ人のあまたあるに

人傳の聲ばかりして郭公いつまでわれにつれなかるらむ

獨聞郭公

〇とめくれば　尋ね來れば。

〇さばしる　走る。

〇きのふ今日云々　つい近頃竹に吹き初めた風の音。

〇なよ竹　若竹。

〇月影に云々　月光を遮らない程度を丁度具合のよい長さとして餘り茂るな。

〇かすめはてつる　時鳥が聲高く鳴いて殘んの春鳥の聲を壓し愈々夏が來たことを告げ知らせた意。

〇さのみやはしのぶの山　さういつまでも忍びかくれて居なくてもよからうの意にしのぶ山（岩代國信夫郡）を掛く。

〇今年すだちし　今年巣立つた。

〇宿やあらぬ　時鳥の宿るべき所がないか、いやちやんと我が庭にある。

〇夏やはかはる　夏がかはるか、いやかはる筈はない、ちやんと夏は來て居るのに。

〇かたらひし云々　鳴いた聲が今年はまだ聞えない。

〇ほとゝぎす鳴きぬとつぐる　新後拾遺集夏前中納言實任「まだ聞かぬ恨みもあらじ時鳥鳴きぬと告ぐる人なかりせば」

〇きのふの春の云々　先の春に花の便りをしてくれたのに倣つて知らせてくれたのであらう。

〇人傳の聲ばかりして　時鳥が鳴いたといふことゞを人から間接に聞くばかりで。

あたら夜の山ほとゝぎす一こゑは人まちつけて後になかなむ

寢覺郭公

うたゝねの夢路すぎ行くほとゝぎすさむる枕にしたひてぞきく

曉郭公

あかつきのかはたれ時もほとゝぎす雲路まどはぬ聲のさやけさ

打ちふさば聞かましものか郭公たゆめ／＼しあかつきの聲

郭公何方

ほとゝぎすかたらふ聲もそことなき雲のまよひのむらさめの空

雲端郭公

白雲のはたてにかけてひまもなく聲のあやおる郭公かな

ほとゝぎすあまたなきける夜光輔がりいひやりし

いとはやく君が聞きしもこゝらなくこよひの聲にしかじとぞおもふ

山郭公

はつせ山谷よりのぼる白雲のいさよふ方になくほとゝぎす

山里にものしけるをり

こさめふる卯月の空のうすぐもりしのびもあへず鳴くほとゝぎす

○あたら夜　惜しい夜。

○うたゝねの夢路云々　うたゝねの中に時鳥の聲を聞いて目がさめたのである。

○かはたれ時　彼は誰ぞと見定め難い黎明のほのあかるさをいふ。「たそがれ」に對する語。

○雲路まどはぬ　後撰集秋躬恆「年ごとに雲路まどはぬかりがねは心づからや秋を知るらむ」

○打ちふさば聞かましものか　眠つてしまつたならば聞かれようものか。

○たゆめ／＼し云々　我が心を倦かせ倦かせた擧句に曉一聲啼いた。

○そことなき雲のまよひ云々　新古今集夏八條院高倉「一聲はおもひぞあへぬ時鳥たそかれ時の雲のまよひに」どこかわからずそのあたり一面に雲が亂れ起つてゐる村雨の空合である。

○白雲のはたて　白雲が旗の靡けるやうに亂れた說。旗を機に通はして「文織る」に緣を持たす。「かけて」も「はた」の緣語。

○光輔がり　光輔の許へ。

○こゝらなく　夥しく鳴く。

○はつせ山　大和國磯城郡。

○ものしけるをり　行つた時の意

○しのびもあへず　我慢し切れないで。

日見の山路にて

ひみの山夕こえくれば雨雲のまよふ梢になくほとゝぎす

白川のいほにて

こゝに寢ぬ人は聞かじなほとゝぎす夜川の浪のほのかなる聲

社頭郭公

ほとゝぎす八十氏人の聞きはやす神の宮居に聲なをしみそ

市郭公

市人も聞きうるばかり郭公さやかになきて過ぎぬなるかな

橘

ほとゝぎすしのび音なきしあしたより花たちばなも匂ひそめけり

梅が香をしめつる春はむかしにて花たちばなに袖ならしつゝ

故鄉盧橘

袖ふれし誰がむかしをかしのぶらむ野となる里ににほふたちばな

一棟

しづのをが麥かりほせる山畑の立木のあふち花咲きにけり

早苗

○夜川の浪の　夜川の浪の如く。

○八十氏人　多くの氏人。

○聞きはやす　聞いてもてはやす

○過ぎぬなるかな　後拾遺集夏赤染衞門「夜もすがら待ちつるものを時鳥まただに鳴かで過ぎぬなるかな」

○梅が香をしめつる　梅の香を袖に染みこませた。

○花たちばなに云々　今度は花橘の香に袖を馴らして、其の香を染ませるやうにして居る。

○袖ふれし云々　古今集春讀人不知「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」新後拾遺集夏前關白「匂ひ來る花橘の夕風は誰が昔をか驚かすらむ」

○野となる里云々　續千載集秋前僧正遍性「藤袴何匂ふらむすみ捨てて野となる庭は誰か來て見む一

〇時來ぬと云々　千載集に源兵部朝臣「時來ぬとおり立つ田子の手も撓く取るや早苗を今急ぐなり」
〇野澤　野澄の澤。
〇さみだれの　五月雨の如く。
〇くもでにせきて　蜘蛛手卽ち四方八方に堰いて。
〇みわの山人　三輪の山は大和國磯城郡。
〇きほふ　競ふ。
〇あやめの姿かるかや　菖蒲の姿を借りる刈萱。かるは兩方に關係を持たす。
〇やがて云々　葺いたまゝそのまま刈萱が菖蒲のやうに盛んに匂つたならばどんによからう。
〇いろことに云々　騎者が別々の服裝をせずば。
〇駒のあやめ云々　馬の差別もつかないだらう。
〇たきものの匂ひあはするすさび　薫物合の慰み。
〇をりにあひたる　時期を得てゐる。
〇打ちぬるほど　一寸眠る程。「打ち」は五月雨にもかゝる。
〇やすいする　安眠する。
〇枕をゆする　枕下に響く。

時來ぬと野澤の水をさみだれのくもでにせきて早苗とるなり

採早苗

ほとゝぎすなくを門田のしるしにてみわの山人早苗とるなり

夕早苗

夕日影かくるゝ山のふもと田に猶早苗とる聲きほふなり

長崎にて五月五日茅をふきけるを

葺きそへてあやめの姿かるかやのやがて香にさへ匂はましかば

競馬

いろことによそひたたずば乘りきほふ駒のあやめもわかれざらまし

五月雨

たきものの匂ひあはするすさびのみをりにあひたるさみだれの空

ほの見えし日影やいづら浮雲のまた立ちおほふ五月雨の空

山家五月雨

さみだれは打ちぬるほどの夢もみず落ちそふ軒の瀧のひゞきに

白川のいほにて

さみだれはやすいする夜もなかりけり枕をゆする川なみの音

橋五月雨

澤水のくもでにわたす八橋もひとつにうかぶ五月雨のころ

浪こゆる音もとゞろの五月雨にあやなくなにをさゝやきの橋

船中五月雨

さみだれのふか江につなぐ友舟はむやひの綱もくちはてぬべし

梅雨留客

わくらばにとひこし人を降りこむるさつきの雨はこゝろありけり

さみだれふりつゞきける年とほき國人のもとよりにほふ朝日の影もめづらしなどいひおこせたりければ

めづらしき朝日の後もかきくれて降りもやしけむふりし五月雨

五月雨晴

さみだれの雲吹きおくる夕風のひゞきもはるゝみねの松原

梔子園にて

五月雨の園うちしめりかをれるは言はねどしるしくちなしの花

螢

夕風にみだるゝ見れば草むらの露はみながらほたるなりけり

---

○澤水のくもでに　蜘蛛手に流れる澤水に。
○ひとつに　同じやうに。八と一と相對す。
○音もとゞろの　音も響くばかりの。「とゞろ」は「さゝやき」に對す。
○あやなく　甲斐もなく。
○なにをさゝやきの橋　何を囁くのかの意にさゝやきの橋（備後にあるといふ）を掛く。
○ふか江　水の深い入江。
○友舟　相伴へる船。
○むやひの綱　舟と舟を繋ぎとめる綱。
○わくらはに　たまさかに。
○降りこむる　降つて外出させない。
○にほふ朝日　つやゝかに麗しい朝日。
○さみだれの雲吹き云々　玉葉集夏藤原爲道朝臣「五月雨の雲吹きすさぶ夕風に露さへかをる軒の橘」
○言はねどしるしくちなしの花　くちなし卽ち口無しの花だから物はいはぬが其の花の香たることは明白である。
○みながら　悉く。

夏の夜のはかなきほどももえあかす螢やながきおもひなるらむ

あらはれてもゆるおもひをなにに又をり〳〵しのぶ螢なるらむ

野螢似露

月てらすすだく螢の光さへ露になり行く野べの草むら

水上螢

うき草のたえま〳〵にしげくとぶ螢やかげのまがふなるらむ

水前寺にて

いは水のながれを清みまだきより螢ほのめく岸の草むら

甲佐の里にて

かげくらき山もとめぐり行く水のながれもしるくとぶ螢かな

島螢

鵜飼舟過ぎぬるをちの島かげに猶こがるゝは螢なりけり

水鶏

まこも生ふる野澤の水のをちこちに夕かけさらず水鶏なくなり

田草とる人は歸りて山かげの流れしづかに水鶏たくなり

小夜ふけてたゝくくひなを槇の戸の雨そゝぎかとおもひけるかな

---

〇はかなきほど　短い時間「ながき」に對す。
〇もえあかす　終夜光る。情熱の激しいことに掛く。
〇あらはれて云々　あらはれてとしのぶとは螢の火の明滅することをいふ。
〇露になり行く　月光が露を照らすので、草葉の螢の火と區別がつかない意。
〇うき草のたえま云々　卽ち水上に飛ぶ螢の火が水面に映つて兩者の火の區別を誤る意。
〇まだきより　未だ螢の時期でなくて早くも。
〇行く水のながれもしるく　螢の光で流れ行く水路の明かに見えるをいふ。
〇をち　遠方。
〇こがるゝ　船の漕がるゝと螢の焦るゝとを掛く。
〇夕かけさらず　夕ごとに。
〇たゝく　水鶏の鳴く意。
〇雨そゝぎ　雨だれ。

島ざきの庵にして

澤水のゐせきをもるゝ音ふけて垣根の小田にくひななくなり

明けわたる田のものかはづ聲たえて稻葉がくれにくひな鳴くなり

夏　月

夕月のほのめく影のすゞしさは入日の空のなごりともなし

風淸き空にとびかふかはほりのかずさへ見ゆる夏の夜の月

河　夏　月

袖つけていざわたりてむさはだ川川浪淸き夏の夜の月

長洲の浦にて

夏の日のながすの浦は行きくらすまさごぢすゞし夕月のかげ

海　夏　月

明けぬめり山のはもなき海にてもかひなきものはみじか夜の月

夏月透竹

夕風をまちとる袖にうつり來て月影そよぐ軒の若竹

雨後夏月

吹きいれし雨にまさりてすゞしきは夕風はるゝ窗の月影

○ゐせき　堰。水を塞ぎとめる所。

○入日の空の云々　暑い太陽が沒した空の餘波とも思はれない。

○かはほり　蝙蝠。

○かずさへ見ゆる云々　古今集秋「白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月」

○袖つけて　袖の先を水に浸して

○さはだ川　澤田川。山城國相樂郡。新勅撰集夏左近中將公衡「五月雨のころも經ぬれば澤田河袖つくばかり淺き瀨もなし」

○夏の日のながすの浦　夏の日の長い意を掛く。

○行きくらすまさごぢ　一日步き續けても盡きない程長い砂路の意

○明けぬめり云々　伊勢物語「飽かなくにまだきも月の隱るゝか山の端逃げて入れずもあらなむ」

○山のはもなき海　月の隱れる山の端もない、空漠たる海上。

○かひなきものは云々　一望廣茫たる海上でも夏の短夜の月はすぐ沒してしまふのでいふ。

○まちとる　待ち受ける。

六月十日の夜知澄がもとにて酒のみあそびてかへりける後に光輔とひゆきてこよひの月にとくかへりぬることなどいひおこせたるかへりごとに

おくれても問ひつる君かふくる夜の月みすさびて出でしあたりを

瞿麥

こほれてはまたおく露にならふらむいやをちに咲くなでしこの花

とこなつをよめる

をちかへりいや咲きまさる常夏のとこめづらしき花のいろかな

夏草

かりかはむ駒もつなかぬわが宿にうたてもしげる夏のむら草

夏草露

朝風にこぼるゝ露のこゞしさは草のたもとにあまるとぞ見る

夏引のすゝきの絲にぬきかけてすゞしくみゆる露のしら玉

路夏草

おほつかなふみやまどへる夏草のしたにたえ行く野べの細みち

水邊夏草

夏ふかき野邊のむら草ふみわけてわたるも涼し淺澤の水

○君か　君かな。
○月みすさびて云々　知澄の家で自分が月を見て心を慰めた後にの意。
○いやをちに咲く　萬葉集卷二十「我が家に咲けるなでしこまひはせむ夢花散るないやをちに咲け」いやをちは遠く久しくの意。
○をちかへり　若がへり。
○いや咲きまさる　愈咲き添へる。
○とこめづらしき　いつも珍らしい。「とこ」は「常」で「牀夏」の「牀」と語調を整ふ。
○かりかはむ　草を刈つて馬を飼ふ意。
○わが宿　我が庭。
○うたても　厭はしくも。
○夏引　夏引の絲とて夏繰り引いた絲をいひ、薄をそれに喩ふ。
○おほつかな　不安心の意。

鵜河

とくおそく下る鵜船のかゞり火に夜川の水も淵瀬みえけり

夕月のうすき光にさしかへて夜川の浪をてらすかゞり火

なつみ川かゞりさすなり夕月のまだきかくるゝ山陰にして

鵜船よる大井桂の川浪は月にみるよりさやけかりけり

鵜がひ船さしつゞくめり行きめぐる水のあなたの山もさやかに

蚊遣火

片山の松の夕風くもるなり誰がすむ宿にかやりたくらむ

ともし火のほのめきそめて蚊遣たく煙のおくの宿ぞしらるゝ

いづかたにたくともなくてかやり火の煙にくもる夕ぐれの里

遠村蚊遣火

ゆふげたく煙の末の山もとにまたくゆらすや蚊遣なるらむ

浦蚊遣火

もしほやく煙の外にくゆらすや浦わのあまの蚊遣なるらむ

照射

ますらをはほぐしかくなり五月雨の雲さへ深き峯づたひして

○さしかへて　交替して。

○なつみ川　大和國吉野郡。新續古今集夏法印定照「蟬の羽の衣手涼し夏箕川立ち寄る方も山陰にして」

○まだきかくるゝ　早くも隠れる

○大井桂　大堰川、桂川。

○さしつゞくめり　棹さし續く。

○ほぐし　火串。ともしの松を挾む木。

林頭蟬

山松の木の間をわたる月影の明くるもしるし日ぐらしの聲

樹々風蟬聲

陰ふかき檜原松原吹く風のすゞしさおくる蟬のもろごゑ

雨後蟬

夕立は晴れにけらしな鳴く蟬の聲より落つる木々のした露

馬上聞蟬

み山路に乘りつからせるわか駒をすゝめがほなる蟬の聲かな

なく蟬の聲をしるべにあゆませて駒にもかはむ山のした水

蓮

朝風や吹き立ちぬらし白露の玉ゆりこぼす池のはちす葉

池蓮

夕潮のさし入る浪に露ちりてひぢばの池になびく蓮葉

浦上がたの蓮見にゆきて

蓮葉のみどりをたゝむ浪の上にうかべる舟とみゆる花かな

夕顏

---

○日ぐらしの聲　こゝは鳴に鳴くかな〳〵の聲をいふ。

○鳴く蟬の云々　新後拾遺集夏前大納言俊光女「雨晴るゝ夕かげ山に鳴く蟬の聲より落つる木々の下露」

○駒にもかはむ　自分は無論馬にも飲ましてやらう。

○朝風や云々　玉葉集夏三條入道左大臣「夕されば波越す池の蓮葉に玉ゆりすぶる風の涼しさ」

○ひぢはの池　肥前國高來郡。

○たゝむ　波の緣語。

かやり火の煙のひまに匂ふめりしづが軒ばの夕がほの花

をりかこふ竹の葉垣のひま白くにほふも涼し夕顔の花

山里はをちかた人にとはねどもしるき軒端の夕がほの花

水郷夕顔

さゝらなみほのくれわたる川づらの里わに白き夕顔の花

瓜

ほりしはむ人多からし畯の男がうりもてありく聲のひまなき

扇

いつとなく涼しかりけり閨の内にならす扇の心あひの風

すゞしさをさそふ扇の風なればかひなだるさもおぼえざりけり

夕立

臥しわびし宿のあつさを時のまに洗ひはてたる夕立の雨

六月の照る日をあらふ夕立にいきかへりぬるこゝちするかな

遠夕立

はしゐしてまちし夕立けふも猶此の里までは降りこざりけり

浦夕立

○をりかこふ　折り圍ふ。
○ひま　隙間。
○山里は云々　古今集巻十九讀人不知「打ち渡すをちかた人に物申す我そこに白く咲けるは何の花ぞも」
○をちかた人　遠方の人。
○さゝらなみ　小波。
○ほのくれわたる　ほのかにあたり暮れ行く。
○川づらの里わ　川畔の里。
○ほりしはむ　欲りし食む。「し」は强め詞。好んで食べる。
○うりもてありく　賣りに瓜を掛く。
○心あひの風　心の合ふにあひの風(東風)を掛く。
○かひなだるさ　腕の疲れ。
○はしゐして　端居して。家の端近く出て居て。

[illegible]のふたつ雨はしほ風のはやみの浦にきほひきにけり

泉

松かげの苔路のしめりとめ來つゝむすぶも涼しいさらゐの水

納涼

いはそゝぐ水をあるじにすむ宿は夕かげまたで人もとひけり

避暑

夏の日をよそにすぎふの假庵にやがて世をさへのがるべきかな

船中納涼

浪たたぬ入江の風もかくながら船にて夏を過ぐしてしがな

夕浪に漕ぎ出づる船のすゞしきは汀や夏のかぎりなるらむ

送鴎樓にやどりけるつとめて

朝船のかよふけしきもすゞしげに風吹きすさぶたまの浦なみ

人とともに若宮の清音亭にすゞみて

さまぐ\に涼しさあかぬやどりかな山水の音ひぐらしの聲

いはそゝぐ水のけぶりをさそひきて細はぎぬらす木々の夕風

松風忘扇

[illegible]方起る意に夕立の雨の意を掛く。〇しほ風のはやみの浦　潮風の迅い意にはやみの浦（豐後國速水郡か）を掛く。〇とめ來つゝ　尋ね來つゝ。〇むすぶ　掬ぶ。手にすくひあげる。〇いさらゐの水　水の少ない井の水。〇いはそゝぐ水をあるじにすむ宿　高い所から岩の上に注ぐ水を此の上なき眺めとして住む家の意。〇よそにすぎふの假庵　餘所に見て過ぎる意に杉生の所に立てる假庵の意を掛く。〇やがて云々　庵に避暑したまゝ遁世したいとも思はれる。〇かくながら　このまゝで。このまゝ吹きつゞいて。〇過ぐしてしがな　過ぐしたいものだ。〇汀や夏のかぎりなるらむ　汀が夏の堺目であらう。陸を夏、水上を秋と見た。〇たまの浦　肥前國松浦郡。〇細はぎ　細い脛。

扇とるおもひだになきゆふべかな松吹きすさぶ風の下庵

夏日あふ坂山をこえてといふを題にて

打出（うちいで）の濱風すゞしあふ坂の關の東は秋にやあるらむ

永岡某が難波にあるにいひつかはしける

船ぎほふほり江の川の夕風はおもひやるだにすゞしきものを

山里にやどりけるつとめて

夜のほどに雨ふりけらし散りまがふ朝露すゞし松の下風

水風如秋

夕川の堤の木立日をさへて浪ふく風に秋ぞほのめく

野亭秋近

朝風の吹き越す露のすゞしきは垣根の野べに秋や來ぬらむ

晩夏

風そよぐまがきの荻の音きけば秋はいく夜も隔てざりけり

六月祓

所せく身につもりぬる罪とがを大うみのはらに祓ひやりてき

かげろふの夕日くだちてみそぎ川浪ふきはらふ風ぞ涼しき

---

○扇とる云々　扇を使ふ氣さへしない涼しい夕。
○打出の濱　近江國滋賀郡。
○船ぎほふ　船が競ひ漕ぐ。
○ほり江　堀江は今の大阪の道頓堀附近。
○夜のほどに　一夜の中に。
○日をさへて　日を障へて。日光を遮つて。
○浪ふく風云々　新古今集雜中務「袖の浦波吹き返す秋風に雲の上まで涼しからなむ」
○秋はいく夜も隔てざりけり　秋が間もなく來る意。
○所せく　所狹く。一杯にの意。
○大うみのはら云々　大海原に祓ひ捨てた。
○かげろふの　夕の枕詞。
○くだちて　傾いて。
○みそぎ川　禊をする川。

瀬夏祓

あすか川けふの早瀬のみそぎにはきのふの罪の淵ものこらじ

荒和祓(あらにごのはらへ)

罪とがをみそぎ捨てつる川水のさやけくなりぬ人の心も

六月つごもりの日

あはれ又ことしもなかば過ぎぬめり神のみやゐに夏ばらひする

來客夏稀

たちゐだにものうき夏は中々にとはぬを人のなさけとぞ思ふ

夏日

さみだれのいぶせかりしも今さらに戀しきばかりてる日影かな

夏朝天

起きいでて眺むる空の涼しきにしばしなさしそ朝日子の影

夏井

里とほき板井の水も夏くればみちゆきぶりに人ぞくむめる

夏河

みなづきの照る日にぬるむ山川も渡ればすゞしあゆひ濡らして

○あすか川云々　古今集雜讀人不知「世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる」
○罪の淵　罪の深いことをいふ。淵は早瀬に對す。
○荒和祓　六月祓。
○川水の　川水の如く。

○みやゐ　宮居。社。

○中々に　訪ねて來れるよりも却つて。
○とはぬを人のなさけ　續千載集冬衣笠内大臣「知られじなとはぬを人の情とは我こそ見つれ庭の白雪」
○戀しきばかり　その五月雨を今更戀しく思ふ程も。

○みちゆきぶりに　通りついでに

○あゆひ　袴をかゝげて膝の邊で結び固める帯のやうなもの。

夏花

水かげもすゞしく見えて小山田のこなたかなたに小萩花さく

夏鳥

夏山のしげきが中のてらつゝきそことも分かず音ばかりして

夏蟲

夕立のあらひし庭の竹がきにまた引きかくる蜘蛛のいとすぢ

夏竹蟲

おく露もたわゝになびく若竹にわりなくすがるかたつむりかな

夏獸

のる駒のこゝろをくみて夏川の水かふほどに我もすゞみつ

川やなぎなびくみくまに引き入れてあらふもすゞしゆふかげの駒

夏塵

夏の日のながきをたのむおこたりやまなびの窓の塵となるらむ

夏祝

夏深くしげるいなばの夕風になびくや民のこゝろなるらむ

○てらつゝき　寺啄。きつゝき。

○わりなくすがる　無分別に取りすがる。

○こゝろをくみて　疲れ心を察して。「くみて」は水の緣語。

○水かふ　馬に水を飲ませる。

○みくま　水隈。

○ゆふかげの駒　木綿鹿毛の駒。木綿鹿毛は全體が淡褐色に黄を帯び、四肢は白色の黄ばんだもの。

○まなびの窓の塵　文机に塵が積る意であらう。

# 秋歌

秋たちける日白川のいほにて

はしゐしてすゞむ川べの水ぐるまはやくも秋はめぐり來にけり

幽栖秋來

よもぎふはすむ人なげに見えぬらむさも打ちつけに來たる秋かな

初秋風

狩人の鳩ふく秋になりにけり山べすゞしき松風の聲

立ちわたる夕浪すゞしみづぐきの岡のみなとの秋のはつ風

早秋

あかつきのねざめの袖にふき來るもまだほのかなる秋のはつ風

客中早秋

秋風は故鄕人の何なれや吹きそむるより戀しかるらむ

七夕迎夜

この暮をまちえし星のうれしさは漕ぎ出づる船につみもあまらむ

乞巧奠

○はしゐして　端居して。緣端近く出て。
○めぐり來にけり　水車の緣語。
○よもぎふは云々　拾遺集雜賀讀人不知「いかでかは尋ね來つらむ蓬生の人も通はぬ我が宿の道」
○打ちつけに　突然に。案内も乞はずにだしぬけに。
○狩人の鳩ふく　秋の頃鹿を發見した事を仲間に知らせる爲に、狩人が兩手で鳩の啼聲を吹きまねる堀川百首「朝まだき扶に風の涼しきは鳩吹く秋になりやしぬらむ」千載集戀藤原仲實朝臣「まぶしさす賤をの身にも堪へかねて鳩吹く秋の聲立てつなり」
○立ちわたる云々　續古今集秋中務卿親王「淡越す夕波涼し伊勢の海のをののふるえの秋の初風」
○みづぐきの岡のみなと　萬葉集卷七「天ぎらひひかた吹くらし水莖の岡のみなとに波立ち渡る」水莖の岡は筑前國遠賀郡にあるがこは近江國蒲生郡の方であらう。
○漕ぎ出づる船　彥星の乘れる船
○つみもあまらむ　嬉し心を船中に積み切れない意。

まれにあふ星の光をうれしさの心たらひにうつしてぞみる

織女契久

川の石ののぼりてまがふ其の世にも星のあふせはたがはざらまし

七夕言志

船長にわか身をなさば天の川一年ながら君わたしてむ

七夕月

ひこぼしのわたるほどをや照らすらむ天の河瀬の夕月の影

天の川かはる淺瀬やたどるらむまだきな入りそ夕月の影

七夕山

つもりにしおもひの山もたひらかに語りやつくす星合の空

七月七日をしまの海をわたるほど雨ふれど風おひて舟はやきに

久方の天の川瀬やいかならむ海路は波ものどけかりけり

七夕舟

あまの川秋たつ波のすゞしきにすゞ舟よそひ今やこぐらむ

一とせの心にのれるともしづまはや漕ぎわたせ天のかはをさ

七夕馬

○心たらひ　滿悦の意に乞巧奠の時星の光を映す爲に水の盛られた盥を掛く。
○川の石ののぼりてまがふ　あるべからざる喩。神功紀「阿利那禮河返以逆、及河石昇爲星辰」。「川の石星となる」といふ諺もある。
○船長　天の川の渡守。
○一年ながら　一年中。
○天の川云々　古今集秋友則「天の川淺瀬白波たどりつゝ渡りはてねば明けぞしにける」
○まだきな入りそ　急いで沒する勿れ。
○つもりにしおもひの山　相思の情の積つたことを山の高きに比す。
○たひらかに　山の高きに對する語で、心安らかにの意。
○すゞ舟よそひ　鈴の附いた舟を支度して。
○一とせの心にのれるともしづま　一年中絕えず我が心に思うてゐた愛妻に會ひたいから。
○天のかはをさ　天の川の川長卽ち船頭。

○年なみ　天の川の縁語で、年の意。一首の意は七夕の一年一回の逢瀬よりも、自分が故郷に遠ざかる事の遥か大なるをいふ。
○秋風のやどりとのみ云々　荻をめぐらす幽居の中には自分が閑居せる事を人は知らないだらうの意を含む。
○くれぬめり　秋も暮れて行く。
○葛葉に風のいろをのこして　秋風が吹き立つて葛葉の色づくことをいふ。
○花づま　萩は鹿の花妻といふ。
○ありあけの云々　玉葉集秋、入道前太政大臣「眞萩原露にうつろふ月の色も花になりゆくあけぼのの庭」

あまの川わたり瀬いそぐ彦星にかさはや今日のゆふかけの駒

年久しく長崎にありて故郷のこともいとおぼつかなきに

たなばたの遠きわたりも年なみをいとかくばかり隔てやはする

獨聞荻

さもこそは我がひとり寝のつまならめ夢だに見せずそよぐ荻かな

閑庭荻

荻の葉のしげき宿とてさびしさをさのみな添へそ秋の夕風

世の人のまことにとふも驚かぬならひになりぬ荻のうは風

幽居荻

かきこもるまがきの荻を秋風のやどりとのみや人の見るらむ

葛風

くれぬめり小野の篠原吹きなびく葛葉に風のいろをのこして

萩盛開

花づまに思ひたはるゝさを鹿の聲もさかりの小野の萩原

萩露

ありあけの影をさまりておく露も花になりゆく庭の萩原

夕萩

かきわけてかへらむかたもおもほえず夕露なびく小野の萩原

月前萩

いかばかり露のおくらむ照る月の光にしづむ秋萩の花

雨中萩

風をこそ待ちつる小野の小萩原露こきたれてむらさめぞふる

野萩

さを鹿のふしどやいづら朝ぼらけ露にしがらむ小野のむら萩

庭萩

秋くれば露もとを〻に咲く萩の花にたえ行く庭のかよひ路

女郎花

秋風のつらき心は知りながらあやなくなびく女郎花かな

女郎花おほかるところ

あたなりとなれも見るらむをみなへし花のまに〱うつる心を

野女郎花

過ぎゆかば怨みやせまし女郎花すみれつむにも一夜ねし野を

○照る月の光に云々　萩の花が月光の下にしつとりと落ちついてゐる姿をいふ。
○こきたれて　掻き垂れて。
○とを〻に　たわ〻に。
○あやなく　無分別にも。
○あたなりと　我を浮氣者だと。
○過ぎゆかば　素通りしたならば
○すみれつむにも云々　萬葉集巻八「春の野に菫つみにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける」

薄未出穂

穂にいでてはや招かなむしのぶ袖には人もとまらず

風前薄

しのすゝき穂に出でぬらし吹きわたる秋風しろし武蔵野の原

秋風の行く方見えてはる〴〵となびく末野の花すゝきかな

妙相寺にて

ひれ振りしおもかげ見えてまつら山をのへのすゝき風なびくなり

さを鹿も分けてや庭にかよふらむ峯もひとつのしののをすゝき

浦上がたにて

吹きよする荒磯波をさながらに尾花にうつす秋の浦風

島崎の庵にて

かた岡の初花すゝき打ちなびきすゞのしのやに秋風ぞふく

薄成垣

小柴ゆふまがきは朽ちておのづから茂るすゝきにこもる宿かな

蘭

ふぢばかまいかにしむれば秋風のかどへどあせぬ匂ひなるらむ

○穂にいでて　顔色に出す意を含む。

○しの薄　篠薄。

○しのぶ袖には人もとまらず　薄の穂に出ないことに人知れず思ひ忍ぶ意を掛けて、左様な場合には人の心を引かないといふ。

○末野　野末。

○ひれ振りし云々　萬葉集にある大伴佐提比古が三韓に渡る時、妾の松浦佐用姫が高山に登り領巾を振つて別離を惜んだ故事。薄が風に靡く趣を佐用姫が領巾を振つた様に見立つ。まつら山は肥前國松浦郡領巾振山のこと。

○峯もひとつのしののをすゝき　峯までも篠薄がずつと生えつゞいて居る。

○さながらに　そのまゝ殘らず。

○すゞのしのや　篠竹で葺いた家

○小柴ゆふ　薪木を以て作れる。

草花露

百草の花のこゝろを尋ねてやおのがいろ／＼露もおくらむ

近見野花

かりそめにかこふ籬はうづもれて野邊もひとつの八千草の花

野花留人

家づとに手折れる花もさながらに一夜かたしく野べのかり庵

野花留客

わがやどに植ゑつくすべき花ならば露けき野べにやどりては見じ

夕露

ゆふぐれの山路のあらし吹きまよふころもで寒し木々の下露

山中露

槇の葉の夕露しげき山かげは風ふくごとにむらさめぞふる

秋ふかき山分衣（やまわけごろも）いくたびかたもとにしぼる霧の下露

月前草露

おく露にうつろふみれば秋の夜の月こそ野べの草葉なりけれ

深山秋風

---

○野邊もひとつ　垣根内と野邊との區劃も判然しない意。

○さながらに　そのまゝそこに置いて。

○かたしく　一人寢する。

○秋ふかき山分衣云々　續拾遺集羇旅法印寂信「露深き山分衣ほしわびぬ日影すくなき槇の下道」

○山分衣　山路を行く時に著る衣

○おく露にうつろふ　草葉に宿る露に月光が映る。

かげふかき槇のした道吹きおくるうき雲早し秋の山風

秋の歌のなかに

秋風の日にけに寒く吹くなべにやな瀬の鮎ぞ落ちまさりける

風前蟲聲

秋風は荻のそよぎもあるものを籬の蟲の音をつくすらむ

おぼつかないづこなるらむ吹きまよふ風のしるべの松蟲の聲

尋蟲

たづねいる尾花がもとは聲たえて又ことかたに松蟲のなく

七月のはじめつかた樂志園にて

降る雨をまち喜びてこほろぎの聲もほに出づるしののをすゝき

野蟲

風ふけば草葉にすだくこほろぎの聲もこぼるゝ小野の夕露

露わくる小野のあさぢふ松蟲のなく音に袖はひづこゝちして

故郷蟲

宮人のあゆひのすゞの音のみぞ野原の蟲の聲にのこれる

草庵蟲

○日にけに寒く吹くなべに　日増しに寒くなるにつれて。
○やな瀬の云々　梁を設けてある瀬の鮎が愈々川下へと下つて行くここで落鮎をいふ。
○荻のそよぎ　荻が秋風に心を寄せる意を掛く。
○あるものを　この下に「何故に」の意を補ふ。
○蟲の音をつくすらむ　蟲の聲限り啼くのを秋風に焦れる意を掛く
○おぼつかな　判然としない。
○吹きまよふ風のしるべ　吹き亂れる風先に送られてあちこちから聞える意。
○ほに出づる　外に現れる。
○しののをすゝき　しの原本をすゝきとあるが「しのの」であらう
○聲もこぼるゝ　露と共に聲もこぼれる。
○ひづこゝちして　濡れる心地して。
○宮人のあゆひのすゞ　古事記「宮人のあゆひの小鈴落ちにきと宮人とよむ里人もゆめ」袴をあげて、膝の邊で結び固める帶のやうなもので、鈴や玉を装飾に用ゐる。これを鈴蟲に比較す。

○むぐらふ　葎生。
○宮城野　陸前國宮城郡。
○枕さらずて　枕元近く絶えず。
○あしがらの八重山　萬葉集卷二十「足柄の八重山越えていましなば誰をか君と見つゝ偲ばむ」
○はつせ山云々　新葉集雜左大將時長「泊瀬山檜原吹きしく風の音にたぐひて響く入相の鐘」
○入日さす云々　萬葉集卷一「わたつ海の豐旗雲に入日さし今宵の月夜あきらけくこそ」
○豐はた雲　豐は美稱。旗のやうに靡ける雲。

むぐらふの軒もる露や寒からし枕になるゝこほろぎの聲

暮秋蟲

きり〴〵す夜牀のしたになく聲のまぢかく冬もなりにけるかな

鹿聲近枕

宮城野の小萩かたしき寝たる夜は枕さらずてを鹿なくなり

深山鹿

あしがらの八重山ふかき夜あらしにたえずや鹿のつまを戀ふらむ

谷鹿

はつせ山檜原吹きのぼる秋風にみ谷の鹿の聲たぐふなり

秋眺望

入日さす豐はた雲のいろくれてうす霧なびく秋の海原

秋興

菊もみぢ手ごとに折りてかへるさの山路をおくるさを鹿の聲

秋田

小山田はほに出でぬらしゆふかげの露吹きむすぶ風かをるなり

門田稲花

○小鷹人　秋行ふ小鷹狩をする人
○かた野　交野。河内國北河内郡。
○駒迎　八月十五日に左馬寮の使が、駒牽の駒を逢坂の關に迎へること。
○にほひ　色の美しさ。
○影あらたまる　影のさやかな。
○さもあらばあれ　まゝよどうでもよい、隱れるならば隱れてもよい意。

小鷹狩

小鷹人はや日をつけよ引きいるゝ尾花がもとの犬ふしぬなり

かり人小鷹すゑてゆくかた野萩の花さけり

うづらふすかた野の原のかりごろも小萩が露にぬれぬ日ぞなき

駒迎

宮人は今むかふらしあふ坂の山引きのぼる駒いばゆなり

月

久かたの空のにほひもかぎりなき月こそ秋の花にありけれ

待月

いづ方に月は出づらむおぼつかな山の端くらき松風の音

見月

吹きおくるあらしの雲のひまごとに影あらたまる月を見るかな

おもふどちあくまで月を見つるかな雲もさはらぬ秋の長夜に

八月十四日の夜人のもとにて酒のみあそぶほど月のくもりければ

むら雲にかくろふ月もさもあらばあれ心さやかに語りあかさば

八月十五夜

まちいづる外山の空はかはらねど光ことなる望の夜の月

十五夜茂木の浦にあそびて

宮はれてみちくる潮もはやさきのせとの浪間にうかぶ月影

十五夜浦上川に舟をうかべて

むらあしのしげみにきほふ蟲の音の中より出づる秋の夜の月

影きよき入江の水の空はれて月吹きすさぶ波の秋風

引汐にたゆたひながす川船のともより舳より月ぞさしいる

かへるさ雨ふるに

てる月にみがきし浪のいろきえて雨にこたふる音のしづけさ

十七日の夜もおなじ川に漕ぎのぼりて

みつしほにのりくる魚の行きかよふ浪さへ見ゆる秋の夜の月

秋風のしづまる浪路月ふけてまた漕ぎかよふ友船もなし

臥待月

手枕にさしそふ影もおもしろき軒端の竹のふしまちの月

曉出月

---

○まちいづる云々　續後撰集秋西行法師「天の原おなじ岩戸を出づれども光ことなる秋の夜の月」

○むらあし　羣り生えた蘆。

○たゆたひながす　漂ひ流す。

○みがきし浪　光り輝ける波。

○臥待月　陰暦十九日の夜の月。

○手枕　臥待と縁語。臥待の「ふし」は竹の節の縁語。

○松の葉のかはらぬ云々　古今集雜讀人不知「我見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾代經ぬらむ」
○あなし山　穴師山。大和國磯城郡。
○檜原のあらし云々　風雅集冬鎌倉右大臣「卷向の檜原の嵐さえさえてゆづきが嶽に雪降りにけり」
○沖つ洲に云々　萬葉集卷十四「夏麻引く海上潟の沖つ洲に船はとゞめむ小夜更けにけり」海上潟は上總國市原郡。
○すみの江の云々　萬葉集卷六「すみのえの粉濱のしゞみあけも見ずこもりのみやも戀ひわたりなむ」粉濱は攝津國東成郡。

九月十三夜松蔭舎にて

こほろぎの聲もさやけきかた岡の松をのぼりてすめる月影

嶺上月

風わたるをのへのすゝきほの〳〵と月に晴れ行く浮霧の空

月前松

大空にまれなる星を松の葉の露に見せたる秋の夜の月

月照松

松の葉のかはらぬ色をてらしきていくよになりぬすみのえの月

檜原月

あなし山檜原のあらし小夜ふけて心すごくもすめる月かな

海月

沖つ洲に船こぎよせてたれか見るうなかみがたの秋の夜の月

濱月

すみの江のこはまのしゞみおりたちて拾ふばかりの秋の夜の月

潟月

月まちしすさきの船も出でぬめりうなかみがたの有明の空

あし北の月浦といふ所にとまりて

夕しほもかなひにけらし澄みのぼる月の浦わを出づる船人

湖月

しほならぬあふみのうみの浪の上にみてるは月の光なりけり

はこね山秋のよぶかき海のいろのあまりにすごくすめる月かな

古寺月

はつせ山更けゆく月の霜の上にさえかさねたる鐘の音かな

旅宿月

引きむすぶまくらの露をたづね來てあひやどりする野べの月影

月似鏡

うき雲の塵なき夜半も秋風は月の鏡をなほぞとぎける

月前孤舟

浪の上に笛の音すなり月影にうかぶ一葉は舟にやあるらむ

月前遠望

いさり火はいつしかきえて隈なき月の光にうかぶ沖のつり舟

○あし北の月浦　肥後國葦北郡。

○澄みのぼる月の浦　月は上にも下にもかゝる。

○しほならぬあふみのうみ　琵琶湖。

○みてるは　汐の縁語。

○海のいろの　海の色の如く。

○さえかねたる　霜の色が寒々さ月光に冴えた趣に鐘の聲が澄み渡るを取り添へた意。

○引きむすぶまくら　草枕。

○あひやどりする　一つ場所に寐る事で、露に月光の映るをいふ。

月あかき夜あくがれありきて

とひくればみな無かりけり月影にわがごと人もあくがれぬらむ

かくばかり月の光のすめる夜にたれに寢よとの鐘はつくらむ

初雁

いねがての秋の夜風を身にしめて待ちしもしるき初雁のこゑ

吹きおくる夜半のあらしやはやからし枕に近き初雁の聲

うべしこそ秋は夜さむになりにけれ今朝なきわたる初雁のこゑ

雲間雁

秋風の雲吹きなびく空にだに友まではさで雁は來にけり

海上雁

とこよ出でていくやしほぢの浪風を翅にならし雁の來ぬらむ

海上雁飛

わたの原うかべる船の一つらに羽打ちかはし雁わたるなり

河霧

晴れのこるふもとの霧のひとすぢに行くかたしるき山川の水

吉備の山細谷川のあき風になびく夜霧も帶をなしけり

---

○とひくれば云々　尋ねて見るも誰も不在である。

○友まではさで　一緒に連なって

○とこよ出でて云々　源氏物語須磨「常世出でて旅の空なる雁がねもつらに後れぬほどぞ慰む」常世は常世の國。

○いくやしほぢ　幾八潮路。數多の海路。

○わたの原云々　古今集秋讀人不知「白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月」

○行くかたしるき山川の水　霧が河の上に立つので、川の流れの方向が明らかである意。

○吉備の山云々　古今集卷二十「まがねふく吉備の中山帶にせる細谷川の音のさやけさ」吉備の山細谷川は備中國賀陽郡。

渡霧

朝霧の中にありけり船つきを遠きわたりとおもひけるかな

霧中求渡

いかゞせむ夕霧わけて漕ぎよればあらぬ磯べの岩波の音

たまの浦の眺望

朝霧のはれ行く波にあらはれつ夜のまに寄せし浦の八十船

擣衣

高くなる砧の音に知られけり人しづまれる夜半のけしきは

擣衣繁

山里の松のあらしのをちこちにたゆめばしきるさ夜砧かな

擣衣妨夢

ともすればねぶる枕にひゞききて夢をかすむるさよぎぬたかな

風前擣衣

さそひくるきぬたの音もをちこちにやめばつかるゝ夜半の秋風

山家擣衣

山里はまだき夜寒の秋風にときあらひ衣打ちしきるなり

○船つき　船著場。

○たゆめばしきる　緩くなつたと思へば又頻りに聞えて來る。

○夢をかすむる　眠りを妨げる。

○ときあらひ衣　解いて洗張りをする衣。

田家鴫

さびしさになれても堪へぬゆふべかな垣根の小田の鴫のはねがき

鶉

秋風にまよふ夜霧のあけやらぬふもとの野邊に鶉なくなり

萩が花うち散る野べの夕風はなれもうづらの音にやなくらむ

野鶉

ゆふまぐれすゝき吹きしく粟津野のあらしの底にうづらなくなり

たが人のわくるもしらず朝霧の深き野原にうづらなくなり

百舌鳥

もみぢ葉に夕日うつろふかた岡の梢づたひにもずぞなくなる

老對菊

白菊の色にかしらはまがへどもめづる心はたわらはにして

菊のきせわたの綿に

老をしものごひ撫づてふきせ綿のうつしの香こそ限りしられね

水岸菊

咲きつゞく花よりおちて白菊の香をたゝへたる谷のした水

---

○鴫のはねがき　鴫が羽蟲を取るため嘴を以て羽をしごくこと。

○吹きしく　頻りに吹く。
○粟津野　近江國滋賀郡。

○夕日うつろふかた岡　風雅集雜守子内親王「影よわき夕日うつろふ片岡に殘るもすごきむらすゝきかた」

○たわらは　手童。母の手に抱かれ育てられる赤子。
○菊のきせわた　重陽の前日菊に綿を被せて、露と菊香とを移して、これを以て身を撫で齡を延はす。

菊籬月

月よみの水さへこよひわが宿の籬の菊の露とおくらむ

九月十四日のあした光輔のもとよりながつきの月のさかりも杉の庵にさびしさそふる朝の雨かなといひおこせたるかへし

さびしさもかつ慰みつ四方山の木の葉いろどる雨ぞとおもへば

蔦

つたかづらそめるを見れば松が枝にかゝるしぐれも色はありけり

蔦懸松

ときはなる松にかゝりて秋の色をひとりしめたる蔦かづらかな

九月ばかりしぐれしける日庵にて

初しぐれふりはへてとふ人もがな一しほぞめのもみぢ見すべく

紅葉深

たちこむる霧さへいろに匂へるはいくしほぞめの峯のもみぢば

朝見紅葉

はれわたる朝日の空ににほふめり夜半にしぐれし峯のもみぢ葉

雨後紅葉

---

○月よみ　月。

○かつ慰みつ　一方では心の慰めとなる。

○つたかづらそめる云々　續古今集春後鳥羽院「吉野山櫻にかゝる夕霞花もおぼろの色はありけり」

○初しぐれふりはへて　初時雨の降るにわざ〳〵の意を掛く。玉葉集戀女御藤原生子「雨もよにふりはへことはむ人もなしなきに劣りて座ける身ぞうき」

○一しほぞめ　一入染。一度時雨が木の葉を染める意。

むらしぐれ晴れにけらしなもみぢ葉の色にきえ行く峯のうき雲

霧間紅葉

朝ぼらけ外山をこむる秋霧にあまりてにほふ木々のもみぢ葉

松にやどり木ありしぐれふるかた

やどり木のもみづる色をよすがにてつれなき松にふる時雨かな

紅葉如錦

いつのまに織り出でぬらむ立田姫はやましげ山さらす錦は

嵩紅葉

うき雲に袂しぐれてたれか見るよしのの嶽の秋のもみぢ葉

河邊紅葉

山川のいはがき紅葉しぐるめり淀めるよどの水もちしほに

海邊紅葉

明けわたる浦わに消ゆるいさり火のなごりこがるゝ木々のもみぢ葉

紅葉出牆

たが宿のしるしのもみぢとふ人をまつのまがきの上にこがるゝ

秋野

○よすがにて　頼るものとして。

○はやましげ山　麓の山草木の繁茂せる山。

○いはがき紅葉　岩垣の陰にある紅葉。

○淀めるよど　萬葉集卷九「落ちたぎち流るゝ水の岩に觸り淀める淀に月の影見ゆ」

○いさり火の云々　木々の燃える如き紅葉を漁火の名殘と見る。

○まつのまがき　松と待つとを掛く。

かりくらし秋の花野に寝たる夜はすみれの春もおもはざりけり

秋野亭

狩にくる人こそたえねうづらなく野べをかきねの草のいほりは

暮秋の歌のなかに

山風にうき雲まよひいつしかとけしき立ちたる初しぐれかな

秋鳥

秋ふけて色づくあふち實を多みもりはむ鳥の絶ゆるまぞなき

秋獣

はゝそ散る梢をつたふ友猿のなく音もさむし秋の山風

秋筵

秋風の夜寒の牀のあやむしろあやしく物のおもはしきかな

秋懐

わび人の身はならはしのおもひだに堪へぬは秋のゆふべなりけり

## 冬歌

初冬

○かりくらし云々　萬葉集卷八「春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寐にける」
○かりくらし　終日狩をして。
○すみれの春もおもはざりけり　菫咲く春野などは念頭に上らなかつたほど秋の花野が快い。
○野べをかきねの草のいほり　野邊に鄰りせる我が草庵。
○いつしかとけしき立ちたる初しぐれ　源氏物語槇卷「初時雨いつしかとけしき立つに云々。」けしき立ちは著しく様子に現れる意。
○もりはむ　守り食む。一生懸命に食む。

○あやむしろ　綾席。
○あやしく云々　我ながら怪しく何やら人戀しく思はれる意。

○わび人の身はならはし云々　悲しみは浮世を侘びた人につきものだが、それでも秋の夕の寂しさには堪へられない意。

あしびきのかた山あらし音かへてあわたゞしくも來たる冬かな

風たえて春おもほゆる空の色も暮るゝにやすきかみな月かな

　　庵にて初冬を

あしすだれひまもあらはに吹く風は冬ごもりするはじめなりけり

秋くれし山田のひつぢ霜とぢていなおほせ鳥の聲もさむけし

　　閑居冬來

月花にあけしもまれの柴の戸をとぢはてぬべき冬は來にけり

　　初冬時雨

風あれてしぐるゝ雲の一むらに冬を見せたるあけぼのの空

春とのみおぼめく空に雲たちてやがてしぐるゝ神無月かな

　　時雨

槇の屋は打ちぬるひまもなかりけりあなかしましの夜半のしぐれや

吹きおくるあらしをはやみ槇の葉をもらでも過ぐる夕しぐれかな

もみぢ葉ににほふ夕日の影ぬれてひとしぐれする山もとの里

　　庵にて

かきくらすしぐれの空に飛ぶさぎの羽色さやかに入日さすなり

○あしびきの云々　新續古今集雜賀茂夏久「秋來ぬと神も知るらむ片岡の杜の下風音かはりぬる」

○春おもほゆる空　小春日和の空

○ひつぢ　刈つた跡に再び生える稻。

○いなおほせ鳥　古今三鳥の一つで、解らぬが、田の畔に居て秋に多く鳴く鳥である。

○月花にあけしもまれの柴の戸　秋の月春の花を眺める爲に、稀に開けた柴戸。

○春とのみおぼめく　只管春のやうに疑ひ思ふ。

○打ちぬるひま　寢る時間。

○槇の葉をもらで云々　千載集冬仁和寺後入道法親王「木の葉散るとばかり聞きてやみなましもらで時雨の山廻りせば」

○飛ぶさぎの云々　風雅集雜太上天皇「夕日影田面はるかに飛ぶ鷺のつばさのほかに山ぞ暮れぬる」

降ればやみやめばふりつゝまどろまぬ心をさます小夜しぐれかな

朝時雨

朝風のさそふ雲間に出づる日の光をそゝぐ村しぐれかな

夕時雨

吹きおくるあらしの雲のたえまより時雨を照らす夕づく日かな

月前時雨

山の端は雲もさはらでさしのぼる月のこなたに降るしぐれかな

庵にて

深き夜の月のありかを見せがほに雲打ちなびき降るしぐれかな

一むらのしぐれの雨を隔てたる光もさむしありあけの月

時雨過

風きほふ外山の松のしたしぐれ過ぎ行く雲におくれてぞふる

時雨雲

そめのこす梢やよもにたづぬらむしぐれの雲のあしもやすめぬ

大空にたちなびけるは長閑にてした行く雲ぞまなくしぐるゝ

吹きはらふ松のあらしのはやければ時雨れかねたる峯の浮雲

---

○山の端は云々　風雅集秋院御製「暮れもあへず今さしのぼる山の端の月のこなたの松の一本」

○風きほふ　風競ふ。

○そめのこす云々　新勅撰集秋法印覺寛「染め殘す梢もあらじ村時雨ぞ飽かなくの山めぐりして」

風あれてうき雲まよふ深山路はしぐれの外にあふ人もなし

時雨廻山

月影ののこるかたより廻りきて明け行くみねに降るしぐれかな

雨いみじうふる夜夢のうちによむとおもひしうた

もみぢ葉のながるゝ瀧となりにけりしぐれふりしく山の細みち

山かげの庵にしぐれふるかた紅葉あり

てりまさるもみぢを窗のひかりにてむかふ外山は打ちしぐれつゝ

十月ばかり山ぶみして

ながれくる水もいろ〳〵ににほふめりもみぢの木の間菊のしたかげ

落葉

吹きおくるあらしの風のいさよひに松より落つる木々のもみぢ葉

山里にものしける時

なみたてる松を嵐のゐせきにてたえず吹きこす木々のもみぢ葉

夕落葉

むらしぐれはるゝ外山のしづくあひて夕日も寒く散るもみぢかな

○山ぶみ　山歩き。

○いさよひに　誘ふので。

○なみたてる　竝み立てる。
○ゐせき　堰。堰きとめるもの。

○しづくあひて　雫が落ち合つて。

さほ山のあらしを寒み夕霜にむすぼほれても散るもみぢかな

落葉混雨

にはたづみながるゝ見ればもみぢ葉をさそふ嵐は時雨なりけり

しぐれふるかた山里のにはたづみ流れもあへずもみち散りつゝ

落葉埋橋

しば人はいかにとめてか渡るらむ落葉にしむ谷のうきはし

今はいとわびにたれば朝夕のつま木も手づからものするを例の山にのぼりて落葉かくとて

うかりける峯のあらしも中々にかくてうれしき松の落葉か

水上落葉

夕風によりくる波のさゝらがた錦おりかけ散る紅葉かな

河邊落葉

山川の岸より岸に吹きわたす木の葉もはやき波の朝風

殘菊

おく霜に色そふ庭の菊の花雪にもあせず匂はましかば

---

○むすぼほれても　凝りかたまりても。
○にはたづみ　降雨の際地上に溜り流れる水。
○流れもあへずもみぢ散りつゝ　古今集秋春道列樹「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」
○しば人　柴人。薪を取る人。
○とめてか　尋ねてか。
○落葉にしむ　落葉にしづむの誤であらうか。
○わびにたれば　貧しくなつたから。
○中々に　却つて。
○松の落葉か　「か」は「かな」
○さゝらがた　細かな模様。
○匂はましかば　「いかにうれしからまし」等の意を補ふ。

おく霜にうつろふ菊の花のいろを秋にかへしてつもる雪かな

霜

ひとりねの衣手さえてあけにけり笹の葉しろき夜の初霜

うべしこそ夜寒なりけれ板びさしいたくもおけるけさの霜かな

島崎のいほにして

草むらにおきそふ霜や寒からしそがひの山に狐なくなり

霜のいとしろきあした

笹の葉によすがらさえし風の色を今朝おきわたす霜にみるかな

竹霜

そよとだに音せぬ窓のくれ竹は風さへ霜にむすぼほれけむ

あさな〳〵こぼれし露の音もなし初霜しろき窓のむら竹

氷

散りつもる木の葉のしたや氷るらむ咽びたえたる山川の水

薄氷

散りうかぶはゝその色もさながらにうすこほりぬるさほの川水

○秋にかへして　菊に雪の積れるを白菊の花に見立つ。

○そがひの山　後の山。

○咽びたえたる　流れ絶えた。

○さながらに　散り浮んだまゝ。

朝日さす水のながれは解けそめて岩間づたひに殘るうすらひ

厚氷

あげまきがなげうつ石もはしり行く野澤の氷いくへしぬらむ

池氷

あしかもの霜打ちはぶく音もなし氷りやはてしこやの池水

池水始氷

うす氷ひとへしにけり今朝よりや池のこゝろも冬をしるらむ

冬の池にまだすみなれぬ水鳥のけさの氷をいかにわぶらむ

深夜氷

落ちたぎついは瀬の浪もこほるなり夜ぶかき山の松のあらしに

懸樋氷

もみぢ葉にまたせかれしと思ひしは氷りそめぬる筧なりけり

水路氷

みだれ蘆のたえまをとめて漕ぐ船のさをにさはるは氷なりけり

河水

杣川のいかだのみちも絶えぬめり夜をへてとづる瀬々のこほりに

○うすらひ　薄氷。

○あげまき　子供の意。

○こやの池　昆陽池。攝津國河邊郡。

○漕ぐ船の云々　土佐日記「水底の月の上より漕ぐ船の棹にさはるは桂なるらし」

○とめて　尋ね求めて。

○霜ぐもり　霜の降る前の空の曇

○花にだにすさめぬ庭　花の咲く時さへも賞翫しないこの庭。

霜ぐもりはれぬ雲路やたどるらむ冬の夜ぶかきかりがねの聲

庭寒草

ゆふ霜になく音かれにし秋の蟲の故郷さむき夜のよもぎふ

花にだにすさめぬ庭を今さらに誰ふみわけむ霜のした草

池寒蘆

にほどりのうきすの牀もあらはれて夕浪さむし池のかれあし

暮山木枯

吹きさわぐ椎の端山の木がらしにやどりかねたる夕がらすかな

寒樹

かさゝぎのふるすばかりや殘るらむなにはのもりの木々の冬がれ

寒樹嵐

山鳩のねぐらにたのむときは木を吹きのみしをる夕あらしかな

寒松

はふ蔦のもみぢも散りて冬ふかきみどりを見する峯の松が枝

山寒松

吹きしきるあらしの山の冬がれにひとり木ぶかき松の音かな

冬月

打向ふほどだに寒くなりにけりなれし夜ごろの秋の月かげ

松風のひゞきを寒み玉すだれかゝげかねたる冬の夜の月

冬の夜の空にこほれる月影のあくるはとくるこゝちこそすれ

埋火のあたりを頼む冬の夜もあくがれぬべき月のかげかな

寒月

霜こほりふみしだきつゝあくがれし昔こひしき冬の夜の月

ゆふ霜のいやさえまさるねやの戸もささまくをしき月の影かな

あやにくにさえのみまさるあらしかな木の葉くもらでむかふ月夜を

庵にて

木がらしのしぐれをさそふ山のはのむら雲くろく照る月夜かな

冬曉月

かねの音の霜にみちたる山のはに落つるも寒き有明の月

さよふかく霜ぐもりせし月影のはるゝもさむし明方の空

庵にて

○月影のあくるは云々　曉方月光の薄くなつてゆくと氷が解けたやうな心地がする。

○あくがれぬべき　月を眺めようと心が浮れ立ちさうな。

○木の葉くもらで云々　新古今集冬宣秋門院丹後「吹き拂ふ嵐の後の高根より木の葉くもらで月や出づらむ」

聞きなれし槇の板やの音かへて霰まじりにふる時雨かな

柴霰

ゆふあらしさわぐ林の木の間より椎の實まじり散るあられかな

行路霰

しひしばのかげふみ過ぎてはげしさの袖にしらるゝ玉あられかな

海邊霰

わたの原雲かきくらしゆふ波のあらつの濱に霰ふるなり

千鳥

難波潟西吹きあぐる夕風に浦波千鳥聲さわぐなり

寒夜千鳥

夜あらしの拂ふまさごの霜の上におりたちかねてなく千鳥かな

白川の庵にて

曉のねざめのまくら川波のひゞきもさむく千鳥なくなり

海邊千鳥

わたつみの入日のなごりかきくもり汐風寒く千鳥なくなり

浦千鳥

---

(聞きなれし)[illegible]後醍醐天皇「また馴れぬ板屋の軒の村時雨音を聞くにも濡るゝ袖かな」

○しひしば　椎柴。椎の木の叢生するもの。

○ゆふ波のあらつの濱　夕波の荒い意に荒津の濱(筑前國筑紫郡)を掛く。

船とめてぬる夜しづけき浦波のうらがなしくもなく千鳥かな

衾

庭にたつ麻を引きほしわぎも子か織れるふすまにひとりかも寝む

水鳥

よしの川山かげ寒くおく霜にうきねの鴨ぞまなくはねきる

こほりゐしはがひの霜やとけぬらむ朝日にすだく池のをし鳥

夜を寒みあしまの牀やこほるらむ沖になづさふ水鳥の聲

水鳥多

川船のすぐればまたも行きあひてひまなくうかぶ水のむら鳥

入江水鳥

つりたれし船はかへりて夕風の寒き入江に鴨ぞうかべる

白川のいほにて

冬ふかき川瀬の浪のおとすみて曉さむき水とりの聲

鴛鴦

おく霜をかたみに拂ふをし鳥の浪のうきねのうらやすけなる

朝日さすいはねにねぶるをし鳥は池のこほりのとくるまつらむ

○庭にたつ云々　萬葉集卷十四「庭に立つあさで小衾こよひだにつまよしこせねあさで小衾」同卷九「小垣内の麻を引きほし妹なねが作り著せけむ白細の紐を解かず云々。」

○よしの川山かげ云々　萬葉集卷九「さき玉のをさきの池に鴨ぞはねきるおのが尾にふりおける霜を拂ふらし」

○まなくはねきる　絕間なく羽搏をする。

○はがひの霜　左右の翼の打ち違ふ所にかゝつた霜。

○なづさふ　浮ぶ。

○もるらむ　守るらむ。

○松の葉くろき　松に積った白雪が風に吹き拂はれたので、松の葉の露出したことをいふ。

いかにして網代もるらむふくる夜のあらしもはやき宇治の川瀬に

もみぢ葉のながれよる瀬はあじろ木にかけたる布も錦なすらむ

雪

うづもるゝをちの高嶺もわが宿のまがきの山と見ゆる雪かな

初雪

朝がらすめづらしげにもさわぐかな四方の山べの木々の初雪

宵のまのしぐれの庭やこほりけむ今朝めづらしく雪のつもれる

霜にのみ冱えあかしたるねやの戸の光ことなる今朝の雪かな

はじめて雪ふりけるあした

吹き拂ふ嶺のあらしやはやからし松の葉くろきけさの初雪

板垣のこなたかなたに散りのこる蔦の葉白くふれる初雪

光輔がもとより「うづみ火のあたりさらずば雨とのみ聞きてややまむけさのみぞれを」とありけるかへし

文づくゑにとくむかひてぞ降る雨の雪になりゆくけしきをもみし

庵にて雪のをり〳〵に

かきたれてふれども庭にたまらぬは小雨やまじる今朝の白雪

初み雪ふるともしらでねたる夜のあくる光におどろかれけり

うき雲のかつはれ行くと思ひしは降りつむ雪の光なりけり

文机につもれる塵もあらはなる雪の光ぞかつはやさしき

月前雪

照る月の光の花にちりまがふ雪おもしろき有明の空

雲さそふあらしをはやみ照る月の光をわけて雪ぞうちちる

山雪

風さゆるをかべの松の木の間より雲ゐにしろき雪の羣山

雪滿羣山

足柄は船木きりおろす道たえて八重山深くつもる白雪

野雪

ふみわけてとぶひの野守住むかたもわかぬばかりの今朝の雪かな

濱雪

吹上の濱の松が枝音さえて風のすがたにつもる白雪

島雪

---

○足柄は云々　萬葉集卷三「とぶさ立て足柄山に船木伐り木に伐り行きつあたら船木を」

○とぶひの野守　飛火野の野守。飛火野は大和國春日野の南。

○吹上の濱　紀伊國海草郡。

わたつみのこれもかざしの花ならむ沖の小島につもる白雪

山樹雪深

むさゝびのかよふ梢もうづもれぬ高圓山のみねのしら雪

松　雪

朝日影はるゝを見ればしら鳥のとば山松に雪ふりにけり

ふる雪にとやまの松やうもるらむ深くなりゆく風の音かな

雲まよふ嶺の松原音さえてあらしの上につもるしら雪

山風のひゞきもたえて松の上に降りつむ雪のあたゝかげなる

風拂松雪

うづもれし風のひゞきもあらはれて雪うちけぶる嶺の松原

雪の日人のもとにて

玉すだれかゝぐる袖に散りくめり柳にあまる軒のしら雪

竹　雪

朝ぼらけ風しづまれるかた山の竹の葉しのぎつもるしら雪

夕風にさやぎし竹の小夜ふけて雪に折れふす音を聞くかな

○こゞりそめ　凝結し初める。
○かざしの花　白雪を挿頭の花と見なす。

○高圓山　大和國添上郡。

○しら鳥のとば山松　萬葉集卷四「白鳥の飛羽山松の待ちつゝぞわが戀ひ渡るこの月頃を」しら鳥のは「とば」の枕詞。飛羽山は大和國生駒郡。
○雲まよふ云々　新後撰集秋後光明峯寺前攝政左大臣「嶺高き松のひゞきに空澄みて嵐の上に月ぞなり行く」

○しのぎ　撓まし。

雪埋竹

朝風の吹きもおこさぬ一むらや下折れはてし雪のなよ竹

さやぎこし竹のありかやたえぬらむ雪の上ふく庭の朝風

杣雪

春まちてとくる水にやくだすらむ雪にこりつむにふの杣木は

樵路雪

雲まよふ山路のあらしさえ〳〵てかへる柴人雪をおひけり

山家雪

聞きなれし松のあらしの響さへ埋れはてぬる雪のした庵

雪山つくる所

わが園にこしの白嶺をうつしてきそりにのりても人の問はなむ

雪ふりけるあした門の前よりわたる人のあとつけむことの惜しきにえたちよらぬなどいへりければ

朝戸あけてたがためにかは眺めつるとくふみわけよ庭の白雪

雪朝眺望

朝風もいとひぞあへぬをすまきてむかふ外山の雪のけしきに

○なよ竹　細くしなやかな竹。

○にふ　丹生川。大和國吉野郡。

○聞きなれし云々　續古今集冬從二位家隆「聞きなれし嵐の音はうづもれて雪にぞなびく峯の松原」

○こしの白嶺　加賀國の白山。

○門の前より　門前を。

○たがためにかは眺めつる　君の爲に眺めたのである。

○いとひぞあへぬ　飽くまで厭ひはしない。

○をすまきて　小簾捲きて。

よさの海の波路はれゆく朝なぎに雪をわたせる天の橋立

朝陽館より見わたして

吹きのぼる谷のあらしやはやからしみ雪にくもる嶺の松原

樂志園にあそびて

まつ人のとひくるまゝに降り添はる雪やあるじの心なるらむ

ともし火のかげもけたれつ暮れそめていよ〳〵しろき雪の光に

雪中獸

かきつめしかるもの牀もうづもれて雪にふするゐやいかにわぶらむ

雪の夜は狐も穴にこもるらむ霜にわびつる聲もきこえず

鷹狩

はなちやる手にぞしらるゝ立つ鳥をかけあやまたぬ鷹の心は

朝づく夜さやけき野べに引き据うる袂もさむし霜ずりの鷹

狩場嵐

鷹人もたづねやわぶる吹きまよふ嵐のすゑの鳥のおち草

吹きおくるあらしの風もはや鷹の行方にさわぐ野べのむらどり

○波路はれゆく云々　新拾遺集雜花園院御製「淸見潟波路晴れゆく夕凪に入日まぢかき淡路島山」

○降り添はる雪　心の深いのに喩ふ。

○けたれつ　消たれつ。雪明りに燈火の光の減ずるをいふ。

○かきつめしかるもの牀　掻き集めた枯草の牀。猪の臥所をいふ。

○ふするゐ　臥した猪。

○はなちやる手にぞしらるゝ　鷹を放つてやる時の手下で鳥を捕へることが豫感される。

○朝づく夜　有明月が殘れる頃。

○おち草　鷹が鳥を追ひ落した草叢。

炭竈

雪はるゝ山路の末にたつ雲やすみやく里のけぶりなるらむ

冬ごもるよその山べのさむけさをおのが時なるすみがまの里

埋火

わが身さへふすまの下にうづみ火をたのみてのみもあかす夜半かな

ふかき夜のねざめにむかふ埋火ははつかばかりも嬉しかりけり

雪となる灰かきわけてあさり出づる光もさむし閨のうづみ火

爐火欲消

ともし火もまたゝく閨のうづみ火のいづれかさきに消えむとすらむ

豐明節會

をとめ子がかへすま袖のけしきにも年ゆたかなるほどぞ知らるゝ

神樂

星うたふ庭の榊葉しら〴〵と霜おきまがひあけぬ此の夜は

月前神樂

宮人の立ち舞ふをみのころもでに夜ぶかき月の霜拂ふ見ゆ

○おのが時なる　最も得意な時である。玉葉集秋權大納言冬教「露はおき風は身にしむ夕暮をおのが時とや蟲の鳴くらむ」

○はつかばかりも　僅かばかりも

○雪となる　雪のやうに白くなる

○をとめ子　五節の舞姫。

○年ゆたかなる　新嘗會の宴會なれは豐年に因んでいふ。

○星　神樂歌の曲名。明星。

○をみのころもで　小忌の衣手。小忌人が裝束の上に著る單の服。

冬ふかくこもれる宿に待ちえたる匂ひうれしき梅のはつ花

霜がれのひとつ木立とおもひつるをかべの梅の花咲きにけり

雪中早梅

梅の花咲きにけらしな朝ぼらけ雪ふく軒の風かをるなり

梅花咲ける家に雪ふれるかた

とふ人をかきねの雪にいとひしは梅さかぬまの心なりけり

歳暮

老いぬれば近づく春のうれしさはかはらずながらをしき年かな

むかしたれ惜しみそめてか行く年を身にしもとまるものとなしけむ

世の塵にまじりもはてぬ身のほどのおもひ知らるゝ年の暮かな

行く年ををしむよいかに花鳥の春にちかづく日かずよみつゝ

さもあらばあれふりゆく年も契りおく遊びあまたの春をまつ身は

家々歳暮

たが宿をとひてのどかに語らはむいそがしげなる年の暮かな

閑中歳暮

世の中を隔つる宿のしづけさは年の暮にぞいとゞ知らるゝ

〇日かずよみつゝ　日數を數へつゝ。

○やらふしわざ　鬼儺をすること

青木永章世をのがれける年のくれに春をのみまちて心のどかなるよしいひおこせけるかへりごとに

のどかなる春にあそばむ嬉しさを君によりてぞ我もそへつる

また今さらに思ふもくるしなどありけるに

今さらにおもひないでそ塵の世のうきはむかしの夢になしつゝ

除夜

みな人のやらふしわざに目にみえぬ鬼も此の世の外に去るらむ

しはすつごもりの夜に

年月のくれぬと何かをしむらむうれしき春にあけむ此の夜を

冬日

霜どけのかわくばかりは照りもせで早くかげろふ夕づく日かな

冬雲

むつまじみむかふ日影をともすれば雪げの雲のたちへだてつゝ

冬風

降る雪はつもりもあへず山松の枝もたわゝに吹くあらしかな

冬朝

とく起きて老のすさびにとる筆のこほるもくるし窗の朝風

梅の花にほひそめなば風さむきねやの朝戸もあけうからじを

冬野

冬の野はや丶ほど近くなりにけりのころ青葉の草むらもなし

冬原

立ちまじる枯生のす丶き霜とぢて小松か原のいろも寒けし

中しま川のほとりにて

冬川のやな瀬はもらずなりにけりおほねを洗ふをのこのみして

冬海

冬くればあまのよび聲とよむなりまつらの海にくぢらとるらし

冬湊

かきくれし沖のあらしのあとならし湊につどふ雪のともぶね

冬田

冬深き山田のひつぢ打ちしなひあしたの霜ぞほに出でにける

冬井

冬くれば門のいさらゐけぶりたち朝くむ水のあた丶かげなる

○冬の野云々　新千載集冬大江廣房「朝な〳〵殘る青葉のまれにのみなるみの野邊の霜の下草」

○もらず　守らず。

○おほね　大根。

○まつらの海　肥前國松浦郡。

○冬深き云々　古今集秋讀人不知「刈れる田に生ふるひつぢの穗に出ぬは世を今更に飽き果てぬとか」

○いさらゐ　水量の尠い井。

冬杜

しらさぎの塒もいとゞあらはなるゆるぎの杜の木々の冬がれ

冬苔

雪さゆるみ山の松のさがり苔それもつらゝにむすぼほれつゝ

冬鳥

降りつもる雪をくゞりて音もなくまがきのひまに飛ぶさゞきかな

しづのをがあくたくゆらす山ばたの冬木のうれにひたき鳴くなり

雪のうちに烏のあさるを見て

いにしへのはがひのもじのあとをまた雪にあらはすむら烏かな

冬歌

山深きくち木のうつぼ降りうづむみ雪を寒みましらなくなり

## 戀歌

初言戀

ことのはに今日かけそむる下露のしたにくだけしほどは知らなむ

忍戀

---

○しらさぎの云々　新千載集雜入道二品親王覺性「いかなればゆるぎの杜のむら鷺の今朝しも殊に立ちさわぐらむ」ゆるぎの杜は近江國高島郡。
○さがり苔　ひかげのかづら。

○さゞき　みそさゞい。

○あくたくゆらす　「ひたき」の中に「火燒」の意を籠らせて、「くゆらす」と緣を持たせたのであらう。

○いにしへのはがひのもじ　日本書紀「又高麗上表疏書二于烏羽一字隨レ羽黑、既無二識者一辰爾乃蒸二羽於飯氣一以レ帛印レ羽悉寫二其字一。朝廷悉異レ之。」
○うつぼ　うつろ。

○ことのはに今日かけそむる　戀の心を今日初めて打ち明ける意。
○下露の　葉の緣語でもあり、したにくだけしの緣語でもある。
○したにくだけし云々　今まで心の中で千々に思つた思ひの程を知つてほしい。

夢にてもおもふと見えばおもなきを思ひやむべき思ひともかな

おもふとはいかで知られじ何となく向ふばかりもつゝましき身を

聞戀

ゆくへなくまどふ心のくるしきを聞かじや今はありとばかりも

久聞戀

よそながら聞くに心をなぐさめて過す月日のほどぞはかなき

見増戀

いとゞしくまどふ心を一目みばなぐさむべくも思ひけるかな

通書戀

人ごゝろあやふく見えしかけはしのふみ通はしておちゐぬるかな

返書戀

うちかへしうらみやせまし濱千鳥あとだにとめぬ浪のこゝろに

見手跡戀

何となき人のすさびの手ならひにならひそめても戀ふるころかな

見書増戀

みづぐきの深き心を見てしよりわたらぬ川に身をしづめてき

○おもなきを　面無きを。恥かしいのに。
○向ふばかりも云々　對面するだけでも、恥かしい自分であるものを。

○かけはしの　棧の。「ふみかよはして」と「あやふく」との緣語。
○ふみ通はして　「踏み通はして」と「文通はして」とを掛く。
○おちゐぬるかな　心が落ちついた。「落ち」は棧の緣語。
○うちかへしうらみやせまし　繰返し恨む事だらう。うちかへしは緣語、うらみに千鳥が浦を見る意を掛く。
○濱千鳥あとだにとめぬ　濱千鳥の足跡を浪が消す意を掛く。
○みづぐき　文字即ち書物の意。深きは川の緣語。
○わたらぬ川云々　川を渡れば思ひが成就する意であるから、成否を論ぜず書物に沒頭する意。

披書恨戀

つれなくばさてもありなむ何にかくうきみづ莖のあとを見すらむ

尋戀

沖つ波いかにかづきてしら玉のしづくあたりをそこと知るべき

心あてになほ漕ぎよらむあまを舟さしてをしへぬ浦わなりとも

祈戀

いとはるゝうき身を神もいとふらむ祈りしことのしるしなきかな

かけていのる神のしるしをつれもなき人の心にいつか見るべき

祈久戀

あふことの神のしるしを待つほどにふるの社と身はなりにけり

祈身戀

名にしおはばいざ祈りてむきぶね川戀にしづめる身もうかぶやと

祈難逢戀

さてもなほ同じなげきの杜の露いつまで袖にかけていのらむ

契待戀

うれしきに何か心のさわぐらむたのめおきつるゆふぐれの空

○さてもありなむ　それで事がすむだらう。

○かづきて　潜つて。
○しづく　水に透けて見える。
○そこ　底と其の所とを掛く。
○さして　棹してと暗示しての意とを掛く。

○かけていのる　心に掛けて祈る

○ふるの社　年ふる意と布留社（大和國山邊郡）とを掛く。

○名にしおはば　貴船川（山城國愛宕郡）に木船川を掛けて、木船だから沈む身をも浮ぶせゐたらうといふ意から、其の名に相應しいのならといふ。
○なげきの杜　大隅國始良郡。

○たのめおきつる　相手の來ることを自分にあてにさせた。

馴戀

打ちつけにつれなきものと思ひしはなるゝに解くる心なりけり

疑行末戀

みちのくのおくをかねつゝ契りてもえぞたのまれぬ人の心は

不留戀

こと浦によする心ぞ知られける立ちもとまらぬ浪のけしきに

來不留戀

つれもなき心を見せて行く人にくやしく門をあけてけるかな

忍待戀

いく夜かく寐よとの鐘にそらねしてそらにたのめし人を待つらむ

待空戀

いつはりとおもひはてつるうらみには鳥より後もねられざりけり

臨期變約戀

椿市（つばいち）の契りかひなく歌がきの八重のくみがきたち隔てつゝ

每月過戀

あふことを忌むは限りのあるものを此の月ごろをすぐせるやなぞ

○打ちつけに　突然に。
○みちのくの云々　新古今集雜槇朝「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつくしてよ壺のいしぶみ」第三句までは行末を契りてもの意。えぞはよくぞの意と蝦夷とを掛く。
○こと浦　異浦。他人の意。
○寐よとの鐘　萬葉集卷四「皆人を寐よとの鐘は打つなれど君をし思へば寐ねがてぬかも」
○そらに　徒に。
○鳥より後も　鷄鳴の後も。
○椿市の云々　萬葉集卷十二「椿市の八十のちまたに立ちならし結びし紐を解かまく惜しも」
○歌がき　歌垣。男女集つて歌をうたひ合ふ遊びであるが、こゝは互ひに戀の歌を贈答し合ふ意。
○八重のくみがき云々　八重に竹木を組み合はせた垣の如く、贈答した歌の甲斐なく、二人の間は離れてしまつた意。

逢戀

夢ならで見えししるしにさよごろもかへしし袖をかへしてぞぬる

夢逢戀

たぐひてもあらましものをよひ〳〵の夢のたましひ何かへるらむ

うらとけてかたるとみつるぬば玉の夢のしるしよまさしからなむ

稀逢戀

さよ衣かへすをつねのならひにて夢ならぬをも夢かとぞおもふ

後朝戀

おもかげにながむる月も明けはててはかなくのこる袖のうつり香

さらにまた打ちふす牀を起き出でて面影にさへわかれぬるかな

遇不逢戀

遠ざかる人の心やありし夜の夢をまことの夢になすらむ

いかなればあひ見ぬほどのつれなさに人の心の立ちかへるらむ

名立戀

しばしこそなきになしても過ししかつひにかくれぬうき名なりけり

依涙顯戀

〇夢ならで見えし　事實逢ふ意。
〇さよごろも云々　思ふ人に逢ひたい時は衣を裏返しにして寢る。今は逢つたのだから又裏返して、普通の狀態にして寢る。
〇夢のたましひ　夢の内に出て行く魂。
〇うらさけて　心が打ち解けて。
〇まさしからなむ　事實であつてほしい。

軒ふかきむぐらにかこつ露けさのひるまもしほる袖や見えけむ

夜増戀

よひ〳〵に人を寐よとてつく鐘はわが音をたつるはじめなりけり

被厭戀

いとはるゝうき身をなげく心だにあはれと人の思はましかば

悔戀

人ごゝろあさき川瀬におりたちてかへらぬ水に袖ぬらしつゝ

疎戀

さりともと頼むもはかな日にそへて疎くなりゆく人の心を

久戀

うちはへて戀ふるもあやな逢ふことのにげなき世をば思ひしるまで

遠戀

はかなしやかよふ心をたのみにて千里のをちに人をおきつゝ

隔海路戀

知るらめや行きかふ船のことづてもなみのよる〳〵くだくこゝろを

占戀

○わが音をたつる　人を思ふとて自分が泣く意。

○かへらぬ水　過去の我が戀をいふ。

○さりともと頼む　萬一を僥倖する意。

○うちはへて　引きつゞいて。

○にげなき世　似合はしくない世

○千里のをちに　千里の遠方に。

○なみのよる〳〵くだく　波の寄る寄る砕くと夜々砕く心とを掛く

おもひあまり又たち出でてゆふけとふ占だにあはずなりにけるかな

見家思出戀

過ぎがてに見えつる宿はげにやげにありし一夜のふしどなりけり

恨戀

日にそへて人のこゝろのから衣うらみをのみやたちかさねまし

おほかたのなさけばかりにてしたしらしけるにおもふことうちかすめければ女いとつれなきけしきを見せたるに男いといたううらみてあたがたきのやうにいひおもふと聞きてよめる

年月のなさけのうらはうらみとも知らでや浪の打ちかへしけむ

夏戀

おほかたの夏のならひと人や見るおもひにやせてなやましき身を

六月の照る日にぬるむ川水のあさびも行くか人のこゝろの

冬戀

いたづらに降りそふものと人やみる思ひさへにもつもるみゆきを

夕戀

いたづらに軒にふるまふさゝがにのそれさへもうき夕暮の空

○ゆふけとふ占　夕占問占ふ。夕方街道に出て辻占を問ふこと。

○から衣　辛しと唐衣とを掛く。

○うらみ　「うら」は「たちかさね」と共に唐衣の緣語。

○うちかすめければ　にほはしたれば。

○なさけのうら　情の心に涙の緣語「浦」を掛く。

○おほかたの云々　自分の戀瘦を人は例の夏瘦と見るだらうの意。

○あさびも行くか　あさびは淺ぶ意。川水の淺くなる意に人の心の淺くなる意を掛く。かはかなの意。

○いたづらに云々　古今集卷二十「わが背子が來べき宵なり笹蟹の蜘のふるまひかねてしるしも」

旅戀

故郷にかよふ夢路のそれならで怪しやいかにまどふ心ぞ

はかなさは何かことなる故郷の夢よりほかにむすぶちぎりも

雨中旅戀

けふもまたあまづゝみせばかり枕むすぶ契りや人にしられむ

老人戀

われながらうたてゆゝしき老の身のたのみやいづら人を戀ひつゝ

さのみやは老のならひと人の見むあやしくおつる袖の涙を

幼戀

いはけなきひとへ心におもひしむ袖のみどりは淺からめやは

人傳戀

あやしくも思ふにたがふいらへかな我がことのはをいかに傳へし

戀香

人しれずかけし心もそらだきのほのかに匂ふをすのおひ風

戀杜

人ごゝろうき田の杜に引くしめのながき契りもかひやなからむ

---

○はかなさは云々　旅中の戀ゝ旅中故郷の夢を見ることもはかなさは同一である意。

○あまづゝみせば　雨に降りこめられたならば。

○うたてゆゝしき　餘りに忌々しい。

○さのみやは「やは」は反語で「見む」の下に置いて見る。

○ひとへ心　單純な心。

○袖のみどり云々　幼兒をみどり子といふので、子供心にも思ひ染む一念の深い意。

○いらへ　返事。

○かけし心　「かけ」は小簾の緣語

○そらだき　空薫物。

○おひ風　追風。香などを傳へて來る風。

○うき田の杜　憂きと浮田の杜（山城國久世郡）とを掛く。

○引くしめの　「ながき」の緣語。續拾遺集神祇中臣祐賢「くり返し三笠の杜に引くしめのながき惠みをなほ祈るかな」

寄雲戀

夕風の空にたゞよふうき雲もしづまる峯はありてふものを

寄風戀

玉だれのをすのたれすのかけ初めし心うごかす軒の夕風

寄山戀

月にへてはらはぬ牀の塵やさは心へだつる山となるらむ

いはがねの千重に隔つる山よりもさかしきものはこひぢなりけり

寄谷戀

山びこのほのかにだにも答へぬはいかに隔てし谷のこゝろぞ

寄石戀

平敷の里にありてふ石だにも戀ふる心はえしもしづめじ

寄井戀

むすびつるちぎりに何の心にてはやくも人をわすれ井の水

寄關戀

我ならで越ゆるなのりもきこゆなり人の心のあさくらの關

へだてなき心の關を今さらに何かは人のさしかたむらむ

○玉だれの　「を」の枕詞。萬葉集卷十一「玉だれの小簾の垂簾を行きがちにいはなさずとも君は通はせ」

○月にへて　幾月も。

○はらはぬ牀云々　新千載集練前権僧正雲雅「いたづらに拂はぬ牀の塵よりややがてうらみもつもり果つらむ」

○平敷の里　肥前國西彼杵郡。神功皇后の鎭懷石はこゝの物であるともいひ、其の他赤石白石の美石が出る。

○むすびつる　結ぶと掬ぶとを掛く。

○わすれ井の水　千載集羇旅齋宮甲斐「別れ行く都の方の戀しきにいざむすび見む忘れ井の水」わすれゐの水は甲斐國中巨摩郡にあるか。

○我ならで越ゆる云々　新古今集雜天智天皇「朝倉や木の丸殿に我が居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」上句の意は自分以外に相手に戀人のある意。

○人の心のあさくら　相手の心が自分に淺い意とあさくらの關（筑前國朝倉郡）とを掛く。

さもこそは人めの關のかたからめ夢路をさへに隔つべしやは

寄水戀

うかびたる心をいかにたのむべき數かく水にあとは見ゆとも

寄湊戀

高しまのあとのみなとに寄るなみの人こそしらねくだけてぞ思ふ

寄船戀

わがこひはゆもとりあへぬわれ船の涙のみをに沈みはつらむ

寄木戀

なにをかはうきふしにしてそばの木のそは〳〵しかる心みすらむ

谷ふかきくち木の身とてさく花のとぶさにたぐふ心やはなき

寄杣木戀

杣人のきりさく槇のいたづらにうすき心をたのみけるかな

寄槇戀

杣やまの槇ならなくにいかなれば思ふつまでを人のさくらむ

寄草戀

あなくるし尾花がもとの草ならば知らるゝをりもあらましものを

○かたからめ　難からめごゝもの意

○うかびたる心　浮氣心をいふ。水の緣語。

○數かく水云々　古今集戀讀人不知「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」

○高しまの云々　萬葉集卷九「あさもひて漕ぎ行く船は高島のあごの港に泊てにけむかも」

○高しまのあとのみなとは　近江國高島郡。

○わがこひは云々　拾遺集卷九源順「白波の涙路にいたくゆき通ひゆも取りあへずなりにける船のわれをし君知らばあはれ未だにしづめじと云々。」ゆは船中の溜り水。

○われ船　破れ船。

○みを　水脈。

○うきふし　憂いこと。「ふし」は木の緣語。

○そばの木　かなめもちの異名。

○とぶさ　梢。

○うすき心　槇を切り裂けば薄くなるからいふ。

○つまで　杣人が木作して、角立てる材。妻の意を掛く。

○さくらむ　萬葉集卷一「田上山のまきさく檜のつまで。」などとあつて、木を裂くと二人の間柄を隔てしめる意とを掛く。

いふことを聞かぬ耳なの草ならばおもふばかりも引きつみてまし

寄藻戀

川なみになびくいつもの打ちなびきいつかもさねむ親さくるつま

寄瓜戀

山がつのまがきのほぞちいつのまに思ひさけたる人のこゝろぞ

寄鳥戀

あらたかもなるれば手にぞかへりつるあやしくうとき人の心か

いとはるゝうき身よ今は水鳥のくがに惑へる思ひのみして

寄鳥戀

おもひきや人の心のはなち鳥日をへてうとくなりゆかむとは

寄貝戀

見るめなきわが身をうらの夕浪によりくるかひの碎けてぞおもふ

寄蟲戀

夜半にとぶ火蟲ばかりに身をなしてねやの板間に入るよしもがな

いさめおくとこよの蟲をまつりてもわがおもふ人にあひ見てしがな

寄蛛戀

○耳なの草　耳な草。石竹科の植物。枕草紙にも「摘めど猶耳な草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり」とある。
○いつも　繁く生えた水藻。萬葉集卷四「川のべのいつもの花のいつもいつも來ませあが背子時じけめやも」
○いつかもさねむ　何時共寢することが出來ようぞ。
○親さくるつま　親が遠ざける我が妻。
○ほぞち　よく熟した瓜。
○あらたか　未だ人に馴れない鷹。
○くが　岡。
○はなち鳥　放鳥。
○見るめ　見る目と海松とを掛く
○かひの　貝の如く。
○とこよの蟲　常世の國にあつて不思議の靈あるといふ蟲。

吹く風にみだるゝ蛛のいとすぢもなごりなくやは絶えはてぬめる

寄獣戀

かきつめてふするゐのかるも臥しがてにながき夜すがら人をこひつゝ

起きゐつゝ戀ふるよごろは覺めやらぬみちの浮寢も羨まれけり

寄庭戀

あうらしてわが踏みならすかた庭の逢ふことかたき此のゆふべかも

寄火戀

いにしへにありし鼠のかはぎぬもわがおもひにはあへずもえまし

寄夢戀

ぬばたまの夢にも見えずなるならむ現につらき心とならば

寄心戀

ふたつなき心にいもがのりしよりまたこと事もおもはざりけり

寄衣戀

くれなゐのひたうら衣ひたすらに思ひふるして今は著じとや

寄布戀

しづの女がさらせる布のうつたへにいとひもはてぬ心なになり

---

○あうらして　足占して。或目標に向つて、歩數を以て吉凶を占ふ一種のうらなひ。
○かた庭　堅庭。
○鼠のかはぎぬ　竹取物語にも「火鼠の裘」とある。火浣布のこと。
○わがおもひ　「ひ」に「火」を掛く
○あへず　敢へず（堪へられずの意）の誤りであらう。
○ふたつなき心にいもがのりしより　我が念頭一日とても妹が離れないから。
○ひたうら衣　表裏同色の衣。萬葉集卷十二「赤衣のひたうら衣長くほりわが思ふ君が見えぬころかも」
○思ひふるして　鼻につく意。
○著じとや　「來じ」を掛く。
○うつたへに　只管に。

○心をそめいとの　心を染めと染絲のとを掛く。
○思ひたゆべき云々　ふしに五倍子と臥しとを掛け、ふすに臥すとを掛けたのであらう。
○したひにこめて　下樋に籠めて　萬葉集卷七「琴取ればなげき先だつけだしくも琴の下樋に妻やこもれる」
○よごもれる　年の若い意。「よ」に竹の緣語「節」を掛く。
○音をたてつべき　大聲をあげて泣きさうなの意。
○藤の弓　藤卷弓。
○そらにのみ人はたのめて　徒らにあの人が自分をあてにさせて。

寄絲戀

今はまた誰に心をそめいとの思ひたゆべきふしをふすらむ

寄琴戀

琴のをにふるゝと見ゆる妹が手はわが心をば引くにぞありける
思ふことしたひにこめてひく琴をうはの空にや人はきくらむ

寄笛戀

笛たけのまだよごもれる人ゆゑに音をたてつべき戀もするかな

寄弓戀

花にさくむかしの藤の弓もあらば妹がこゝろを引きもみましを
人こふる身はやせにけり梓弓引きならすべき手(た)ぢからもなく

寄繪戀

おもかげをおもひよそへてうつし繪にうつる心ぞかつはあやなき

寄車戀

さしもなど心ひくらむ小車の行きめぐりてもあはぬ人ゆゑ

寄鐘戀

そらにのみ人はたのめていつまでかひとり寐よとの鐘をきくらむ

寄爐戀

いつまでかおもひも消たでよひ〳〵にひとりふせごの下にこがるゝ

## 雜　歌

歸雲藏樹

空とほくかへると見えし白雲はたかねの松のこなたなりけり

關路雲

夕こゆる雲におくれてあしがらの關の山路にかりねをやせむ

海上雲

つくしの海たゆたふ浪にたつ雲の根かゝるかたや三つのから國

浦島が箱より出でし白雲や今もとこよの海にたなびく

海上雲遠

入日影かくるゝ海のはて見えて豐はた雲をあらふ白浪

里煙

津の國のこやあまのすむ里ならむあしのしげみに煙いさよふ

暮村煙

○おもひも消たで　思ひも消えで「ひ」に「火」を掛く。
○ふせご　伏籠。臥す意を掛く。
○こがるゝ　香のくすぶる意に心の焦れる意を掛く。

○たゆたふ浪に云々　續古今集雜入道前太政大臣「海原やたゆたふ波のはてもなしいづくなるらむ雲の遠方」
○三つのから國　三韓。

○入日影云々　萬葉集卷一「渡つ海の豐旗雲に入日さし今宵の月夜あきらけくこそ」新古今集春後德大寺左大臣「なごの海の霞の間より眺むれば入日を洗ふ沖つ白浪」
○こやあま　攝津國河邊郡昆陽の海士。

ともし火のほのめき初むる竹むらに籠るもうすき夕けぶりかな

雨

つれ〳〵のながめにいとゞふるごとをしのぶにあまる軒の玉みづ

深山雨

あしがらのみねのうき雲うき立ちて神のみさかにはやさめぞふる

草庵雨

しづかなるかやがのきばの雨の音は晝さへ物にまぎれざりけり

山

あらそひし心もなぎてみつ山のたてる姿ぞとはにしづけき

名所山

天そゝる高田の歴木（くぬぎ）たふれてぞ杵島の山は朝日さやけき

不盡山

久方のあまつみそらに降る雪のいくよつもれる高嶺なるらむ

ちとせふる雪のしたにや消えぬらむ空にくゆりしふじの煙は

富士のすそ野にすむ人の歌とひければ

とこなつの雪にむかひて住む人のこゝろやいかにさやけかるらむ

---

○ながめ　眺めと長雨とを掛く。
○ふるごと　古事と降ることとを掛く。
○しのぶ　忍草と偲ぶとを掛く。
○神のみさか　相模國足柄の坂。
○はやさめ　暴雨。
○みつ山　三山。畝火山、香久山耳無山。萬葉集卷一に在る「香久山は畝火を愛しと耳梨と相爭ひき云々。」をいふ。
○高田の歴木云々　景行紀「御木國有僵木長九百七十丈焉、有一老夫曰、是歴木也、嘗未僵之前、當朝日、隱杵島山。」杵島山は肥前國杵島郡。
○久方の云々　拾遺集冬兼盛「見渡せば松の葉白き吉野山幾世つもれる雪にかあるらむ」
○とこなつの雪　永久不變の雪。

杣

山みづのたつるみつぎの杣なれやひけどもよゝに盡きぬみや木は

淵水

笹分くる木のしたみちは絶えぬれど猶奥ふかき谷水の音

山路橋

のがれ來てさらに出でじの山路には朽ちぬともよし谷の柴橋

山影寫水

しづかなる入江の水にをどる魚のあとにみだるゝ底の山のは

池

いにしへを思ひうかべてしのぶかな海をなしけむはにやすの池

瀧

天の河いかにながれて白雲の中なる嶺の瀧と落つらむ

雲ゐより松の梢に落ちきえてさらにながるゝ山川のみづ

八月ばかり光輔とともにしら絲の瀧見に行きて

いはねより落ちくる瀧のいとすゝき招くたもとに露ぞこぼるゝ

夜深聞水聲

---

○みや木　宮殿造營の材木。萬葉集卷十一「宮木ひく和泉の杣にたつ民のやむ時もなく戀ひわたるかも」

○のがれて來て云々　新古今集雜西行法師「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」

○柴橋　柴で作れる橋。

○思ひうかべて　「うかべて」は池の緣語。

○はにやすの池　埴安の池。大和國磯城郡。

○いとすゝき　薄の變種。白絲の瀧水の形容。

よひの間はあらしやよそに誘ひけむねざめにひゞく瀧つ瀬の音

海路

沖つ波なぎわたりぬる海の上は漕ぎ行く船のあとも見えけり

すみなはをはへたるごとく行きかよふ船路は神のちはひなりけり

いづくよりもろこし船はかよふらむ雲と浪とのひとつうなばら

磯巖

しらなみの高きいはねも蜑人の磯づたひするみちはありけり

水島にわたりて

すめろぎのみもひくみけむ其の代より名にながれたる水島ぞこれ

都

盛りなる都をみてもなげくかな心づくしにすみはてむ身を

鄰

なれてだに猶かしましきひゞきかな鄰まちかき賤がからうす

窓

海山の千里をいるゝ窓の戸はほどなき物とおもはざりけり

名所市

○すみなは　墨繩。大工が木材に線を引く道具。
○ちはひ　幸を與へること。
○水島　肥前國菊池郡。景行紀「十八年夏四月壬戌朔壬申、自二海路一泊二於葦北小島一而進食、時召二山部阿弭古之祖小左一、令レ進二冷水一適二此時一島中無レ水、不レ知二所爲一則仰之、祈二于天神地祇一、忽寒泉從二崖傍一湧出、乃酌以獻焉、故號二其島一曰二水島一也云々。」
○みもひ　水。
○名にながれたる　名高い。
○心づくしに　あれやこれやと心を惱ますことが多く。
○からうす　唐臼。ふみ臼。
○ほどなき物　狹い物。

○味酒の　餌香の枕詞。
○餌香の市　河內國南河內郡。
○たがならむ　誰の所有の松であらう。
○やさし　恥かし。

味酒の餌香の市路におきつるやおもひにかへし寶なるらむ

故鄕

よしさらば野となりはてよ見るごとにむかし戀しき里の垣根を

萬代をむかしちぎりしたがならむ野となる里の松の一もと

外にうつりすみてのち島さきの庵をおもひやりて

狐ふすかげとや今はなりぬらむ植ゑしむかしの庭のをすゝき

閑居

しづけさを心にしめて問ふ人は待たずしもあらぬよもぎふの宿

閑居友

人とはぬすまひしてこそ花鳥にむつぶ心はふかくなりけれ

閑中燈

思ひうることだになくてつくづくとむかふもやさし窓のともし火

深山幽居

かくれすむみ山の林我ならで又つま木こる柴人もなし

清風隔世塵

吹く風の清き心を身にしめてうき世の塵をはらひはてつる

武藤陳亮が柳河にかへるに

あまたたび君がわかれになれぬれどをしむ心はかはらざりけり

人々にうちつれて松前へゆくに

くやしくも老いにけるかなこのたびの友のかずには入らまほしきに

五月ばかり難波のかたへかへる人に

ゆく末にたみのの島はありとても雨ふるころに船出すべしや

いぶせさはいづこもおなじ五月雨をなほこの里にあまづゝみせよ

志方之倫が十月ばかり江戸に行くを送る樺島にて浪風のうきめにあひぬることをおもひて

うきことをともに歎きてうれしきにおくるゝ身をば思ひやらなむ

高田廣端過ぎにし春は難波にゆき此の冬は江戸にゆきてあけむ年歸らむといふに

いかにせむ待ちみむほども年かへてありしにまさる遠きわかれを

渡邊知澄がしはすばかり難波にかへるにこむ春はよし野山の花見に人々と共にものせむなどちぎりおくこともあれば

いそぎてもかへる君かな打ちつれて立たむ霞の春も近きに

---

○このたびの　度と旅とを掛く。

○たみのの島　現今大阪市中にある。蓑の意を含む。

○おくるゝ身　取殘された自分。

○ありしにまさる遠きわかれ　江戸は難波よりも遠いのでいふ。

○立たむ　打ちつれて出發する意と霞が立つ意とを兼ねる。

旅行

たれか知るこよひも峯の白雲に宿とひわぶるこゝろほそさを

うき旅の心ぼそさを故郷におもふやちゞの一つなるらむ

旅行友

月花にむつびしも猶うとかりきはなれぬ旅の友をおもへば

球麻川を船よりくだりて

ましらなく聲もよどまぬ山川を一日にくだる船路いくさと

早崎の瀬門にて

みつしほのせとのうづまき猶はやしおひての帆風ゆるみあらすな

野外旅宿

たれかまた末野の草をむすぶらむ一つかりほに寐なましものを

原上行人

ほのみゆる草の葉末のをがさ原おくれし人のしるべなるらむ

羇中雲

關の戸はあけぬときけど箱根山猶夜をこむる嶺の白雲

羇中晩嵐

○ちゞのひとつ　千々の思ひの中の一つ。

○球麻川　球磨川。

○いくさと　何里であらうか。

○かりほ　假庵。

○をがさ原　甲斐國北巨摩郡にあるか。

○關の戸は云々　枕草紙「夜をこめて鳥のそら音ははかるともよにあふ坂の關はゆるさじ」

○あけぬ　開いた。

○夜をこむる　夜深い。

○庵さすべき　庵を鎖すべき。

○やすいする　安眠する。

○ふなすゑ　船据。舟の碇泊する所。

はてもなく吹きのみおくるあらしかな庵さすべき野路のゆふべを

羇中露

故郷を戀ふる涙もおちそひぬ草ひきむすぶ露の枕に

羇中河

あるはそひあるははなれて大木曾の山川のぼりいくか來ぬらむ

旅泊

いかり綱おろすひゞきの久しきを枕にきくも心ぼそしや

旅泊重夜

船人のよひ／＼ごとにやすいする心さへうき浦浪の音

旅泊浪

なぎにける風のけしきをふくる夜の枕の浪の音に知るかな

旅泊雨

浪の音のまくらに絶えしかひもなく夜深き雨ぞ袖にもりくる

遣唐使餞

すみの江の神のふなすゑ末とほき浪路やすけく行きかよひなむ

山家

世のなかの手ぶり忘れて山がつにならひ行く身ぞ安けかりける

山里の人も知らじな山里にのがれすむ身のこゝろやすさは

山風にまかせはてたる柴の戸は人のあけしも知られざりけり

山家嵐

なれぬれど渡りもはてず奥山のあらしの牀の夢のうきはし

山家路

山里はとなりありきの路だにもいはね松がねふみわたりつゝ

山家鳥

今日もまたかけひしたゝる眞清水にはね打ちそゝぎあそぶむら鳥

山家人稀

たづねきてまたすむ人もなかりけり谷より奥の水のみなかみ

いは水の清きながれをたづねきておなじ山べにすむ人もがな

山家夢

打ちわたし猶山ふかくかよふとも都にたえよ夢のうきはし

今井某がなり所流水山家をとひて

しづかなるいはねの水のひゞきかなこれや心のすみかなるらむ

○手ぶり　風習。

○渡りもはてず　夢の浮橋を渡れ切れないことは、夢を十分結ばれない意。

○かけひしたゝる　筧から滴る。

○都にたえよ云々　都の夢を見るなかれの意。

○なり所　別莊。

山館樹多

結ひこむるまがきのうちの木立とも知らぬましらや枝つたらむ

述懐

人言のさがにくき世はなか〳〵に隠れたる名をうれしとぞおもふ

のどかなる世にすめる身を忘れては数ならずとて又せめぎつる

弓のつかつるぎのたがみそれならぬ筆とりならし身は老いにけり

山かげも何かもとめむ世間(よのなか)は心からこそすみうかりけれ

名所述懐

もしほやく蜑のとねらにまじりても住まゝくほしき松が浦島

心ならぬ事どもありけるころ

のがれては人もあはれといはぬ身にうきことといかで離れざるらむ

心ならぬことありて家にこもりゐけるころ夕つかた鶴のなきければ

いづかたの雲ゐをさしてかへるらむわれをともなへ天の鶴むら

伊勢物語をよみときけるころ

われもいざあづまのかたに出でたたむ今は筑紫にすみわびにけり

幽徑苔

---

○枝つたらむ　「枝傳ふらむ」の誤りであらう。

○さがにくき世　口わるい世。

○つるぎのたがみ　劍の柄。

○山かげも何かもとめむ　山中に隠遁する必要はない。

○心から　自分の心持次第で。

○蜑のとねら　神楽歌にも見える語で、とねは刀禰。こゝは蜑の庶民等の意。

○松が浦島　陸前國宮城郡。

○すみわびにけり　伊勢物語の「京にありわびて云々。」等の文句を取つた。

露ふかき苔のみどりをふみのぼる谷のしたみちあふ人もなし

竹

家鳩の友よぶ聲もしづかなるゆふべの庭の竹のむらだち

竹久緑

草に木にたぐひやはあるよゝを經てもとさへ葉さへあせぬみどりは

遠村竹

山とほく一むらかこふくれ竹のよをはなれても住めるいほかな

窗前栽竹

今よりは宿もうつさでながきよの友とむつばむ窗のうゑ竹

暮山松

吹きすさぶ風の音にぞのこりける暮るゝ外山の松のおもかげ

谷松年久

生ひいでし谷ふところの内ながら松はちとせのよはひ經ぬらむ

松風

松にふく風のひゞきを山ふかくかよふ心にすましてぞきく

薄暮松風

○草に木に云々　萬葉集卷六「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜降れどいやとこはの木」

○友とむつばむ　王子猷が竹を愛して、此君と稱へたといふ故事を下心に置いたのであらう。

○山ふかくかよふ心　山中の閑寂の心を遠く味ふ意。

暮れにけりをのへの松のゆふづく日いさよふ風の音をのこして

浦松風

すみの江はしほひに浦やなりぬらむ浪にわかるゝ松風の聲

澗槇

谷水のながれの外に道もなし松よりおくの槇のむらだち

桑

妹がつむにひ桑の葉もあらそへば國のみだれとなるてふものを

水樹多佳趣

行く川のこなたかなたのふしやなぎ水をくゞりて立ちさかえつゝ

川鳥

川よどの藻にふす魚や見えつらむあたり離れずみさご飛びかふ

森林鳥宿

ましばたく端山のけぶりほのくれてねぐら木ぶかき村鳥の聲

鶴宿松樹

すだちけむ松の梢をさながらにちよふる里と通ふともづる

小松原に鶴のゐるかた

○浪にわかるゝ松風の聲　汐干の潟に浪の音が遠ざかると同時に松風の聲がはつきりして來る。

○にひ桑　新桑。此の歌の故事未詳。

○ふしやなぎ　伏した柳。

○みさご　鶚。猛禽類の一種。

○ちよふる里　千代を經る故鄕の意。

○小松原云々　萬葉集卷十五「わが命をながさの島の小松原いくよを經てか神さびわたる」

小松原おりゐる鶴のいくよへてたかき梢の宿をしむらむ

浦鶴

貝ひろふあまかと見しは浦とほき潮干にたづのあさるなりけり

鶴立洲

ゆふなぎはすさきにたてるあしたづの色より外による浪もなし

鶏

かひなれて物がたりせしいにしへの長なき鳥を今もえてしが

鄰里鶏

しづが住む里をとなりのとりの音もねざめに遠き山かげの庵

鷹

はしたかのたけき心をくみしりて酒のきみこそなつけそめけれ

鷺

雨そゝぐ梢をぐらき山もとに寝にゆく鷺のいろぞさやけき

雀

しづが家は人なきほどぞ知られける門田の雀あさり入りつゝ

虎

---

○かひなれて物がたり云々　支那にある故事と思はれるが未詳。
○えてしが　得たいものだ。

○くみしりて　酒の縁語。

○あさり入りつゝ　餌を拾ひに入る。

うつし繪もたけきすがたをいかにして虎てふ神にあたむくいけむ

牛

澄める夜の月にもあへぐ心から夏をうしてふ名はおひにけむ

犬の繪に

玉をえしいさをもしかじ身をすてゝぬしをまもりし其の心には

兎

がまの花敷きちらしつるみをしへに再びきけりおのが毛衣

狸

かり人のふすぶる手にやえらるらむあなけぶしとていづる狸は

狩人も入らぬみ山にやすらけく世をふる狸つゞみうつらむ

月夜に狸はらつゞみうつ所

たぬきすらおもふ心はありあけのつき〲しくも打つゞみかな

嶺林猿叫

峯たかき松のひゞきにたぐふなりあらしにむせぶ山猿の聲

龜

思はなむうき世をよそにすむ龜のひぢに尾を引く心やすさを

---

○夏をうしてふ名　呉牛喘レ月の故事に依る。

○玉をえしいさを　八犬傳をいふ

○がまの花云々　古事記の稲羽素菟の記事に依る。

○おも心はありあけ　「あり」は上下の語に續く。

○ありあけのつき〲しくも　有明の月とつき〲し(につかはし)さを掛く。

○たぐふなり　伴うて聞える。

○ひぢ　泥。

そこひなきいはねの水にすみなれてあそぶ龜さへ綠なりけり

浦島がつりけむ龜を今もえて常世の國に遊びてしがな

文だにも背におふ龜のあやしきによもぎが島をいかでうかぶる

菜の庵の池なる龜山にのぼりて松のもとに子うみたるを人々いはひて歌よみけるに

ときはなるかげをしめたる宿なればうべよろづよの數まさりけり

太刀

つゞらもて卷きけむたちをいつよりか黃金しろがねよそひなすらむ

劍

事しあらばふみで打ちおき老人もつるぎのたがみ取りしばりてむ

和琴

いにしへを引き傳へたるつま琴のたかきしらべは神ぞしるらむ

夜琴聲

みな人のしづまる夜半にしらぶるはねたしやたれをまつ風の聲

諫鼓の圖に

のどかなる鶴の聲のみ聞ゆなりいさめのつゞみ苔にうもれて

○よもぎが島　蓬萊島。

○つゞら　葛。

○ふみで　筆。

○つま琴　琴。

○たれをまつ風の聲　誰を待つ松風の聲。

○のどかなる云々　和漢朗詠集「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不驚。」

曉鐘

老いにけり曉ごとのかねの音をながきねざめに待ちてきくまで

鐘聲何方

吹きまよふあらしにたぐふかねの音のしるべかひなき野ぢの夕暮

ふかき夜の枕におつる鐘の音をあらしの空にたどりてぞきく

書

むねにみつ數もなにせむ一巻のなほき心したづね知りせば

おのづからたゆむ心をいさめずばふみの長路はわけもつくさじ

永章が東路日記二巻をよみてかへすとて

海山をうつすことばの二巻はともにゆき見しこゝちこそすれ

大受法師が乞ふまゝに歌かきおくりければ「からごろも袂ゆたかにたちぬとも此のうれしさはつゝみあへじを」とあるに

なか／＼にひろふ袂やけがすべき色もなぎさによするもくづは

から人楊覺三がこふまゝにあふぎに歌あまたかきてつかはすとて

かきながす心ことなる水ぐきもふかさ淺さはなほやわくらむ

櫛

○むねにみつ數　汗牛充棟。

○わけもつくさじ　踏み分けて行き盡されない。

○からごろも袂云々　古今集雜讀人不知「うれしきを何に包まむ唐衣袂ゆたかにたてといはましを」

○色もなぎさ　色もない意に渚を掛く。

○かきながす心ことなる水ぐき　漢詩に對して、和歌を指す。「ながす」は、水の緣語。「ふかさあさ」も水の緣語。

身をすてしおもひ故にはさしおけるつげの小櫛も生ひ出でにけり

玉

あかしの海神の乞はしし白玉はあまのをさしぞかづき出でぬる
さゝげ出でし牛のかしらの白玉やしひたの池の底だからなる
白たまをふくめる石はあらめどもいだきつゝなく人やなからむ

棊

斧の柄の朽つるも何かおどろかむこの世の事を打ちわすれては

杯

月花をうかべてめぐる杯はたへぬ醉ひにもなほさゝげつゝ

夜燈

更けぬらし飛びかふ蟲の羽風にも消えぬばかりの窗のともし火

梁

秋風に鮎落ち來らしよしの川やなせにさわぐあだの里人

河船

晝見れどあかぬ川路を淀船の夜ぶかくのみも引きのぼるかな

淀川をくだりて

○あまのをさし　日本書紀「唯有二一海人一曰二男狹磯一是阿波國長邑之海人也勝二於海人一好探レ深……男狹磯抱二大蝮一而泛出之、…則割レ蝮實眞珠有二腹中一其大如二桃子一云云。」
○かづき出でぬる　もぐつて拾ひ上げた。
○さゝげ出し云々　故事未詳。
○白たまをふくめる云々　韓非子にある、楚人卞和が璧を抱いて荊山の下に哭する故事。
○斧の柄の云々　晉の王質の故事
○あたの里　阿陁の里。大和國宇智郡。
○晝見れど云々　萬葉集卷三「晝見れど飽かぬ田子の浦大君のみことかしこみ夜見つるかも」

引きのぼるつな手くるしき川船の下るはやすき世にこそありけれ

岸頭待船

おくれたる友もきしねの松かげに待つ間たのしきわたし船かな

漁舟

浦ちかき篠屋の軒に月おちて蘆間にかへるあまのつり船

島原の海をわたりけるとき

ゆふなぎの鏡に似たる海のおもに塵るにけりと見ゆるつりぶね

孤舟夢

漕ぎすててねぶる浦わのゆふしほに蘆の一葉の夢ぞながるゝ

舟中聞鐘

里見ゆる磯山さして漕ぐ船をむかへがほなる鐘の音かな

たるみのやにあそびて

ゆふなぎの浦おもしろく見ゆるかなあらそひ出づる玉藻かり船

船うつり人かよはずば繪にかける海山とのみおもひはてまし

樂志園にて

むらさめのはるゝ浦わの朝風を片帆にうけていづるつり船

○つな手云々　新勅撰集羇旅鎌倉右大臣「世の中は常にもがもな渚漕ぐあまの小船の綱手かなしも」くるしきに苦しきと綱手を繰る意とを掛く。
○きしね　岸根。岸。

○蘆の一葉の夢　孤舟の夢。

船眺望

漕ぐ船のあしときほどぞ知られぬる遠き山さへうつるけしきに

遊女

よるかたのなからましやは浪まくらうきし契りの名にたてる身も

はるかなるもろこし船のゆきかひやいかにうきたる契りなるらむ

小督局

おもほえず聞きしられぬる琴のねのすみしもつらき夜半の月かげ

王昭君

はかなくもたのみけるかなます鏡うつしかへぬる人のこゝろを

楊貴妃

とひしるもはかなのわざや幻のかよふもかたき魂（たま）のありかを

福祿壽

あらはれて人もみなみの星なれば三つのさちをもさちはひぬべし

鬼の念佛の繪に

すがたのみ佛のみちにいる人の心を見するこゝろとぞ見る

から人沉萍香おのが像をかかせて詩歌をこひけるに其のさまを

---

○あしときほど　船足の速いこと

○よるかた　頼る人。「よる」は浪の縁語。

○うきし契りの云々　浮かれ女の身の上をいふ。

○ます鏡　「うつし」の縁語。

○うつしかへぬる　鏡にうつす意と變心する意とを掛く。

○とひしるも云々　玄宗の使者が東海の蓬萊山で、楊貴妃の魂に會ふ故事。

○人もみなみの星　宋の嘉祐中の道士天南星の化身であるといふ説による。

○三つのさち　福と祿と壽との三德。

○さちはひぬべし　幸福を與へるであらう。

○こゝろとぞ見る　意味と思はれる。

松風の清きいはねをすみかにて心の塵やはらひつくせる

素當のもとより楠のやのあるじ身まかりてのちかのやどりに立ちよりて見るにあらぬさまになりにければ「山陰のひとついほりはあれにけりのこる草木よしる人にせよ」とよみたりといひおこせたるに思ひ出づれば平江惟仲といふ人は木原山のふもとにすみて草木をおほすを心なぐさとしたりしなりいまははたとせばかりのむかしにやかしこにやどりて夜もすがら物がたりせし事などをおもへばすゞろに涙もおつるにかへしがてら素當に

よしさらば草木もとはじ語らひしむかしの宿をおもかげにして

おば君のうせたまひしのち朝とくみ墓にまうでて

はらひあへずおつる涙の露とおく苔のしたこそ戀しかりけれ

一柳翁一周忌に素當がもとに江戸へいひつかはしける

うちむれてあととふ人のかずにさへもるゝ歎きもなべてならぬを

月日さへ隔てもゆくか白雲のよそになげきし君がわかれを

石崎利嘉がひとり子をうしなひてかなしみの歌よみて見せけるに

おもふらむ心のほどをおもひつゝ濡らすばかりにぬらす袖かな

○あらぬさま　かはり果てた有様
○心なぐさ　心慰め。
○あととふ　追善する。
○白雲の　遠方の意。
○おもふらむ心　相手の悲しむ心
○濡らすばかりに　相手が袖を濡らす程度にまで。

光輔がうまごをうしなひてむすめのこゝろのうちをおもひなげくよしいへるに

なげくらむ親の心をおもふらむ親の心ぞおもひやらるゝ

渡邊知澄がうせにし子の一めぐりのわざしけるにことしまた子うませたれば

くだけしはなほやこひしきしら玉のまさる光を手にさゝげても

茶人宗德が身まかりしころ妻のもとに

のぼりにし煙をさこそしたふらめ心づくしの旅のそらにて

おなじころある人の「くむ水のあわときえにし人ならでたれ聞きわけむやどの松風」とよめるを聞きて

たきもののかをりにつけてしたふらむ煙となりし人のゆくへを

白川のやしろにまうでて

はるかなる山路分け來てけふぞ見るわがしら川の水のみなかみ

藤崎宮

御使のたてつる鞭のねざしより世々にさかゆる藤さきの宮

祝言

○親の心　上の親の心は娘親の心下のは光輔の心。

○くだけしは云々　土佐日記「忘貝拾ひしもせじ白玉を戀ふるをだにもかたみと思はむ」

○くだけしは　碎けた白玉卽ち亡兒。

○たれ聞きわけむ云々　新古今集哀傷俊成「稀に來る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に聞くらむ」

○うら安の國ぶり　安泰なる國の風俗。
○みぎり　砌。
○いく十かへり　松花は千年に一度咲くといふので、祝言に用ふ。
○名におふ園　有芳園。
○あえぬべらなる　あやかるべきである。
○うつそみの　世の枕詞。
○長人　長命の人。
○いくぐすり　不死の藥。

うら安の國ぶりうたふ民の聲四方ににぎはふ君が御代かな

石見國濱田なる谷口永廣が四十賀に

老といふ數にこそいれますらをのたけき心はいやさかりにて

長田鶴夫が母の六十賀に寄松祝を

うつし植うるみぎりの松にさく花のいく十かへりを君にみるらむ

有芳園のあるじの六十賀に菊花盛久といふことを

うつし植ゑて名におふ園の菊の花知らずにほひのいく千とせとも

難波人の六十賀に此のごろ川口なるつくり山のなれるをおもひて

なにはの海あらたにつくる島山のいやたかからむ君がよはひか

筑後國なるちとせ川のほとりにすめる富安守富が母の八十八にて祝ひごとしけるに

すみゆかむ人のたもとやはやくより水もちとせの名にながれけむ

某法師の八十八賀に、寄竹祝

むなしきを心にしてぞくれ竹の長きよはひはあえぬべらなる

岡崎某が祖母の百歳の齢をほぎけるむしろにて

うつそみの世の長人とむかひゐて今のむ酒やいくぐすりなる

○くだつゝみ　管鼓。戰爭の意。
○絲竹　管絃。音樂。
○つくば山云々　古今集序「廣き御惠の蔭筑波やまの麓よりもしげくおはしまして云々。」同卷二十「筑波山このもかのもに陰はあれど君が御陰にます陰はなし」
○みまくさ　御馬草。秣。
○とねり　舍人。馬の世話をする者。
○あだ名はたつめり　たなばたつめを含む。
○知る〳〵まどふ　後撰集戀伊勢「夏蟲の知る〳〵戀ふおもひをばこりぬ悲しと誰か見ざらむ」
○なになり　何物であらうか、困つたものだ。
○たゞひきに引く　ひたすら引く
○手なはたつめる　たなばたつめを含む。手なはは手繩。
○せどう歌　旋頭歌。
○みちゆきぶりに　道ついでに。

---

くだつゝみ聲をさまりて絲竹のしらべぞ四方にとゝのほりける

君恩如雨露

つくば山しげきめぐみの雨露にうるはぬかげはあらじとぞ思ふ

物名にとりかぶとといふを

みまくさをとりかふとねり心せよけふ引きいれし牧のあら駒

たなばたつめを

戀すればやがてあだ名はたつめりと知る〳〵まどふ心なになり

あらそひて門田のなるこたゞひきに引くわらはべぞ手なはたつめる

せどう歌に、新樹を

あし引の山の木の葉はしげりあひにけりほとゝぎすたづねていらむみちもなきまで

なでしこを

里とほきあらのの末のなでしこの花むかしたれみちゆきぶりにたねをまきけむ

小鷹狩

○もゝしきの　大宮の枕詞。
○大宮人し　「し」は强め詞。
○とがり　鳥狩。

秋はぎの花野の露にたもとにほはしもゝしきの大宮人しとがりすらしも

の乞へるまゝに、板にゑらしめつるなり。集中に國をしるさぬ地名のこれかれ出でたるは、大人の故郷の肥後國なる、又今の旅居の長崎の近きわたりのなり。かくて長歌集文集も書きつめられたるを、つぎ〳〵板にゑらすべく、はた此の集の後編をもつぎてものすべきにこそ。天保十年正月二十八日筑紫のみちのしりみつまの郡なる、大石大神につかへまつる船曳大滋長崎のたびやどりにしるす。

○筑紫のみちのしり云々　筑後國三瀦郡。
○たびやどり　旅宿。

# 橿園長歌集序

吾が橿園大人としごろものせられたる歌の集すべてはいと多かりしを、いにし文政の十まり一とせの秋長崎よりしばし故郷にかへらるゝ時、何くれの書とともに身にしたがへて船より海路をめぐられけるに、はからずも八月九日の夜のおほかぜにあひて、樺島のうみにて其の船くつがへり、あひのれる人々あまた溺れ死にけるに、大人はからうじて身ひとつばかりは浪間をくゞりて命いきられし時、調度をはじめて彼の集をも一巻ものこらず浪の藻屑となされにけり。かくて故郷にかへりふたゝび長崎にものせられて年月ふるままに、つぎ〳〵よみ出でつくり出でもし又かのもくづとなれりしどもは、はやく人々に書きておくられたるがのこれる、あるはをしへ子どものおのがじし書きつたへ置きたるなど、こゝかしこより取りつどへて今はまた巻のかず多くなりぬるを、近きころは鄙も都もかぐつちの神のみあらびおほかるを、

○かぐつちの神のみあらび　軻遇突智神の御荒び。此の神は伊弉冊

〇すり卷　版本。

られぬ。こたび又此の長歌集一卷をこひ出でて同じくすり卷となしぬ。さるはくさ〲の長歌其のついでをも定めず、たれかれに書きまじへおかれたるが猶いとおほかるを、大人はた近き比はもの學ぶ人の多きに、夜晝となく事しげくてとみにもえらび出で給ふまじければ、そはまた後篇にもと思ふよしをいさゝか卷のはしつかたにしるしぬ。

天保十年八月

船　曳　大　滋

○かすみたつ云々　萬葉集卷五「霞立つ長き春日をかざせれどいやなつかしき梅の花かも」
○しろたへに袖ふりはへて　しろ「たへの」は袖の枕詞。袖を振るにふりはへて（わざ〳〵の意）を掛く。古今集春貫之「春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」
○ふさたをりきて　澤山手折り來て。
○玉だれの　「を」の枕詞。
○をがめもしゞに　小瓶も滿つる位。「しゞ」は草木の生ひ茂つた貌。
○をとめらが云々　萬葉集卷十八「なでしこの花見るごとにをとめらがゑまひのにほひおもほゆるかも」
○ゑまひのにほひ　笑ひの美しさ
○かつ〴〵に　はつかに。
○朝にけに　每朝。
○ことしもとはば　言しも問はばで、何か話しかけたならば。

# 橿園歌集

## 長歌

中島廣足

詠櫻花歌一首竝短歌

かすみたつ　ながき春日に　しろたへの　袖ふりはへて　山べゆき　野べゆきくらし　咲きにほふ　木のもとごとに　やすらひて　見れどもあかず　家づとに　ふさたをりきて　玉だれの　をがめもしゞに　さしみてし　花の枝枝　をとめらが　ゑまひのにほひ　かつ〴〵も　思ひよそへて　朝にけに　おきふし見れば　いやなつかしも

反歌

をとめらにおもひよそふる櫻花ことしもとはばうれしからまし

詠五月雨歌一首竝短歌

あし引の　山ほとゝぎす　をちかへり　なく月たちて　天つそら　雲たちお

ほひ　降る雨の　をやみなければ　文机に　むかふふみ巻　うちしめり　いぶせき日ごろ　とる筆も　かつ物うきを　うま人は　うま人さびて　大とののをすのうちふかく　さもらへる　ひとらつどへて　たきものの　香をあはせつゝ　みやびたる　あそびせすらし　雨そゝぎ　いぶせき庵は　問ひなれし　友だにこずて　心やる　すべをしらにと　さみだれの　おもひみだれて　雨雲のはれ行く空を　まちつゝぞふる（まちぞわびぬるイ）

反歌

おもふ友問ひもかはさず五月雨につゝむ日かずぞいぶせかりける

詠豐後國白黑濱之小石歌

四方の國　浦の八十うら　沖つ浪　しきてよせくる　さゞれ石　滿ちてはあれど　みちのしり　豐のくぬちの　ひむがしの　海に出でたる　山のさき　佐賀の關なる　白黑の　ありその濱の　さゞれしに　あにしかめやも　白濱と　名におふ濱は　わたつみの　そぎへの浪の　うちよせて　ちりかみだると　ましろにぞ　浦さへてれる　黑はまと　名におふ濱は　しほなわの　とどまる限り　かづく鵜の　こゝにつどひて　うなねつき　おりゐるがごと　かぐろなる　光くはしも　玉くしげ　[illegible]

○うま人さびて　貴人らしく。
○大との　大殿。
○さもらへる　候へる。
○たきものの香をあはせつゝ　香合のこと。
○雨そゝぎ　雨だれ。雨だれのする意。
○すべをしらにと　方法を知らないので。
○つゝむ　籠る。

○しきてよせくる　頻りに寄せ來る。
○みちのしり豐のくぬち　豐後の國内。
○ありその濱　荒磯の濱。
○さゞれし　さゞれ石。
○そぎへの浪　遠方の波。
○しほなわの云々　祝詞式祈年祭「鹽沫能留限云々。」しほなわは潮の泡。
○かづく鵜　水中に潜る鵜。
○うなねつき　頸を地につけて敬禮する貌。祝詞式祈年祭「宇事物頸根衝拔氏云々。」
○かぐろなる光くはしも　黑い光が美しい。
○玉くしげ　[illegible]

○いくみだけよだけ　日本書紀「こもりくのはせの川ゆ流れくる竹のいくみ竹よ竹云々」既出。
○としのはに　毎年。
○はびこり　はびこり。
○夏まけて　夏に向つて。
○見のともしもよ　見ても飽きず面白い。
○さかはえ　榮え。
○おむがしき　喜ばしい。

○まゐくる　參り來る。
○さはなる中に　數多の中に。
○おこし炭　火をおきにおこした炭。
○いひつがひつゝ　いひつぎつゝ
○うつしたるかた　書き寫した繪
○おほほしく　おぼ／＼しく。判然とせず。
○ふりはへて　わざ／＼。
○かよひて　似て。

あやしき

反歌

大汝（おほなむち）すくな御神の二瀆にしき分けましゝさゞれ石かも

竹をめづる歌

我が園に　うつしうゑたる　いくみだけよだけ　としのはに　ねはひほびこり　夏まけて　おふるたかむな（たけのこ）　いや高く　おひたちさかえ　いや茂く　枝さしそはり　風ふけば　おともさや／＼　雨ふれば　露もとをゝに　朝よひに　見のともしもよ　かくのごと　さかはえゆかば　琴にも　つくりてひかむ　笛にも　つくりてふかむ　おむがしき　竹のいくみだけよだけ

詠食火鳥歌

外國（とつくに）ゆ　わたしまゐくる　鳥けもの　さはなる中に　おこし炭　くふとふ鳥は　遠き世に　もちわたりきと　老人の　いひつがひつゝ　うつしたる　かたには見れど　おほほしく　思ひをりしを　ことしまた　もちまゐ來ぬと　さと人の　いへるまに／＼　其の鳥を　飼ひたる庭に　ふりはへて　行きてし見れば　あやしくも　くすはしきかも　其のかたは　鶴にかよひて　大き

さは　さを鹿なせり　熊のごと　かぐろき毛をら　蓑のごと　おほしたらはし　ひたひ角　さゝげかゞふり　大船の　ゆたのたゆたに　垣ぬちを　いゆきもとほり　なく聲も　たてぬものから　なげいるゝ　たぶての石を　さながらに　くひかゞのむ　其のさまは　言のはたえて　あやしくも　くすはしきかも　おこしたる　火のみにあらず　石をさへ　かゞのむ鳥の　いかにして　此の世の中に　なりは出づらむ

反歌

もゆる火を袋にいれしいにしへのたわざもしかじこれの鳥には

詠馬歌

をす國の　四方の御牧ゆ　引き出づる　駒の中にも　龍といふ　名におひぬるは　こゝばくも　きこえぬものを　いにしへの　民のあたひは　いかさまの　さとりありてか　高き屋ゆ　高く見わたし　あさもよし　紀の浦人の　大贄（おほにへ）を　おほせし女馬（あま）の　御子にし　見出でたりけむ　影を見て　たかく嘶き　母の脊を　輕く越ゆるに　生ひさきも　しるくやありけむ　そこ故に　おのれかひえて　朝よひに　小草とりかひ　夜晝に　かきなで見つゝ　まなごなす　おほしたてぬれ　みさかりに　成り行くまにま　翅なす　高くかけ

---

○毛をら　「ら」は意味なき接尾語
○おほしたらはし　一杯にはやし
○かゞふり　被り。
○大船のゆたのたゆたに　古今集戀讀人不知「いで我を人な咎めそ大船のゆたのたゆたに物思ふ頃ぞ」大船が浪に搖れてゆらり〳〵する如く。のつそり〳〵の意。
○いゆきもとほり　行き廻り。
○たぶての石　礫の石。
○くひかゞのむ　かゞのむは音を立てて物を飲食する意。
○なりは出づらむ　生まれ出たであらう。
○たわざ　奇術。
○をす國　天皇の治め給ふ國。
○御牧　御牧場。
○こゝばくも　幾許も。
○あたひ　直。「かはね」の名。
○あさもよし　「き」の枕詞。
○大贄　その土地の獻上物。
○とりかひ　飼ひ養子。神樂歌「その駒ぞや、われに〳〵草かふ、草は取り飼はむ。」
○まなごなす　愛兒の如く。

約一丈。

○かしはでの臣　膳臣。
○たけを　猛男。萬葉集卷十九「から國に行きたらはして歸り來むますらたけをに御酒奉る」
○わく子　若子。
○とめゆき　尋ね行き。
○うつそみの今のをつゝに　現世の現在に於て。
○さつを　獵師。
○かしのみの　「ひとつ」の枕詞。
○百舟の　「つ」の枕詞であらう。「津」と「對馬」とを掛けた。萬葉集には「百舟の泊つる對馬の云々。」とある。
○菅のねの　「長」の枕詞。
○あぐら　胡牀。腰掛。
○まさめ　正眼。目のあたり。

じて　乘る人の　心のまにま　龍のこと　なとけ馳せつゝ　十つゑあまり　八杖の谷を　たゞとびに　飛びこえぬとか　しかばかり　くすしき馬を　かひえたる　人し賢し　馬しおむがし

反歌

龍の馬は今もあらめどえり出でて乘りうる人や少なからまし

觀虎作歌

いにしへに　ありけむ人の　かしはでの　臣のたけをは　から國の　虎ちふ神に　とらえたる　わく子のあだと　ゆきの上の　あとをとめゆき　其の虎に　いむかひたけび　むかひはむ　舌をとらへて　さしころし　あだむくいをへ　皮をさへ　はぎもち來ぬるも　大王の　御稜威ならずや　しか許りたけきしわざは　萬代に　あらじとおもふを　うつそみの　今のをつゝにいかさまに　ことはかりけむ　其の國の　さつをがともら　かしのみの　ひとつにあらず　ふたつさへ　いけどりにして　百船の　つしまの國ゆ　菅のねの　長崎のさとに　はろ／＼に　もち渡り來て　諸人の　見物にすめり　其の皮は　馬にもよそひ　あぐらにも　しけるはあれど　いけるをば　まさめに見ねば　いぶかしみ　行きてし見れば　よだけもて　まがきゆひこめ

〇あそばひ　遊び。
〇をしもの　食物。
〇うべしこそ　げにこそ。
〇神とゝ神と　續日本書紀「うづまさは神とも神ときこえくる常世の神をうちきたますも」
〇から國の虎ちふ神　萬葉集卷十六「韓國の虎とふ神を生けどりにやつとり持ち來その皮を云々。」
〇うつゆふの　さかるの枕詞。
〇さかる心　盛んな心。
〇豐のあかり　豐明。宴會。
〇にのほなす　丹穗なす。丹穗の如く。丹穗は赤く美しいこと。
〇みあからびまし　赤らみ給ひ。
〇ゑら〳〵に　滿悅して。
〇うたげ　酒宴。
〇いにしへのかしこき人云々　萬葉集卷三「酒の名を聖とおほせしいにしへの大き聖の言のよろしさ」魏書「太祖禁レ酒而人竊飲。故諱レ言レ酒。以二白酒一爲二賢者一。以二淸酒一爲二聖人一。」

はなちたる　二つの虎は　おのがじゝ　あそばひをれり　をしものに　取りかふ鷄の　其の中に　をどるを見れば　翅なす　高くとびあがり　忽ちにはみをへぬれば　打伏して　眠れる姿　から猫の　なづけるごとく　うつしゑに　かけるなせれど　おのづから　見のがしこしも　うべしこそ　神とも神と　たゝへ來にけれ

反歌

大王の御稜威かしこみから國の虎ちふ神もなつき來にけり

讚酒歌

春の花　さきの盛りも　秋の月　清き夜すらも　樂しけく　飲みてぞ遊ぶ　嬉しけく　をしてぞうたふ　うたひつゝ　遊ばひをれば　うつゆふの　さかる心も　大海の　ゆたにひろらに　高山の　いやたか〴〵に　天地に　思ひ足らはし　世の中に　ほこらはしもよ　かくばかり　たふとかれこそ　かけまくも　あやにかしこき　大前の　豐のあかりに　にのほなす　みあからびまし　ゑら〳〵に　うたげたまへれ　しかばかり　くすしかれこそ　いにしへの　かしこき人も　ひじりとふ　名をおほせけれ　此のうま酒を

反歌

○ます人　益人。人民。祝詞式大祓「國中爾成出武天之益人等我云云。」
○あれつぐ　生まれつゞく。
○ほどこらし　行きわたらせ。
○結ひもとほして　結ひ廻らして
○國もせにたらふ薬　國も狹い程充滿せる薬。
○みたまのふゆ　恩賚。神の御加護。
○山からし云々　既出。
○まほら　丘山に取圍まれた所。
○しみさかえつゝ　茂り榮えつゝ

薬園に遊びて作る歌

大汝（おほなむち）　すくな御神の　二柱　あひならばして　やしま國　つくりかためて
うつそみの　世人のためと　けものさへ　病をいやす　くすはしき　薬の道
を　かしこくも　さだめたまひし　其の御わざ　代々につたへて　久方の
天のます人　ます／＼に　あれつぐ御民　二神の　恩頼（みかげ）を　こと／＼に　か
かぶり來けり　野に山に　おふる薬の　草に木に　いやさかえむと　もろこ
しの　遠き國より　年のはに　八十船うかべ　み山なす　つみもてまゐる
其の種を　蒔きほどこらし　くみがきを　結ひもとほして　薬園　つかへま
つりて　國もせに（世のなかにイ）　たらふ薬の　くすはしきかも

反歌

二神のみたまのふゆになり出づる薬の草木いやさかえけり

詠茶歌

山しろの　宇治のわたりは　山からし　たふとかるらし　川からし　さやけ
かるらし　もろこしの　たねをつたへて　うゑおほす　春の木の芽の　こゝ
ろしも　國のまほらと　世々をへて　しみさかえつゝ　天のした　四方にた

○玉ほこの　里の枕詞。
○つみほろゝぐる　摘んでほろほろとするやうにする。
○から國に云々　萬葉集卷十九「から國に行き足らはして歸り來むますらたけをに御酒奉る」
○あすのごと　すぐに。
○つゝみなく　恙なく。
○のらして　告らして。
○朝びらき　朝船が港を出る事。
○いこぎわたらせ　「い」は接頭語
○たわやめの云々　萬葉集卷四「吾脊子が行きのまに／＼追はむとは千度思へどたわやめの吾が身にしあれは道守の問はむ答をいひやらむすべを知らにと立ちて爪づく。」
○海原の云々　萬葉集卷五「海原の沖ゆく船を歸れとかひれふらしけむ松浦さよ媛」
○かまめ　鷗
○かくろひゆけば　隱れ行けば。
○むらぎもの　心の枕詞。
○馬じもの　馬の如く。萬葉集卷十三「馬じもの立ちてつまづき云々。」
○やさかどり　「いきづき」の枕詞　萬葉集卷十四「沖にすもを鴨のもころ八尺鳥いきづく妹を置きて來ぬかも」
○しましくは　暫くは。

たへて　たぐひなき　名にこそおへれ　世の中の　うぢのわたりと　いひつぎし　昔の人は　かけてしも　おもはざりけむ　かくばかり　たふとき木のめ　年ごとの　春の盛りに　玉ほこの　里もとゞろに　つみ出でむとは

反歌

いやたかく名に聞えけりうぢ山につみほろゝぐる春の木の芽は

擬松浦佐容媛悲別歌

大王の　みことかしこみ　はしきやし　わがせの君し　から國に　ゆきたらはして　あすのごと　かへり來なむを　つゝみなく　妹はいまさね　ひとりゐて　物なおもひと　ねもごろに　われにのらして　大船に　まかぢしゞぬき　朝びらき　いこぎわたらせ　たわやめの　わが身にしあれば　おひゆかむ　すべをしらにと　高山に　いはがきのぼり　海原の　沖ゆく船を　はろばろに　ふりさけ見れば　かまめかも　浪に浮べる　とおもふまで　遠き帆影の　やゝ／＼に　かくろひゆけば　むらぎもの　心消えうせ　馬じもの　たちてつまづき　やさかどり　いきづきなげき　しましくは　とまれみふねと　百千たび　わがふるひれを　君みつらむか

反歌

見さくればいよゝこほしき沖つ船もとなのほりつ高山のへに

稱民部卿和氣朝臣歌

青丹よし　寧樂の都に　天の下　しろしめしける　天皇の　大御心を　かしこくも　あざむきまつり　みつぐりの　中子の法の　きはまれる　位たばりし　いなしこめ　弓削のしこをい　大御代の　事とりまをし　ゐやまはむ事を忘れて　ねぢけたる　下のこゝろに　媚びつける　人らいざなひ　大御門　かたぶけましと　はかりごつ　きたなきわざに　むらぎもの　心むすばず　まがごとに　あひまじこらず　神直日　御靈たまへる　こまつるぎ　和氣のあそみは　大王の　御ことかゝぶり　梓弓　ひきとよ國の　廣はたの八幡の神の　大前を　まゐりをろがみ　御心を　とひまつらへば　かけまくも　あやにかしこき　大御神　御稜威をしめし　望月の　照りたらはせるうつしおみ　あらはれまして　まつぶさに　のらしたまへる　大御言　いただきもちて　かくさはぬ　赤き心に　あるかたち　ことかざらはず　かへり言　まをしをへけり　しかばかり　清き心を　僞りの　かためる如く　すめらべに　よこしまをせれ　つかささへ　いとりはなちて　天ざかる　ひなの國べに　はろ〴〵に　くだし給ひぬ　まがわざも　かぎりしあれば　くなた

○こほしき　戀しき。萬葉集卷五「行く舟をふりとゞみかねいかばかりこほしくありけむ松浦佐用姫」
○もとな　わけもなく。
○高山のへに　高山の上に。
○みつぐりの　「中」の枕詞。
○中子の法　佛法。
○たばりし　賜はりし。
○いなしこめ
○しこをい　醜男。「い」は語勢を強める意の接尾語。
○ゐやまはむ　敬はむ。
○はかりごつ　計略を廻らす。
○まがごと　禍事。
○あひまじこらず　誘惑されず。
○神直日　神直毘神。大直毘神と共に禍を直す神。
○こまつるぎ　「わ」の枕詞。
○あそみ　朝臣。
○梓弓　「ひき」の枕詞。萬葉集卷三「梓弓ひきとよ國の鏡山見ず久ならば戀しけむかも」
○ひきとよ國　豐前國。
○御心　神の御心。
○うつしおみ　現大身。現に見え給ふ御身。
○かくさはぬ赤き心云々　萬葉集卷二十「かくさはぬ赤き心をすめらべに極めつくして云々。」
○ことかざらはず　言飾せず。
○つかささへ云々　官職さへ奪って。
○天ざかる　「ひな」の枕詞。
○くなたぶれ　頑愚なる。

ぶれ　しこのやつこい　はかりける　さかしまことら　天地の　神の心と　こと〳〵に　あらはしたまひ　うちきため　つみなひをへて　和氣のあそ　めさげたまひて　まそかゞみ　清き心は　天地に　いたれる功は　いや日けに　あらはれそめつ　ます〳〵に　めぐみたまふと　廣幡の　八幡の神の　みてぐらを　たてまつらせる　御代々々の　大御使を　氏の子に　おほせたまひて　おほきみに　まつろふ臣の　萬代に　心とぐべき　鏡となりぬ

反歌

高御座天津日嗣をうごきなく仕へまつりし其のいさをはや

すめらべにあかき心をきはめてぞ世のまが事は拂ひつくせる

見蒙古襲來繪卷作歌

かけ巻も　かしこきかも　いはまくも　ゆゝしきかも　神祖(かむおや)の　よさしたまへる　高御座　天の日嗣と　しらしくる　水穂の國は　すめろぎの　御稜威をしめし　神ながら　をさめ給ひて　民草を　めぐみたまへば　天地の　いやとほながく　春花の　さかえゆきつゝ　千早ぶる　神もあらびず　まつろはぬ　人しもなきを　からくにの　たぶれこにきし　國がらの　さかしらをすと　千萬の　軍とゝのへ　こゝだくの　船をうけする　大海を　いこぎわ

○うちきため　打ちこらし。
○つみなひをへて　罪し終へて。
○めさげたまひて　召上げ給ひて
○まそかゞみ「清き」の枕詞。
○いや日けに　愈々日ましに。

○鏡　手本。

○かけ巻も云々　萬葉集卷三「かけまくもあやにかしこしいはまくもゆゝしきかも云々。」
○よさしたまへる　任かせ給へる　祝詞式祈年祭「皇御孫命能依左志奉牟奥津御年云々。」
○しらしくる云々　萬葉集卷十八「葦原の水穂國を天降り知らしめけるすめろぎの神のみことのみよかさねて天の日嗣と知らし來る君の御代々々云々。」
○天地のいやとほながく　萬葉集卷二「天地のいや遠長くしぬび行かむ云々。」
○あらびず　荒びず。
○たぶれこにきし　狂心の三韓王「こにきし」は朝鮮語であつて、三韓の王の意。「こきし」ともいふ。
○こゝだくの　澤山の。

○しらぬひ　つくしの枕詞。
○さはへなす　「さわぎ」の枕詞。
○あたなひ　寇をなし。
○おもほてり　憤り。
○神風の云々　萬葉集卷二「神風にいぶきまごはし天雲を日の目も見せず常闇におほひ給ひこ云々。」
○いぶきまごはし　吹き迷はし。
○くまま　隈阿。
○まごへるはしに　惑へる閒に。
○つくしぬ　「はふりつくしぬ」の誤りであらう。
○やす國　安泰の國。
○ねぎたまひ　ねぎらひ給ひ。
○そら數ふ　「おほ」の枕詞。
○いつきもたりし　大切に持つてゐた。

たらひ　しらぬひ・つくしの國に　さばへなす・さわぎゐる來て　おふけなく　あたなひまつれ　もろ〳〵の　大御神たち　おもほてり　いきどほらして　神風の　いぶきまどはし　天雲の　五百重むら雲　とこやみに　おほひたまひて　えみしらが　のれる千船を　木の葉なす　いぶきはなちて　荒浪に　沈めたまへば　千萬の　えみしがともは　わたつみの　水屑となりぬ　島のさき　浦のくまに　おりたちて　のこれるえみし　にげぬべき　道をしらにと　立ちさわぎ　まどへるはしに　かしこきや　すめら御いくさ　いやきほひ　きほひかくみて　きりはふり　つくしぬ　たま〳〵も　のがれしえみし　からくして　船こぎ歸り　たゝかひの　ありつるかたち　まつぶさに　かたるを聞きて　あらぐまの　あらきこきしも　むらぎもの　心きえうせ　大御いづ　おぢかしこみぬ　しかしつゝ　はらひきよめて　やす國と　つかへまつりし　ますらをの　赤き心を　ねぎたまひ　をさめたまへば　かぐはしき　其の名とともに　遠ながく　かたりゆかむと　あるかたち　形にうつして　うつそみの　世につたへたる　ふみ巻の　ふりぬる繪卷　みちのしり　わが肥の國の　そら數ふ　大矢野の子が　たからとし　いつきもたりし　其の祖（おや）の　たてつるいさを　たぐひなく　たけきしわざを　今の世に

まさめに見らく　たふときろかも

反　歌

千萬のゑみしが船をしづめけむ神のいぶきぞあやにかしこき

ますらをのたけきしわざをうつし繪にうつして今も見るがたふとさ

題孟嘗君夜出函谷關圖歌

白玉に　くがねにかへて　まれ人と　いつきすゑつゝ　臣の子と　めぐしみおける　ますらをの　千ぢの中にも　ひとくにに　とらえたる身の　ほとほとに　いのち死ぬべき　まさかには　せむすべしらに　おもひうる　事やなかりし　いぬじもの　かきこえゆきて　ぬすみ出し　きつのけごろも　にはつどり　かけの八聲を　さよ中に　まねびし人ら　常はしも　おもひくたしし　其のわざの　たばかりなくば　虎ふせる　國をしぬび出　あやふかる　せき路をこえて　おひしける　あたをものがれ　つゝみなく　あにかへらめや　しかばかり　いやしきわざも　あぶさはず　めぐみおきけむ　其の人あはれ

詠張良歌

から國に　名をのこしける　いにしへの　ますらたけをは　たわやめの　お

〇白玉に云々　萬葉集卷五「白金も黄金も珠も何せむにまされる寶子に若かめやも」
〇めぐしみおける　いとほしみおける。
〇ほと〳〵に　殆ど。
〇まさか　目前。其の當座。
〇いぬじもの　犬の如く。
〇きつ　狐。
〇にはつどり　「かけ」の枕詞。
〇かけの八聲　鷄の屢鳴く聲。
〇おもひくたしし　輕蔑した。
〇おひしける　追及せる。
〇あぶさはず　見捨てず。萬葉集卷十九「をす國の四方の人をもあぶさはず惠み給へば云々。」
〇お[illegible]　覆付。

○はらぬち 腹中。
○しがいへ 其の家。
○ちから人 力の強い人。
○あひむつばひて 相睦びて。
○くろがねのつゝい 鐵槌。
○とげぬものから 成就しないものの。
○むけなびけ 平ぎ靡かし。
○やはしをさめし 和げ治めし。
○あなゝひたすけ 助け。「あななふ」も助ける意。
○たなつもの 穀類。
○やま人 仙人。

もわなしつゝ はらぬちの おもひばかりは 天雲に いゆきわたらひ 大海の そこひも知らず おやのよゆ つかへし國の 君のあた むくいむものと しがいへの たから惜しまず ちから人 あひむつばひて くろがねの つゝいをつくり まちうちし くるまあやまち こゝろざし とげぬものから ますらをの たけき其の名は 天地に とゞろきにけり しかしつつ かくれしさとの 河づらに 遊べる時し 橋のへゆ いゆきあひぬる ましらがの あやしき翁 黄なる石の くすしきみたま ちはひぬる 書の一卷 おもひかね いよゝそはりて たばかりも ます〳〵ひろく かりごもの 亂れたる世を むけなびけ やはしをさめし こゝにきしを あなゝひたすけ 四方の國 はらひきよめて いさをたて 名をあらはして 契りおきし みたまの石を 寶とも 神ともいつき たなつもの 口にしたちて やま人の 道をまねぶと 世間の まがことさりて ねぢけ人の たはことたちて つゝみなく ながよをへぬる ますらをの 深き心ぞ はかりしられぬ

反歌

つゝいもちうちくだきけむを車のむなしからめやたけき其の名は

遠きよにかたりつぎけり黄なる石のたまちはひぬる里のふること

## 観清人戯場作歌

うづだから　みつぎまつると　すがのねの　長崎の津に　まゐり來る　もろこし人を　ねぎたまひ　めぐみたまふと　うなかみの　小じまの岡の　そともに　やにはたまひて　こゝばくの　家つくりなべ　こと〴〵に　旅居をしつゝ　行きかよひ　ありふる事を　よろこぼひ　思ひほこらひ　大御代をほがひまつると　あらがねの　土まもるとふ　からの神　いはへるむろの庭中に　さずきゆひあげ　たはぶれの　わざをぎをすと　年毎の　春のなかばの　如月の　月立つほどに　玉くしげ　二日をえらび　くれなゐの　をばたをたて　高きやに　花むしろしき　鳥けもの　をしものそなへ　此のさとの　つかさ人をし　こひむかへ　あぐらすゑなべ　たわやめも　來入りまじらひ　酒ゑらぎ　ゑらぎとよもし　庭なかに　見おろすわざをぎ　あやしくも　めづらしきかも　さきくさの　みつにわかれし　みだれよの　其の國振を　まつぶさに　まねびなすと　引きならす　小琴のまにま　打ちならすかねにあはせて　とばりより　出でくる人は　其の國の　あらをがともかさにぬりの　おもわいからし　眼をら　見くるべかし　ほことりて　ふりめ

○たまちはひぬる　人の靈に幸福を與へる。
○うづだから　尊く珍らしい寶。
○うなかみ　海邊。
○やには　家庭。家のある所。
○ありふる　生き長らへる。
○よろこぼひ　喜び。
○ほがひまつる　祝ひ奉る。
○あらがねの　土の枕詞。
○さずきゆひあげ　棧敷を作り上げ。
○わざをぎ　藝當。
○玉くしげ　「ふた」の枕詞。
○をはた　小さい幡。
○つかさ人をしこひむかへ　役人を招待し。
○さきくさの　「みつ」の枕詞。
○をごと　小琴。
○あらを　荒男。
○さにぬり　赤塗。
○見くるべかし　きよろつかせ。

ぐらし　あしをふみ　きかみたけびて　のゝしらふ　ことこそわかね　をとめらは　をとめさびして　にしきあやの　袖きそなひ　玉もなす　かよりかくより　打ちなびき　泣きみ笑ひみ　さへづらふ　事こそわかね　よしゑやし　ことはわかずと　よしゑやし　わざはわかずと　やまと人　から人まじり　うたげして　たぬしきをふる　けふのよろしき

反歌

もろこしの人にまじらひ遊べるもうらやすき世の恵みならずや

言のはを傳ふる人のなかりせばなにわざすとも知らえざらまし

詠紅毛舶人貢歌一首竝短歌

高御座　天の日嗣と　天皇の　神のみことの　きこしをす　水穂の國は　細(くはし)鉾(ほこ)　千足(ちたる)の國と　八百萬　萬のことら　望月の　たゝはしけれど　目かゞやく　金銀(くがねしろがね)　よる光る　眞玉白玉　いやさはに　たぬしくあらむと　神ながら　おもほすまにま　天つ神　うづなひたまひ　地祇(くにつかみ)　たすけ給ひて　向けませる　三つのから國　御馬飼(みまかひ)に　仕へしてより　外國(とつくに)の　船もまゐ來て　珍寶(うづだから)　つどへる中に　ひむがしの　遠の朝廷(みかど)に　天のした　まをし給へる　新代(あらたよ)の　御代の初めゆ　年のはに　貢まつれる　常世人　其の國はしも　天

○きかみたけびて　齒ぎしりし叫んで。
○きそなひ　著て裝ひ。
○玉もなす　藻の如く。萬葉集卷二「玉藻なすかよりかくよりなびかし云々」
○かよりかくより　彼方に寄り此方に寄り。
○よしゑやし　まゝよ。
○高御座云々　萬葉集卷十八「高御座天の日嗣とすめろぎの神のみことの聞し食す國の云々。」
○細鉾千足の國　我が國の美稱。細鉾は「ち」の枕詞。
○望月のたゝはしけれど　望月の如く滿ち足りてはあれど。萬葉集卷二「望月のたゝはしけむと云々。」
○目かゞやく金銀　仲哀紀「眼炎耀之金銀彩色云々。」
○よる光る眞玉　夜光玉。
○いやさはに　愈多く。
○うづなひ　承諾し。萬葉集卷十八「天地の神あひうづなひすめろぎの御たまたすけて云々。」
○向けませる　服從せしめ給へる。
○ひむがしの遠の朝廷　江戸幕府を指す。
○天傳ふ　日の枕詞。

傳ふ　日の入る國ゆ　雲はなれ　遠く放りて　降る雪の　ときじく國　まゐりくる　其の船はしも　日のめぐる　南の海の　とこしへに　夏ゆく國ゆ　玉くしげ　二つの船に　八十國の　萬の寶　み山なす　つみたらはして　青うみの　浪おしわけて　天雲を　のぞみまゐくれ　肥の國の　長崎の津に　任けたまふ　市の司は　わたのそこ　深江の浦に　たゞむかふ　山のみさきに　城をすゑて　里なみしきて　伴部を　わかちつかはし　沖つ島　た、か、ね、に　遠鏡　まけそなへつゝ　たつ年の　六月毎に　天雲の　そきたつきはみ　しほなわの　とゞまるかぎり　朝にけに　見つゝしをれば　水鳥の　うかべるごとく　たくぶすま　白き帆かげの　浪間より　あらはれぬるを　つばらかに　見しあきらめて　峯ごとに　小旗たてつぎ　早船の　眞梶引きをり　かぢ人の　息もつぎあへず　告げ來る　使まちとり　をちこちに　火矢の音とよめ　西泊　戸町の浦の　さしなみの　磯山もとに　荒がきを　ゆひもとほし　こちごちの　ありその浪に　うけすゑし　船のともへに　兵器をたてつらなべて　うみくぬが　かくみまもらひ　大御いつ　しめし給ひて　迎へ船　沖に漕ぎ出て　御しるしの　小旗をあはせ　三つよりの　大綱かけて　ひき船の　百船きほひ　神崎の　山のをちより　みなと江に　入り

---

○ときじく國　季節を論ぜずいつも雪のある國の意。
○まゐくれ　參り來れ。
○玉くしげ　「ふた」の枕詞。
○わたのそこ　深江の枕詞。
○伴部　節度使の部下の兵士。
○遠鏡云々　遠眼鏡を用意して。
○そきたつ　退立つ。遠く離れ立つ。
○しほなわ　潮泡。
○たくぶすま　白の枕詞。
○見しあきらめて　見明らめて。
○かぢ人　舵人。
○火矢　箭に火を仕掛けて射放つもの。
○さしなみ　さし竝ぶ意。
○ゆひもとほし　結ひめぐらし。
○こちごちの　彼方此方の。
○うけすゑし　浮べし。
○うみくぬが　海陸。

○ゆひなめし　結ひならべた。
○長梢　帆綱。
○石火矢　大砲。
○家むら　家の聚れる所。
○あかちて　分ちて。
○あともひ　伴ひ。

くる船は　沖つしま　浮びうきぬる　國をかも　引きもてよすると　おもふまで　見のかしこしも　つきたつる　三つの檣　ゆひなめし　八十の帆竿　ひきはへし　千ぢの長梢に　くさ〴〵の　旗手なびかし　ふなよそひ　よそひと〻のへ　舘の　前なる水脈に　いかりおろし　とゞむるなべに　枻の　こなたかなたゆ　石火矢を　打ち出る音は　磯山に　轟き渡り　家むらに　震ひうごき　飛ぶ鳥も　空にまどはひ　ふす犬も　道にをの〻き　諸人も　聞きおびえけり　積み來つる　千ぢのたからは　よきあしき　しなを定めて　おほやけの　貢にたて　天のした　四方にあかちて　民草の　こ〻ろたらひに　なでたまひ　治めたまへば　いやましに　にぎほふみなと　いやましに　榮ゆるさと　浦安の　國ぶりしろく　春花の　にほふ大御代　こ〻ろなき　えみしがともも　あふがざらめや

反歌

外國のたえぬ貢にあめのした萬のたから滿ちたらひたり

唐船をよめるうた

此の朝開　西吹く風に　まほはりて　から船入り來　いつの日に　船出はしけむ　幾船か　あともひ來つる　相しれる　から人あるらし　おむがしき

たからくすりは　み山なす　つみて來ぬらし　めづらしき　書もあるらし　わがほれる　墨も硯も　かみ筆も　さはにぞあるらし　いさ子ども　はや引きいれよ　そのからぶねを

反歌

みやまなす寶つみくるから船を待ちえし心ゆたにもあるかも

樂志園より魚舟を見てよめる

朝しほの　みちのとゞみに　あともひて　こぎつらなべて　たくなはの　千ひろ打ちはへ　夕汐の　なぎたる浪に　よびたてて　あごとゝのへて　はりわたす　あみのやちひろ　やゝ〳〵に　ひきよせあげて　とりえたる　さはたひろはた　船ごとに　つみたらはして　漕ぎきほひ　かへらふあまの　ほこらしげなる

筆をよめる歌

春のはな　にほふあしたも　秋の月　淸きゆふべも　思ふこと　うたふまにまに　かきすさび　しるしとゞめて　たまあへる　友にもしめし　海山の　遠きさかひの　おもしろき　いはね木立を　目のまへに　うつし出でつゝ　心やり　たぬしきをへて　のちの世に　つたへもゆくは　とる筆の　いさを

---

○わがほれる　自分の欲する。

○ゆたに　寛に。ゆたかに。

○みちのとゞみ　滿ち湛へること　萬葉集卷九「夕潮のみちのとゞみにみふな子をあともひ立てて呼び立てて云々。」

○たくなは　栲繩。神代紀「千尋栲繩。」

○あごとゝのへて　網を引く者を呼び集めて。

○やゝ〳〵に　次第に。

○さはたひろはた　狹鰭廣鰭。神代紀「鰭廣、鰭狹。」大小樣々の魚類。

○たまあへる　魂合へる。氣があふ。

ならずや　かくばかり　たふとき筆を　いつのまか　手をばはなたむ　かくばかり　むがしきふでを　たくみ出で　つくりそめけむ　いにしへの　人の心の　みやびわざ　めでざらめやも　あはれ此の筆

反　歌

をさまれる御代のすさびとますらをも筆とりならし心やりつゝ

唐硯のうた

うつそみの　わがよの友と　朝よひに　むかふすゞり　なれはも　おむがしき友　いましは　うるはしきとも　から國ゆ　渡りきぬれど　ねぢけたる心もなく　さかしらの　ものをもいはず　とこしへに　しづけきものぞ　いであれも　世の人みなと　よしもなき　ものいはむゆは　朝よひに　なれにむかひゐ　むらぎもの　心しづめな　いましは　おむがしきとも　うるはしきとも

はやくよみけるうたのしたがきをうしなひつる此のごろ人のもとよりかきつけておこせたるひとつふたつこゝにあぐ

稱武内宿禰歌一首竝短歌

高御座　天の日嗣と　繼ぎてくる　君が御代々々　むらぎもの　心盡して

○むがしき　喜ばしい。
○たくみ出で　考案し。

○うつそみの　よの枕詞。
○おむがしき友　喜ばしい友。
○いまし　汝。

○よしもなき云々　つまらないことをいふよりは。
○むらぎもの　心の枕詞。

○天の日嗣と云々　萬葉集卷二十「天の日嗣とつぎて來る君の御代御代云々。」

○こゝら　澤山。
○たまきはる　うちの枕詞。
○天地に至れる功　天地間にわたる大功。
○三もゝぢ　三百。
○つるぎたち　とぎの枕詞。
○さやにとぎつゝ　清く磨いで。
○遠人　命長き人。長人と同じ。仁德紀「なこそは世の遠人なこそは世の長人。」
○いはまくも云々　萬葉集卷五「かけまくはあやにかしこしたらしひめ神のみことから國をむけ平けて云々。」たらしひめは息長足日女命
○ことむけまして　從はしめ給ひて。
○內つみやけ　內官家。三韓にあつた總督府。
○よろづつき云々　萬葉集卷十八「よろづつきまつるつかさと云々。」つきは調で、貢の意。
○こはしし　乞ふの延音。
○きたなきや　邪なるかな。
○さかわざ　酒宴。
○二柱　麛坂及び忍熊の二王子。
○まちいなる　待射の意であらうか。
○むなごと　虛言。
○くがたち　探湯。昔正邪を判ずる爲神に誓ひて熱湯に手を入れ、傷くを邪、傷かざるを正とす。
○天地のよりあひのきはみ　萬葉集卷十一「天地のよりあひの極み玉の緒の絕えじと思ふ妹があたり見つ」
○あれゆかむ　生まれ行く。
○八十とものを　多くの部屬の長

すめらべに　仕へまつらふ　臣の子は　こゝらあれども　いそしめる　人は
おほけど　たまきはる　內の宿禰の　天地に　至れる功は　いひもえず　な
づけもしらず　萬代に　たぐひあらめや　仕へこし　代々のみかどに　大臣
と　めでたふとまれ　三もゝぢの　齢かさねて　ますらをの　たけき心を
つるぎたち　さやにとぎつゝ　ものゝふの　かゞみとなれり　うべしこそ
國の遠人　うべしこそ　世の長人と　大御うた　うたはせりけれ　しかばか
り　たかきいさをの　百萬　萬の中に　いはまくも　かしこき事は　たらし
ひめ　神の命の　から國を　ことむけまして　內つみやけと
よろづつき　奉れるも　此の臣の　あなゝひたすけ　皇神の　みことこはし
し　くすはしき　しわざならずや　事をさめ　歸らしし日に　きたなきや
さかわざをすと　二柱　はかりたまひて　まちいなる　御子の軍を　ことご
とに　おひせめうちて　御門べを　拂ひきよめて　大御代を　かためまもら
ひ　其の弟の　よこしまをせる　むなごとも　あきらめ盡し　くがだちの
たけきしわざに　かくさはぬ　あかき心を　いちじるく　あらはしめし
春花の　かぐはしき名を　天地の　よりあひのきはみ　つたへたる　臣した
ふとし　今ゆのち　千萬の世に　あれゆかむ　八十とものをは　此の臣の

たてつるいさを　此の朝臣の　まめなるこゝろ　いなたきに　かゞふりもちて　つとめもろ〳〵

反歌

たまきはる内のすくねの天地にいたれる功あふがざらめや

過古戰場之時作歌

眞玉つく　尾張の國　くはし桙　知多の郡　有松の　里の東　をとめらが　うみをたるとふ　桶はざま　其の山のべの　松かげの　一つ古塚　あづまぢの　みちの行く手に　たづねつゝ　立ちよりみれば　いにしへの　事ぞおもほゆる　しづはたを　織田の大臣　いまだ世に　名を顯はさず　まそ鏡　清洲の里に　城をしめて　いましし時に　うちよする　駿河の國の　今川の　ますらたけをい　我をおきて　人はあらじと　世間に　おもひほこらひ　うち日さす　都にのぼり　かけまくも　あやにかしこき　大御言　こひまつらひ　いなたきに　かゞふりもちて　天の下　やはさむものと　おふけなく　おもひおこして　千萬の　軍とゝのへ　東の　海つ道より　たゞのぼり　せめのぼりくれ　あひいどむ　人しなければ　ます〳〵に　おもひたけびて　織田の君　むかへうたむと　つくらせる　こゝらの城を　時のまに　やぶ

○いなたき　いたゞき。頂。
○かゞふりもちて　被り持ちて。

○眞玉つく　をの枕詞。
○くはし桙　ちの枕詞。
○をとめらが云々　乙女等が績麻を垂らすといふ。桶の緣語。萬葉集卷十四「麻をらを麻笥にふすさにうまずともあすきせざめやいざせをどこに」
○しづはたを　賤機を織る意から織田にかけた緣語。
○まそ鏡　清の枕詞。
○おもひほこらひ　思ひ誇り。
○うち日さす　都の枕詞。
○こひまつらひ　乞ひ奉り。
○やはさむ　平定せむ。

○しがいほり　其の軍營。
○まちいかる　待ち怒る。
○はやさめ　暴雨。
○かくざまの　斯樣な有樣。今川の殺されたこと。
○松が根の　とほくの枕詞。
○とめきて　尋ね來て。
○草むすかばね　草の生えるにまかせた屍。叢中に埋れた屍をいふ。
○あとどころ　遺蹟。

りつくせと　いさみたる　たけき軍を　こち〴〵に　わかちつかはし　しがいほり　まもれる人の　すくなけく　なれるおもはず　かへりごと　いかにいかにと　まちいかる　をりを窺ひ　人しらぬ　山べの道を　さよ中に　ふみこえとほり　山風の　ふきのまどひに　はやさめの　ふりのしきりに　いかづちの　おつるがごとく　いやきほひ　きほひかゝりて　たちまちに　攻め打ち破り　今川の　ますらをのこが　首をさへ　きりとりさゝげ　かくざまの　事ともしらず　みさかりに　たゝかふ庭に　まつぶさに　あらはししめし　まとはへる　あだのこと〴〵　おひうちに　きりはふりつゝ　事をはり　國をさめしゆ　天のした　四方の國べに　織田の君　たけき其の名はいやたかく　とゞろきそめて　かつ〴〵も　あかき心を　すめらべに　つくしたまひぬ　しかばかり　いさみたけびし　今川の　ますらをのこも　草の上の　露ときえぬる　松が根の　とほく久しき　其のあとを　とめきて見れば　しかすがに　涙しながる　いにしへ思ふに

反歌

松がねを牀とさだめし大丈夫の草むすかばね幾代經ぬらむ

東路を行きかふたびと立ちよりてうべもしぬびつ其のあとどころ

○みやびをとめ　源氏物語の秋好中宮等を指したであらう。

○さをしかのつまとふこはぎ　萩は鹿の花妻といふ。萬葉集卷十「奥山に住むちふ鹿の宵さらず妻とふ萩の散らまく惜しも」

○をみなべしなまめきたちて　古今集卷十九僧正遍照「秋の野になまめき立てる女郞花あなかしがまし花も一時」

○ぬぎかけし人しのはしき藤袴　古今集秋素性「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野にたがぬぎかけし藤袴ぞも」

○そこしおもしろし云々　萬葉集卷一「そこしうらめし秋山我は。」

○いつきて　大切にして。

○うましほだり　ほたりは酒を盛つて杯に注ぎ入れる丈の高い品。

○草まくら　旅の枕詞。

○ながち　長途。

○おほくと　多くとは。

○あだし人に云々　他人に親しむ勿れ。

秋の七くさの繪によみて書けるうた

いにしへの　みやびをとめの　春をおきて　心をよせし　秋山の　もみぢはあれど　朝霧の　はれ行く野べに　おきわたす　露もとを丶に　咲き匂ふ千種の花の　なつかしき　いろにしかめや　いろ〳〵に　咲けるなかにもくさ〴〵に　匂ふなかにも　さをしかの　つまとふこはぎ　秋風に　袖ふるをばな　くず花の　玉まくかづら　なでしこの　盛り久しく　をみなべしなまめきたちて　ぬぎかけし　人しのばしき　藤袴　あかぬにほひに　朝顔の　ゑみの眉さへ　ひらけたる　そこしおもしろし　秋野ぞ我は

詠瓢歌

二つなき　玉といつきて　朝よひに　かきなですゑおき　のむ酒の　うましほだりと　うるはしみ　わがもふひさご　なれをおきて　思ふ物なし　なれもまた　われをおもへ　おもしろき　野にも山にも　なれをこそ　さゝげてあそべ　草まくら　旅のながちも　なれをこそ　おひもちてゆけ　なれにより　心はなぎぬ　めではやす　人はおほくと　わがおもふ　心わすれて　あだし人に　おもひなむつび　われはも　わがよのかぎり　なれをしおもはむ

奈良乃葉能名爾於布御代廼美天不理耳宇多比都具辨幾古登能波遠許禮（ならのはのなにおふみよのみてぶりにうたひつぐべきことのはをこれ）

出雲宿禰重道詠

道光十九年己亥新秋書於長崎旅舍

吳門沉萍香

櫃園歌集終

# 空谷傳聲

釋幽眞

南紀古岳師少從茶翁遊久有詩名今又寄似此集展二十八字以爲三十一字字々淸新天籟而性靈靈々之集海公沒後千有餘年無嗣其音在今忽得岳師詩歌如聞三寶鳥聲於水雲間耳塵掃空實爲空谷跫音矣且性靈餘聲得此而傳抑得宗祖心印歟一讀之餘聊書其由以辨於卷首

壬戌春日

伊勢拙堂隱士謙識

いにしへより、法の師の世を遁れて、言の葉のはやしに遊べる、いと多かれど、圓位上人ばかり、その歌、そのふるまひにうちあひて、かはらぬはあらずなむありける。こゝに、高野の山のふもと近く庵しめて、まことの敎へをたふとび行ひながら、公請（くじやう）にも從はぬ聖あり、幽眞だいとことなむいふ。常に歌ときんの琴とを、もてあそばれけり。げにうたは、讃佛乘のえんとかや、ふるきものに見えたれば、いはむもさらなり、きんはた、僧尼令に載せられて、いましめられぬ、ひきものにしあれば、ふたつながら、つゞりの袖に、つき〲しき友なりけり。さるまゝに、樒つみ、あかくむ暇、苔なめらかなるいはほに尻かけても、まづかきならし、まさご淸らかなる汀にいこひても、まづうたひつゝ、いはゆる琴とれば、なげきさきだつとかいひけむ、ふるごとの如く物せられし、をり〲のを集めて、ひとゝぢとし、かく空谷傳聲といふ書にはせられたるなりけり。これの、櫻のもとに立ちよりては、花にそむ心のいかでと、世をすてしおもかげをしたひ、月のかげをあはれとながめては、數にもあらぬわが身のほどをかへりみて、彼の上人をまねばれ

○言の葉のはやし　言葉の茂く多きを林の多いことに喩ふ。古今序「大和歌者、託二其根於心地一、發二其花於詞林一者也。」
○圓位上人　西行。
○うちあひて　調和して。
○公請　朝廷から法會や講論に招かれること。
○だいとこ　大德。高僧。
○きんの琴　琴の琴。七絃琴。
○讃佛乘のえん　佛典を讃美する緣。和漢朗詠雜白樂天「願以二今生世俗文字之業、狂言綺語之誤一、翻爲二當來世々讃佛乘之因、轉法輪之緣一。」
○きんはた　琴も亦。
○いましめられぬひきもの　禁ぜられない彈物。
○つゞりの袖　僧衣。
○あか　閼伽。佛に奉る淸水。
○まさご　眞砂。
○琴とれば云々　萬葉集卷七「琴とれば歎きさきだつ蓋しくも琴のしたひに妻やこもれる」
○ひとゝぢ　一冊。
○上人　西行上人。

たる歌どもなれば、たとひそのすがたは似たらずとも、その心は、おなじからさらめやは、いかでか、ふみの燈のむなしくなすべき、とく〳〵の清水、とく〳〵とそゝのかして、かく板にふらせたるになむ。

文久にあらたまれるとしのかみな月

寄居子庵のあるじ

芳樹

○とく〳〵の清水　山家集下「とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな」下句の序詞。
○とく〳〵とそゝのかして　疾く疾くと促して。

○はかなきせうそこの奥に　一寸した手紙の終に。
○そへたるを　添へた歌を。
○つゞらこ　葛籠。
○自らのに　自らの歌に。
○ついでて　順序を立てて。

はかなきせうそこの奥に、一つ二つよみてそへたるを、つゞらこの中よりふと取出りでて見たるだに、すゞろに、その人がらのなつかしきを、ましてこの大德の自らのにしたしき人のをもくはへなどしつゝ、かくもゝちの數ををかしくついでて、五百重山千重の波路をかけへだてたる友だちがりおくりて、山水の清くすみなしたる幽谷のさまをも、まごゝろに告げたらむに、たれかはをかしとおもはざるべき、とくものしてその心ざしはたしたまひなむやとそゝのかしければ、あなやさし板にゑらするにつきても集の名をいかにせむ、たゞ饒舌とやおほせむ、空谷傳聲にてやたりぬべきといはるゝに、やまびこはたをかしからまし、さもあらばあれとく〳〵と、むつまじき中らひはさるものにて、うちみるからに思ひいづるまゝを。

文久元年十月ばかり

みなもとの春夫

あさもよし紀の川のほとりあらたへの藤さき山に菴しめて、行ひすますめる古岳大徳は、よにみやびかなる法師にて、その行のいとまのひまくすみ渡る日に向ひては琴をかきならし、さき匂ふ花をながめては歌をよみ出でつゝ、むらぎもの心をも慰められたりけるに、あらたまの年月積りにて、今はその詠み出でられたる歌の數もかたいとのいとあまたになれりければ、鳴のはねがきかく一とぢにかきつらねて、これがはしにたゞ一言をとこはるゝまゝに、かつ讀みみれば、かの月花はさるものにて、何くれとめづらかなるふしをさへに、をかしくいひもとほれる口つき、なまくの歌よみはづかしくよく詠みとゝのへられたるは、この大德のすき物すなる七つをの玉のを琴のこゑにかよひて、しらべもすがたもうるはしくめでたしと、めでおもはるゝことのよしを、このはしがきとかく書きつゞりてなむ。

谷　森　種　松

○あさもよし　紀の枕詞。
○あらたへの　藤の枕詞。
○かたいとの　片絲の。いとの緣語。
○鳴のはねがき　曉に鳴が羽蟲をとる爲に嘴で羽をしごくことで數の多いことにいふ。古今集戀讀人不知「曉の鳴の羽がき百羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數かく」
○いひもとほれる口つき　自由に歌へる歌ひぶり。
○なまくの歌よみ　未熟の歌人
○すき物す　好んで彈く。
○七つをの玉のを琴　七つ緒の玉の小琴。琴の琴。

○たゝずまひ　姿。
○塵のほか　浮世を離れた僧。
○したゆく水　下を流れ行く水。
○うきたるものの音　陽氣の音樂。
○一くさ　一種。
○をちつかた　以前。

不二埼いとけしきあるところなり。月雪花はさらにもいはず、古巣いづる鶯、をちかへるほとゝぎすの聲さへともしからず、まして嶺のたゝずまひ松風のひゞきなど、世ににるものもあらずかし。塵のほかなる古岳大德もこの岸はなほ捨てがたしとて、松の葉ごもりにさゝやかなる庵をむすび、なゝつをの琴を友としてしたゆく水にかきならし、やがて挹挐琴房と名づけたまへるは、いと心あるすさびなりかし。いでやうきたるものの音ははやくの世より戒めあれど、この一くさしも漏れたるは、かかるみやび法師のあればなるべし。今は五年ばかりのをちつかたにや有りけむ、河上よりくだるとてかの巖陰に棹さしよせつゝ、かかるあたりにあらまほしき菴をむすびて住ましかば、世に思ふ事なからましと思ひしを、我に先立ち給へるぞすこしにくきや。こははやく柹園翁の物せられたる挹挐琴房の記なり。一とせきさらぎばかり、上人つと來りてこの記をおのれに書かせて、山彦集と共に板にゑらせて世に傳へむとすといふ。いと思はずなる事とは驚きながら、翁のかたみ懐かしくてくりかへし見るほど、雨しめやかにふりいでて、上人の琴の音常よ

りも身にしみておぼえければ、吾が門の柳におもるあめの音を琴のしたひにこめて聞くかなとなむよみたりし。其の後世の中靜かならねば、上人も訪ひ來ずて年經ぬるを、こたびまた來りて、集は早くゑりはてぬ、紀文は更なり、この歌をも書きそへてよとて、ものにかいつけたるをとうでてあながちにせめらる。あはれおのれしも、すゞふく風のさら〳〵うち忘れにたる一ふしをさへ、手なれの琴の殊更にかくもとめらるゝまめ心を、今更にいなむしろいなといはむは、山毘古（びこ）のこたへなきこゝちにやとて、

遠山窗のあるじ廣名しるす

○おもる　重る。
○琴のしたひ　琴の腹部。萬葉集卷七「琴されはなげきさきだつけだしくもことの下樋に妻やこもれる」
○とうでて　取り出でて。
○すゞふく風の　さら〳〵の序詞
さら〳〵は篠吹く風の音に「全く」の意を掛く。
○一ふし　「ふし」は篠の緣語。
○手なれの琴の　「ことさらに」の序詞。手なれは手に馴れる意。
○いなむしろ　稻席。「いな」の緣語。
○山毘古の　「こたへ」の緣語。

# 空谷傳聲 上之卷

僧　幽　眞

立春

北山は雪猶さむし窗の外の春は梅よりあくるなりけり

春霞たな引きにけりかづらきのうねをの松の雪もけなくに

かづらきのはしき高根にうす霞なびくをみれば春は來にけり

日の本の春の光に天ざかる冰のうみも今朝はとくらむ

のがれても猶めでたしとおぼゆるは梅さく春の始めなりけり

春たてば神代にかへるこゝろすなり琴ひき山の峯の松風

梅の花まづわが宿にさく見れば春はよそにもおくれざりけり

あづさゆみはる立つけさの嬉しきはわらは心にかはらざりけり

鶯のねぐらの竹になく雀うれしきふしのはじめなりけり

春たちぬいでかの岡の雪分けてまだ世にしらぬ梅やとはまし

名所立春

---

○かづらき　葛城山。大和國南葛城郡。
○うねを　畝尾。山の麓。
○けなくに　消えないのに。
○はしき高根　愛すべき高山。
○天ざかる　遠く離れる意。
○のがれても　遁世しても。
○琴ひき山　出雲國飯石郡のを指すか。
○春はよそにもおくれざりけり　他所こ時を同じくして此所にも春が訪れた。
○あづさゆみ　「はる」の枕詞。
○わらは心　童心。
○うれしきふし　「ふし」は竹の緣語。
○春たちぬ云々　新古今集春西行法師「吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねむ」
○世にしらぬ　世に知られない。

なにはの海霞たな引き蘆の芽のもゆるかたより春は立つらむ

塚漱石が屠蘇酒をめぐまれけるに

みわよりの使こざらば梅も猶さびしき春の朝ならまし

元日

かづらきは今日もゆきけの空ながら霞たな引く木路の遠山

元日霞

春たつはきのふと聞けど雪の空けさこそかすめ松も柳も

元日雪

さき初めし梅の立枝にとよどしの雪の光もそふあしたかな

若水

よしの河けさくみそむる若水は南の山のしづくなりけり

試筆

筆のほに墨のたてとり朝東風にすぐりの海の氷とかまし

初春鶴

ちよよばふ澤邊のたづの朝ごゑに高嶺の雪も霞みそめけり

あしたづのちよ呼ぶこゑに柴の戸をあくれば霞む嶺の高松

○みわ　三輪。大和國磯城郡。酒の產地。

○さき初めし云々　千載集春權中納言俊忠「咲き初むる梅の立枝に降る雪の重なる數をとへとこそ思へ」

○とよどし　豐年。

○筆のほに墨のたてとり「ほ」は穗で槍等の刃の尖の意を含ませ、たては盾で墨の形を盾と見なす。

早春

うぐひすはいまだ訪ひこぬ山里も雪のしづくに春をしるかな

早春霞

みよし野や杉生の雪の雫よりかすみ初めたるみくまりの杜

うら／＼とかすむ生駒嶺なにはがた春のいたらぬ海山もなし

うちひさす都も雪の山里もたゞうら／＼とかすむ春かな

早春山

いろふりし雪を霞に引きかへて朝眉つくる窗の遠山

早春風

あをやぎの露のゆらぎもえならぬを梅が香なびくをすの朝風

早春鶯

雪かをるかきねの梅に鶯のまだ里なれぬ初音鳴くなり

早春梅

うすがすみいつたちそめて山里の垣根の梅を春のとふらむ

梅の花獨りかすめり鶯はいまだ音せぬやまもとの里

雪は猶ふかきまがきの山ながら埋もれはてぬ梅が香ぞする

○うぐひすは云々　新古今集春式子内親王「山深み春とも知らぬ松の戸にたえ〴〵かゝる雪の玉水」

○みくまりの杜　水分の杜。大和國吉野郡。

○生駒嶺　大和と河内との國境。

○いろふりし雪　艶姿の衰へた雪

○朝眉つくる　霞の棚曳ける姿を朝化粧した趣に見る。

○えならぬを　言ふにいはれない程よろしいのに。

○をす　小簾。

○やまもと　山の麓。

○埋もれはてぬ梅の香　あたりに匂ふ梅の香をいふ。埋れは雪の縁語。

たれ待ちて梅かをるらむ鶯もいまだとめこぬ山陰にして
うぐひすの木づたふまでは梅の花さけども寒し春の山里
春はいつ立つともしらぬ山窗の雪間にかをる梅の一枝
雪わけてかた枝まづさく梅見れば南よりこそ春は來にけれ
梅の花春かたまけて咲くからに雪は枝にもたまらざりけり

子日

おのづから霞棚引く小松原かくてぞわれは千代の色みむ
ふりはへて子の日の小松引かずともさすがに千代は祈りつるかな

若菜

老いぬれば家とふ人もあらじかし霞む春野にわかな摘む刀自
ゑぐつむと里のをとめは山澤の雪げの水に袖ぬらしけり
けふはいざ子等にまじりて片岡の雪間にもゆる若菜摘まし
わがをかの雪間にもゆる初若菜いへもなのらでつむは誰が子ぞ
かゞまれる翁もけふはかの岡にわらはさびして若菜つむなり

待鶯

梅が香はみ空にみてり鶯のいつまであけぬ谷の扉ぞ

○とめこぬ　尋ねて來ない。
○木づたふ　枝から枝へと傳はる。
○山窗　山家の窗。
○春かたまけて　春の方に向つて
○たまらざりけり　留まらない。
○ふりはへて　わざ〳〵。
○刀自　婦人。
○ゑぐつむと云々　萬葉集卷十「君がため山田の澤にゑぐ摘むと雪げの水にものすそぬれぬ」ゑぐはくろぐわゐといひ、塊莖を食用とす。
○山澤　山間の澤。
○雪げ　雪消えの際。
○わらはさびして　子供らしい氣分で。
○いつまであけぬ谷の扉ぞ　いつまでも、鶯が谷渡りして里に出て來ないことをいふ。

春がすみうとき里こそなかりけれなど鶯の來鳴かざるらむ

梅さきてことたる草の庵ながらまたうぐひすも戀しかりけり

鶯

やまざとは梅より外に春もなしよそにな行きそ軒の鶯

朝さらず來なけ鶯この梅はながためにこそうつし栽ゑけれ

聞くまゝに耳さへきよくなりにけりうき世の外の鶯の聲

梅にとひ竹にかたらふ鶯をあした夕のともがきにして

鶯よ梅はちるともさな啼きそつぎて櫻のさく世なりけり

雨かをる窓の若樹の梅が枝に初聲そゝぐけさの鶯

梅かをる軒をな捨てそ鶯よ吉野初瀬の春はありとも

うぐひすに何をかづけむわが門の梅につとめてなかぬ日もなし

鶯は梅に柳にこゑすなりなにに心をよせて聞かまし

曉鶯

うぐひすの花のねぐらの一聲を夜深き窗の月に聞くかな

おもひねのうきよの夢をさましけり曉清きうぐひすの聲

朝鶯

○春がすみ云々　上句は春霞の洽く里に及べること、即ち何れの里も春色洽きことをいふ。
○梅さきて云々　上句は梅が咲いたゞけでそれで何の不足もない草庵でありながらもの意。

○朝さらず　毎朝。
○ながために　汝の爲に。

○ともがき　友垣。相手。

○かづけむ　與へよう。
○つとめて　早朝。朝。

○花のねぐら　源氏物語初音の卷「珍らしき花の塒に木傳ひて谷の古巣を訪へる鶯」
○おもひね　物思ひながら寐ること。

あさとでをもよほし顔の鶯や外山の花の使なるらむ
花さけばまくらの山にちかづきて朝寐いさむる鶯のこゑ
うぐひすにおどろかされて春の夜の夢惜しからぬ朝ぼらけかな
鶯のねぐらながらの聲きけば朝いは人のこゝろなりけり
ほがらかに梅さく窗の有明をこはたがためのうぐひすの聲
うぐひすのなく一こゑにみいだせば垣ねのみ雪下くづれせり
あさいして梅見にもれしおこたりの耳にはりする鶯のこゑ
梅の花咲くだにあるを鶯の初こゑにほふ窗の明ほの
鶯はうき世の夢をさましけり梅さく窗のあり明のそら
花しらむ窗の外山に鶯の曉おきのこゑをきくかな
山里にすむ身の幸は鶯の朝のこゑも寝ながらにして

夕鶯

梅が枝に老うぐひすのやどるなり月もこよひは心してさせ
梅の花ちるかげ寒き夕山にあるじもとむる鶯のこゑ
かへりみる山路の梅の雫にもぬれてをにほへ鶯のこゑ
故郷のかきねの梅に鶯のむかしかたらふ夕ぐれの聲

○あさとでをもよほし顔　朝戸出(朝外出すること)を促すやうなの意。
○まくらの山　秋邊に近い山。
○おどろかされて　目をさまされて。
○ねぐらながらの聲　塒の中に居ながら啼く聲。拾遺集別伊坊「時鳥ねぐらながらの聲聞けば草の枕ぞ露けかりける」
○朝い　朝寐。
○みいだせば　眺めやれば。
○おこたり　怠り。自分の怠際。
○耳にはりする　耳に針する。耳に針さすやうに痛く聞える意。
○咲くだにあるを　咲くさへ趣あるに。
○曉おき　早起。
○あるじもとむる　馳走を催促する。
○かへりみる云々　古今集秋素性法師「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年を我は經にけむ」
○ぬれてをにほへ　「を」は歎辭。

梅閒鶯

梅が枝をうたへば梅に鶯もうれしきふしをそへて鳴くなり

柳閒鶯

手すさびに堤の小草わがつめば柳が枝にうぐひすぞ鳴く

向峯(むかつを)の花ちりしより我が門の柳になびく鶯のこゑ

竹閒鶯

かげ深き竹のはやしは鶯のこゑをやしなふところなりけり

うぐひすのこゝを我が世となくきけば竹のはやしや春の隱所(かくれが)

雨中鶯

あさぐもりおぼつかなくも降る雨に獨りしをれぬ鶯のこゑ

河邊鶯

よしの川のぼる鮎子も鶯のこゑの一瀬は過ぎがてにせむ

水邊鶯

ひさごもてくまれむものか青柳の陰にながるゝ鶯のこゑ

遠村鶯

うぐひすのこゑもうすれて青柳の煙にかすむ夕ぐれの里

○梅が枝をうたへは　催馬樂梅枝「梅が枝に來居る鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつゝ」

○手すさび　手慰み。

○あさぐもり云々　新古今集秋太上天皇「さびしさはみ山の秋の朝曇霧にしをるゝ槇の下露」

○鶯のこゑの一瀬　鶯の聲のするあたりの一つの瀬。

○くまれむものか　汲まれむものかは。汲まれない意。

○ながるゝ鶯のこゑ　水の流れる如く淀みない鶯の聲。

○うすれて　煙の緣語。

○青柳の煙　青柳が芽ぐんで遠く見ると薄煙のやうに霞んで見えぬからいふ。

鶯訓

うぐひすの軒端の梅に朝さらずわがよむ經を口まねやする

餘寒鶯

雪ながら梅が香さそふ朝風にみだれて寒し鶯のこゑ

尋梅

もみぢ葉に月におくれし片岡の梅見にいそぐ朝ぼらけかな

幽居梅

うぐひすを下樋にこめて琴とれば梅もうとくは薫らざりけり

月の瀬や初瀬はあれど我が山の垣ねも春の梅の一枝

朝ごちに春をつたへてかた枝よりなゝめに薫る梅の花かな

うぐひすも野べにうかるゝ春の日にひとり庵もる梅の花かな

梅が香のいつしかもれて垣根道たまさか人の我をとふらむ

鶯のをり／＼梅をとひこずば春もさびしき軒端ならまし

これのみを春とさだむる山里の垣根がくれに咲ける梅かな

たぐひなく籬の梅をおもふかなわがためのみは咲かじものゆゑ

鶯もあるじしてなく梅の花人のとはぬも折にこそよれ

---

○うぐひすを　鶯の音を。
○下樋にこめて　萬葉集卷七「琴されば歎きさきだつ蓋しくも琴の下樋に妻やこもれる」
○月の瀬や初瀬はあれど　それは梅の名所には月の瀬や初瀬はある事はあるが。
○朝ごち　朝吹く東風。
○なゝめにかをる　おほよそに薫る。南枝の片枝の梅花であるからいふ。
○庵もる　庵を守る。
○軒端　我が家の意。
○これのみを　梅のみを。
○わがためのみは咲かじものゆゑ　自分一個の爲にのみ咲いたではなからうものの。
○人のとはぬも云々　新古今集春西行法師「とめ來かし梅さかりなる我が宿を疎きも人は折にこそよれ」

○つれなけれども　疎々しくて來て鳴かないが。
○春うとからぬ香　春らしい香の意。「うとからぬ」は「つれなし」に照應す。
○谷の戸　谷の入口。人に知らさない仙境なれば俗世間に見られない梅が咲くといふ。
○なきからに　ない故に。
○もとめては咲かぬものゆゑ　いくら願つてもあゝ見事に咲くものではないが何故の意。古今集春讀人不知「春雨に匂へる色も飽かなくに香さへなつかし山吹の花」
○うぐひすは云々　古今集春紀友則「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」
○こゑの匂ひ　聲の美しさ。
○梅が香を云々　古今集春貫之「梅の花匂ふ春べは倉部山晤に越ゆれどしるくぞありける」
○立つことやすき梅の陰かは　古今集春躬恒「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の陰かは」

うぐひすはつれなけれども梅の花春うとからぬ香に匂ひつゝ
鶯の人にかたらぬ谷の戸をとへば世に似ぬ梅さきにけり
香をかどふ人なきからに山里の梅は盛りのひさしかるらむ
もとめては咲かぬものゆゑ梅の花香さへ色さへ世に似ざるらむ

朝　梅

ありあけの月影かすむ山までの雪もかをりて梅さきにけり
うぐひすはいまださそはぬ山本の梅にこゝろのゆくあしたかな
夢に見し人の月夜の影もなし梅ほがらかにかをる山ざと
梅の花あかぬ杪に鶯のこゑの匂ひもそふあしたかな

夕　梅

梅が香をしるべにゆけどたそがれの道たど〳〵し山もとの里
鶯の人にゆるさぬ宿ながら立つことやすき梅の陰かは

夜　梅

こゝろして月もくもるか鶯の夢かすかなる梅の下道

曉　梅

月はいつ窓の外山に沈みけむひかりを梅の花にのこして

うぐひすに夢の行方もとひてまし曉きよき梅の花園

月しらむ枕の山の明ぼのに夢をまさめの梅かをるなり

梅風

梅の花あしたの風にかをるなりいで山もとに庵はささまし

おのづから机の塵も清めけり梅が香かよふ窗の朝風

遠村梅

たゞならずかの山もとのかすめるは梅さく里のあたりなるらむ

月前梅

いざゆきて月にとはまし梅の花霞のをちのたそがれの里

月見れば梅が香きよし梅みれば月こそにほへそれかあらぬか

梅の花軒端にあまるあたら香を月より外にとふ人もなし

おぼろげの夕ならぬを梅の花香さへ色さへかすみはてつゝ

なにをかもあるじとなして匂ふらむ梅さく里のおぼろ夜の月

いにしへを誰とともにか語らはむおぼろ月夜に梅かをるなり

鶯のやどとしめたる片岡の梅もおぼろに霞む月夜か

世をしのぶあたりばかりとおもひしを梅さく里も朧夜の空

○まさめ　正眼。まのあたり。

○庵はささまし　庵を結ばう。

○たゞならず　普通と違つて。

○をち　遠方。

○それかあらぬか　匂ふのは月か梅かどちらかよくわからない。

○あたら香を　惜しい香を。後撰集春源信明「あたら夜の月と花とをおなじくは心知れらむ人に見せばや」

○おぼろげ　普通一通り。

○なにをかも　かは疑問、もは歎辭。

○いにしへを云々　玉葉集雜普光園入道前關白左大臣「古へを誰に語りて慰めむ我がごと思ふ人のなければ」

○鶯のやど云々　拾遺集雜「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかゞ答へむ」

○月夜か　月夜かな。

○世をしのぶ云々　此の上に「朧夜の空は」を附け加へて見る。

たはやすく人にゆるさぬ梅が香を空にかすむる朧夜の月

月はたゞをしみがほにもかすめども妻戸の梅の香やは隠るゝ

梅の花ひとり梢にほのめきてありあけの月は松にしづめり

こゝろなくねてあかさめや梅の花陰ふむさへにをしき月夜を

かげふみてとふ人もなし梅の花朧月夜のありあけの空

霜さゆるいはねの梅の立枝には月の影さへとまらざりけり

梅の花いつはあれどもおぼろ夜の陰ふむばかりよに似ぬはなし

鶯のこゝろなつかしみ窗ちかく梅を植うれば月もとひきぬ

うぐひすを使にやりて梅の花おぼろ月夜に人や待つらむ

月こそはおぼろにかすめ山本の梅の光はくもらざりけり

あり明の夢の行方を尋ぬれば梅よりしらむ山もとの里

曙梅

鶯の夢いかならむ梅の花ほの〲かをる窗のあけぼの

戸外梅

咲きそむる妻戸の梅を鶯のたがゆるしてか宿と定めし

行路梅

○たはやすく　容易に。
○月はたゞ云々　古今集春躬恒「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」
○妻戸の梅　妻戸の前に植つてゐる梅。
○香やは隠るゝ　香は隠れることは出來ない。
○ほのめきて　ほのかに見えて。
○こゝろなく云々　古今集秋躬恒「かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらに寐てあかすらむ人さへぞ憂き」
○こゝろなく　無分別にも。
○いはね　岩。
○いつはあれども　いつでも美しいけれども。
○おぼろ夜の陰　蘇東坡「春宵一刻價千金。花有二清香一月有レ陰。」
○よに似ぬはなし　實にこれ以上のよい趣はなし。
○かすめ　かすめども。
○窗のあけぼの　風雅集春上大納言爲兼「梅が香は枕にみちて鶯の聲よりあくる窗のあけぼの」
○鶯のたがゆるしてか宿と定めし　誰が許してか鶯の宿と定めしの意。

野らとのみおもひすぐすを鶯のおどろかしても見する梅かな

鶯にかどはかされてうぐひすもしらぬ谷間の梅をみるかな

故郷梅

すみすてて花はむ鳥もうとき世にひとりやつれぬ梅が香ぞする

軒もくち松さへふりし故郷の梅はむかしに咲きまさりつゝ

故郷のまがきの梅の花とへばあるじがほなる鶯のこゑ

忍草しのぶにたへぬ故郷の軒端ゆかしく梅かをるなり

春つげて鳥もきなかぬ故郷の垣ねの梅は花さきにけり

窗前梅

春がすみまどほに聞きし鶯のとめこぬ窗も梅かをるなり

雨中梅

鶯のあしたのこゑもしめりけり梅が香けぶる窗の春雨

小雨ふるすゞのしの屋の夕まぐれ主こひしき梅が香ぞする

梅の花雨につれなくこもるなり雪をわけにし人もとはなむ

霞中梅

松垣のひまだにわかず立ちこむる霞のまより梅かをるなり

○おどろかしても　暗く意。

○かどはかされて　だまされ連れ出されて。

○故郷の梅云々　古今集春紀貫之「人はいさ心も知らず故郷は花ぞ昔の香に匂ひける」

○あるじがほ云々　金葉集雜藤原基俊「昔見しあるじ顔にも梅が枝の花だに我に物語りせよ」

○忍草云々　千載集戀前參議親隆「東屋のをがやの軒の忍草しのびもあへずしげる思ひに」

○まどほに　間遠に。間をおいて時々。

○とめこぬ　尋ねて來ない。

○すゞのしの屋　篶の篠屋。しの竹で葺いた家。

○つれなく　平氣で。

○わかず　識別されず。

河邊梅

ゆく水にかげをたゝふる梅の花なゝ瀬落ちても猶にほひけり

井邊梅

うす月夜うかべる梅の影くめばひさごにかをる山の井の水

水邊梅

梅の花霞をもれて青柳のけぶりもかをる川づらの宿

梅邊酌月

あやもなきおぼろ月夜の梅の花たゞ香ばかりを汲むべかりけり

雪中梅

降り埋むまがきの雪をかきわけて今朝しも梅の花を見るかな

折梅

あはれしる人にとこそは向ひしか手折りぞかぬる梅の一枝

たきものに今朝はこれをやかへてまし榕にそふる梅の一枝

鶯の夢にもをしむ梅の花朧月夜に手折りつるかな

梅香留袖

立ちよればすなはち袖にかをりけりあばら籬の梅の一もと

○なゝ瀬　七瀬。多くの瀬。

○川づら　川の畔。

○あやもなき云々　古今集春躬恒「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」

○夢にも　夢の中にも。

○あばら籬　まばらな籬。

鶯よさなあやしみそ梅が香はおのれと袖にうつるなりけり

落　梅

かぐはしき雪かもふると手にとれば亂れてさむし梅の花びら

うぐひすの枝くひもたば笛のねにくやしく梅の花はちらじを

梅花飛琴上

しのびかねわがとる琴のかへす手に香さへ亂れて梅の花ちる

梅花招客

香をとめてとへばこそあれ梅の花知るも知らぬもしたしかりけり

月の瀨の梅見に行きて

こゝにして世をつくさまくおもふかな月の瀨山の梅の明ぼの

琴のねにがよはぬ松の風もなし梅が香なびく月のせの山

みわたせば嶺も麓も梅にして風のかをらぬ山陰もなし

きさらぎばかりに山ざとにて

琴とれば鶯來なき月みれば霞む軒端に梅かをるなり

山里を朝立ちいづとて

梅が香の朧げならぬ朝戸出をしこうぐひすに催されつゝ

○さなあやしみそ　人の袖に觸れたこ疑はれたこ假定して辯解したのである。
○おのれこ　梅自身から。
○かぐはしき雪云々　萬葉集卷五「妹がへに雪かも降るこ見るまでにこゝだもまがふ梅の花かも」
○うぐひすの枝云々　萬葉集卷十「春霞流るゝなべに青柳の枝くひもちて鶯鳴くも」
○くひもたば　くはへ持たば。
○香をこめて　香を尋ねて。
○こへばこそあれ　訪へばこそ。
○知るも知らぬも　知る人も知らぬ人も。
○世をつくさまく　一世を終へたく。
○琴のねに云々　拾遺集雜齋宮女御「琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緖より調べそめけむ」
○嶺も麓も云々　風雅集袋前大納言爲兼「もりうつる谷にひこすぢ日影見えて峯も麓も松の夕風」
○朧げならぬ　格別なる。
○しこうぐひす　醜鶯。醜は罵る詞。
○催されつゝ　出發を催促されて。

やごとなきあたりのなりどころにて

みそのふの梅の林にうぐひすのねざめよろしき聲を聞くかな

京の藤岡にありけるころ梅見に行きて

老のくるものとはなしに桂人月にかざせる梅の花がさ

江戸にありけるころ不二舍とともに船より杉田の梅見にゆきて

あさびらき誰か杉田にいそぐらむ梅ふく風を追手にはして

おなじころ水邊梅を

あやせがは川上とほく棹ささむ小梅わたりの春の明ぼの

柳

朽ちのこる岸の柳のうすみどり春やむかしのあさ風ぞふく

誰がために吹く笛ならむ青柳のけぶりもなびく川ぞひの里

わが門のはひりの柳誰まちて苔むす庭の塵淸むらむ

六田川くち木の柳目もはるに萌ゆればかすむみよしのの山

水邊柳

つゆけぶる木の川面の柳陰こゝろゆるして鮎子よるらむ

雨中柳

〇やごとなき云々　貴い人の別莊で。
〇老のくる云々　古今集春東三條左大臣「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」同卷十九「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」
〇桂人　山城の桂の里人。
〇船より　船にて。
〇杉田　武藏國久良岐郡。
〇あさびらき　朝開。朝に船を出すこと。
〇追手　順風。
〇あやせがは　綾瀨川。武藏國南葛飾郡。
〇小梅　東京市外向島にある。
〇春やむかし云々　伊勢物語「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして」
〇はひり　入口。
〇塵淸むらむ　地上に垂れた柳の枝が風に吹かれる狀を地上を掃除するやうに見えるのでいふ。
〇六田川　大和國吉野郡。萬葉集卷九「かはづ鳴く六田の川の川楊のねもころ見れど飽かぬ君かも」
〇目もはるに　見る目も遙かに。

ひな燕ぬれてとびかふわが門のしだれ柳に雨おもるなり

さほひめの手ぞめに染めし青柳の花田の絲に雨そゝぐなり

露ながら柳の絲のしをるゝは苦にしられぬ春雨や降る

柳隨風

春風のかよふ垣ねのさし柳となりまでこそかげなびきけれ

あらそはぬすがたを見せてわが門のしだり柳に春風や吹く

春雪

うめの花散りもやせしと手にとればあわ雪寒し二月の空

花と見てかきほの梅に鶯のなけばすなはち消ゆる雪かな

殘雪

雪の山つくりていくかふりしともまがきの梅は知らずがほなる

山殘雪

木の芽にる窗の戸明けてかづらきのうねをにかすむ雪を見るかな

雲かをる花よりうへに白雪のかゝるやかねのみたけなるらむ

餘寒

簾さへとばり帳(ちやう)さへたれこめて梅ふく風もいとふころかな

---

○ひな燕　雛燕。
○おもる　重る。
○さほひめ　春を司る女神。
○手ぞめ　自ら染めること。
○花田　薄き藍色。
○さし柳　芽ざし出た柳。
○あらそはぬすがた　柳の枝が風のまに〳〵動く姿をいふ。
○散りもやせしと　散つたのかしらんと。
○木の芽　茶。
○かねのみたけ　金の御嶽。大和國金峯山。
○とばり帳　とばり、帳は同じ物。室内に垂れ下ゆる布。

うぐひすのころはまさしく春ながらあやしきまでに冱ゆる空かな

おぼつかな梅いかならむ空さえて外山の松もかすまざりけり

餘寒風

梅が香の雪まをもるゝ山陰にかをるもさむし窗の朝風

霞

なつかしくすみれさく野に淺綠霞の袖をふるは誰が子ぞ

いづれをか今朝はとはましほの〴〵と霞む山本門ぞひの里

煙霞

とはばやとおもふうめつも山しなも霞たな引く朝ぼらけかな

夕霞

夕ばえの花なつかしみ見かへればねたくも霞む片山の里

山霞

うすがすみ眉引山のいろみれば雪にまよひしほき路ともなし

風かよふ竹のひまより山見えて窗の夕日はかげかすみつゝ

關霞

香をかどふ風もやふくとむさしのの花に霞の關はすゑけむ

○おぼつかな　心もとない。

○なつかしく云々　萬葉集卷八「春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寐にける」

○淺綠　霞の色をいふ。

○霞の袖　霞を衣の袖に見立つ。

○うめつも山しな　梅津（山城國葛野郡）山科（山城國宇治郡）。

○うすがすみ眉引山　霞の眉などともいふから、こゝは薄霞の棚引いた山の意。

○ほき路ともなし　嶮しい山路とも思はれない。

○かざふ　かざはかす。

○霞の關　霞があたりを閉ぢこめた狀を關所に見立つ。新拾遺集雜讀人不知「徒に名をのみとめて東路の霞の關も春ぞ暮れぬる」

遠山霞

常だにもあかぬすがたを春霞眉引きわたす阿波の遠山

海上霞

青海原かすみのひまにほの見えて神代おぼゆる淡路島山

松上霞

鶯よなど梅にのみ來なくらむ松も霞ににほふあしたを

春草

春雨にもゆるしめ野の若薄秋風まねくつまとしもなし

若草

こゝろしてかれやあげ巻春の野のすゞめがくれに妻もこもれり

打ちかすむ野守も知らぬかげろふのもゆる若草たれかふむらむ

故郷若草

もみぢ葉もくちてあとなき故郷にもえこそいづれ春の若草

春雨

ひばりなく窗の外山の朝ぐもりおぼつかなくも春雨のふる

あらし山よしのの花のおもかげを窗にしのべと春雨のふる

○かすみのひま云々　古今集戀貫之「山櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ」

○しめ野　標野。御獵のために占めおかれる野。
○若薄　若薄を見ればの意。
○つまとしもなし　妻にならうとも思はれない。「つま」に「端」を掛けて、若薄が成長して秋風を招くといふやうなそんな緣口も見られない意をも含む。
○こゝろして云々　古今集春讀人不知「春日野は今日はな燒きそ若草の妻も籠れり我も籠れり」
○あげ卷　子供の髪の結方から子供の意。
○すゞめがくれ　春に草木の芽や葉などが生ひ立つて、雀の隠れて見えない位になつたこと。
○野守も云々　古今集春讀人不知「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてむ」

○しく／＼と　打ち續き。
○つぎてし　續いて。
○いぶせくもあるか　いぶせくもあるかな。
○あらし小ぐら　嵐山、小倉山。
○ちぶさ　乳房。
○あやにくの　意地のわるい。
○東屋の云々　催馬樂「あづまやのまやのあまりの雨そゝぎ我立ち濡れぬその戸開かせ」
○東屋　四方葺きおろしの小屋。
○まやのあまり　廂の柱より條りて外へ出た所。葺きおろしの端。
○雨そゝぎ　あまだれ。

しく／＼とふる春雨を鶯も竹のはやしにこもりてやきく
花の香のくゆりし小簾の風絶えて松靜かなる夕暮の雨
さらぬだにおぼつかなきを春雨のけふさへはれぬ窓の遠山
二月やあたゝかならずさむからぬ空をかすめて春雨のふる
春雨はふるとしもなき軒端より柳の絲の亂れのみして
あたら世の花さくころを春雨のつぎてし降ればいぶせくもあるか
みよし野やあらし小ぐらの花故に心もしめる春雨の空
中々にいとひし窓の春雨は花をはぐゝむちぶさなりけり

朝春雨

窓の外のあけぼのくらきわが宿の櫻にそゝぐ春の雨かな
花山にこゝろうき立つ朝ぼらけあなあやにくの軒の小雨や
うぐひすのあしたの聲もかをりけり梅さく園の春雨の空
東屋のまやのあまりの雨そゝぎわがひく琴のねさへしめれり
花おもふまくらの山の夢こふる曉ねたき雨の音かな

夕春雨

うつろひてはては散るらむ山櫻この夕ぐれの雨のしづくに

花さかばいぶせからまし咲かぬまにふれ〳〵小雨窗くらくとも

草庵春雨

ひとりのみいぶせく庵にこもるかな花待つころの春雨の空

降る雨にかはづのこゑは亂れても露靜かなる草の庵かな

春月

春がすみおぼつかなさにたどりきて櫻ちる夜の月をみるかな

くもりてもはたかすみても春の月影は櫻にさはらざりけり

山櫻ちるをかなしむ夕月夜柳はけぶり梅はかすめり

櫻ちる夕かなしき片山にあまりかすめる月の影かな

鶯のやどの梢をまづしめてにくくも霞む夕月夜かな

うめかをる小簾（をす）のこなたに吹きすます笛のねながらかすむ月かな

むかつをの松をはなれて我が門の柳にかゝる春の夜の月

花山のかすみをわけしつるばみの袖にも匂ふ春の夜の月

花鳥もかすみにこもる春の夜の月のあはれぞ世にたぐひなき

梅の花ちりて移ろふ故郷の軒端に霞む春の夜の月

おぼろげに見すつべしやは櫻ちる杪（こずゑ）の空のあり明の月

---

○さはらざりけり　差支がない。

○むかつを　向丘。

○つるばみの袖　にび色の衣。

河春月

花いかだかすみにくだす川上の春もこひしき月のかげかな

春月朧

花ちらば思ひすてても出でなまし猶かげかすむ山の端の月

たがやどのあはれをこめて霞むらむおぼろ月夜の有明の空

あすはわれいづこの花かとはざらむおぼつかなげに霞む月かな

松上春月

鶯も花もねぶれる薄月夜あなたづ〳〵し誰をとはまし

遠山の尾ごしの松を過ぐるまは月も綠にかげかすむなり

柳間月

もの思ふおぼろ月夜を露だにも柳の絲にむすぼほれつゝ

うぐひすのなくねも暮れて我が門の柳になびく春の夜の月

名所春月

いにしへのあとはおぼろの春の月おし照る里に梅のかをれる

月下春宴

飲めやのめみわの味酒(うまざけ)春の夜の月と花とをみさかなにして

---

○花いかだ　花筏。

○花ちらば云々　新古今集雜西行法師「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」

○たづ〳〵し　おぼつかない。

○尾ごし　峯越し。

○むすぼほれつゝ　結んで解けない意に心のふさぎて晴れない意を掛く。

○おし照る　おしなべて照る。

○みわの味酒　大和國三輪産の美酒。

○みさかな　酒のさかな。

月前柳

六田川堤にもゆる青柳の露にもなびく月のかげかな

歸鴈

よしの川霞む朝けに立つ鴈のつばさにかゝるかづらきの雪

いそぐともこゝろしてゆけ歸る鴈越路は雪も猶ふかしとぞ

花またで北へといそぐ春の鴈朝戸出寒き空になくなり

この春はとまれかりがねみよしのの花にも家もわすらるゝ世を

春はたゞ南と人のうき立つを北にのみゆく鴈やなになり

うら〳〵とかすめる空をゆく鴈は國おもひつゝ歸るともなし

うら〳〵とかすめる空にこゑはして鴈はゆくともかへるともなし

歸る鴈なにのいそぎにこの春も花に心のとまらざるらむ

曉歸鴈

花山はかへり見もせで有明の月のよらざる天津かりがね

燕

くものいに花ちりかゝる草の屋の軒端にかへるつばくらめかな

春駒

○よしの川云々　續千載集春中宮「吉野山峯飛び越えて行く鴈の翼にかゝる花の白雲」
○朝け　朝あけ。
○かづらきの雪　葛城山の雪。

○鴈やなになり　鴈は何者であるか、わけのわからぬ者だ。
○國おもひつゝ云々　故郷を忍びつゝも歸る氣がしない。萬葉集卷十九「燕來る時になりぬと鴈がねは國思ひつゝ雲がくり鳴く」
○ゆくともかへるともなし　行くでもなければ戻るでもなく躊躇してゐる。

○くものい　蜘蛛の巣。

あさみどり霞棚引く青柳の陰の若駒月にいばゆる
あれまさるものとも見えず若草のみづの春野にあそぶ若駒

春　曙

月は猶梅の梢にさしながらほのぼのしらむ窗の遠山
花山はこのあけぼのの空ながら千歳もがもと思ひけるかな
行きくれし花のあはれもかつそひて月かげながらしむる曙

名所春曙

もゝちたび見ともあかめやよしの山月影しらむあけぼのの花

涅槃會

あかつきの猶遠ければ彼の峯に霞みてにほふ月のかげかな

山家春

鶯のかすみのひまの二聲に梅さく山の春はみちけり
都人うらやみぬべき山幸は鳥の朝ごゑ花の夕ばえ
草の戸の春のあるじよたぐひなき花の散るかた月の有明
梅さけば鶯きなくおのづから春にとみたる草の庵かな
山ざとの春のまうけのかすゆ酒みさかないづらうはぎくゝたち

○いばゆる　いなゝく。
○あれまさるもの　だんだんと性質が荒くなる物。
○若草の　みづの枕詞。
○みづ　美豆。山城國綴喜郡。
○千歳もがもと　千歳もかくありたいと。
○行きくれし云々　平家物語平忠度「行き暮れて木の下陰を宿とせば花や今宵のあるじならまし」
○もゝちたび云々　萬葉集卷六「萬代に見とも飽かめやみよし野のたぎつ河内の大宮所」見ともは見るとも の意。
○あかつきの猶遠ければ　大悟徹底心の前途遼遠なることを含めたものであらう。
○都人云々　都會の人が羨ましいと思ふ山の幸は。
○草の戸　草庵。
○春にとみたる　春の氣分が溢れた。
○まうけ　支度。
○かすゆ酒　酒の精を湯に入れたもの。
○いづら　どれにしようか、次のものでよい意。
○うはぎ　よめな。
○くゝたち　莖立。菜の薹で特に菘の薹。

毎山有春

うら〳〵とかすむ春日にみわたせばなつかしからぬ山の端もなし

水郷春

南には柳けぶれり北は花なかの流れに枕してまし

水郷春望

花山のかすみおもしろいで今日はこの川上に小船ささまし

雲雀

うなゐらのすみれ摘む野のくれちかみ霞のまよりひばり落ちきぬ

朝ぼらけ霞きらへる中空に鳴くやひばりの見えがくれして

なつかしく菫さく野を朝立ちて霞に落つる夕ひばりかな

野菫

菫草たがゆるしてかかげろふのもゆる春野の露に咲くらむ

きゞす鳴く春の野末の壺菫たが露わけし袖のなごりぞ

春雨のふる野の道のかたはらにぬれて菫の花さきにけり

遊絲

花山の夕日のなごり見かへればうす紅にかゝるいといふ

○うなゐ　髫髪兒。幼兒。

○きらへる　蔽ひ曇る。

○きゞす　雉子。

○ふる野の道　降るを布留野（大和國山邊郡）とを掛く。續後拾遺集春前中納言定家「春雨のふる野の道の壺菫摘みても行かむ袖は濡るとも」

○いといふ　いとゆふ。陽炎。

よも山の花にうき立つ春の空あそぶいとさへひまなかりけり

### わらび

花ぞうき春のみ山のしたわらび山がつならで折る人もなし

菫さく野べよりをちの露わけてうき世にしらぬ蕨折らまし

きゞす鳴く霞のをちの野司(のつかさ)にもゆるさわらびをる人もなし

雪きえてわらびもえずば西山のおどろの下を誰かわけまし

むらさきにわらびもゆなり庵近く菫さく野の遠近にして

つまどひてきゞす鳴くなり下もゆるやけ野のわらびゆきて摘まゝし

### 桃

みよし野はまだしうめ津はふりにけりわが世がほなる桃の花かな

桃の花今は咲くらむ紅に一むらかすむ川ぞひの里

もとめても人はとはぬか紅にかすむあしたの桃のはやしを

### 雨中桃

春雨のはれぬをかべに紅のいろをながして匂ふ桃かな

### 三月三日

から人のうかべし春の杯をこゝにめぐらす桃のした水

---

○あそぶいと　遊絲。

○山がつならで　山賤ならでは。

○うき世にしらぬ　憂世に知られない。

○野司　野中の丘。

○おどろ　荊棘の亂れ繁つた所。

○つまどひて　妻を戀ひ求めて。

○きゞす鳴く云々　新撰六帖「きぎすなく春の燒野のかぎわらび外山をかけてもえわたるかな」

○まだし　未だ咲かないし。

○ふりにけり　桃の花の盛りが過ぎて古びてしまつた。

○もとめても　わざ〳〵でも。

○から人の云々　曲水の宴をいふ三月上巳の日流水に臨んで酒を酌み詩を賦す宴。支那傳來のもの。

○物の音の舟　音樂を奏しつゝある我が舟。

○雪をあざむく　雪かと思はせる程白い。

○これのみを　これは花を指す。

○遠山まゆ　山の端のほのかた趣を眉墨に見たつ。眉の如き遠山。
○花のゑまひ　花の綻ぶこと。
○ひきさして　彈くことを中止して。

曲水宴

紅のかすみよどめり物の音の舟は柳のかげによせまし

梨

一ひらは小簾（をす）まく袖にこぼれきて雪をあざむく山なしの花

野遊

一もとの櫻に庵は守らせて胡蝶とともに野べにうかれむ

うぐひすにさそはれいでしわが山は八重の霞の深くなりけり

春がすみ山さへわかずこめにけりわが家いづら夕暮の空

待花

これのみをまちて日をふる山窗にこゝろ長くも咲かぬ花かな

ひかげさす窗の外くらし山櫻人待ちがての朝ぐもりして

あかず見し軒端の梅は散りにけりをのへの櫻いつか咲くらむ

かの見ゆる高ねの松のかたはらに朝ゐる雲や櫻なるらむ

朝霞遠山まゆはつくりても花のゑまひの遲き春かな

ともすれば琴ひきさしてうち霞む窗の外山のながめられつゝ

白雲はこなたかなたにかよへども我が待つ花のおとづれもなし

いざや子ら窗のむら竹すかしおけむかつをのへは花もよひせり

尋　花

たゞならぬ雲のかゝりし朝より心にわけぬ山のはもなし

こととはむかま木うるおぢしばしまて山の櫻はけふも咲かずや

雲わけてほき路とめまし山がつが袖ににげなき花の香ぞする

花かをる雲わけ行けば五百重山千重の坂路もたひらかにして

朝朗（あさぼらけ）ゆきて早見むまつち山しらめる雲は櫻なりけり

天がけるかひのくろ駒えてしがな吉野初瀬を時のまに見む

うぐひすよ道な迷ひそわが行くはかの雲かをるところなりけり

山花未開

まだ咲かぬ高野の山の花まてばあかつき遠きこゝちこそすれ

山花漸開

たゞむかふ山松のまにほの〴〵と匂へる雲やわが戀ふる花

高砂の尾上の花のうす匂ひこの曙をとふ人もがな

山姫の霞の袖のほころびてかつ〴〵にほふ花櫻かな

この夜ごろ花にうかるとみし夢は現なりけり窗のあけぼの

---

○すかしおけ　まばらにせよ。

○むかつをのへ　向の山の峯。萬葉集卷二十「見渡せばむかつをのへの花匂ひ照りて立てるははしき誰が妻」

○花もよひせり　花が咲き出しさうになつた。

○たゞならぬ雲　櫻花の咲ける趣を指す。

○心にわけぬ云々　「わく」は道を踏み分く意。あの山この山と心にかゝる意。

○かま木　薪。

○おぢ　翁。

○ほき路とめまし　險しい山路を尋ねよう

○にげなき　ふさはしくない。

○まつち山　眞土山。大和國宇智郡。

○かひのくろ駒　甲斐の黑駒。

○えてしがな　得たいものだ。

○あかつき遠き　續後撰雜正三位知家「昔思ふ高野の山の深き夜に曉遠くすめる月影」

○たゞむかふ　直接向ひ居る。

○高砂の尾上　山の峯。

○山姫の云々　續拾遺集春後久我太政大臣「山姫の霞の袖や匂ふらし花にうつろふ花の色かな」

○かつ〴〵　辛うじて。

○花櫻　櫻の一種。

かづらきの山下風に青柳の靡くを見れば花もふゝめり
朝露に匂ふ櫻の花ゑみを松のひまよりみそめつるかな

花

友と見し軒端の松もかたはらに疎くなりゆく花ざかりかな
花は世にあまたあれどものどかなる春の主は櫻なりけり
終夜終日雨に月影に見れどもあかぬ山ざくらかな
とにかくに物おもはする櫻かな嵐のあした雨の夕ぐれ
えみしらがちぶねのたからみつぐとも誰かゆるさむ山櫻花
朝露にとく咲け櫻ふりはへて今日はみやこの人もこそとへ
世にうとき深山の花は人相の鐘のひゞきもさそはざりけり
春ごとに咲きまさりゆく花みればいよ〳〵をしきわが命かな
山里もたまさか人のとひにけり思へば花ぞうれしかりける
月もれとまばらにさしし板庇花をまでとは思はざりしを
人とはぬ片山里も時めきて浮世に似たる花ざかりかな
雲かをる山さくら戸はあだし世のあらしのさそふ所ともなし
杉の戸の月にこゝろをたらはしし秋何ならぬ花ざかりかな

○ふゝめり　ふくらんでゐる。
○友と見し軒端の松　古今集雑藤原興風「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」
○とにかくに　あれやこれやと。
○えみし　蝦夷。
○ちぶねのたから　千船の寶。澤山の船に載せた貨物。
○ふりはへて　わざ〳〵。
○世にうとき云々　新古今集春能因法師「山里の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」
○春ごとに云々　後撰集紀貫之「春ごとに咲きまさるべき花なれば今年をもまだあかずとぞ見る」
○月もれと　月光が漏れ入るやうにと。
○花をまでとは　花が漏れ入るやうにとまでは。
○時めきて　時節到來して榮える
○山さくら戸　山櫻の咲いた所の意。
○あだし世のあらし　無常の世の風。
○杉の戸の云々　杉の庵に心ゆくまで月を眺めた秋もこの花盛に對しては比較にならない。

木の端の材に取るに足らぬ物さ輕蔑して尋ねこない里人。
〇おくか　奥深い所。
〇さくら戸　櫻の木で造つた戸。
〇いけるしるし　生甲斐のあること。
〇あはれとおもへ山ざくら花　金葉集雜僧正行尊「もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」
〇よの常はなし　世は無常である
〇こゝろとすめど　本心として住むが。
〇こゝろがまへ　覺悟。
〇きのふにて　過去のことで。
〇文机の塵　書見をしないこと。
〇しづたまき　數にもあらぬの枕詞。
〇數にもあらぬ　物の數にも入らないつまらぬもの。

松垣のおくかも今はあらはれて朝日まばゆくにほふ花かな
今は世に何かもとめむ霞たつ窗の外山の花さきにけり
こてふさへ露をはなれぬさくら戸の主はよその花やたづぬる
朝ぼらけにほふ櫻の花ゑみになびく霞もあはれなりけり
君が世にいけるしるしとほこらるゝ山さくら戸の花のあけぼの
きのふけふ里をあまたに契りきぬあはれとおもへ山ざくら花
大王(おほぎみ)の春の光にみ山べのこけむす庭の花もさきけり
雲わけて主やわらびもとむらむひとり庵もる山ざくらかな
よの常はなしととざせる柴の戸をあけて友待つ花ざかりかな
おのづからやまと心の色そひて櫻をいはぬ賤の男もなし
人しれぬ檜原が奥も春風に催されてや花の咲くらむ
靜けさをこゝろとすめど花さけば都の友を待たずしもあらず
とはれじのこゝろがまへはきのふにて春は友まつ花のしたかげ
文机の塵はづかしきこのごろの我がおこたりは櫻なりけり
しづたまき數にもあらぬ我ながら花にこゝろをつくしてぞ見る

花見れば露もかなしきあたらよをうたて何にかいとひそめけむ

あはれわが軒端も春の山櫻おきていづこの春か尋ねむ

我が宿の一もとざくら其の露もとふ人なしに春更けにけり

みちぬればことのかけゆく世の中に花のさかりを七日見しかな

曉花

ありあけの月影ながらしらみゆく山櫻戸の花をみるかな

曉たつぐるとよらの鐘のねも櫻にしらむかづらきの山

朝花

櫻さく窗の外山の朝朗(あさぼらけ)松のあらしもうちかをりつゝ

夕花

世にうとき山とて花のさかざらば春しも秋の夕ならまし

明日もまた見むとおもへど夕榮(ゆふばえ)の花のなごりのをしくもあるかな

月前花

なか〳〵にかすみて花はいづこともわかぬぞ月のにほひなりける

晝よりはにほひこよなし櫻花人もとはぬかおぼろ月夜を

かねの音は空にかすみて薄月のかけも櫻にさはらざりけり

○うたて　怪しくも。

○おきて　さしおいて。

○七日見しかな　萬葉集卷九「わが行きは七日は過ぎじ龍田彦ゆめこの花を風に散らすな」

○とよら　豐浦寺。大和國高市郡。

○春しも秋の夕ならまし　春でも秋の夕のやうにさびしい感じがするであらう。

○こよなし　此の上なくよろしい

春の月かげな曇りそ我が心あくまで花の見まくほしきに

夕さればわがものがほに山のはの花をかすめて月の匂へる

家遠し思ひなほして花陰を立たむとすれば月ぞほのめく

あすわけむをのへの花の薄月夜ほのかに見えて霞む空かな

雨中花

うつろはば悔しからましいざ今日は花みにゆかむ雨はふるとも

橡（つるばみ）のたもとはせばしいかにして花に覆はむ春雨の空

白雲のかゝりし山を今朝みれば櫻になりぬ春雨の空

蓑とりていざやとはまし櫻花向つ尾上の雨の夕ぐれ

雨後花

露なびくをだの柳もあらはれて花にはれ行く春雨の空

春雨のなごりの露のいろそへて花とゝのふる明ぼのの空

あさぼらけみどりに霞む山みれば宵の小雨も花はよきにき

霞中花

ねたくとも今ははれなむ薄霞おほひはつべき花のいろかは

河上花

〇思ひなほして　家に歸ることに考へなほして。
〇あすわけむ　明日踏み分け上る
〇橡のたもと　橡の汁で染めた鈍色の衣。千載集權法印慈圓「おふけなく浮世の民におほふかなわがたつ杣に墨染の袖」
〇をだ　小田。田。
〇春雨のなごり云々　新拾遺集春前大納言俊光「春雨の名殘の露の玉かつら亂れてむすぶ青柳の絲」
〇花とゝのふる　花の美趣が完全に充たされてゐる意。
〇宵の小雨　夜の小雨。
〇花はよきにき　花をは避けたのである。
〇ねたくとも　薄霞のかゝれるに憎らしくても。
〇おほひはつべき花のいろかは　花は漸く色づいて薄霞もこれを覆ひ盡すことは出來ない。

はゆまぢの引船わたし川上の花にこゝろのいそぐころかな

水邊花

世にたぐひあらしの山のふもと川月の桂も花ぐもりして

關花

いつはらぬとりの八聲に逢坂の花こそしらめ關のあけぼの

禁中花

笛のねも雲にひゞきぬ九重のみはしの櫻さかりなるらむ

鄰家花

松竹の齡あらそふ中垣も世に隔てなき花ざかりかな

朝東風に花さく宿の西鄰こぼるゝ露も垣越にして

山路花

都べの大路はあれど片くえし花の山路は行きよかりけり

毎日尋花

をとつ日もきのふもけふも見れどあかぬこの山櫻あすもとはまし

深山花

紅の霞を土にふみなしてしる人えたり山ざくら花

---

○はゆまぢの云々　萬葉集卷十一「はゆまぢに引船わたしたゞのりに妹が心に乘りにけるかも」

○はゆまぢ　驛路。

○花にこゝろのいそぐころかな　風雅集春前關白右大臣母「咲かぬ間の待ち遠にのみおぼゆるは花に心のいそぐなるらし」

○たぐひあらしの山　類あらじと嵐の山とを掛く。玉葉集秋俊成「またたぐひあらしの山のふもとの寺杉の庵に有明の月」

○月の桂　月界にあるといふ桂の木と桂川とを掛く。

○いつはらぬ云々　枕草紙「夜をこめて鷄のそら音ははかるともよにあふ坂の關はゆるさじ」、函谷關の故事に依る。

○とりの八聲　八聲の鳥ともいひて夜明に屢鳴く鷄の鳴聲をいふ。

○九重のみはしの櫻　紫宸殿の階段下にある左近の櫻。續千載集春左大臣「身の春をいつとか待たむ九重の御階の櫻よそにのみ見て」

○都べ　都の方。

○片くえし　片方が崩れた。

○花の山路は云々　萬葉集卷十五「靑によし奈良の大路は行きよけどこの山路は行きあしかりけり」

○をとつ日も云々　萬葉集卷六「をとつ日もきのふもけふも見つれどもあすさへ見まくほしき君かも」

心して咲けやみ山の櫻ばなこゝもうき世のあらし吹くなり

きのふ見し花よりおくの山櫻苔の雫もけふはにほへり

ほこ杉も苔むしにけり誰をかは知る人にして花のさくらむ

誰をかもしる人にして荒熊の出で入る山に花のさくらむ

わらびだに人に折られぬ西山の杉よりおくの花をみしかな

根來（ねごろ）の山寺の花みにまかりて

此の谷もかしこの岡も露かをる花やむかしに咲きまさるらむ

よしのの花見に行きて

花山の朝ゐる雲にうちのりてこゝろ空なり土はふめども

やよ早くあゆめ我が駒さく花の世におくれてはいけるかひなし

雲かをる花山ちかし夕ばえの空もはたよしいそげわが駒

うら／＼と日影かすみてみよしのの外も櫻になりはてにけり

よしの山心にかけし白雲を花とみるよもあればありけり

山の幸幾春ありてわれとひし花の盛りのこれの吉野を

かたはらに立ちてはみれど橡の袖はづかしき花ざかりかな

心あての松も櫻に埋れけり青嶺や花のいづこなるらむ

○ほこ杉云々　萬葉集卷三「いつの間も神さびけるか香具山の鉾杉がもとに苔むすまでに」

○誰をかは知る人云々　金葉集雜僧正行尊「もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」古今集雜藤原興風「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」

○根來の山寺　紀伊國那賀郡。

○こゝろ空なり云々　萬葉集卷十二「吾妹子が夜戸出の姿見てしより心空なり土は踏めども」心空なりは心の落ちつかない意。

○あゆめ我が駒　萬葉集卷十四「まごほくの雲居に見ゆる妹が家にいつかいたらむ歩め我が駒」

○はた　又。

○心にかけし白雲　吉野山中に籠る心を示したものであらう。

○幾春ありて　幾年目で。

○心あての松　見當をつけておいた松。

○青根　青山の嶺。松の生えた山を指す。

朝戸出(あさとで)に思ひかへせばみよしのの花はうき世の匂ひともなし
よしの山月に昔をおもひでて花の雫に袖ぬらしけり
みよし野のすゞ吹く風も打靡き花の香ならぬ松杉もなし
よし水の花の雫に橡のころもの袖をぬらしつるかな
故郷と誰かいふらむ今も猶よし野は花のみやこなりけり
おもふことなげに櫻は咲きにけり昔をしのぶ所ながらに
時しらぬふじのみ雪にならへかし我がみよしのの山ざくら花

吉水院にて

花ならぬ春こそなけれ吉水はすのこの塵も櫻なりけり

如意輪寺にて

雲まよひ風吹きすさぶ時しもあれ北になびかぬみよしのの花

西行庵にて

この春はあるじとなりて見はてましよし野のおくの山櫻花

翠亭が坊を立ちいでむとするあした

よしの山雲なさわぎそ泣きてわが花にわかるゝけさのあしたを
雲水にたゞよふ此の身のいかなれば花の下かげ立ちうかるらむ

---

○すゞ　篠。
○よし水　吉野山中の吉水院。
○故郷　舊都。
○所ながらに　所なれども。
○時しらぬふじのゝ雪　伊勢物語「時知らぬ山は富士のねいつとてか鹿子斑に雪の降るらむ」
○すのこ　簀子。縁側。
○雲まよひ風吹きすさぶ時　南北朝の爭亂を含む。
○北　北朝を含む。
○あるじ　主人。
○けさのあした　今朝。
○花の下かげ立ちうかるらむ　拾遺集夏躬恒「行末はまだ遠けれど夏山の木の下陰は立ち憂かりけり」

よし野より初瀬をかけて花見に行きける時

みよしのの花にもあかでこもりくの初瀬の山の春をこそとへ

社頭花

ちはやぶる神の心もなごむらむ御垣の櫻花さきにけり

山寺花

けしの香のくゆりかゝれる山寺の櫻は土に落ちずもあらなむ

あはれこの片山寺の櫻ばな夕の風にさそはるなゆめ

あかつきにあふこゝちしてうれしきは杉よりおくの花の夕ばえ

ちぎりありて一夜やどかる山寺のありあけ清き花のいろかな

羇中花

こゝろなく小岫(をぐき)をいづる白雲も花にわかれてゆくあしたかな

旅宿花

苔のうへに花のむしろを八重敷きて旅寝やせましみよしのの山

うす月夜おぼろげならぬ花陰に獨りこてふの夢やむすばむ

靜見花

世の中の塵にまじらぬ山陰の花にむかひて春日くらしつ

---

○こもりくの　初瀬の枕詞。

○けしの香　護摩の芥子焼きのにほひ。

○さそはるなゆめ　決して散るな。

○あかつきにあふ　開悟の意を含む。

○ちぎりありて　縁があつて。

○小岫　山の洞穴ある所。

○白雲も花に云々　新拾遺集春前内臣「明け渡る外山の木ずゑほの見えて花に別るゝ峯の横雲」

○春日くらしつ　萬葉集卷五「春されば先づ咲く宿の梅の花ひとり見つゝや春日暮らさむ」

田中有喜が花の宴にて

春がすみのめばいのちものびにけり花やいかなる藥なるらむ

花下待人

あし引のわが山櫻さきにけり思ふみやこの人もとはなむ

いかならむ時にか人をまちつけむ春もさびしき花の下庵

花ちりて後は何せむしらすには苔のむしろを敷きてこそ待て

花下人來

さゝがにのくものふるまひしるかりしたまさか人も花にとひきぬ

依花人來

もとめても櫻はあまた植ゑおかむこれあればこそ人もとひけれ

わがしむる春ともしらで花陰を心にまかす人もありけり

花下會人

今はとて來しだにあるを相見ればみなしる花のおもふどちにて

盡日愛花

時じくに咲かばいかにぞきのふけふ見れどもあかぬ山ざくらかな

花下忘歸

○思ふみやこの人　都に住む我と氣のあつた人。
○まちつけむ　待つて其の人に遭ふ意。

○さゝがにの云々　古今集卷二十「吾妹子が來べきよひなりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」「さゝがにの」は「くも」の枕詞
○たまさか　稀に。

○しむる　占むる。占領する意。

○時じくに　季節を論ぜず何時も
○いかにぞ　如何にうれしからうぞ。

○たどりこし　念頭を去らない意
○のがれにし山　世を遁れて來た山。
○入相のかねに云々　新古今集春能因法師「山里の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」
○見いだす　眺めやる。
○あぢきなく　つまらなく。
○ひとりのみ　自分一人で。
○寒からぬ空云々　後撰集春貫之「櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける」
○あかぬ　見飽かぬ。
○かぎりある　草の命には限りがある。
○散るか　散るかな。

うたひつゝゑひたふれつゝ愚人の猶あきたらぬ花の夕榮

栽花

わが命きえなむ後の露までも置かまくおもふ花のうへかな

落花

よしの山夢に現にたどりこし春も悔しく散る櫻かな
散る花のなごりの露の身にしみてあしたさびしき春もありけり
のがれにし山もうき世の外ならず松ふく風に櫻ちるなり
入相のかねに櫻のちりしよりひとり見いだす松の月影
雨風にものおもふよをあぢきなく散るか櫻の音もせずして
山ざくら咲きて散るまでひとりのみあはれ今年も見はてつるかな
寒からぬ空に亂れてふる雪はあかぬあしたの櫻なりけり
散るをだにもてはやされて世の中にうらやましきは櫻なりけり
かぎりあるものとおもへど目の前に花ちる見ればかなしかりけり
いさぎよく雨にひらきていさぎよく嵐に散るか山ざくらばな
咲きにほふ花は櫻とおもひしを散るさへ花は櫻なりけり
うぐひすの枝ふみならす朝風に亂れてさむし花の白雪

朝風に花の吹雪のつもりけり浮世の外のちりひぢの山

おのづから花は散るらむあらしだにさそひもあへぬ山かげにして

もてはやす人しなければ山里の花は散るだにしづけかりけり

ゆくりなく小簾に散りいる一ひらは花さそふ風の情なりけり

山がつがつゞりの袖につゝみてもかなしきものは櫻なりけり

少女子が袖にみだるゝ白雪は菫さく野のさくらなりけり

苔にちる岩ねの花はかの見ゆるよしのの雪のくだけなりけり

いかにせむとなりの松はそれながら櫻ちるなりゆふぐれの空

きゞすなく片山つきの櫻花今か散るらむ見る人なしに

山風に花ちる見ればわがこゝろわれて碎けてせむすべもなし

今は翁(おきな)いでゐの酒をのみつくせ花あればこそ人もとふなれ

咲きてちるうきよの花の一さかり猶わが夢のさめがてにして

山里の月雪ふかきあはれをも空にかすめて散るさくらかな

朝落花

櫻ちる窓の外山の朝朗(あさぼらけ)こてふの夢はさめずやあるらむ

月前落花

---

○浮世の外のちりひぢの山　俗世界ならば本當の塵泥で穢しいが、花の吹雪の塵泥だから超俗的のものだといふ。

○さそひもあへぬ　誘ひ散らすことも出來ない。

○ゆくりなく　思ひがけなく。

○つゞりの袖　つぎ合はせた衣。

○くだけ　碎けたもの。

○片山つき　片山に寄り附き生えてゐる意。萬葉集卷十二「足引の片山きゞし立ちゆかむ君におくれてうつしけめやも」

○今か散るらむ云々　萬葉集卷十「阿保山の櫻の花は今日もかも散り亂るらむ見る人なしに」

○わがこゝろ云々　萬葉集卷十二「聞きしより物を思へばわが胸はわれてくだけてとごころもなし」

○いでゐの酒　客間の酒。

○空にかすめて　空にほのめかして。

こゝろある人もとはぬか櫻ちる朧月夜のありあけの空

笛のねも空にすみ行く夕月夜影おもしろく散る櫻かな

櫻ちる夕さびしき山鄕は月より外にとふ人もなし

八重霞けしきばかりは心せよ花ちる里の春の夜の月

雨中落花

うぐひすのなくねもぬれて春雨に散る花さむし春の山陰

松間落花

しとゞなく庭のまがきの山櫻松の雫にぬれて散るなり

柳間落花

夕風に亂るゝ花をわが門の柳の絲よぬきてとめぬか

川上落花

むつた川柳はなびく春風にあわとうかびて花ぞながるゝ

よしの河櫻よどめる柳陰鮎つる翁棹なみだしそ

關落花

直(たゞ)こえに誰かは越えむあふ坂の關のこなたに櫻ちるなり

深山落花

---

○こゝろある人云々　後撰集春源信明「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや」
○こゝろある人　風雅心のある人
○山鄕は云々　古今集春讀人不知「鶯のなく山里の夕暮は風よりはかにとふ人もなし」
○けしきばかりは　少し位は。
○しとゞ　ほゝじろ。
○夕風に云々　古今集春僧正遍照「淺綠絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」
○ぬきてとめぬか　貫き留めないか。
○あわと　沫のやうに。
○直こえに　廻り路せずにまつすぐに。
○あふ坂の關のこなたに　古今集戀在原元方「音羽山音に聞きつゝ逢坂の關のこなたに年を經るかな」

櫻ばなよしや散るともみゝがねの土になふみそ春の山伏

故郷落花

家とへば家もあとなし花とへば花もあとなく散りはてにけり

鶯のなにとて我をさそひけむ散る花寒き故郷の春

閑庭落花

雨風は枝をならさぬ君が代に春も今はと散る櫻かな

田上落花

苗代にせきもとめぬか櫻人小田の大井に花ぞながるゝ

花ちりて後木村先生が山里をとひければ

わが宿の一もと櫻散りにけりくやしくも今日とはれつるかな

花散山静

むらさめも松のあらしも山櫻ちりての後はしづけかりけり

苗代

かはづなく小田の大井をせき分けて苗代水に引くはたが子ぞ

苗代の水のいそぎにさくら人蛙のこゑもせきや入るらむ

軒つたふ筧の水も山里はなはしろ小田にかけてこそひけ

○みゝがね　耳我嶺。大和國吉野郡。

○家とへば云々　萬葉集卷九「國とへど國をも告らず家とへど家をもいはず云々」

○雨風は云々　新拾遺集春御製「吹く風の枝を鳴らさぬ春だにも何をかごとに花の散るらむ」

○苗代に云々　風雅集春儀子內親王「櫻散る山下水を堰き分けて草に流るゝ小田の苗代」

○櫻人　尾張國愛知郡作良の人。催馬樂「櫻人其の舟ちゞめ島つ田を千町作れる見て歸りこむ」

○いそぎ　急ぐこと。

山吹

駒とめて見しよの春のおもかげもまさめになびく山吹の花

よしの川ながるゝ春をせきもあへず夏へとなびく峯の山吹

こととはで行かれむものかなつかしき宿の垣ねの山吹の花

誰がゆひし八重の垣内(かきつ)の春ならむ色なつかしき山吹の花

なほざりに誰かは過ぎむ蛙なく井手のわたりの山吹の花

おもふこといはでもそれと知られけり露にほのめく山吹の花

かはづ

故郷のいたゐの蛙誰まつと雨になくらむ友なしにして

小なぎさく田中の井戸にいにしへを雨にかすめて鳴く蛙かな

石(いそ)の上(かみ)ふるの山田の水口にかはづなくなり雨の夕ぐれ

杜若

まこも生ふる野澤の水のかげすみていろ淺からぬ杜若かな

池水は袖つくばかり淺けれど紫深く匂ふ花かな

おもだかの下葉がくれの杜若さすがに色はおくれざりけり

つゝじ

---

○駒とめて云々　新古今集春俊成「駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井出の玉川」

○まさめに　眼前に。

○よしの川云々　新千載集冬前大僧正範意「早瀬川流るゝ年を堰きかねていまはた老の波ぞ數添ふ」

○こととはで行かれむものか　わざわざ訪問しないで行かれる術はないか。

○蛙なく井手の云々　新後拾遺集春小町小町「色も香もなつかしきかな蛙鳴く井手のわたりの山吹の花」

○井手　山城國綴喜郡。

○思ふこと云々　古今集卷十九素性法師「山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へず口なしにして」

○ほのめく　ほのかに見える。

○いたゐ　板井。板でかこまれた井。

○小なぎ　小水葱。水葱。鴨舌草催馬集「田中の井戸にひかれる田なぎつめ〱あこめ」

○かすめて　ほのめかして。

○石の上　「ふる」の枕詞。

○水口　田に水を堰き入れる口。

○野澤　野にある澤。

○袖つくばかり　袂の先が水に浸る位。萬葉集卷七「廣瀬川袖つくばかり淺きをや心深めて我が思へらむ」

○淺けれど　深くに照應す。

○おもだか云々　風雅集春中納言定家「おもだかや下葉に交る燕子花花踏みわけてあさる白鷺」

○おくれざりけり　劣らない。

水はしる山川岸のいはつゝじ下照るかげもにごらざりけり
天をとめなでにし袖のなごりかも巖のつゝじ色に咲きけり

藤交松

むらさきの花の藤波立ちしより松のあらしは吹きたゆみつゝ

蝶

そことなく花にうかるゝうたゝねの夢の行方は蝶ぞしるらむ
まつはれて花にさまよふ胡蝶こそわがたましひのなれるなりけれ
花ちればうかれ心の靜まりて菫の牀に蝶もねぶれり
すゞな咲く片山畑に飛ぶ蝶のうかれごゝろのはてぞしられぬ
春の野のすみれあらそふうなゐらが袖にこぼれて飛ぶこてふかな
から蝶は誰が夢路をかとめゆきし尾上の櫻ちりはてにけり
夢に見しこてふとともにうちむれて霞む春野にけふもくらしつ

呼子鳥

よぶこ鳥わがすむ山のおくに猶かくれし花のありとなくらむ
わかばさすよし野のおくのよぶこ鳥春もむかしの花になくなり

春情處々

○下照るかげ　水面にまで照り輝くつゝじの色。
○天をとめ云々　謠曲羽衣「君が代は天の羽衣稀にきて撫づとも盡きぬ巖ぞと聞くも妙なり東歌」四十里四方の石を百年に一回天女が柔衣の袖を以て撫でるといふ佛說。
○色に咲きけり　麗しい色に咲いた。
○藤波　藤の花。波といふので立つといひ更にあらしに關係させた立ちしは咲いた意。
○そことなく　何所となく。
○うたゝねの夢の云々　莊周の故事を踏まへたのであらう。
○まつはれて　からみついて。
○なれる　變化す。
○片山畑　片山にある畑。
○はてぞしられぬ　際限がない。
○うなゐ　幼童。
○から蝶　唐蝶。あげはの蝶。
○とめゆきし　尋ね求め行つたか
○ありと　ありと思ひて。
○わかばさす　若葉生え出す。

○あらのら　荒野ら。
○朝戸もよほす　朝方戸をあけることを促すやうである意。
○起きよ〳〵　萬葉集卷十六「吾が門に千鳥しば鳴く起きよ〳〵我が一夜妻人に知らゆな」
○こら　兒等。
○ふかみ草　牡丹。
○紅の塵の外　紅塵の外。俗世界外。
○いほりかは　庵かなの意。「は」は添へ詞。
○しとゞ　ほゝじろ。

わがこゝろ吉野初瀬にうかれでて宿はぬしなき故郷の春

故郷春

あらのらに郷はあれてもかぐはしく梅さく見ればむかし思ほゆ

いにしへの春もゆかしくとひくれば花も柳も神さびにけり

春朝

うぐひすの朝戸もよほす起きよ〳〵いでこら梅を行きてはやみむ

幽居牡丹

櫻ちる片山陰のふかみ草わがよ顔なる花のいろかな

深見草露ににほへり紅の塵の外なるわがいほりかは

遲日

うら〳〵とかすむ春野をゆく駒の陰ふむ道の遠くもあるかな

春鳥

いにしへをとへば答へで櫻ちる雨のまがきにしとゞなくなり

春筏

よしの川霞をくだす花いかだ春の行方はなれぞしるらむ

春海

潮みちて和歌の浦なみかたをなみ霞にまがふ春の釣舟

春浦

住吉のおまへの濱の汐干潟貝ひろふ子の家やとはまし

春川

あさもよし木の川上にさをさしてよし野の花の雫くままし

青柳のかげになびきし笛のねもうかびてかすむ春の川水

川水も春はいそがぬ夕日影若鮎（わかゆ）釣るおぢ家やわすれし

春里

まぐさ刈るうなゐはなりの家とへば霞のをちの三日月の郷

暮春

花おそき山ふところのよぶこ鳥なけども春はとまらざりけり

暮春川

雲と見え雪と匂ひし跡もなし霞ながるゝみよしのの川

暮春月

花ちりて露もかなしき片岡に何そは月の影かすむらむ

三月盡

○潮みちて云々　萬葉集卷六「和歌の浦に潮みち來れば潟を無み蘆邊をさして鶴鳴き渡る」
○かたをなみ　干潟が無いので。
○霞にまがふ春の釣舟　新古今集雜藤原孝善「須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ蜑の釣舟」
○住吉のおまへの濱　新葉集雜前中納言爲忠「住吉のおまへの沖の潮あひに浮び出でたる淡路島山」
○あさもよし　「き」の枕詞。
○木の川上　紀伊國の紀の川上。
○おぢ　翁。
○うなゐはなり　髫髮放。童。
○三日月の郷　伯耆と美作との境に三日月の中山があり、そこに三日月の森がある所を指したであらう。
○雲と見え雪と匂ひし跡　櫻花を指す。
○霞ながるゝ云々　新千載集春讀人不知「春風に霞流れて吉野川水の上行く花の白波」
○何そは　何故。

○何にしか　何で左樣に。

○一本の花云々　玉葉集春平貞時朝臣「一本の花の光をそへむとや霞まで出づる春の夜の月」

○何の葉ごもり　どの葉陰に隱れてゐるか。

○明くるにまたぬ花　明日をも待たで散る花。

○おもふことなげにも　我を思はず心安らかにも。

○家はうし　家は憂し。俗世間はいやだ。

藤つゝじ猶いろあせぬ山陰をいでていづこに春のゆくらむ

わか葉さすかげだにあるを何にしか人は春のみたゞ惜しむらむ

花のうたのうちに

よしの山ねたくも雲のかゝるかな覆ひはつべき花ならなくに

曉のかねのひゞきも待ちあへずほの〴〵にほふ山ざくらかな

一本の花のひかりに山陰の草の庵も春めきにけり

山ざともたまさか人を待ちつけて恥ぢぬ櫻の花ざかりかな

落花のうたのうちに

うぐひすは何の葉ごもりわが袖にみだれてさむし花の白雪

なか〳〵に明くるにまたぬ花ならばものおもはせで咲かぬまされり

杉の戸に我をのこしておもふことなげにも散るか山の櫻の

家はうしいで山里と入りにしをうきもかさねて散る櫻かな

花ちりて都こひしくなりにけり草の庵は誰にゆづらむ

## 山彦集上之卷　終

# 空谷傳聲　中之卷

### 首夏

窗の外のいさゝむら竹吹く風の音のよろしき夏は來にけり

### 更衣

はゞせばき貲布のころも夏きてはよそめさへこそかろげなりけれ

みよしのの花の雫にぬれ〳〵しつゞりの袖をたちやかふべき

### 深山餘花

ほとゝぎすはつね聞かむとわけいればみ山は花のさかりなりけり

うばそくが行ふ山の櫻ばな夏さへ雪と散り亂れけり

神仙の杉よりおくの櫻ばなしる人なしに咲きて散るらむ

山深み春におくるゝ花故に苔の雫もかなしかりけり

あなあはれ夏を時なる花故に杉よりおくはとふ人もなし

### 殘花

わらびをる子等にまじりて谷陰の嵐もしらぬ花をみるかな

---

○いさゝむら竹云々　萬葉集卷十九「わが宿のいさゝむら竹吹く風の音のかそけきこのゆふべかも」いさゝむら竹は葉の茂つた叢竹(古義)。

○貲布　經絲の數の少いのを意味して、しなのきの皮を紡ぎて織つた布。

○たちやかふべき　裁ち切つて作りかへようか。

○うはそく　優婆塞。俗人で佛道に仕へる男。宇津保物語藏開下「うはそくが行ふ山の椎が下あなそはそはしここにしあらねば」

○春におくるゝ云々　古今集夏紀利貞「あはれてふことをあまたにやらじとや春に後れてひとり咲くらむ」

○時なる　盛りの時である。

○嵐もしらぬ　風にも吹き散らされない意。玉葉集賀院御製「雲の上九の重ねの宿の春嵐も知らぬ花ぞのどけき」

夏山の青垣淵にかげ見えて匂ふも清き花ざくらかな

世の中の春をそがひの山陰にひとり匂へる花ざくらかな

殘鶯

山ざくら散りてかそけき葉隠れの露に老いせぬ鶯のこゑ

夏山の木のくれがくれ鶯の誰がいにしへの春をとふらむ

新樹

木の芽煮てしづかに向ふ窗の外の遠山眉もうすみどりせり

神祭卯月立つらし熊野人露もけにもる葉廣くまがし

江戸にありけるころ新樹を

いつまでか花に心のくもるらむ若葉すゞしき日ぐらしの里

新竹

露清く生ひたつ竹の行末もみはてまほしき窗のあけぼの

庭樹結葉

陰清き庭のさくらの青木立散るをなげきし梢ともなし

新樹妨月

くらきまで若葉の櫻しげりけり朧ながらに月は見えしを

---

○青垣淵　垣のやうにめぐり立ちたる深い淵。
○そがひ　背向。世間一般の春にそむく意。

○かそけき　かすかなる。

○けにもる　笥に盛る。笥は物を入れる器物。萬葉集卷二「家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にあれば椎の葉に盛る」
○葉廣くまがし　葉が茂つて廣くなつたくまがしの木。
○日ぐらしの里　東京市外の日暮里。

○陰清き庭云々　爲尹千首夏「これや見し櫻の山の青木立おもかげうとく茂りあひぬる」青木立は青青した木立。

熊がしのすゞめがくれをもれいでて露にしづける三日月の影

樹陰烹茶

木の芽烹てまてども人はとはぬかな春さへうとき山陰の庵

山家卯花

夏山のしげ木がもとの花うつ木月もおよばぬにほひなりけり

子規いつかとふらむ山里の垣ねのうつ木時めきにけり

うの花の垣ねの雪の山ごもり夏かげさむき住居なりけり

夕月夜雪とにほへるうつ木原陰ふむ道の満くもあるかな

待郭公

ほとゝぎすあたら月夜を松風の音のみ聞きてあかすべしやは

子規あいなだのみに小夜更けて月さへうとく過しつるかな

子規いつを待ちてか鳴かざらむありあけの月夕ぐれの雨

ほとゝぎす里をあまたにちぎるとも卯の花山はとはで過ぎめや

うの花も雨のくたすを子規いつまでよその空になくらむ

川のべの楝(あふち)の花はちりゆくを山ほとゝぎす今日も音せぬ

かはづのみ聞きあかしけり子規耳をとなへて待つとせしまゝ

---

○熊がしのすゞめがくれ　熊がしの葉が雀のかくれる位に生長したもの。
○露にしづける　露に映つて見える。
○しゆ木　繁つた木。
○花うつ木　花の咲いたうつぎ。
○垣ねの雪　雪は卯の花の白きをいふ。
○ほとゝぎす　ほとゝぎすよ来鳴けの意。
○あいなだのみに　あてにならないことをあてにして頼みに思ふこと。子規が来るだらうと空だのみすること。
○里をあまたにちぎる　古今集夏読人不知「時鳥ながなく里のあまたあれはなほうとまれぬ思ふものから」どの里へも飛んで行つて鳴く。
○くたすを　腐らすのに。
○楝の花はちりゆくを　萬葉集巻五「妹が見し楝の花は散りぬべしわが泣く涙未だひなくに」
○耳をとなへて　耳を調べて。聞耳をして。

月前待郭公

更けぬとも宿は戸ささじ時鳥かならず來なく月夜なりけり

しのび音はいづくの鄕ぞ時鳥田中の松に月はかゝりぬ

幣はせむなけほとゝぎすおもふどち耳とゝのふる月夜なりけり

たがためにしのぶの岡の子規この花匂ふあたら月夜を

居明かしていでや待たまし子規もだしはつべき月夜ならねば

月影は松より西に傾きぬ山ほとゝぎすさてもとはぬか

人傳郭公

子規はつね聞きつといふ人の耳のすくせぞうらやまれける

ほとゝぎす

子規卯の花山の一こゑはうき世の塵もまじらざりけり

杜宇月より淸きこゑすなり卯の花山のしのゝめの空

山鳩の雨よびすてし片岡に一こゑもらすほとゝぎすかな

世の中を卯の花垣にへだてても我にとひよるほとゝぎすかな

幸ひの種をいつしかまけばかも山子規きかぬ日もなし

ほとゝぎすいとふ時なし夕月に雨の朝にをちかへりなけ

○幣はせむ　御禮をするからの意幣は御禮として贈る物。
○おもふどち　親しい仲間。
○たがためにしのぶの岡　誰の爲に忍ぶとしのぶの岡（東京市下谷區の忍岡）とを掛く。續古今集秋俊惠法師「何事をしのぶの岡のをみなへし思ひしをれて露けかるらむ」
○居明かして　夜あかしして。萬葉集卷二「居明して君をば待たむぬばたまのわが黑髮に霜は降るとも」
○もだしはつべき　默し果つべき
いつまでも鳴かずに居られる。
○さてもとはぬか　さて〳〵訪はぬかな。
○耳のすくせ　耳の宿世。宿世は前世よりの因緣。耳の幸運の意。
○うき世の塵云々　時鳥の聲の淸くて超俗的なるをいふ。
○山鳩の云々　風雅集雜前中納言爲相「谷陰や木深き方にかくろへて雨をもよほす山鳩の聲」
○卯の花垣　憂の意を掛く。
○いとふ時なし　いつ聞いてもよい。萬葉集卷十「時鳥厭ふ時なしあやめ草かつらにせむ日こゆ鳴きわたる」
○をちかへりなけ　拾遺集夏躬恒「杜鵑をちかへり鳴けうなゐこが打垂髮の五月雨の空」

世をしのぶ山ならなくに時鳥猶しば〳〵は來なかざりけり

ほとゝぎす世にほこらまく思ふかな柴の扉のあけくれのこゑ

時鳥槇の板戸の明けくれに聞くを心のおごりにはして

若葉さし夏陰くらき山窗にはつこゑ洩らすほとゝぎすかな

時鳥一聲

かたらはむ待て時鳥一こゑはあまりつれなき夕ぐれの空

月前子規

ほとゝぎす所えがほの一こゑや卯の花山のありあけの空

子規なきていづこに過ぎぬらむ獨りありあけの月をのこして

おもふことなき身に何をしのべとか山子規月になくらむ

かたらはむうき世の外の友もがな山子規月になくなり

花こそは山口もあれ子規月にいづこをさしてとはまし

時鳥ながゆくかたに影見えてあり明寒き山の端の月

時鳥ちこゑ月夜にとよむともわがすむ山はうごかざりけり

かづらきのをごしをいでて時鳥あり明清き月になくなり

しのび音は折にこそよれ時鳥月にうかれて人もとふ夜を

○世にほこらまく　世に誇りたく

○心のおごりにはして　自慢にして。

○かたらはむ待て時鳥　時鳥よ待て、共に語らはう。

○所えがほの　得意氣の。

○かたらはむうき世の外の友もがな　共に語るべき隱遁者の友を欲しい。

○山口もあれ　咲くべき所として山の入口もあれども。

○ちこゑ　千聲。

○とよむ　鳴き響く。

○をごし　山の峯を越すこと。

○折にこそよれ　場合によるべきで、かかる夜には鳴くべきである。

夕月夜よにはゞからぬ山窗を忍びねになくほとゝぎすかな

ほとゝぎすいもとせ山はいつ過ぎてすみだ河原の月になくらむ

あふち散るさほの河原の夕月夜なら山かけてなくほとゝぎす

子規なく一こゝろに見いだせば卯の花月夜さやけかりけり

ほとゝぎす宿らばやどれ草の戸もなが知る月の主(あるじ)なりけり

まだ宵とおもひの外に子規松より西の月になくなり

向峯(むかつを)の松よりのぼる月までばまづこゝろもらす子規かな

ほとゝぎす里をあまたに契りても終(つひ)の行方は山の端の月

子規京(みやこ)の人に宿かして聞かせまほしき夕月夜かな

曉子規

ほとゝぎすいづちゆくとて朝まだき見はてぬ夢を驚かすらむ

今はとて山子規來なくらむ夢かすかなるありあけの空

子規たれまちえてか高野山曉ふかき月になくらむ

子規なくひとこゝろに月落ちて松山しらむありあけの空

二こゝろにおもひたらして杜宇こよひの月を見はてつるかな

ほとゝぎす曉ふかく鳴きすてし卯の花山はしらみはてけり

○はゞからぬ　遠慮のいらない。忍びに對す。
○いもとせ山　大和國吉野郡。
○すみだ河　角田川。大和國宇智郡。
○なら山　奈良山。春日山から西北に連る山。
○見いだせば　外を眺めれば。
○宿らばやどれ　この草の庵に留る心あらば留れよ。
○草の戸　草庵の主人。
○なが知る月の主　汝も知合なる月を愛して眺める人。
○終の行方　最後の行き場所。
○ほとゝぎすいづちゆく　古今集夏紀友則「五月雨に物思ひ居れば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ」
○驚かす　醒ます。
○今はとて　今こそ鳴くべき時なれとて。
○おもひたらして　滿足して。

夕子規

今なくは子規かもあなうれしわが松山の夕ぐれの空

夜子規

五月やみ月さへうとき山窗に來てはかたらふ子規かな

雨中子規

ほとゝぎす雨やどりせよわが山の青葉の櫻陰もしげれり

ほとゝぎす契りうれしく五月雨にぬれても來鳴く夕ぐれの空

ひとこゑはそれと聞けども子規あなおぼつかな五月雨の空

おもふそらやすからなくにおほゝしく雨に來て鳴く子規かな

雨夜子規

月のおもは雨雲とぢぬ子規今はいづこの空になくらむ

舟中子規

夕なぎに片帆おろせば子規生駒たかねの月に鳴くなり

ほとゝぎすなく一こゑを追手にて須磨のうらわを急ぐすゞ船

かぢ枕ねざめてきけば子規磯山ちかき月になくなり

京にいでてたたむとしける頃子規を聞きて

○わが松山　松に子規を「待つ」意を掛く。
○うとき　照らない意。「かたらふ」に對す。
○かたらふ　鳴く意。
○雨やどりせよ云々　詞花集秋前大納言公任「何方へ秋の行くらむわが宿に今宵ばかりは雨宿りせよ」
○ひとこゑは云々　源氏物語花散里「時鳥こととふ聲はそれなれどあなおぼつかな五月雨の空」
○おぼつかな　子規の聲か否か明かでない意。
○夕なぎに云々　萬葉集卷二十「難波門を漕ぎ出で見れば神さぶる生駒高根に雲ぞたなびく」
○追手　追風。
○すゞ船　鈴船。驛路の鈴を附け大船。
○かぢ枕　船の中に寐ること。

○百敷の　大宮の枕詞。
○耳もかしこし　聽覺が鋭いから
○御さと　御里。都。
○とめきて　尋ね來て。
○大内山　禁中。
○御さき追ひ顔に　御先拂ひをするかの如くに。

○橘寺　大和國高市郡。

○よこ山の里　横山。和泉國泉北郡にあるのを指すか。

○やよや　呼びかけの詞。

---

なにしかもひとり行くらむ子規みやこはわれも戀しかりけり

都子規

百敷の大宮人は子規耳もかしこしこゝろしてなけ

月清み御さととめきて子規大内山の松になくらむ

賀茂に行幸ありける年都のほとゝぎすを

大皇の行幸の御さき追ひ顔に鴨山過ぐるほとゝぎすかな

社頭子規

すみよしの松をはなれて時鳥なごしの岡の月になくなり

古寺子規

ほとゝぎすたがいにしへを尋ぬらむ橘寺の雨の夕ぐれ

近藤政景が會に名所子規

子規こゝもうしとや住のえの松をはなれて月に鳴くらむ

里郭公

蚊遣たく煙うすれて子規一こゑなびくよこ山の里

旅宿子規

やよやまて山時鳥諸ともにあすはみさとの月をとはまし

草枕たれしのべとて時鳥有明がたの月になくらむ

やがてわが歸りきなむと契りしをこゝにしもなく子規かな

もとつ人山子規故郷に歸れとなくか家もあらなくに

首夏山

いつしかも霞のころも脱ぎかへて翠(みどり)になれるかづらきの山

渡子規

ほとゝぎす都の月にいそぐらむ淀のわたりの夕ぐれのころ

橋上子規

誰まちて鳴きわたるらむ子規月にとかけし前のたなはし

市子規

人しげき市のちまたも子規はつねはものに紛れざりけり

夕まぐれ誰が袖ふりて子規八十のちまたに聲を立つらむ

石榴市(つばいち)の八十の街に子規いくらの沓代(くつて)えてかなくらむ

なにはの梅垣内にありて五月のすゑつかた山郷にかへらむとするほど月のいと清かりける夜子規をききて

かへらむにしかじと鳴くか子規堀江の月も捨てがたきよを

---

○もとつ人　馴れ親んだ子規を擬人的にいふ。

○淀のわたり　淀の渡し場。淀は山城國久世郡。

○前のたなはし　家の前の小川に架けた棚橋。棚橋は板で棚のやうに懸け渡した橋。

○ものに紛れざりけり　物のさわがしい音に紛れず聞える。

○ふりて　觸れて。

○石榴市の云々　萬葉集卷十二「石榴市の八十のちまたに立ちならし結びし紐を解かまく惜しも」古今集俳諧歌「いくばくの田を作ればか時鳥しでの田をさを朝な〳〵呼ぶ」石榴市は大和國磯城郡。

○かへらむにしかじ　不如歸の譯語。

○堀江　難波の堀江で、現今大阪道頓堀より長堀に亙る間。

子規驚夢

北窓のすゞしき夢をさましつる聲にくからぬ子規かな

菖蒲

雲居よりあやしき曉が軒かけてあやめかをらぬ朝風もなし

五月五日

あやめ葺く軒端涼しき明ほのに一こゑかをる山ほとゝぎす

あながちに千代をむさぼる心にはあらぬ軒端もあやめふくなり

早苗

早苗とる子らが袂を吹く風にくろの柳のかげもなびけり

うゑわたす早苗なびきて寶田(たからだ)の八束足穗(やつかたりほ)の秋も見えけり

橘

うけらたく煙なびきて橘の花の香すゞし軒の夕風

まきむくのたまきの宮のあたら世に立ちおくれても薫る木(こ)の實か

雨中橘

あとゝめむかたこそしらね橘の花の香くゆる雨の夕ぐれ

橘風

○あやしき　賤しい。

○千代をむさぼる心　長命を欲する心。

○あらぬ軒端　蒲菖を葺くべきでない家。隱遁者の家の意であらう

○くろ　畔。あぜ。

○寶田　田の美稱。

○八束足穗　八束もある程實り垂れた穗。

○うけら　をけら。菊科の草で乾かしたものは蚊遣に用ゐる。

○まきむくのたまきの宮　纏向の珠城宮は垂仁帝の皇居で、大和國磯城郡。

○木の實か　木の實かな。

○あとゝめむかたこそしらね　橘の香の行先きを尋ねることは出來ないけれども。

夕立の雲のかへしに橘の花の香おくるあての山風

樗

あふちさく岸の司（つかさ）は子規待たでも來なくところなりけり

五月雨の雫ひまなき山窗にこぼれてにほふ花あふちかな

ほとゝぎすなく一こゑに雨はれてあふち花ちる川づらの里

百合

山がつがむすぶ垣根の朝露にぬれて匂へる姫ゆりの花

夕立のなごりの露のさゆり花世にもとめたるゑまひともなし

五月雨

きのふかもいろづきそめし梅の實を土に落して五月雨ぞ降る

水鷄のみ來てはおとなふ柴の戸をこもりはてよとさみだれの降る

なでしこの生立いかにはゝしろはけふもさ月の雨ごもりして

月影のしづかにすみしわが門のあか井もにごる五月雨のころ

子規おとづれうとくなりにけりはれぬか今日もさみだれの空

うぐひすのやどりしめたる梅の實の黄ばめるまでも晴れぬ雨かな

山家五月雨

---

○夕立の雲のかへし　夕立の雲を吹き返す風。
○あての山風　「あて」は足代で紀伊國有田郡。
○岸の司　岸の小高い所。
○ひまなき　絶えず落ちる。
○ほとゝぎすなく一こゑに　古今集紀貫之「夏の夜の臥すかとすれば時鳥鳴く一聲に明くるしのゝめ」
○川づらの里　川邊の里。
○夕立のなごりの露　續拾遺集夏式乾門院御匣「夕立の名殘の露ぞおきまさる結ぶばかりの庭の夏草」
○きのふかも　「かも」は歎辭。まあ折角昨日の意。
○こもりはてよと　いつまでも籠れよとばかり。
○なでしこの生立云々　撫子に愛子の意を掛く。はゝしろは母代で自分を指す。
○あか井　閼伽を汲む井。

さみだるゝ垣内(かいと)の谷の水音に友よぶ鳩のこゑも聞えず

河五月雨

さはだ川淺く見えしは昔にて高橋(たかはし)わたすさみだれのころ

旅中五月雨

いづかたに今夜(こよひ)まくらはさだめまし野べもうき世のさみだれの空

五月雨晴

さみだれのはれ間おぼえて岡のべの松の葉越しに夕日さすなり

水鷄

水こえて秋もたゞよふ席田(むしろだ)の柳がくれにくひな鳴くなり

月前水鷄

いでくひなありとこたへて柴の戸を明くれば月の影ぞさしける

夏月

子規をちかへりなく山松の葉ごしの月をひとりかも見む

ほとゝぎす待つとせしまに枕づく妻屋の月も傾きにけり

あかくめばひさごに影をうつしけりうきよの外の夏の夜の月

夕がほの垣ほの露に影さして夏もなけなる月のすゞしさ

---

○さはだ川云々　萬葉集夏藤原顯仲朝臣「五月雨に水まさるらし澤田川槇の繼橋浮きぬばかりに」澤田川は山城國相樂郡。

○高橋　高く架けた橋。

○まくらはさだめまし　寢ようか

○席田　美濃國本巣郡。

○ありとこたへて　水鷄が戸の外に居ると答へて。水鷄が戸の外に鳴いてゐるので。

○をちかへりなく　繰りかへし鳴く。

○枕づく　「つま」の枕詞。

○妻屋　夫婦の寢室。

○あか　閼伽。

○垣ほ　垣。

○夏もなけなる　夏も無いやうな

遣水にかげをひたして四阿のまやの軒もろ夏の夜の月

かやりたくよそめすゞしも東屋のまやの餘りの夏の夜の月

夕立のなごりの露に草の戸の秋をあらそふ月のすゞしさ

夕月夜露にぬれつゝなでしこの垣ねの道は過ぎがてにする

すゞしさは露に餘りて椽の袖にあへなき夏の夜の月

島山をめぐりて遂に姫ゆりの露に傾く月のかげかな

樹陰夏月

水枝さすそともの岡の青木立もりくる月のすゞしくもあるか

すゞしさはやれし軒場にあまりけり庭の杉間の夏の夜の月

雨後夏月

雨はるゝ端山の末の露ながらこぼれて匂ふ夏の夜の月

夕立の雲はあとなき山の端にすゞしき月のところえがほや

さみだれのいぶせく見えし雲はれて柳に靡く夏の夜の月

河上夏月

よしの河月のかげさへあかぬよに山ほとゝぎす鳴きわたるなり

○遣水　庭に堰き入れた小流。
○四阿のまやの云々　續拾遺集夏太上天皇「あづまやのまやの軒端の短夜にあまり程なき夏の夜の月」四阿のまやは四阿のこと。まやはあづまやの略。
○東屋のまやの餘り　源氏物語紅葉賀「人妻はあなわづらはし東屋のまやのあまりも馴れじとぞ思ふ」まやの餘りは葺きおろしの端をいふ。
○秋をあらそふ　秋の涼しさと匹敵する。
○島山をめぐりて　月が難を侵して求めむとする女を捜し廻る意味を感ずる。
○姫ゆりの露に傾く　月が求むる女を得た感じがする。
○水枝　みづ〳〵しい若枝。
○青木立　青々とした木立。
○すゞしくもあるか　涼しくもあるかな。
○やれし　破れし。
○露ながら云々　新續古今集春常磐井入道前太政大臣「山櫻うつろふ頃は露ながらこぼれて匂ふ花の下風」
○ところえがほや　得意氣なるよ
○いぶせく　鬱陶しく。

〇[illegible]
集夏前右兵衞督爲敎「露深き庭のあさぢに風過ぎて名殘すゞしき夕立の空」

〇夢ばかり　ほんの少しばかり。
〇さめゆく　夢の緣語。

〇とりたてて　格別に。

〇あはれよの塵云々　此の一首なでしこに愛子の意を掛け、歌の裏の意味も愛子に關係を持つ。
〇まひはせむ　幣はせむ。御禮に物をあげやう。
〇花なくたしそ　花を腐らすな。

夕立のたこのすゞしき河首の[illegible]

夏草

あはれその里のうなゐもからざりし露の姫ゆりなでしこの花

さらぬだに野中古道荒れ行くを露の下草茂りあひにけり

紫陽花

夢ばかりむすぶ垣根の露のまに色のさめゆくあぢさゐの花

合歡木

山陰にねぶり花さくとりたてて誰にみすべき色ならなくに

瞿麥

なでしこのあしたの露に咲くみれば土に生ひにし色ともなし

夕立は軒ばの松に亂れけりいかゞしてましなでしこの花

土さけててる日はからし松陰のたつ夜はぐゝめなでしこの花

雨中瞿麥

あはれよの塵はするじと養ひしわがなでしこに雨そゝぐなり

夕立の雨よ降るともまひはせむゆめなでしこの花なくたしそ

鵜川

かゞり火は水尾にしづみて在田川鵜船をてらす夏の夜の月

あはれその闇はてらさぬかゞり火のてらす早瀬に鵜川立つなり

螢

玉すだれ捲きて月待つをとめ子が袖に光るは螢なりけり

風こゆる堤の草の袂より露とこぼれてちる螢かな

水底の玉と見えしは草にほふ螢の影の雫なりけり

草むらの露の命の消ゆばかり何にこがれて飛ぶ螢ぞも

てる月に光けたれて飛ぶ螢わかばはなにの葉がくれの露

夕露のあるかなきかの草の戸に何をもとめてもゆる螢ぞ

橋朽ちて岸のひたひの左右を飛ぶか螢の見えがくれして

立花の香さへ亂れて在田川夕川風にほたる飛ぶなり

籠中螢

夜ひかる玉の臺もなにせむにあはれ螢は籠のうちにして

照射

五月やみさつ矢手ばさみほぐし指すかげともしらで鹿のよるらむ

なにしかも闇をば時と木がくれてともしさすらむ丈夫にして

○水尾　水脈。河海中船の往來する深い水路。
○在田川　紀伊國有田郡。
○闇はてらさぬかゞり火　闇を照らすのが目的でない篝火。
○鵜川　鵜飼。
○草の袂　草を衣と見た上で、袂といふ。草葉の所からの意。
○露とこぼれて　露のやうに光りこぼれて螢の光り飛ぶのを露のこぼれるに見立つ。
○水底の玉と見えしは　螢の光が水底に映る有様をいふ。
○草にほふ　草に這ふの誤りであらう。
○草むらの露の命の消ゆばかり　草むらに宿る露の如きはかない命の消えるほども。
○光けたれて　螢の光を消されて
○夕露の　夕露の如く。
○あるかなきか　さゝやかな。
○岸のひたひ　岸額。岸のさし出た所。
○立花　橘。
○夜ひかる云々　新千載集夏後宇多院御製「夜光る玉とぞ見ゆる水くらき蘆の波にまじる螢は」竹取物語「むぐらはふ下にも年は經ぬる身の何かは玉の臺をも見む」夜光る玉の臺は夜光の玉で飾られた臺で、それとても螢の光に對しては劣ること萬々の意。
○照射　獵師が夏夜山中に篝火を焚き或は火串に松明をともし、鹿がそれに寄り來るのを待つて射殺することをいふ。そのともす火をもいふ。
○さつ矢　獵矢。狩獵に用ふる矢。
○ほぐし　火串。照射の松明を夾む木。

夕顔

山がつがつまをり垣もたゞならず露にほのめく夕がほの花

たれか住む一重檜垣の白露もこぼれて匂ふ夕がほの花

あはれこのやれし垣ねに咲く花の名さへ露さへとふ人のなき

蚊遣火

たちむろのけぶりかをれり夕月夜蚊の細ごゑはよそに靡きて

蓮

おのづからにごれる水に開き出でて佛さびたる花のいろかな

朝まだき露さへ玉の音すなり誰がためひらくはちすなるらむ

池水のにごりにそまぬ心をば露にみせたる花はちすかな

あらざらむ終のすみかの花蓮露もしたしきあさぼらけかな

朝ぼらけ蓮一ひら咲きにけり露吹く風に玉の音して

雨中蓮

立花の香さへしめれる五月雨にしをれもあへぬ花はちすかな

氷室

眞玉なす若葉の露も氷室守貢にそへてたてまつるらむ

○[illegible]

○丈夫にして　若くゝ男子であつて。

○つまをり垣　端折垣。

○たゞならず　格別の趣がある。

○たちむろ　立室か。

○佛さびたる　佛らしい。

○池水のにごり云々　古今集夏僧正遍昭「はちす葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」

○あらざらむ終のすみかの花蓮　來世淨土の九品蓮臺の上をいひ、其の花蓮と思へばの意。

朝まだきみはしをわたる風寒し今か氷を奉るらむ

### 夕立

かづらきや誰かは雨をいのるらむよこ山すぐる夕だちの雲

高鴨をたちまちこえて夕立の雲こそさわげ高安の里

たゞよひしたかねの雲の末はれて野中の松にかゝる夕立

かづらきの尾ごしの雲の崩れきて夕立すなり風猛(かざらき)の里

なる神はさほ路を過ぎて夕立のなごりすゞしき奈良の山風

川上は夕立すらし里の子がにごるやなせに鮎子待つなり

### 水邊夕立

露なびく柳がもともうきせにて釣の絲ふく夕立の風

### 蟬

夕立の過ぎゆく岡の松原にしぐれそめたる日ぐらしのこゑ

### 扇

手にとれば音のよろしきつまあふぎたれ松風をたゝみこめけむ

夕月夜軒ばをいづるかはほりの翅にかをる風のすゞしさ

なつかしきあふぎの風は夕がほの花の主をとめて吹くらむ

○みはし　御階。宮中の階段。
○誰かは　「は」は歎辭。
○高鴨　大和國南葛城郡。
○高安の里　河内國中河内郡。
○風猛の里　紀伊國那賀郡。
○なる神　雷。
○さほ路　佐保路。大和國添上郡。
○やなせ　梁を架けてある瀬。
○しぐれそめたる　蟬時雨の時雨と同じで、時雨の降るやうに鳴き初めた意。
○つまあふぎ　爪扇で、小さい扇であらう。
○たれ松風云々　誰が松風を扇の中に疊んで入れておいたのであらう。
○かはほり　蝙蝠。
○とめて　尋ねて。

避暑

なにせむに玉のうてなも音清き軒の松風谷のしたみづ

よのなかをしばしのがれて笹の葉のひまもる月の影をこそまて

苦熱

いづこにかまくらむすばむ水はしるこのいはどこも日かげさすなり

喜雨

ちまち田の穂なみ靡きて野司(のづかさ)の柳も松も雨かをるなり

泉

夏山のしげきが奥の岩間より音さへさむく水走るなり

いざゆきて口そゝがまし岩きりて玉をめぐらすたきつ白波

納涼

すゞしさに家路わすれぬ楝ちる岸の司を夕あさりして

川納涼

ほり江川蘆の葉わけの夕風に船は任せて月も見てまし

風かよふ夕川岸の柳陰すゞしき秋のみなとなりけり

笛のねを誰かは月にすますらむ夕川風に秋をながして

○なにせむに云々　音清き……みづあらば玉のうてなも何せむやの意。

○まくらむすばむ　野宿をしよう

○いはどこ　岩牀。岩の平らかな所。牀と「まくら」とは緣語。

○ちまち田　千町田。廣い田。

○雨かをるなり　雨が煙り霞む。

○岩きりて　岩を切り通すやうな銳い勢ひで。

○玉をめぐらす　飛沫が珠玉の如く散る樣をいふ。

○夕あさりして　夕方そゞろ歩きをする意。

○ほり江川　難波堀江。大阪の道頓堀邊。

○葉わけの夕風　葉と葉との間を押し分けて吹き來る夕風。

○誰かは　「は」は歎辭。

○秋をながして　秋の凉しさを思はせての意。「ながして」は川の緣語。

さらぬだに涼しき月をほり江川小舟うかべて今夜みるかな

月いでぬいでや船人棹やめよ風の心にまかせてを見む

水邊納涼

夏されば山下しみづなつかしみすゞみがてらに人もとひけり

松下納涼

松風は枕に馴れて木の芽にる窗のけぶりもすゞしかりけり

島山の巖の松の下かげは夏のいたらぬところなりけり

竹風涼

月影の露とこぼるゝ組垣にそよぐも寒し竹の下風

いつはあれど風のすゞしきたかむらの鄕に夏は住むべかりけり

晩涼

片岡の夕の風に楢の葉のそよぐを聞けば夏としもなし

松風五月寒

松たかみ照る日もしらぬ陰とへば夏さへ寒き袖のやつれや

夏川

吉野川夕日かげろふ上つ瀬にたが小綱とりて鮎子待つらむ

---

○さらぬだに　たゞさへも。小舟を浮べて見なくてさへも。
○風の心にまかせてを見む　風の吹くがまゝに舟を進まして眺めよう。「を」は歎辭
○夏されば　夏になると。
○組垣　竹木を組合せて造れる垣
○いつはあれど　左樣な所に住むことは四季いづれもよいけれど殊に。
○たかむら　篁。竹林。
○松たかみ　松が高いので。
○袖のやつれ　著物の見苦しさ。著物の薄いことを指す。

夏山田

おのづから苔の下水まかせきて山田は雨もいのらざりけり

晩夏蟬

松垣の夕の露になく蟬や秋のしらべのはじめなるらむ

夏祓

はらへする川風淸き柳陰こゝろにのこる塵だにもなし

あなすゞしあなすがくしみそぎ川心の塵もみな月の空

立秋

かやりたく煙うすれて山桐の一葉になびく秋の初風

花鳥の春もさびしきわが宿の葎をわけて秋は來にけり

うたゝねの夢もすゞしくさめてけり竹の露ちる秋の初風

幽栖秋來

なにとなくもののあはれになり行くはすなはち秋の來るなりけり

露しげきむぐらが庭は花薄いつ穗にいでて秋まねきけむ

初秋風

〇まかせきて　「まかす」は水を引くこと。流れて來て。

〇雨もいのらざりけり　雨乞をする必要もない。

〇こゝろにのこる云々　續千載集卷十前大納言爲氏「おのづから心に殘る塵もなし淸き流れの山川の水」

〇みそぎ川　禊をする川。

〇心の塵もみな月の空　心の塵も皆盡くの意と水無月祓の空とを掛く。

〇花鳥の春も　花咲鳥歌ふ春でさへも。

〇花薄　薄の穗を出したもの。

〇いつ穗にいでて云々　いつの時に穗を出して、秋を招き寄せたのであらう。薄の穗が風に靡く趣は手で人を招く形に似て居るのでいふ。

まくず吹くそともの岡の夕風に露をかなしむ秋は來にけり

片岡のあしたの露の花薄ほのかに秋をおほめかしけり

殘暑

秋風はよその荻吹くつまなれば門の柳の陰によらまし

七夕

花鳥の春さへあるをなにしかも秋の七日と契りそめけむ

をとめ子がたむくる琴の音ふけてかそけくなりぬ燈（ともしび）の影

天の川秋霧深く立ちこめてこよひの月夜明けずもあらなむ

二ほしのけさの別れにつく息の空に亂れて秋霧や立つ

相撲

かた庭をふみはらゝかすさま見れば遊びがたきの童ともなし

靈祭

はちすばの露にほのめく月影はわがちゝはゝの靈（たま）かあらぬか

萩

花すゝき袖ふる野邊に紫の匂ひよろしき萩が花づま

露霜にやつれし袖も匂ふまでふる野の眞萩花さきにけり

○まくず　眞葛。葛。
○おほめかしけり　ぼんやりと思はせる。
○つまなれば　たよりあるものであるから。
○門の柳の陰によらまし　門側の柳の葉陰を訪れて涼しい風を送つてもらひたい。
○かそけくなりぬ　かすかに細くなつた。
○天の川云々　古今集秋讀人不知「戀ひ〳〵て逢ふ夜は今宵天の川霧立ちわたり明けずもあらなむ」
○秋霧や立つ　秋霧が立つたのであらうか。歎息が凝つて霧になつたのかと疑ふ。
○かた庭　地面の堅い庭。
○ふみはらゝかす　踏み蹴散らす　古事記「堅庭は向股に踏みなづみ沫雪なす蹶ゑはらゝかして云々」。
○遊びがたき　遊び友達。
○花すゝき袖ふる云々　萬葉集卷二十「宮人の袖つけ衣秋萩に匂ひよろしき高圓の山」
○萩が花づま　花妻は萩の異名。萩が花づまは萩の花のこと。
○ふる野　布留野。既出。

さを鹿よふみな散らしそ朝露に濡れて匂へる秋萩の花

胸わけてを鹿出で立つたかまどの小野の秋萩花さきにけり

日ぐらしの鳴きからしたる岡のべの露も色なる秋萩の花

萩が花つかひやるべきかたもなし露の籬は秋ふかくして

萩が花さきて亂るゝ紫野露のしめ野に袖ふるやたれ

行路萩

ま萩ちるゆききの岡の夕露にたもとぬらさぬ旅人もなし

古鄕萩

なぐさめて見るとはすれど故鄕の露に亂るゝ秋萩の花

野萩

むらさきの誰が袖ふれし野べならむ露も色なる秋萩の花

萩上露

宮城野の朝の露にさき匂ふ小萩が花を袖にすらまし

薄

石(いそ)の上古野(かみふるの)の露をわけくれば尾花が袖に秋風ぞふく

花すゝき招く袂のほころびに秋風寒し野べの夕ぐれ

○胸わけて　胸で草を押し分けて。萬葉集卷二十「ますらをの呼び立てしかはさを鹿の胸分け行かむ秋の萩原」
○露も色なる　露も美しい。
○つかひやるべきかたもなし　萩を見に來るべく使を人に遣る方法もない。
○紫野露の云々　萬葉集卷一「茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖ふる」紫野は紫草の生えてゐる野。しめ野は御獵のため占めておかれる野で、萬葉の歌は近江國蒲生野を指す。
○ま萩ちる云々　萬葉集卷八「飛鳥河ゆききの岡の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ」ゆききの岡は既出。
○なぐさめて　我が心を慰ましめて。
○誰が袖ふれし云々　古今集春讀人不知「色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」
○宮城野の云々　源氏物語桐壺「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」宮城野は陸前國宮城郡。
○すらまし　摺らまし。
○石の上　古い枕詞。
○古野　布留野と同じ。
○花すゝき招く云々　新千載集秋元輔「花薄招く袂はあまたあれど秋はとまらぬものにぞありける」
○ほころび　「寒し」と緣語となる。

露すがる初花すゝき穂にいでて誰まねくらむせばき袂に

女郎花

白露に袖はぬるともをみなへし思ひすつべき秋の野べかは

塵の世にあだな立つとも何かせむいでをみなへし手折りてをみむ

うらがれし尾花が袖のかたはらに露もいろめく女郎花かな

朝顔

朝露に咲きそふ花の色みればやがて移ろふものとしもなし

なでしこの露にやつるゝ山郷の垣ほにあまる朝顔の花

きのふわれむすびし露の草の戸に一ひらひらく朝顔の花

朝顔はいかなる露をいのちにてあさな〱にあらたまるらむ

ありあけのあかぬ別れをなぐさめて露に見いだす花の朝顔

有明のしらめる露に時めきて目ざめよろしき朝がほの花

せばくとも袂おほはむ朝顔の露の籬に日影さすなり

山深み霧の籬の朝顔はひつぢ過ぎてもしをれざりけり

松垣にはひまつはれて咲きながら千代をならはぬ朝がほの花

ゑみながら露にさき立つ朝顔の花の心はしるべくもなし

---

○初花すゝき　秋になつて初めて穂の出た薄。
○せばき袂に　狹き袂にて。
○あだな　徒名。浮氣の評判。
○手折りてをみむ　「を」は歎辭。
○うらがれし　末枯れし。草木のこずゑや葉末の枯れる意。枯れしに「離れし」の意をも掛く。
○やがて移ろふ云々　すぐに色のかはるものとも思はれない。
○なでしこの露云々　古今集戀讀人不知「あな戀し今も見てしが山賤の垣穂に生ふる大和撫子」
○むすびし露の草の戸　作つた露けき庵。「むすびし」は露の緣語。
○いかなる露云々　後撰集秋讀人不知「秋の野にいかなる露のおきつめば千々の草葉の色かはるらむ」
○露に見いだす花の朝顔　露に濡れた朝顔の花を眺めやる風情。
○時めきて　勢ひよく榮えて。
○せばくとも袂おほはむ　日光を避ける爲に袂は狹くとも朝顔の花を覆うてやらう。
○霧の籬　霧のかゝつた籬。
○ひつぢ　ひつじの誤り。未は午後二時三時。
○千代をならはぬ　松の千年の齡を見ならはない。
○ゑみながら露にさき立つ　笑みつゝ露よりも先に消えゆく。

世のなかを露にへだてし草の戸の心にかなふ朝顔の花

籬朝顔

露のまも千代にあへよと竹垣を八重ゆひそへし朝顔の花

あさがほの花を籬に住みなして世をいとふ友を我はえにけり

鄰家朝顔

世の中をへだつる露の垣間よりこぼれて匂ふあさがほの花

小車をしのびによせし組垣の東鄰の朝がほのはな

雨中朝顔

つやめきし露も亂れて朝がほの垣ね悲しきむら雨の空

葛

片岡の松のはざまにはふ葛を秋の衣に織る人もなし

稻妻

いなづまのひらめくよひの露のまに門田のわさほ傾きにけり

露

かりそめにむすぶ蓬が庭もせに玉しく露は誰をまつらむ

世に立たむうつし心も朝顔の朝の露におもひしづめつ

---

○草の戸の心　無常觀を指す。
○露のまも　一瞬の中にもの意を掛く。
○住みなして　咲かしての意。
○世をいとふ友　もろくもしぼむ朝顔を指す。
○しのびによせし　こつそり寄せた。
○わさほ　早稻穗。
○蓬が庭も云々　蓬の茂つた庭も狹い位一面に玉のやうに美しくおりた露。
○世に立たむうつし心　立身出世しようと思ふ正氣の心。
○おもひしづめつ　心のはやるを抑へた。

蟲鳴きて何かもとむるおく露に草の袂もくたす夕を

原露

道もせに露はおきけり淺茅原尾花が袖も夕じめりして

行路露

草の葉の夕の露をながめてもゆくへさだめぬ身をなげくかな

山家鹿

鹿の音をさびしきものと思ひしはまだ山なれぬ心なりけり

いづくにか庵結ばむ鹿のねの悲しからざる山郷もなし

ま萩ちるゆめのの露を夕さればわが世の秋と鹿のなくらむ

山ざとの秋のあはれを人とはば鳴きて答へよさを鹿のこゑ

さを鹿よなになぐさめに世の中はかけはなれたる宿をとふらむ

幽居鹿

かくばかり馴れむものとは思ひきや霧の籬のさを鹿のこゑ

夕露に鹿のなく音もしめりけりけだしや招く萩が花妻

月前鹿

月こなくこの秋山の[illegible]

---

○くたす　腐らす。

○いづくにか庵云々　千載集雜俊成「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」

○ゆめの　夢野。攝津國武庫郡。

○わが世の秋　我が天下の秋。

○秋のあはれ　鹿の聲がそれである。

○かくばかり云々　新葉集雜中務卿宗良親王「思ひきや手もふれざりし梓弓起きふし我が身なれむものとは」

○けだしや招く云々　恐らく萩の花が招くのであらうの意。

○あるじ　馳走。馳走とは下句の月に美しく見える小萩を鹿に見せることである。鹿と萩との關係は以上の諸歌でも明かである。
○山本　山の麓。
○遠の山　遠の高いのを山に見立てる。
○こゑやはいづこ　「は」は歎辭。
○たか野山　紀伊の高野山。
○朝さらず　毎朝。
○かり人もおもひたえてや　狩人も斷念してか。
○露と見はてし　露のやうに無常のものと觀じた。
○草の戶　草庵。
○よすがにて　たよりとして。
○秋をつくすか　秋を鳴き盡すかなの意。

さらぬだに都の空の戀しさを[illegible]

鹿來鳴けあるじわれせむ柴の戶の小萩が露も月ににほへり

霧中鹿

朝霧は松よりはれてさを鹿のこゑ遠ざかる山本の里
ほど遠く思ひし鹿は霧こむる遠の山に來鳴くなりけり

深山鹿

さを鹿のこゑやはいづこ秋の山そこともわかず霧こめにけり
たか野山霧の遠に朝さらず來なくさをしかあはれともなし

山寺鹿

かり人もおもひたえてやとはざらむ遠山寺のさをしかのこゑ

旅宿鹿

さらぬだに家のこひしき秋の夜を夢野の月にをしか鳴くなり

蟲

夕されば やがてあるじとなりにけり遠が庭の鈴蟲の聲
きり〴〵す何もとむらむ世の中を露と見はてし草の庵に
草の戶のはかなき露をよすがにて秋をつくすか松蟲のこゑ

ひとりねのまくら露けし蛬（きりぎりす）なれをかなしむ朝ならぬを

故郷蟲

故郷の秋の夕のきりぎりす鹿きくよりはあはれなりけり

旅宿蟲

旅衣つゞりさせてふ蛬なくねもさむくさ夜ふけにけり
草枕夜さむの牀の露そへて秋をふかむるきりぎりすかな

鶉

花すゝきまねくあら野の夕月夜をりあはれにもなく鶉かな

霧

木の芽にるけぶりも今朝は立ちそひてうす霧なびく秋の山ざと
こゝろあてにとめこし松もわかぬまで夕霧ふかししづはたの山
あさぎりの立野の牧のはなち駒いなゝく聲やいづこなるらむ

海邊霧

あびきする聲やはいづここゆるぎの磯山松も霧こめにけり

秋夕

なぐさむるそらこそなけれあさぢ原萩もすゝきも露の夕ぐれ

○露けし　涙に濡れる意を掛く。
○旅衣つゞりさせてふ蛬　古今集卷十九在原棟梁「秋風に綻びぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴く」旅衣の綻びを綴り刺せといふ風に鳴くきりぎりすの意。こほろぎの鳴聲を「肩させ裾させ」等といふ。
○秋をふかむる　秋の感じを深くする。
○まねく　風に靡く。
○あら野　荒野。
○をりあはれにも　玉葉集雜西行法師「つくづくと物を思ふにうちそへて折あはれなる鐘の音かな」
○立ちそひて　霧に交つて上り。
○こゝろあてにとめこし松　それと推量して尋ねて來た松。
○わかぬまで　分らない程。
○しづはたの山　賤機山。靜岡市の北隅。
○あさぎりの立野の牧　後撰集秋藤原忠房朝臣「秋霧の立野の駒をひく時は心にのりて君ぞ戀しき」朝霧の立つと立野の牧（大和國生駒郡）とを掛く。
○はなち駒　放ち飼ひにせる馬。
○あびきする　網引する。
○聲やは　「やは」感嘆調。
○こゆるぎの　「いそ」の枕詞。
○磯山松　磯邊の山に生えた松。
○なぐさむるそらこそなけれ　寂しくて心を慰めやうもない。

さびしさは世のことわりを山鄕もたへぬは秋の夕なりけり

松蟲のうらみも鹿のかなしきもひとつおもひの秋の夕暮

旅秋夕

なぐさめて鹿はなくらむ旅にして家の戀しき秋の夕を

野分

妻問ふとを鹿出で立つ小萩原露も亂れて野分ふくなり

あはれなる花もまじれりあさぢ原そゝや野分の吹きなみだしそ

待月

おもふどちいよすかゝげて月まてば薄雲もなく窗の遠山

月

おきあかしたゞあらむよりはいざ行きてあかゐの月の影を汲ましを

たゞむかふ小峽の松もあらはれて月の秋こそよひなりけれ

よしの山花にくもりし跡までもこゝろにわくる秋の夜の月

宵々に板間もりきて音もなく香もなき月のむつまじきかな

何事もわが世にとりてうつしみよ月は神世のかゞみなりけり

よしとみる容はしばしの秋の月むかしこひしく小夜更けにけり

〇世のことわりを　世のことわりなるを。浮世に於て當然のことであるが。

〇山鄕も云々　山里でも寂しさに堪へられないは秋の夜である。

〇ひとつおもひ　同じ心。

〇なぐさめて　我が心を慰めるつもりで。

〇旅にして　旅にて。旅にあつて。

〇妻問ふと　妻問ふとて。

〇小萩原　小萩の生えた原。

〇そゝや　風の音に「すはや」と驚く意を掛く。

〇いよす　伊豫簾。伊豫國から產する。

〇おきあかしたゞあらむよりは　起きてゐてたゞぶらりと夜を明かすよりも。

〇あかゐ云々　閼伽井の水を汲まうの意。

〇たゞむかふ　さし向つてゐる。

〇小峽　小さい峽。

〇板間もりきて　新續古今集秋貫[illegible]院關白左大臣「山里の寢ざめの牀のさ筵に板間洩り來る有明の月」

○ものはみなたらはぬ　衣食住の物質的材料の缺乏をいふ。
○心にとみて　精神の安樂なる意「とみて」は「たらはぬ」に對す。
○をす　小簾。
○ませのま萩　籬の萩。
○露の身をおく所　はかない我が身を託する所。露は草の緣語。
○あけたて　戶の開閉。
○塵ばかり　少しばかりも。
○心のおく　心底。
○おもなれて　面馴れて。見馴れて。
○琴のねも云々　拾遺集雜齋宮女御「琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけむ」
○おとづれうとき　來ることが稀な。
○ほのめく　ほのかに見える。
○うき世のほだし　月を眺めて家を思ふので、月も身に取つては此の世に我が心を繫ぎ迷はす物である。
○のがれても云々　世を遁れてもやはり浮世に住む友と思うてか。
○なかなかに朽つるもよしや　朽ちないよりも朽ちた方が却つてよろしい。
○さらずば　朽ちざらば。
○さふるものなし　障ふるものなし。妨げる物はない。

ものはみなたらはぬ草の庵なれど心にとみて月を見るかな
をすまけばませのま萩の白露に亂れてゆらぐ月の影かな
月影もこゝろしてさせ草の戶は露の身をおく所なりけり
あけたてを風に任する草の戶は月も心のまゝにさすらむ
塵ばかり雲もかゝらぬ山のはに傾く月のかげをしぞおもふ
世をいとふ心のおくも見ゆるかな鹿なく山の秋の夜の月
山のはも松の木立もおもなれて都の空の月ぞこひしき
琴のねもあらしも絕えて片山の松しづかなる秋の夜の月
鹿だにもおとづれうとき奥山の槇の板戶に月ぞほのめく
山水に光すみゆく秋の夜の月のあはれを誰に見せまし
ながむれば家ぞこひしき秋の夜の月もうき世のほだしなりけり
のがれても猶すむ友と柴の戶の松の葉ごしに月はとひけり
なかなかに朽つるもよしや板びさしさらずばいかで月のさすべき
世ばなれて山のは遠く紅の塵にもそまぬ月の影かな
世のなかにさふるものなし海原も山もひとつの秋の夜の月
露清き松の葉ごしの秋の月これみむための住居なりけり

月をのみ友となかめて五十まで秋を經にけり槇の下庵
夜よしとてとふべき人もなき宿はたゞに月こそしたしかりけれ
もろともにのがれて見むといひし人いかでとひこぬ山の端の月
雲はるゝ小峽の月のかげ清み千代も住むべき松の下庵
いとひつる故鄕さへに忍ばれてむかしこひしき月の影かな
のがれこしはやくの秋の夕よりいとひなれたる山の端の月
清見潟ふじのたかねの白雪も心にうかぶ月のかげかな
薄霧はいつしかはれて山松のあらしにみがく秋の夜の月
杉の戶の月におもへば世の中は塵よりかろきものにぞありける
世の中は玉のうてなも何せむに草の庵の秋の夜の月
月もまた心やすげに影さしぬまくずがおくの蓬生の宿
山松にさはらぬ程の雲もがなあまりさやけき秋の夜の月
うす雲のをり〳〵松にかゝるこそなか〳〵月のけしきなりけれ
こゝろなき雲も心のありがほに月のあたりは過ぎがてにする
ながむればわが世更けゆく秋ながらそむきがたきは月夜なりけり
山深くおもひ入りても故鄕に見しよのまゝの秋の夜の月

○夜よしとて云々　古今集戀讀人不知「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たしずもあらず」
○たゞに　ひたすら。
○のがれて見む　世を遁れて月を眺めよう。
○千代も住むべき　千代は松の緣語で斯くいふ。
○故鄕さへに云々　古今集夏讀人不知「時鳥鳴く聲聞けば別れにし故鄕さへぞ戀しかりける」
○はやくの　早くの。過去の時の
○淸見潟　駿河國庵原郡。
○みがく　光り輝く。
○杉の戶の月におもへば　草庵で月を仰ぎつゝ物を思ふ意。
○世の中は玉のうてな云々　拾遺集夏讀人不知「今日見れば玉の臺もなかりけりあやめの草の庵のみして」
○まくず　眞葛。葛。
○なか〳〵云々　雲がかゝらぬよりは却つて月に風情を添へる。
○わが世更けゆく　自分が年を取つて行く。
○山深くおもひ入りても　無常を深く感じて奥山に入つても。
○故鄕に云々　續千載集秋法印長舜「荒れにけり我が故鄕の苔の庵見し世のまゝに月はすめども」

なには江に棚なし小舟さをさして見し世も浮ぶ山の端の月

きりぎりす壁のくづれをわがよにてなくねも寒く月ぞ更け行く

月を見て誰かは家を戀ひざらむ野に臥すわれも人の子にして

いでや世をおもひはなれてすみなさむ苦路をてらせ山の端の月

浮雲はかゝらぬ軒の高松に月もこゝろをすます夜半かな

十寸鏡天つ少女が眞袖もていく夜みがきし月の光ぞ

　月いとあかかりける夜汲濱の稻葉太訓とともに天のはし立あたりせうえうせしことども思ひいでて

月清みあまのはしだてまのあたりみし世の秋も俤にして

　中　秋

つくづくと今夜の月をながむればかけたることは無き世なりけり

をとゝしも去年も恨みし望の夜の月のくもりはこよひはれにき

松がねにひさごかけたりみさかなはさもあらばあれ秋の夜の月

月夜よし夜よしとちたびうたひても猶あまりある月の影かな

門の戸は月にささせて子らは寐よ待ちに待たれし今夜なりけり

思ひやる千里の外も窗のうちにかよふ今夜の月の淸けさ

---

○棚なし小舟　船棚のない小舟。
○人の子にして　人間たるからには同じやうに家が戀しい。
○すみなさむ　住まう。
○十寸鏡　「みがき」の枕詞。
○みがきし　鏡の緣語。
○せうえう　逍遙。
○まのあたり　親しく。直接に。
○俤にして　眼前に髣髴として浮ぶ。
○つくづくと云々　藤原道長「この世をば我が世とぞ思ふ望月の缺けたることもなしと思へば」
○はれにき　「恨み」の緣語。
○みさかな　酒のさかな。
○さもあらばあれ云々　何もないからまゝよ此の秋の夜の月を肴に一杯飮まう。
○月夜よし云々　古今戀四「月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらず」
○猶あまりある月の影　月が西になかなか傾かない意。
○思ひやる云々　白樂天「三五夜中新月色。二千里外故人心。」

花わけし山路はあれど久方の月の光はこよひなりけり

十六夜

手すさびに伊豫簾かゝげて琴とればやがてほのめく十六夜の月

臥待月

小簾まきて見しはきのふの秋にして松陰寒し臥待の月

中秋無月

月みむと契りし人の影もなしあなあやにくの秋の雨夜や

いはむすべせむすべしらに悲しきは今夜の空のくもるなりけり

塵ばかり光も見えずくもりけりこゝもうきよの山の端の月

十六夜いとあかかりければ

すみのぼる月影清し此の秋はよしと今夜をもてはやさまし

曉月

さを鹿の妻まくころに夢さめてあり明近き月をみしかな

木の間もる曉月夜さを鹿のこゑの行方もうちしらみつゝ

ほの〴〵とあけゆく窓のむかつをに松をのこして月ぞしらめる

山曉月

---

○臥待の月　十九日の夜の月。

○あやにくの　意地のわるい。

○せむすべしらに　爲む術知らず

○塵ばかり　「うきよ」の緣語。

○妻まく　妻を求める。

○ほの〴〵と云々　玉葉集雜前中納言定家「つく〴〵とあけゆく窓の燈火のありやとばかりとふ人もなし」

高野山曉ちかき山のはにあまりてにほふ月のかげかな

社頭月

瑞垣のそともに立ちてちはやぶる神代のまゝの月をみるかな

やひら手の音さへすみて玉松の影あらたまるすみの江の月

すみの江の濱松かげの秋の月神代ながらの光ならまし

古寺月

かづらきの松の葉ごしに阿伽棚（あかだな）のしきみをてらす秋の夜の月

荒屋月

尾花ちる嵯峨野の露の秋の月たが住み捨てし軒ばなるらむ

月前友

千五百秋へても老いせぬ秋なればいで上座（かみくら）は月にゆづらむ

琴川居にて月前琴を

心あらば月にとへかし山水のふかき一手もいざをしへまし

ありあけのなごりなきまで琴ひかむさし入る月を聞く人にして

小萩さく岡のやかたに琴とりて露ちる夜半の月をみるかな

月前管絃

○あまりてにほふ　山の上の空が月に美しくあかるくなつた趣。

○やひら手　八度柏手を打つこと

○玉松　玉は美稱。

○すみの江　攝津國住吉明神のある所。

○しきみ　樒。

○軒ば　家。

○上座　上席。

○心あらば　風雅の心あらば。

○山水のふかき一手　山水の如く深奧な一曲。

○ありあけのなごりなきまで　有明月がすつかり沈むまで。

○やかた　館。假初に作つた家。

月明（あか）く琴の音清し老いし身もをとめさびして庭に舞はまし

旅中月

旅衣かたしく野べの草枕露とふ月もしたしかりけり

いくばくの契りありてか秋の月所さだめぬ我をとふらむ

露さむしあさぢが原の秋の月かたしく袖にあひやどりして

旅泊月

松風もしぐれて寒き夜半ながらつれなくもあらぬ月の影かな

みなと風いたくな吹きそ梶枕あかしのとなか月みちにけり

海上月

汐さゐにいさり火消えてわたのはら月にたゞよふあはぢしま山

河上月

瀬を早みくだけて玉と散りにけり岩がねめぐる秋の夜の月

夕月夜いで河上にさをさして露にも見つる桂見てまし

月照山水

秋の月さやかにすめる山水をさでとるうなゐかきなみだしそ

獨見月

---

○をとめさびして　乙女らしくして。乙女の氣分になつて。

○旅衣かたしく　旅の衣の片袖を敷いて寢る。旅中一人寢する。

○草枕　旅寢の意。

○露とふ月　旅寢の草葉の露に映る月。誰も訪ねてくれないので月をも親しく感ずるのである。

○契り　前世の因緣。

○所さだめぬ我　一所不住の捨身の我。

○あひやどりして　袖の露に月が映るから、露と月が袖の上に同宿した意。

○しぐれて寒き　時雨の降るやうにさら〳〵音を立てて寒い。

○つれなくもあらぬ　割合に親しみのある。

○みなと風　港に吹き渡る風。

○梶枕　船旅。

○あかしのとなか　明石の海中に

○汐さゐ　潮がさし來る時浪が立ち騷ぐこと。

○瀬を早み　早瀬の流れが早いので。

○くだけて玉と散りにけり　碎け散る水に月光が映つて玉のやうに美しく見える趣をいふ。

○露にも見つる桂　月界には桂の木があるといふので、桂は月をいひ、露の中にも映つた月の意。

○さでとるうなゐ　叉手（魚をすくひ捕る具）を手に持つてゐる子供。

門たゝく人しなければ琴とりて獨りぞ見つる山の端の月

月下思人

故鄕の人もさこそとふしておもひ起きて月見る秋の夜半かな

月下待人

月明し山水淸し門の戸をこよひはさゝじ人もこそとへ

みさかなはわれ設けたりなりひさご月にならしてとふ人もがな

月下會人

相見ればうとき人こそなかりけれ月やすくせをかつ照らすらむ

月の歌うめき出でたるに長雅師のと詞こゝろまたくおなじかりければ

ことのはの露かはらぬもおもしろし同じ心の月見すさびに

江淸月近人

むらぎもの心もそらにうかぶかな月のうへこぐ棚なし小舟

秋月入簾

いよすだれ月にしまけばいにしへの雪の光もそふこゝちして

初鴈

うす霧のひまよりもるゝ夕月にたぐひて鳴く初鴈のこゑ

○さこそと　同じことであらうと

○ふしておもひ云々　新古今集春讀人不知「臥して思ひ起きてながむる春雨に花の下紐いかにとくらむ」

○人もこそとへ　或は人が訪ねるかも知れないから。

○なりひさご　へうたん。

○すくせ　宿世。前世の因緣。

○かつ照らすらむ　「かつ」は「一方では」の意。月は一方では萬物を照らし一方では宿世を明かに示すものであらう意。

○うめき出でたるに　苦吟し出した所が。

○露かはらぬ　少しもかはらない露はことのはの「葉」の緣語。

○月見すさびに　月を見て心を慰めること。千載集戀和泉式部「有明の月見すさびにおきて去にし人の名殘をながめしものを」

○むらぎもの　心の枕詞。

○心もそらにうかぶかな　心の落ちつかない意。うかぶは舟の緣語。

○月のうへこぐ云々　小舟が水に映れる月の上を漕ぎ行く意。土佐日記「みなそこの月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらし」

○いにしへの雪の光　白氏文集卷十六「遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看。」

○夕月にたぐひて　夕月と共に。

○ねられぬまゝに云々　千載集雜　赤染衞門「物思はぬ人もや今宵眺むらむ寢られぬまゝに月を見るかな」

○玉づさを云々　村雲の白さを手紙に譬へて、雲の開閉を手紙のそれに比した。

○のがれこし云々　千載集雜俊成「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」

○いにしへの秋　須磨を舞臺とした者の物語や歴史上の悲しい事實を指す。

○沖つ島ね　沖の島。

---

遠く人初かりがねの聲すなりおとづれいかに夕ぐれの空

月前鴈

草枕ねられぬまゝに月みれば初かりがねも鳴きわたるなり

夕月夜よこぎる鴈の玉づさをまきてはひらく秋の村雲

夕鴈

我獨りかなしき秋とながむれば鴈も鳴くなり夕ぐれの空

擣衣

誰が里に誰がうつ夜半の衣とは知られぬ音もあはれなりけり

山家擣衣

のがれこし山もうき世の秋ならし鹿鳴く夜半に衣うつなり

海邊擣衣

いにしへの秋もきこえて小夜衣うつころ寒しすまのうら風

防人（さきもり）が妻やうつらむ小夜衣沖つ島ねに月沈むまで

旅宿擣衣

あはれこの砧の音も旅にして聞けばねざめの友とこそなれ

浦擣衣

あまの子がしほなれ衣うつこゑを淡路におくる須磨の浦風

重陽

露かをる籬の菊に向ひつゝわれも千年をねがふ今日かな

菊

誰かまた山路の秋の末とはむ露の白菊花さきにけり

汲までたゞゆかれむものか苔清き山路の菊の花のした水

山深み月日の行くもしら菊の花やいくよの霜を重ねし

白菊もおもひのまゝに咲きにけり人の心はとらぬやどから

いにしへに咲きもおくれぬ白菊の花の香清しみよしのの奥

もてはやす人も來なくに菊の花やれし籬を咲きこぼれつゝ

世の中をへだつる庭の籬には露のまに〳〵菊もかをれり

つくろはぬまがきの菊の花みれば深山はあさきこゝちこそすれ

いにしへの秋のあはれを誰かくむ松より奥の菊の下水

奥山のいはねに立てる菊の花香さへ色さへ世に似ざりけり

一枝をかめにうつしてさらにまた山路の菊は尋ねざりけり

白菊はいろなき宿に咲きつれどさすがに香こそかくれざりけれ

○しほなれ衣　潮馴衣。潮に馴れしみた衣。

○たゞゆかれむものか　素通りされようかされない。

○行くもしら菊　行くも知らずに白菊を掛く。

○いくよの霜を重ねし　幾年を經たかの意。

○人の心はとらぬやどから　人の見る目などはかまはない庭であるから。

○咲きもおくれぬ　咲き劣らない

○やれし籬　破れ垣。

○世の中をへだつる庭　浮世離れをした庭。

○深山はあさきこゝちこそすれ　深山の自然もこの庭の自然の趣に對しては遜色がある意。

○くむ　汲む。察する意。

○いろなき宿　美しくない庭。色は香に對す。古今集春躬恒「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」

社頭菊

秋ふかき露たゞわが世の菊の花ちよは松にもゆづらざりけり

名所菊

露ながらぬさにとらまし瑞垣のそともに匂ふしらぎくの花

菊露

吹上の濱松風もかをるなり露ちる千世のしらぎくの花

菊の花やれし籬に咲きにけり千歳の露は誰に汲めとか

節後菊

琴とりて猶もめでまし菊の花千代はきのふに限らざりけり

さればこそちとせは露にゆづりけめ十日あまりのしらぎくの花

尊乘闍梨が圓珠庵の會に兼題菊久盛

梅にかけ櫻にかけて思ふかな散る世もしらぬ白菊の花

九月十三夜

白菊の露にもてなす月みればおくれし秋のにほひともなし

月にとふ人もあらぬか鴈鳴いて野邊は眞萩もさかりなりけり

紅葉

○松にも　松の千年にも。

○露ながらぬさにとらまし　露のついたまゝの白菊を幣のかはりに取らう。

○吹上の濱　紀伊國海草郡。

○節後菊　重陽の節句の後の菊。

○きのふ　重陽の節句。

○十日あまりのしらぎくの花　六日の菖蒲、十日の菊。

○梅にかけ櫻にかけて　梅も櫻も散ることが早いので、これに白菊を比較していふ。

○もてなす　あしらふ。

○おくれし秋　八月十五夜に對して、九月十三夜なればいふ。

○あらぬか　あらぬかな。

紅葉てる夕山淸しいにしへに車とゞめしあと見ゆるまで

夕附日（ゆふづくひ）山下てらすもみぢ葉の枝のにしきを誰かきて見む

をぐら山しぐれて雲のはれぬ日も紅葉の色はくもらざりけり

大かたのうき世をめぐるしぐれには岩垣もみぢ染めじとぞおもふ

京人（みやこびと）車とめずばにしきさへかひなき山の紅葉ならまし

のがれても猶うき雲のしぐれきていはねの蔦もうすもみぢせり

山松にかゝれる蔦のうす紅葉うべこゝろある時雨なりけり

村しぐれ松よりもれて谷陰の岩根の蔦も紅葉しにけり

霧こむるいは垣紅葉てらせどもかひなき夜のにしきなりけり

露ひかるいは垣もみぢ侘人のきるべき秋のにしきともなし

風かよふ茅の軒端の夕日影まばゆきまでにてるもみぢかな

松間紅葉

夕づく日もみぢのひまにさすみれは鄰の松もたゞならぬかな

むらもみぢしぐれてさむき片岡の秋を定むる松の色かな

みやこのもみぢ見にまかりける時栂尾にて

朝づく日梢（こずゑ）のいろは淺けれど山水きよし栂尾（とがのを）のおく

---

○夕附日云々　金葉集春攝政左大臣家參川「入日さすゆふ紅の色はえて山下てらす岩つゝじかな」
○夕附日　夕日。
○山下てらす云々　萬葉集卷六「いははには山下光り錦なす花咲きををり云々。」
○きて見む　「來て」と「著て」とを掛く。
○をぐら山　小倉山。山城國葛野郡。
○くもらざりけり　「はれぬ」に對し色の赤々とさせる意。
○大かたのうき世をめぐるしぐれ　浮世に降る普通一般の時雨の意
○岩垣もみぢ　岩垣の陰にある紅葉。岩垣は岩が垣根のやうに取りまいたもの。
○にしきさへ　紅葉の美しさをいふ。
○うき雲　「浮き」に「憂き」を掛く
○うべ　實に。
○かひなき夜の云々　古今集秋貫之「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」
○侘人　寂しく暮す人。
○茅の軒端　茅葺の家の軒端。
○たゞならぬかな　格別の趣がある。
○むらもみぢ　叢紅葉。
○栂尾　山城國葛野郡。
○梢のいろは淺けれど　紅葉の薄いことをいふ。

おなじ折をぐら山にて

をぐら山しぐれの後のひとしほをせばき袂にうつしてぞみる

紅葉てるをぐらの山を見わたせば嵯峨野の春におくれざりけり

をぐら山行幸(みゆき)にもれしもみぢ葉の悲しきいろに夕日さすなり

夕づく日峯もひとつに匂ひけり紅葉にわたす谷のかけはし

樵山とともに箕面(みのも)の紅葉みに行きて

もみぢ葉はふもとの塵とちりし世に獨りとゞろく瀧の音かな

通天紅葉

もみぢ散るかた山寺にやどかりて秋のゆくへを月に見るかな

谷紅葉

夕ばえのもみぢいろそふ山水にたぐふ心はたれかくむべき

社頭紅葉

いそのかみふるの社のうす紅葉誰がとりあへぬ手むけなるらむ

秋山

あけくれにあはれ身にしむ秋の山鹿なきやめばましら鳴くなり

霧わけて人こそ門をたゝきけれ鹿なく山の秋の夕ぐれ

○ひとしほ　一入。入は物を染めるに數へる詞。
○おくれざりけり　劣らない。
○をぐら山行幸云々　拾遺集雜秋貞信公「小倉山峯のもみぢ葉心あらば今一度のみゆき待たなむ」
○箕面　攝津國豐能郡。
○通天　通天橋。洛東東福寺内。
○かた山寺　片山にある寺。
○たぐふ心　准ずる心。
○くむべき　山水の緣語。
○いそのかみふるの社　布留社は大和國山邊郡。
○誰がとりあへぬ云々　誰が自分の見すぼらしい幣を捧げるに事へまして薄紅葉を幣の代りに捧げるのであらう。古今集羇旅菅原朝臣「この度は幣も取りあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」

秋野

さを鹿の妻もこもれりうなゐらよ秋の花野はこゝろしてかれ

秋里

うちなびく尾花がすゑに秋見えて夕風寒しをかのべの郷

秋田

ひぢかきし田のもにみちて八束穗のたりほの秋になりにけるかな

秋雨

おのづから落つる軒端のかしの實に亂れてさむし夕ぐれの雨

山家秋

わがいほの門田のをしねほにいでて朝田の露もにぎはひにけり

霧はるゝそひの田の面を見わたせばかつしかわせは色づきにけり

山かげは雫ひまなき秋なるを松もる月にを鹿なくなり

榾くゆるけぶりも寒しかた山にたが秋まもる庵なるらむ

をしねほす山田の庵を誰かもる霧の雫に鹿火(かび)は消えつゝ

繩くちてひたも音せぬ小山田に秋をつくすはかゞしなりけり

暮秋月

○さを鹿の妻云々　古今集春讀人不知「春日野は今日はな燒きそ若草の妻も籠れり我も籠れり」

○夕風寒しをかのべの郷　續拾遺集冬讀人不知「霜深き庭の淺茅のしをれは朝風高し岡のべの里」

○ひぢかきし　田の泥をかきならす。

○田のも　田面。

○門田のをしね　門邊の田の稻。

○そひ　傍。

○かつしかわせ　葛飾早稻。葛飾は武藏國東葛飾郡。

○松もる　もるは雫の緣語。

○たが秋まもる庵なるらむ　秋を守る誰の庵であらう。

○鹿火　蚊遣火。萬葉集卷十二「足引の山田守るおぢがおく蚊火の下こがれのみわは戀ひ居らむ」

○ひた　引板。鳴子。

○小山田　「を」は接頭語。

○おもふどちにて　自分の仲よしとして。
○ことそぎし　手輕に作れる。粗造の。
○嵐にくもる　續古今集冬定家「小泊瀬や峯のときは木吹きしをり嵐に曇る雪の山本」

月をのみおもふどちにて杉の戸にことしの秋も見はてつるかな

ことそぎし杉の板間にもる月の影さへ寒く秋ふけにけり

霧わけし外山の秋の鹿のねも嵐にくもるあり明の空

暮秋蟲

めづらしととひつる野べの蟲の聲悲しきまでに秋更けにけり

暮秋時雨

ゆふしぐれたが袖かけて石の上古野の尾花うち亂るらむ

惜秋

琴とりてくれゆく秋ををしむかな菊の露ちる山かげにして

尾花ちる野寺のかねのこゑながら秋もしぐれてくるゝ空かな

山彦集中之卷　終

# 空谷傳聲　下之巻

### 初冬

もみぢせぬ常磐の松の下陰もしぐれて寒き冬は來にけり

かた岡の紅葉しぐれて朝もよしきのふにかはる空のけしきや

### 初冬月

風さむく板間ふかせて世の中にうとくもなれる月のかげかな

### 時雨

一本の松に夕日の影見えて片山づたひしぐれ降るなり

むらしぐれいづこの山にいそぐらむ日影よこぎる峯の浮雲

神無月などはれくもるさがの山きのふもけふも時雨のみして

たが軒のつまどひすてて村しぐれ鹿臥す山にめぐりきぬらむ

椎の實をひろふうなゐが袖の上にけふもこぼるゝ村しぐれかな

はゝそちるわが山窗の明暮はしぐれの外にとふ人もなし

村時雨しぐるゝごとにかづらきの嶺の紅葉はいろぞ添ひゆく

---

○朝もよし　「き」の枕詞。

○軒のつまどひすてて　軒の端と妻間ひとを掛く。

○はゝそちる　柞散る。

○村時雨云々　拾遺集雑秋躬恒「もみぢ葉や袂なるらむ神無月しぐるゝごとに色のまされば」

わが軒の松をのこして西山のもみぢにいそぐ村しぐれかな

曉時雨

夜をさむみまたねの夢を明がたの窓にかへして降る時雨かな

夕時雨

しぐれさへあらしの松にやどるかなうきよのさがを過ぎがてにして

むらしぐれはれゆく松の木のまより苔路なゝめに夕日さすなり

あさげたくまうけにおちがかきつめし落葉をぬらす夕時雨かな

夜時雨

紅葉かは雪かはさがの山里は月もしぐれて小夜ふけにけり

月さえし小峽にさけぶ山狙(さる)のこゑもしぐれて小夜更けにけり

連夜時雨

かぞふれば半ば過ぎけり神無月しぐれぬ夜半はいくばくもなし

めぐりきてこよひもたゝく時雨かな月さへうとき槇の板戸を

こよひしも窗のしぐれはたゝけどもうき世の夢はさめがてにして

おとづれて枕ぬらさぬ夜半もなし時雨や何の涙なるらむ

名所時雨

○松をのこして　松は時雨で紅葉させることが出來ないからいふ。

○またねの夢　一度さめて再び眠ること。

○あらしの松に云々　あらしに嵐山をかけ、さがに嵯峨を掛けたるか。さがは性でならはしの意。

○あさげたくまうけ　朝飯を焚く支度。

○かきつめし　掻き集めた。

○紅葉かは　「か」は疑問辭。「は」は歎辭。

○たゝく　「うとき」と共に時雨と月とを擬人的に見た語。

○うき世の夢云々　風雅集雜内大臣室「曉の鐘は枕に音すれど浮世の夢はさめむともせず」

○おとづれて　時雨がおとづれて來て。

○枕ぬらさぬ　枕をぬらすは聞く人が悲しくて枕に涙を落す意。

むら雲の木幡の山をいつ越えて時雨きぬらむしがらきの里

かげとめていそぎしものをからさきの松よりをちも時雨ふるなり

社頭時雨

神無月しぐるゝ雲の末はれて鳥なくなりひのくまの杜

行路時雨

むらしぐれはたこのみのもとりあへず思はぬ空に袖ぬらしつゝ

石の上野中古道ふりし世のあとをとめてもゆくしぐれかな

しぐれゆく竝木の松のつら〳〵にうきを重ねてぬらす袖かな

いづこにか枕さだめむ村鳥森に行くかたもしぐれふるなり

おぼつかな誰をとはまし高砂の松もしぐるゝ夕ぐれの空

さだめなきわがゆく空にさだめなき雲もしぐれていづち行くらむ

紅葉てる夕山もとのさゝのやに我をさそひてゆくしぐれかな

山路時雨

かみな月秋のゆくへをとめくればよしのの奥もしぐれふるなり

松もりてひかげなゝめにさす見れば岡の南はしぐれふるなり

海上時雨

○木幡の山　山城田紀伊郡。○しがらきの里　信樂の里。近江國甲賀郡。

○ひのくまの杜　紀伊國海草郡。

○はたこのみの　又この蓑。

○ふりし世　舊りし世に時雨の緣語「降り」を掛く。○あとをとめても　跡を尋ねても。○竝木の松のつら〳〵に　竝木の松の列つら〳〵に（連ね連ねる意）さを掛く。松のは松の如くの意。

○おぼつかな　心許ない。○誰をとはまし云々　古今集雜藤原興風「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」高砂は山の意。高砂の松さすれば播磨國加古郡。○夕山もと　夕山の麓。○さゝのや　笹の葉で葺いた家。○かみな月云々　古今集春深養父「花散れる水のまに〳〵とめ來れば山には春もなくなりにけり」

千鳥なくいもが島根のいそづたひ誰がかたとめてしぐれゆくらむ

田家時雨

穗をひろふ小山田寒しみなし子の袖におもるは時雨のみして

時雨晴

小夜しぐれいつしか晴れて山松のひまよりもるゝありあけの月

落葉

夕日影なゝめにてらす山窗に獨りしぐれて散るもみぢかな
里わきて亂れし雪のあとゝへば紅葉しぐるゝ岡越えの道
世の中はさしもへだてぬわが庵も落つる木の葉に道たえにけり
世の塵のつもらぬ宿につもれるは拂はぬ庭の木の葉なりけり
露わけてわがよもぎふをとふ月の影もあらはに散る木の葉かな
庵一つあらしのすゑに顯はれてつもる木の葉に道はたえけり
からすなく山下風にさそはれて夕悲しく散るもみぢかな
木がらしに寒くもみぢの散るからに籠りやはてむ槇の下庵
露ながら誰醉ひしれて折りたきしかた枝さびしくちる紅葉かな
苔のうへの紅葉あつめて木の芽烹む花にとひこし人もとはぬか

○いもが島　紀伊國海草郡。新勅撰集冬鎌倉右大臣「風さむみ夜の更け行けば妹が島形見の浦に千鳥なくなり」
○みなし子　孤兒。
○おもるは云々　重くなるのは時雨ばかりで、落穗は澤山ない意。

○里わきて　里を區別する意。雲が全體に互らずに　訪れない里と訪れた里とあることをいふ。
○世の中はさしもへだてぬわが庵　浮世に對して堅く門戶を閉ぢたといふでもないわが庵。
○世の塵のつもらぬ宿　超俗的の我が庭。
○拂はぬ庭　掃き淸めない庭。
○よもぎふ　蓬生。
○庵一つあらしのすゑに顯はれて　今まで庵を隱してゐた木の葉が風に吹き落されたので庵が見え出したのである。
○山下風　山から吹き下す風。
○散るからに　散るによつて。
○醉ひしれて　泥醉して。しれては癡れての意。
○とはぬか　問はぬかな。

雨中落葉

てらせどもかひなき山のした紅葉けふもしぐれにぬれて散るなり

雨後落葉

かねのねもしぐれて寒き山陰に夕日をとめて散るもみぢかな

殘菊

露霜に秋のちぐさはかれにしを獨り老いせぬ白菊の花

朝顔の露のひまより生ひたちし籬の菊も霜にあへずや

朝日影霜をてらして菊の花匂へる宿は冬としもなし

いつしかもちとせの菊も移ろひて置く霜寒し蓬生の庭

松垣のおくかをしめし白菊の花もしぐるゝ冬の空かな

殘紅葉

かみな月しぐれの雲のはれもせず照らしも果てぬ谷のまくず葉

霜

からすなく尾越の松に月落ちておく霜白し曉の山

片岡のあしたの原の霜の花日影さすまもなき匂ひかな

霜さゆる夜半にしばなく山鳥わが子羽ぐゝむ袖や氷れる

---

○あへずや　堪へられない。

○おくか　奥處。奥深い處。

○はれもせず云々　新古今春大江千里「照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」

○尾越　山の峯を越すこと。

○片岡のあしたの原　大和國北葛城郡二上山の東方の丘。

○霜の花　霜を花と見立つ。

○しばなく　頻りに鳴く。

○羽ぐゝむ　親鳥が羽で雛鳥を被ひて育てること。

霜むすぶ朝夕と山寺の鐘のひゞきも冴えまさりけり

橋上霜

大根ひく里のうなゐがおく霜にあとつけそめし前の棚橋

寒草

ときめきて花野に見えし小薄も霜にはあへぬ袖のやつれや

野べはみなあらしに枯れて荒駒のはむべき霜の下草もなし

寒蘆

うたひつゝ小舟うかべて月に見し難波の蘆も霜枯れにけり

寒樹

ましらなくこずゑの空の木がらしにわれても冰る夕月の影

水仙

こほりゐる谷のいはほの陰しめて人にてらはぬ花の清けさ

枯野

さを鹿のわけし萩野は霜枯れて高津の松にあらし吹くなり

翁草霜をかざしてちる雪に枯れゆく野べのはてやみるらむ

寒松

---

○冴えまさりけり　音が次第に澄んで行く。

○ときめきて　時を得て榮えゐる意

○野べはみな云々　古今集雜讀人不知「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」

○しめて　占めて。占領する意。
○てらはぬ　みせびらかさない。

○高津　大阪市内。

○翁草　赤松又は黒松の異名。
○霜をかざして　霜をかぶつて。白髪を聯想さして翁の縁語。

木がらしもしぐれもよきて訪はざらむひとり聳ゆる嶺の高松
白雪の亂れてさむき夕山に知る人得たり嶺の高松

木　枯

さそひつる岡のもみぢは散りはてて杪（こずゑ）にまよふ木がらしの風

冬　至　藤井秀芳の會に

夕日影里のをとめが手すさびにくる絲よりや長くなるらむ

氷

あかくめばひさごにひゞくうす氷水にかどあるこゝちこそすれ
氷つたふかけひの水も山松に音をゆづりて氷る夜半かな
山松にちよあらそひし白菊の下行く水も氷るにけり
あさもよし紀の川よどや氷るらむ筏もけさは下さざりけり

井　氷

なごりなく氷るにけり月影も瓢にくみし山の井の水

冬　月

むしぶすまなごやが下にねざめてもさすがに寒し窗の月影
なぐさめむものこそなけれ月獨り霜にてる夜の老のねざめを

---

○よきて　避けて。
○知る人得たり云々　古今集雜藤原興風「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」
○手すさび　手慰み。
○くる絲　繰る絲。
○あか　閼伽。
○ひさご　柄杓。
○水にかどある　水に角がある。液體が固體となつたのでいふ。
○音をゆづりて　筧の水が氷つて音を立てない意。
○あさもよし　紀の枕詞。
○むしぶすま云々　萬葉集卷四「むしぶすまなごやが下に臥したれど妹とし寐ねば肌し寒しも」むしぶすまは暖かな衾。
○なごやが下に　和やかな下に。

ひまとめてさせかしと思ふ夕月も影すさまじき軒のやつれや
あさからぬ山下清水冰る夜は流れもあへぬ月のかげかな
山猿のこゑをたぐへし葛木の嵐も冰る冬の夜の月

寒月

月かげは杪にさえてたかさごの松のあらしも冰る夜半かな
親狙の子をよぶこゑもかつそひて小峡に冰る冬の夜の月

寒曉月

立ちさわぐ鴉のこゑも冰るまであり明寒き山のはの月

衾

いはのうへに寐し世わすれてたく衾重ねても猶わぶる夜半かな

網代

いくばくのひをうるとてか川風の寒きよる／＼あじろ守るらむ

千鳥

ほり江川あしの花ちる夕風に亂れてさわぐむらちどりかな
朝月夜よどみもはてぬ木の川の岩垣淵にちどり鳴くなり
あらし吹く上野の松に月落ちてちどりなくなりすまの浦波

○ひまとめて　隙間をさがして。
○すさまじき　趣のない。
○軒のやつれ　家の荒れ果てた樣子をいふ。
○たぐへし　伴ひし。
○葛木　葛城山。
○かつそひて　一方に添ひて。
○たく衾　栲衾、絹布類の衾。
○ひを　氷魚。
○朝月夜　有明月が空に殘つてゐる頃。
○上野　攝津國武庫郡須磨の附近

伊勢島やいそらが崎のあまの子にいつしか馴れて千鳥なくらむ

與謝の海や松のうちとの朝和(あさなぎ)にちよよびかはす友千鳥かな

海邊千鳥

播磨潟沖のはやてや早からし千鳥啼きよるあはれ島陰

苫枕あかしのせとにしほ待てばありあけの月に千鳥なくなり

湖上千鳥

大比叡をおろすあらしや寒からし朝妻とめてちどり鳴くなり

月前千鳥

こゝもまたすみうかるらむ小夜ちどり鳴きて里わく蘆の屋の月

霰

おとづれてあとなきものはあさぢふの露に亂るゝあられなりけり

月前霰

月影も竹にくだけてひゞきけり寐覺の窓に霰ふる夜は

田家霰

新嘗(にひなめ)をいはふ妻戸に音たてておどろかしゆく玉あられかな

野霰

○伊勢島やいそらが崎　伊勢國度會郡にあるか。

○與謝の海や松のうちと　うちとは内外の義。丹後國の橋立にある

○ちよよびかはす　千鳥の聲はちよといふ。

○沖のはやてや云々　夫木集「波白む沖のはやてや强からし生田が磯に寄するとも船」はやては疾風。

○朝妻　近江國坂田郡。山家集「おぼつかな伊吹おろしの風さきに朝妻船のあひやしぬらむ」千載集秋二條太皇太后宮肥後「三室山おろす嵐のさびしきに妻とふ鹿の聲たぐふなり」

○おどろかしゆく　目をさましゆく。

たとめこが朝菜摘む野の玉あられ音もかたまにたまらざりけり

### 初雪

翁丸けさめづらしく跡つけてあたら小雪をふみなけがしそ

こゝろなき人の詞のうへにだに花とかゝれる初み雪かな

### 雪

山里にすむかひありとおぼゆるは塵なき雪の朝なりけり

ふりつもる雪のあしたに見わたせば垣根につゞく窗の遠山

もみぢ葉にさ霧まよひし跡もなしうす雪かゝるかづらきの山

ふりつまば苫の細道たえぬべし問へかし庭のけさの初雪

枕とふありあけの月はさしながら雪おもしろき朝ぼらけかな

山がつが笹ふく軒も白銀（しろがね）のうてなとつもるけさの初雪

朝げたく眞柴折らむといで立てば雪こそつもれ峯のかし原

塵の世も何のおもひもなかりけりあなおもしろの雪の曙

はふ蔦の一葉二葉は色ながらはつ雪かゝる軒の山松

ふると見し枕の山の雪白し夢をまさめの朝ぼらけかな

わが庭の紅葉はいまだあせなくにむかつを白し初雪や降る

---

○かたま　竹で目を細かく編んだ籠。

○翁丸　枕草紙にある翁丸といふ名の犬によつて斯くいつた。

○あたら小雪　惜しい小雪。

○こゝろなき人　風雅心のない人

○まよひし　漂ひし。

○うてな　臺。

○眞柴　薪。

○かし原　樫原。

○色ながら　紅葉しながらも。

○枕の山　枕許に近い山。

○まさめ　まのあたり。

○あせなくに　色がさめないのに

鳥がなく東路ならぬ我が山もかのこまだらに初雪ぞふる

かくれ家は深くもとめじおのづから籬も雪の山とこそなれ

總角(あげまき)に木の芽にさせてつく〴〵と窗の外山の雪をみるかな

ありがよふ苔の細道たえしより阿伽(あか)に樒に雪をのみして

樒つみ阿伽(あか)くむ道も絶えにけり雪やうき世を猶隔つらむ

ふりつもる籬の山は里の子がきのふ集めし雪としもなし

雪清き窗の外山にあとつけて三つ四つ二つ飛ぶからすかな

小簾まけば山の端しるしかの岡の雨龍(みづち)もしらぬけさの初雪

ふじのねはいかにはるけくなりぬらむ籬も越の雪の白山

けさみれば松のとなりもなかりけり籬や雪の庭の遠山

あとつけて人もとはぬか獨りのみ見わたす山の雪のあけぼの

里の子をあまた集(つど)へて作らばや降れとうたひし庭の雪山

なにならぬ山家と人に侘びにしをほこらまほしの雪のけしきや

松山も竹のはやしも埋もれてうきよは雪にちかくなりぬる

鹿鳴きし尾上やいづら紅葉せし小岫(をぐき)やいづらけさの白雪

友ときく松の嵐も絶えにけりあまりに深くつもる雪かな

---

○鳥がなく　東の枕詞。

○かくれ家は云々　古今集雜別僧正遍昭「夕暮の籬は山と見えななむ夜は越えじとやどりとるべく」

○總角　子供の髪形から子供の意

○ありがよふ　馴れ通ふ。

○雪をのみして　雪を二つの品の代りとばかり用ゐて。

○三つ四つ二つ飛ぶからす　枕草紙「鳥のねどころへ行くとて三つ四つ二つなど飛び行くさへあはれなり。」

○籬も越の雪の白山　籬に降り積れる雪を加賀の白山に見立つ。

○はるけく　遙かに。

○籬や雪の庭の遠山　雪の積る籬を遠山に見立つ。

○あとつけて　足跡を雪につけて

○降れとうたひし　徒然草「降れ降れ粉雪たんばの粉雪。」

○なにならぬ山家　物の數でもないつまらぬ山家。

○ほこらまほしの　誇らまほしき

○松山も云々　山住ひの印象を深める松山も竹林も雪に埋れて一望白皚々たるを以て浮世に近いといふ。

○尾上やいづら　山の峯は何處か

○小岫　岫。

○友ときく松　新拾遺集雜頓阿法師「友と聞く松の嵐も音せずはなほ山里やさびしからまし」

世にふかくつもる雪かな柴の戸も奥ある山と人のみるまで

一夜にや神のつくれる窗の外の竹の葉末の雪の白山

しら雪はやさかつめども北山は炭やく煙立たぬ日もなし

松上雪

時しらぬふじのたかねのいつはあれど翁さびたる松のしら雪

雪中松

ふりつもる雪にそびえて山松のみさをは冬ぞあらはれにける

山雪

すみ竈のけぶりいぶせくみし山もおもがはりする雪の明ぼの

むらしぐれまよひし雲のすゑはれてうす雪かゝるかづらきの山

よしの山花ににほひし青ねさへけさはみ雪に埋もれにけり

くるとあくとむかふ外山の松の雪心の行きてみぬ時もなし

遠山雪

かづらきの松も色なく降る雪に思ひやらるゝ木路(きぢ)の遠山

曉雪

ありがよふ夢路の塵も絶えにけりあかつききよき窗の遠山

---

○奥ある山　奥深い山。「ふかく」に照應す。
○やさか　八尺。澤山の意。
○時しらぬふじのたかね　風雅集春前大納言忠良「花や雪霞や煙時知らぬ富士の高嶺に冱ゆる春風」上句は四時雪を戴く富士山の景色はいつでもよいけれどの意。
○翁さびたる松のしら雪　常に若若しい松に白髮に似た白雪がかゝつたので翁らしいといつて、其の趣も亦よろしいとの意。
○ふりつもる雪云々　論語子罕篇「歳寒然後知ニ松柏之後レ凋也。」
○いぶせく　不快に。
○おもがはりする　面目を一新す
○青ね　青嶺。青山の嶺。
○くるとあくと　日が暮れるといつては夜が明けるといつては。夜晝となくの意。古今集春貫之「くるとあくと目かれぬものを梅の花いつの人まにうつろひぬらむ」
○心の行きて　滿足する意に體は行かれぬが心がそこに行く意を掛く。古今集賀躬恆「山高み雲居に見ゆる櫻花心のゆきて折らぬ日ぞなき」
○木路　紀州路。
○ありがよふ　馴れ通ふ。

朝雪

誰をとひ誰をまたむのあらましも今朝はあとなき雪の山郷

夜のほどに越路や近くなりぬらむおどろく雪のありあけの山

かづらきは夜半にいくさかつもるらむ我が山窓のけさの白雪

たごの浦のながめさこそと思ひやる都のふじの雪の曙

かのみねの松のみ見えて紅の塵をよそなる雪の曙

夕雪

小鳥のねぐらにまよふころすなり紀路の遠山雪深くして

夜雪

松風のたえにし窓に音たてて夢やすからぬ雪の夜半かな

社頭雪

さかき葉にかゝれる雪のしらゆふをとし守る神のぬさじろにせむ

山路雪

山狙のこゑもうもるゝかづらきのほき路の雪を獨りわけつゝ

かづらきの山路は雪に埋れけり犬鳴く寺に宿やからまし

雪深くつもるをみればもみぢ葉をあさく思ひし山路なりけり

○あらまし　豫想。
○夜のほどに　一夜の中に。
○越路や近くなりぬらむ　雪の多い越路が傍近くに來たのであらうか。
○おどろく　目がさめる意。
○いくさか　幾尺。
○たごの浦　駿河國富士郡。
○都のふじ　都で雪の山を作つたのを不二山に見立てていふ。
○かのみねの歌　松の綠、紅の塵白雪と色彩を取り入れた歌。
○しらゆふ　白木綿。
○とし守る神　年守る神。歳德神。
○ぬさじろ　幣代。幣の代用。
○ほき路　嶮しい山路。
○深く　あさくに對す。

樵路雪

山がつが夕げのま柴束のまもをやまぬ雪に家路佗ぶらむ

禁中雪

くしがたの窓の外しろし朝まだき誰がふらせたるみ雪なるらむ

文久三年家の會に都雪を

東人國なつかしも駒とめてみやこのふじの雪や見るらむ

うなゐらがきのふつくりしひえの山はたちかさぬるけさの雪かな

水郷雪

朝もよし紀の川面にかげ見えてはろ〴〵つもるかづらきの雪

渡頭雪

わがゆきは猶ほどとほしわたし守早くさをさせ雪の夕暮

雪中眺望

よしのがは河上とほく雪はれてちかくぞ見ゆる妹とせの山

雪中興

ふる雪にうかれて山はいでにしをゐなかは人をまつ門もなし

雪中待人

○夕げのま柴束のま　柴と束とは縁語。夕飯に用ゐる薪を折るしばらくの間。

○くしがたの窗　櫛形の窗。

○はたち　二十。伊勢物語「比叡の山をはたちばかり重ねあげたらむ程して云々。」

○はろ〴〵　遙かに。

○ゆき　旅行。

○妹こせの山　妹脊山。大和國吉野郡。

めづらしく初雪降れりいざや訪へたがため醸みし酒ならなくに

雪中厭人

月影に紅葉に鹿に友まちし秋はなになり雪の明ぼの

海邊雪

燈のあかしのせとに汐待ちてあはぢしま根の雪を見るかな

神さぶるまや山おろし亂れきてなだのうらわにみ雪ちるなり

市雪

ふりつもる雪に行きかふ道たえてけさはうき世のちまたともなし

なにはの有鄰舍にありける比雪のあした

ほり江川初雪しろきあしたにも松山陰を思ひこそやれ

埋火

火桶のみわがよの友と手ならして雪のこゑきく窗のうちかな

ありし世のあらましごとを埋火のもとにかぞへてふかす夜半かな

鷹狩

みかり人かた野にはなつはやぶさの鈴のね寒し雪の夕ぐれ

爐邊閑談

○たがため醸みし酒ならなくに　汝の爲に造つた酒である意。

○友まちし秋云々　月や紅葉や鹿を我が心を慰める相手のものとして待つてゐた秋は、この雪の曙の景色に比べては比較にならぬほどつまらない。

○燈のあかし　燈のあかるい意と明石とを掛く。

○まや山　摩耶山。攝津國武庫郡。

○なだ　灘。同所。

○松山陰　我が庵のある松山のあたりの雪景色をいふ。

○ありし世のあらましごと　隱遁前に豫期したこと。

○かた野　片野。交野。河内國北河内郡。

さく梅の品をさだめて埋火のあたりのどかに雪を聞くかな

炭竈

年さむく雪にほそりて立つ煙炭やくおぢがいのちなるらむ

山人の炭やく煙これのみぞふりつむ雪に埋れざりける

年の暮なにはより歸りきて南陽がもとへ

かへりきてやつれし袖の白雪をはらへばかをる梅の一枝

神樂

おもしろき庭火の陰のより板によりこぬ神はあらじとぞ思ふ

大みわの山の杉むら雪清み神代おぼゆる朝かぐらかな

御酒（みき）たばりうたひよろぼひおのがじゝ神をいさむる里神樂かな

早梅

雪だにもまだふりあへぬ片岡の松の鄰の梅さきにけり

いちはやく梅さきにけり榾くゆる窗のあたりはあたゝかにして

山もとは梅さきぬらむ鶯のとめこぬさきにゆきてはやみむ

いざやおぢ春のはじめのまうけせよ鄰の梅の花咲きにけり

おくるゝをよしとする世に先だちておかぬは梅の匂ひなりけり

---

○品をさだめて　品定めをする。品評する。

○雪にほそりて　雪の爲に細々と

○おぢがいのちなるらむ　細い煙と翁の餘命の少ない身とを比較す

○より板　神寄板。昔琴の板といつて敲いて神を招請するに用ゐた杉の板。

○大みわの山　大和國磯城郡。

○たばり　賜はり。

○よろぼひ　よろめく。

○おのがじゝ　めい〳〵。

○いさむる　慰める。

○とめこぬさきに　尋ねて來ないうちに。

かの岡のあらしのすゑに咲く梅のあやしくかをる雪かとぞみる
うぐひすの古巣にこもる山陰の雪をてらして梅さきにけり
かの岡の雪間の梅は鶯の夢にもいまだしられぬかもし
梅の花さけども窗の雪ふかみ片枝はいまだふゝみたりけり

故郷早梅

ふりつもる雪にあとなき故郷の籬にやせて梅さきにけり

佛名

となふれば罪もむくいもなしときく雪の夜寒は物の數かは
つくしわたいざとくゆきてかづけまし北山寺の雪の夕ぐれ

梅告春近

朝風に梅かをるなりいそげ駒柳もなびく山もとのさと

冬雨

かきならす四つの小琴のかへす手も亂れてさむき雨の音かな

山家冬

なれてこしまがきの鹿の爪がたも雪にたえたる冬の山里
わがための冬の夜ごろのしる人は桐の火桶と琴となりけり

○もし　若しかしたらば。
○ふゝみたり　花が含んでゐる。
○やせて　瘦せて。
○となふれば　稱名をすれば。
○つくしわた　筑紫綿。
○かづけまし　かづけ物として與へる。
○北山寺　金閣寺。
○四つの小琴　琵琶。
○爪がた　爪のあと。
○冬の夜ごろのしる人　幾夜かの冬の夜に於ける我が知人。しる人は我が心を知つて慰めてくれる相手のもの。

友と見る松もしぐれて山郷のこの夕ぐれをとふ人もなし

歳暮

なさばやとたけく思ひしあらましも又いたづらに年は暮れけり

なにごともなさでは生けるかひもなしとたゞにいひつゝ年は暮れけり

世ばなれて住む山郷もくれてゆく年はさすがにをしまれにけり

ゆく年のをしみてとまるものならばなゝの小琴に彈きもとめまし

歳暮雪

つもるともよしやはらはじ春のくる道妨げの雪ならなくに

このごろの雪につくせり初春のまうけにこりし榾もま柴も

梅の花春をかすめて咲きながら猶雪寒き窗のうちかな

歳暮梅

年さむし片山かげの梅が枝に雪のしらぎぬ誰くばるらむ

除夜

雪けぶる窗の燈かゝげまし朝のかねのこゑかすむまで

歳暮懷友

年さむし人はいづこの梅か見る雪ふる郷の春を隔てて

---

○友と見る松　古今集雜藤原興風「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」
○たけく　猛く。心堅固に。
○たゞに　只管に。
○なゝの小琴　七絃琴。琴(きん)の琴(こと)。
○よしや　まゝよ。
○つくせり　燃し盡した。
○初春のまうけにこりし　初春の支度の爲に伐つた。
○雪のしらぎぬ　雪の白さを白絹に見立つ。
○くばるらむ　くばるは分配する意。

除夜雪

ふる雪を見いだす窗の燈のまたゝくまにも暮るゝ年かな

不二

東路のつとは何ぞと人とはば先づふじをこそいふべかりけれ

清見潟竝木の松のつら〳〵にふじのたかねの雪をみるかな

ひさかたの天の八重雲ふみわけし神代ながらの不二の白雪

瀧

ましらなく小峡の岩のはざまよりくだけて落つる瀧つ白波

熊野瀧

あふぎ見ておどろかれけり三熊野の瀧はまたなき乾坤（あめつち）の瀧

箕面瀧

もみぢ葉は散りてあとなき夕山に耳あたらしき瀧の音かな

題不知

あめつちのそこひの限りたぐひなきふじの白雪みよしのの花

海

神風を眞帆にかくればひろくらき氷の海も物のかずかは

○見いだす　つく〴〵眺める。

○つと　土產。

○つら〳〵に　列なる意につく〴〵の意を掛く。

○ひさかたの云々　新古今集神祇紀淑望「久方の天の八重雲よりわけてくだりし君を我ぞ迎へし」

○はざま　狹い間。

○またなき　類ない。

○乾坤の瀧　天から地へと落下るやうに高く見えるのでいふ。

○耳あたらしき　聞いて珍らしく思ふ。

○あめつちのそこひの限り　天下中での意。そこひは至り極まる所の意。

山居

秋は鹿冬はましらの聲すなり山もうき世の外にやは住む

なか〳〵になぐさめられてさびしきは友よぶましら棹鹿の聲

秋山居

むらもみぢ散りて苔路はたえたれど鹿のね近し山陰にして

冬山居

わが庵は雪に木の葉に埋もれて月も板間をとはずなりにき

橋

かつしかやまゝの手兒名がかぐはしき名さへ橋さへ語りつぎつゝ

古戦場

むらさめに鬼火けたれて尾花ちる夕の風のすさまじきかな

江山興多

われゐひぬいでや流れに枕して清き巖に口そゝがまし

幽居望山

雲霧は朝な夕なにさわぎても山の心は靜けかりけり

幽居聞水

○秋は鹿云々　千載集雑俊成「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」

○山もうき世の外には住む　山とても浮世の一部分である。

○むらもみぢ　叢紅葉。

○月も板間をとはずなりにき　屋根の破れが木の葉や雪に閉ざされて月光が漏れて入らないことをいふ。

○かつしかの云々　萬葉集卷三「我も見つ人にも告げむ葛飾の眞間の手兒名が奥つき所」同卷十四「足の音せず行かむ駒もが葛飾の眞間の繼橋やまず通はむ」下總國東葛飾郡眞間村の眞間川の岸（現今の國府臺の高地）に手兒名の墓がある。

○語りつぎつゝ　「つぎ」は橋の縁語。

○鬼火けたれて　燐火が消されて

松風はたえし夕もとる琴の下樋(したひ)にかよふ山水の音

山　彦

櫻ちる春なつかしみ鶯にとへば答ふる山びこのこゑ

朝　眺　望

家おもふ夢の行方もしらみけりなにはわたりの曙の空

出　山

雪わけて薪こりにしきのふをば浮世にかへす山櫻かな

山家送年

ほとゝぎすわびて出でにし杉の戸にいくたび鹿の秋をとふらむ

閑居　平井保祐によする

塵の世は空しきものと瓢吹く音さへ淸き軒の山風

東(ひんがし)の市のちまたも竹を栽ゑて君しいまさば靜けからまし

松

おのづから松はちとせをへにけらし花に紅葉におもがはりして

山家松

うちむかふ窗の外山の一つ松世のうき雲はかゝらざりけり

---

○琴の下樋　琴の甲と裏板との間の樋の如く空虛な部分。

○出山　釋尊の出山。

○薪こりにし　行基菩薩歌「法華經を我が得しことは薪こり菜摘み水汲みつかへてぞ得し」にある如く。釋迦の難行苦行を下に含む。

○塵の世は空しき云々　和漢朗詠集橘直幹「瓢簞屢空。草滋顏淵之巷。云々。」

○東の市の云々　萬葉集卷三「東の市の植木の木だるまであはず久しみうべ戀ひにけり」東の市は昔京都に東西二市の區劃があつて、東市は辰市村附近であらうといふ。

○世のうき雲云々　新千載釋敎藤原基世女「濁り澄む心の月をながむれば世のうき雲は目にもかゝらず」「うき」に「憂き」と「浮」とを掛く。

行路松

かげひろき峯の笠松旅にしてむくふ物なし雨の夕ぐれ

社頭松

すみの江の岸の高松ふかかれと神をいさめぬ朝風もなし

窗竹

玉くだくこゑかときけば窗の竹北吹く風のそよぐなりけり

ふみ見れどいふべきふしもかどもなし竹の葉越しの窗の月影

いつしかと起臥やすくなりにけり窗の呉竹かげ淸くして

木

大伎曾山あたら大木の陰行けど飛驒のたくみのかへりみもせぬ

杉

荒鷲の羽ほす雲の八重山に誰が知る人と杉は生ひけむ

椿

菊老いし垣ねの道は霜ながらつら〳〵つばき花さきにけり

霞立つはこやの山の玉椿君が八千代をかぞへてや咲く

芭蕉

○いふべきふし 「ふし」は竹の緣語。
○かど 才。
○大伎曾山云々 萬葉集卷十三「吾が通ひ路のおきそ山三野の山なびけと人は踏めどもかくよれと人はつけども心なき山のおきそ山三野の山。」大伎曾山は信濃國木曾山の總稱。
○誰が知る人と 誰を知人として
○つら〳〵つばき 植ゑ竝べられた椿。萬葉集卷一「巨勢山のつら〳〵椿つら〳〵に見つゝしぬはな巨勢の春野を」
○はこやの山 藐姑射の山。仙洞御所。

世の中を夢と見はてて誰かすむ風のばせをの葉がくれの宿

蘭

奥山のいはほに生ふる花の香は人に知らるゝものとしもなく

紅のかすみのおくの岩陰に塵にまじらぬ花の香ぞする

苔

庭もせに綠八重しく苔筵誰待つとてのあるじなるらむ

鶴

高砂の尾上の松のいにしへを雲居に羽打つたづに問はばや

席田(むしろだ)のいつぬき川になく鶴の聲や雲居に立ちのぼるらむ

龜

片淵の底にひそめる龜こそはうきせをしらで萬代や經む

うらやすく龜ぞ代をへむ年月もしらぬ蓬が島陰にして

鷄

くだかけはくすしき鳥か神代よりその鳴く時のたがひやはする

猿

青雲のたなびく日すら小雨ふる山のおくがにましら鳴くなり

○奥山の云々　古今集秋貫之「見る人もなくて散りぬる奥山のもみぢは夜の錦なりけり」
○紅のかすみ　朝日や夕日のうつろふ影。
○塵にまじらぬ　浮世を外にした意を含む。
○庭もせに　庭も狹いほど一面に
○苔筵　苔の一面生えた所を筵と見立つ。
○あるじ　もてなし。
○高砂　播磨國加古郡。新古今集秋藤原秀能「吹く風の色こそ見えね高砂の尾の上の松に秋は來にけり」
○席田　催馬樂席田「むしろだの伊津貫川に住む鶴のいつぬき川にすむつるの」席田は美濃國本巣郡。
○片淵　片方が深い淵。
○うきせ　憂瀨。苦しい時。瀨は片瀨の緣語。
○うらやすく　安泰に。
○蓬が島　蓬萊島。
○くだかけ　鷄。
○くすしき鳥か　奇妙な鳥かな。
○青雲のたなびく日すら小雨ふる　萬葉集卷十六「いやひこのおのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そぼ降る」青雲は青空を雲に見立つ。
○おくが　奥深い所。

犬

翁丸いで翁丸こととはむぬし知る道は誰にならひし

猫

にくかりし鄰の猫もいつしかに馴るれば馴れてあはれなりけり

蝸牛

うき雲のさだめなき世にくらぶればかたつぶりこそところ得にけれ

蛛

手もすまに何もとむらむさゝがにの我が山窗の花にすがきて

劍

利(と)しといへどますら武雄にとられずばたゞ大かたの劍ならまし

弓

笛のねは月に沈みて瀧口の守りの弓弦(ゆづる)雲にひゞけり

しかりとてさつをが心たけからばゆるびはつべき弓ならなくに

玉

わたつみにしづく白玉君がため今もかづかむあまの子もがな

衣

---

○かたつぶりこそところ得にけれ　蝸牛が殼を脊負ひ行くをその家と見なして、人間が住家すら得ざるものあるに比較す。
○手もすまに　手も休まず忙しく
○さゝがに　蜘蛛。
○すがきて　巣を作つて。
○大かたの劍　普通一般の劍。
○瀧口　瀧口の武士。禁中警衞の武士。
○弓弦雲にひゞけり　鳴弦することをいふ。
○さつを　獵人。
○わたつみに云々　萬葉集卷七「わたの底しづく白玉風吹きて海は荒るとも取らずはやまじ」
○しづく　沈んで透き通つて見える。
○かづかむ　潜つて取る。

旅衣かたのまよひも大かたは花と紅葉のなごりなりけり

布

河内女がしづはた立てて織る布もあたひ尊くなりにけるかな

酒

あぢしらぬ人はともあれくみてまし三輪の市女(いちめ)がこゝにうる酒

京人(みやこびと)花見にこむとまちつけてかみし味酒(うまさけ)かめにたゝへり

なにをかも蓬が島にもとむべき死なぬ薬をかめにたゝへて

九里南洋の茶をおくられける時に

うめのをの月にかをれる木の芽にもうきよの夢は覺めがてにして

笙

笛とればむかしをとめてかよふなりあしがら山の嶺の松風

墨

燈のかひなく消ゆる世にしあはば煙の末もいぶせからまし

筆

名をしるすまでと人にはいひなして筆の林に身は老いにけり

硯

---

○かたのまよひ　衣の肩の所の布が縱横亂れて片寄ること。
○河内女云々　河内國からは河内木綿こて地質堅い木綿を產よる。
○しづはた　倭文機。但しこゝは賤機の意で賤しい機織器具をいふ
○ともあれ　兎に角として酒の味を知る人はの意。
○三輪の市　大和國の三輪には市場があつたのでいふ。
○まちつけて　待ち設けて。
○かみし　釀造した。
○なにをかも　「も」は歎辭。
○死なぬ薬　蓬萊島にあるといふ不老不死の薬、酒をいふ。
○笛これは云々　新羅三郎義光の故事。
○煙の末　墨は油煙を膠汁でといて作るからいふ。
○いぶせからまし　不快であらうの意。煙の緣語。
○いひなして　詐り言つて。
○筆の林　書きしるす歌の多いことをいふ。

○硯の海　學問の世界或は寧ろ歌の天地を指したのであらう。
○玉かづく海人　立派な歌を作る歌人の意であらう。

○かれ野　古事記の枯野(からの)の傳説により、船の意。

○浮寶　舟。
○見はやすべくも波　見はやすは見てもてはやす意。波に無みを掛く。

○風にまたゝく窗のともし火　物のはかなく危いことを風前の燈火といふ。世事萬端皆然りである。

○よしのの花　南朝方を指す。

○大王のみたてかしこし　大君の御守護となるのも畏れ多い。みたては御楯で楯となつて防ぐ意。
○梓弓　引きの枕詞。
○引きもかへさは　生きて再び歸り來らば。

いかばかり硯の海の深ければ世に玉かづく海人のまれなる

文

あけくれのわがおこなひのつれ〴〵に昔かなしきあとをみるかな

船

ますらをのかれ野を神の追風にまかせてあたをうつよしもがな

夷船

海の城とたのむゑみしが浮寶(うきだから)見はやすべくも波のうへかな

燈

世のなかはさてもいかにと問ひてまし風にまたゝく窗のともし火

鬼念佛

まぼろしの夢なるものをありと見しその世くやしき鐘の音かな

楠公

みなと川月の光のしづまずばよしのの花もくもらざらまし

小楠公

大王のみたてかしこし梓弓引きもかへさばうれしからむ世に

新田中將

雪ふかく道まどひても葛城の雲にこゝろをかけぬ日はなし

名和長年朝臣

天そゝり御旗なびきぬ船上（ふなのへ）の峯のあらしを追手にはして

兒島高德主

から鳥のあとをとめずば花ざくら咲けどいろなき島根ならまし

不識庵

とる鉾に雲も靡きて越の山鴈なく夜半の月をこそ見れ

法性院

霧わけていそぎし甲斐の黑駒もこし路の雪は踏み迷ひけり

鎭西八郎

世のなかはこの矢一つにさだまるを放ちぞかぬるますらをにして

右大將

池殿のかげにひそみし龍の子のふじの雲まく時は來にけり

源判官

梓弓八島のはるに引きかへてわけしや何ぞみよしのの雪

辨慶

---

○葛城の雲に云々　後醍醐帝を思ひ奉る意。

○天そゝり　空に聳え。

○追手　追風の意。

○から鳥のあとをとめずは　唐鳥の跡とは漢詩の意で彼の「天勾踐を云々。」の詩を櫻の木に殘さずはの意。

○不識庵　上杉謙信。

○越の山云々「霜滿軍營秋氣淸云云。」の詩を下に含む。

○法性院　武田信玄。

○世のなかば云々　萬葉集卷十九「世の中の常なきことは知るらむを心をつくすますらをにして」

○右大將　源賴朝。

○池殿　淸盛の繼母。賴朝の命乞ひをした人。

○龍の子　池殿の池に緣を持たせて、蛟龍も終に池中の物に非ずの意を掛く。

○源判官　源義經。

○梓弓　引きの枕詞。

○八島のはる　義經の華かな功名を春に比す。

○わけしや云々　義經の吉野落を冬に比す。

かの鐘をなげうつよりも此の杖をおたかの關にとるかくなしさ

四郎高綱

波ふみて駒すゝめずばもののふの八十宇治川のもくづならまし

在五中將

かぐはしき小野山櫻ちるからに世にはうかれしおぼろ夜の月

花山僧正

はちすばの露はうき世になびきても住むかげ淸し山のはの月

喜撰法師

うぢ山は月影淸ししかりとて春の木の芽はにずやあいけむ

西行上人

なでしこは何ぞは露と見すてても世をやつくさむみよしのの花

蓮生法師

ちる花にけだしうき世はそむきてもすまのうらみやはるゝ世もなき

紫式部

山水にすます心をなにしかもうき世にかへす夜半の月影

淸少納言

○鐘をなげうつ云々　鐘と杖とを對照さして、辨慶が强力を發揮するよりも安宅の關で杖を以て義經を打つ方が辛い意。
○もののふの　八十宇治川の枕詞八十宇治は八十氏から宇治川にいひかけた。
○在五中將　在原業平。
○小野山櫻云々　小野山は山城國愛宕郡。小野山櫻は伊勢物語の「世の中に絕えて櫻のなかりせば人の心はのどけからまし」によつて、惟喬親王を指す。親王の小野宮の址は同郡にある。
○花山僧正　僧正遍昭。
○はちす葉の云々　古今集夏僧正遍昭「蓮葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」
○うぢ山は云々　古今集雜喜撰法師「我が庵は都の巽しかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり」
○なでしこは云々　四歲の娘を緣側から蹴落して出家した話。なでしこに愛子を掛く。
○世をやつくさむ云々　西行が吉野山中に籠居した話。
○ちる花に云々　熊谷直實が敦盛の首を斬つたのが出家の動因となつた話。
○すまのうらみ　すまに濟まない意を掛く。

なすわざは憎げなれどもふみ見ればゆかしくもあるか手弱女にして

静御前

うらぶれてかへす袂の追風によしのの雪や空に亂れし

巴御前

たのめこし木曾山ざくらちりしより亂れてさむし戸隱しの月

常磐御前

さえとほす野べの雪よりむし衾なごやが下や臥しうかりけむ

小督局

琴とりてうき世の秋やよそに見し嵯峨野の奥のあり明の月

祇王祇女

もろともに露にひたせる袖ながら所得がほの月のかげかな

浦島子

君獨りさのみなわびそ玉くしげ明くれば暮るゝ夢の世の中

淵明

山水にこゝろすむ世は中々に緒なき小琴もほだしなるらむ

琴とりていざ歸らまし菊かをる山に妻子のわれをこそ待て

---

○ふみ見れば　枕草紙を指す。
○あるか　あるかな
○うらぶれて　心憂く思ひて。
○たのめこし木曾山ざくらちりし　あてにして居た木曾義仲が戰死した意。
○戸隱し　信濃國水内郡。
○さえとほす　冷え切る。
○露にひたせる　涙に濡れた意を含む。
○所得がほの月のかげ　濡れた袖の上に月光がはつきり映れる貌。
○玉くしげ　「明く」の枕詞。浦島の龍宮より持ち來れる玉手箱に緣を持たす。
○明くれば暮るゝ　明くに夜が明ける卽ち幸福のやうな意を持たせ猶玉手箱を開ける意をも匂はす。暮るに幸福の失はれるやうな意を持たす。
○緒なき小琴　自然の調べ。
○ほだし　心を迷はすもの。

許由

松風も下ゆく水もかしがまし今は何にか耳あらはまし

寒山

手もたゆく何かぞふらむ世の中の夢は跡なき山のはの月

拾得

塵の世ははらひすてても山櫻そむきがたしや花のほだしは

荘子

おのれかとみれば蝶なり胡蝶かとみれば人なり夢の世の中

楊貴妃

ふかみ草よそに香をしも漏らさずば花のはつかに色はあせじを

王昭君

しのびかねまた琴とればあぢきなく月の空さへかきくもりつゝ

月見れば古郷こひしかきむだく四つのをごとの緒だえのみして

漁夫

月いでぬ船さしかへれ家刀自が君まち酒もあたゝまりけり

樵者

○下ゆく水　物の陰を流れゆく水
○耳あらはまし　彼の潁川に耳を洗ふ故事から來て、汚れた耳を淸らかにしようかの意。
○手もたゆく云々　數へる手指もくたびれる程何を世の人は數へて居るだらう。世人が名利に奔走することを指す。
○夢は跡なき山のはの月　浮世の夢が覺めて眺めるこ只山の端に常住の月が懸る。悟りの姿は山の端の月である。
○塵の世ははらひすてても　浮世をば思ひ捨てても。はらひすては塵の縁語。
○山櫻云々　自然をば見捨てることの出來ない心の惱みをいふ。
○おのれかと云々　荘子齊物論「昔者荘周夢爲二胡蝶一、栩々然胡蝶也。自喩適レ志與、不レ知レ周也。俄然覺、則蘧々然周也。不レ知周之夢爲二胡蝶一歟。胡蝶之夢爲レ周歟。」
○ふかみ草　牡丹。
○はつかに　わづかに。
○あぢきなく　徒らに。
○かきむだく　搔抱く。抱く。
○四つのをごと　琵琶。
○さしかへれ　棹し歸れ。
○家刀自　家妻。
○君まち酒　君を待つ待酒。待酒は人を待ちうける時に造りおく酒

つきせじな薪にかへしひさご酒わがしる花を思ふどちにて

布袋のかた　空水居士にしめす

何こむる袋とゝへば世の中にありて空しきたからなりけり

塚飯山のがり花のさかりなるをあすはかならずとひ給へなどいひやるとて

ふりはへてあすはとへかし山櫻ふみ見る窗に駒を繋ぎて

彌生のはつかばかりにかありけむ關恆規がひさしく相見ねば花みがてらにこゝろあらば雨風はよしさふるともといひおこせたるにあすはかならずなどかへりごとして文のはしに

雨雲のかゝるをりこそふりはへて花をも人もとふべかりけれ

長谷川守眞がもたるくすしき蘆根をみて

つのくにをゐ中といひし古の秋のかたみの蘆の根ぞこれ

いづれのころにかありけむ高野の奥に大銃の響きければ

南の山にあやしき音すなりかけずくづれぬ君が代にして

明光浦にあそびて

ふぐつもつ子等にまじりて古翁（ふるおきな）まわかの浦に玉藻かる見ゆ

○わがしる花云々　我が知己なる花を酒の相手として。
○かた　繪。
○何こむる袋と　何を納めてある袋であるかと。
○がり　許に。
○ふりはへて　わざ〳〵。
○さふるとも　障ふるとも。妨げても來給への意。
○雨雲のかゝるをりこそ　雨雲のかゝると斯かる折とを掛く。
○もたる　持ちたる。
○くすしき　珍奇なる。
○つのくにをゐ中といひし　萬葉集卷三「昔こそ難波居中といはれけめ今は都となはりにけり」ゐ中は田舍の意。攝津の難波は蘆の產地。
○大銃　大きな流れのそゝぐ音の意か。
○南の山　高野山。
○ふぐつ　「ふぐし」で、土を掘る竹又は木で作つた具。
○まわかの浦　紀伊國和歌浦。明光浦とも書く。

春旅

わがこゝろなぐさめかねていで行けば柳の絲もむすぼほれつゝ

うごかじとゝめし心よ塵の世の花にはなどかうかれ出づらむ

さても猶をしまるゝかな柳陰花にといそぐ朝ながらも

かづらきの雲たゞならず見えにけり我が山ざくら今か咲くらむ

光道師の東へ行かるゝ馬のはなむけに花下別人といふことを

青柳に花とりそへてかざしゆく旅はうけくもあらぬ春かな

前田一章とともに淡海の志賀にて

山ざくら散りてうかびしさゞ波のむかしにかへせ志賀のうら風

比えにのぼりて

大比えや八重の白雲踏み分けてかつ塵の世をふもとにぞみる

夏旅

ほとゝぎすわが郷過ぎて來鳴くらむ汝(な)がこゑきけば家ぞ悲しき

秋旅

かづらきやはしきたかねの薄紅葉かへり見つゝも行く山路かな

月前旅

---

○わがこゝろなぐさめかねて　古今集雜讀人不知「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」
○むすぼほれつゝ　絲の結びて解けない意に心がもつれて晴れやかでない意を掛く。
○塵の世　不動泰然たる心を重いと見るので、塵の世に輕い意を匂はして、對照させた。
○うかれ出づらむ　心落ちつかずして花見に外出すること。
○雲たゞならず　雲の趣が通常とかはつたとは峯の櫻が色づいたためである。
○うけくも　憂く辛くも。
○山ざくら散りて云々　千載集春讀人不知「さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」
○かつ　一方では。
○ほとゝぎす云々　古今集夏讀人不知「時鳥鳴く聲聞けば別れにし故郷さへぞ戀しかりける」
○はしき　美しく可愛らしい意。

露しげきこよひも野邊の草枕あすやいづこの月にむすばむ

冬　旅

旅衣しぐれて寒き夕山にましらなくなり友なしにして

たのめこしかた野の松の下かげもしぐれて寒き夕ぐれの空

旅はたゞ冬の空こそ悲しけれ野邊も山邊も時雨のみして

冬送別

こゝろしてやどりさだめよ草枕冬はしぐれのふらぬ野もなし

述　懐

琴とりてこの世は花につくさまし終(つひ)のむくいはさもあらばあれ

こゝろより外には山もなかりけり何をもとめて家はいでけむ

誰待ちてむかしかたらむ詠めやる月さへ西に傾きにけり

神　祇

味酒(うまさけ)のみわの神杉かみながら神さび立てりみわの神杉

釋　教

すむもまた濁るも人の心にて月はところをえらばざりけり

ともすれば浮木をはなつ目なし龜あら波高き海原にして

---

○草枕　草を結んで枕とする意から次に「むすばむ」とある。

○琴とりてこの世は花につくさまし　風流風雅を以て現世を送らうの意。

○終のむくい云々　來世の應報はどうでも宜しい。

○味酒の　「み」の枕詞。萬葉集巻四「味酒をみわのはふりがいはふ杉手觸れし罪か君にあひがたき」

○浮木をはなつ目なし龜　阿含經に盲龜浮木の譬喩があつて、盲龜が偶然浮木につかまつて命を助かることから、逢ひ難い幸福に逢ふ意に用ゐらる。目なし龜は衆生であり、浮木は佛の力である。浮木を放つは折角得た佛力を再び失ふ意である。玉葉集釋敎「目しひたる龜の浮木にあふなれやたまたまえたる法のはし舟」

春ば何處にあるかそれは軒の梅に見えるものをわざ〳〵。

○いとけなき佛の眉　惠龍尼の眉を指す。眉のかゞやくは佛の三十二相の一なる眉間の光をいふ。
○龍のあぎとの玉　龍のあごにあるといふ光れる玉。
○衣裏寶珠　法華經九百弟子授記品「以二無價寶珠一繫二其衣裏一與レ之而去。其人醉臥都不二覺知一云々。」
○夢　迷ひの夢。
○朝朗　悟心をいふ。
○誓ひの船　弘誓の船。佛が衆生をして生死の苦海を渡つて涅槃の彼岸に達せしめることを船が人を渡すに喩ふ。
○かの岸　彼岸。悟りの境界をいふ。
○かねのわくゆ　金の涌く湯であらう。
○廣澤　廣澤の池。山城國葛野郡。
○度するをほぎて　得度するを祝ひて。
○なでしこ　撫子の花に愛子の意を掛く。

惠龍尼にたむけける

いとけなき佛の眉のかゞやくは龍のあぎとの玉かあらぬか

衣裏寶珠

とりいだす玉の光に夢さめて來し世悔しき朝朗かな

平井きな子の靈に手向くる

とく來れけさの追手におくれてはいつか誓ひの船にあふべき

朝和に片帆おろせばかの岸の春をときはの花匂ふなり

飲酒戒

舌鼓うちてあぢはふひさご酒かねのわくゆはしるべくもなし

高恭阿闍梨あまたの聖教を寶肝和尙より授かりたまひしを祝して

小野山の花のひかりを廣澤の淸き月夜にすましてやみる

卯月のころ増辨あざりの兒子を度するをほぎて

なでしこのあしたの露をすみ染の袖にかけてもいはふけふかな

無常

誰をかはたのみ誰にかたのまれむあゝて空しきまぼろしの世に

○とりべ山　鳥部山。洛東五條坂通六道の東南にあつて、そこに火葬場があつた。
○立ちても　けぶりの縁語。
○おなじ葉末の云々　新古今集哀傷僧正遍昭「末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらむ」
○とるずゝに涕の玉をくりそへぬ　手に持てる數珠玉に落ちる涙の玉を添へ加へる。涙の玉が數珠玉の上に落ちるので數珠の玉が添へ加はつたと見る。「くり」は數珠の縁語。
○祥忌　死者の一周忌以後の當月當日。
○しきみがはら　樒の生えた原。

とりべ山立ちてもゐても悲しきはこの夕暮のけぶりなりけり
はかなしと人のうへのみ思ふかなおなじ葉末の露の身にして
はかなみし花はことしも咲きてきぬかへらぬものは昔なりけり

文久二年の秋のはじめつかた友達のおほくみまかりにけると人のつげおこしたりければ

とるずゝに涕の玉をくりそへぬたゞひとかたのなごりならねば

耕雨がうせける後におくつきにまうでて

ともに見し小萩が露をさしながら手向けむものと思ひかけきや

鳴泉が親の祥忌をとぶらふ法のむしろに侍りて

そのおやを目には見ねどもまのあたり弔ふ子こそあはれなりけれ

春哀傷

鶯はなけども梅はかをれども悲しき春のゆふべなりけり
咲けばちる世のことわりの花すらもこの春ばかり悲しきはなし
ものはみな悲しかりけり花鳥の春も秋なり露の夕暮
たむけにとしきみがはらの花をればまづ涕こそ草に落ちけれ

今はたゞくもらばくもれ秋の月いかに見るやと問ふ人もなし

ながむればば袖ぞぬれける秋の夜の月も昔をしのぶどちにて

宇野是信が墓にまうでて

手向けばやそのよにうゑしその園の春を忘れぬ梅の一枝

山齋翁の一周忌に寄梅懐舊

春きぬと梅はさけども故郷の垣根は寒き雪の夕ぐれ

寄月前花懐舊

もろともに見しよの春をしのぶかなおぼろ月夜の花の下陰

淸虚居士の三回忌に寄卯花懐舊

咲きいでて雪はづかしき卯の花も垣ねのやみは照らさざりけり

柹園翁の一周忌に寄蓮露懐舊

あはれ身は蓮の露のもろくとも玉の光や常磐ならまし

釋淨意の一周忌に寄木懐舊

いにしへもうかびてかなし橘の花の香くゆる夕ぐれの雨

秋　懐　舊

○くもらばくもれ秋の月　金葉集戀藤原基光「眺むれば戀しき人の戀しきに曇らば曇れ秋の夜の月」
○どち　同志。仲間。

○もろともに云々　新古今集雜藤原雅經朝臣「なれ〳〵て見しは名殘の春ぞともなどしら河の花の下陰」
○雪はづかしき　白雪も恥ぢる程な眞白い。

○玉の光　露の玉の光。

○橘の花の香云々　古今集の「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」等の如く、橘の花の香は昔の人を思ひ出すよすがとして歌はれる。

この秋ははえやなからむ主なき宿のもみぢ葉しぐれのみして

一閑居士の十三回忌に

いにしへの秋のあはれも身にそひていとゞ悲しき月の影かな

稚俊童子の靈に手向くる寄菊哀傷

斧のえのくち葉がうへにあられふり菊の千歳も果てぞかなしき

白菊の露にやつれし朝より袖はしぐれのひまだにもなし

平井調庵琴師の七回忌に寄琴懷舊

吹く風のおとさへかなしから琴の秋のしらべは松にのこして

高島春松が妻の一周忌にたむくる往事如夢

よの中は夢なりながらあぢきなく跡なき跡をしのぶけふかな

ありし世をおもひかへせば花鳥の春も夢なる夢の一時

梅契多春

雪かをるはこやの山の梅の花ちとせの春は鶴（たづ）ぞしるらむ

長尾眞峯が妻むかへたるよろこびを梅によせて

いろも香もあかれぬ梅のあゆる實にちよをこめても契る宿かな

白川敬齋が賀筵を祝

○はえ　見榮え。

○斧のえの云々　古今集秋素性法師「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年を我は經にけむ」斧の柄の朽ちたことは晋の王質の故事をいふ。暫時と思ふ間に長年月を經る意。

○しぐれ　涙の意。

○から琴　唐琴。唐は美稱。

○秋のしらべは云々　拾遺集雑齋宮女御「琴の音に峯の松風通ふらしいづれの緒より調べそめけむ」

○花鳥の春　花笑ひ鳥歌ふ春。

○あゆる實　熟した實。

○松竹もいひふりにけり　松竹を以て祝ふことは陳腐である。

○鶴岡に云々　今様「君を初めて見る時は千代も經ぬべし姫小松御前の池の鶴岡に鶴こそ羣れゐて遊ぶめれ。」

○こゝらのひこ　澤山の曾孫。

○天少女云々　謡曲羽衣の文句。

○みぎり　砌。

○君がちとせも友はありけり　君の千年の齢も相手には千年の松がある。

○龜山　蓬萊山。

○老いせぬ門　不老門。和漢朗詠集慶滋保胤「長生殿裏春秋富。不老門前日月遲。」

○松の花云々　松の花は千年に一度咲くといふ。

○ときはかきは　常磐堅磐。永久不變に。

松竹もいひふりにけりあたらしき此のよろこびを何にたとへむ

　關松翁の賀に寄鶴祝

鶴岡に立ちまふ鶴のこゑきけば君が千歳を祝ふなりけり

あしたづの翅(つばさ)をかりていや高き君が齢のはても見てまし

　猿丘老人の七十の賀に寄龜祝

龜の子のこゝらのひこのゆくするも蓬が島に君ぞみるらむ

　犂雅和尚の賀に寄山祝を

とことはにかけずくづれずうごきなき山こそ君がたぐひなりけれ

　寄石祝

たひらけくさきくいまさめ天少女ちひろの巖なで盡すまで

　寄松祝

門ひろきみぎりに立てる松見れば君がちとせも友はありけり

萬代はおのづからなる龜山の松の齢も御代の外かは

神さびていはほに立てる高松を老いせぬ門にうつしうゑばや

松の花ちたび咲きてもこの宿の榮えはつきじときはかきはに

寄菊祝

いかでそのくらゐを松にゆづるべき雲ゐに薫る白菊の花

かぐはしき籬の山の菊の花ちよは松にも讓らざりけり

水野梅山が父月叟の賀に寄月祝

うごきなき齢をとはに照らすらむ龜のを山の秋の夜の月

賀

松竹もいはば世の常はかりなき君が齢は何によせまし

若駒に君むちとりてつら〳〵に八尾の椿八千代まで見む

よろづよの龜の齢のはても見むうごかぬ山を心にはして

○くらゐ　位置。

○龜のを山　山城國葛野郡。

○松竹もいはば世の常　松竹を以て祝ふのは月並的で。

○つら〳〵に云々　萬葉集卷二十「足曳の八尾の椿つら〳〵に見とも飽かめや植ゑてける君」八尾は多くの峯の意。

題二古岳上人所レ著空谷傳聲集一

枯二座寒巖一俯二遊川一　心聲矢々竟成レ編　無何因果塵沙劫　欲レ了二生前未了緣一　欲レ了二生前未了緣一　題レ詩何背ヶ向二巖邊一　素琴一々不レ能レ瀉ッ　吟和空林朝暮蟬

亭　干　溪　人　庵

近世緇林解二風流一者鮮矣古岳上人已以レ琴鳴二天下一又善二和歌及漢歌一眞空谷跫音矣哉今先刻二和歌集一如二漢歌一則將下待二他日一而刻上焉

慶應二年丙寅仲春山外節齋居士森田益題二於古岳菴山水奇絕處一

雲　逸　道　人　長　連　書

# 空　谷　傳　聲　大尾

# 千々廼屋集

千種有功

# 千々廼屋集

## 春部

千種有功

立春

霞むらむ神路の山もしのばれてかしこ所のけさの春かな

打ちはへてやはらぐ春になりにけり天地人の三つのまごゝろ

都立春

くず人のふく笛のねも鶯もともによしのの春や告ぐらむ

人日立春

青馬をみはしの木末かすみけり若菜つむ野も春やたつらむ

初春風

青柳の絲のもとにや宿るらむこほりをときし春のはつ風

初春松

○神路の山　伊勢内宮の御山。
○かしこ所　内侍所。
○打ちはへて　打續いて。
○くず人　吉野山中に住む國栖人をいふ。古昔朝廷にも國栖奏といつて、節會の時に國栖人が笛を奏したことがある。
○人日　五節句の一、陰暦正月七日。
○青馬　正月七日の白馬節會。青馬を見るに御階を掛けたのであらう。

鶯もことのはそへてみよし野の玉松が枝のはしき春かな

名所初春

鳥がなくあづまの空をけさ見ればふじの高ねに春風ぞ吹く

初春見鶴

ちよ呼ばふたづがね高し初春のまつの色なる大ぞらにして

海邊初春

大にへの腹赤（はらか）つりつゝ八汐路のやすきにほこる春の浦人

早春柳

春のたつ野べの柳の絲見ればみやび心もなびきそめけり

早春興

都びと若菜つむなり浦のあまも海松（うみまつ）ひきつ貝ひろふらし

貴賤迎春

賤しきもよきも春こそしられけれ風流（みやび）さとびの道を隔てず

陽春布徳

花鳥に世はやはらぎて天地の神もたのしむ春やきぬらむ

春生人意中

---

○鶯もことのは云々　萬葉集巻二「みよし野の玉松が枝ははしきかも君がみことを持ちて通はく」
○ことのはそへて　鳴く意。
○玉松　玉は美稱。
○はしき　愛しき。
○鳥がなく　あづまの枕詞。
○まつの色なる云々　松の色のやうな緑色の大空にて。
○大にへの腹赤　昔正月元日に、筑前國宇土郡長濱から、供御の料に鱒を献ずるのを腹赤贄といふので、それを指した。
○なびきそめけり　柳の枝の春風に靡くに掛けて、自ら起る意。
○海松　「みる」といふ海草。

の芽。古事記「如二葦牙一因二萌騰之物一而神名云々。」
○人はみな花の心になりにけり　古今集雑僧正遍昭「みな人は花の心になりぬなり苔の袂よかわきだにせよ」
○水無瀬河　攝津國三島郡。
○こゝろとけたる　冬の氷の解けそめた意。
○雪こほり流るゝ云々　古今集冬讀人不知「降る雪はかつぞ消ぬらし足引の山の瀧つせ音まさるなり」
○鼓うつなり　山河の水の音の形容。
○方さりの山　片方へ離れ遠ざかれる山。
○春のみるめにかりてけり　春の眺めにした意。小汐といふ聯想から海松を刈る意を掛けたのであらう。
○小汐の山　山城國乙訓郡。
○青柳の　かつらの枕詞。
○ゑみの眉ひらけ　嬉しさの為に破顔一笑する意に花の綻ぶ意を掛く。
○まゆびきの　横の枕詞。萬葉集卷十四「妹をこそあひ見に來しかまよびきの横山べろのしゝなす思へる」
○さくらがさね　櫻襲。表白、裏は赤花又は葡萄染等の數說ある。

人はみな花の心になりにけり雪もこほりもさもあらばあれ

春情處々多

山もとに鶯なきて水無瀬河したゆく水もこゑたてつなり

瀧音知春

音羽山鶯ならぬ瀧つせもこゝろとけたる聲のきこゆる

雪こほり流るゝ春の時つげて鼓うつなり山の瀧つせ

春日望山

方(かた)さりの山と見ゆるはなかりけりなべて霞のきぬかづきつゝ

春のあした山を見て

都びと春のみるめにかりてけり小汐の山のみねのまつばら

毎山有春

青柳のかづらき山を春見れば我さへゑみの眉ひらけつゝ

風光日々新

まゆびきの横山つゞき霞みけり春のよそほひ色ことにして

峯になびく霞の衣あすは又さくらがさねにならむとすらむ

春色浮水

雪とけてま清水はしる瀧川のすゑにうかぶは霞なりけり

山鳩の色になりにけり石清水をのへの春の影うつるらむ

おりたちて少女もくめや堀川の芹根の清水いろまさりけり

萬物感陽和

庭鞠のひゞきも春になりにけり花うぐひすの色ねのみかは

松竹増春色

鳥羽山も伏見の里もかすみけり松と竹との春をくらべて

心靜酌春酒

いざくまむ瓶にさしたる初花のわか木の梅を藥子にして

氷消田地

きのふまで氷のしめし小山田を春にまかせる水の聲かな

東風解氷

世はなべて氷とくらし水上のおほうち山に春風ぞふく

春風春水一時來

水上のたかねの雪もけふとけて清瀧川に春風ぞふく

〇山鳩の色　麴塵色。男山の最高頂を鳩の峯といふ。
〇堀川　京都の上京にある。
〇庭鞠　蹴鞠。
〇鳥羽山　大和國生駒郡。萬葉集に「白鳥の飛羽山松の云々。」とある。
〇伏見の里　山城國紀伊郡。
〇藥子　正月元日宮中で供御の屠蘇等を嘗め試みる未婚の童女。若木の梅を之れに喩ふ。
〇しめし　占めし。一面に張る意。
〇おほうち山　山城國葛野郡。
〇水上の云々　新古今集春西行法師「降りつみし高嶺のみ雪解けにけり淸瀧川の水の白浪」淸瀧川は[illegible]

こやの池も冰うちとけてあしの屋の簾動かす春のはつ風

若菜

春のたつあしたの原の若菜こそたのしきをつむ始めなりけれ

かすが野の神のたまへる初若菜わがつみたりと思ひけるかな

雪中若菜

雪ながらかたみにつめる初若菜ふかき心をたれに見せまし

多春摘若菜

はしたかの鈴菜つむにも狩衣きつゝいくらの春をへぬらむ

子日

はるぐと綠に霞む小松原千代をかけてぞ見るべかりける

雲はらふ末の世いかに遠からむ小松がうへの春のはつかぜ

山里にすむ人子日する

山ざとに年ふる老のものわすれ世の人なみに小松をやひく

子日祝

君がためひかるゝ松もひく人もうれしき色はあらはれにけり

○こやの池　昆陽池。攝津國河邊郡。蘆屋は武庫郡。
○簾動かす春のはつ風　萬葉集卷四「君待つと吾が戀ひ居れば吾が宿のすだれ動かし秋の風吹く」
○たのしきをつむ始め　古今集卷二十「新しき年の始めにかくしこそ千年をかねて樂しきをつめ」つむに摘むと積むとを掛く。
○かすが野　若菜の名所。
○雪ながら云々　古今集春光孝帝「君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪は降りつゝ」
○かたみ　籠。
○はしたかの　鈴の枕詞。
○狩衣　きの枕詞。來つゝと著つゝとを掛く。狩衣と鷹狩に用ゐる鷹とは緣語。

○玉のよこやま　武藏國多摩の里に横はれる山。
○うま酒を　かみの枕詞。
○かみなび山　大和國高市郡。
○ほのかに　うま酒の緣語。
○都べは云々　古今集春素性法師「見渡せは柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」同藤原興風「春霞色の千ぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも」
○水の江の浦島云々　後撰集雜中務「あけてだに何にかはせむ水の江の浦島の子を思ひやりつゝ」雄畧記「丹波國餘社郡管川人水江浦島子云々。」
○よしみね　良峯。山城國乙訓郡大原野の南嶺。
○こゝのへの大内山やすたちけむ　宮中の御庭で巢立つたからであらう。
○あてなる　優美上品な。

霞

あさ霞たなびきにけり昨日まであられ亂れし玉のよこやま
うま酒をかみなび山の春がすみ色もほのかに棚びきにけり
そのかみの春を忘れぬみよし野の山の霞もいまや立つらむ

都霞

都べは柳櫻をたちこめて色のちぐさにかすむ春かな

野外霞

さほ姫はおりたちぬらし春の野に霞の袖のうちなびきたる

浦霞

水の江の浦島遠くかすむ日に釣する船はたが子なるらむ

名所霞

ひとすぢの綠と見しは橋立の松をこめたるかすみなりけり

連峯霞

九重のみやこは西も山なみのよしみねかけてたつかすみかな

鶯

こゝのへの大内山やすだちけむさしもあてなる黄鳥の聲

鶯のをさなきこゑぞ聞ゆなるわが園よりや巣だちしつらむ

きなくなり聲にしるしはなけれどもこれぞまさしく宿の鶯

初聞鶯

青柳の絲にひかるゝうぐひすの玉のこゑこそ聞えそめけれ

名所鶯

旅をしもすればこそきけ東路の野上の里のうぐひすのこゑ

松上鶯

うぐひすは心ことばも高砂の尾上の松の春になくらし

竹間鶯

たかむらのおくの春こそゆかしけれ出でがてにして鶯のなく

寢覺鶯

鶯の夜ぶかき聲もきくものをねざめをうしと何おもひけむ

春情有鶯

黄鳥のなきていでたる谷の戸の春のこゝろを誰かしるらむ

鶯聲和琴

くれゆかば琴の下樋に宿かさむたゞ聲あはせ窗の鶯

○きなく　來鳴く。

○野上の里　武藏國秩父郡。

○心ことばも高砂　心ことばも高い意を掛く。

○たかむらのおくの春　鶯の鳴ける竹叢中の春。

○琴の下樋　琴の腹部。

小松に鶯あるかたに

鶯の音ながら宿にうつさばやかすみたなびく野べの小松を

殘雪

あを馬のいなゝく庭に見渡せば遙かにかすむ比良のしらゆき

餘寒

春風に冰室のくちやゆるぶらむおもひの外にさゆる頃かな

のどかなる春の心をもどくかな柳の絲に雪もふりつゝ

春爐火

埋火によれども春のしるしには空だきならぬ梅が香ぞする

梅

ことさへぐ唐國かけてさく梅の花の春こそはてなかりけれ

すがはらの神のかざしの梅の花天に滿ちても香に匂ひけり

早くよりさそはれそめて片岡の梅のさかりにこぬ年もなし

折梅

山里にたちうかりしは家づとの梅ひと枝によりてなりけり

月前梅

○鶯の音ながら　鶯の音を籠めたまゝ。
○もどく　非難する。
○空だき　空薫物。
○ことさへぐ　からの枕詞。
○すがはらの神　菅原道眞。
○片岡　大和國北葛城郡。

妹がすむ垣根の梅にたちよれば月は朧夜こよなかりけり

梅薫袖

錦とてなにうらやまむ此の頃は麻のたもとともにほふ梅が香

山家梅開

春をしる梅一枝に山かげのいほの暦もひらけそめけり

行路梅

みちのべの梅さきにけり鶯も枝くひもちてゆかむとやする

社頭梅

神垣にたちくらさむもかしこきにとゞめがほにも薫るうめが枝

名所梅

みよし野はまだ雪深し初瀬路の梅の盛りに日をかさねてむ

梅交松芳

たがしめし小松が原ぞさく梅の香さへなびきて春風のふく

紅梅

三千年のもゝ色にこそ咲きにけれたが種まきし梅の花ぞも

柳

○こよなかりけり　此の上ない風情である。

○麻のたもと　麻衣で、錦衣に對して、賤者の著る粗服。

○いほの暦もひらけそめけり　山中暦日なしといふから、梅の開いたので、庵に春來たことを知つた意であらう。

○鶯も枝くひもちて　萬葉集巻十「春霞流るゝなべに青柳の枝くひもちて鶯なくも」くひもちてはくはへもちての意。

○三千年のもゝ色　拾遺集賀躬恆「三千年になるてふ桃の今年より花咲く春にあひにけるかな」仙人界に桃があつて、三千年に一度花實を結ぶといふ。

○ふる年　舊年。
○玉の緒　玉を貫ける緒。
○春の日のひまゆく云々　和漢朗詠集雜、慶滋保胤「長生殿裏春秋富。不老門前日月遲。」
○浮ぶこゝろも云々　浮れ心も同情される意。
○さそはれし氷　春風に漸く解け初めた氷。
○水のうきくさ　水は氷に對す。

ふる年の雪のうちよりひきそめて花にかゝれる青柳のいと

玉の緒により合はせつゝ見てしがな長き春日の青柳のいと

池柳

池水にうつる柳のおもかげは底にしられぬ玉藻なりけり

柳有春色

青柳の絲は霞にあらねども山もと遠くたなびきにけり

門柳

小車もひく日ありけり山里のしばの門なる青柳のいと

門柳春久

春の日のひまゆく駒もつなぐらむ老いせぬかどの青柳の絲

若草

もえそめて花なき菫それもしも摘みてやゆかむ春のすさびに

萍始生

時はいま花のまさかり浮草の浮ぶこゝろも汲みしられけり

さそはれし氷は殘るかたもなし今はと浮ぶ水のうきくさ

稻荷詣

稲荷山しるしの杉の下つ枝はけふの插頭の花にぞありける

早蕨

さ蕨はうれしきものといひしより年にかはらぬ賤がやまづと
はつ蕨をりわすられぬ心こそおどろが中のみちしるべすれ

春月

ながらへば又いかばかり霞みなむ老のはじめの春の夜の月
夕鞠の音は音せずなりしより柳にかゝる春の夜の月
おほかたは霞まぬ程も霞みけり梅さく里の春の夜の月

春月朧

大原の里にありてふ水の名を空にかすめし夜半の月かな

海邊春月

いとゞしく霞みにけりな遠つあふみ濱名の橋の春の夜の月

江春月

夕汐にかすみやよせし浪花江の月は朧になりまさりけり

幽居春月

梅が香にうづもれてすむ我が庵におぼろ月夜の名は立ちぬめり

---

○稲荷山しるしの杉　山城國紀伊郡稲荷神社の靈木杉の枝を持ち歸れば、神の靈驗を戴くこといふ信仰があつた。千載集雜恃祁有慶「稲荷山しるしの杉の年ふりてみつのみやしろ神さびにけり」

○年にかはらぬ云々　毎年定まつて山家の人が土産に持つて來てくれる。

○をりわすられぬ心　季節を忘れず生える心。

○おどろが中　荊棘に塞がれた山中。

○霞みなむ　見る目が霞む。

○老のはじめ　年四十を以て初老とす。

○霞まぬ程も霞みけり　ほんのり霞んだ。

○大原の里にありてふ水の名　山城國愛宕郡大原の補陀落寺内にあつた朧清水をいふ。

○遠つあふみ　遠江。

○おぼろ月夜云々　朧月が室にさし込むので、月自身が忍び込んで來たやうに見て、浮名が立つこといつた。

○宵のみぞ價たふとく見し人　蘇東坡、春夜「春宵一刻直千金。花有清香月有陰。歌管樓臺聲細々。鞦韆院落夜沈々。」

春曉月

花に寢るたが手枕ににほふらむ吉野のおくのありあけの月

春曙

宵のみを慣たふとく見し人はこのあけぼのを知らぬなりけり

名所春曙

鶯のねぐらながらの一聲におきいでて見れば春のあけぼの

わすれめや片野の花もかつみゆる淀のわたりの春の明ぼの

春雨

花もまだにほはぬ春の雨づゝみげに徒然のものにぞありける

霞みつゝふる春雨の音なきも枝にこもれる花はしるらむ

あまの川とくる冰のしたゝりや落ちてのどけき春雨のそら

旅春雨

家にありてつれ／＼ならむそれよりは旅こそまされ春雨の空

春日遲

わが宿の松の木陰にゐるたづの眠りもながき春日なるかな

若鮎つり櫻かざせどおほゐがは筏のくれはしられざりけり

---

○鶯のねぐらながら云々　千載集夏右大臣「時鳥鳴きつる方を眺むればたゞ有明の月ぞ殘れる」の風情である。玉葉集秋院新宰相「秋深き寢覺の時雨聞きわびて起き出でて見れば村雲の月」

○片野　河内國北河内郡。

○かつみゆる　かた／＼見える。

○春の雨づゝみ　春雨に降りこめられて居ること。

○枝にこもれる花はしるらむ　花の蕾は暖い春雨によつて漸く綻びるからである。新葉集春後醍醐天皇「今はよも枝にこもれる花もあらじ木の芽春雨時を知るころ」

○おほゐがは　大堰川。京都嵐山の麓。

○筏のくれ　榑に暮れることを掛けた。

○小松ひくころ　正月の子の日頃
○遊ぶ絲ゆふ　遊絲即ち陽炎。
○みちのくの云々　古今集卷二十「陸奥の安達のま弓わが引かば末さへよりこしのび〳〵に」「ま弓」までは「春」の序詞。岩代國安達郡から良弓を朝廷た獻じたこいふ。
○石淸水臨時祭　三月の中の午の日。
○雪の山路　落花の雪の堆き趣。
○世の中のあだなる花　古今集春讀人不知「あだなりこ名にこそ立てれ櫻花年にまれなる人も待ちけり」
○心だかくも　氣高くも。新古今集椎前大僧正慈圓「世の中を心高くも厭ふかた富士の煙を身の思ひにて」
○いしぶみ　石碑。
○かすみの關　武藏國南多摩郡。
○名のりをしつゝ　關所であるから鳴くこごを名告るこ面白くいふ
○かすみ　酒の異名。

遊絲

小松ひくころより遊ぶ絲ゆふの色もひさしき絲なるらむ

春駒

雲居にもかけなむとこそ思ふらめふじの裾野の春のわか駒

みちのくの安達のま弓春くればいさみに勇む牧のわか駒

石淸水臨時祭

よもすがらたちまふ袖に花ちりて歸さは雪の山路なりけり

歸鴈

秋霧のたたばやがてと天つ鴈かすみの底に思ひおくらむ

世の中のあだなる花になれじとや心だかくも鴈はいぬらむ

歸鴈似字

年をふるそのいしぶみのきえ〴〵に見えてぞ歸る天つ鴈がね

曉歸鴈

東路のかすみの關のあけ方に名のりをしつゝ鴈ぞゆくなる

野遊

瓢よりかすみをくめば春の野の雲雀たちまひて面白の日や

遊ぶ絲の遊び餘りておもほえず夏の野べにもかゝろべきかな

梨花

片枝みて年をへにけり中垣に咲くやとなりのつまなしの花

櫻

きさらぎの雪は長閑につもりけり尾上のさくら盛りなるらむ

我が國のみつのたからに一くさをそへてあふぐは櫻なりけり

ちよろづの世々に匂へど櫻花あけりといまだいふ人のなき

絲櫻

のどかなる春の日影の絲ざくら人をまつにも咲きかゝりけり

かくてしも猶よにかをる絲櫻いくその人か心ひくらむ

老木の櫻を

年ふりて苔むすまでになりながら散るをわすれぬ花櫻かな

花

ひさかたの天つ空ふく風の上にことしもさける山ざくらかな

うつせみの世は常なれよ三吉野の吉野の櫻あくまでも見む

山ざくら紀の川かけて咲きにけり芳野を花の水上にして

○遊ぶ絲の　遊絲の如く。
○かゝる　絲の緣語。
○片枝みて云々　古今集卷二十「をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寝て語らはむ」
○つまなし　妻梨。梨を妻無しの意に掛けていふ。此の歌客觀的に梨の花を詠ずる裏に主觀的に色心を含む。
○きさらぎの雪　落花を指す。
○みつのたから　三種神器。
○あけり　飽けり。

○いくその人　幾何の人。

○うつせみの　世の枕詞。

あはれ〳〵我に千年の命あらばゆづらまほしき山ざくらかな

長等山たゞながらへてみむと思ふ花こそ人のいのちなりけれ

いたづらに人あくがらす櫻花いとふ心になりにてしがな

山遠きみやこの街やちまたに雲のおりゐる花ざかりかな

ひとゝせの夢のたゞぢに花盛りちりしものとも覺えざりけり

春寒花較遲

小車のさすかたさしてこしかどもまだ山寒み花はにほはず

待花

さくら花またじと思へば鳥なきて霞たなびく野のべ山のべ

櫻ばなまつにながめの深ければ物や思ふと人の見るらむ

嵐山に花を栽うる

今よりの春の心やゝやすからむ花はあらしにまかせはててき

花始開

あさ窓にひらけし花の顏みればやよと聲をもかけつべきかな

さきそめし初花よりもうれしきはきのふの雨の心なりけり

見花

○長等山　近江國滋賀郡。ながらへてといふ爲に用ゐらる。
○あくがらす　思ひこがらせる。
○雲のおりゐる　白雲の棚引ける如き。
○夢のたゞぢ　夢の中の直路。
○ながめの深ければ　ぼんやりと暮してゐるが多いから。
○春の心　春に對する我が心。
○あらし　嵐に嵐山を掛く。
○やよ　呼掛の詞。

家人はまつらむものをいかゞせむ花は夕ばえの色まさりゆく

暮花

忘れめや嵐の山の杉の庵にねてあけぼのの花の匂ひは

月前花

おもしろき朧月夜にあくがれて晝みし花のかげをとふかな

月前折花

春の夜はねぶるさまなる月影に折りかすめける花の一えだ

山家花

山里に友しのばしくなりぬるは軒ばの花や人をまつらむ

世ばなれて静かにすめる山里の花しも人をあくがらすかな

古寺花

寂寞（じゃくまく）のいはの室戸にたれ見よと吉野のおくの花は咲くらむ

社頭花

しめの中はかしこけれども衣かたしきねべき花さかりかな

故郷花

いにしへの奈良の都のさくら花昔人さへや折りかざしけむ

○[illegible]「かすむ」[illegible]に縁を持たす。

○しめの中　神社の[illegible]。
○衣かたしきねべき　[illegible]
○故郷花　舊都の花。

○[illegible]
た。
○蝶のち[illegible]
るやうに[illegible]
〔櫻のおと　櫻[illegible]
○大原　山城國愛[illegible]
○やせ通る　ひどく痩[illegible]
古今集雜清輔朝臣「大[illegible]
はなしに戀すればやせ通[illegible]
のにぞありける」
○あづさ弓　ひきの枕詞。
○ひきみひかずみ　拾遺集賀[illegible]
人麿「梓弓ひきみひかずみこずは[illegible]
こずこはこそなほぞよそにこそ見
め」以上は「よりくる」の序詞。
○山鳥の　尾の枕詞。
○ひとむら雲　一羣の雲。

---

た[illegible]めもな[illegible]日数をうつすばかりは

こ[illegible]香もせで花[illegible]くわがこゝろかな

も[illegible]と思ふこそ盛りにあかぬ心なりけれ

り[illegible]もとにあやなや蝶の散るとまがふる

こ[illegible]の靜[illegible]しを四方に櫻のおとぞきこゆる

大原の[illegible]聲[illegible]のる駒はやせ通るころ

依花[illegible]

あづさ弓ひ[illegible]よりくるや春の彌生の花の下かげ

[illegible]にほふ時[illegible]のこゝろや蝶のこゝろなるらむ

[illegible]花

山鳥の尾上の櫻をりとればひとむら雲ぞ袖にかゝれる

夕花

○折りかすめけり　盗み折つた。「かすむ」は「掠む」で「ねぶる」の語に縁を持たす。

○しめの中　神社の境内。
○唐衣かたしきぬべき　衣を片敷いて獨り寢る氣にもなる。
○故郷花　舊都の花。

---

[illegible]いかゞせむ花は夕ばえの色まさりゆく

[illegible]や嵐の山の杉の庵にねてあけぼのの花の匂ひは

月前花

おもしろき朧月夜にあくがれて晝みし花のかげをとふかな

月前折花

春の夜はねぶるさまなる月影に折りかすめける花の一えだ

山家花

山里に友しのばしくなりぬるは軒ばの花や人をまつらむ

世ばなれて靜かにすめる山里の花しも人をあくがらすかな

古寺花

寂莫(じやくまく)のいはの室戸にたれ見よと高野のおくの花は咲くらむ

社頭花

しめの中はかしこけれども唐衣かたしきぬべき花ざかりかな

故郷花

いにしへの奈良の都のさくら花唐人さへや折りかざしけむ

たらちねの親の諫めもなかりけり花に日數をうつすばかりは

心靜見花

鶯のころよりほかに音もせで花にすみゆくわがこゝろかな

花盛

ちらせてもかつは見ばやと思ふこそ盛りにあかぬ心なりけれ

けふも猶盛りなりける花のもとにあやなや蝶の散るとまがふる

花のころ

この春もこゝろ靜かにとおもひしを四方に櫻のおとぞきこゆる

花時鞍馬多

大原の花にいなゝく聲すなりわがのる駒はやせ通るころ

依花客來

あづさ弓ひきみひかずみよりくるや春の彌生の花の下かげ

櫻花にほふ時のみくる人のこゝろや蝶のこゝろなるらむ

折花

山鳥の尾上の櫻をりとればひとむら雲ぞ袖にかゝれる

夕花

---

○たらちねの云々　拾遺集戀讀人不知「たらちねの親のいさめしうたゝねは物思ふ時のわざにぞありける」

○あやなや　わけがわからぬことだ。

○蝶のちるとまがふ　蝶が花の散るやうに舞ふ。

○櫻のおと　櫻の便り。
○大原　山城國愛宕郡。

○やせ通る　ひどく痩せる。新續古今集雜濟朝臣「大原へ行くことはなしに戀すればやせ通りぬるものにぞありける」
○あづさ弓　ひきの枕詞。
○ひきみひかずみ　拾遺集賀柿本人麿「梓弓ひきみひかずみこずはこずこはこそなほぞよそにこそ見め」以上は「よりくる」の序詞。
○山鳥の　尾の枕詞。
○ひとむら雲　一羣の雲。

家人はまつらむものをいかゞせむ花は夕ばえの色まさりゆく

曙　花

忘れめや嵐の山の杉の庵にねてあけぼのの花の匂ひは

月　前　花

おもしろき朧月夜にあくがれて晝みし花のかげをとふかな

月前折花

春の夜はねぶるさまなる月影に折りかすめける花の一えだ

山　家　花

山里に友しのばしくなりぬるは軒ばの花や人をまつらむ

世ばなれて靜かにすめる山里の花しも人をあくがらすかな

古　寺　花

寂寞(じやくまく)のいはの室戸にたれ見よと高野のおくの花は咲くらむ

社　頭　花

しめの中はかしこけれども唐衣かたしきぬべき花ざかりかな

故　郷　花

いにしへの奈良の都のさくら花唐人さへや折りかざしけむ

---

○折りかすめけり　盜み折った。「かすむ」は「掠む」で「ねぶる」の語に縁を持たす。

○しめの中　神社の境内。

○唐衣かたしきぬべき　衣を片敷いて獨り寐る氣にもなる。

○故郷花　舊都の花。

松間花

むら松のかげはあらしの宿なるをうばひて見ゆる花盛りかな

森花

花にたがかけしと見ればこの森の神のみ鈴のひゞくなりけり

遠山花

山松の木の間にかゝる春の雲花なりけりと見しはひがめか

深山花

世をいとふ種とこそなれ花にきてみ山になるゝ春の心は

海邊花

わたつみの渚の櫻さきにけり龍のみやびとかざし折るらし

嵐山花

きて見れば松も花なるあらし山櫻をのみと何思ひけむ

嵐やま花のさかりにきて見れば數ふるばかり松はありけり

渡花

さくら花匂へる岸にわたし船これもみのりの外とやはみる

川花

○むら松　むら立てる松。
○うばひて見ゆる　萬葉集卷五「雪の色をうばひて咲ける梅の花今さかりなり見む人もがも」
○ひがめ　僻目。見あやまり。
○花にきて　花を見るために來て
○龍のみやびと　龍宮の人々。
○みのり云々　御法以外のものでない意。渡船に乘つて渡ることを佛教の彼岸に喩へた。

櫻さく天の川原に船させば歸るかた野はしられざりけり

野花

けふはたゞ櫻がりにとこしものをかたののみ野にきじの鳴く

花下忘歸

花のもとに歸るをしらぬ物忘れさのみ老いぬる身にはあらねば

花有情

むれてくる人めをいとふ山櫻ちるも殘るもこゝろありけり

花下言志

さき匂ふ花を見花に見られつゝあはれ幾その春か經ぬらむ

花多春友

わが宿のわか木の櫻さきにけり幾はる〴〵の末の世も見む

滋賀山越

しがの山花にこゆれば古の人も逢ふやと思ほゆるかな

春ごとにこえくる人を命にて咲きわたるらむ志賀の花ぞの

花の盛りに山里をとふ

いづこにか駒はつながむ山里の木立はなべて櫻なりけり

〇天の川原　河内國北河内郡。
〇歸るかた野　歸る方と交野とを掛く。片野も北河内郡。

〇幾はる〴〵　幾春々。幾年。

〇しがの山花にこゆれば　新千載集春法印定爲「匂ひ來る風のたよりをしをりにて花に越えゆく志賀の山道」
〇春ごとにこえくる人を命にて　新古今集羇旅西行法師「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」

花の散るを見て
つらしとも面白しとも覺ゆるは花に風たつ春のゆふぐれ
彌生に花ちる
殿の内はひゝな遊びのけふの日にもる人なしと花やちるらむ
落　花
よしさらば心なき身になりてみむ惜しめば花もちる世なりけり
月前落花
おもしろき朧月夜の月影に花もうかれて散るにやあるらむ
山　落　花
ふきおろす峯の嵐のほど見えて裾野の原にちるさくらかな
海邊落花
風たたぬ磯べの花も散りにけりさくら鯛ひく蜑のとよみに
曲　水　宴
仙人(やまびと)の桃のしづくやおちて世にくむさかづきの流れなるらむ
みやのうちはけふ杯のめぐり水するゐの流れをいざやくまし
上　巳

---

○もる人　見守る人。
○とよみに　騒ぎの爲に。
○仙人の桃の云々　上巳の節供には桃酒を飲むから、重陽の節供の菊酒や、更に南陽縣菊水の故事を聯想し、曲水の宴で杯を浮べる流れを菊水に擬して作つたのである。
○みやのうち　宮苑。
○めぐり水　曲水宴。

○巳の日　巳に身を掛く。

○妹こせ　夫婦。

○桃の花云々　桃の花に對して紅の色を比較する意。

○心ゆく野　滿足をおぼえる野。

○つむだにあるを　摘むだけでもうれしいのに。

世のうさもしらぬ巳の日の桃の陰柳のもとに千年へなまし

紙雛のかたに

桃柳よきたぐひなる陰みればおなじにほひに笑みかはしつゝ

妹とせの千代をくらぶと見ゆるかな彌生のけふの花の莚に

桃

あしびきの遠仙人(やまびと)のたはやめのかざしの花をうゑて見るかな

桃の盛りに人をとひて

杯のかずもめぐりぬ桃の花いざさはゑひの色をくらべむ

雉子

さくら花をりかざしつゝ神樂岡夕こえくればきゞす鳴くなり

みやこ人心ゆく野のつぼ菫つむだにあるをきゞす鳴くなり

雲雀

大空はかすみばかりの春ならむあがる雲雀の聲なかりせば

幾度かあがる雲雀にあくがれてつめる若菜はたまらざりけり

燕

山里のあしのしのやにかりそめの住處ともなきつばくらめかな

賤がやになるゝ燕の子やす貝かひある春となきかはすらむ

燕來

人はいさ殘る古巣をわすれねばあれし里にも燕きにけり

蛙

いそのかみふるの山田も水見えて春にかへるの聲たてつなり

言の葉の種をまけとか苗代に櫻流れてかはづなくなり

夕蛙

河のべの苗代ぐみも色づきてにほふ夕日にかはづなくなり

苗代

ひきかけし苗代水のわか綠やがてや早稻の色にしむらむ

苗代の水(みな)くちまつりしめはへて賤がこゝろの春やきぬらむ

杜若

思ひしにたがはざりけり杜若かやが軒端をつばめとふころ

つく〲と思へばねたし杜若人をよせじの名にこそありけれ

躑躅

さもこそは春くれなゐに陸奥のつゝじが岡もさき渡るらめ

---

〇燕の子やす貝　竹取物語「燕のもたる子安貝云々。」
〇人はいさ云々　古今集春貫之「人はいさ心も知らず古里は花ぞ昔の香に匂ひける」いさはいさ知らずの意。
〇いそのかみ　ふるの枕詞。
〇春にかへる　春に返る意と蛙とを掛け、春に返るは新しい意もあるから、ふるにも對す。
〇言の葉の種をまけ　歌を作れの意。此の歌古今の序「花に鳴く鶯水にすむ蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。」を下心においてある。
〇苗代ぐみ　常綠の灌木。果實は紅色。
〇わか綠　苗の綠。
〇水くちまつり　舊二月の頃苗代水の水口に幣を立てて、稻の成熟を祝ふ祭。
〇人をよせじの名　杜若はかほよぐさ或はかほよばなともいふから斯樣にいふ。
〇くれなゐに陸奥　紅に滿ちを掛く。
〇つゝじが岡　仙臺市郊外。

山吹

いにしへの井手の下帯めぐりあひてみる心地する山吹の花

梅さくらちりし垣根の山吹にうつろふ春のいろを見るかな

折山吹

妹とわがかざしばかりはゆるされて二枝をりぬ山吹の花

河山吹

柴舟にちりかゝりてぞ咲きにけるうぢの川べの山吹の花

瀧邊山吹

鮎はしる吉野の川の瀧つせにながれもあへぬ山ぶきの花

里山吹

みやこ人とへどもいはですむならむ山吹匂ふ玉川の里

菫菜

山城のいは田の小野の朝露に袖はまかせて菫つみけり

霞たち日もなが岡のつぼすみれ摘めどもあかず今一夜ねむ

いかにせむ野べの假寐はならはぬを岩田の菫つみ殘しつる

藤

---

○井手の下帯　大和物語の故事で山吹の名所なる山城國井手で、內舍人が與へた帶をしるしに或少女が成長後契りを結んだといふ。

○柴舟に云々　宇治川の柴舟は例へば新古今集春寂蓮法師「暮れて行く春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟」の如く古歌に多い。

○鮎はしる吉野の川の瀧つせ　萬葉集卷六「隼人の瀨門のいはほも鮎走る芳野の瀧に猶しかずけり」

○とへどもいはですむならむ　古今集卷十九素性法師「山吹の花色衣ぬしや誰問へど答へず口なしにして」山吹の花の色は黃色、梔子は實の外殼が口を開かないので口無しに通はせ、黃色の染料にもする。依つて山吹を口無しと見たのである。

○いは田　山城國宇治郡。千載集春修理大夫顯季「雉子鳴く岩田の小野の壺菫しめさすばかりなりにけるかな」

○日もなが岡　日も永いに長岡（山城國乙訓郡）の地名を掛く。

○あかず今一夜ねむ　萬葉集卷八「春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寐にける」

○ならはぬを　慣れないのに。

藤浪は松のことばにかゝるべきちぎり久しきためしなりけり

たちよらば老やかくれむ元結のいろにもにほふ藤なみの花

柴人のま柴ゆふなるおく山に藤のかづらも花さきにけり

藤浪の花のかけはしかけてけり木曾のみ山も春やゆくらむ

松藤

かげたのむ松はありとも行く春をとゞめてにほへ藤浪の花

松ながらいで一枝とたちよればはるかに匂ふ藤なみの花

池藤

むらさきは變らぬ色か池水にぬれて日をふる藤浪の花

惜春不留

山吹の花のしがらみかけたれど井手にも春はとまらざりけり

暮春

あづさ弓春の末野となりにけりものうぐひすの聲ばかりして

暮春雲

みよし野の高ねの櫻春くれてまことの雲はあらはれにけり

山家暮春

---

○松のことばにかゝるべき　歌にうたはるべき意。古今集序「青柳の絲絶えず松の葉の散り失せずして云々。」かゝるは頭の縁語。
○老やかくれむ元結　古今集雑讀人不知「君來ずは閨へも入らじ濃紫わが元結に霜はおくとも」
○藤のかづら　藤をいふ。

○色か　色かな。

○山吹の花のしがらみ云々　風雅集雑前太政大臣女「山吹の花のしがらみかくれども春はとまらぬ井手の玉川」花のしがらみは水に散り敷く花を堰きとめる柵。
○あづさ弓　はるの枕詞。
○ものうぐひす　物憂いと鶯とを掛く。
○まことの雲　これまで雲と見えたのは櫻花の棚引いたことに對す

川暮春

高瀬川かすみたなびきこし春もつながぬ舟となれゐ頃かな

三月盡

けふにこそ驚かれつれ春の日のながきをたのむ心ゆるびは

三月盡夜

今日のみは春の夢さへさめにけり夜は曉になりやしつらむ

春雲

いく度か花のあだ名をたてつらむ吉野の山の春の白雲

春風

花にいとひ柳にはまた待たるゝもわりなき風の習ひなりけり

春木

櫻ばな咲く春々に思はなむ松にならべて植ゑし心を

春鳥

やぶかげの椿あまたにちりしけりこや鶺のしわざなるらむ

春鶺

○高瀬川　賀茂川の分流。
○つながぬ舟　白樂天「不レ繋舟隨ニ去住風一。」舟は高瀬川の緣語。定めなく去り行く意。
○けふにこそ驚かれつれ　今日で愈三月も終るかと今更驚かれた。
○花のあだ名　花といふ無實の名續拾遺集春院辨内侍「咲きまがふ花のあだ名はふりはてゝ雲にさまらぬ春の山風」
○わりなき風　無分別の風。

○蒲の葉は云々　古事記の大國主神の物語にある稻羽の素兎の話。
○けたが崎　氣多之前。因幡國氣多郡。
○釣たるゝ云々　浦島傳說をいふ
○むかしの龜　浦島太郞の乘つた龜。
○むしあけの迫門　備前國邑久郡
○袖の浦　少女が袖と袖の浦（羽前國西田川郡）とを掛く。
○朱のそほぶね　朱塗の舟。
○ながゐの浦　永い意と長井の浦（備後國御調郡）とを掛く。
○手枕なせる　手枕のやうな。
○浮ぶなり　鴨の緣語。

あしたづの心はつねに春なれど春また更にのどけかるらむ

春獸

蒲の葉は綠になりぬけたが崎みやの兎も春をしるらむ

春龜

釣たるゝ與謝(よさ)の海づら霞みけりむかしの龜もまた浮ぶらむ

春川

さくら花ちりくる時はわが門のいさゝ小川も波ぞたちける

春海

水鳥のうきね忘れてみつるかなむしあけの迫門(せと)の春の明ぼの

春浦

貝拾ふ少女が袖の浦みれば沖にもかすむ朱(あけ)のそほぶね

春浦松

春の日のながゐの浦を見渡せば手枕なせる松もありけり

春山

けさ見れば霞のそこに浮ぶなり鴨の羽色の春のむら山

春野

春　里

うちかすむ有明の月に鴈なきてあはれぞ深きみよしのの里

春　市

歌がきのむかしはとほき椿市(つばいち)の霞にこもるうぐひすのこゑ

春　社

八重垣のむかしのまゝに霞むらし出雲の宮の春の明ぼの

春　硯

手ならすものどけき春のさが硯ことばの花やこれに求めむ

春　扇

櫻ばなはやも咲かなむ我妹子がかざしの扇開くばかりに

春　筵

こゝの岡かしこの野べの若草は綾の筵もしかじとぞおもふ

春　衣

すみの江の松の緑の春はきぬはにに匂はせ妹がころもを

春　車

小蜂ごを掛く。

○歌がきの云々　萬葉集卷十二「椿市の八十の衢に立ちならし結びし紐を解かまく惜しも」衢に立ちならしたのは男女集まつて歌垣に立つ間をいうたのである。
○椿市　大和國磯城郡。
○八重垣の云々　古事記須佐之男尊「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」
○出雲の宮　出雲の大社。
○手ならす　習字をする。
○さが硯　山城國葛野郡嵯峨產の硯。さがに「性」卽ち習慣の意を掛く。
○ことばの花　和歌。
○はにに　埴に。黄色又は赤色の意。

○しゞまなりつる　音のなかつた

○をとめらが云々　古今集巻二十「筑波嶺のこのもかのもに陰はあれど君が御陰にます陰はなし」古事記倭建命「にひばり筑波を過ぎて幾夜か寝つる」にひ鞠は新鞠。

○笑みかたまける　喜ばしさうなの意。萬葉集巻五「梅の花散りまがひたる岡びには鶯鳴くも春かたまけて」

○朝づく日　朝日。

○二荒山　日光山東照宮。

○みてぐら使　奉幣使。

○飛鳥井云々　催馬樂飛鳥井「飛鳥井に〳〵宿りはすべし陰もよし陰もよしみもひも寒し御秣もよし」

春の野はまだ遠けれど大顔の車ぞしるき花のしたかげ

春聲

氷るてしゞまなりつる山寺のかけひの水も今朝きこゆなり

春興

をとめらがつくにひ鞠も筑波山しげき惠みのなかにかぞへむ

春祝

梅がえに鶯なきて人はみな笑みかたまける宿の春かな

朝づく日霞める空をとぶ鶴のさもはるかなる君がみよかな

# 夏部

首夏

二荒山(ふたら)みてぐら使けさ立ちてはやくも夏になりにけるかな

名所首夏

飛鳥井のみくさも拂へ都人やどりとるべき夏もきにけり

竹亭夏來

夏はきぬ軒端の塵も拂はまし生ひたちのぼる竹の子のため

夕じめりすゞしき雨は時鳥まつ心にもかゝりそめけり

更衣

ぬぎすてて猶かへりみる心もやふるき衣のしみとなるらむ

契りありてかとり少女のおりし衣又身になるゝ夏もきにけり

羇旅更衣

かきつばた見し八橋も早すぎて夏の衣をきぬるけふかな

遲櫻

夏山の青葉がかげに忍びつゝ我やまちけむおそざくら花

旅衣きそぢは花の殘るらむみてぐら使かざしてもゆけ

牡丹

夢にだにみぬもろこしの顏よ人おもかげにほふ深見草かな

牡丹を見て肖柏の昔を思ひいでて

紫のゆかりの色のせばきにも薫る心のふかみぐさかな

芍藥を

なにも似ぬ色香なりけりえびす草都になれて年やへぬらむ

○しみ　汗點。新衣は新心、舊衣は舊心、新心より舊心を見てその缺點あるを、舊衣の汚れたことに喩へた。
○かとり少女　陸中國紫波郡にも片寄（かたよせ）があるが、磐城國石城郡の片依（かたよせ）が「かとり」であらう。
○かきつばた云々　伊勢物語「から衣きつゝなれにしつましあればはるぐ〵きぬる旅をしぞ思ふ」八橋は三河國碧海郡。
○顏よ人　美人。
○深見草　牡丹。
○肖柏　字は夢庵、牡丹花と號す。歌人で、宗祇の弟子。
○紫の云々　同じ歌道に關係する拙き我が心にも、肖柏の歌の心を深く感ずる意であらう。
○心のふかみぐさ　心の深い意を掛く。
○えびす草　芍藥。えびすと都とを對す。

新樹

あをやぎの絲の心もひきかへて若葉をむすぶ夏はきにけり

神樂岡みどりの雲の八重たつは椎のこやでや生ひしげるらむ

かの岡に水枝さしおほふ楢の陰みづ驛ともなりぬべらなり

新竹

ことし生ひは殊にいつくし竹取の翁もかくやうれしかりけむ

かげ高みわが百年の杖としもたのみそめけり園のわか竹

稍々笋成竹

笋(たかんな)のすゞしきふしぞ添はりけるあしたの露に宵の月かげ

卯花

今さらに雪ふらめやと卯木垣(うつぎがき)思ひけちても消たれざりけり

ほとゝぎすくべき宵なりてる月のかげさへ見ゆる庭の卯の花

禁中卯花

九重の卯の花がきねたちよればわが淺沓をうづむ白雪

山家卯花

山里はのこりの雪と猶見えて卯の花さむき朝ぼらけかな

---

○ひきかへて　すつかりかはつての意。絲の緣語。
○神樂岡　京都市吉田町の東。
○こやで　小枝。
○みづ驛　水驛。街道の宿。

○ことし生ひ　今年生えた竹。
○いつくし　可愛らしい。
○竹取の翁　竹取物語の翁。

○思ひけちても云々　一應は雪でないと否定してみても、やがて否定出來ない程よく似て居る。

○淺沓　深沓に對す。桐を彫つて外を漆で塗つた沓。
○白雪　卯の花の散り積つた趣。

もろともに住まむといはばいかならむ世をうの花の垣根しめたる

葵

かつみても清くすゞしき葵草こゝろに種をまくよしもがな

涼しげにかざしてけりな葵草深きいはれは知るもしらぬも

山葵

世の中の塵にもけふはまじはりてげに神山のあふひぐさかな

郭公

時鳥ひとこゑ聞きし夕より耳やすからぬ身となりにけり

暮の雨あかつき月に時鳥ふた聲ききし夜半もありけり

ひとこゑの山時鳥あはやとていづれば袖にかゝるむら雨

さだかにと誰かいふらむ子規たどるばかりぞあはれなりける

いとはやも今年は聞きつ時鳥こぞのうらみや空にしりけむ

鶯のいにし谷よりいでてこばことづてをなけ山ほとゝぎす

子規花橘になきすててやがて昔となれるこゑかな

待子規

○世をうの花　世を憂いと卯の花とを掛く。

○かつみても　一寸見ても。

○こゝろに云々　我が心も清く涼しくありたい意。

○世の中の塵云々　賀茂の葵祭に用ゐられた葵をいふ。

○神山　賀茂の神山。山城國愛宕郡。

○耳やすからぬ身　又聞かれはしないかと心の落ちつかない我。

○暮の雨あつき月云々　雨の夕暮の頃と曉月夜の時とに一回宛時鳥の聲を聞いた意。

○たどるばかり　聲のおぼつかないのをそれらしいと推測する程度。

○こぞのうらみや云々　去年鳴かなかつたことを恨んだ我が聲を時鳥が空で知つて今年は鳴いたであらう。

時鳥まつにたゆむなものゝふの弓はり月はほのめきにけり

まとゐしてまつ夜にしりぬ子規つらきは我に限らざりけり

時鳥なににへだててとはさらむ月は松にも障るものから

與女待郭公

こゝろみに妹とまてども子規なほうちとくる聲のきこえぬ

尋郭公

時鳥はつねたづねて山里の麥のかり庵に一夜ねにけり

時鳥を尋ねて歸る道に聞くといふことを

家にきて何を語らむのなげきにや心よわりし山ほとゝぎす

人傳郭公

ほとゝぎす人傳ながら聞きそめてなごりあり明の月を見るかな

人傳のおぼつかなさをほとゝぎす雲居にはらす一聲もがな

郭公一聲

久方の月にくらべて時鳥きずなき玉のひとこゑぞなく

初瀨寺いく夜こもれる明方に一聲ききしほとゝぎすかな

---

○時鳥まつにたゆむな　時鳥の鳴聲をいつまでも待て。「たゆむ」は弓の緣語。
○ものゝふの　弓の緣語。
○子規つらきは云々　子規の鳴かないのを心憂く思ふのは我のみではない。
○さはるものから　妨げられるものの。
○うちとくる聲　親しく鳴く聲。妹のうちとくる聲に緣を持つ。
○なごりあり明　名殘ありと有明とを掛く。新古今集雜讀人不知「立ち出づる名殘ありあけの月影にいとゞかたらふ時鳥かな」
○人傳のおぼつかなさを　時鳥の鳴聲を人から聞いたのでは心許ないから。
○雲居にはらす　空に心を晴らすやうな。
○初瀨寺　大和國磯城郡。

○紅の杜　京都上賀茂社の杜。
○小野といふ里　山城國愛宕郡。
○橘の小島が崎　山城國久世郡。
○卯の花くたし　四五月頃の雨。
○はしり出　程近い意。
○月のかつら　月界にあるといふ月桂樹。拾遺集雑藤原後生「久方の月の桂もをるばかり家の風をも吹かせてしかな」
○よごろへて　數夜の間。
○淀　山城國久世郡。
○なのりし　鳴く意。

若葉さす紅の杜の夕月夜千鳥にはあらじ今のひとこゑ

名所時鳥

時鳥ききしは比叡のふもとなり小野といふ里の木隠れにして

柴舟ははるかにすぎて橘の小島が崎になく時鳥

雨中時鳥

ほとゝぎす忍びかねたる一聲は卯の花くたし降る夜なりけり

雨後時鳥

はしり出の外山の梢雨すぎてのこる雫になくほとゝぎす

月前時鳥

時鳥月のかつらも折るばかり思ひあがりし初音なるらむ

よごろへて待ちしはこれぞ有明の月にひとこゑなく子規

朝子規

まこもかる淀のさはべの朝あけにきけばすゞしき時鳥かな

曉子規

ありあけの月になのりし時鳥身にしむればや忘れかねつゝ

○鳥羽　山城國紀伊郡。
○にげ水　蜃氣樓といふ。夫木集「東路にありといふなる逃水の逃げかくれても世を過すかな」
○ひきもあへず　根を引き敢へず
○ねを合はせたる　根と音とを掛く。
○ふるの山　大和國山邊郡。

里郭公
あたら音を聞きもらしけむ時鳥鳥羽の里人夕まどひして

野郭公
にげ水のありといふ野の時鳥こなたときけば彼方にぞなく

野亭時鳥
わが門のうき沼のあやめひきもあへずねを合はせたる時鳥かな

山郭公
まつ人はたれにかあらむ時鳥ふるの山べをなきていづなる

遠山郭公
時鳥なくこゑ高し谷川の音はふもとに遠ざかりつゝ

山家郭公
山里は友時鳥おとづれて柴のあみ戸のめにも見ゆらむ

森時鳥
子規たれをまちてかこの森のこずゑの月のたか〴〵になく

渡時鳥
一聲をかけそへけりな時鳥淀のわたりの棹のしづくに

時鳥すゞしくすぐるむら雨の雲にこゝろやかけて鳴くらむ

船中時鳥

ほとゝぎす二聲なのれ大井川のりおくれたる人もこそあれ

社時鳥

片岡の森の梢に月ふけてきねがぬるまに鳴くほとゝぎす

關時鳥

時鳥しのぶはつらしみちのくの衣の關のうらとけてなけ

時鳥遍

ほとゝぎす盛りなるらし立花のかをる軒端にあやめふくころ

郭公乏

かれ〴〵にはやなりにけり時鳥日をふる軒の菖蒲のみかは

早苗

大井川ふるき流れをせき入れてうたあらす田にさ苗とるなり

時鳥鳥羽田のおものわか苗はおもひとるにも涼しかりけり

採早苗

---

○のりおくれたる人もこそあれ　新千載集羇旅大江廣房「しばし猶舟さしとめよ渡守乗りおくれたる人もこそあれ」

○片岡　大和國北葛城郡。

○きねがぬるまに　神官の寢る間

○うらとけて　心打解けて。「うら」は衣の縁語。

○かれ〴〵　枯れ〴〵と離れ〴〵とを掛く。

○うたあらす田　歌荒樔田。山城國葛野郡。

○時鳥　鳥羽の枕詞。

いそのかみふるのわさ田も賑ひて年あるみよのさ苗とるなり

早苗はこぶ所

五月雨の雨にきほひて運ぶかな豊年（とよとし）見ゆる小田のわか苗

早苗うゑわたしたる所

たてぬきにうゑし山田の若苗は賤はた衣のこゝちこそすれ

菖蒲

かみつ代の涼しき風を傳へきて菖蒲ふくらし大和國ばら

山城の淀の澤べのあやめ草朝風ながらふきてけるかな

陸奥のかつみ草をもえてしがな軒の菖蒲にふきそへて見む

菖蒲甲のかた

治まれる御代の恵みをいたゞきて菖蒲かぶとのひもながく見む

藥玉

ほとゝぎすきつゝ語らふ契りさへかけにけらしな母屋の藥玉

騎射

向ふべきあたしなければうま弓はたゞ長き世の例にぞひく

盧橘

○いそのかみ云々　萬葉集卷七「石の上布留の早稻田をひでずとも縄だにはへよもりつゝ居らむ」
○年あるみよ　豊年の御代。新拾遺集夏前中納言定家「新玉の年ある御代の秋かけてとるや早苗に今日も暮れつゝ」
○きほひて　競ひて。
○たてぬき　縦横。
○賤はた衣　倭文で仕立てた衣。
○かつみ草　まこもの類。古今集戀讀人不知「みちのくのあさかの沼の花がつみかつ見る人に戀ひやわたらむ」
○いたゞきて　かぶとの縁語。
○ひもながく　紐と日もとを掛く
○かけにけらしな　「かけ」は契りと藥玉とにかゝる。
○うま弓　騎射。
○ひく　弓を引くと例に引くとを兼ねる。

九重の櫻にかけをならぶるは上なき花の譽れなりけり

閑庭廬橘

たち花の花さきしより我が宿もむかしを忍ぶ友はありけり

橘薫枕

敷栲（しきたへ）のとこ世ゆかしみ手枕に花たちばなや薫りきぬらむ

橘薫風

たち花の花にふれこし夕風はやがて昔のつかひなりけり

五月雨

玉だれに殘るあふひの枯葉さへうるひにけりな五月雨の頃

ひさかたの月人男（つきひとをとこ）いかばかり思ひわぶらむ五月雨のころ

古宅五月雨

かべ草にすがる螢もあはれなり日數ふるやの五月雨のころ

杣五月雨

飛驒人のはれぬ思ひも知られけりさみだれくらすにふの杣山

五月雨久

五月雨の雲につゝみて日をぞふる雪ならくに比良の遠山

の櫻右近の橘をいふ。

○むかしを忍ぶ云々　古今集夏讀人不知「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

○敷栲の　とこの枕詞。

○とこ世ゆかしみ　萬葉集卷十八「この橘を時じくの木の實と名づけけらしも」等とあるのでいふ。

○手枕　とこは牀に通ずるので、それに緣ある語。

○玉だれに殘るあふひ　葵祭に用ゐた葵草を御簾に掛けておいたものをいふ。

○うるひ　うるほひ。

○月人男　月。

○かべ草　草や柴で造つた壁。

○日數ふるや　日數經るに古屋を掛く。

○はれぬ思ひ　雨の緣語。

○にふの杣山　大和國吉野郡。

○つゝみて　籠りて。

○さみだれは長等山　さみだれは長く降り續く意を掛く。

○桑繭　野蠶(くはご)の繭。

○こなぎ　小水葱。水葱。
○つみ　鷄桑(やまくは)。
○松浦川　現今玉島川といふ。肥前國松浦郡。
○手繩の打ちはへて云々　新千載集雜俊頼朝臣「鵜船さす夜河の手繩打ちはへて一筋ならず物ぞ悲しき」
○打ちはへて　引き續いて。
○さすなり　棹す。
○み吉野の山の奥云々　吉野山中は脱俗世界とせられたのでいふ。古今集雜讀人不知「み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時のかくれ家にせむ」
○照射さすらむ　まぶしを以て身を隱す。まぶしは狩獵者の身をかくすもの。
○心づくしの夏　氣をもませる夏　古今集秋讀人不知「木の間よりもり來る月の影見れば心づくしの秋は來にけり」

山家五月雨

さみだれは長等の山の峯の雲いつ晴るべくも知られざりけり

雪はなほ見渡すかたもありぬべしさみだれくらき山の下庵

五月雨晴

さみだれの晴れしあしたは桑繭を出でたる蝶の心地こそすれ

水鷄

夏川のこなぎおもだか花さきて涼しき暮に水鷄なくなり

わが門の板井の水草かきやりて月まちをれば水鷄なくなり

鵜河

流れくるつみの小枝や松浦川しばし鵜船のかゞりなるらむ

たえたるをつなぐ手繩の打ちはへて宇治も桂も鵜船さすなり

照射

み吉野の山の奥にもさを鹿のうきめをみせて照射(まぶし)さすらむ

木の間には照射(ともし)ほのめきてさを鹿の心づくしの夏もきにけり

夏月

釣たれて歸らむとすれば鴨川の柳の木の間月のすゞしさ

○大空は云々　古今集春紀友則、久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらむ」

○桑子　蠶。
○かひや　養蠶室。

○妹と我がぬる云々　古今集夏躬恒「塵をだに据ゑじとぞ思ふ咲きしより妹と我が寢る常夏の花」
○牀夏　撫子。牀の意を掛く。

○とこなつかしき　常になつかしき意と常夏の花とを掛く。
○撫子の花　撫子に愛子の意を持たせ、手飼の猫に通はし持たす。

大空は夏も長閑にすむものをしづ心なき月のかけかな

樹陰夏月

片岡の楢の木陰の夕すゞみすゞみてをれば月も洩れきぬ

雨後夏月

雨ははれ桑子はまゆを出でそめてかひやが軒の月も涼しき

池夏月

五月雨に濁りし池の水だにも今宵の月のかげにすむらむ

田家夏月

たちよれば夕顏棚は人おほみよその田の面の月ぞすゞしき

瞿麥

とにかくになつかしきかな妹とわがぬる牀夏のなでしこの花

おのづからこぼるゝ種の年々に咲き匂ひけりませのなでし子

瞿麥露

おなじくは袖にこぼれて匂はなむとこなつかしき花の上露

雨夜に撫子を思ふ

そぼぬれて手飼の猫はかへりけりあはれ雨夜の撫子の花

夏草

うらみむと思ひしらでや夏葛の月の窗にやはひかゝるらむ

かりはらふ一日二日のおこたりをいたくぞ見する庭の夏草

蚊遣火

都人とふ夜の月をくもらすや蚊火といふものの煙なるらむ

たかむらをもれてぞなびく夕煙おくの伏屋に蚊遣たくらし

野亭蚊遣火

あくた火の煙しば〳〵靡き來て蚊遣ことなる岡のべの宿

螢

斧の柄も朽ちて光はなきものをいかなる草のなれる螢ぞ

川上の林の木陰くれそめて蟬はぬるまを飛ぶほたるかな

里螢

海人の子が立ちさわぐにもこりずまの里をばかれずとぶ螢かな

曉更螢

曉になりもてゆけば草むらの露にそひ寢のほたるをぞ見る

螢火透簾

---

○うらみむ　葛の葉は風吹けば裏を見せる故、「裏見る」より「恨みる」に掛けていふ。

○蚊火　蚊遣火。

○たかむら　篁。竹藪。

○あくた火　芥を燒く火。

○斧の柄も朽ちては　晉の王質の故事。

○いかなる草のなれる螢ぞ　螢は腐つた草から生ずるからいふ。

○ぬるまを　眠れる間に。

○こりずまの　性懲りない意に須磨を掛く。

○里をばかれず　里を離れず。伊勢物語「今ぞ知るくるしきものと人待たむ里をばかれず訪ふべかりけり」

津の國の小屋にかけたる蘆簾螢見るにはさはらざりけり

夕顔

久方の天のよさづら花さきてふせやの窗の月にかゝれり

賤が屋にとり傳へつゝまく種の年もひさごの花さきにけり

晝顔を

晝顔は晝いいさめて匂へるをなぞや眠りのすゝみきぬらむ

苦熱

水無月の日笠のうらにやく鹽のからくしてこそ暮れ初めにけれ

蓮

しろたへにさく花はしも多けれどむくといふ色や蓮なるらむ

はつ花をあすも見せむと夕暮はつぼみにかへる蓮なるらむ

池蓮

五月雨ににごりし人の心さへすますは池のはちすなりけり

氷室

大君のみ手にふれめや奥山のいはがき清水こほらざりせば

夕立

○小屋　攝津國の昆陽を掛く。
○さはらざりけり　差支がない。

○天のよさづら　夕顔。

○年もひさご　年も久しい意を掛く。

○晝いいさめて　晝寐を諫めて。人に晝寐すべからずといひ顔にの意。

○日笠のうらに云々　太陽が日笠の裏にまで燒きつける意に日笠の浦(播磨國明石郡)を掛く。
○やく鹽のからくして　古今集雜讀人不知「押してるや難波のみつに燒く鹽のからくも我は老いにけるかな」やく鹽のはからくの枕詞。からくしては辛うじての意。
○むく　無垢。
○つぼみにかへる　再び莟む。

○いはがき清水　岩垣の間より流れ出る水。

○ゆふだちの雨をこひしみ　夕立が戀しいので。
○畏きものの　おそろしいけれど

○浮寢　舟中に寢ること。鴨の縁語。
○水鳥の　鴨の枕詞。
○から衣　「ひも」の枕詞。古今集戀讀人不知「唐衣ひも夕暮になる時は返す〳〵ぞ人は戀しき」
○ひも夕暮　「ひも」は「日も」と「紐」とを掛け、「夕」に「結ふ」を掛く。
○さそふ水ありて　古今集雜小野小町「侘びぬれば身をうき草のねをたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思ふ」

ゆふだちの雨をこひしみ鳴神は畏きものの待たずしもあらず
大和路は夕立すらし神さぶる伊駒たかねに雲さわぐなり

夕立風

夕立はよそにすぎても涼しさを送るこゝろの風はありけり

楝

雨はれて端居涼しき袖の上にちりくる花はあふちなりけり
のりてゆく駒の手綱の花あふちしばしとゞめつ森の下かげ

楝誰家

かくれてはなほあらはるゝ紫のあふちの陰に誰かすむらむ

雨中楝

陰たかみ手をらですぎし花あふちこの五月雨の雨にちるらむ

納涼

いにしへの風さへ我はなつかしき楠の木陰に夕すゞみせむ
舟もあらば浮寢やせまし水鳥の鴨の河風きよくすゞしき

麓納涼

から衣ひも夕暮の山かげにさそふ水ありて今日も來にけり

夏山の瀧にむかひて我ありと人も知るまでなるゝ頃かな

鴨川納涼

涼みとる鴨の河原は都人にしきを洗ふ江にこそありけれ

船中納涼

涼しくもまくら流るゝ小舟かな川瀬の月のさすにまかせて

樹陰納涼

青柳のよそめ涼しとたちよれば我よりさきに風はとひけり

扇

端居してならす扇はうたゝねの夢の上にや置かむとすらむ

泉

里遠み人しらかしの陰ふりてすめる清水ぞとはに秋なる

蟬

をやみせぬ雨ときくまでなりにけり珍らしかりし蟬のはつ聲

林頭蟬

秋ちかき片山林人はこでさびしくもあるか日ぐらしの聲

○我ありと人も云々　涼しさの爲に我が心の漸く蘇生の思ひあるをいふ。

○にしきを洗ふ江　納涼する都人の美裝を蜀江の錦に喩ふ。

○まくら流るゝ小舟　舟中に枕すれば流れに從つて流れ行く如き心地するのでいふ。

○人しらかし　人知らずの意に白樫を掛く。

○さびしくもあるか云々　新古今集前大納言忠良「夕づく日さすや庵の柴の戸にさびしくもあるか日ぐらしの聲」

蟬聲秋近

山かげの大和撫子露ちりて秋としぐるゝ蟬のもろごゑ

晩夏

牡鹿ふす夏野の草に露みえてしのび〳〵に秋風ぞふく

六月祓

麻の葉の流るゝみれば水上の御手洗河にみそぎすらしも

夏瀧

すゞしさを語り傳へて山里の夏こそ瀧の音はたかけれ

夏川

しまつ鳥うやかづきけむ夏川の玉藻の花の今朝みだれたる

夏里

梅津より舟さしよせて若竹の葉室の里の夏をとはばや

夏風

蝙蝠のあふぎの中にこめられて夏こそ風はとぼしかるらめ

夏祝

夏されば木ごとに千世やこもるらむ緑のかげぞ涼しかりける

---

○山かげの大和撫子　古今集秋素性法師「我のみやあはれと思はむきり〴〵す鳴くゆふかげの大和撫子」

○しぐるゝ　時雨の降るやうに鳴きさかる。蟬時雨の熟字もある。

○麻の葉　麻の葉は幣に用ゐる。

○音はたかけれ　瀧の音の大きい意と評判になつてゐる意とを掛く

○しまつ鳥　鵜の異名。

○梅津　山城國葛野郡。

○葉室　同上。

○蝙蝠のあふぎ　現今の扇。

○千世　萬木の緑を杉の千歳の緑と見る。

# 秋部

○秋の風たつた姫　秋の風が立つ意に龍田姫を掛く。
○粟田山　洛東刈意栖岡峠から花頂山などの總名。
○あはたつ雲　連なり起る雲。粟田山あはたつと語調を整ふ。
○思ひとくにぞ　心にそれと知る意。とくは髮の縁語。
○桂の里　山城國葛野郡。
○つと　みやげ。
○こと更に云々　源氏物語夕顏の卷の趣であらう。
○みのかくれが　實と身とを掛く

立秋

けさよりは野べに山べに秋の風たつた姫こそ嬉しかるらめ

都人うちながむらし粟田山あはたつ雲に秋のはつ風

にはかにも風の涼しき朝寐髮思ひとくにぞ秋はきにける

立秋月

かつ見ても誰かは秋としらざらむ桂の里の夕月のかけ

立秋露

草の葉に涼しき露のしら玉は秋のつととぞもてはやしつる

閑居秋來

やへむぐらとはに露けき宿なれば驚かめやは秋きたりとて

こと更に露おきそひて夕顏のみのかくれがも秋はしりけり

野亭秋來

野守をやおどろかすらむ小山田の鳴子にひゞく秋のはつ風

新秋風

都にもいりたちぬらしこのあさけ鳥羽田ふきこす秋の初風

早秋

紅のあきつ飛びかひみそ萩の花さく見れば秋はきにけり

初秋月

しら玉のさし櫛なして初秋のよそひことなる山のはの月

夏蟲の眉ばかりなる月ながら秋はさやにぞ見え渡りける

初秋風

あづま路の關のあなたやいかならむこの白河も秋風ぞふく

山家初秋

山里はまだ燒きすてぬ蚊遣火のけぶりふきしく秋のはつ風

水郷初秋

みなせ川秋風たちて山もとに一葉とうかぶ舟もさびしな

湖邊初秋

さゞなみの志賀の辛崎秋たちぬ松の心もさびしかるらむ

一葉散林

秋のくる片山林いちじろく桐の一葉のひるがへりたる

○紅のあきつ　赤とんぼ。

○しら玉のさし櫛なして　三日月の姿を指す。

○よそひことなる　裝ひが格別に美しい。

○さやに　さやかに。古今集秋藤原敏行「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」

○この白河　岩代國白河關に對して、京都の東山をいふ。後拾遺集秋能因法師「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」の歌を下心に置いて詠んだ。

○みなせ川　水無瀨川。攝津國三島郡。

○一葉とうかぶ舟　一葉の如く浮ぶ舟。

○さゞなみの　志賀の枕詞。

秋たちてしばし暑さぞ中々にねやの扇のおもひなるらむ

乞巧奠

棚機にかしつる絲も言のはもながき例をひくにぞありける

七夕

神代よりあふことたえぬ棚機は何をためしに契りそめけむ

七草の數もそろひて嬉しきに晴れわたりけり星合の空

月と日のめぐり易きを棚機の稀なるなかは賴みきぬらむ

七夕枕

たな機のめぐりあふ夜に定めたる枕や月のかつらなるらむ

七夕筆

このゆふべ梶の葉ぬらす水莖も流れて絕えぬためしなりけり

七夕植物

七草の八重垣つくる手向には星の心もさぞなびくらむ

織女契久

いほ機に千はたにかけておる絲の長きや星の契りなるらむ

○中々に　却つて。殘暑だからやがて扇も捨てられるので、暑いのが却つて扇に取つて物思ひの種となる。秋に「飽き」の意を掛く。

○棚機に云々　古今集秋凡河内躬恆「棚機にかしつる絲の打ちはへて年の緖ながく戀ひやわたらむ」

○七草　棚機の七草。秋の七草（萩尾花、葛、撫子、女郞花、藤袴、朝顏）ともいふ。

○梶の葉ぬらす水莖　昔は七夕の日に梶の葉に思ふことを書く習慣があつた。

○流れて絕えぬためし　昔から引きつゞいた習慣。水の緣語。

○いほ機に千はた　五百機に千機で、澤山の機の意。萬葉集卷十「七夕の五百機たてて織る布の秋さり衣たれかとりみむ」

花扇の使のかたに

七草の花の使にえらばれてをとめもゑみの眉ひらくらし

荻

荻の葉のほにいづることをいはぬかな風の音のみ世に高くして

枕づくつまやは夢のかよふとも知らでさわぐか荻のうは風

荻風

松にふくたぐひかこれも萬代の秋にかはらぬ荻の上風

萩

しなひたつその若葉さへあかざりし本荒の小萩花さきにけり

わが織りし錦ならずや二葉より生したてつる秋萩の花

野守ともいはばいはなむ秋萩の花ずり衣われはきにけり

萩露

秋の野の小萩が花の露をおきて何をあはれと人はいふらむ

田家萩

さを鹿のとひこし跡もみえにけり賤が門田の小萩さくころ

萩かる男子

○ゑみの眉ひらく　嬉しき意と花綻ぶ意とを掛く。

○ほにいづる　表面に現はれる。

○枕づく　「つま」の枕詞。

○つまや　閨房。

○本荒の小萩　木の本の疎らな小萩。

○秋萩の花すり衣　萩の花で色を摺り出した衣。

○おきて　さしおいて。

女郎花

野の宮の垣ねにたてる女郎花たはぶれがたき花とこそ見れ

駒なべて見にこそ來つれ女郎花誰をか今日のつまとたのむる

薄

ゆふまぐれ友まちをれば花薄こゝろを知るもあはれなりけり

つひにかく招きいでけむ秋の野の尾花が袖に月ぞほのめく

名所薄

花すゝきほに出て人を招かずば秋津の小野も色やなからむ

刈萱

かる萱のしたの心し亂れずばよしや姿はしどろなりとも

我が心とめてけるかなこれやこの秋の野べなるかるかやの關

刈萱亂風

ものおもふ人の心にくらぶればなほ刈萱はやすげなりけり

蘭

つかへにといでたつ道の藤袴きよきその香を我にかさなむ

---

○野の宮　齋宮のは山城國嵯峨の有栖川、齋院のは紫野の東。
○たはぶれがたき　女といふ連想ある女郎花も野の宮に咲く故かくいふ。
○駒なべて　駒をたらべて。打連れて馬に乘り。
○今日のつま　今日の夫。
○こゝろを知るも　花薄が我が心を知りて招く姿をいふ。
○招きいでけむ　尾花が月を招き出したのであらう。

○秋津の小野　大和國吉野郡。

○かる萱の　亂れの枕詞。
○我が心とめてける　人をとめる關の縁語。
○かるかやの關　かるかやを刈萱の關(筑前國筑紫郡)と面白くいひなす。

○つかへ　宮仕。

色にそみ香にめづる世の常なるをたがぬぎすてし藤袴ぞも

槿

ともしびもかすかに殘る窗の内をかいまみすめる朝顏の花

おのづから敎草ともなりぬべし朝いゆるさぬあさ顏の花

あまりにも移ろふ色か若草のつまには見せじ朝顏の花

朝顏の贊

千々の秋さきて變らぬ花見れば松にもはぢぬ垣のあさがほ

紫菀

なつかしと見る人はみむ秋の野のしをにも衣の色に通へば

きちかう

星まつる頃しもにほふ二藍はこゝろありけりきちかうの花

と見かく見萩に薄に劣らねば折りそへけりな桔梗の花

葛

秋の野を思ふまゝにもはふ葛のうらみや何の浮名なるらむ

草花

秋の野の七草まではかぞへしか限りもしらぬ花ざかりかな

○たがぬぎすてし藤袴ぞも　古今集秋素性「主知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも」

○ともしびもかすかに殘る　曉方の殘燈。

○かいまみすめる　垣間見するやうな。

○敎草　朝顏の緣語で、我を敎訓するものの意。

○朝い　朝寐。

○移ろふ色か　褪せる色かな。

○若草の　つまの枕詞。

○しをに　紫菀。

○通へば　似通へば。

○二藍　桔梗の襲の色目は、表二藍、（紅色と藍とで染めた色）裏青なればいふ。

○と見かく見　色々に眺めて。

○うらみ　裏見と恨みとを掛く。

あさがほのあしたすぐれば月草の花に心をうつすころかな

秋も猶小松がはらは緑にて草はみながら花ぞさきける

嵯峨野

八千草の花に蟲よとわけ／＼て嵯峨野の露にぬれぬ日はなし

露

ふみわけてゆくべくもなし片岡のしのに亂るゝ秋の朝露

思ふ心ありげなりけりしら玉をわれからくだく秋の夕露

蟲

蟲の名の松の夕風鈴の露涼しき時となきかはすらむ

玉琴をかきあはせても見つるかなきよき月夜の松蟲のこゑ

處せき窗の内なるこにこめて聞くだにあるを野べの蟲の音

鈴蟲

しら露の玉まく秋をまちつけてなくやこがねの鈴蟲の聲

松蟲

高砂のをのへの松にふく風をふもとにうつす蟲のこゑかな

こほろぎ

○月草　つゆ草。
○みながら　悉く。
○松の夕風鈴の露　松蟲を指す。
○こにこめて　籠に入れて。
○聞くだにあるを　聞くさへ寂しいのに。
○玉まく　玉で飾りつける。

秋もやゝ末野のあさぢうらがれてよわる夕日にこほろぎのなく

きり〴〵す

きり〴〵す枕の下にうつりけり有明の月の夜寒しるらむ

神樂岡に鈴蟲のなくをききて

岡のべにふりいでてなく鈴蟲のあなすが〳〵し所がらかも

月前蟲

夕月にさそはれいでて蟲のねのしげき野べにも我はきにけり

尋蟲聲

はるかにもひかれきにけり妹とわが子の日せし野の松蟲の聲

蟲聲非一

おほかたの蟲の秋には變りけり嬉しげになくこほろぎの聲

撰蟲

今はとて嵯峨野別るゝ名殘にや蟲籠の内もねをたてつなり

鴈

初鴈の聲ぞうれしきをち方の友をあまたに見る心地して

秋風のふきそむるより大空をあふぎてまちし鴈はきにけり

---

○ふりいでてなく　鈴の緣語。聲を張り上げて鳴く。○所がらかも　神樂岡の神樂と鈴とは關係あるからである。

○ひかれきにけり　誘はれて來た「ひかれ」は子の日の松の緣語。

○ねをたてつなり　聲をあげて鳴く意。

○闇をあやなし　古今集春躬恒「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」あやなしは甲斐なしの意。

○秋の夕の薄霧のうへに　古今集秋讀人不知「春霞かすみていにし雁が音はいまぞ鳴くなる秋霧の上に」

○おもふどち　親友。

○そゝや　風の靜かに吹く音。
○ゐなのさゝ原　猪名野。攝津國豐能郡。

はつ雁の聲さやかにも聞ゆめり闇をあやなしと思ふ此の夜に

初雁

めづらしき初雁がねに忘れけりけふの狩場の弓も小鷹も

夜聞雁

かずをだにかぞへむものを初雁の曉やみに鳴きわたるかな

月前雁

大空の月もあはれと思ふらむちぎりたがへぬ初雁のころ

薄暮雁

あはれにも竝ぶ雁かな幾つらぞ秋の夕の薄霧のうへに

雁の賛

ふたつみつ澤邊にみゆる雁がねは落ちたる文の心地こそすれ

旅雁連雲

秋風にたゞよふ雲を旅の雁おもふどちとも頼むべらなる

鹿

なれ〳〵し筆の契りをしのぶればあはれぞまさるさを鹿の聲
秋風のふくだにあるをそゝや又を鹿なくなりゐなのさゝ原

わが庵は小倉の山のふもとにて枕におつるさを鹿のこゑ

聞鹿

松が枝に月おちかゝるをしほ山惜しと眺むれば鹿ぞなくなる

山鹿

あしびきの山の嵐のさ夜ふけて吹くだにあるをさを鹿の聲

名所鹿

小倉山夜はあやなきもみぢ葉の色にかへたるさを鹿の聲

山家鹿

住みてこそ深き哀れはしられけれを鹿妻とふ秋の山里

寐覺に鹿をききて

白雲の八重たつ山のあなたより寐覺ともなふ鹿のこゑかな

鶉

都をば夜ごめにたちて深草の露ふむみちにうづらなくなり

ひばりたつ春は昨日と見し野べに秋風ふきて鶉なくなり

秋ふかき淺茅が庭の夕風に露もほろゝと鶉なくなり

鴫

○小倉の山　山城國葛野郡。

○をしほ山　小鹽山。山城國乙訓郡。惜しと續いて語調をよくす。

○夜はあやなき云々　夜は色が見えないので、紅葉もその其の甲斐がないから、色のかはりに牡鹿の聲が聞える。

○住みてこそ云々　新古今集秋西行法師「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」

○白雲の八重たつ山の　風雅集春大納言經信「白雲の八重立つ山の櫻花散り來る時や花と見ゆらむ」

○夜ごめにたちて　夜深く立つて

○深草　鶉の名所。山城國紀伊郡。

○曉のしぎの羽根がき　古今集戀讀人不知「曉の鴫の羽根がきもゝ羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數かく」羽根がきは羽蟲をとる爲に嘴で羽をしごくこと。
○人もこずゑに　人も來ずと梢とを掛く。新勅撰集戀後京極攝政前太政大臣「うつろひし心の花に春暮れて人もこずゑに秋風ぞ吹く」
○をしね　稻。
○大丈夫と云々　男と思ふ我も秋の夕暮は寂しさのために涙が多い意。

曉のしぎの羽根がき聞きわびむ契りし人のある身なりせば

鴫

紅葉する片山里はうつろへど人もこずゑに鴫ぞなくなる

おりたちてをしね刈りほす小山田の夕日せはしく鴫ぞ鳴くなる

稻妻

野邊近く家ゐせしより稻妻のかげは枕に通ひなれつゝ

うゑし田は早かりし穗の稻妻のうつろふ見れば驚かれけり

秋夕

月もまだいでこぬ程に何をかく打ちながむらむ秋の夕暮

霧たちて鴈なきわたる夕暮をあさき心にながめけるかな

袖におく露見えそめて大丈夫とおもへるわれも秋の夕ぐれ

ゆふぐれのあはれをしらぬ朝顔の花はなか〳〵心ありけり

秋夕雨

夕暮の霧のまがきにふる雨の哀れをしらぬ人はとへかし

秋夕雲

うちまねく尾花が袖をふりすてて外山の峯にかへる白雲

霧

霧深み伏見の里はすぎしかど末いかならむ宇治の川橋

おぼつかないづくに道をもとめまし八重たつ霧の奥の山里

駒迎

相坂の關をこゆればみやびたる道にひかるゝ望月の駒

東人(あづまと)のこゝろの色もあらはれて尾花あし毛を月にひくなり

あふ坂の山もひづめのあとにして雲居にのぼる望月の駒

建久二年法皇栖霞寺におはしましし時駒牽の引分の使にまゐりて「さがの山千代の古道あととめて又露わくる望月の駒」と定家朝臣のよめるを思ひいでて

なぞもかく跡たえぬらむ嵯峨の山千代の古道わけしその駒

深夜駒迎

荒駒のひかれかぬるをかごとにて月みる程に夜やふけぬらむ

相撲

ならびなき都のふじの高ねとも思ふやけふの抜手なるらむ

月

---

○みやびたる道　相坂關より京都までの道を、今までの田舍路に比較していふ。
○望月　信濃國佐久郡。
○尾花あし毛　馬の毛色で、葦毛の黄色を帶びた色。
○雲居　空高くの意と宮中の意とを掛く。
○引分の使　駒引の時の獻馬を院や東宮等に分け給はる時に立つ使
○さがの山千代の古道云々　新古今集雜中に出づ。嵯峨の山は山城國葛野郡。
○なぞもかく云々　後撰集雜在原行平朝臣「嵯峨の山行幸絕えにし芹川の千代の古道跡はありけり」
○ひかれかぬるをかごとにて　牽ゐ難きをかこつけごとにして。名月を眺めたい願ひの爲に、荒馬で道が捗らないとかこつける意。
○都のふじ　拾遺集讀人不知「我が戀のあらはに見ゆるものならば都のふじといはれなましを」
○抜手　相撲の節會の翌日、前日の優者を選拔して相撲させること

唐土の山のあなたは知らねども雲こそなけれ秋の夜の月

ひさかたの天つ雲居のよそにても友はありけり秋の夜の月

鹿の聲きぬたの音もさやかにて月は縣(あがた)のものにぞありける

さやけしと向へばやがてさま〴〵のあはれ見えゆく秋の夜の月

大空は嵐ばかりになりはてて雲をわするゝ秋の夜の月

漣にみがかれてこそいでくらめ東の山の月のさやけさ

ひさかたの空にかゝれる月ばかりもて離れたる友はありけり

月かげを遠くはなれてたつ雲の心もみゆる秋の空かな

おなじくは桂の里にあくがれむ西こそ秋の月もまさらめ

山寺のかねはしゞまになりななむ夜よしとうたふ月の此の頃

千々の秋みるともあかじ我が國のことのは月の月のひかりは

枕づくつま屋離れてひさかたの桂のかげにたたぬ夜はなし

曇らめや千秋百秋秋津洲(あきつす)のやまと島根の月の光は

何事のおはしましてか秋ごとに月の都のてりまさるらむ

いにしへを忍びづまとも覺ゆるは閨にさしいる秋の夜の月

### 未出月

○天つ雲居のよそにても　遠き異郷にありても。
○縣　田舍。
○雲をわするゝ　一片の雲の見えない意。
○雲の心もみゆる　月を遠く離れた雲を、恰も雲が心あつてのしわざと見たのである。
○桂の里　山城國葛野郡。月の桂にも緣がある。
○西こそ秋　古今集秋藤原勝臣「おなじ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ」易では坤を西として秋に配當す。
○しゞまになりななむ　しゞまは無言。鳴らないであつてほしい。
○夜よしと云々　古今集戀讀人不知「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり待たずしもあらず」
○ことのは月　言の葉が盡く（形容の語がない意）と葉月（八月）と掛く。
○ひさかたの桂のかげ　月光の下
○千秋百秋　永久に。
○秋津洲の　やまとの枕詞。
○忍びづま　思ひ忍ぶ端と忍夫とを掛く。

山松の木のもとあかくなりにけり我がまつ月は今か出づらむ

二日月

散りそむる桐の一葉に二日月かつ〴〵秋はあはれなりけり

三日月

くる秋の哀れをしらぬうなゐさへあはと指さす三日月のかげ

夕月

吾妹子が玉のをぐしの姿ともみる夕月のめづらしきかな

八月十五夜

てる月の光のみかはからやまと言葉の玉をしく夜なりけり

翫月

なれぬればなれむと月も思ふらむいや照りまさる秋の夜な〳〵

海邊月

田鶴(たづ)がねに立ち出でて見れば難波がた夕しほみちて月は浮びぬ

暇あらば大宮人もとひこなむなだの汐屋の月見がてらに

月清みたがくにぶりか歌ふらむ室津にかけし朱のそほぶね

百川のおちあつまれる大海の浪もせばしとやどる月かげ

○かつ〳〵　まづ〳〵。

○うなゐ　幼兒。
○あはと　感動詞。

○からやまと云々　漢詩和歌の秀逸を作る夜の意。

○田鶴がね云々　萬葉集卷六「和歌の浦に汐みち來れば潟をなみ蘆邊をさしてたづ鳴き渡る」
○暇あらば云々　萬葉集卷十「もゝしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつどへる」
○なだ　灘。攝津國武庫郡。
○くにぶり　風俗歌。
○室津　播磨國揖保郡。
○かけし　泊りし。

浦月

浦の海士の煙たてずば中々に明石の月もさびしからまし

湖月

駒の爪ぬらさぬほどの波よせて月しづかなるうちいでの濱

關の戸をうちこえくれば漣のあふみは更に月ぞさやけき

ますかゞみすむ湖の月の上に浮べる塵はにほか小船か

川月

暮れ行けば月と花とになりにけり萩のかげゆく野ぢの玉川

月清み舟さしくれば菰まくら高瀬の淀もまだねざりけり

瀧月

瀧つせに白木綿花（しらゆふはな）をちらしつゝ尾上（をのへ）にかゝる月はしづけし

池月

空の海池の心やうかぶらむさもむつまじく宿る月かげ

山月

荒金の土をはなれてさやかにも澄みのぼるなり山のはの月

深山月

---

○うちいでの濱　打出の濱。近江國滋賀郡。
○關の戸　逢坂の關の戸。
○漣の　あふみの枕詞。
○ますかゞみ　明鏡の如く。
○には　鳰鳥。
○野ぢの玉川　近江國栗太郡。
○菰まくら　高の枕詞。
○高瀬の淀　山城國久世郡。
○白木綿花　白木綿を以て作れる花。水の飛び散る形容。
○空の海　空を海に見立つ。
○池の心　池を擬人化してその心をいふ。
○荒金の　土の枕詞。

○つとにをる花云々　土産にと折る花は自由になるが、野邊を照らす月影は土産に持ち歸れない意。
○月をしみればもの思ひもなし　古今集春藤原良房「年經れば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」
○歸さはおくれ　千載集源俊頼朝臣「暮れはてぬ歸さは送れ山櫻たがために來て惑ふとか知る」
○かかれとて　寐るべからずとて

花よりものどけかりけりみ吉野の吉野の奥の秋の夜の月

野月

つとにをる花は心にまかせけりいかゞはすべき野べの月影
八千草の花をりしきて秋の野に月をしみればもの思ひもなし
月清み野べの萩原ふみわけて伏猪(ふする)の牀もおどろかさばや
花薄(はなすゝき)まねくまに〳〵あくがれぬ歸(かへ)さはおくれ野べの月影

都月

おのづから浮きたつ雲の塵もるず都は月のみやこなりけり
かかれとて誰をしへねど月清みみやこの街(ちまた)ぬる人もなし

山家月

月見にと人のむれくる山窗はよのうき雲のかゝるなりけり

草庵月

月影のちりくるみれば草の戸の野分の風は心ありけり

田家月

秋の野の尾花をいほに葺きそへて月に幾夜の宿をかさばや

古寺月

よに見しはそれかあらぬか高野山むろの岩戸の秋の夜の月

閑居月

松の葉の露ちる音もきこゆなり眺むる月の夜やふけぬらむ

禁中月

人とはば目にかゝらじと立ちこめし竹の編戸を月はもりけり

踏み見るもかしこかりけり鵲のわたせる橋の上にてる月

井月

くみあぐる小田の古井のはね釣瓶こぼすは月の光なりけり

雨後月

むらさめは秩父嶺遠くすぎにけり尾花袖ほせ武蔵野の月

月前遠情

てる月にむかふ心のはなれ駒とりつなぐべき方なかりけり

月前松

絲竹のほかに嬉しく聞きなすは月にしらぶる軒の松風

月前松風

くまもなく月影はれて松風の調べことなる夜となりにけり

---

○目にかゝらじと　人目につかないやうにと。目は竹の編戸の縁語

○鵲のわたせる橋　禁中の御階。

○はなれ駒　はてしない心を放馬の制御し難きに喩ふ。

○しらぶる　調ぶる。調子を合はせる。

月前雲

思はずばいかでか月にたちそはむ厭ひなはてそ夜半の浮雲

月前衣

秋萩の露にぬれつるかり衣歸さは月にほすべかりけり

月前行客

旅人は今宵いづくにやどるらむ月にいそがぬ野路の篠原

月前鹿

すみわたる月に向へば聞ゆなり遠き山べのさを鹿のこゑ

松間月

こよひ又松のもとにて月に見むあらしも淸しすき影もよし

竹間月

音づれむ友こそまため吳竹のよはまだ深し月はさやけし

旅宿月

これやこの吾妻少女がかや筵こよひの月にとりいでて敷く

月の歌あまたよみける中に

桐の葉のちる夕より長月のありあけの空の時雨するまで

---

○思はずば　雲が月に對して心がないたらば。

○野路の篠原　野路は近江國栗太郡、篠原は野洲郡であるが、兩者近接の地だから歌では續けていふ

○すき影　透影。松間を透して來る月影の意。

○吳竹の　よの枕詞。「よ」に「節」と「夜」とを掛く。

○吾妻少女云々　千載集戀源俊賴朝臣「あさでほすあづま少女の萱筵しきしのびてもすぐす頃かな」

月にむらくもかゝりたるかたに

ひたぶるに何か厭はむ一むらの雲こそ月のにほひなりけれ

即位ある年當座に寄月祝といふことを

すめらぎの高みくら山てりそはむ光もしろき秋の夜の月

釣夫棹月

八雲たつ出雲も秋の月清み松江にうかぶすゞきつりぶね

緇素見月

月夜よみ太刀の緒とけし圓居には念(おもひ)の珠(たま)もわすれてぞみむ

貴賤憐月

月を思ふ心にしなやなかるらむ玉のうてなも露の草屋も

月千秋友

思ひぐまなしとや誰かいふならむ千世に伴ふ秋の夜の月

月契秋

かれぬべき契りならめや月の中のかつらの枝に霜はおくとも

深夜月

寐やしけむ寐ずてやあらむ柴の戸をとひ行く道に月更けにけり

---

○にほひ　美しさを添へるもの。

○當座　兼題に對して、即席の詠吟。

○高みくら山　高御座に高みくら山(播磨國印南郡)を掛く。

○すゞきつりぶね　鱸を釣る舟。

○緇素　僧侶と俗人。

○太刀の緒とけし　太刀の緒を外して傍におく意。

○念の珠　數珠。

○しな　階級。

○玉のうてなも露の草屋　金殿玉樓も白屋茅舍も。

○思ひぐまなし　思ひ甲斐のない

○かれぬべき　枯れと離れとを掛く。

終夜見月

おのづからうちしめりたる袂かな月の桂に霜やおくらむ

曉更月

月みつゝまとゐする夜は朝顔の花のさくにぞ驚かれける

入後慕月

山のはをながむる程にあけはてて心にのみぞ月はのこれる

野宮に月すめるかた

鈴蟲のねにたちよりて野の宮の小柴がきねに月を見るかな

擣衣

大和路を夕こえくれば露霜のふるさとごとに衣うつなり

世をしらぬ木曾の深山の麻ごろも月にうてとはたが教へけむ

山がつの麻の衣はたゞひとへうつに霜夜をなど重ぬらむ

山家擣衣

賤の女は眞柴うりてや歸りけむころもうつなり大原の里

われのみと思ひし山の奥ふかくすむ人あれやころもうつ聲

湖邊擣衣

○野宮　内親王が齋宮又は齋院に立たれる時、齋戒の爲に籠られる所で、齋宮のは山城國嵯峨の有栖川、齋院のは紫野。
○露霜の　ふるの枕詞。
○麻ごろも月にうてとは　新古今集秋宮内卿「まどろまで眺めよとてのすさびかな麻の小衣月に打つ聲」
○たゞひとへ　「重ぬらむ」に對す
○大原の里　大原女の里なる山城國愛宕郡。

○汐やき衣　鹽を燒く者の著る衣
○からき思ひ　辛い思ひ。鹽の緣語。
○身をわけて　一身を二つに分けて卽ち赤子を產んでの意。
○打ちぬる　打ち寐るの意を掛く
○隙もあらばこそあらめ　隙があるならばよいが、ありはしない。
○古もなつかしければ　萬葉集卷十九「石瀨野に秋萩しぬぎ馬なめて初鳥狩だにせずや別れむ」
○いはせの　石瀨野。越中國中上新川郡。
○初鳥狩　小鷹狩。
○手にかへる　我が手に舞ひ戻る
○たどるらむ　尾花も招くので一寸迷ふ意。
○栗栖野　山城國宇治郡。
○風をいたみ　風がひどいので。
○心にもあらで　いや〳〵ながら
○色鳥　色々の小鳥。
○大内山を水かみにして　宮中を第一として の意。恰も大内山に菊が生えて居るかの如く面白くいひなしたのである。
○花といへば云々　源氏物語蜻蛉「花といへば名こそあだなれ女郞花なべての露に亂れやはする」

雲居にはかりがねなきて秋寒き堅田の浦にころもうつなり

浦擣衣

浦の海士の汐やき衣秋さむきからき思ひやうち重ぬらむ

砧うつ女に綠子のとりすがりたるかた

身をわけていとゞ夜寒のから衣打ちぬる隙もあらばこそあらめ

小鷹狩

古もなつかしければいはせののまま萩ふみわけ初鳥狩せむ

手にかへる雲居の鷹やたどるらむ尾花も招く栗栖野の原

野分

まま萩原けさの野分の風をいたみ心にもあらで鳥やたつらむ

鷹すゑて栗栖の小野の色鳥を野分の風にたたせつるかな

重陽

菊の露くまぬかたこそなかりけれ大内山を水かみにして

こゝのへの大内山の菊の露かゝらぬ袖もなき日なりけり

菊

花といへばなべてあだなる世の中にちることしらぬ菊もありけり

白菊の花にむかひて思ふこと千代にあえむの外なかりけり

菊といへば秋にかなへる色香にて靜かに千代を咲き渡るらむ

きせ綿は我きせてこそ咲きにけれ千年はゆづれ白菊の花

菊のたねまきし主人の千年さへかさねて見ゆる花の色かな

菊始開

まつ程も千年やふると思ひつる垣ねの菊は咲きそめにけり

名所菊

大井川いり江の松の下露にぬれて千年の菊やさくらむ

おき遠くかをらぬ波も薫るらし菊の花さく吹上の濱

菊有新花

二つ三つ今年もことに咲く菊の花はたなうらの玉にぞありける

籬菊

しきたへの袖ばかりなる笆（まがき）にも千代はあまれる白菊の花

山路菊

そことなく斧の音さへきくの花匂ふ山路は世に似ざりけり

海邊菊

○あえむ　あやからう。

○きせ綿　菊の被せ綿。重陽の前日。菊に綿を被せて菊の露と香とを移し、これを以て身體を撫でて齡を延べる。

○吹上の濱　紀伊國海草郡。

○たなうらの玉　掌中の玉。

○しきたへの　袖の枕詞。

○袖ばかりなる笆　袖垣といふから、小さい籬の意であらう。袖でいふから「あまれる」といふ縁語を用ゐた。

吹上の濱こぎわたる釣舟のつともめづらし白菊の花

菊爲花第一

秀でたる菊にもあるかな久方の星の位やしめて咲くらむ

十日菊

時すぎし花とないひそ白菊の千代は昨日に盡くるものかは

紅葉

立田姫老いせねばこそもみぢ葉の色も千秋にかはらざりけれ

もみぢ葉は八重一重にもあらなくに薄くもこくも照る山べかな

秋深くなりにけらしな時雨する北山もみぢかざしてぞくる

水清く山かすかなるあたりより折りこし紅葉色のえならぬ

紅葉淺

かの岡にかた枝色づくはじ紅葉鴫がなきても知らせつるかな

庭紅葉

小車の打出しぎぬのこゝちして軒端の紅葉そめはじめけり

山紅葉

小倉山御幸をまつのひまごとに染むる紅葉ぞ世に似ざりける

○つと　土產。

○久方の　星の枕詞。

○星の位　三公。

○十日菊　六日の菖蒲十日の菊。

○北山　京都の北山。

○えならぬ　形容の語を知らない

○小車の打出しぎぬ　牛車の簾の下から見せた衣。

○御幸をまつのひまごと　御幸を待つと松の隙ごとを掛く。

山路紅葉

あしびきの山こえくれば立田姫あふ心ちして匂ふもみぢ葉

海邊紅葉

時雨れつるわだの笠松かはらねどむこの山べは移ろひにけり

瀧邊紅葉

白川の瀧つしら絲もみぢ葉にそめかはりたる名や流るらむ

社頭紅葉

はゞからぬ時雨の雲のあと見えていがきの内も紅葉してけり

古寺紅葉

色はみなむなしとさとる山寺の軒にもそめつ秋のもみぢ葉

立田山紅葉

露霜のあきたつ田山いつしかとまちし紅葉ぞ今さかりなる

高雄山紅葉

いにしへは御幸もありし高雄山心たかくや錦おりかく

暮秋

霜むすぶ野寺のかねに送らせてこの夕ぐれに秋ぞくれゆく

○わだの笠松　六甲山と共に攝津國武庫郡。

○もみぢ葉にそめかはりたる名　白川の代りに紅葉の色なる紅川とでもいふ名になる意。

○流るらむ　川の縁語。世に弘まる意。

○はゞからぬ時雨　神社には遠慮すべきであるのに、所きらはず降るからいふ。

○いがきの内　齋垣の内、社内。

○色はみなむなし　色則是空。

○霜露の　あきの枕詞。

○あきたつ田山　秋立つと立田山とを掛く。

○霜むすぶ　野の縁語。

もみぢ葉も殘る夕日もかすかにて山べさびしく暮るゝ秋かな

暮秋霜

音もなく色なきものの悲しきは暮れゆく秋の霜にぞありける

暮秋紅葉

小倉山御幸もあらばいかゞせむ紅葉をすてて秋はいぬめり

暮秋菊

霜むすぶ一本菊をのこしおきてくれゆく秋のこゝろ悲しも

田家暮秋

をしねほす山田の引板に手をかけてひけども秋はとまらざりけり

九月盡

招きてもとまらぬ秋と見はててや夕の風に尾花ちるらむ

さを鹿のなくねもかれて山里の秋の果てこそ寂しかりけれ

秋風

雲まよひ夕月ほそく見えそめて秋風たちぬ西山の空

秋雲

小山田の鳴子の音にさわがれて足とくすぐるむらさめの雲

---

○小倉山御幸云々　拾遺集雜秋貞信公「小倉山峯のもみぢ葉心あらば今一度の御幸待たなむ」

○引板　鳴子。

○ひけども　引き止む意を掛く。

○招きても　尾花が招いても。

○足とくすぐる　足はやに通り過ぎる。

秋雨

もみち葉はまだ遠山の麓なる小萩うつろふ秋のむらさめ

秋野

棚ばたの七草をりにこしものを野を懐かしみたちぞわづらふ

秋川

來て見ればまだ白川の秋の水あすや紅葉のいろに流れむ

秋水

秋の田を今はと落ちてゆく水の心やすさも汲みしられけり

秋野夕

暮るゝ野に残るもさびし秋萩の花のあととふさをしかの聲

閑居秋

菊の上をはらへば松の露おちて靜かに千代もかぞへられけり

海邊秋風

津の國のなにはの蘆の秋の風うらさびしさを盡してぞふく

秋農事

こがひ得てゆたけき里の垣つ田にいとゞ年あるみのりをぞ見る

○棚ばたの七草云々　萬葉集卷八「春の野に菫つみにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜寐にける」
○たちぞわづらふ　立ち去り難い
○まだ白川の秋の水　白川の流れは未だ、白い意を含む。
○こがひ　蠶飼。養蠶。
○ゆたけき里　豐かな里。
○垣つ田　かこひの内にある田。

秋興

樂しみは半ばもすぎぬ野べなれや夕の萩に月をまつとて

田家秋興

新しぼり汲みてうたへば豐年の田の面の鴈もこゑあはすめり

秋眺望

霧の海とうちみるほどに秋の田の穗並の上に鴈なきわたる

秋色

草に木に匂へるよりもかなしきは心の秋の色にざりける

秋祝

君が代はきくの長はま咲く菊のながき色香にとめる秋かな

## 冬部

初冬

きのふけふ冬めづらしき山里の木の葉の雨に雨やどりせり

片岡のはやしの梢風あれてしぐるゝ月はけふたちぬめり

十月更衣

○新しぼり　新酒。

○草に木に云々　古今集に讀人不知「しぐれつゝもみづるよりも言の葉の心の秋にあふぞわびしき」

○色にざりける　色にぞありける

○きくの長はま　豐前國企救郡。聞長濱又は菊高濱といふ。

○しぐるゝ月　時雨月。舊の十月。

○きごし　黄腰。直垂の腰部を黄色に染めたもの。

○夜ともにあれし鼠の　「あな」の序詞。「あな」に「穴」と感動詞の「あな」とを掛く。

○時しらぬ　杉むらに掛つて、いつも青々とせる意。

○かりそめなりし　一寸ばかり聞いた。

○あなかま　あな喧し。

みや人のきごしの衣の袖の上に時雨さむけき朝ぼらけかな

冬の始に

神無月けふもしぐれむと思ひしを霞むばかりにみゆる空かな

閑居冬來

夜とともにあれし鼠のあな寒やけさより冬のすみかなるらむ

初冬時雨

時しらぬくらまの山の杉むらに時雨の雲はまづかゝりけり

時雨

風のおとをかりそめなりし軒の松まことしぐるゝ冬は來にけり

北山の炭めづらしき昨日けふ時雨の雨も音づれにけり

神無月時雨にさへもなれぬれば音せぬまこそ寂しかりけれ

時雨告冬

北窓をけふも幾度たゝくらむあなかま時雨冬はしりきを

都時雨

北山の炭もてはこぶ都路にしぐれの雲もおくれざりけり

旅中時雨

○かれし　ちるに照應す。

○聞くものと　紅葉の落葉を聞くものと。

武藏野をおくる時雨のうき雲やけさ見し富士の煙なるらむ

男女時雨にあひたり紅葉亂れてちる

山里にたちかへりてや宿らまし紅葉も雨もふりにこそふれ

十月苦蠅

夏蟲の火にもいらずて徒らにのこるさ蠅の身ぞ寒げなる

落　葉

風さそふ花には音もなかりしかちる木の葉こそ哀れなりけれ

もみぢ葉はありし梢の色よりもうち散るおとぞ哀れなりける

さを鹿の聲かれしより足引の山の紅葉はちるにぞありける

聞落葉

終夜聞くものとしもなれるこそあかぬ紅葉の名殘なりけれ

窗落葉

いかにして寐覺の袖のぬれつらむ窗うつ雨は木の葉なりしか

山家落葉

かきやれど猶ちり浮ぶ山の井の紅葉ながらに汲まむとぞ思ふ

落葉混雨

もみぢ葉の打散るまゝに立田姫なみだこぼるゝむら時雨かな

閑庭落葉

かくれ家も木の葉の音はいとはぬを松は忍びにおつるなりけり

霜

さ夜ふけて月はかくるゝ山本の松の葉しろし霜やおくらむ

しぐれての野べの草葉の色なきをすてぬや霜の心なるらむ

山家霜

けたぬまに都がた人とひて見よ鹿のあとある軒の朝霜

残菊

心ありて残るま垣の菊ゆゑにしぐるゝ窗もさされざりけり

残菊宴

宮人の袖のにほひを重ぬればうつろふ菊の垣ねともなし

山路残菊

冬がれてにほふ山路の菊の花ちとせの後もかくやのこらむ

寒草

神樂する霜夜をときと山藍も日かげ葛も匂ひあひにけり

---

○松は忍びに　松の葉は音を立てないやうに靜かに。自分に聞えることを氣兼するやうに。

○けたぬまに　消えぬ間に。
○都がた人　都人。

○袖のにほひ　女房の秋の裝束の菊襲の袖をいふ。

○神樂する霜夜　十二月に行はれる内侍所の御神樂の夜。
○ときと　時と。得意の時と。
○山藍も日かげ葛　山藍で模様を摺つた衣。卽ち青摺衣及び冠に掛ける日かげの蔓をいふ。

○霜の花　霜のおりた趣を花と見立つ。

○仙人の名もかぐはしき花　水仙花。

○あし手云々　蘆が色々に倒れてゐる有樣を蘆手書をした趣に見立てたのである。

○一ふし　「ふし」は蘆の緣語。

寒草處々

山かげの薄も水の澤瀉(おもだか)も霜の花こそかはらざりけれ

水仙花

ふりかくす雪うちはらひ仙人(やまびと)の名もかぐはしき花を見るかな

木枯

もみぢ葉をわが物顔にさそひつゝ今年もふきぬ木がらしの風

寒樹

川上の鷺のやどりもあらはにてさながら雪の木末なりけり

寒松

松風も冬のしらべになりにけり氷に咽ぶかけひのみかは

枯野朝

霜深き野べに出でたる朝鳥のこゑばかりこそかれ殘りけれ

寒蘆

津の國の浪花のあし手おもしろくかきなしけりな霜枯のころ

蘆の葉も氷にとぢて冬河の身にしむいろの一ふしぞこれ

氷

おく山の岩まにむすぶあつ氷うぐひすならで誰かとくらむ

露は霜霜は氷とうつりゆく水のすがたの寒くもあるかな

宮の内にもる玉水をけさ見れば氷をむすぶときもしらせり

### 氷初結

風にちる木の葉にさへや砕けまし結びそめたる池のうすらひ

### 氷閉細流

月日のみ上に流れて犬がみのとこの山河こほりゐにけり

### 筧氷

わが庵にたのむ筧は氷りけり谷のこゝろの底やくままし

### 田氷

水鳥の朝たつあとは靜かにて氷ひまなしあのの湊田

### 逐夜氷厚

山藍にすれる衣の夜をかさね御手洗河もこほりゐにけり

### 冬月

氷ゐて水はやすらふ冬の夜もながれてやまぬ月のかげかな

寒けれどさすが心の松の戸をあけてぞ見つる冬の夜の月

---

○うぐひすならで云々　鶯の鳴くのは春であるからいふ。

○うすらひ　薄氷。

○犬がみのとこの山　近江國犬上郡鳥籠山。

○谷のこゝろの底　谷底の水。その水が如何にも心底から好意あるかのやうに見なしたのである。

○あのの湊田　安濃は伊勢國安濃郡。湊田は港にある田。

○山藍にすれる衣　神事に仕へる者の著る衣。「衣の」までは「夜をかさね」の序詞であらう。

○心の松の戸　心には冬の年を待つ意と松の戸とを掛く。

○もりすてし　守り捨てし。番人の居なくなつた。
○蘆のまろ屋　蘆で粗末に葺いた小屋。

○くまはかくらむ　月光を遮る意

○波のかざしの花　白波をいふ。

○風さゆる鴨の云々　拾遺集冬貫之「思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり」

○蟲明のせと　備前國邑久郡。

○ねもやらで　寐もしないで。ねに根を掛く。「松の」までは序詞。

---

田冬月

もりすてし蘆のまろ屋は人もゐず氷る水田に月やどりけり

破林霜夜月

荒れにけり霜夜の月の柞ばら鳥のねぐらもかくれなきまで

千鳥

すまの浦をあかしに通ふむら千鳥をり〳〵月のくまはかくらむ

わたつみの波のかざしの花にのみなれて幾夜の友千鳥かも

河千鳥

風さゆる鴨の河原の小夜千鳥妹がりゆきて誰かきくらむ

大井川夜は流るゝもみぢ葉の色こそ見えね千鳥なくなり

浦千鳥

月きよみ音をやなくらむ友千鳥おのが浦々とひかはしつゝ

磯千鳥

蟲明(むしあけ)のせとの波まに月おちてくらき磯べに千鳥なくなり

曉千鳥

波よする磯邊の松のねもやらであかつき深くなく千鳥かな

河邊に舟ひくかた

蘆まより千鳥たたせてひく舟のゆくかた寒きあさぼらけかな

水　鳥

かはしまの松よりおつる白雪を翅にかけて鴨ぞなくなる

巨椋(おほくら)の江をたつ鴨のをり〳〵は伏見の里や夢さわぐらむ

見わたせば鳥羽の山松月おちて伏見の田ゐに鴨ぞなくなる

霜八度おけども池にすむ鴛のぬしおもひ羽は色も變らじ

網　代

田上(たなかみ)のみねのあらしも川波もあじろもる老が牀のものなる

白波のよせて匂へる紅葉こそ網代の牀のつまにはありけれ

殘　鴈

衣うつ音だにたえし山里のさむき霜夜に鴈なきわたる

雪中殘鴈

おくれても雪のあしたの玉章は我かけたりと鴈やなくらむ

椎　柴

初春のそのみかま木の朝けぶり思へばかすむ峯のしひしば

○かはしま　河中の島。

○巨椋の江　山城國久世郡。おぐらの池。

○霜八度云々　古今集卷二十「霜八度おけど枯れせぬ榊葉のたち榮ゆべき神のきねかも」

○ぬしおもひ羽　主を思ふ意とおもひ羽とを掛く。おもひ羽は尾の兩脇にある羽。

○田上のみね　近江國栗太郡。

○川波　川は田上川。山城の宇治川と共に氷魚の名所。

○あじろもる老　網代守の老人。

○我かけたり　鴈がその翅の下に玉章を掛けた。音信を携へてゐる意。

○みかま木　御薪。正月十五日畿内の國司等から宮中に奉る御薪。

○しひしば　椎。

霰

あくる夜の垣ねにのこる霰こそ砕けし夢の餘波(なごり)なりけれ

埋火のあたりのどかに圓居して霰の音は聞くべかりけり

柏霰

ふる程はしばし霰の玉柏手折らむとすればよそに散るなり

思ふらむ心ありげにならの坂のこのてがしはを打つあられかな

閑庭霰

落葉してあらはになりし柴の戸をおもふさまにもうつ霰かな

山家霰

玉霰はげしかれとておく山の槇の板屋はつくらじものを

雪

ふる雪に色めく庭の枯尾花まねかずとても人のとへかし

そらだきもなびく都の初雪にかをらぬ花の名こそ惜しけれ

淺ければ人の跡もぞいとはるゝつもりに積れ庭のしら雪

さればこそ夜半の砧はいそぎつれ初雪ふりぬしがらきの里

ふる雪にをそのたはれを跡つけて馬よ車よとゞろかすらむ

○砕けし夢　砕けしは霰の縁語。

○玉柏　槲。

○なら坂　奈良市の北方。

○このてがしは　側柏。

○そらだき　空薫物。

○かをらぬ花　雪。

○人の跡もぞいとはるゝ　人の足跡が厭はれるかも知れない。

○しがらきの里　近江國甲賀郡。

○をそのたはれを　うそつきの放蕩兒。轉じて今いふ馬鹿者奴などいふ、人を罵る言葉。

九重のとのゐも寒くなりにけり比叡の高ねにみ雪ふるらし

君子(みやびを)よ朝とく來ませ我が宿の雪にもちりのおそりやはなき

待雪

埋火を友とたのむる身にしあれど雪は心にかけぬ日はなし

初雪

冬きてはまつものにする初雪のふれるあしたをたゞに過ぎめや

さえとほす衾の下にしろかりし雪はむかひの峯のいはかど

蘆の屋の小屋の簾もあけつらむ初雪ふりぬ猪名のさゝ原

いくたびか有明月にはかられて待ちこし庭の初雪ぞこれ

山初雪

伊駒山初雪ふりぬ浪花人蘆わけ小舟こぎいでて見む

都初雪

かくながら都にはこべ大原やこのいちしばに降れる初雪

梅にちり櫻にかゝる初み雪花とのみ見るみやこなりけり

朝雪

降りはれし雪のあしたの朝づく日花やかにこそさし昇りつれ

---

○九重のとのゐ　宮中の宿直。
○雪にもちりのおそりやはなき　雪にも塵のおくといふおそれはある。
○おそり　おそれと同じ。
○猪名のさゝ原　攝津國豐能郡。
○はかられて　欺かれて。
○かくながら　このまゝ。
○いちしば　澤山茂れる芝草。萬葉集卷四「大原のこのいち柴のいつしかと吾が思ふ妹に今宵あへるかも」
○朝づく日　朝日。

夜雪

下折れにねざめの枕そばだててまだ見ぬ雪のおとを聞くかな

深夜雪

人はみなあつき衾にうづもれて寐る程ならし雪のしづけさ

山雪

初雪もふりにけるかなつねに我が友とながむる遠山の松

遠山雪

比叡はまだしぐるゝ雲のあなたなる比良の遠山雪降りにけり

川雪

夜光る玉の大橋かけてけり雪ふりぬらし賀茂のかはづら

島雪

釣舟の苫にのこるは雫にて初雪ふりぬかさぬひの島

山家雪

さを鹿の跡のみ見ゆる山里の雲のあはれぞ世に似ざりける

故郷雪

ふる衣きならの里に夜をかさね日を重ねてゝ雪ふりにけり

---

○下折れ　雪の重みで枝が折れる

○初雪もふりにけるかな　松は古りにけるが、初雪も降りにけるの意がある。

○つねに我が友云々　古今集雑藤原興風「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」

○夜光る玉の大橋　雪の降り積つた大橋。雪の美を夜光珠に比した。

○かさぬひの島　攝津國東成郡。

○ふる衣　「き」の枕詞。
○きならの里　奈良の里。
○かさね　衣の縁語。

閑庭雪

我さへも人のゆかしき朝けかな友まつ雪にもよほされつゝ

さびしさは小野の住居に似たれども雲踏み分けてくる人もなし

船中雪

こぎかへる朝妻舟に雪白しうきねよいかに寒けかるらむ

名所雪

かくながら常にあらなむ九重のみやこのふじの峯のしら雪

松雪深

下折れし竹の音にはおどろけど拂ひかねたる松の雪かな

雪中鳥

よろこびをつぐる烏に起き出ればわがまつ雪はふり初めにけり

雪朝

雪のうへに一むら塵のたゞよふは山がらすもや塒たつらむ

山里の雪のあしたまらうど門にある所

たゝけども答へざりけり雪の門また下折のこゑにまぎれて

野宮に雪の積りたるかた

○友まつ雪　一度降つた雪が、又雪の降るまで消えず殘る雪。

○雪踏み分けてくる人もなし　古今集冬讀人不知「わが宿は雪ふりしきて路もなし踏みわけてとふ人しなければ」

○朝妻舟　近江國琵琶湖の東岸なる朝妻の入江の渡舟。

○まらうど　客人。

心あての黒木もわかずなりにけり野の宮いづこ雪のあけぼの

### 神樂

しきしまのやまと琴のね神さびて榊の枝に月ぞかゞやく

雲の上はたゞ目の前の神代にてありあけの月に星うたふなり

こがらしにふき合はせたる笛竹のねもおもしろき月の夜神樂

あけぬるか横雲わたる岩戸山星うたふ聲はまだ夜深きに

### 鷹狩

家々の鷹の風流(みやび)をつくしつゝ朝たちいづるみかり野の原

ひきすゑし鷹は屋形尾みづ莖のをかのさゝ原かり盡しつゝ

### 炭竈

さびしとも賑(にぎは)はしとも見る方になびく煙か峯のすみがま

小野山の炭やき衣すみぞめの心地やすらむ世にいでずして

炭がまの煙かすみて丹波路はおもひの外に春めきにけり

### 埋火

山寺の鐘さやかにて埋火の灰にも霜の夜はふけにけり

埋火のあたりにのみもあかすかな霜夜の月は窗にへだてて

---

○心あての云々　それと心に思うてゐた黒木も見わけがつかない。

○しきしまの　やまとの枕詞。

○やまと琴　六絃の大和琴、東琴。

○星うたふなり　星は明星で、神樂の曲名。

○岩戸山　天上にある假設的の山

○みかり野の原　御狩野の原で、普通名詞であらう。

○屋形尾　色々說があるが、八字形の斑の尾。萬葉集卷十七「矢形尾の鷹を手に据ゑみしま野にからぬひまねく月ぞ經にける」

○みづ莖のをか　近江國蒲生郡、筑前國遠賀郡にもある。

○小野山　山城國愛宕郡。

○鐘さやかにて　霜夜には鐘の音が冴えて聞えるからいふ。

ともすれば閨にも炭のうす煙なほ小野山のあはれをぞ見る

文机はそむけがちにて埋火の灰かきならしなるゝ頃かな

水たまる池田の里はまだ見ねどすみよき程を夜な／＼ぞしる

爐邊閑談

かたらへば語る言葉の花もさき紅葉もにほふうづみ火のもと

埋火のあたりのどかに語らへば瓶の梅さへほゝゑみにけり

桐火桶

つま琴につくりなさねど桐火桶手にならさるゝ冬の夜な／＼

茶壺の口切といふことを

つぼの内の梅よりもとく開けたる木の芽かぐはし來む人もがな

衾

きせ綿の心地せらるゝ厚衾かづく我が身は菊にもあらなむ

師走

雪ふかくつもる師走のしはせ山熊もうつぼの底にすむらむ

早梅

咲きそめて春めく庭の梅が枝に木枯といふ風吹くなゆめ

---

○そむけがちにて　脇の方へ押しやりがちで。
○水たまる　池の枕詞。
○池田の里　炭の産地と思ふが、場所不明。
○すみよき　炭と住むとを掛く。
○紅葉もにほふ　紅葉の木で製した炭火の美しさをいふのであらう
○つま琴　琴。
○つぼの内　中庭。
○しはせ山　萬葉集卷十一「荒熊の住むといふ山のしはせ山せめて問ふとも汝が名は告らじ」師齒迫山は駿河國富士郡。
○うつぼ　洞穴。

比良のねに雪を見そむる頃よりぞ都は梅の花もよひする

咲きにけり年の内には梅が香のたき物のみと思ひしものを

ひゝらぎもまださしあへぬ年の内に春めきけりな軒の梅が枝

歳暮

若ざかりまだをしからぬ心をば我にかさなむ年のくれがた

都鄙歳暮

年くれてさす柊のひと枝はかはらざるべし鄙もみやこも

山家歳暮

猴（ましら）なく山にて年を惜しといはば世の人まねになりやしてまし

家々歳暮

ものゝふもはかせの家も梓弓春まつほかや今はなからむ

歳暮月

あはれなりくれ残りたる年の尾にしばしかゝれる有明の月

歳暮松

千年へむ松はしらずや世の中にくれゆく年の惜しきならひを

闘歳暮

---

○梅が香　煉香の名。

○ひゝらぎも云々　昔は正月には柊を門にさす習慣があつた。土佐日記にも「九重の門のしりくめ繩、なよしの頭、ひゝら木ら云々。」とある。

○山にて年を惜し　山中生活は憂世外の生活と見なされてゐるから日月などは問題外である筈である

○世の人まね　猿の人まねの意をも通はす語。

○はかせの家　學者の家。

○梓弓　はるの枕詞。

○年の尾　年末。

逢坂のせきとゞむれどはしり井の水の如くも暮るゝ年かな

學者惜年

ことし又ひまゆく駒に遲れつる文車（ふぐるま）こそはかひなかりけれ

歳暮祝

ことなきもうれしきものを思ふことなりけむ宿の年のくれがた

追儺

なやらふは御代の例にかはらねど鬼のすだくといふ里のなき

除夜

くれ〲て殘れる年の一夜川こゝろづくしのわたりなりけり

冬山家

たよりあらば都へと思ふ落椎のみのはら〲と雨も降り來ぬ

山家冬朝

けさもなほ紅葉はのこり笹栗はおつる垣根を人のとへかし

冬動物

野邊は今狩する頃になりぬらし里の木末に鳥のむれくる

冬鶴

---

○せきとゞむれは　堰きと關とを掛く。
○はしり井　走井。涌き出る清水　逢坂關には關清水といふ涌泉がある。
○ひまゆく駒　莊子知北遊「人生ニ天地之閒ニ。若ニ白駒過ルガ隙ヲ。忽然而已。」
○文車　室内で書物を運ぶ板張の小車。
○ことなき　無事であること。
○なやらふ　追儺をする。
○鬼のすだくといふ里　追はれた鬼が集まる里。
○こゝろづくしのわたり　色々氣をもませる渡し場。わたりは川の緣語。
○はら〲　椎の實と雨と兩方にかゝる。

冬の夜の長居の浦にてむすぶ霜に千年のおともつくらむ

冬庭

くる人もなき冬がれの庭の面になにと霰の玉はしくらむ

冬衣

手弱女もむかしはきたる皮衣けうときものの冬はなつかし

冬松

年ふれど色もかはらぬ高砂の松にしぐれの雨はものかは

冬車

ふる雪にちまたひきだす宮人のくるまやどりや岡の松かげ

廣澤池冬

廣澤の氷をくだく音すなりあたごおろしに霰ふるらし

冬祝

世の民におほふ恵みのあつぶすまさゆる冬とは思ひしもせじ

# 戀部

戀

夜の長い霜をも掛く。

○けうときものの　厭らしいけれど。

○高砂の松　播磨國加古郡。

○くるまやどり　車を宿す所。岡の松の下を車宿りとするのである。

○廣澤　廣澤の池。山城國葛野郡。

○あたご　愛宕山。同前。

○あつぶすま　厚い夜具類。

はつせ山祈りしかひに打ちとけて寐よとの鐘を二人きくかな

水鳥のおなじつらなる戀もせで雲居のたづを慕ひてぞなく

あぢさゐの四ひらの花の宵ごとに我を待たせて移ろひにけり

春秋の契りかはらぬ月花もすてて物思ふ戀にもあるかな

さよ衣かへしてねむと思ふこそまづ我が戀のうらみなりけれ

忘草おふともしらで住の江の松がね枕など寐そめけむ

うれしきにうきに心のくだかれて戀こそ人の老となりけれ

小山田の下樋をくゞるさゝ水のかすかにだにも聞かせてしがな

ぬば玉の夢の中にもうつゝにも人戀ふる身となりはてにけり

初　戀

よ心のけさやはありしくれ竹のふして人こそ戀しかりけれ

ますらをとたてし心のまき柱などつまやにはより始めけむ

時ならで秋の草葉の露ふかしあやしや何の道にきつらむ

忍　戀

つらくとも命の限りたへて見むしのぶぞ戀の操なりける

しきたへの枕に露はむすばじをなきて涙の名にやながれむ

---

○水鳥のおなじつらなる戀　水鳥と同様な戀。鴛鴦等の睦まじい戀を指す。

○あぢさゐの四ひらの花の　序詞　四ひらは宵の意もある。古今六帖「西さす晝はこちたしあぢさゐの花のよひらにあひ見てしがな」

○さよ衣かへしてねむ　衣を裏返して寐れば思ふ人を夢みるといふ

○うらみ　「うら」は衣の緣語。

○忘草　我を忘れる徳を持たす。

攝津國の住吉は松及び忘草の名所

○松がね枕　松が根を枕として。松に人を待つ意を掛く。

○下樋　地中の樋。

○さゝ水の　これまでは「かすかに」の序詞。さゝ水は少しの水。

○よ心のけさやはありし　今朝の中は色心はなかつたが。

○ふして　夜臥してから。「ふし」は竹の緣語。

○ますらをとたてし心のまき柱　若くも男だと決心したのに。まき柱は杉や檜等で作つた柱。其の硬直を決心に喩ふ。

○つまや　まき柱の緣語で、閨房即ち女を指す。

○より始めけむ　近づく意「より」は柱の緣語。」

○しのぶぞ戀の云々　新續古今集戀後光明院關白前左大臣「つれなきも人目ゆゑぞと慰めてしのぶぞ戀の命なりける」

[illegible]。
〇心あひの風　心が合ふ意にあひの風（東風）を掛く。
〇くれ竹の　ふしの枕詞。
〇不忍の池　東京市の上野。忍ばれない意を含む。
〇花がたみ　花籠。
〇むしぶすま云々　萬葉集卷四「むしぶすまなごやが下に臥したれど妹とし寐ねば肌し寒しも」暖かな衾の和やかな下に。
〇こと草の云々　數多い言葉を交す間には、人を飽きるといふ言葉も交るものだとの意。
〇玉だれのこす　美しい簾。
〇あて人の　以上は逢ひ見ぬの序詞。
〇みつが峯　願ひを滿たす意を掛く。三つが峯は熊野三山であらう。
〇杉の青葉の　杉の青葉の如く。
〇ひけば　手元に引き寄せる意。
〇ちびきの岩根松　千人引のはひ松。
〇つれなき色　杉は常綠でかはらぬ色であるから、相手が少しもなびかぬ意に取る。

忍經年戀

心あひの風もふかねばくれ竹のうき一ふしを忍びてぞふる

欲言戀

よしさらば心の底をうちいでむ世に不忍の池もあるものを

幼戀

花がたみたさなき目にも見しらなむ我がおもひ草つみし心を

初逢戀

むしぶすまなごやが下に打ちとけて逢ふ時なれや逢ひみ初めけむ

年月のうさはかたらじこと草のしげき中には秋風のふく

不逢戀

妹が門行けどもあはず杉が枝につれなき風の音ばかりして

玉だれのこすを隔つるあて人の逢ひ見ぬものを何か戀ふらむ

祈逢戀

いのりつるしるしは今宵みつが峯杉の青葉の變らずもがな

逢不遇戀

今更にひけばちびきの岩根松つれなき色を見てやわたらむ

玉匣（くしげ）あひみてあはぬ我が中は浮名もいかゞたつにかあるらむ

尋戀

かむつけのさのの舟橋かけたれど吾妻少女は親もゆるさず

後朝戀

ぬぎかへし衣はこゝにありながらあらぬ人香（ひとか）は言もかはさず

朝妻をこぎ別れこしうき舟のうける心をいかでつながむ

鳥がねも聞ゆるほどに歸りきてまさる思ひになく〳〵ぞ寐（ね）る

難忘戀

さるものの疎き習ひをたのみにて日頃みねども忘られなくに

船中戀

なく涙苫もる雨といひなしてみなとに殘る人を戀ひつゝ

名立戀

とりとめむことのかたきは朝鳥のたちて出でにし浮名なりけり

悔戀

立たむ名を思へばけさの悔しきを悔ゆとはさすが聞えむも惜し

雨中戀

○玉匣　あひの枕詞。○あひみてあはぬ　顏を見ても契りを結ばない。○かむつけのさのの舟橋　かけたれどの序詞。佐野の舟橋は上野國群馬郡。○かけたれど　橋の縁語。心にかけたれど。○あらぬ人香云々　その人の移香はするがその人は居らないからその衣は一言も言つて吳れない。○朝妻云々　朝妻を女、うき舟を男に喩ふ。うきに浮きと憂きことさを掛く。○うける心　落ちつかない心。舟の緣語。つながは制御する意。○さるものの疎き習ひ　文選「去者日以疎。生者日以親。」○とりとめむ　訂正する。鳥の緣語。○朝鳥の　「たちて」の枕詞。○けさの悔しきを云々　今朝の悔しさはさりながら、又浮名の立つのもいやだの意。

○草枕云々　萬葉集卷五「天ざかる鄙に五年すまひつゝ都の手ぶり忘られにけり」
○すゞの篠屋　篠竹で葺いた家。以上は「すゞろなる」の序詞。
○すゞろなる戀　何となく人なつかしさ。
○年月をふるき思ひ　經ると古きとを掛く。
○思兼の神　高御產巢日神の御子で思慮深く智謀に長じた神。
○かたし貝　片貝。合はせ介殼の離れた一片。新葉集戀二品法親王聖尊「いかにせむ同じ渚のかたし貝あはでなるゝも契りなれども」
○あはでのうら歎きする　逢はで心歎く意にあはでの浦（尾張國海東郡）を掛く。
○あふひ草　葵に逢ふ日を掛く。
○かけずや　露の緣語。
○岩代の松云々　拾遺集戀讀人不知「何せむに結びそめけむ岩代の松は久しきものと知る／＼」岩代の松は紀伊國日高郡。

とはれつる其の木に似たる雨だれと一人のみこそ袖濡らしけれ

旅戀

草枕ひなの旅寢に四年へてちとせをかけしつまぞ戀しき

驛路（うまやぢ）のすゞの篠屋のすゞろなる戀にぞ袖はぬれまさりける

思戀

しるべぞと頼めし程に年月をふるき思ひとなり果てにけり

かくてあらば身は徒らに戀ひ死なむ思ひはからへ思兼（おもひかね）の神

片戀

數ならぬわがさきの世やかたし貝今もあはでのうら歎きする

恨

かりそめの物見車のあふひ草それもうらみの露はかけずや

岩代の松にも思へつれなさに結ぶ恨みはよゝを經ぬらむ

おもかげ

夢よりもはかなかりけり身にそはる俤のみは言（こと）もかはさで

相おもふ

池にすむ鴛のつがひの生まれきてかくや思ひの深さくらぶる

口かたむ

せきいれし小田のますら男心せよ皆口よりぞもるべかりける

一夜隔てたる

今年生ひの竹の一よの夜がれをもまづうきふしに思ひやはせぬ

二夜隔てたる

あひそめて二夜まろねの朝ね髪心さへこそ結ぼほれつれ

三夜隔てたる

しをれしはうべともうべな雨づゝみ三夜もこざりし牀夏の花

寄月戀

あふ夜はのありて後こそ有明の月のつらさも思ひしられめ

寄雲戀

峯高き雲のかけ橋かけたれど渡るすべなし見てこそやまめ

寄風戀

露はらふ荻の上葉の秋の風けふはよそにや聞き渡るらむ

寄雨戀

とはれねば草の庵となりはてて涙ぞ夜の雨とふりぬる

○せきいれし　水を堰き入れて。
○小田のますら男　百姓。
○皆口云々　禍は口より出づの意皆口に水口を掛く。
○今年生ひの竹の「一よ」の序詞。「一よ」は夜と一節とを掛く。
○夜がれ　夜離れ。夜通ひ來ないこと。
○うきふし「ふし」は竹の緣語。
○二夜まろね　二夜つゞきて獨寐すること。
○結ぼほれつれ　憂鬱になる。髮の緣語。
○しをれしは　悲觀する意。牀夏の花の緣語。
○うべともうべな　至極尤もである。
○牀夏の花　古今集の「妹とわが寐る牀夏の花」を下心に置いた。
○あふ夜はの云々　古今集戀壬生忠岑「有明のつれなく見えしわかれより曉ばかりうきものはなし」
○峯高き雲のかけ橋　かけたれどの序詞。雲のかけ橋は高い棧道。
○かけたれど　心にかけたれど。
○草の庵云々　白樂天の「廬山雨夜草庵中。」の句を下心に置いたのであらう。

音羽山おとにはたちて逢坂の關のこなたに年をへにけり

寄里戀

人もなほ思ひいづらむ鴈がねのなきて別れしみよし野の里

寄關戀

おもかげを心にとめて今宵もや不破の關屋にたゞひとりねむ

寄橋戀

ふみなれぬ胸とゞろきの橋のつめに逢ひ見し妹はかけて忘れず

寄江戀

住吉のえやは忘れむといひおきて名におふ草を今は摘みけむ

寄湖戀

あふみてふ名をば頼みてこしかども打出の濱の打出兼ねつゝ

寄瀧戀

閨の内におとす涙の瀧つせは君ならずして誰かせくべき

寄水戀

すゞみすと共にむすびし山の井の水こそ袖は濡らしそめつれ

○音羽山云々　古今集戀在原元方「音羽山音に聞きつゝ逢坂の關のこなたに年をふるかな」

○おとにはたちて　二人の關係は評判にはなつてゐるが。

○逢坂の關のこなた　相手に逢へない意。逢ふといふ名の關を越えないのだからいふ。

○ふみなれぬ　踏みと文とを掛く

○胸とゞろきの橋　胸轟くと轟の橋(陸前國宮城郡)とを掛く。

○つめ　たもと。

○えやは忘れむ　忘れることは出來ない。

○名におふ草　忘草をいふ、

○あふみてふ　近江と逢ふ身とを掛く。

○打出の濱　近江國滋賀郡。

○打出兼ねつゝ　打明け兼ねる。

○袖は濡らしそめつれ　其の人を思ふ涙で袖を濡らすのが本意。

寄舟戀

鹽竈の浦こぐ舟の綱手にもなり見てしがな人もひくやと

寄鳥戀

五月雨のふるやの軒にゐる鳥のしとゞに濡れて物をこそ思へ

寄獸戀

なれぬれば虎すむ野にもふしつべしうしろめたしや妹があら牀

寄蟲戀

戀せずばたゞ大方のあはれにて聞かましものを松蟲のこゑ

寄松戀

出羽（いでは）なるあこやの松のこやとしも聞えぬまゝに年ぞへにける

寄草戀

三熊野の浦のはまゆふえてしがな百重に思ふ人にみすべく

寄葵戀

かたをかの森の下道わかるれど又もあふひを忘れざらなむ

寄鏡戀

閨の中に二人むすびし紐鏡これを心と見もし見られむ

---

○人もひくやと　あの人が我に思ひを寄せるかとの意。

○五月雨のふるや　降ると古屋とを掛く。風雅集夏前大納言爲氏「あやめをば吹き添ふれども五月雨のふる屋の軒はもるにぞありける」

○うしろめたしや　不安心の意。

○あら牀　荒々しい牀。

○松蟲のこゑ　人を待つ意を掛く

○あこやの松の　これまではこやの序詞。あこやの松は羽前國南村山郡。

○こや　來れの意。

○三熊野の浦云々　萬葉集卷四「三熊野の浦の濱木綿百重なす心は思へどたゞに逢はぬかも」三は美稱。

○はまゆふ　濱木綿。濱おもと屬の植物、葉は幾重にも莖を包む。

○かたをかの森の下道「わかる」の序詞。

○あふひ　葵と逢ふ日とを掛く。

○紐鏡　裏面に紐のついた鏡。

つれもなき鳥のねばかり聞えきて今宵もしらむ閨のひまかな

寄夢戀

思ひかね衣かへして寐しものを夢にも人のつらさをぞ見る

○夢にも人の云々　夢の中にも相手が現はれて來ない意。

## 雜部

天

たつ雲も鳥もおよばぬ久方の天のみやこにゆく心かな

日

晝のうちは地(つち)をもめぐる日の神のあまねき影を仰がざらめや

星

ひさかたの南の空の雲間より老のすがたのみかげあらはせ

雲

山のはにおなじ姿はみえねども昨日の雲やけふもいづらむ

末つひに富士のねをさへ包むらむ塵ばかりなる空のうき雲

曉

宵のまに語りし友はかげきえて寐覺の窗にあり明の月

よるひるを待つと惜しむの中空にかゝるもあはれ有明の月

朝

山烏あけぬとつぐる一聲に世はさま〴〵の音ぞきこゆる

山

燒太刀のとなみの關に打ちみればいよ〳〵寒し雪のしら山

大井川みなそこすめる君が代に長くひきなす龜の尾の山

人の上もたゞかかれとか朝もよし紀路に雙(な)みたつ妹とせの山

雨後山

谷川のにごりに宵の雨みえてみねには雲ものこらざりけり

不二

ちたび見て千度めづらし雲風のすがたさだめぬ不二の芝山

東路にみそむる富士はよろこびをあはす扇のすがたなりけり

これやこの都にしては大比枝を見つゝしのびし不二の芝山

不二のねは三國にわたるあしがなへ動かぬみよの寶なりけり

三十餘り二つの姿そなへたる山とたゝへむ山は不二のね

○中空に　中途はんぱの意をも掛く。
○燒太刀の　「と」の枕詞。
○となみの關　越中國礪波郡。
○しら山　加賀國の白山。
○朝もよし　「き」の枕詞。
○妹とせの山　紀伊國伊都郡の妹脊山。
○芝山　雜木の生えてゐる山。
○都にしては　都にては。
○あしがなへ　三本足の鼎。
○三十餘り二つの姿　佛の具有する三十二相。

富士に龍の昇るかた

ふじのねは黄金の龍の位山ときえて今やたちのぼるらむ

十二月の不二とて人の乞ひければ

正月

ふじのねや神代ながらの雪の色もけさ新しき春はきにけり

二月

富士のねの雪の下にも若草のみどりの春と雲雀たつなり

三月

山風もさわがぬ春ぞいざ子どもふじの裾野に櫻がりせむ

四月

時しらぬ不二の雪をも卯の花の夏になしたるほとゝぎすかな

五月

いたづらに富士の裾ゆく旅人のうらみもはれぬ五月雨の頃

六月

いかばかり涼しかるらむ不二颪ふくやふもとの牀夏の花

○白ゆふ　神に捧ける白木綿。
○位山　位の高きを山に喩ふ。
○さきえて　好運に際して。
○山風もさわがぬ春ぞ　論衡「風不レ鳴レ條。雨不レ破レ塊云々。」
○いたづらに　富士の姿を見られないで。
○はれぬ　五月雨の縁語。
○牀夏の花　牀の意をも含んで涼しに關係す。

七　月

東路はころも手寒し不二のねの雪よりおろす秋のはつかぜ

八　月

さやかにも聞えけるかな月雪のふじのかげふむさを鹿の聲

九　月

いく藥あるてふ富士を仰ぎつゝ菊の花つむ武藏野の原

十　月

神無月しぐれの雨のゆきかひに幾度ふじは晴れくもるらむ

十一月

ふじのねの雪の夜あらし吹き落ちて千鳥なきたつ三保の松原

十二月

こよろぎのいそしき年の暮にても見れば豐かにたてる不二のね

野

もゆるより枯れはつるまで百草の百の哀れは野べにこそ見れ

田

うちつけにおり立たむとも思ふかなたづのむれゐる春の櫻田

○いく藥　不老不死の藥。此の歌竹取物語による。

○こよろぎの　「いそ」の枕詞。

○いそしき年　忙しい年の意。

○うちつけに　俄に。

○櫻田　尾張國愛知郡。萬葉集卷三「櫻田へたづ鳴き渡るあゆち潟潮干にけらしたづ鳴き渡る」

川

濁りなきしらべなるらし六代田のいつ貫河の水のしらなみ

心だにすまば山にもおとらじと市にいづらし三輪川の水

宇治川の水をくむといふことを

河橋をひきしは遠きむかしにて騒がぬ水をくむ世なりけり

河水久澄

萬代のかゞみとすめる賀茂川はみもすそ川や底にかよへる

對泉石

山水の底のさゞれの清ければ石にも口はそゝぐべらなり

閑對泉石

山陰の岩根にそゝぐ苔清水みなれ聞き馴れて年ぞへにける

瀧

手にまきて歸るよしもが岩がねにすゞしくかゝる瀧の白絲

常にゐる高ねの雲のかけひより幾世落ちくる水にかあるらむ

養老の瀧のかた

峯たかみ岩ねにあたる山水のくだけて瀧の名はながるめり

○六代田の云々　新千載集慶賀後京極攝政前太政大臣「鏡田のいつぬき河のしき波に羣れゐる鶴のよろづ代の聲」廂田の絲貫川は美濃國本巣郡。
○心だにすまば云々　文選「小隱隱＝陵藪｡大隱隱＝朝市｡」
○市　三輪の市。
○三輪川　大和國磯城郡。
○河橋をひきしは　橋合戰のことを指す。
○みもすそ川　伊勢大神宮の前を流れる川。
○さゞれ　さゞれ石。
○石にも口はそゝぐ云々　晉書孫楚にある枕石漱流の故事による。
○みなれ　見馴れと水馴れとを掛く。
○歸るよしもがな　歸る方法があればよい。
○かけひ　筧。

道しらばゆきてむすばむたどの瀧いまも藥の水ならましを

山中瀧水

よし野山花のおとのみ高くしてたぎつ流れは知られざりけり

關

契りあれば來にけるものと陸奥のころもの關に袖はしをりぬ

やつれこし我が身をたれとなのらむも面なかりけり朝倉の關

關路

玉くしげあけて越ゆれど足柄の關の戸くらし雲のしたみち

海路

唐人にうきねの牀やならべまし博多の沖に舟かけてけり

おほ島のせとの高波こえてこそ猛ならぬ身も息はつかるれ

むねさわぐ響の灘も忘られて舟こぎよせつから琴の浦

海上雲

浦わたるたづは遙かにゆきすぎて波にたゞよふ雲のひとむら

海邊曉雲

漁舟(いさりぶね)ふなですらしも伊豆の海やふじの高ねに横雲わたる

○むすばむ　掬ばむ。
○たどの瀧　多度の瀧。養老の瀧を指す。
○袖は　衣の緣語。
○やつれこし　窶れ來し。
○我が身をたれと云々　新古今集雜天智天皇「朝倉や木の丸殿にわが居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」朝倉の關は筑前國朝倉郡
○面なかりけり　恥かし。
○玉くしげ　「あけ」の枕詞。
○あけて　夜明けて。玉匣の緣語。
○博多　筑前國筑紫郡。
○舟かけてけり　碇泊した。
○おほ島のせと　周防國大島郡。
○息はつかるれ　恐怖の爲に息がつかれる。蛩の方は呼吸切迫。
○むねさわぐ響のなだ　怖ろしさの爲に胸が騷ぎ響くと響の灘（播磨國明石郡）とを掛く。源氏物語玉鬘「うきことに胸のみさわぐ響には響の灘もさはらざりけり」
○から琴の浦　攝津國武庫郡琴浦であらう。

浦邊松

波の上に萬代さらぬうき草はひとむらしげき橋立の松

鹽屋烟

沖つ風ふきにけらしな明石潟鹽やくけぶり波になづさふ

石

口そゝぐ流れによればやすらかに枕とすべき石もありけり

庭石

庭の面にすてたる如く置く石を惜しむべしとや苔の包める

鶴

すがのねの長き春日を心にてとはにすむらむ浦のあしたづ

君が代の長居の浦の松ごとにたづの毛衣かけてさらせり

天とぶやつばさにかかる白雲のしらずいくよのたづの齡ぞ

丹頂鶴

くれなゐに匂へるたづの頂は八千代ふりにし霜やそめけむ

松上鶴

高砂の尾上を見れば松の葉の青雲のうへに鶴ぞなくなる

○口そゝぐ流れ云々　漱石枕流。晉の孫楚の故事による。

○すがのねの　長きの枕詞。

○君が代の長居の浦　君が代と長居の浦とを掛く。
○毛衣　羽衣。

○青雲　青空。

鶴の二つあるかた

津の國の浪花が崎の雙び濱ならびてたづの千代よばふらむ

同じく三つあるかた

大伴のみつの浦づるみつながら千代の年波たちかさぬらむ

鶴のむれゐるかた

一むらのおりゐる雲と見し程にやがて聞ゆる萬代のこゑ

松陰に鶴むれゐるかた

いづれにか千代は契らむ住の江の松陰くれば鶴のむれたる

鶴千年友

仙人（やまびと）のすみかも何かよそならむたづにともなふ庭の松かげ

鷲

荒磯の岩におりゐてなく鷲の聲のひゞきに波ぞくだくる

もののふの矢にはぐ見れば鷲の羽のなれる果てさへたけくぞありける

鷺

かつは行きかつは佇む白鷺のしらずいかなる物思ふらむ

岩に鶺鴒のかた

○津の國の云々　日本書紀「おしてる難波の崎のならび濱ならべむとこそその子はありけめ」

○大伴の　「みつ」の枕詞。

○みつの浦　大阪市の道頓堀邊。

○千代の年波云々　千年を重ねる意。

○何かよそならむ　間近にある意

○なれる果て　身の最後。

○かつは　或は。

千早振神代のつたへなかりせば鳥の心をたれかしるべき

牛

なつかしき花の名おへる牛なれば黒き中にも色は見ゆらむ

猫

なれぬるも今はなか〳〵うかりけり猫のかしづき暇なくして

狐

世の中の人の心のきつね川渡りくらべて知るべかりけり

虎

ひさかたの天つ空なる不二のねの石にも虎の名こそ高けれ

狸腹鼓うつかた

おもしろき野中の月の夕かなみゝづ笛ふき狸つゞみうつ

龜

大がめも小がめもあれど萬代はおなじ縁の淵にすむらむ

岩淵にぬれてはさらす龜の尾のながき月日をおもひこそやれ

をり〳〵は青海原にあらはれて君がよろづ代を仰ぐ龜かも

玉くしげふたゝび契る人もあれな與謝の浦龜今もすむらむ

---

○神代のつたへ　日本書紀「時有二鶺鴒一飛來搖二其首尾一。二神見而學レ之卽得二交道一。」

○猫のかしづき云々　猫を大事にするので忙しくて。

○人の心のきつね川　人心の狡猾なる意。

○渡りくらべて　比較しての意。

○不二のねの石云々　曾我祐成愛寵の遊女虎御前を指す。

○みゝづ笛ふき　みゝずのかすかな鳴聲をいふ。

○玉くしげ　「ふた」の枕詞。

貝

色々の小貝を波のうちよせて磯邊は花のさかぬ間ぞなき

松

人ごとに千代をおほへる松の葉の心廣さを見るべかりけり

花紅葉あだ競べしてたてる世にてらはぬ松ぞ長閑けかりける

庭の面を松一本にまかすればゆたにぞ千代の影はみえける

花だにも常磐なりせばめかれましあくよ知られぬ松の色かな

霜雪にしぼまで年をふる松はたふとむべきの限りなりけり

里わかず家もえらばぬ緣にて世の民ぐさにまじる松かな

嶺松

かづらきや高まの山のみねの松雲に埋れて千代やへぬらむ

遠けれど近き友にもまさりけりいつもかはらぬ峯の松原

松風

園の内をみ山のさまにすみなせば人まつ風の吹かぬまもなし

琴とるも木の芽にるにも松風はかはらぬ友となりぬべらなり

社頭松

○あだ競べして　互に人を挑心ありと思つて。
○てらはぬ松　常綠であるからいふ。
○ゆたに　豐かに。
○めかれまし　目離れまし。見るのがいやになる意。

○里わかず云々　松は至る所の人里あらゆる家に生長する意。
○世の民ぐさ　世人。

○かづらきや高まの山　高間山は葛城山（大和河内の國境）中第一の高峯。

○人まつ風　人待つと松風とを掛く。
○木の芽にる　茶を飲む。

○あらゝ松原　疏らな松原。

○くしげ　櫛笥。

○年の内よりくる春　古今集春在原元方「年の内に春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ」

○松の尾も竹田云々　松尾と梅津は山城國葛野郡。竹田は紀伊郡。

○あし原のすぐなる國　日本國を指す。

○笹の葉を手ぐさに云々　古事記「手草結天香山之小竹葉云々。」手ぐさは歌舞する時手に執るもの。

おほかたの種ならめやは住吉の神と世をふるあらゝ松原

名所松

くしげよりなびきし雲も橋立の松の千代には障らざりけむ

松樹緑久

品たかく見えけるものは萬代をしめたる松の緑なりけり

天滿宮九百五十年聖忌奉納松添春色

雪のうちの松は色そふ春がすみたが上にかはかけて仰がむ

椿

梅もあれど年の内よりくる春のひかりを見する玉つばきかな

嶺椿

あしびきの山のたかねの玉椿月にはみがき日にはてるらむ

松竹梅

松の尾も竹田も春にかすみけり梅津の里は梅かをりつゝ

竹

あし原のすぐなる國にところえていくむら竹も生ひしげるらむ

笹の葉を手ぐさにとりし神代よりかはらぬ竹の緑すゞしも

おきふしになれて數多の年もへぬ言の葉かはせ窗のくれ竹

空しきを心となして世にたてる竹はものこそ思はざりけれ

しげれどもいぶせしといふ里もなし軒端に高き八十の村竹

十あまり八とせの公(きみ)の陰はあれどなほ此の君の若みどりこそ

名所竹

おひそめていくよ經ぬらむ深草や伏見の里の竹のむらだち

江菅

契りありて今日みしま江の玉小菅かさにぬふらむ後はたが笠

芝

草かずにあらずと何か思ふらむふじの高ねも芝生ならずや

芭蕉

うゑてこそ見るべかりけれ國つ民これも言葉の廣き芭蕉葉

苔

岩がねにむしける苔の種なれやをり〳〵おつる松のした露

ちる櫻おつる紅葉にあらなくに蹈まくをしき苔の色かな

海眺望

---

○おきふし　起臥。竹の縁語。
○言の葉　葉は竹の縁語。
○空しきを心となして　竹はうつろであるからいふ。
○八十の村竹　澤山の群れる竹。
○十あまり八とせの公　松をいふ。漢書江表「丁固夢ニ松生ズ腹上ニ。占者曰松字ハ文爲ス十八公ト。後十八年君其爲ル公乎。」
○此の君　竹をいふ。晉書王徽之傳「嘗寄ニ居空室中ニ。便令レ種レ竹。或問ニ其故ヲ。徽之但嘯詠指レ竹曰。何可ニ一日無ニ此君ニ。」
○今日みしま江　今日見しと三島江（攝津國三島郡）とを掛く。
○玉小菅云々　萬葉集卷十二「皆人の笠に縫ふといふありき菅ありて後にもあはむとぞ思ふ」玉小菅は菅の美稱。
○草かずにあらず　芝は草の數にも入らずつまらないもの。
○蹈まくをしき　新千載集春後德大寺左大臣「歸るさをいかにせよとて山櫻踏まく惜しき雪とふるらむ」

袖の浦の汐屋はるかに見渡せばたゞ空燒のけぶりなりけり

海神（わたつみ）のうへはときはに秋なれや野べの薄のほのなびく見ゆ

うみづらもみちくる汐の朝ぎよめ殘れる塵や小舟なるらむ

湖眺望

逢坂の關をこゆれば袖の上にさゞ波よせて浦風ぞふく

漁父

浦島が子のむかしをや思ふらむ老のなみよる磯のつり人

いさりする浦人いたく老いにけり龍のみやこの龜もつらずて

樵夫

なれぬればこれる妻木も重からで歌ひつれざる日はなかりけり

鏡

心さへうつろふものを增鏡すがたのみとも思ひけるかな

硯

手なれつる硯の海も心あらばわれによせなむ玉のひとつを

筆

月花のみやびをかはす御代なれば心のつかひ長くたのまむ

○袖の浦　羽前國西田川郡。
○空燒のけぶり　鹽燒く煙を形容す。袖の縁語。
○野べの薄　海上の白波を形容す。
○うみづら　海面。
○龍のみやこ　龍宮城。
○これる　樵れる。
○うつろふものを　映るのに。
○玉のひとつ　秀れた歌の意。
○心のつかひ　筆の異名。

船

かりそめの蘆の一葉の舟なれど幾世の人かわたしきぬらむ

橋

ゆく末もかへる都もとほつあふみ濱名の橋ぞうき渡りなる

山人もなほよに通ふ柴橋のみち一筋はかけもはなれず

いたづらに年へぬる身を我もしか思ひぞ渡る宇治の川橋

酒

思ふどちひとつ霞をくむがうちに花鶯のよとなりにけり

笹の葉の露ばかりだに足乳根のいさめしものを醉ひに醉ひつゝ

過酒をいましむ歌とて乞ひければ

菊の上の露ばかりをば重ねつゝくめば藥の酒とこそ聞け

傚大伴卿讚酒歌十三首

あら玉の年の始めに千代といひてとるさかづきの珍らしきかな

呉竹の嬉しきふしも憂きふしもまづ酒づきの影によりつゝ

みやびたる梅を浮べて汲む酒の匂ひをいつの世にか忘れむ

花のもと紅葉の陰にわきいづる酒の泉をくまざらめやは

---

○うき渡り　辛い渡場。うきに浮きを掛く。
○柴橋　雜木で作った橋。
○渡る　橋を渡ることと世を渡ることに掛く。
○霞　酒。抱朴子「到二天上一仙人以二流霞一杯一飲レ之」
○笹の葉の露ばかり　酒の少量。
○足乳根　親。
○菊の上の露ばかり　長壽を保つといふ菊花の露と酒の少量の意とを掛く。
○大伴卿讚酒歌十三首　萬葉集卷十三にある。
○呉竹の　ふしの枕詞。

ひさかたの月もかげさす杯をいかなる人かいなといふらむ

月の夜の舟とさしたる杯のあくるは惜しきものにぞありける

霜氷あられみだるゝ冬の夜に酒てふもののなかゝましかば

世の中の豊けきからに酒くみて酔泣きするが四方にきこゆる

み薬の長とたゝふる酒くみて酒くむ長となりにてしがな

若草のつまをみづほの新しぼりこゝの度まで重ねつるかな

みわすゑて祈れば神もうけひくは酒てふものの功ならずや

海にすむ小がめ大がめにたゝへつゝ酒はくむへし萬代までに

桑の田はよしかはるとも味酒の海としならば嬉しからまし

飲中八仙

知章

我が駒は船とも人のいはばいへ酔ひて眠ればとまりしらずも

汝陽

いすぐはし鯨なすまで呑むからに川もあせつゝ山もくえなむ

左相

小車を見ればともしも願はくは酒のいづみに道をかへてむ

---

○月の夜の舟こ　さしたるの序詞さしたるに棹したるこ杯をさす意こを掛く。
○あくるは　月夜があけるこ杯の中味がからになる意こを掛けたのであらう。
○み薬の長　漢書食貨志「鹽食肴之將、酒百薬之長、嘉會之好。」
○酒くむ長　大酒家。
○若草の　つまの枕詞。「つまを」までは序詞。妻を見つの意を掛く
○みづほの新しぼり　瑞々しい稲穗で醸した新酒。
○こゝの度云々　九杯も飲んだ。妻こあるから三々九度の意を利かした。
○みわすゑて　神酒を奉って。
○小がめ　小龜こ小瓶(小徳利)こを掛け、龜は酒を好む意を含ます。
○萬代　龜の緣語。
○桑の田はよしかはるこも　劉廷芝詩「已見松柏摧爲レ薪。更聞桑田變成レ海。」
○いすぐはし　鯨の枕詞。
○鯨なすまで　鯨が海水を飲むほごまでも。
○川もあせ云々　川水も干てしまひ山も崩れるたらう。
○こもしも　羨ましい。

宗之

ひさかたの月人男いざささむ我がとりもてる玉のさかづき

蘇晉

世の中の友はもとめじゑにかける彌勒も酒の友にしありけり

李白

君めせどなほ大舟のゆくら〳〵仙人さびて酒のうちにをり

張旭

わが髮はみふでの林雲のごと煙のごとくおもしろの世や

焦遂

醉泣きになくは世の常われはもよ舌のよゝみも忘らえにけり

玉

玉といふ玉の中にも玉の緒のながきにまさる寶やはある

おほかたの花貝だにも嬉しきを拾ひてけりな磯のしらたま

七車てらすといふもみがきたるひとつ心の玉にしかめや

槌

みな人の心ひとつの槌よりぞ千々のたからはうち出すらし

---

○とりもてる　手に取り持つてゐる。
○彌勒　未來に出現する佛。
○君めせど　君より仕へよとの御言あれど。
○大舟のゆくら〳〵　大舟の如くゆら〳〵と。萬葉集卷十七「母のみことの大船のゆくら〳〵にした戀ひにいつかもこむと待たすらむ」
○仙人さびて　仙人らしく。
○われはもよ　もよは歎詞。
○舌のよゝみ　俗にろれつのまはらぬこと。
○玉の緒　命。
○花貝　櫻貝。
○しらたま　眞珠。
○七車　澤山の車。萬葉集卷四「戀草を力車に七車積みて戀ふらくわが心から」
○みがきたるひとつ心　一つの錬磨した心。
○槌　打出小槌。人間が色々珍らしいことを考へ出すこと。

身にこもる千々の寶のつきせぬはこや天つちの惠みなるらむ

鞠

あしのはにかけて遊べば津の國のなにはの事も思はざりけり

旅

都いでて今宵ぞ旅のにひまくら露も嵐も心あらなむ

われゆけば又あふ人もなかりけりあはれと思へうつの山松

都よりともなふ月もかくろひて一人ぞみつる木曾の中山

旅はたゞつかれの鳥の心ちして草にのみこそ假枕すれ

別

とゞめてもとまらぬ袖に旅衣ぬひてきせつる人さへぞうき

逢坂の關の清水にぬれし袖かわかぬ程のわかれともがな

山家

みやこ人今はとふとも山藍のよにそみぬべきわが心かな

山里にいほり二つはむすばねど月見むための峯の柴がき

月花をやがてみ山の暦にてのどけき年を送り來にけり

山家苔

---

〇身にこもる千々の寶　人の心の秀れたものを指す。

〇あしのは　蘆の葉と足の端とを掛く。

〇津の國の　なにはの緣語。

〇なにはの事　難波と何の心にかかる事との意を掛く。

〇心あらなむ　同情してほしい。

〇われゆけば云々　伊勢物語「駿河なる宇都の山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」宇都の山は駿河國安倍郡。

〇かくろひて　隱れて。

〇つかれの鳥　疲れた鳥。

〇山里にいほり二つはむすばねど　新古今集冬西行法師「寂しさに堪へたる人の又もあれな庵ならべむ冬の山里」

〇月花をやがてみ山のこよみにて　山中暦日なしであるから、月と花とをそのまゝ暦代りとして、月日を知る意。

露の間と思ひいりにし松の門苔むすまでに年をへにけり

山家水

かりそめの柴の庵はむすびにき岩井の水のあるにまかせて

山家雲

樫の實の獨りのみにもあらざりき軒端の雲の宿るおもへば

田家

もゝとせに餘る翁もありと聞く田づらの里は住みよからまし

賤がすむ田づらの里の笹ぶきは假初ながら幾よへぬらむ

田家祝

やそつゞき年豐かなる小田の家に鳥の尾ながく牛は肥えたり

閑居

文机(ふづくゑ)によればしづけき石硯かきならしつゝ今日もくれけり

閑居松

文机の塵と積れる言の葉をなれし軒端の松はしるらむ

閑居水

くみあぐる釣瓶の雫しばらくは音をのこすも寂しかりけり

○露の間　短日月。
○松の門　山住の人家。
○樫の實の　獨りの枕詞。
○笹ぶき　笹葉で葺いた家。
○やそつゞき　八十つゞき。何年も續き。
○塵と積れる言の葉　澤山の歌。

幽居

世ばなれし庵の門にも竹馬のむかしの友はなほひかれけり

さゝがにの絲一筋はよきてこそ友まつの戸の塵拂ひつれ

林下幽樂

大あらきの森の陰にはあらねども隠れぬ草の庵しづかなり

朝鳥の立ち出しあとの木の下は我が身一つの塒なりけり

貫之

土佐の海の浪のはてまで言の葉の玉つみし舟のふな君ぞこれ

貫之交野花見のかた

年をふるなぎさの櫻春ごとに今日のまとゐや思ひいづらむ

義家朝臣名古曾關をこゆるかた

散らさずばことばの花も散らざらむ關の嵐は心ありけり

壽老

末遠く生かまほしとぞ祈らるゝ思ふことなきみよに住へば

尉と姥のかた

今よりの千年を猶や契るらむことの葉かはす二本の松

○ひかれけり　訪るゝ意。ひくは馬の緣語。
○さゝがにの絲一筋はよきて　蜘蛛の巣一筋をば避けて。古今集卷二十「わがせこが來べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」
○友まつの戸　友を待つと松の戸とを掛く。
○大あらきの森　山城國乙訓郡。古今集雜讀人不知「大あらきの森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」
○朝鳥　早朝塒を出で行く鳥。
○言の葉の玉　秀歌。
○ふな君　土佐日記の語を採った。
○なぎさの櫻　河内國北河内郡。此の歌伊勢物語による。
○散らさずば云々　千載集春源義家朝臣「吹く風をなこその關と思へども道も狹に散る山櫻かな」
○ことばの花も散らざらむ　義家があの名歌を詠めなかつたであらうの意。
○二本の松　尉と姥を指し葉は松の緣語。

萬歲の贊

山彥もこたへするまで萬代のしらべぞ高き君が代の春

翁のかた

うちとけし聲きく時はおのづから心も春になる瀧の水

三番叟

みな人の齡をのべのこゝちして世にめづらしき鈴蟲のこゑ

賴朝ふし木がくれ

かゞやくや鎌倉山の秋の月木がくれたるは宵のまにして

義家弓流のかた

かすかなる弓張月にひきかへて流るゝ名こそかゞやきにけれ

宮島にて經政奇瑞の圖

月清み波のしらぶる聲すれば神もふること思ひいづらむ

備後三郎櫻木にものかきたるかた

今も世に匂ひけるかな花の雪に跡つけたりしうぐひすの聲

藤戸の渡の圖

なみならぬ名をたててしも我からと藻にすむ蟲のねをやなくらむ

○うちとけし聲　親しみのある聲水の緣語。
○春になる瀧の水　春らしく陽氣になる意と鳴瀧(山城國葛野郡)とを掛く。
○齡をのべの　齡を延べと野邊とを掛く。
○鈴蟲のこゑ　三番叟の持てる鈴の音をいふ。
○ふし木がくれ　うつろの木の中に隱れた話。
○秋の月　賴朝を指す。
○宵のまにして　短日月の間だけであつた意。
○義家弓流　義經の誤りであらう
○ひきかへて　「ひき」は弓の緣語とは反對に。
○流るゝ名　後世に傳はれる名。弓流の緣語。
○かゞやきにけれ　「かすかなる」に對す。
○しらぶる　調子よく音を立てる
○うぐひすの聲　天勾踐云々の文句を指す。
○なみならぬ名　並々ならぬ名。「なみ」に「波」を掛く。
○我からと云々　古今集戀典侍藤原直子朝臣「蜑のかる藻にすむ蟲の我からとねをこそなかめ世をは恨みじ」我からは身自らの戀と蟲の名とを掛く。

佐々木梶原

柴舟はとくさしこして網代木にいさよふ紅葉おくれけるかな

西行白がねの猫もちたるかた

墨染の袖にふさはぬそらだきを拂へば不二の煙たつなり

仁和寺和尚かなへかぶりのかた

戯れもすぐればかくぞあしがなへ心にすゑて見るべかりける

伯藏主のかた

狐川みづのよどまで行くべきをうたてにほへる浮草の花

うずめの命のかた

岩戸あけしうずめの命いまはまた家にこもれるおたふくの神

伊勢龍門瀧みるかた

布さらす山姫のみや知りつらむ言葉の玉のかゝるちぎりを

紫式部石山にて源氏つくるかた

なつかしきそのおも影や殘るらむ月と波とのあはせかゞみに

清少納言簾をかゝげて雪みるかた

玉簾かゝぐる袖のそらだきに匂ひあひけむ峯の白雪

---

〇いさよふ　ためらふ。萬葉集卷二「ものゝふの八十氏河の網代木にいさよふ波のゆくへ知らずも」

〇ふさはぬ　ふさはしくない。
〇そらだき　空薫。

〇あしがなへ　惡しと足鼎とを掛く。
〇すゑて　足鼎の縁語。
〇伯藏主　狂言「こんくわい」に「彼がをぢ坊主に白藏主と申してござるほどに、これに化けて參つて云々。」
〇狐川　山城國乙訓郡。
〇うたて　怪しく。
〇おたふくの神　天の鈿女命であるといふ。

浮舟君のかた

雪の夜の空に有明の月のみやこのうき舟のはてには知るらむ

雪中常磐子のかた

松の葉もしばし操のかくるゝを雪のしたにや思ひとりけむ

四君子の賛

君子（みやびを）の名はひとつにぞ薫りける草木も竹もけぢめこそあれ

四睡のかたに

悟れるはたゞ緣子のかたはらに心もおかで虎ねぶるなり

虎溪三笑

山蜂の巣をもる心あくがれて思はぬ世にも出でむとやせし

張良のかた

ふみ見ての後に思へば沓こそはわが冠のはじめなりけれ

唐畫にとまり舟ありて烏とぶかた

月おちて烏なくてふ唐うたもこゝろにうかぶとまり舟かな

寶船のかた

もゝちゞの寶をつめる大船はとゝのふ家の風にこそよれ

○うき舟　憂きと浮きとを書く。

○操のかくるゝ　雪のために松の葉の埋れて見えないことをいふ。

○四君子　蘭、菊、梅、竹。

○けぢめこそあれ　區別はあるけれども。

○虎溪三笑　廬山記「慧遠法師送レ客過二虎溪一。虎輒鳴。送二陶元亮陸修靜一與語。道合。不レ覺送過二虎溪一因大笑。世傳二三笑圖一。」

○沓こそは云々　張良が下邳の圯上で跪いて老父の履を進めて後、王者たる書を授けられた故事。冠は王位の意。

○月おちて云々　唐の張繼の楓橋夜泊「月落烏啼霜滿レ天。江楓漁火對二愁眠一。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到二客船一。」

○うかぶ　舟の緣語。

○もゝちゞ　百千々。澤山。

○秋ごとにかけて云々　七夕には梶の葉に願ひごとを書いたのでいふ。

○よしみね　遍昭の俗名は良岑宗貞。

○かた野の櫻小野の雪　伊勢物語中にある物語を下に置く。小野は山城國愛宕郡。

○高くしらべし山風　古今集秋文屋康秀「吹くからに秋の草木の萎るればうべ山風を嵐といふらむ」

○君がみし影云々　古今集雜「鏡山いざ立ちよりて見て行かむ年經ぬる身は老いやしぬると」此の歌は大伴黒主の歌であるといふ。鏡山は近江國蒲生郡。

○小野山の神　小町を指す。小野山は愛宕郡。

○六くさの中の玉かづらなる　六歌仙中の一女性である意。

○うぢ山を云々　古今集雜喜撰法師「我が庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり」宇治山は山城國宇治郡。

---

梶の枝に鞠あり

秋ごとにかけて手向くる鞠の數そらに數へて星やしるらむ

六歌仙

僧正遍昭

よしみねのよしと仰がれし月は猶あまねく照らせ萬代までに

在原業平

袖ふれしかた野の櫻小野の雪よろづ世ふとも猶にほふらむ

文屋康秀

とほつ世に高くしらべし山風の聲は草木になほのこりつゝ

大件黒主

君がみし影しのこらば鏡山ちたび八千たびたちも寄らまし

小野小町

小野山の神もやしばし世に出でて六くさの中の玉かづらなる

喜撰法師

うぢ山を心のうちにながむればはるかに照らすありあけの月

近江八景

辛崎夜雨

吹く風の色は梢にくれそめて雨になりゆくからさきの松

石山秋月

秋にすむ水海とほくてる月を石山寺にたれか見るらむ

三井晩鐘

つり舟はかへさ忘るゝ夕なぎにひゞくや三井の入相のかね

矢橋歸帆

ものゝふの矢橋もやすき浦波にうたひてかへる千舟百船

粟津晴嵐

海づらも粟津の松のみどりにて雲をのこさぬ夕あらしかな

勢田夕照

旅人や勢田のながはし急ぐらむ都はちかし日はかたぶきぬ

北良暮雪

みねつゞき暮るゝ夕日のよそめにも紛ふ色なき比良の雪かな

堅田落鴈

霧深きあした夕にくる鴈も思ふかただに違へざりけり

---

○ものゝふの　やの枕詞。

○思ふかただに　思ふ方と堅田とを掛く。

六所玉川

山城

駒なべていざ見にゆかむ蛙なく井手の川べの山吹の花

攝津

卯の花の咲きそめしより白波のよるこそなけれ玉川の里

近江

秋萩の花の影さへにほふなり濡れて渡らむ野路の玉川

陸奥

陸奥の野田の玉川たまにきて汲まむとすれば千鳥なくなり

武藏

玉川の里の松風さえ〲て夜は月をもさらすなりけり

紀伊

高野山水の心はしらねども玉といふ名のきよげなるかな

十二支

子

かずしらずさかゆく家の鼠の子大國ぬしやまもりますらむ

○駒なべて云々　古今集春讀人不知「駒なべていざ見に行かむふる里は雪とのみこそ花は散るらめ」なべてはならべて。
○よるこそなけれ　寄ると夜とを掛く。卯の花の白さで夜も白々とするのでいふ。

○さらす　玉川の里で産する布の緣語。

○さかゆく　榮え行く。
○大國ぬし　佛敎守護神の大黑天を大國主命に附會し、鼠は其の使獸である。

丑

食國(をすくに)の民をばたすくあらすきの功ある身をうしといはめや

寅

虎をしも手飼になしてとこしへにすむ人ありと聞くはまことか

卯

つく〴〵と思へば月の中にすむ兎はよゝの友にしありけり

辰

潛みても遂にはたつの名にしるく天つ雲間にあらはれにける

巳

故郷の垣ねに殘るくち繩の名にあふからや身にはしむらむ

午

天ざかる鄙の牧よりひかれきて身をかざり馬いかゞ思へる

未

世の中にひつじのあゆみ思ふべし心すべしやたれかのがれむ

申

平らなる世にたち出でて木葉猿(このはざる)このはにはあらぬ衣かづくなり

---

○食國　天皇の治め給ふ國。
○あらすきの功　疎鋤きの功。牛は田を耕すのでいふ。古今集戀讀人不知「荒小田をあらすき返し云々。」とある。
○うし　憂しを掛く。

○たつの名　名が立つ意と辰の名とを掛く。

○くち繩　朽繩と蛇とを掛く。朽繩は朽ちた身の意。

○天ざかる　鄙の枕詞。
○かざり馬　飾馬。唐鞍の飾りを附けた馬。
○ひつじのあゆみ　死に近づくこと。摩訶摩耶經「如下旃陀羅驅レ羊就二屠所一歩々近中死地上。人命疾レ於是。」
○木葉猿　體の小さき猿といふ。

○鳥も空ねは云々　孟嘗君の故事による。

○かるもかき　枯草を掻き集めて臥す。

○我が上に云々　新古今集戀家隆朝臣「ふじのねの煙も猶ぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり」

○我とや　「と」は「といへども」の意。やは嘆辭。

○玉も瓦も　非凡人も凡人も。

○秋の夜の長くありへて　秋夜の如く長く生きながらへて。

酉

つかへにと出で立つ道の正しきに鳥も空ねに名のらざりけり

戌

おのづから戸ざし忘るゝ世にあひて門守る犬ものどけかるらし

亥

かるもかき伏猪の牀の夢のまもたけき心はゆるさざりけり

述懐

我が上におもひあるこそ怪しけれ不二の煙もたたぬ世にして

おろかなる我とや人に劣らめや君につかふる心ばかりは

懐旧

忍ぶればしのぶ心にかへりきて過ぎもはてぬは昔なりけり

ふりぬればふるきを忍ぶ友なれや玉も瓦もおなじ心に

夢

さめてまた現にみゆる夢こそは荻の風にも障らざりけれ

秋の夜の長くありへて同じくは五十の夢をふたゝびも見む

無常

世の中のつねなき風は目に見えて折々人をおどろかすらむ

橿(かし)の實の二つなき物をいかにしてかくはかなくも結び初めけむ

髑髏の畫に

わかなつむ少女も思へ野ざらしはやがてその身の姿ならずや

釋教　水

その上(かみ)の雪のみ山のしたゞりを結ぶに消えぬ罪なかるらむ

鷲の尾の山下とよみゆく水を空しと說ける聲かとぞきく

六祖舟にのりたる處

波羅密の時來れりとさす舟のあとのみなとにさわぐしら波

誕生釋迦

ひむがしにかく流れよと法の水龍王(たつのきみ)しもそゝぎそめけむ

出山釋迦

雲ふかきみ山を月のいでしより闇しらぬよとなりにけらしも

涅槃釋迦

古の鶴の林のもみぢ葉はちるぞめでたきいはれなりける

地藏尊を新たに作りて開眼の供養に

---

○目に見えて　人の死ぬことを指す。
○おどろかすらむ　目をさます意を掛く。
○橿の實の　二つの枕詞。
○二つなき物　命。
○野ざらし　髑髏。
○その上の雪のみ山　釋迦が仙人に仕へて雜行した山。
○したゞりを結ぶ　佛敎を信ずる意。
○鷲の尾の山　印度の靈鷲山。
○六祖　布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。
○波羅密　生死の境界を離れて涅槃の彼岸に達すること。
○ひむがしにかく流れよ　佛敎東漸をいふ。
○雲ふかきみ山　迷へる世界を指す。
○鶴の林　釋迦入滅の時、沙羅雙樹の葉の色が、鶴の白毛の如く、忽ち白色に變じたことをいふ。

おなたふとあな頼もしや無垢の地に隠れいますもあらはれにけり

柿本社

石見のや高津の山のみねの雲かけて仰がぬ日はなかりけり

春日社

かすみたつ三笠の山にさく藤の長閑けき色ぞ世にこぼれける

稲荷社

いなり山みつの玉垣みつながら人をへだてぬ光さすらし

北野宮の萬燈會に

不知火の筑紫にはあらぬ神垣につらねてともす光をぞ見る

神祇

たちばなの小門（をど）の汐せの底筒男（そこつゝを）たのむこゝろも千尋なりけり

うちなびく一もと薄ことのはのみちにも仰げ八千矛の神

廣前にかけてくもらぬます鏡いやます／＼に仰げもろびと

神如在

誠もて祭らば神はいますべし七つ緒やつ緒よしひかずとも

大嘗會の夜に

○無垢の地　成佛の境界。
○石見のや高津の山　石見國美濃郡。高津は人麿終焉地。
○みつの玉垣　三つの玉垣。後拾遺集神祇惠慶法師「稲荷山みつの玉垣うちたゝきわがねぎごとを神もこたへよ」
○みつながら　山城國紀伊郡の稲荷神社の祭神の三社をいふ。
○人をへだてぬ光さすらし　洽く人を照らす。
○不知火の　筑紫の枕詞。
○たちばなの小門　筑前國筑紫郡神功皇后征韓の時、神教を乞はれた所、住吉大明神が御名を顯はされたといふ。
○底筒男　海路の神。釋紀「於日向國橘小門之水底所居而、水葉稚之出居神、名表筒男中筒男底筒男神之有也、時得神語隨教祭之、然則此神本在筑前小戸、卽神功皇后初遷居於墨江耳。」
○八千矛の神　大國主神。
○ことのはのみち　和歌の道。
○かけてくもらぬ　少しも曇らない。「かけて」は鏡の緣語。
○七つ緒やつ緒云々　東遊「七つ緒の八つ緒の琴を調べたる云々。」

悠基主紀（ゆきすき）の宮にしめゆふ小柴垣一重あなたや神代なるらむ

武威

おほ神のいはへる國のますらをの矢先に向ふ仇あらめやは

神國の威光人の智仁勇あるをおぢ憚みて夷船どもはかへりしさまなれば

ことほぎの歌をと人の乞へるに

鳥の跡も横ばしりする夷らがすぐなる國にむかふべきかは

鳴神の音にきこえし國にきてかしこさ知らめえみしらがとも

日の本に及ばぬ市のねがひかな命ひとつをうるものにして

葦原の風に向へるえみし草ふすより外はあらじとぞ思ふ

えみしらが跡をきよめて相模潟みちくる汐にうたふ舟びと

武運長久

治まれる世にも忘れぬものゝふの八十の街のながくひさしも

八幡山雲のはたても豐かにてとほくさかゆくものゝふの道

六十賀

里につく六十の杖に千世の坂こゆべきふしもかねて見ゆらむ

ともなへる軒端の松ももろともに若がへりたる色は見ゆらむ

〇一重あなた云々　神威あたりに充滿する心持を現はす。

〇おほ神のいはへる國　神々の守護し給ふ日本國。

〇鳥の跡も横ばしりする夷　横書をする異邦人。

〇すぐなる國　正道を踏む日本國「すぐ」は「横」に對す。國文は縱書である意も含む。

〇鳴神の　雷神の如く。

〇命ひとつをうるものにして　生命を犧牲にする意。うるものは市の語に關係す。

〇葦原　日本國を豐葦原千五百秋瑞穗之地とか葦原瑞穗國とかいふ。

〇相模潟云々　鎌倉の北條方の兵士どもをいふ。

〇ものゝふの　八十の枕詞。

〇八幡山云々　古今集雜讀人不知「今こそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを」八幡山は山城國の岩淸水男山八幡宮。

〇雲のはたて　雲の涯萬里までもの意。

〇さかゆく　榮えゆく。

〇ふし　杖の緣語。

〇ともなへる軒端の松　今まで共共に生き長らへた軒の松。

六十一賀

六十あまり一つはやがて萬代の始めといはふ宿のたのしさ

すゑ遠き百世も千代もくれ竹のこの一ふしにしるけかりけり

七十賀

七くさの寶といふもしかじかし千年にゆらぐ玉の緒なれば

八十賀

みかどにも杖ゆるさるゝ年をへて終に千年の坂もこゆらむ

祝

ますらをの手にまく鞆の浦にても波たたぬ世をしるべかりけり

葛城やくめの岩ばしかけはてて苔むすまでもみ代は動かじ

鶴龜の千年へよかし國つ民おのが寶の身をまもりつゝ

山川もよりてつかふる我が君に誰かは千代を貢がざるべき

寄天祝

月と日の神の心をあはせたる天つみ空のくもりあらめや

寄日祝

くもりなくてり渡るらし日のみ影天地人のあらむかぎりは

○萬代の始め　六十一の祝は還暦の祝であるからいふ。
○七くさの寶　金銀等の七寶。
○玉の緒　命の意。
○みかどにも杖云々　鳩杖を許される八十の年をいふ。
○手にまく鞆の浦　手に纏く鞆と鞆の浦（備後國沼隈郡）とを掛く。
○くめの岩ばし　これまではかけはてての序詞。大和國葛城山の一言主神の故事に基づく。
○かけはてて　國を建てる意。
○山川もよりてつかふる　萬葉集卷一「山川もよりて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せすかも」

寄神祇祝

なびかざる草木はあらじ君が代の惠みの露に伊勢の神風

うま酒のみわの神杉いくひさと君をぞ祝ふ三輪の神杉

寄國祝

天地とたちわかれけむ始めありてはてなきものや蘆原の國

鶴(たづ)舞ひて龜遊ぶなる秋津洲は千年すむともすみあかざらむ

寄道祝

人も我も千世の古道たちかへり正しき跡をふまむとぞ思ふ

寄劍祝

神代よりはきそめまして身をさらぬ太刀こそ長き守りなりけれ

寄書祝

をちこちの友も日ぐらし文車の唐やまと書(ふみ)つむがまに〳〵

寄松祝

たが宿の松にも千代は見ゆれども主人がらこそ色まさりけれ

萬代のこゑたかさごに聞ゆなり神代の風や松にふくらむ

とほつ親のいつの子の日にいくよとか祝ひてうゑし軒の高松

○うま酒のみわ　うま酒のはみわの枕詞。三輪山は大和國磯城郡。その麓に大神(おほみわ)神社がある。

○いくひさと　幾久しく。

○唐やまと書　和漢の書籍。

○たが宿の云々　後拾遺集春和泉式部「我が宿の櫻はかひもなかりけり主人がらこそ人も見に來れ」主人がらは主人の人格

○こゑたかさご　聲が高くの意に山の意を掛く。

○とほつ親の云々　此の歌「い」文字を句の初めに三句までおいてある。

○いくよとか　千代萬代にとの意。

寄竹祝

九重のうてなの竹をはじめにて直（すぐ）なる國におひしげるらむ

寄鶴祝

仙人（やまびと）のすみかはなれぬ白鶴も君が御代にはむれていづらむ

寄龜祝

千尋ある水底よりも通ふらし君をともなふ龜のこゝろは

新婚祝

雛鶴のあそぶかげをもやがて見むゆたかにたてる相生の松

元服祝

けふ更にたちのびてこそ見えにけれ千代をしめたる園の若竹

仙家

我が山は千年の友をあまたにて鶴のゆきかひたゆる日もなし

蓬萊山

心をばこゝに遊ばせて生藥（いくぐすり）とらばとらなむ龜のうへの山

五常の歌と或人のこひければ

人の上に知らずしてやはありぬべき松も五葉の色ぞ常なる

○九重のうてなの竹　清涼殿の御庭には河竹と呉竹とが二所に植ゑてある。
○直なる國　竹はまつすぐであるから、竹の緣語。
○たちのびて　大人らしい意。
○千代をしめたる　千代を籠めたると同じ。
○千年の友　鶴を指す。
○龜のうへの山　龜山と同じで蓬萊山。
○五常　仁義禮智信。

壽

心だにむなしかりせば呉竹の千世も八千世も重ぬべらなり

心靜延壽

松により竹にむかひて靜かなるこゝろくらべは幾世なるらむ

世治文事興

とりどりに歌ひつれけり君が代の文のはやしの木こり柴人

幸逢太平代

手折りきて長閑にかざせ春秋の花も紅葉も御代のたまもの

君が代にあひづの里も西のうみの海士が磯屋も賑ひにけり

# 長歌部

詠鶯聲和琴歌并短歌

宵のねの　ながき春日に　窓の内に　一人しをれば　老人は　ねぶりぞすゝむ　眠らむも　あやなきわざと　琴とりて　かきならすれば　はしきやし　鶯なきて　おのづから　しらべ通へば　琴とらぬ日は　なかりけり　鶯は　いかなる鳥ぞ　山深き　谷に生まれて　かくの如（ごと）　風流（みやび）みやび　かくのご

---

○心だにむなし　野心慾望を持たず、心の平靜の意。

○あひづの里　あふ意と東北の會津の里(現今の會津市)とを掛く。

○宵のねの　長きの枕詞。

○あやなきわざ　甲斐のないこと

○はしきやし　愛らしい。

○しらべ通へば　琴の音と鶯の音と相通へば。

○老　老人。
○しが爲に　鶯の爲にの意。
○篠竹を窗にうつさむ　鶯の宿なる篠竹を窗近く植ゑる意。
○今ゆをち　今後ゝ
○むらぎもの　心の枕詞。
○すさめよ　慰めよ。
○言靈の幸ふ國　日本國の稱。萬葉集卷五「そらみつやまとの國は皇神のいつくしき國言靈の幸ふ國云々。」こもある。上代人が言語の妙味を讃仰した語である。
○言靈の玉ひろふめり　秀歌を作る意。
○もしほ草　かきの緣語。
○かきさぐれども　色々こ歌を詠むけれごの意。
○やさしみ　恥かしく思ひ。
○はかる　欺く。
○いよ簾　伊豫產の簾。
○かくろひし草の奥　浮世から身を隱した草廬。
○うづら衣　鶉衣。つぎはぎした衣。
○翡翠の髮の　川蟬は羽毛が美麗であるから、美しい髮の毛の形容にする。これは靑柳の形容。

と　情をしりて　老をしも　すてざりけりな　しが爲に　梅をうゑそへ　篠
竹を　窗にうつさむ　今ゆをち　契りたがへず　琴とらば　必ずとひて　む
らぎもの　心すさめよ　春の鶯

琴とれば鶯きなくうぐひすのこひしき時に琴はとらまし

詠閑居秋來歌幷短歌

言靈（ことだま）の　幸ふ（さきは）國の　安御代に　生まれあへりと　人毎に　きそひたてつゝ
言靈の　玉ひろふめり　我はしも　其の白玉の　一つだに　いかで〳〵と
浦にいで　渚にたちて　もしほ草　かきさぐれども　とり拾ふ　玉しなけれ
ば　愚かなる　身をばやさしみ　竹の戸を　さし固めつゝ　獨りのみ　なが
むる程に　八重葎　所え顏に　おひ茂り　をぐらき窗を　打ちたゝく　音こ
そすなれ　あやしきや　誰かはとはむ　野狐や　我をはかると　いよ簾　か
かげて見れば　秋こそは　立ち來にけらし　草に木に　夕風さわぎ　ふき亂
す　露ばかりこそ　しき妙の　衣の袖に　玉はかけつれ

かくろひし草の奥にも尋ねきてうづら衣に秋風ぞふく

詠鷹飼長歌幷短歌

春山の　霞のほらけ　ほの〴〵と　明くる空より　さほ姫の　翡翠の髮の

青柳の　陰たちならし　片岡の　梅の花毛も　香に匂ふ　こなたかなたに
たつとりの　小鳥とりかけ　ゆくみちの　松に木居とる　紫の　藤府よびす
ゑ　雲雀毛の　よりかずかぞへ　一昨日も　昨日もけふも　菫さく　野邊に
遊びて　ほうじやうの　毛の永き日も　くれ方の　春にしなれば　わすれが
ひ　餘波(なごり)ぞ多き　とやいりの　卯月きぬれば　年毎の　八日藥師の　日を數
へ　藥の水や　手習の　いしもとらせつ　夏飼の　とやくらげなる　五月雨
も　餌をゑがひつゝ　武夫の　母衣毛(ほろけ)おふれば　初秋の　風うちふけば　す
すき毛に　小鈴とりつけ　足びきの　山口まつり　ま草かる　野べにはなせ
ば　おも白き　左羽右羽　ひともとり　こもつちごへの　こまかなる　羽づ
かひするに　人も犬も　空を見するゑて　落草の　かげをぬすたつ　きじ鶉
かけもてくれば　小山田の　稻葉の波を　たちはしる　兎も得たり　いざ子
ども　しばしいこへと　ゆふづく日　さすや岡べの　松かげに　小柴をりし
き　もたらしし　瓢の酒を　とり〳〵に　汲むぞ樂しき　冬されば　時雨ふ
る日も　木枯の　寒きあしたも　うちつけに　かり杖ほうし　白栲に　雪ふ
る道を　狩衣　はる〳〵きぬる　小汐山　かひある時と　交野ゆく　天の河
原に　鳥いかだ　稀に見てしは　むらぎもの　心にのりて　忘れかねつも

〇藤府　鷹の胸にある斑か、藤の花の咲けるに似たるもの。
〇雲雀毛　黄白まじれる色。
〇よりかず　寄數で集まつた數の意か。
〇ほうじやう　毛蟲をいふか。
〇わすれがひ　永き日も忘れる意忘貝と餘波とは緣語。
〇とやいりの卯月　とやとは夏の末から鷹の羽が脫け落ちて、冬に及んで生え整ふこと。卯月に羽脫け初めであるからとやいりといふ
〇八日藥師　藥師如來の緣日は每月八日。
〇手習のいし　いしに石と醫師とを掛く。
〇ゑがひつゝ　餌をやつて飼ふ。
〇武夫の　母衣の緣語。母衣は矢を防ぐ爲武士の背中に負ふもの。
〇母衣毛　鷹の左右の翼「ほろば」ともいふ。
〇すゝき毛　薄のやうな毛であらう。
〇山口まつり　山口祭をいふ。獵の時に、その山の入口で山の神を祭る。
〇ひともとり　一戾りであらうか
〇こもつちごへ　鷹詞の一つで、一說に「下より飛び上り、峯に沿ひ一文字におもへ越え下るゝをいふ。」とある。
〇落草　鷹が鳥を追ひ落した草原
〇ぬすたつ　鷹に追はれて草の陰に隱れた鳥がひそかに起ち逃げる

○ゆふづく日云々　古今集讀人不知「夕づく日さすや岡邊の松の葉のいつともわかぬ戀もするかな」
○かり杖　狩杖。鷹狩の時鳥を追ひ立てる杖。
○ほうし　大犬。
○白栲に　眞白に。
○狩衣　「き」の枕詞。
○はる〴〵　狩衣の縁語。伊勢物語「唐衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵きぬる旅をしぞおもふ」
○小汐山　小鹽山。山城國乙訓部。
○交野ゆく天の河原　伊勢物語を下心においてある。天の河原は大和國北河内部。
○鳥いかだ　天鳥船の類であらうか。而して「稀に」の枕詞か。

# 千々廼屋集 終

# 草徑集

大隈言道

# 草徑集序

おのれ若かりし時よりよみおける歌共を、こたび板にゑりなむとするに、おのれが筑紫にはいと歌人多く、其の中にはすぐれたる人も少なからぬを、あながちによそにしられむの心なくて、板になど物する人少なし。さるをおのれ、近頃此の難波に來りて、こゝの友達、歌集など物するついで、おのれも亦せまほしくなりて、かくみだりがはしくかいつめたれど、もとより寛しき歌あるべうも覺えねど、世の大人がた稀にも目とゞめ給ふがあらば、一歌にても取るべきは取り、捨つべきは捨て給はらむこと、今更いふべきにあらず。をこなる人まねにこそ。文久三年亥正月二十日自記。

大隈言道

○かいつめたれど　書き集めたれど。

# 草徑集

清原言道

## 上卷

春日

長閑なる日にこぼれてや浮ぶらむまさご流るゝ春の川岸

歸雁

かへる雁かへりて春もさびしきに童の拾ふ小田のこぼれ羽

鶯

いや高くなるかと聞けば鶯の木の下音にもねをかへて鳴く

春雪

花もまたかく咲かむとの程みせに積るか枝の初春の雪

梅

梅の花さける宿さへとざしけりをざゝの里の春の朝北

○程みせに　程度を見せるために

○朝北　朝吹く北風。

水邊梅

川水もそなたによりて流れゆく梅の木陰のなつかしきかな

荒村梅

里人はさかりもめでず咲く梅も荒れたるまがき草むらのうち

水上落梅

ちりしける氷とけても梅の花ところもかへず浮びぬるかな

里霞

けさみればなびく霞のおのれからかゝげて見する高宮の里

春夢

おもしろき梅の下枝の見えこしを折りしや知らずさむる夢かな

まどろめば野を近づけて枕邊にあるこゝちするすみれ早蕨

夜梅

暗き夜はをちの梅が枝思はずも臥屋の窓にきぬる香ぞする

爪木

きられつることも覺えず爪木さへこのめ春には逢ふ心地かな

二月

○ちりしける冰とけても　二句顚倒して見る。

○かゝげて見する　高宮の高き緣がある。

○高宮の里　筑前國筑紫郡。

○このめ春　木の芽の萌える春。

になはれてゆく梅さへもさかりなる京の春の二月の空

折椿

うつろはぬ色のみ見せて玉椿こぼるゝ花を折らせつるかな

雲雀

人にのみ子を思はせて夕雲雀うはの空にはいかで鳴くらむ

春日

はしゐして身をまかせたるゐねぶりを心得がほに照らす春の日

土筆

雨ふればながるゝ庭の水よりも頭いでたるつくづくしかな

雉子

春來てはめづらしき野のきゞすかなその一聲を幾聲もせよ

野邊行人

うちわたすをち方人の道おそく行きはつまじき野の景色かな

蕨

こゝにもと人にいふ間にさ蕨のありかうしなふ春の野邊かな

野外小流

○人にのみ子を思はせて　夕雲雀の聲を聞いて我が子をなつかしく思はせる意。
○うはの空　虚空の意と心の落ちつかない意とを掛く。
○はしゐして　端居して。
○身をまかせたるゐねぶり　居眠りに溺れた狀態。
○うちわたすをち方人　かけ離れた遠方の人。

○手をひたすらに　手を浸すこと只管にことを掛く。

○空のものにて　空間で。

○たわらは　赤兒。

○ひさごさへふるに音せぬ　瓢簞をふつても酒が盡きたので音を立てない意に春雨の降つても音を立てない意を掛く。さへは春雨が然る上にひさごまで然る意。

○ぬるが上にも云々　寢牀の上にも雨だれが落ちた。

○ゑめるさゞ波　小波の立つを人が笑顔を作れば頰に皺のあらはれるに比した。

○樂しましめて　見る人を樂しませて。

○ふゝむ　含む。ふくらむ。

---

眞清水の細き流れは居ながらも手をひたすらになつかしげなる

蝶

家の内をおのが野にして飛ぶ蝶は野を家にするわれ故ぞかし

春雨

春雨の小雨は土に落ちもあへず空のものにて亂れぬるかな

たわらはのもの乞ふこともことわりに寂しさ永き春雨の空

春雨の小雨さびしみひさごさへふるに音せぬ夕ぐれの宿

雨漏

漏る雨のもるやいづこと火ともせばぬるが上にもきぬる玉水

春雨晴

たまさかに晴間もあれど春雨の猶ふりたらぬ雲の色かな

つれ〴〵とわびしかりつる雨晴れて池の面さへゑめるさゞ波

花の歌

ちる歎きのちにしあれば今のまを樂しましめて花やあるらむ

待花

待ちわたる櫻の木の芽歎きて花めかしくもふゝむころかな

雨中待花

咲きぬべき花は咲かずて雨ふれば雨を待ちえて見がほなるかな

柳上微風

風なしと見ゆる今朝だに青柳の心そなたに絲はよりけり

朝待花

咲きぬるかまだかと思へば朝戸さへ開きかねても見つる花かな

尋花

なか〳〵に道まどはしぞ花の山行くさきにして逢ふの契りは

咲く花を尋ねてゆけばいつよりか去年こし道に道はなりきぬ

山路

迷ひては昨日の花のありかにもいたりかねたる山の細道

そこなりとやすくうちいふ山人の道なか〳〵にとほがのの里

初花

初花の開くる見れば昨日まで世の常ほめをそらにせしかな

花下

誰よりも櫻がもとにちかくゐてさきへと人をいはぬけふかな

○そなたに　風のある方に。

○道まどはしぞ　行く道を迷はすものぞ。

○いつよりか　いつの間にか。

○そこなりとやすくうちいふ　すぐそこだと事もなげにいふ。

○とほがのの里　道が遠い意にとほがのの里（筑前國筑紫郡通古賀であらう）を掛く。

○世の常ほめ云々　月並の讃辭をいいかげんにいつたものだ。初花の見事で讃辭に苦しむ意。

○さきへと　櫻の方へより近く行き給へと。

花下咏歎

此の春もおなじ櫻のもとゐしてさらなることを又いはれけり

花友

こともなきさし向ひなる花なれど誰にもまさる友どちぞかし

軒花

我からの見なしのみにはあらじかし軒端の櫻よそにまさるは

夜花

暗き夜もかくこそあかせ櫻花そこにはありと思ふばかりに

春山遊行

花見つゝ山をめぐりていくたびもおなじ所のおもしろきかな

名所花

人言にまさるながたの櫻花めでひろめてもいふかと思へば

曉花

春の夜のあけがた暗き野べに來てよく見えもせぬ櫻めでかな

山花

櫻咲く山の裾野のあさぼらけまこと繪に似て畫にまさりけり

○もとゐ　下居して。下に居て。
○さらなること　いふまでもないこと。毎年繰返す歎き。
○こともなきさし向ひなる花　格別優れたこともない相對する花。
○我からの見なし　自分一個の見解。
○かくこそあかせ　このまゝ白々と夜を明かせ。
○そこにはありと云々　存在を認められるやうに。
○ながた　長田、筑前國朝倉郡。
○めでひろめて　いひはやす意。
○櫻めで　櫻を賞翫すること。

むかしより何にならへる花ならむ荒山櫻あららげもなし

春川

淺き瀬にまろびまろびて流れ來る枝も櫻の花ざかりかな

思夜花

たゞ一重窗のへだてのふし所こゝにぬるとは花や知るらむ

家櫻

誰が里にあるかしらねど二つなきあが佛なるいへざくらかな

栽花

若くしてうゑつるからに櫻花今よりといはばなき跡ぞかし

一木花

まどろめばよりそふねやの柱さへ一木の花のもと心地する

垂櫻落花

絲ながらうちまかせてもある花を枝よりはなつ春の山風

花影

眞清水にうつして見れば櫻花こはまことにもまさる畫ぞかし

遲櫻

○荒山櫻　嶮山の櫻。
○あららげ　荒々しい様子。

○誰が里にあるかしらねど　こんな見事は外の里にあるかも知れないが。
○あが佛　自分の大事に思ふ者。
○今よりと云々　これから花が咲くといふならば、それは自分の死後の事であらう。

○絲ながら　絲は枝の意、細いたよりない枝に附いたまゝ。

年ごとにおくるゝ花をおそ櫻おもひしりてもさやは咲かれぬ

花開柳

たぐひなき花の梢をうちこえてしだり柳の若みどりかな

花下

飲む酒にゑひてのちぎりたがへずも又見にくるは櫻なりけり

馴花

なれ〳〵て心安きに過ぎたれどなかあしけくもなる花ぞなき

遲櫻

いそがるゝわが心にはおしなべてみな早からぬおそ櫻のみ

折花

なつかしと折るをいなびて花の枝なが方ざまに引く氣色かな

さ枝こそ折るべかりしかつゞききて引きよぢがたく花の見ゆらむ

晩鐘

いつよりか入相の鐘はなりつらむ心づきたるはての一こゑ

花開蝶

花の枝たをればさわぐ蝴蝶かな己をさへにいかゞなるかと

---

○なかあしけくもなる　仲違ひをする。

○いなびて　辭びて。

○なが方ざまに　汝の方に。手答のあることをいふ。

○心づきたるはての一こゑ　最後の鐘の音にあゝ鐘が鳴ると始めて氣がついた。

○花の枝たをれば云々　「我がことと泥鰌の逃げし根芹かな」の趣である。

○たむかひもせぬかほにして　抵抗したい風をしてゐる。

○けふの盛りは　けふ當然見らるべき花の盛りは。

○空にかへすにかへされで　空中に吹き返さうとしても吹き返すことは出來ないで。

○こぼぞけば　遠ざかれば。

○たぐひに過ぎて　比類なくも。

○蝶さへ蝶と　蝶をさへそれが蝶か花かと。

折花

たむかひもせぬかほにして中々に折る袖はぬる花の枝かな

雨後花

雨ふればひと夜に花の色あせてけふの盛りはきのふ過ぎけり

水上花

散りうけば空にかへすにかへされで汀によする花のおひ風

落花

垣越えて散りゆく程はよそよりもちりくる宿の風かみの花

木の本はちれるが上にちる花も陰とほぞけばまばらなるかな

風前落花

さそひゆく力つかれて散る花を流るゝ水にゆづる山風

思落花

物ごとに久しげもなき世なれどもたぐひに過ぎてちる櫻かな

蝶交落花

ともすれば散り行く花を送りきて蝶さへ蝶とあやまたれけり

夕落花

嬉しくもさそひはゆかで庭の面にもてしづめたる花の夕風

落花有思

散ればとく水に浮べて行く花に死ねば身をやる野べをこそ思へ

雨後落花

木のもとのかわくまをだに待ちあへず散りしく庭の花筵かな

蝶

ともすれば吾が妻戸よりせき入りておなじ臥屋に蝶もこそぬれ

思山花

思ひねの心の程のとゞけらばこなたの夢も花や見るらむ

花開鳥

咲く花に遊ぶを見れば鳥だにもはむことのみは思はざりけり

花枝

いくばくも見し花なれど枕べの一枝にこゝろ止めてぞぬる

思殘花

なにとかや心に殘る櫻花またさるかたのあるにやあるらむ

藤

○せき入りて　急ぎ入りて。

○思ひねの心の程のとゞけらば　花を思ひつゝ寢た我が心の深さが花に通じたならば。

○こなたの夢　自分に關する夢。

○はむこと　餌を啄むこと。

○さるかた　殘花のある所。

見る花もなきかと思へば藤咲きて尾上にゆける春の色かな

暮春下京

あくがれて見てし都の花さへも夢にながるゝ淀の川ぶね

もゝとり

打ちむれてさしもなきては百千鳥いづれの聲も聞きわかなくに

野火

きゆるかと見れば火もゆる淺茅原この朝露にけぶりのみして

橋霞

春の野に橋うちわたるわが身をば霞にそへて人や見るらむ

老人見歸鴈

ゆくかたはしたひ見ながら歸る鴈とゞめがたくも眠る老かな

風後雨

夕ぐれの空の雨雲風たえてあすはと見しがけふよりぞ降る

雨中流水

けさ見れば雨の跡さへつくづくも流るゝ水のおもしろきかな

鮎

○夢にながるゝ淀の川ぶね 花の盛りも一場の夢の如く、落花漂ひ行く淀川には、河船が眠るが如く靜かに寂しく流れ行く風情。

○あすはと見しが 明日は雨が降らうと思つたのに。

流れくる花に浮びてそばえてはまた瀨をのぼる春のわか鮎

野火

ともすれば峯までのぼる春の野の火をのがれえぬ松ぞ悲しき

波

こゝまでも夜半には波の打ちよせて松にかけたるちりひ芥かな

雲雀

おのが子のすだちさそひて野の雲雀手も及ぶべき空にてぞ鳴く

蝶

わらはべの手を逃れこし蝶ならむはねやぶれても飛ぶが悲しさ

土筆

山里はつみとる人もひとりなし畠のつくしの春のたちがれ

蛙

つまこふる蛙の聲の一聲のはてのなげきにたへずもあるかな

まかせても水に流るゝ蛙かなゐでこす浪におつろ身しらで

待月見柳

家暗きかげに立ちたる柳のみいまだ待ちえぬありあけの月

---

○そばえては　馴れ戲れては。

○はてのなげき　最後の悲しい聲

○ゐで　堰。

鶴

うちはぶく氣色もなしに青雲の空にうきてもきぬる鶴(たづ)むら

山吹

山吹の一重に咲くをめでながら八重なる見れば八重ぞまされる

蜘

松のまの夕日に光るさゝがにの絶えぬと見えてつゞく絲かな

雨中蛙

山吹のしづく枝にもすがりえでかはづなかるゝ春雨の空

山彦

わがごとく酒に醉ふらし音たてて打てば打つ手をまぬる山彦

蝶

ともすればふせやの窗を出まどひて明きたる方もしらぬ蝶かな

山

そばだちて恐ろしげなる嶺越にまたゆたけなる山も見えけり

寐覺

海山のとほきながめの夢さめてひろばかりなる牀の上かな

○うちはぶく　羽ばたきする。
○青雲の空　青空。
○しづく枝　垂れた枝。
○まぬる　眞似る。
○ゆたけなる　ゆるやかなる。
○ひろばかりなる　一尋程の狹い

濱

見渡せば影かすかなるをちなれど羣れたるあこのしるき白濱

船路

ところせきわが乘合の舟づかれみな人ごとにぬるぞわざなる

漕ぐまゝに夜明けて見れば見しりたる昨日の船に又ならびけり

行く船のこし跡見えて海の面にその一筋はさゞ波もなし

出船

岩はなをやがてもをれずゆたにめぐり千船もおなじ港出かな

泊船

窓に窓むかひ合ひたる大船の一夜どなりのなつかしげなる

入日さすなごの潮干の夕まぐれはしだてかくる沖の大舟

船の帆はゆたにおろしつかき抱きてしぼり取るまもなしと見るまに

湊船

乘る人も立てりながらにゆきちがふ港の船のことぞともなき

渚鳥

むれて鳴く沖のす鳥のさまぐ\に何れの聲か何れなるらむ

○をち　遠方。
○あこのしるき　網引する人が明瞭に見える。
○乘合の舟づかれ　乘合舟の中で疲れてゐるので。
○ぬるぞわざなる　眠ることを專一とする。
○岩はなをやがてもをれず云々　岩端を急に曲らずにゆるりと廻つて。
○なご　奈吳。越中國射水郡。
○はしだて　橋立。加賀國江沼郡
○ことぞともなき　危險なく安泰の有樣をいふ。
○沖のす鳥　沖中の洲に居る鳥。

ひかた

あらつのみ汐引きぬらしわが里の空も干潟と見ゆる白雲

漁船

ゐながらも一人こぎたる蜑船のうらやすげなる磯あさりかな

海上眺望

田に立てる人まばらなるそなたには船も行きかふ引津野の浦

網

おほしきのあみ珍らしと博多人わたりきてみる冬のひめ島

釣舟

うはじまのは島の沖の程ならむうかぶつり舟人かげもなき

漁家煙

ほす網のひまもれて行く煙かなそのかやすさのあさましきまで

波

よする波かへるさまにはたわすれて汀にのこす沖藻亂れ藻

入江

うしほ干て見れば流るゝ水尾ばかりめぐりて遠く行く入江かな

○あらつのみ　荒津の海。筑前國筑紫郡。
○ゐながらも　坐つたまゝ。
○磯あさり　磯で漁ること。
○引津野の浦　筑前國絲島郡。
○おほしきのあみ　大敷網。敷網の一種で、四艘の舟で取圍み、魚が乗網の上に來た時、網を繰つて捕へる。
○ひめ島　姫島。筑前國絲島郡。
○うはじまのは島　薩摩國日置郡にあるか。
○そのかやすさの云々　その氣輕さが驚かれるまでに。
○かへるさま　歸りがけ。
○たわすれて　忘れて。
○水尾　水脈。

海邊山彦

いさり船こぎたみゆける音をさへ島根に來ればまぬる山彦

釣翁

釣りもえで歸るかたみの空しきをかろめ顏にも吹く嵐かな

蚫

ある時は殼ははなれて蚫すら身のみぞよする波のあら磯

淡菜

おのがすむ磯かと思ひてみるくひの入るれば水に動きぬるかな

海雲

見渡せばさもなが〱し平戸よりつしまの沖にわたす白雲

矮松

ひめ島のそね打ちこゆる荒波にはひたる松の千代をこそ思へ

漁村

浦とほくゆき集まれるものがほに洲崎に立てる家の一村

馬

野べ遠くかず重なりて行く駒は道をれてこそ數も見えけれ

○こぎたみゆける　漕ぎ廻り行ける。
○島根　島。
○かたみ　筐。魚籠の意。
○かろめ顏にも　侮る風に。
○みるくひ　海松食。斧足類。
○平戸　肥前國松浦郡。
○そね　石が多くて瘦せた土地。

○やまと川　山迄川。肥前國、養父郡。

○まが　馬鍬。

○ことひ牛　強健の壯牛。

○窗のひま行く駒　「光陰は白駒の隙を過ぐる如し」を下心においた。

○千町の門田　廣い門田。

○住まで住ままくほしき山里　定住するからこそ其所がいやになるのだから、最初から一所不住の輕い氣持で住はれる山里がほしい。

○さゞき　みそさゞい。

やまと川わたせる駒の渡りあかり堤につゞく夕くれのそら

狙

おのがゐる枝のゆらぎに身をはねて遠き梢にわたる山猿

牛

しぶ〳〵にまが引く小田のことひ牛うたれぬ先に歩めと思へど

田馬

幾度か窗のひま行く駒ならむ千町の門田すきかへすとて

見旅客

われもまたさてこそ行かめ打ちつれて旅人姿見ゆるしのゝめ

山家

山里の清き川瀬をむすびあげて世の塵なきを水に見るかな

住めば又こゝもわびしくなりにけり住まで住ままくほしき山里

雙鳩

おのれさへ面白けれや山鳩のけさの友なきこゑをそろへて

さゞき

垣間より近く見るをも知らずしてさゞきすがれるおほすげの花

夕日

夕日影木のまをもりて幾筋か庭にわたせるきぬのうすはた

燈

燈とわれとははかな宵々に物もえいはぬ業くらべして

夕烏

あらつがた荒れたる風に向ひてもかへるは歸る夕がらすかな

山烏

飛びにぐるつばさ頼みの山烏人あなづりのわざのみぞする

雛

羽音こそまづ嬉しけれ庭つ鳥そよその如くなくを待つ夜は

庭つ鳥羽うちきするはぐゝみをもりいでて子のあるが悲しさ

昨日までまろびし玉のわれからもけふはあされる鳥の雛かな

鯉

いづこにか行くと思へばゆたけくも尾をふり歸る片淵の鯉

假面

人の面のまことと生きたるゐまひかな土とも木とも思はれなくに

○うすはた　薄機。紗や絽の薄物。

○あらつがた　荒津潟。既出。
○かへるは歸る夕がらす　どんなことがあつても、歸るべき鳥は塒へ歸る。

○そよその如く　それよ雞の如く

○はぐゝみをもりいでて　慈愛の翼から外れて。
○まろびし玉のわれからも　卵としてごろ／＼してゐたが、殻が破れて自ら。われからは卵の殻が破れる意と身自らの意とを掛く。
○ゆたけくも　ゆるやかに。

○片淵　片方が深い淵。

麥

作りえしいもが稼ぎの裸むぎ蝶とならでも飛びゆくがうさ

風車

妹が背にねぶるわらはのうつゝなき手にさへめぐる風車かな

鳥銃

寐鳥うつ夜はの火音におどろきて空に亂るゝあし田鶴の聲

老

何事ぞ五十六十と增しがほにわが世なくなる老の身のはて

櫃

やがて又底あらはれてあぢきなし鼠もはめるよねのしら櫃

子

親なけば子さへ泣くなり世の中のせむすべなさも何も知らずて

世

末の世といつより人のいひ初めて猶世の末にならぬなるらむ

歌

身におはぬことのみいひていつも〳〵歌の心に恥ぢ思ひつゝ

○あぢきなし　なさけない。

○身におはぬこと　身分不相應のこと。

夏蘆

つのぐみし浦の蘆原いつのまにやはらぎ靡く夏はきぬらむ

水邊首夏

よそよりも夏になりぬる程みえて明けはなちたる川づらの宿

篋扇

箱のうちに入れにし扇取りいでておのがえ知らぬ風にあてばや

尋郭公

こゝにてと思ひてこしを影もなし山河のみのほとゝぎすかな

五月雨

見渡せば野は海原になりはてて川こそなけれ五月雨のころ

五月雨はをやみもあへず軒に落つる玉は絲にも又なりにけり

蠶婦

中々に桑子飼ひてもいとなしにうまれ合ひたる身のすくせかな

夏草

猫の子の首の鈴がねかすかにも音のみしたる夏草のうち

杜若

○つのぐみし　芽が萌え初める。やはらぎに相對する。
○明けはなちたる　障子等を明けひろげた。
○川づらの宿　川邊の家。
○をやみもあへず　絕間なく降りつゞいて。
○軒に落つる玉は云々　ほたりほたりと玉のやうに落ちる雨だれが、雨量が增して來たので、絲筋のやうに一筋になつて落ちる意。
○中々に桑子云々　萬葉集卷十二「なか〳〵に人とあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり」
○いとなし　暇なし。いとは絲に通じて、蠶の緣語。
○すくせ　宿世。

○さもあやなして　如何にもあしらふやうな風で。
○こゑのひとすぢ　鳴き行く聲の方角がはつきりわかる。
○色ことに　色が異なつて。
○かたへ　半分は。紫陽花の色が變化するのでいふ。
○垣内の池　垣根内の池。
○みまくほし野　見たく思ふ意に星野(筑後國八女郡)を掛く。

かきつばた咲けるあたりに行き歸りさもあやなして過ぐる浮水

里螢

河邊より里に入りたる田づたひに來ては出でつゝゆく螢かな

暗夜郭公

暗なれど行方さだかに時鳥とほざかりゆくこゑのひとすぢ

雨中郭公

村雨の空をくだりて夏草の末はらひゆく野のほとゝぎす

桃實

居並びてあるだに暑き夏の日に身に身を寄せてなれる桃の實

紫陽花

此の朝にひらきし枝は色ことにかたへ昨日のあぢさゐの花

浮草

樋口あけし水音けさは聞えきて垣内の池をいぬる浮草

茶摘

夏くれば見まくほし野の少女どもいかに羣れてか木の芽摘めると

蝶

よそにして立つかとみれば飛ぶ蝶の又すがりぬる姫百合の花

夏日

空をこそむかひかねしか水よりもおもはゆきまで照らす夏の日

露

雨ふらぬことしの夏の庭にだに玉おく笹の露ぞかなしき

すゞみ

たそかれとわかずなり行く橋の上に聲知る人のつどふ頃かな

蕉風

吹く風を芭蕉の葉してあふぎ入る窗のうちはは取るべくもなし

夏山

唯一つ生ふる木もなし間近くは撫でても見まくほしき青山

夏夜

物もへば寐覺ながらも目を開けて明けしも知らぬ夏の短夜

橘

本のもとをさすがに遠く散りもこで風にこぼるゝ園の立花

夕立

---

○おもはゆき　まばゆい。

○たそかれ　誰そ彼。黄昏の語意は、あたりが暗くなるから、人の顔も見分け難いので、誰そ彼といふ。

○窗のうちは　芭蕉葉を指す。

○傘はひがさになり　雨があがつて日が出たのでいふ。
○暮れて明けたる一夜　夕立雲で一時夜のやうに暗く、晴後一段と明るいのでいふ。

○夏草のそこなる見れば　夏草の中に埋れて咲けるを見れば。
○わけもあへず　草を踏み分けてどん／＼進むことも出來ず。
○親もなげなる　撫子に愛子の意を含めるのでかくいふ。

○枝さす　鹿の枝狀の角の伸びたことをいふ。

○行末やすく見ゆる乏しさ　鷹の未來の勢ひが容易く見えるのが面白い。
○おのが妻こそ云々　萬葉集卷十二「難波人葦火たくやのす(煤)してあれど己が妻こそ常めづらしき」

夕立にさして行きかふ市人の傘はひがさになりにけるかな
夕立の晴れてし見ればけふの内に暮れて明けたる一夜なりけり
恐ろしき景色はやみて夕立のつね降る雨になりにけるかな

夏　獸

夏くれば野邊の牡鹿の角落ちて己が妻さへ見もなれじかし

雨中夏山

夕立のふりし名殘の雨ごしに照る日も見ゆる夏のむら山

なでしこ

夏草のそこなる見ればわけもあへず取りあげつべき撫子の花
里遠き野に咲き出でて只ひとり親もなげなるなでしこの花

夏　野

今年生ひの野邊の牡鹿の角さへも枝さすばかりなれる野べかな

鷹

飛ぶ鷹の一羽二羽のはぶきにも行末やすく見ゆる乏しさ

烏

よそよりはいづれもおなじ村烏おのが妻こそつまも見知らめ

あさい

村雀ひさしにあさる音さへもいつより聞きし朝いなるらむ

夜思

胸せばき夜半の思ひはわがならで明くればいたく變りぬるかな

雨

二日三日降れば降るとてわびにけり雨待遠にいふかと思へば

山

姿さへ所かはればかはりきて知りたる山の名をとはれけり

行路風

くまぐにかくれぐも行くものを身にさしあてて吹く嵐かな

旅松

たふれふす松ぞかなしきその如く旅路の末にならむと思へば
宿るべき里見えきてもいくたびか今はちかしといこふ松陰

旅情

するゝ遠くまがひ路もなき一筋を見てもつかるゝ旅心かな
かたぐに旅はゆけども行末はみながら死出の山路なりけり

○ひさしにあさる　廂の上に餌をさがす。
○朝い　朝寢。
○胸せばき　心にくつろぎのない
○わがならで　我がならで。自身本來のものでなくて。
○まがひ路　迷路。
○かたぐに　あちらこちらと銘銘勝手に。
○みながら　悉く。

家のうちの狭きいぶせきいとはねど宿かしかぬる夷（ひな）の山里

心のみもとこし方へ歸すにもとくはいたらで遠きふる里

家にてはとかくいはれし木枕の高きひききもなき旅寐かな

旅泊

昔わが住みしあたりに船とめていまは旅なるうきねをぞする

うきねする港はわびしさ波さへひた／＼とうつ音の聞えて

旅別

今はわれいく里々か過ぎつらむわかれかねたる心ながらに

思旅

わがこゝろ旅になり行く寐覺には家も出なくに戀ふる古里

山越

きこえずば猶こわだかに道問はむこなたに行くや志賀の山越

山中一家

水谷のや坂の山路こえかねてまづこゝまでと來ぬる一つ家

行路

行くまゝに家つゞきなる都路のいづこの程にひなび來ぬらむ

○とくはいたらで　心が早く故里へと至らないで途中に躊躇する貌

○とかくいはれし　何やかやと小言をいつた。

○木枕の高き云々　旅寢では木枕の高低などを云々する贅澤心は起らない意。

○うきねする　舟の中に泊る。

○さ波　小波。

○水谷のや坂の山　場所不明。

遠くありてよそより見ればいつも〳〵行きかふ人は豐けかりけり

わたし

行く水のわきて流るゝ廣瀨川わたれば又もわたりなりけり

行路川

きの川の堤はながしやすらはむ水おもしろき所えらびて

鄰

所せくとなり〳〵をへだてたる世の中垣のむつかしげなる

故鄉

家もなくなりぬるおのが故鄉の道しるべする駒のかなしさ

老

いつしかと我とりなれて後手の老のすがたは誰にならひし

わらは

何ごとか遊ぶあそばぬいさかひも泣くぞ限りのわらはべの友

山路行人

はるかなるをちの山ばな來し人の又見え來なり暫し隱れて

雲影爲龍

---

○わきて　分れて。

○廣瀨川　薩摩國出水郡のであらう。

○きの川　木野川。肥後國菊池郡。

○むつかしげなる　厭はしい有樣である。

○我とりなれて云々　自分が兩手を後に組むことに慣れた老姿は。

○山ばな　山端。

程もなく雨ふりぬべし西山にわだかまりたる雲のたつみゆ

里

わづかにも梢見えきて行くまゝに廣田の里の民の竝くら

閑居松

松が枝のとゆきかくゆきくゞり合ひて行方を見れば寂しくもなし

月夜軍士

まびさしの内まであかく光りあひてわが胸板を照らす月影

猫

衾さへいとおもげなる老の身のぬるが上にもぬるねこまかな

歎世

世の中の人のおとろへいつも〳〵おなじことにて聞くぞ悲しき

半死

あるかひもなき老の身は生きながら死出の山路も半ばへにけり

芭蕉

身をよきて我行きかへば芭蕉葉の心のまゝに廣葉なりけり

蓮

○西山　肥前國杉浦郡。

○廣田　攝津國武庫郡のであらう

○竝くら　竝んだ藏。

○とゆきかくゆき　あちらへ行きこちらへ行き。

○まびさし　眉廂。兜の鉢の前方に廂のやうに出て、額を蔽ふもの

○胸板　鎧の胴の前面の最上部。

○ねこま　猫の古名。

○よきて　避けて。

散りはてて花はなけれどおなじ香を猶のこしたる池のはちす葉

朝顔

程もなく枯るゝいとはず朝顔のかゞやく日にもむかふ一時

雨

をざゝ原ところ〴〵に動くなりまばらに雨や落ちてきつらむ

貧家

聞きすてて飯(いひ)たく親の見ぬまにも聲の限りになくうなゐかな

初秋

昨日よりさらにも空の秋めきて色かはりこし日かげ月影

三日月

初秋の梢をわたる風の上に散るかと見ゆる三日月のかげ

星河

川といへば川にも似たり天の川みれば二つに末はわかれて

牡丹殘花

大方は散り果てぬれどはつか草この一花はみそかだに經よ

佛祭

---

○聞きすてて　兒の泣くのを聞き捨てにして。

○はつか草　牡丹。白氏文集「花開花落二十日。一城之人皆如レ狂。」

麻がらのもゆる限りを別れにてたまおくりする杉の下門

月會出

月影も出づべくなれば山の端もいときはことにさやかなるかな

戸月

面白く月さしいるゝ妻戸よりわりなくいづる夕けぶりかな

まどの月

うつろへばさし入るよりも哀れなる窓の一重の紙ごしの月

庵月

伏庵の奥までちりも拂へるをさのみは入らでいぬる月影

月前蟲

くもといへばおのれも月の前にして妨げ顔に巣かけぬるかな

閨の月

おもほえず枕がもとのさやけきにまろび起きても見たる月影

閑居月

たまさかに戸を開けければ月だにも閨めづらしく入る景色かな

殘月

○きはことに　堺が著しく。

○わりなく　分別なく。此の歌、月を女に煙を男に見立てた所がある。

○うつろへは　障子に月光が映れば。

○伏庵　見すぼらしい庵。

○さのみは入らでいぬる月影　月光が折角掃除した庵の奥まで射しこまないで過ぎて行つた心殘りをいつた。

○くもといへは　蜘蛛に雲を掛けて、蟲でも雲に通ずる蜘蛛であるから。

○めづらしく　戸を開ければ、月はいつでも射し込むのであるが、自分が元來開けないから月は入らない。そこで稀に開けた時に珍らしく面白くいつた。

をしむまに伏屋のうちを出ではててすのこのはしに残る月影

雨後思月

雨やみてあらはれかぬる月影にたえまも雲と見ゆる空かな

松間月

そなたへとよくこと知らぬ松ゆゑに所かへても見たる月かげ

雲間月

月影は晴れたる空にさもゆきぬ隠せる雲も知らぬばかりに

川月

月もやゝ流れて行けど早川の水のゆくには任せざりけり

山家月

窗もなき埴生のこやのそともより入る方なげに照らす月影

月下無酒

月清み酒はと問へど少女どもゑみて答へもなげに見ゆなり

月下獨酌

三日月の入るを見るまもなぐさめのなきにはまさる酒の一坏

雲間月

○すのこ　簀子。縁側。

○そなたへと云々　月を見せる爲に、松自らが脇へ寄ることを知らないから。

○さもゆきぬ　左程までも心にかけないで行く意。

○三日月の云々　萬葉集卷三「價なき寶といふとも一坏の濁れる酒に豈まさらめや」

○なか〳〵に軒あらはなる古寺　新しい寺よりも却つて軒端も荒廢した古寺。

○打招くわざ云々　花薄が風に靡く姿を、人を招く様及び人を拒ふ様に見立てた。

いま一重雲を出づれば雲もなき空なるものを知らぬ月かな

雨後月

雲うすきところ〴〵のあかければいづこも月のありがほにして

寺月

なか〳〵に軒あらはなる古寺のほとけの面を月ぞてらせる

杣月

立ち並ぶ杣山松をきりしより思ひもかけずいづる月かな

大路月

只ひとり夜ふけてゆけば行く月とわれとのものぞ廣き大路は

苫屋月

珍らしと見る人なしに月かげのもるを常なる苫やかたかな

月前蟲

出てしやとおどろき起きて月見れば枕のかげによるきり〴〵す

すゝき

打招くわざのみならで花薄いなみざまにも振るたもとかな

秋風

秋風に門田のいなごふかれ來てをり〳〵あたる窗の音かな

萩

亂るればつくろひかへて萩の花一夜にもとの錦なりけり

風前薄

秋の野のいとさむければ花薄ふしても風をとほすなりけり

久留米柘植信厚七草園の歌

まとひあひて尾花くず花なでしこの花にも咲ける朝顏の花

閑居夕露

寂しさに手をのみくめる夕暮も小草は露の玉をもちけり

獨居月

かくれ居て我が跡さらぬ影法師ゐならびてだに月をみよかし

窗の月

照る月は猶てらせれど窗の戸に影はづれ行く花すゝきかな

十五夜月

かつ〴〵もかけにし程の歸り來て又まどかなる望の夜の月

月前渡舟

---

○秋風に門田の云々　金葉集秋大納言經信「夕されば門田の稻葉音づれて蘆のまろやに秋風ぞ吹く」

○まとひあひて　からみ合つて。

○手をのみくめる　腕組ばかりする。

○かくれ居て云々　新古今集冬西行法師「寂しさに堪へたる人の又もあれな庵をならべむ冬の山里」の趣である。

○影はづれ行く花すゝき　月が廻るにつれて花薄の影が轉じて行くことをいふ。

山陰をいづる川瀬のわたし舟なかばよりこそ月に見えけれ

垣秋風

あし垣のあれまをもるゝ秋風に柴さし添へてふせぐころかな

蟬

なみ立てる庭の木ごとになく蟬も枝がくれする秋の山風

尾花

さして行く人の心もしり顔にうちうなづきてたつ尾花かな

露

所せく草の上葉のはしゐしてまろびも落ちぬ露の白たま

霧

かぐ山のそがひの堤けふゆけばすそ野にあがる秋の川霧

女郎花

をみなへし今やさかりになりぬらむ枝さへ花の色になりきぬ

きりぎりす

さしあへぬ衣ながらに秋更けてつゞりともいはぬきりぎりすかな

田家人來

○さして行く　目指して行く。

○所せく草の上葉のはしゐして一杯に草の上葉の端におりて。

○そがひ　うしろ。

○さしあへぬ衣云々　古今集卷十九在原棟梁「秋風に綻びぬらしふぢ袴つゞりさせてふきりぎりす鳴く」さしあへぬ衣は縫へ終らぬ衣。○つゞりとも云々　綻びを縫へともいはぬきりぎりすで、きりぎりすの聲枯れて鳴かないことをいふ

田の面より我が門さして來る人の近づかぬまに誰と知らばや

砧

たが里もきこえ合はせてうつばかりうてば何處もうつ砧かな

そほづ

よく見れば門田のそほづいつも〳〵そなたに人のある心地して

なるこ

人なしと見ゆる山田のたぶせより思ひもかけず引く鳴子かな

果

おちいると見れば浮みてかしのみの數も知られずよる汀かな

栗

枝にてはいからしげにも見えながらからを出ぬれば手まさぐりのみ

芝栗

幼けに枝垂れぬれば笹栗のいかなる樣もけにくくはなし

栗の葉

年ごとに枝のむしばみ見ぐるしく筋のみのこる軒の栗の葉

山寺

○そほづ　案山子。

○たぶせ　田伏。田にある假庵。

○いからしけ　いかめしくおそろしけ。

○手まさぐりのみ　只管手でおもちやにされる。「栗の實」の文字を含めたのであらう。

○けにくくはなし　憎らしくはない。

○こともののごと云々　聞き慣れた砧の音も旅にあつては、別物の如く感ずる。

○空音　僞り聲。

○わろびたはぶれ　惡戯をして。

---

山寺の秋さびしらに佛たちたゞ泣びてもおはすばかりぞ

旅中擣衣

家にても妹が打ちてし麻ごろもこともののごと聞く旅路かな

百舌鳥

聞き知らぬ人もあらましさま〴〵の鳥が音まぬるもずの空音を

栗

散り積る木の葉の下の手さぐりも籠にもるばかり拾ふ山陰

市鴈

うれしくも市の大路の一筋にゆくかた見ゆるけさの初鴈

稲妻

ひかりつる峯の雲まの稲妻のまてばまたゝく景色のみして

桔梗

童どちわろびたはぶれ一つだにさけば摘み取るきちかうの花

思旅客

秋風はさむけくなりぬ我が君の遠きひがしにおはしつく間に

川紅葉

散りしける汀のもみぢ浮びきてみればしぐるゝ川上の里

あらし

夕暮の空つら〳〵にゆくたづも雲のはたてによるあらしかな

田家鴈

いつも〳〵庵にそひたる物がほに外面の小田に來ゐる鴈がね

稻妻

さま〴〵の光あらはす稻妻の雲のね見ゆるいかづちの山

鴈

あら磯をふき越す風の寒ければ面がくしして寐たる鴈がね

市初鴈

空せまくみゆる市路はみるたびに過ぎぬるあとの初かりの聲

山夕日

はてもなき山の裾野のすゝき原遠く行けるは夕日のみして

山路牛

まなく散る木の葉かづきて山路より出でくる牛のすごき夕ぐれ

鹿

---

○川上の里　肥前國佐賀郡。

○夕暮の空云々　古今集戀讀人不知「夕暮は雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を戀ふとて」

○つら〳〵に　列なつて。

○いつも〳〵云々　萬葉集卷四「河のへのいつもの花のいつも〳〵來ませ我がせこ時じけめやも」

○いかづちの山　雷山。筑前國絲島郡。

○遠く行けるは夕日のみして　夕日がひとり遠く彼方に見える意。

○すごき夕ぐれ　新古今集雜西行法師「ふるはたのそはの立つ木にゐる鳩の友よぶ聲のすごき夕暮」

宿ちかく草分け入りし小牡鹿のをのへに出でていつか啼くらむ
珍らしときく小牡鹿の聲ごとに末わびしらになるぞかなしき

島鹿

汐干たる洲崎の程も見えぬ夜に遠くもゆける小牡鹿の聲

山路

小牡鹿の遠ざかりゆくかげさへも果てはなくなる山の細道

野一家

庵一つもちたるのみや野にすみて牡鹿にかはる我が身なるらむ

閑居松子落

目の前に一つ落ちたる松の實のさらにも落ちず暮るゝけふかな

山秋風

少女らが山のそばかる秋風にせにおふ子さへわりなくぞ泣く

ひた

守る人もかけたる繩もゆるびきて水田の面にひたすころかな

わらは

風吹けば庭の木の葉のよるばかり片すみごとによるわらはかな

---

○庵一つもちたるのみや　住むべき處があるだけのちがひであつて

○わりなく　甚しくの意。

○ゆるびきて　張つた繩のゆるぶと番人の心がゆるむとを掛く。

○片すみごとに云々　木の葉が片隅に吹き寄せられるやうに、子供も片隅にかたまる。

秋港

秋更けて湊やさむくなりぬらむ蕎麥うりめぐるさよ中の舟

蘆火

流れゆく入江の水尾のさびしきに影映ろひてたく蘆火かな

雨中桐葉

はてもなき軒の雫にいつまでかうたるゝ桐の一葉なるらむ

庵

よひ／＼に遠き方より更けて來て山べのごともなるいほりかな

萱

吹きかはる風にほむきのわきかねてなびきまどへる前の萱原

山家

谷陰のこゝにかしこに片よりて寂しかるべく見ゆる山里

遙かなる木の間に見ればせきし戸をけふは開けり谷の一つ家

我が宿をこゝにもがなと都人いひのみいひて住まぬ山里

巖

行きかよふ人には遠くよきさせて道のみ中にたついはほかな

○ほむきのわきかねて　どちらに穗を向けてよいか見當がつかないで。

○せきし戸　堰きし戸。閉戸。

○こゝにもがなと　こんな靜かな所に置きたいものだと。

○よきさせて　道をよけさせて。

谷川

こゝにきて又こゝにきておつるかな我さへ下る谷の川水

山

山々に立ちもならはずかまど山おのれひとりぞ高くたふとき

山鄕

大方はあるじはなくて山里はとなりだのみの引きたて戶かな

只一夜やどをかりねの枕にも木の實まろべる秋の山里

そほづ

秋の雨のふる照るなしに笠きたる山田のそほづ疲れ顔なる

山家流木

ゆく水のさゞれにあたるさ音にもしづけさしるき秋の山陰

鳥網

おはれきてとなみにかゝる群鳥のちゞの聲きく我ぞ苦しき

山家燈

燈のもとにかたらふ人かげも松の葉ごしに見ゆる山里

山雨

○かまど山　筑前國筑紫郡。

○ふる照るなしに　降つても照つてもそんなことにはかまはず。

○さ音　「さ」は接頭語。

○となみ　鳥網。

かやの山此面の雨は風もなしぬるゝ松さへゆたげなるかな

畦

あなうたて狹きが上にせまかれと削りなしけむ小田の畦道

繍

表のみめでたく見えてぬひ物の裏むつかしき世にこそありけれ

枕

ものごとにこと少なきがうらやすく起くればなげのおのが手枕

醉ひ伏せる身を遠ぞきてあぢきなくよそより守るねやの木枕

いざと思ふあしたの牀のおきうさに枕はなれて手枕ぞする

燈

うしろにも倒るばかりの居眠をとがめぬものはともしなりけり

かゝげたる時のみあかし燈も我がゐねぶりにねぶりたぐひて

桶

人心くちてはなれて桶の輪のわかれ／＼になるぞすべなき

枕

身一つになりぬと思へば竝びたるたなの枕のかずぞ悲しき

○かやの山　可也山。筑前國絲島郡。
○あなうたて　嗚呼厭だ。
○むつかしき　厭はしい。
○なげのおのが手枕　なほざりの我が枕。枕の無用のことをいふ。
○遠ぞきて　遠ざけて。
○かゝげたる時　火をあかるくした時。
○ねぶりたぐひて　おきに燈が暗くなることをいふ。
○たなの枕　棚にある亡き人の枕

書

いつよりか開けながらの窓のふみ風ばかりこそもてあそびけれ

塵

人なげに目の前をしも行きかひて塵さへ我をかろめつるかな

拂へども立ちまふ塵の去りやらでたゞおき所かふるなりけり

枕

うたゝねの昨日のひろね思はせてありしところにある枕かな

若

山吹の花を煮るとはなけれども木の芽もおなじ色に出づらむ

幽窗

木の間より夕日の影のさす時ぞはじめてあかき松のまの窗

何事をなすともなくていたづらに窗のもとにも老いにけるかな

坐睡

誰かきていつ歸りけむ思ほえず我が居睡のはてもなき間に

破笠

軒端おつる雨にひしげてうたるれど昔おぼゆる竹の皮笠

○開けながらの　開いたまゝの。

○かろめつる　輕蔑した。

○ありしところ　昨日と同じ所。

○おなじ色　山吹色。

○すみなしの心ふかさに　住む人の心の深さもあらはれての意であらう。

○こゝにあり　蟻が此所に居る。

○いづれに目をもとめがたき　とんぼの眼玉は四方八方を見得るからいふ。

短日

何をするいとまもなしと年毎に日のみじかさをわぶる頃かな

くれやすき日數重ねて年の閒も秋よりのちは程ぞみじかき

庭

すみなしの心ふかさに何となくおくありげなる庭の松むら

蟻

わらはべのこゝにありとも知らすれど見えぬばかりになれる老かな

鐘

遙かなる聲するひまにうちまぜて近くもひゞく入相のかね

睡

老の身のいだける膝をあぢきなく幾度放つ眠りなるらむ

俎板

かずしらぬ魚の命は板の上のかたなの跡にしるしぬるかな

蜻蛉

世の中はいづれに目をもとめがたき空に亂るゝ秋のかげろふ

山莊

よそのごと谷を隔てて家はあれどかれも我が住む宿の内なる

貧居

うちはへて常になりぬるかねおひめさてもうからぬ我が心から

田家暮秋

少女らが箕をひる風にちるもみの寒けく見ゆる秋のはてかな

九月盡

なにごとも限りと聞くはうかりけり秋を果てなる我が身ならねど

初冬

今朝見れば雲も木の葉もそなたへと行かぬものなき冬の山風

木枯

袖さへも吹きとりつべき木枯にうべ止まらぬ嶺のもみぢ葉

初時雨

初時雨今ぞふりいづる水鳥のともぐるひするおきの波間に

池時雨

池の面に見えては消ゆるちゞのわの亂れ重ねにふる時雨かな

夜時雨

○うちはへて　引きつゞいて。
○かねおひめ　借財人。
○うからぬ我が心から　呑氣な自分の心から。
○箕をひる　「ひる」は簸るで、振つて屑を落す意。

○ともぐるひする　共々に戯れる

さ夜時雨ふる音たえぬ妹とわが聞きつる末をきりしばかりに

都時雨

東山のぼりもはてずまづ見れば都のしぐれ鳥羽にすぎゆく

時雨

人しれず時雨になりぬまきむくのあなしの山の雲のゆく末

海時雨

海廣きかつらの浦の沖にいでてふりはなちたる初しぐれかな

はるかなる磯のす崎を行きはてて波路にうつる村時雨かな

窗時雨

せきはてていづこもわかぬ闇暗に窗をしりても打つ時雨かな

時雨

薄雲の見ゆとも見えぬ空よりや降るともふらぬ時雨ふるらむ

たゞよひて今までありし中空の雲くづれても時雨降るなり

大かたは空晴れし日もいづこにかしぐるゝ里の見ゆる頃かな

夕されば音ふりわきて村時雨しぐるゝうちにしぐれくるかな

市時雨

○鳥羽　山城國紀伊郡。

○人しれず云々　萬葉集卷十二「纏向の穴師の山に雲ゐつゝ雨は降れれど濡れつゝぞ來し」

○まきむくのあなしの山　大和國磯城郡。

○かつら　勝浦。筑前國宗像郡。

○ふりはなちたる　降り捨てられた。かつらに鬘を通はせて、ふりはなつはその緣語。

○せきはてて　雨戸をすつかり閉めて。

○音ふりわきて　降る雨の音を色と違へて。

み山べのものさびしかる景色もて市にふりくる初時雨かな

雨後庭

あらひ出でし庭の眞砂はふり過ぎし時雨の雨のまけるなりけり

木枯

窓にきてすがるさゝぎもゆくりなくまどひ顔なる木枯の風

冬山月

夕暮の里のしぐれに近づかで片山かげにすめる月かげ

桐葉

散りそめて珍らしかりし桐の葉の一葉ぞ今は枝にのこれる

山家寒夜

唯一つ夜半の枕にまろびこし木の葉うごきて寒き山里

風前落葉

風ふかば暫しもあらず散りゆかむ景色だちても見ゆるもみぢ葉

風吹けば亂るゝ鳥にこきまぜておなじけしきにゆく木の葉かな

風前落葉

あらき雨ふりくる空の景色にはあたらぬ先に木の葉ちりつゝ

○まける　まき散らした。

○ゆくりなく　思ひがけなく。

○景色だちても見ゆる　散り行く樣子が著しく見える。

○こきまぜて　入り混って。

○あたらぬ先に木の葉ちりつゝ　雨に先だつ風の爲に木の葉が散るのである。

山路落葉

山風のさかおろしなる谷の道我よりさきにゆく木の葉かな

落葉何方

もみぢ葉はいづちゆくらむこゝにこそ積りてあれといふ方もなく

軒落葉

けふ葺きし庵の軒端にかねてより散れるが如く散る木の葉かな

蔦落葉

松の蔦離れがてにはまとへれど其の葉の紅葉もろくちりけり

風後爪木

よすがらの風のたまもの拾へとか木陰に落ちし木々の枯枝

つは

家もなくなりぬる宿の跡をしもよすがに咲ける石のもとつは

梅もどき

昨日けふふりし時雨に色づきて實さへ花なるうめもどきかな

冬山

いつしかと冬も半ばになるまゝにわがかた山は寒くそびえて

○さかおろしなる　坂を吹き下して來る。

○離れがてには　離れ難くは。

○家もなくなりぬる云々　和漢朗詠集菅三品「桃李不レ言春幾暮。煙霞無レ跡昔誰栖。」

○よすがに咲ける　ゆかりありげに咲ける。

○つは　つはぶき。

○實さへ花なる　實の色が花のやうに美しい色をしてゐる。

○落葉の上にのみ云々　一様におりた霜も、落葉の上を除いて外の所では消えるからである。
○さればこそ　案の如く。
○雪の如し　柴扉曉出霜如雪の風情をいふ。
○下たのもしくつむ爪木　筵の下には寒さを凌ぐべく心強い爪木が積まれてある。
○ふりぬる霜　地上におりた霜に年舊りたる白髮の意を掛く。
○おきて　置きに起きを掛く。
○露こ消えぬる　霜か消えて露こなる。
○霜は霜なる　寒いので霜がそのまゝ殘つてゐる。
○かまの山　筑前國嘉穗郡。
○くさかえ　草香江。筑前國筑紫郡。
○ゆきめぐらふ　泳ぎ廻る。

霜

寒しとも思はざりしを埋火のもと離るれば霜夜なりけり

まばらなる庭の落葉の上にのみおくかと見えてのこる朝霜

さればこそ霜ふりぬらし人おきて雪の如しといふ聲のする

おほひたる筵の霜は寒けれど下たのもしくつむ爪木かな

老いぬればふりぬる霜の恐ろしきものこそおきて見まくほしけれ

行路霜

わけて來し野にては露と消ぇぬるを霜は霜なるかまの山越

泊霜

朝日影まだよくささで大船のかげの小舟に殘る初霜

鴨

くさかえの汀の鴨も神無月ゆきめぐらふにやすきこのごろ

寒菊

冬枯の入江の蘆のくまごとに入りては出でてゆくかもめかな

いづる日のさしくるからに匂ふなり霜におほひの笠かけの菊

述懷

睡りつゝ汀の鴨の見るめにも身ははづかしきいとまなみかな

あ　ら　れ

窗の戸にふりくる雨は雨ながら音は霰にはやなりにけり

いかめしき岩にあたりてとびかへる霰こそいと荒々しけれ

霰だに枝づたひして降るものをなよびもなしに立つ冬木かな

水　鳥

浮び出て見てはかづけど水鳥の沈めるまにもかはる世の中

千　鳥

あまの家に飼ひなつけたるものならであされる門の磯千鳥かな

苫屋千鳥

波の上に月かたぶけば浦千鳥飛ぶかげうつるあしのやの窗

川　千　鳥

行く人の近づくまゝに又たちていや川のぼる川千鳥かな

閑居水鳥

かはせみの水に立ち入る音だにもたえて聞えぬ宿の夕ぐれ

夜　千　鳥

---

○いとまなみ　暇なく忙しい。

○なよびもなしに　こち〳〵として。

○見てはかづけど　あたりを見ては又　れど。

○飼ひなつけたるものならで　此の說明句によつて、千鳥が蜑の家の附近におそれなく馴れたることを示す。

○行く人の近づく云々　萬葉集卷七「佐保河に鳴くなる千鳥何しかも河原を偲びいや河のぼる」いやはいよ〳〵。

○かろ〴〵し身　輕い身。

○せくまで　堰くまで。

親と子のわかちもなしに終夜ひなの聲して鳴く千鳥かな

凩

木枯の音恐ろしき夜のまかなかろ〴〵し身は飛びも行くまで

待雪

音もせず更け行く夜半の靜けきに降るかと雪を思ひつるかな

山雪

みる人もなき山陰はなか〳〵にふり捨ててこそ雪もありけれ

雪中山家

朝な〳〵積れる雪を湯にたきて谷の清水もくまぬころかな

風雪

我が門を入りてせくまで追風におひきてつもる袖のしら雪

閑庭松雪

松が枝に積りあまりて庭に落つる雪のみ雪に跡はつけけり

橋雪

跡もなくふる雪みれば橋の上にうべとゞめたるうま車かな

炭

○空しくなりて　炭がなくなつて

○手を上におほひて云々　手をかざして見るともう火はなくなつてゐた。

いつしかと空しくなりて降る雪の寒き夜にたく炭だはらかな

雪中鳥

宿るべき木の間もなくて飢鳥のなく聲かなし雪はふりつゝ

埋火

手を上におほひて見れば消えにけりまだあるものと見てし埋火

寒雨

夕さればわらはも老も泣くばかり雪より寒き雨のふるらむ

晦

寒けれど一夜二夜に出でてきてしばしの月の冬ごもりかな

夜雪

松のまの燈あかき窗の戸に降るかげ見ゆる夜半の白雪

水鳥

浮き沈む渚のかもの波のうへにわが心さへあらせつるかな

行路寒風

我が里を出ではなれ行く川のべや寒きあらしの風のかよひ路

水鳥

水鳥はたちて跡なき川の面にやがても落ちず舞ふ一羽かな

社頭雪

いづ方もましろくなりて御前なる鏡のうちもつもるしら雪

川千鳥

冬くればいとあさびたる川中の水尾渡りする友千鳥かな

冬夜

ものすごく月をかくしてすみぞめの雲恐ろしき冬の夜の空

冬雲

寒ければ居ぐゝまりたる嶺の雲たな引きてこそ秋は見えしか

寒夜

親も子も打ちぞそろひてそば湯さへ霰ふる夜は哀れにぞ飲む

冬野

野べ寒きかへさも樂し我が宿にかみたる酒ものこりありやと

杉

ますぐなる杉の風をれ世の中に曲らで立てるしるしとぞ見る

社頭杉

○あさびたる　淺くなつた。

○居ぐゝまりたる　ぢつとすくむやうに動かない。

○打ちぞそろひて　打揃ひて。

○かへさ　歸途。
○かみたる酒　造つた酒。

○杉の風をれ　杉が風で折れたこと。

神のます宮の守りの杉なればおのがほこそ立て竝べけれ

故郷

昨日けふ作りし家も世にわびてまた故郷になしつべきかな

煙

おもげにも動かぬ里の煙かな風ともいはば吹きもあへじを

荒屋

人なしと思ひあなづり家の内に竹さへ生ひに生ふるあばらや

鼠

さ夜中の嵐の音にまぎれ入りて臥庵こぼつ冬の野ねずみ

硏

あさりうることはなくして朝夕に硯の海のひがちなるかな

衾

起き出でてわがねぬくめの麻衾をしくもさます冬のあかつき

假面

ともすれば鬼の面をあらはしてかりにもあらずなる此の世かな

琴

---

○おのがほこ　鉾杉といふので、防護物の鉾に見做した。

○また故郷に云々　移轉の心があるために、この新宅もやがて嘗て住んだといふ故郷になりさうだ。

○あさりうること　考へついた歌の意。

○硯の海のひがち　歌が出來ないので筆を取ることも出來ないからである。

○ねぬくめ　寢て暖めること。

○かりにもあらず　假名でない。

我が心ゆるびがちなる七の緒のならぬことこそ得物なりけれ

羽

人毎にたまなくなれば身も朽ちて塵はく鳥の羽ばかりもなし

鏡

うちわぶる影をかくして哀れにも嘆きにくもるます鏡かな

汗

世の中のわりなさ聞けば人知れずむなてに握る手の内の汗

毛

世の中の治めがたきやこれならむ一毛ぬくにも身さへ動けば

輕石

水にだにうくかろ石のかろければ沉む時なき身のやすさかな

冬衣

暫しだに寒きにたへで一重なるゆあび衣に夏をこそ思へ

小石

ゐのこにもてあそばるゝ玉鋒の道の石くれ誰に似たらむ

虎

○ゆるびがちなる　心こ緒こにかかる。

○たまなくなれば　死ねば。

○わりなさ　不合理。
○むなて　空手。素手。

○ゆあび衣　浴衣。

○玉鉾の　道の枕詞。

用ゐねば虎も猫なる世の人をかたちのみ見て定むるがうさ

雨中乞兒

雨ふればおつる雫もひまなきにかたゐせげなる軒の下かげ

少女

けふ見れば少女になりぬ去年までは一足しても飛びしならずや

老

老の身のゆがみ衰へ今更にすぐなる道もえこそゆかれね

老人は驚くばかりかはる世も唯うち聞きてゐめるばかりぞ

歎世

よそめのみもて隱されて世のうきめ見てみぬふりも哀れいつまで

述懷

おのれさへ骨身にそむく世の中を人なつけてと思ひつるかな

早くより人の用ゐぬ我が身もて老いたる故といひけたるらむ

岩の間に隱るゝ蛇の入りさしてすゑわづかなる老の世ぞかし

門

けふも又わがやに我が身かへりきぬ限りの門出いまだこずして

○かたゐせげなる　乞食が窮屈さうに見える。

○驚くばかりかはる世　驚嘆すべき程變化の甚しい世。

○いひけたるらむ　いひけつは打消す意。

○入りさして　中途まで入り込んで。

○すゑわづかなる　未だ尻尾が少し岩の外に居る意と餘命の短い意とを掛く。

○限りの門出　最後の外出。外出先で死ぬること。

○燈もうたてあるべき云々　燈自身も居眠りの我に對坐しては、不快であらう。

○さ渡る　「さ」は接頭語。
○蜘のい　蜘の絲。

雨後川

雨晴れし空におくれていつまでか濁れるまゝの川瀬なるらむ

行路

行くまゝに寂しくなりぬ里はづれまばらに家も細くなりきて

燈

をり〳〵にわが睡りては燈もうたてあるべきる向ひぞかし

雲

とゞまりて動くともなき空にだに心ゆくへは見ゆる白雲

故郷

故郷の跡はこゝなり草むらをおひせばめたる園のたかむら

故宅庭

あれたれど垣のひまより我が宿を池もありとて人ぞ見にける

萍

拂へどもやがて一つに浮びあふ心わりなき池のうきくさ

蜘蛛

ゆられつゝ風にさ渡る蜘のいの危きわざのせまほしげなる

松風

けさ見れば枝も動かで庭松のうはのそらなる風のおとかな

鶴

たづだにも子は子なりけり親にのみ己が羽がひの蟲をはませて

鳶

さながらも友の數には交りあひて空に舞ひたる鳶の破れ羽

鱗

餌につきて命失ふうろくづを人よりほかに思ふなりけり

膝

ともすれば語らひどちのもの顏に膝抱かれてながめをぞする

雲

空の雲唯ひとむらにかげのをの麓の里は日こそあたらね

坂田

かくばかり登りかねたる坂路にも片へ平らに小田もありけり

山家人來

木の間より來る人かげのあまたして誰かとこゝろ騷ぐ山里

---

○うはのそらなる　上天の意と心の落ちつかない意とを掛く。

○羽がひ　左右の翼の打ちちがふ所。

○うろくづ　魚類。

○人よりほかに思ふ　好餌に釣られて命を失ふは、人間も同じであるのに、さうは思はない意。

○語らひどち　話相手。

○ながめをぞする　物おもひに沈む意。

○かけのを　蔭尾。肥前國西彼杵郡。日陰の意を掛く。

川

時の間に木くさの雫おち合ひて風にもまさるきの川の水

旅情

いくばくも道とほからぬ心地してまた來べしとも思ふ旅かな

冬山家

人と人かたらふ窗のうち見えて谷間ゆかしき冬の山里

旅中雨

行く〳〵も時雨にぬれて見いるればたく火にあたる家もありけり

千鳥

やらがさき出づれば向ふしほ風に入江の如(ごと)も行く千鳥かな

早梅

かみおける我が手づくりもまだしきにほころび出づる壺の梅かな

年内立春

春もきぬ年ものこりぬ皆人の待つに惜しむにこゝろあはせて

元日草

うれしくも年の始めのけふの日の名におひ出でて咲くやこの花

〇やらがさき　也良埼。筑前國早良郡。
〇かみおける我が手つくりもまだしきに　手製の醸酒も未だ出來上らないのに。
〇春もきぬ云々　待つは春もきぬ方に、惜しむは年ものこりぬの方にかゝる。
〇元日草　福壽草。
〇名におひ出でて　名にふさはしく。福壽の名を指す。
〇咲くやこの花　王仁「難波津に咲くやこの花冬ごもり今をはるべさ咲くやこの花」

○わが身がくれに　自分の後に添うて。

○先づゑまれけり　梅が笑むに先立つて嬉しく思つた意。

六十賀

わづかにも唯一めぐりめぐり來し六十は人の老の數かは

# 中巻

餘寒

なか〱に冱えかへるべき空つげてまづぬるびたる雨の降るらむ

若菜

若菜つむ友におくれてあぢきなく啼く子もまじる春の野邊かな

鶯

いづこにかほの聞ゆるは鶯のまぢかく鳴くにまさる初聲

行路蝶

春の野はむかふ野風の寒ければわが身がくれに來る胡蝶かな

梅香

いづこにか咲けると見れど花もなし心の香なる梅にやあるらむ

梅欲開

軒の梅のあすは咲くべくなるを見てけふより主人先づゑまれけり

行路梅

梅かをる風にまよひてそなたへと俄に折るゝ里の中みち

折梅

打垂るゝ垣根の梅を引きよぢてはなつも折るもをしき枝かな

夜梅

暗き夜は見えぬ歎きをそなたよりいふばかりにもかをる梅かな

鶯

うちそへてなけや鶯あし垣のくま戸の梅のひらけはじめに

月前梅

梅見れば梢の月もかたぶきてあらぬ雲居をさすたち枝かな

梅香

梅の花咲きにし日より數ふればそらだきせぬもあはれ一月

朝鶯

朝まだきこゝら鳴くなり夕暮に聲のこしても寐(ね)ぬるうぐひす

寐覺

梅の花思ふばかりの枝の樹を心にうゑて見るねざめかな

○そなたより　梅の方から。

○あし垣のくま戸　萬葉集巻二十「蘆垣のくま戸に立ちてわぎも子が袖もしほゝに泣きしぞもはゆ」くま戸は隠所で隅の所。

○そらだきせぬ　梅の香のあるために空薫をする必要がないのである。

○こゝら鳴く　夥しく鳴く。

雪中梅

雪を重みたわめるまゝに梅の花よぢとらるとや思ひ居るらむ

窗梅

窗ちかく打ちたれてきて梅の花おのが手をさへつくゑ顔なる

梅風

かばかりと思ひし風にけさよりは花もまじりておくる梅園

春雨會降

降り出でてさびしかるべき春雨のけしきふくめる谷の杉むら

閑居春雨

何ごとをいへども寂し春雨のふるやのまとゐ打ちしめりきて

江春雨

まとゐしてのむ〳〵見てはいかならむなごの入江の春雨の空

土筆

何事もえかかぬ筆を少女どちとりあらそへるつく〳〵しかな

少女ども野べの茅原に取りつくし明日きて見れば又立ちにけり

霞

○よぢとらる　ねぢ切って取る。

○おのが手をさへつくゑ顔なる　手をつくに机を掛く。

○かばかりと　これはかりの僅かの風と。

○春雨のふるや　春雨の降るに古屋を掛く。

○なごの入江　越中國射水郡の奈呉であらう。

○何事もえかかぬ筆　土筆だから何も書かれないのである。

たはやすくあらはしもせで海山を見まくほしけくなす霞かな

此の朝けをちの松村きりいでてあるかと見しは霞こむなり

そことなくあらはれ出づる野の霞けぶりならねば本立もなし

花折りて夕川わたるをとめらをけしきにこめてたつ霞かな

雨中待花

花はまだ咲きも出でねど頃ほひの空にしぐるゝ春雨ぞふる

花盛りけふぞと思ふまとゐをばいつにせさする長雨なるらむ

待花

いざといひて木の下さらずわが待たばさは咲かましや花といふとも

ちかければ咲かぬ景色の花の枝目によく見えてものぞ佗しき

日數へてひらかぬ宿の花ゆゑに口をとぢたるこゝちこそすれ

庭櫻まだ咲かずやと人々のとひのこたへもつらきころかな

よく見てののちのことばぞ櫻花まちわたるまをこゝちよしとは

花始開

いづくより咲きくははれる花ならむありし莟の數ならなくに

曉花

○たはやすく　容易に。
○見まくほしけく　見たく思はせるやうに。
○本立　現はれ出る根源。
○けしきにこめて　一幅の景色の中に取り入れて。
○頃ほひの空　春の時節の空。
○ちかければ　目近にあるので。
○とひのこたへ　質問に對する返答。
○よく見てののちのことは　咲ける櫻を十分見た後に出すべき詞。
○咲きくははれる花　花の咲いた時には、莟の數よりも多く見えるといふのが普通誰もが感ずる所である。

見るものの色わかれくる明方にいつよりしろき櫻なるらむ

尋花

さそひつる人跡とめて花の山おくればせにもはせつべきかな

夕まぐれ尋ねつくせる道づめに一木は咲きてある花もがな

思花山

ゆきつきし心やいかに花の山とり〴〵にこそ陰をしむらめ

行路見花

けふ一日咲ける櫻を見ありきて人々しげになるこゝろかな

見花

おぼろげに人のめづるを櫻花たらぬ心のよそよりぞする

ちかく見て遠く見てまた櫻花いかさまにてもあはれなるかな

花使

さくら花けふぞさかりと告げやりし使とともに君ぞ來ませる

花友

友ならで友になりたる櫻ばなこゝろあらずば心あらせよ

花下雨

○見るものの色わかれくる明方　目に映る萬物の色が次第にはつきりして來る曉。
○いつよりしろき櫻　櫻の花の白さとして、曉を待たないで、其の色彩の鮮明なことをいふ。
○さそひつる人跡とめて　花見に誘つてくれた人の行方を尋ねて。
○道づめ　道のはて。
○人々しげに　一人前に。
○おぼろげに　普通一通りに。
○いかさまにても云々　さういふ風に見ても立派なものだ。

○いひなせれども　僞りいつたけれど。

○つと　土產。

○又の春べ　來年の春の頃。

○うきま、の云々　花を見て立腹も收まり、自ら破顏一笑する快さをいふ。

○ゆづり見て　折ることを控へて置、眺めし。

降らじとはいひなせれども花を見る衣の袖の雨のあとかな

折花

折りとるはうれじからじを櫻花世の中ざまにゑめる顏なる

折山花

手折る間に皆散りはてし花の枝つとにならねど人に見せばや

惜花

さらにきて見むといひしか山櫻又の春べになるぞわびしき

花ざかり

うきまゝの世の腹立も咲きけちておのがゑまひになせる花かな

花閒月

さかりなる一木の花の中つ枝の思ふところにいづる月かげ

花ざかり

花の枝もらふもやるも都路をもてゆきちがふさかりなりけり

折花

ゆづり見て誰も手ふれぬ花の枝心なしにてわが手折らばや

折りとれば枝の花こそすくなけれ咲き重なりて見えしまがひに

花山歸路

とゞまらでわれもいぬれば櫻花ちるかたうどになりぬべきかな

山ざくら見し故ならし世のうさもしらぬ人にて歸る夕ぐれ

まきこめて歸るむしろの櫻花ちるにまじりてありしろしに

名所花盛

その程とさかりしろせる暦にもまことたがはぬ三芳野の花

花雨

村雨の心かろくも降りてきて濡るゝさくらになづむなるかな

燈前落花

吹く風にきえもやすると燈をかくせば花のちるは見えずて

旅花

こよひのみ借りたる宿の花ざかり散るは誰見る櫻なるらむ

花を折る人を見る

えもにげぬすくせ悲しき櫻ばな折らるゝ枝の鳥はたつとも

馴花

老の身に似げなき花の色ながらさるこゝろなく馴るゝ花かな

○ちるかたうどになりぬべきかな　自分も散る方の味方になりさうだ。若し歸らないならば、飽くまでも咲いて居てほしいからいふ。

○まきこめて　花を筵の中に卷き入れて。

○その程と　何日頃と。

○なづむ　からくに對して、櫻に心を寄せて躊躇する意。

○散るは誰見る櫻なるらむ　この盛りの櫻の散方を今夜誰が眺めるであらう。

○えもにげぬすくせ悲しき櫻ばな　折られるとも逃げられない運のわるい櫻の花。

○さるこゝろなく　老人に不適當だといふやうな樣子も見せず。

故郷花

故郷の人にゆづりし家ざくら猶わがもののこゝろはなれず

船中花

大さきのいそ山ざくら咲きぬれば陰のまとゐは船にてぞする

廂花

あぢきなく名のみひさしの崩るゝを枝にうけても咲ける花かな

落花

目の前にまだ散るべくはなけれどもうつろはしげに花はみえきぬ

折花

やめかねて今一度とさくら花またちる枝を折りてけるかな

夜落花

時くれば見ゆる見えじのわかちなく花の心も闇にこそちれ

風前落花

ともすればこきまずまじき塵をさへ一つになせる花の下風

雨中落花

折々は雨のまゝにもしたがはで横さまにちる花も見えけり

---

○大さき　紀伊國海草郡。
○陰のまとゐ　花陰の團欒。

○名のみひさしの崩るゝ　「久し」を掛けて、崩るべきでないのを、崩ると受けた。

○うつろはしげに　色の變りさうに。

○やめかねて　止めることは出來ないで。

○こきまずまじき塵　こきまぜるべきでない塵。

落花

風吹けば庭の塵さへ木のもとの花の波にもさわぎつるかな

ちりうする花おほからし木の下につもる限りがさきし程かは

わが前にいつか散りきて居睡のほどとも知らずおける花かな

ちりぬれば所せからぬ庭の面も一木の花になべてふたげつ

惜しめどもとまらずとかやいひ馴れてさておかるべき花ならなくに

となり人こゝろもなきに心なく散りゆくものは櫻なりけり

いとゝくもちりて朽ちぬる櫻花老にまばゆきわざのみぞする

折らるゝも覺えぬ程に手ふるれど心えてちる花の枝かな

水上落花

散りゆくと思ひもあへず川水にうきてまたくる花ざくらかな

二つ三つけさぞ流るゝせと川の花のさき追ひきぬるばかりに

風夜思花

たが宿もちりぬと聞きて我が宿も花おそろしき夜半の山風

瀧邊落花

櫻花ちりしなごりのみゆづりに果てなくおつる瀧を見るかな

○つもる限りがさきし程かは　積る落花の全部は咲いた花の全部ではない意。

○所せからぬ　場所が狹くない。

○惜しめどもとまらずとかや　櫻に對するこの心は、古歌に引例が多い。

○さておかるべき花ならなくに　言ひ馴れた詞通りに打捨てておくべき花ではない。

○こゝろもなきに　何等の風雅心もないのに。

○心なく　無心に。

○老にまばゆきわざ　老人に取つて恥かしいこと。

○折らるゝも覺えぬ程に　折り取られることも木自身には感じない位靜かに。

○せと川　薩摩國出水郡にあるか

○さき追　前驅。

○みゆづり　見較べて他に讓ること。瀧水の白さを落花の白さに喩へた。

○さし柳　地中にさした柳の枝。

○寐くらして　終日眠つて。

遲櫻落花

今さらにおそきを知りておそ櫻ちることのみを急ぎつるかな

野外小店

唯一つかどに立てたる板戸にも吹く風よくる道のべの庵

小鳥

さへづれる聲さへ細きこがらかなさばかりにても鳥の數かも

山家山吹

そなたには窗さへなくて山里の家のそともの山吹の花

柳

さし柳さしていくかも經ぬものを根ざし引き見る友わらはかな

燕

大殿の高き軒端のつばくらめはるかに見れば今ぞ巣かくる

梟

いと長き日を寐くらして梟のねざめにぞなく夕ぐれのころ

煙

おぼろなる月にも見えて芥火の消えしあとより立つ煙かな

旅泊

松も生ひ岩もならびて船にすらとまり／＼の庭もこそあれ

未來

年を經てなきにしるきをよきことのあるべかしくも思ふ行末

長日

ながしとは思ふものから春の日もきのふ／＼になる早さかな

山

とこの山うごくべしともなきものをあゆまひ長く裾を引くらむ

小流

せゝらぎのさゞれにさへて行く水の波だたしげに見ゆる幼さ

少女

里中に遊ぶをとめは結ぼれの解くる帶だに見も知らずして

翁

何事もしらぬ翁のさとじこり誰もあはれといふ人のなき

童

幼げも早なくなれる童さへ背におはるゝや樂しかるらむ

---

○なきにしるきを　ないことがよくわかつて居るのに。
○あるべかしくも　あるらしくも
○思ふものから　思ふものの。
○とこの山　鳥籠山。近江國犬上郡。
○あゆまひ　歩み。此の語の上に「何故」の語を補ふ。
○裾　山の裾。
○さゞれにさへて　さゞれ石に邪魔されて。
○波だたしげに　波を立てるらしく。
○結ぼれの解くる帶　結んだ帶が解けること。
○さとじこり　里凝りで村自慢の意であらうか。

老

何事も聞えひがめて老の身のことたしかなる思はくもなし

老松

老いぬれば松の葉さへもおのづから打ちすげみたる面顔にして

貝

蛤のみかたやいづれわきかねてこなた彼方につく世なりけり

鐘

いづちへと今日はもてゆく風ならむ野寺の鐘の一聲もせぬ

燈

いくたびか心もとなくなるならむけまくやほしき夜半の燈

川

こゝよりはまたそなたへと方かへて流るゝ川の水のしら波

雨晴

けさ見れば夜のまに雨も降りはててことなし顔に歸る白雲

船

紀津川にあぢかはに入る船の帆の行く方わかつ住吉の沖

---

○聞えひがめて　いふことが正しくなくて。
○思はく　考へ。
○打ちすげみたる面顔　齒が脱け落ちて皺になつた老人の顔附。
○みかた　身と味方とを掛く。蛤の中身は、二片の介殼の何れに附屬するか不明であるからいふ。
○けまくやほしき　消えたく思ふのか。
○ことなし顔に　雨を降らしたやうな樣子もなくの意。
○紀津川　木津川。安治川と共に大阪市内。

船路

いくばくか今はきぬると人ごとに問ひきくけさの湊出の船

流水

ゆたけさをみる心地よしゆく水の岩かどめぐる岸の松かげ

山家

深みどり小高き山のいはほより苔生ひつゞく庭のおもかな

雲

白鳥のとば山松になびく雲ひと羽ばかりもするゑにおくれて

閑居夕庭

これのみや今日はありつることならむ松の實一つおちし夕暮

洲

汐みてば唯一重よるうは波に今かくれたる磯のはなれ洲

渡

今までに人をのせこし駒さへものりたる古賀のわたし舟かな

甲

飾りつゝ見れば人めくよろひかなたが魂もこもるばかりに

---

○白鳥のとば山　白鳥のは「とば」の枕詞。
○とば山　飛羽山。大和國生駒郡。
○ひと羽　鳥の縁語で一片の意。
○これのみや　松の實が一つ落ちたこと。
○古賀　筑前國粕屋郡。
○人めくよろひ　生きた人間らしく思はれる鎧。

首

とるものかとらるゝものか二つなき首と一つの我がかぶとこれ

娘

あけぬれど親の心の闇のうちに朝いせさする家の少女子

星

風吹けば空なる星もともしびの動くが如くひかる夜半かな

山寺

心ありてむかふともなき眺めにぞわが見いでたる遠の山寺

來て見れば峯たひらなる高野山のぼらぬ先の心地こそすれ

舟

大船のはしるへさきを危くもおしてよこぎる海人の棚なし

淀船

旅人のいかにのりてか淀船のとまのうへなる數の菅笠

鏡

哀れにもなげきにくもる鏡かなうれたきおのが影をかくして

書

○とるものかとらるゝものか　敵の首を取るか我が首を取られるか

○親の心の闇のうちに　親が子を思ふ迷心のためにの意。後撰集雜兼輔朝臣「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」

○朝い　朝寢。

○棚なし　船棚のない小舟。

○淀船　淀川の船。
○數の菅笠　澤山の菅笠。

○うれたき　うれはしい。

○わがものなしの身　無一物の我が身。
○もたる　持ちたる、
○覆羽　廣げた羽。
○さく花のちる花のとも　咲く花とか散る花とか。
○獨りごちだに　せめて獨言をたけでも。

世の中にわがものなしの身なれども畫に寫してぞもたる海山

羣鶴

親か子か妻にてもあらむ覆羽の蟲取りかはす小田の田鶴むら

水音

ふけゆけば閨の枕のもとにきていはまをくゞる水の音かな

船路

帆上ぐれば船の朝飯たく間にも陸路（くがぢ）一日のほどは來にけり

歌人

老いぬれどまた此の春もさく花のちる花のともいひくらしけり

暮春山家

春くれて永き日さびし山彦も獨りごちだに今日はせよかし

暮春草花

かつ〴〵も實になりゆきてゆく春の末ばかりにも殘る菜の花

山路三月盡

おりたちてえも留まらぬ山道のとくも來にける春のはてかな

三月盡前日

あな嬉しまだありけるを老いぬれば暮れ行く春のひが數へして

首　夏

暮れはてし春のなごりの心から花めかしくも見ゆるかしの芽

風後新樹

けさも猶靡きしまゝにふし柴の若枝は風にこりやしつらむ

雨中池魚

雨降れば池のみな口ならべても喜びがほに浮ぶうろくづ

時　鳥　過

戸をあけし方にはあらで過ぎつらむ聲のみ聞きし初時鳥

時鳥人傳

ひと聲のおぼつかなきも子規さだかになして人のいふらむ

螢

飛ぶ螢くらき木のまを出でて來てなか／＼月にかすかなるかな

夏　草

なでしこの花もまじれる夏草をおしまろめてもになふ里人

江　螢

○ひが數へして　誤算して。

○ふし柴　柴。

○みな口　水口。

○さだかになして　はつきり聞えたといふやうに。

○月にかすかなる　螢火が月光に弱められるからいふ。

おほくらの入江さやかにとぶ螢その一むらに船をやらばや

蓮露

けさ見れば蓮のまろ葉にゆれもあはではしつ方にも竝ぶ白露

新竹

やゝ高くなりもしながら若竹の子なるすがたぞ末にのこれる

竹の子

童こそいたくほりすれくれ竹の子はこのどちの相思ふごと

瞿麥

いでまことといかなる人の寫すにもゑがくはおとる撫子の花

卯花

わがすめる里には高き嶺もなし夏見る雪は垣の卯の花

旅中川

旅すれば軒の上にも行く川の底ばかりなる宿もこそかれ

夏松

松さへも枝の下風とほしやりて腋すゞしらにたてるいそかな

わらは

○おほくらの入江　巨椋っ　山城國紀伊郡。

○童こそいたくほりすれ　童は大層竹の子を好む。

○このどち　子供同志。

○ゑがくはおとる　畫に書いたものの方が見劣りがする。

○腋すゞしらに　松の枝の下を人の腋下に見做す。

幼きもまた幼きをなつかしみ鳥の子いだく里のたわらは

慾

そなたにはよくも離れてあるものを又まどはするあたら市人

棘

卯の花の雪にまがふにまがひても川邊のいばら盛りなりけり

藤

荒山の岩ほまき出でていさましきかつらにも似ぬ藤波の花

蓴

けさは三つきのふは二つうきぬなは寂しき池の心葉ぞかし

雨後水草

みなぎはの今ひとときはもまさりこば沉みはつべき川骨の花

湖邊夕立

みづうみにかきくらしゆく雲見えてけさ夕立のしがの山越

鳥

夏川のすさきにむるゝ村鳥おのがゆあびは瀬にてなりけり

蛙

○幼きも　幼兒。
○また幼きを　鳥の子を指す。
○よくも離れて　能く慾を掛く。
○卯の花の雪にまがふにまがひて　卯の花が雪に似る、その又卯の花に棘の花が似る。
○うきぬなは　水面に浮いたじゆんさい。
○心葉　心。
○夕立のしがの山越　夕立のする意に志賀の山を掛く。
○ゆあび　湯浴。

清き川にごれる沼におのづから聲なきわけて住むかはづかな

笋

知らぬまに生ひいでて門に竹の子のそこにて高くなる景色かな

老旅

程ちかく限りきぬべき老の身にゆくすゑわかぬ旅もこそすれ

夏菊

夏咲くは夏の景色に菊の花姿さへこそすゞしかりけれ

行路卯花

咲きつゞく卯の花垣のもとすぎてにはかにくらき夕ぐれの道

岸蘆

岸遠くさせる夕日のかげうけて涼しく見ゆるあしの本立

嶺松

めをのごと見ゆるもあれば嶺の松一木離れてあるもありけり

朝夕立

明くるよりかきくらしきて夏の日の此のあさけより夕だちの空

夕立のはれての後はあだし日の心地になりて宿ぞ涼しき

○にはかにくらき　白い卯の花との對照で、急に暗い感じのする意。

○めを　夫婦。

○あだし日　異なれる日。

團扇

折々にあふぐも夢のうちはかな身にくる風も知らぬうたゝね

老

なにごとかいひさして末は忘らるゝ老こそ老の心なりけれ

山郷

山里のすまひを見れば好ましきこともなきこそ好ましげなれ

茶

こぞながら惜しみ残しの木の芽さへ壺の中にてふりぬるがうさ

述懐

うきことは今ぞまほらをあぢきなく世離れたりと思ひつるかな

初秋

けさまだき秋の初霧たちこめて大城の山は野になりにけり

三日月

さながらにありつるものを暫しわがめでうしなへる三日月の影

夕月

暮れぬまもいと面白しねやの月ほのかにさせる影を見いでて

○夢のうちは　夢の中と團扇とを掛く。

○こぞながら　去年の茶でありながら。

○まほら　住むべき土地の意。

○大城の山　筑前國筑紫郡。

○さながらにありつるものを　先程まではそのまゝ三日月が空にあつたものを。

竹間月

移し植ゑて手を放つまも待ちあへず夕月させる軒のなよ竹

雲間月

伏庵の窗ばかりなる雲間にもさもゆきあへる大空の月

門月

門にこそむかひて來たれ峯の月明け放ちてもありしるしに

雲端月

行末は雲ふたがりて見えながら方たがへてもゆかぬ月かな

庭月

庭の面のあまり清さに見も出でず身を引き入れて見たる月かげ

庵月

おくもなき臥屋のうちとあさべてか入るとみるまに出づる月影

荒屋月

ふせ庵のねやの板戸のかずたらでなか／＼あかき夜すがらの月

見月

我が庵のくまなきそらに嬉しくも來べきさまにてむかふ月影

○あさべてか　輕蔑してか。

○板戸のかずたらで　板戸の隙間の多いことをいふ。

雨中月

月は今わがやの上にきたるらむ雨ふる梢てりがほにして

庵月

夕されば取りちらしてしくしげども皆おしやりて入るゝ月影

雲間月

村雲のおしくゝまれるそぎへにもある時はある秋の夜の月

浦月

なだの沖のこなた見やりて行く月に一人向へる人のなきかな

野月

花のごとつとに折られぬ月なれど歸る野べよりたぐひてぞくる

獨見月

つどひして物さわがしくめでましや一つの月は獨りこそ見め

荒家月

あるじだに心もつかぬ我が庵のあれし板間を知れる月かな

山家歸路月

歸るさを送りくるまに山里の月もみやこの月になりゆく

○くしげ　櫛笥。

○おしくゝまれるそぎへ　推し包まれる遠く離れた方。

○なた　奈多。筑前國粕屋郡。

○たぐひてぞくる　月も一緒に來る。

夜々見月

よひ／＼に眺めし月ともろともに友のまとゐもかくる頃かな

萩露

花をまつ心忘れて見つるかな露つやゝげにおける萩の葉

夕露

秋の野の花にたはれて寐てしまにぬぎおく太刀の鞘の夕霧

きり

野も山もけさ立ちこめて誰が里も見えぬ霧こそ見渡されけれ

薄

窗の外にすゞろひて立つ花薄秋寒くなるしるしとぞ見る

根ざしゆくかたに生ひでて花薄また一むらになりにけるかな

秋の日のさびしき時は花薄そなた向けるもうとましげなる

蟲

おるつゞるくだ巻く蟲の女びてなつかしげにも鳴く茅原かな

促織

まことにも機おる蟲ぞ機おりめはてに添へたる聲のをさ音

○かくる　月が缺けると團欒が減り行くことを掛く。

○すゞろひて　漫然として。

○秋の日のさびしき云々　芭蕉の「こちら向け我も寂しき秋の暮」の趣である。

○おるつゞるくだ巻く蟲　綴る機る管巻く蟲で、管巻といふ蟲を指す。

○機おりめ　機の織目。

○はてに添へたる聲のをさ音　最後に一聲鳴き添へた聲が機の筬の音に似てゐる。

○菊いたゞき　燕雀類の一種。
○殘れる花　殘菊の意。
○ちりうくなべに　散り浮くと共に。

---

蟋蟀

まぢかさに驚ききけば細櫃のそこに來て啼くきり〴〵すかな

秋風

大空に日はてりながらうき雲のかくす間さむき秋の山風

蜻蛉

旅人の道ゆく笠のうへにさへあなづらはしくゐるあきつかな

秋鳥

なつかしく菊いたゞきの聲すなり殘れる花も見えぬ垣根に

小流紅葉

ゆく川の水わづかなる水尾（みを）にさへ流れわきてもやる紅葉かな

山路秋興

もみぢ葉のちりうくなべに扇さへ流しそへても見つる山川

秋閑窗

たけたかく匂ふさかりは秋萩の花くゝみにも窗の見ゆらむ

鑪火

隙もなくたかねばもえぬ鑪火かな身の暖けくなる時もなく

○さもおもむけて　自然のまゝの風情に從はせて。
○三栗　一個の毬の中に三個の實がある栗。
○みなし栗　中實のない栗。
○かたなり　未熟。
○いかづちのそゝきが峯　筑前國絲島郡。そゝきは屛增岐。
○かつまの沖　勝馬。筑前國粕屋郡。

瓶花

折らぬまはかくやありしと花瓶にさもおもむけてさせる秋萩

三栗

三つの内のみなし栗こそ悲しけれかたなりにだになりおくれつゝ

孑孑

ちりうかぶ松のひと葉におどろきて蚊になる蟲の沈む水底

長夜

長き夜にあきぬる時はいねかへてそなたむくさへ珍らしきかな

初冬

のどかなる空はにたれど神無月春といふには短かしの日や

山時雨

いかづちのそゝきが峯の初時雨ちかくこぬまに雲消えにけり

田家時雨

降りいづる空をも知らず門田までぬれにいでたる夕時雨かな

海時雨

見わたせばかつまの沖のひろの海のいく所にか時雨降るらむ

月前時雨

照る月のなべて照らせる冬の野をところどころになす時雨かな

夜路時雨

さ夜時雨ふるとて開くからかさに月もさしたる里の通ひ路

船中時雨

むら時雨沖べを過ぎておろしあへぬ船の帆綱にしづく白露

鴨

面白く波に浮べるあし鴨はおのれ舟なることちとぞみる

そほづ

を山田の時雨にあひて我が身さへそほづになれる夕暮の道

鴨

けさ見れば汀の鴨の身づからもおきならべたる友ねぶりかな

埋火

暖(あたゝ)げもなげになり行く時しもぞ離れがてなる夜半の埋火

つくづくとたぶさ老いたる程を見てあたりうげなる埋火の上

千鳥

○おろしあへぬ船の帆綱　時雨が俄で、船の帆綱を下しきれない。

○そほづ　「そほつ」の意を掛く。

○友ねぶり　皆一様に眠ること。

風あらく向ふ波路も友千鳥ともあはせたるちからにぞゆく

いく度か影うしなひし飛ぶ千鳥身ををれかへる波のまぎれに

たつ波の立ちのさわぎに友ちどり雲ゐに高くあぐる一むら

雨中鳰

うかびいでて時雨にぬるゝにほ鳥の雨よぎ顔に沈むなるかな

鶴

さ波立つ水田にたてるまなづるのおし羽も寒くあたる朝風

寒燈

たゞ一つのこるともしびながらも冬の夜ふけて影ぞさむけき

庵落葉

木の葉さへこゝにかくれて山風をよきどころなる庵のかた陰

松落葉

一かたに向ひて散れる松の葉に風の行方をしるす庭かな

待雪

神無月のどけくなりて雪のみかまぎらはしにも降らぬ朝霜

冬月

○ともあはせたるちからにぞ　共力を以て。
○をれかへる　身と波と両方にかかる。
○おし羽　翼のもとの方にある柔かく短き羽。
○ともしびながらも　「ながらも」は「さながらも」の誤りであらう。
○よきどころ　避ける所。
○まぎらはしにも降らぬ朝霜　雪かと紛らはせる朝霜も降らない。

○頃しもあれ　頃も頃恰度その頃に。
○海廣きなごの云々　金葉集冬源頼綱朝臣「衣手によごの浦風さえざえてこだかみ山に雪降りにけり」
○ほだ　榾。
○都にかはる　新葉集羇旅後醍醐天皇「影やどす月さへ今はなれにけり都にかはる袖の白露」
○もとの姿は云々　春になれば雪が消え行くからいふ。

冬寒み見る人たゆる頃しもあれさやけき月の幾夜つゞきぞ

寒月漏閨

身をよきて見るぞ寒けき板閨よりさえ通りたるねやの月影

冬風

海廣きなごの沖よりさえ／＼てさもほそげなる風の吹くらむ

冬山家

ほだ焚けばなま／＼し木もよくもえて都にかはる冬の山里

冬雲

何とかや月にはあらでおそろしき物もいづべき冬の夜の雲

雪

限りなくきのふも今日も積るかな春まで見るはこれやこの雪

積りたる雪に雪ふる冬の山もとの姿は春こそは見め

樹々積雪

木ごとにはつもりてあれど降る雪の花も櫻にまされるはなし

雪中行路

ゆき深みたゞ一筋をふみわけて大路もけさはせまき細道

山家歳暮

山中はなか〳〵鬼やすまざらむやらふ音なき年の暮かな

歳暮

正月(むつき)より月々にありし月のはて年のはてにもなりにけるかな

# 下卷

春雲

冱えかへる空をうたてといひもあへず嬉しき雪も降る春べかな

鄰鶯

さばかりの我が身じろきにかげうせてとなりの聲になれる鶯

鶯

梅が枝にひとく〳〵となきながら見ぬかほつくる庭の鶯

夕鶯

夕づく日うつろふ窗にうつるかな梅に木づたふ鶯のかげ

行路鶯

ゆく人をとほく過して花のまに又なきいづるうぐひすの聲

○やらふ音　追儺をする聲。

○月のはて年のはて　十二月が卽ち一年の終りの意。

○うたてといひもあへず　厭だといひも終らない中に。
○春べ　春の頃。

○さばかりの我が身じろきに　僅かばかり自分が身體を動かした爲に。

○梅が枝にひとく〳〵云々　古今集卷十九「梅の花見にこそ來つれ鶯のひとく〳〵と厭ひしもをる」ひとくに人來の意を含む。
○見ぬかほつくる　人を見ないふりをする。
○夕づく日うつろふ窗　夕日の映る窗。

梅香

庵の戸を少しひらくを園生より知り顔に來る夜半の梅が香

閑居梅香

とふ人をいとふためともなかりけり梅の香ごめにさせる我が門

餘寒

時のまに春とも見えず北山の雪げの雲の日をおほひきて

濁醪

み冬よりかみて飲みたる酒さへも殘る寒さの程はありけり

歸鴈

來ぬるかと見れば程なくわらはべの歸りいそぎの春の鴈がね

梅香

ちる花にたぐひはゆかで梅が香の閨の内外にまよひぬるかな

鶯

咲く梅の花すゝろひもにくからで身をさかさまにすがる鶯

水上梅

水ちかくうちたれて來て梅の花とざまかくざまさす小枝かな

○梅の香ごめにさせる我が門　梅の香を外に出さぬために門を閉めたので、客を厭ふ爲ではない。

○かみて　醸して。

○殘る寒さの程はありけり　餘寒中飲む分量位は殘つてゐる。

○わらべの　子供の如く。

○歸りいそぎ　歸り支度。

○たぐひはゆかで　伴うてはゆかずして。

○花すゝろひ　花をすゝること。

○とざまかくざま　あちらこちら

○かつま　勝馬。筑前國粕屋郡。
○磯菜　磯に生える食用の草。
○ふき上　風の吹き上げる所。
○あらゝ松原　疎らな松原。神功紀「をち方のあらゝ松原云々。」
○もとばかりして　幹だけが見えて。
○かたぶけば月影さむくさゆるかな　月が西に傾くにつれて霞も薄らぎ月光も明らかとなるのでいふ
○中空　月が眞上に來た頃。
○なの川　筑前國筑紫郡の雛の河であらう。
○流れあさゞ　流れの淺い意にあさゞ(水草)を掛く。

いそな

雪消えてかつまの磯菜ふき上のまさごの下に又うもれけり

霞

庭きよく拂ひてけりと見るばかりはれたる空の朝霞かな

野霞

立ちかはる霞を見れば朝な〱きのふにおなじ野はなかりけり

原霞

春霞ながるゝまゝにをちかたのあらゝ松原もとばかりして

春月

かどをいでて月のありかを知らぬまもまづ朧夜の面白きかな

かたぶけば月影さむくさゆるかな中空までや春のおぼろ夜

荇（あさゞ）

おりたちて誰つまざらむなの川の流れあさゞも生ふるこのごろ

橋霞

をちこちに霞たな引く野べの橋渡るまじきも渡りてぞ見る

春水

○おもひあてても　推察しても。
○亂れたるけしきも見せで　花ならば亂れた姿も見せるのに對していふ。
○まごえ　孫枝。
○もゝち鳥さへづる春　古今集春讀人不知「百千鳥囀る春はものごとに改まれども我ぞふりゆく」
○わりなく　無分別にも。

冬氷うちとけすぎて春川の岸の茅原にあがる山水

折梅

えもいはず心にほしき梅の枝おもひあてても人のをれかし

風前霞

亂れたるけしきも見せで山風のたてば霞のいつよりかなき

栽柳

折りとりてさしし姿もうせなくにうち垂れがほになる柳かな

柳絲

あさましく庵の軒端はあれたれど靡きよりてもそふ柳かな

打垂るゝしだり柳の枝のえだ土につけるは何のまごえぞ

雪折のくやしかりつる一枝よりちゞに生ひいづる青柳の絲

待春雪

今はたゞ見じと思ひし春の雪ふればふるとて又待たれけり

歸雁

もゝち鳥さへづる春の聲のうちにわりなく雁の別れをぞする

楝實

年ごとになに故となく冬をへて春にあふちのみは殘りけり

土筆

行く人をゐなか童の見るばかりたち竝びたるつく〴〵しかな

燕

つばくらめ親まちかねてならべれば我も遲しと見る軒端かな

雲雀

雲に鳴くひばりの聲は絶えにけり見いでぬ先に落ちやしぬらし

茶樹

さともなき頃より花のさく木かな芽もつまでこそ生ひ茂らせめ

春色似畫

山とほくたてる霞のまへに今朝かいそへたりと見ゆる松村

春鳥

わがたづき身にもまさりて春霞立野の原の鳥のゆきかひ

もゝ千鳥さへづる聲のたえまにも獨り續けてなくこがらかな

潦水

木のまより流れ出でたる庭たづみ流れはゆかではるゝ雨かな

---

○春にあふちのみは殘りけり　春にあふ我が身が生き殘る意に楝のみか殘る意を掛く。
○行く人を云々　土筆の竝び生えた樣を、田舍の子供達がつくねんと、見なれぬ人を見送る趣に喩へた。
○我も遲し　親の來るのを待つ燕に同情した語。
○かいそへたり　書き添へた。
○春霞立野の原　春霞の立ちと立野(大和國生駒郡)とを掛く。
○こがら　小雀。燕雀類。

○あさとでに　朝戸出に。朝出掛ける時に。

○花よりと　花から月が現はれるかと。

○ふゝめり　蕾がふくらんだ。

○あみじまの櫻の宮　攝津國東成郡。

○面白き枝の陰云々　枝ぶりのよい下陰を選んで自分が坐る意。

○櫻のみこそ櫻とは見れ　櫻の花の白々と夕闇の中に目に立つ趣。

---

夜中花開

あさとでに人驚かすためならむ夜に隠れても花の咲けるは

春月

我が宿の花よりとこそ思ひしか出で來るかたをかふる月かな

待花

咲きつやと又もとひこば櫻花まだとばかりはえこそいはれね

ふゝめりと思ひし庭の櫻花ひらくを見ればわか葉なりけり

櫻の宮

あみじまの櫻の宮の花ざかり見る人さへも花におとらず

見花

居ならびて見る花なれど面白き枝の陰にはわが身ありけり

夕花

皆人もたそがれごろの夕まぐれ櫻のみこそ櫻とは見れ

船中花

歸り來て寐ての後さへ花見つゝゆられて舟にある心地かな

花下

年をへて中もたがへぬ櫻花われから折れてあればこそあれ
うきめのみ見てこそすぐれひと盛りありなば櫻ちるは何ぞは
櫻花さきなみだりそ今の世はやつるゝにこそ人もあなづれ

里花

我が宿る竹の下道みち折れてむかへば花のおほむらの里

夢中花

さめぬれど夢に見えつる花の枝とらへながらにある心地かな

折花

折りためて一つにもたる花の枝引きわかつ手にちるぞわびしき

花

あはれさの程は知らずて大かたは花なき宿もなき世なりけり
木のもとにゆきかはしめて櫻花おのがつかへに主をぞする
よそはしくかゞやかすともなき花は人に物はぢする樣もなし
待ちかねてはらだたしくもなる人を咲きてゐますする花櫻かな
まことには指をもささじさくら花今夜の夢に一枝をらせよ
宿にしてめでし心の見ゆづりにいづこの花もおのがとぞ見る

---

○中もたがへぬ　中たがへをしない。
○われから折れて云々　それも自分から下手に出て櫻を專念に愛でるからである。
○うきめのみ云々　自分は憂目ばかり見て過してゐる。
○ひと盛り云々　古今集春承均法師「いざ櫻吾も散りなむ一盛りありなば人に憂目見えなむ」
○やつるゝに　見ざまがわるくなることさ。
○花のおほむらの里　花の多いことと大村の里とを掛く。大村は肥前國のそれであらう。
○あはれさの程は知らずて　花の趣は解らなくても。
○よそはしくかゞやかすともなき花　著飾ることさへのない花。
○指をもささじ　一指をも觸れない。一枝を折れば一指を切るを下心にしたのであらう。
○宿にしてめでし心の見ゆづりに　我が宿で花を賞した心が他へさ移つて行くために。

垂櫻

まとゐする人のなかにも打ちたれて咲きまじりたる絲櫻かな

絲櫻絲うちたるゝさま見れば柳が枝に咲かせたるかな

雨中花柳

雨ふればかはす枝々うつりきて櫻の露も青柳の露

花下

いそぎこし花のもとにて悔しきはきこえおどしの里の友人

月下折枝

折りとりし花を惜しとや木のまよりもたる一枝をてらす月影

深山花

むくつけきものさへ住める奥山になにの心もなくさくらかな

花枝

たが手にて見るにもおなじ花なれど先づとらまくのほしき枝かな

はしゐ

世の中のはしたものなる我が身こそ花にま近きすのこにはをれ

夢山花

○きこえおどし　この花が非常に立派だと誇張して話す意。

○もたる　手に持ちたる。

○むくつけきもの　氣味のわるい怖ろしいもの。

○さくらかな　咲く櫻かなの意。

○はしゐ　端居。

○はしたもの　中途半端。

○すのこにはをれ　緣側に居る身は内外の堺で、卽ちはしたものたる位置だからいふ。

あかずして歸りし故か思ひねの夢路につゞく花の山道

思花

手折りつる跡みぐるしき花の枝なりあふまではいかに久しき

折りとれば折りし枝口くちいりて心よわくも咲く櫻かな

病牀見花

寐ねかへて見るこなたにも櫻花おなじものから珍らしげなる

戸花

昨日より垣根の花の開け戸のくま戸もいたくみやびぬるかな

野遊

昔よりさもあくがるゝ癖つきてかへるさなしの春の野遊

春日人來

櫻さく春のみじか夜明けたてばおとなひしるき人ぞ來ませる

旅中花

あすまではあらじと思ふ花をのみ見てゆく旅になりにけるかな

月前花

出ではてて月もならびぬ櫻花くらべ見よともいはぬばかりに

---

○なりあふ　もとのまゝに生ひ育つ。

○おなじものから　同じ櫻ではあるけれども。

○花の開け戸のくま戸　花の開くと開き所なる隈戸とを掛く。

○かへるさなし　歸ることも忘れる意。

○おとなひしるき人　大聲で案内を乞ふ人。

○出ではてて　山の端を離れてしまつて。

花下

かた山の花の下かげ家をなみあらばと人になげかしめつゝ

花前待月

こよひさく花を見出でていかさまにおそき月をも待つ心かな

春夕

はつ〳〵も手はふれながらとりかねて花折りやむる春の夕暮

乞花

花を折る人のとふこそ侘しけれ有るをも無しといふと思ひて

春夢

たとへなく折らまほしさを櫻花見る夢にてもいひやしつらむ

落花

いからしき山風たてば櫻花音ばかりにもおそれてぞ散る

風ふけばやすくも塵にこきまぜて花もうづまく庭の面かな

はしたなき草のまろやの櫻花木かげも閨もわきなくぞちる

かねてよりたゝみこめてもあり顔に開く扇に花のちるらむ

ちるといへばたべて砕くる櫻花はふらかしたる心にぞ似る

○家をなみあらばと　憩ふ家がないので、若しあつならばどんなによいだらうと。

○はつ〳〵に　すれ〳〵に。

○いからしき　烈しい。

○はしたなき草のまろや　見すぼらしい草庵。
○わきなく　區別なく。
○はふらかしたる心　打捨ててしまつた心。

夢中落花

夢にてはちりし軒端の櫻花さむるまに／＼又咲きにけり

門落花

ものごひの手にさへ門の櫻花あたふるばかりちる朝けかな

落花

さかりかと思ひしほどに庭櫻ちるけしき立つ千々の花びら

何ゆゑに風の神にはあたまれて散らさでおかぬ櫻なるらむ

散りくるをむかへて立てるわれよりもうはの空ゆく花の山風

雨中落花

降るとだに見えぬ小雨も咲く花のもろき心にこたへてぞ散る

鄰花

散りはててなしとは聞けど垣越しに思へば花のありげなるかな

風後落花

風たえて梢をみればさくら花われから散るは二つ三つのみ

風ふけばまじろくまにも吾が前にこし方わかぬ花のちるらむ

水上落花

○ものごひ　乞食。

○あたまれて　惡まれて。

○うはの空ゆく　上空を飛び行くに心が落ちつかない意を掛く。

○こたへて　應じて。

○われから散るは　風のためではなくて、花自身で散るのは。

○まじろく　目ばたきをする。

○こし方わかぬ花　何所から飛んで來たか解らぬ花。

○みなわ　水沫。

○しきり〳〵て　一葩づゝになつて。

○あまりに水の云々　池面に一花も浮けず餘りに風情なきをいふ。

掬びあぐる山下水のあわ消えてしづまるまゝに浮ぶ花かな

散りうけばおなじ心にみなわさへ花にそひても行く川瀬かな

川風の吹くたび〳〵に散りつらむしきり〳〵て花ぞ流るゝ

羣　鳥

さま〴〵の鳥面白きゆふ花にまた加はりぬひわの一むら

庭落花

くちもせで久しく庭にある花をなにしか枝におかぬ山風

春　池

散りぬれば一花殘す影もなくあまりに水のありのまゝなる

故鄕落花

さかりにも人こざりつるさま見えて庭草高し花の故里

春　日

何事もなすわざなくて長き日に日のありかをば幾度か見し

遲しとは思へど早きものならむ西にいたれる春の日の影

暮　春

春ふかくなりぬる宿の百千鳥うち羽ぶけどもちる花もなし

暮春人來

くれはつる春の夕の寂しきに歸らばとはぬ人やまさらむ

海上眺望

手にだにもすゑて見るべき妹が島遙かに細く幼けにして

蕪大根

春深みおほねかぶらも諸共に花のたぐひになれるころかな

鯉

ちとせ川岸の柳の影しめてたがすなどれる子ごもりの鯉

筏

くれて行く春をも知らずやり顔に瀨々の筏の水尾くだしかな

茨

いばらさへ花の盛りはやはらびて折る手さはりもなき姿かな

鬼の子は鬼なりけりな今年生ひの茨もいばらありと見ゆるは

初螢

草がくれまがひし露もあさぢ原まこと今夜はとぶ螢かな

軒螢

---

○歸らばとはぬ人やまさらむ　今客が歸るならば、尋ねてくれない人の方がまだしもである。

○妹が島　紀伊國海草郡。

○ちとせ川　筑後國の筑後川。

○子ごもりの鯉　子を腹に持ちたる鯉。

○くれて行く春云々　新古今集春寂蓮法師「暮れて行く春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟」

○やり顏に　筏を進め顏に。

○やはらびて　和ぎて。

○今年生ひの茨もいばらあり　今年生えた若々しい茨にもやはりとげはある。

○まがひし露　露の光と螢の光と一寸區別がつかない意。

○竹の根の　竹の根の如く。
○そのまゝ　その時間と竹の節間とを掛く。
○ふしつゞけ　臥し續け。寢つゞけ。ふしは竹の緣語。
○うどめ　獨活の芽。

川風にむかふ螢の行きかねてたゞよふ軒の松の下かげ

山梨子

み山よりうつし植ゑにし山梨のましろき花ぞ夏はすゞしき

螢

わらはべの紙につゝめる螢さへ夕になればともしぬるかな

扇

夏たちてひらく扇の畫をみれば立ちのこりたる春霞かな

竹根

竹の根のそのまゝ短き夏の夜はふしつゞけにや晝もねてまし

村童

うどめほる谷の底なる少女どもまれには峯の行きかひも見よ

涅槃會

かくれます佛の御影をがみてはその世の人と泣く心かな

待時鳥

いつも／＼宵よりなくを子規心得がたき夜ふかさぞかし

郭公一聲

○峯の行きかひ　峯にかゝる雲の去來。
○底にも影　水底にも日影。

○さみだれは　五月雨が降れば。
○川島の里　筑前國朝倉郡。

○すがるやがても　とまるとすぐに。
○かやすさ　手輕の樣子。

○ふゝむ　含む。

あなはかなおのがくせにて時鳥また一聲のこよひなりけり

夏海

てれる日も涼しき磯の水をあさみ底にも影のよするさゞ波

夕早苗

とりはてしさ苗を見ればば水の面の月の上にも植ゑてけるかな

五月雨

五月雨の晴間を乞ひて一つだに星のかげこそ仰ぎもとむれ

里五月雨

さみだれば渡りなれたる橋たえて近きもとほき川島の里

蟬

松が枝にすがるやがても鳴く蟬のそのかやすさは我ぞともしき

虹

晴れ殘るたゞ一むらの雲にのみわづかにのこる夏の夕虹

夏雨後

はれぬれど梢にふゝむ夜半の雨にてる日涼しく見ゆる杉村

夕立

降る降らぬ定めかねたる景色しておのれなづめる夕立の雲

夏夕

庭草に水そゝぎたる夕まぐれ涼しといふは清きなりけり

五月雨將晴

さみだれの時過ぎぬらしおのづから夕立めきて降りもつゞかず

水鶏

里人は小田にくひなも聞き馴れて聲のうちにも唄うたふなり

藻

打ちたるゝ柳の絲にすがりても引かれじとする浪の亂れ藻

瓜

かくばかり實にしなりては市にてもうりをしげなる物にやはあらぬ

蓮花

夕ぐれの風を涼しとねぶるまに蓮の一花ちりつくしけり

蓮葉

濁りにはそまぬものから蓮葉の世の塵につぐ絲はありけり

虹

---

○おのれなづめる夕立の雲　夕立の雲自身が躊躇する意。

○聲のうちにも　水鶏の鳴ける最中にも。

○うりをしげなる　瓜と賣りとを掛く。

○濁りには云々　古今集夏僧正遍昭「蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく」

あさくらの夕山こえてよそのせにうつろふ虹の影を見るかな

篠

かつ〴〵も園生にたてる竹の皮おのれしらずに落つるころかな

紫陽花

移りゆく日數を見せてかたへより濃く薄くなる紫陽花の花

蜻蛉

かげろふの羽つくろひも涼しきに白茅が末をすぐる秋風

初秋

秋立ちても未鳴く野べのしづけさに萩の盛りはいつかとぞ思ふ

萩落花

枝ごとにかゝげて見れば萩の花こぼれし程はかくしぬるかな

すゝき

來し秋をうたがひがほに花薄ほにいでさして幾日へぬらむ

うらやすくむかひかへたる薄原昨日はそなた今日は此方に

秋の野をよそより見れば千草かは唯一色の尾花なりけり

穗にいでし尾花が中にをしげなく駒引き入るゝいちの里人

○あさくらの夕山　筑前國朝倉郡の朝倉山。
○よそのせ　よそは同郡の惠蘇であらうか。
○かつ〴〵も　辛うじて。
○ほにいでさして　中途まで穗を出して。
○うらやすくむかひかへたる薄原　風の吹くがまゝに氣輕に薄が方向をかへること。
○秋の野をよそより云々　古今集讀人不知「綠なる一つ草とぞ春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける」
○いち　伊知。筑前國筑紫郡。

〇ふくだめる　ふくらめる。

〇をのこめけるもなきものを　男らしいものはなく、皆女らしいものばかりであるのに。

〇夕ばえのあたひ　夕日に映えるすばらしい價値ある趣。

〇芝の里　筑前國朝倉郡。

---

雨中萩

長閑なる日にふくだめる萩の穗もしをれて寒くふる時雨かな

豆

わりて見る度に面白しいつ〳〵も並べるさまのおなじさや豆

草花

都人見しこともあらじをとめらが箕に折りたむる秋草の花

女郎花

秋草はをのこめけるもなきものをひともゝ名におふ女郎花かな

女郎花この一むらの夕ばえのあたひはしらじ芝の里人

水邊葛

川岸に浮べすてたる船にだに綱手づたひにきぬる葛花

なでしこ

放つ矢のゆくへたづぬる草むらに見いでて折れる撫子の花

芋

はきだめの塵の下なる芋すらも子は親にこそつきてありけれ

朝顔

夕まぐれ今も咲くべき氣色してけふは暮れぬる朝顔の花
おのれからはかなく咲きておく露に涙ぐましく見ゆる朝顔
折りとればあらぬかたむく朝顔も扇にだにとうけて見るかな

出　月

今までは待ちと待たれて山の端をいではなるゝは惜しき月かな
月影をいだしはなちて山の端にしぞきもどれる夕ぐれの雲

月夜歸路

山べより歸るわが身を送り來てあくれば門を月もいりけり

雲中月

薄雲に覆ひとられし夜半ながら月を心に抱きてぞぬる

月　虧

山の端をいではなれゆく月見れば望にもあらぬ影ぞ寂しき

水　月

浮べつゝゆくとはなしに日の上を只過ぎにのみ過ぐる川水

梨

絶えて世になくはなしにてあらましを侘しきまゝにありのみぞうき

○しぞきもどれる　退き戻れる。
○あくれば門を　門を開けるとそれと共に。
○月を心に抱きてぞぬる　月を深く思うて寐る意。
○なくはなしにてあらましを　生きてゐないならゐないで居りたいのに。梨を掛く。
○侘しきまゝに　侘しいながらも
○ありのみぞうき　生き長らへてゐる我が身ぞ辛い。ありのみ（梨）を掛く。

○もろくぞ落つる　人の死ぬ意をも掛く。

○聞きしばかりぞ　人傳に聞いた許りで、實際聞いたことはない。

○うつせ貝　中身のない貝。

藷署子

時くればもろくぞ落つる山芋のみはたが身にも變らざりけり

蓑蟲

みの蟲は軒に梢に見えながらなくといふことを聞きしばかりぞ

塵

あまりにもさし入る閨の日影かなたゞよふ塵もあらはるゝまで

寐

今はとて打ちぬる時は命さへわが身とともに伸ぶかとぞ思ふ

貝

手にとりて空しと捨つるうつせ貝みな世の中はかくこそありけれ

衣

あはせてはまたとき放つ古衣かくてぞ春も秋も經にける

烏

おのが身にまがふばかりもなれる子を猶はぐゝめる親烏かな

水邊紅葉

山川のあなたの岸の初もみぢ橋なければやけふも殘れる

積雪草

まとひ行く方にもねざすつぼ草のたえてたゞもとを忘れやはせぬ

刈田

見わたせば秋の千町田かりはてて我が庵一つ殘しぬるかな

機織

はたおりめはたもの細き音すなりいかにか狹きおのが細布

鈴蟲

淺茅原ひとつになれる蟲の音にふりはなれても鈴蟲のなく

月前鐘聲

夕まぐれ暮るゝを告ぐるかねの音とともに月出づる野べの古寺

月

よく見ればわれにめやすく親しくて遠くもあらぬ空の月影

曉月

夜々をへて虧(か)けし程さへ半ばなる空にあけゆく有明の月

海月

我が宿のものなりつるをとゞめえで遠くやりつる海原の月

---

○つぼ草　連錢草。莖が地上を匍ふ。

○千町田　廣い田。

○はたもの　機織道具。

○ふりはなれても云々　鈴蟲の聲が他の蟲の聲よりも一段と耳につく意。ふりは鈴の緣語。

○めやすく　見よく。

○我が宿のものなりつるを　初めは我が宿を照らしてゐたが。

雲中月

薄雲にねぶりがほなる空の月晴るゝは夢のさむるなりけり

杉月

一本の杉のこずゑもおのづから月をみ山のけしきにぞたつ

名所月

いさよひて高くもならぬ宵のまやわがものと見る月隈（つきくま）の里

鹿

嶺（ね）つゞきに過ぎ行く鹿の數みゆるあなたおもては月や出づらむ

袷衣

ちぎりあれば尾花が中を宿にしてはかなき袖のふり袷かな

山家羣鹿

都人とひきてあらば見せましを川かみわたる鹿の一むれ

水底月

たゞ一葉ちりてうかめる桐の葉のかげいでかぬる水底の月

鴈

打ちむれて騷ぎたてども小田の鴈ゆく方見ればつらも亂れず

---

○月をみ山　月を見るとみ山とを掛く。

○いさよひて　ためらひて。

○月隈の里　筑前國筑紫郡。

○あなたおもて　山のあちら側。

○つら　列。

雨中出月

かきくらし雨はふれども嶺の月こゝろのうちに出づるころかな

窗月

あかからぬ方もなかりし窗の戸の只かたそばに殘る月影

そほづ

田を遠み笠の下おもよく見えで誰にか似たるそほづなるらむ

葛

行く方におのがたつきのなければやそらに抱きてまとふ葛花

雲開月

雲もなき空も一むき見えぬるを道をかへてもゆかぬ月かな

水月

まどかにて時のま見せよ終夜ながれみだるゝ河の瀨の月

出月

永き夜の明くるにしばしさき立ちてこは月いづる横雲の空

燈

秋の夜はまくらべちかき燈の遠くあるだにうとましきかな

○かたそば　片端。

○笠の下おも　笠に覆はれた顔。

○たつき　たよりとすべきもの。
○そらに　空間で。

○一むき　一筋。

○こは月いづる横雲の空　太陽が出ると思つたのに月が出たので、こはと驚いたのである。

○ひとくはに　一鍬の土のために
○おとし水　秋、稲のみのつたる時、田を乾すために水をおとすをいふ。
○庭たゝき　鶺鴒の異名。庭はかわかぬにもかゝる。
○さしやめて　棹をやめて。

秋水

小田の畦の只ひとくはにおとし水音もなきまでなれる夕暮

鶺鴒

村雨のはるゝ空よりとくもきていまだかわかぬ庭たゝきかな

雨夜鐘

さ夜時雨遠ざかりゆく音かへて近づくをちの曉の鐘

鯉

おもしろく降る村雨やうれしけむかしら出でても浮ぶ淀鯉

鴛

獨りすむをしかと見れば汀なる蘆の葉かげに妻もありけり

谷道

ひとりして行くにもせまき山のまに水さへそひて下る細道

川船

さしやめて流るゝ水にまかすれば艫も舳もなく下る川船

星

數しらずさやかに見えて大空の星ばかりこそ闇なかりけれ

崎

たゝら島こぎ出て見れば唯一つさびしく見ゆる崎守の庵

山雲

まち渡る月より外になにごとぞおのれも添ひて出づる白雲

山家

いはほさへめぐりめぐれる山里のかけひのまゝにゆく心かな

塘

見渡せば川にそひたるつゝみさへ流るゝ水の姿なるかな

栗

なれかねてつな引きあがく猫の子も手玉にとれる庭のおち栗

羽帚

白雲にはねうちつけて飛ぶ鶴のつばさも今は塵ぞはらへる

仇

いきたるを殺さじといはば仇をなす虎狼も市に出ぬべし

貝

いづくにか我が身來ぬると思ふらむ市にまろべるなだの蛤

○たゝら島　多々羅島。筑前國粕屋郡。

○つゝみさへ流るゝ水の姿　水の流れに從つて堤が築かれてゐること。

○白雲にはねうちつけて云々　古今集秋讀人不知「白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月」

○なだ　奈多。筑前國粕屋郡。

松

人かよふ道のながては竝松のならぶすがたも行きがほにして

山松の板わく音のあぢきなさ千歳もちゞにきり碎くやと

山家

山畠のかたはら高きそまにさへまた平らにてすめる一つ家

見てこそは思ひ出らるれ昔へもほのおぼえつるかやの山里

千歳

百年もへがたく見ゆる我が身もてねがひ過ぎたる千代八千代かな

海日

夕日影なかばも海に入る時ぞうね〳〵ひかる沖のさゞなみ

潮

あはれにも潮みち〳〵てたゝら川堤におなじ高さなるかな

橋上行人

たもとだにさはるとなしにたは安く人行きちがふをちの川橋

嬰子

いくばくのおとりまさりも見えぬ子の負へる負はるゝ哀れなるかな

○行きがほにして　歩いて行くやうに思はれて。
○わく　截斷す。
○そま　杣山。
○昔へもほのおぼえつる　昔の有様もほのかに思はれる。
○かやの山　可也山。筑前國絲島郡。
○うね　うねり。
○たゝら川　筑前國粕屋郡。
○たは安く　容易に。

時雨

うら／＼と空長閑なる神無月かかる日にこそ時雨ふるなれ

聞時雨

思ふどち語らひやめてさ夜中の時雨にのみも音せさせけり

月前時雨

もる月に庵のくるゝ戸あけ見れば時雨の雨のふる夜なりけり

山彦

こたへする聲面白み山彦をかぎりもなしによぶわらはかな

落葉

庭に落つる木の葉の一葉音たかみ枕べにやと聞きしさ夜中

時雨

幾里も降りぬらし來てさばかりや殘りすくなき時雨なるらむ

炭

底にのみ殘るくだけの音にさへふくる夜さむきすみ苞(だはら)かな

鵆

村時雨すぎゆく跡の追風にきこえて寒しにほのひと聲

○くるゝ戸　樞戸。

○くだけ　碎け炭。

○のこの浦　能古浦。筑前國早良郡。

○うきはぶきゆけ　飛び羽はたき行く。

○古賀　筑前國粕屋郡。

○沖の石の數にもしるく　沖の石がいくつも現はれることによつて明らかに。

鴨

波のうへに身を投ぐばかりうち入れてやがて靜かにうく鳧(かもめ)かな

千鳥

むら千鳥つばさ細めて向へどもそたたへやらぬのこの浦風

紅鶴(とき)

睦まじき心も空にあらはしておなじ時こそうきはぶきゆけ

干菜

畑の菜の冬の引きぼし家ごとに軒にかけたる古賀の山里

潮

かつ〲もあらはれ出でて沖の石の數にもしるく引く潮かな

有酒

なき時はなくて幾日か過すらむある日は酒のあるに過ぎつゝ

雪

見ぐるしき庭さへ清く降りつもる雪のみ塵の世の外ぞかし

寒月

人影もなくて寒けき大路かなゆくかたとほく月はてらせど

とざしつゝ出でて見ねばやあやにくにこもれる宿を照らす月影

寒松

冬たちて風寒からしなだの磯のあしたかげなる濱の松原

狐

ともすれば犬におはるゝ野狐の顧みるまもなき世しらずて

鐘

いつとなき手枕のまに日は暮れて寐よとの鐘に寐覺をぞする

車

空車むなもといたき宵々の思ひめぐらしなにのためぞも

轉居

われからのことなしびにも世をさけて年月ながくなる心かな

四十一

よそぢとておどろかれしを夢のまに又一歳も加はりにけり

歎世

我が身こそ何とも思はねめこどもの憂して(う)ふなべに憂き此の世かな

友

○あやにくに　意地わるく。

○寐よとの鐘　萬葉集卷四「皆人を寐よとの鐘は打つなれど君をし思へば寐ねがてぬかも」

○空車　むなといふために置いた

○むなもといたき　胸が苦しい。

○思ひめぐらし　あれやこれやと思ふこと。めぐらしは車の緣語。

○ことなしび　無事を裝ふこと。

○めこどもの云々　妻子達が憂いといふがまゝに。

○しな高き　品位高き。

○花さくら鯛　櫻鯛。

いつよりかおもて皺びて老のどちいつれもおなじ友垣ぞかし

思來世

しな高きこともねがはず又の世はまた我が身にぞなりて來なまし

旅思

旅にありていく春秋か過ぎつらむ月のころこそ家を出でしか

船路

こしかたに冬の日數は過ぎはててこゝより春の船路なりけり

鯛

春をまつ人にや見せむなだの浦の雪の中なる花さくら鯛

師の年頃よみおかれたる歌どもあなるを、そが中より百首ばかり撰び出して賜はりたるに、こなたかなたより乞はれ、其のかたはらを摸して遺はしつるに、よくことの心をえたるいみじき歌どもなりと、人々めでけるにより、こたび板にゑりて、師に題をこひけるに、わかかりしよりの歌どもなればとて、草徑集と名づけられけるなり。又二篇も程なく物すべくなむ。

文久三年亥初春　茂村恆久

草徑集終

# 平賀元義集

# 平賀元義集

## 上

天保八年三月十八日、自二彦崎一至二長尾村一途中

牛飼の子等に食はせと天地の神の盛りおける麥飯の山

二十三日、遊二于細谷川一

もとしげき吉備の中山櫻ちり青葉繁りぬ春盡きむとす

四月十四日、遊二于早瀧一

鴨山の瀧つ白浪さにづらふ少女と二人見れど飽かぬかも

二十九日夜、遊二于鴨川一

水鳥の鴨の川上風をよみ飛びかふ螢見れどあかぬかも

五月三日、望二逢崎一

柞葉の母を思へば兒島の海逢崎の磯波たち騷ぐ

八月二十六日、小橋武麿宅飲宴

みやびをの集へる今日は杯にもみぢ葉散らせまさき山風

○盛りおける　上を高く積む意に麥飯を盛る意を掛く。
○麥飯の山　備前國兒島郡。
○もとしげき　吉備の枕詞。
○吉備の中山　備中國賀陽郡。
○鴨山　兒島郡。
○さにづらふ　少女の枕詞。
○水鳥の　鴨の枕詞。
○風をよみ　風を好み。
○柞葉の　母の枕詞。
○兒島の海逢崎　兒島に子、逢崎に厭ふ意を含む。
○みやびを　風流人。
○まさき山　寫佐伎山。備中國賀陽郡。

十月十一日、過₂上道郡河本村佐々木金三郎家₁

行く水の過ぎにし人の宿訪へば月かげ寒し高月の里

天保九年正月八日、望₂加佐米山₁

高田のや加佐米の高峯み雪積み春風さむし葉田の足守

二月二十四日、遊₂于早瀧₁

菅の根の長々し日も見れどあかぬかも瀧姫の早瀧山の落す瀧つ瀬

七月十九日、加佐米山にて

大君の加佐米の山のつむじ風益荒たけをが笠吹き放つ

天保十年二月十八日、槌ヶ原看雪二首

ひさかたの天うちきらし兒島のや麥飯山ゆあわ雪流る

雪ふりていたも寂しき夕暮に百舌鳥が音遠し逢崎の里

三月十八日、遊₂于有木山₁

有木山花散りすぎて繁りたる若葉が末に鶯なくも

五月九日、過₂藤戸浦₁

荒妙の藤戸の浦に若和布賣るおとひ少女は見れどあかぬかも

十一日夜、高階謙丸宅、賞₂月寄₁人

---

○行く水の過ぎにし人　流れ行く人の如く逝きて歸らぬ人。佐々木氏を指す。
○高月　備前國赤坂郡。
○高田のや加佐米の高峯　備前國御野郡金山の別名。
○葉田の足守　備中國賀陽郡足守町。葉田は服部の謂で、應神紀に「天皇…移₂居於葉田葦守宮₁。以₂織部縣₁賜₂妃兄媛₁。」とある。
○菅の根の　長の枕詞。
○瀧姫　「早瀧比咩神社、賀茂郡瀧村鎭座。」と備前式社考にある。
○瀧姫の　一本「瀧姫もる」
○大君の　かさの枕詞。
○つむじ風云々　應神帝が此の山に登られた時「飄風吹₂放御笠₁。」とある姓氏錄の記事によつた。
○天うちきらし　空を霧ひ曇らし
○あわ雪流る　萬葉集卷十「卷向の檜原も未だ雲ゐねば小松がうれゆ淡雪流る」
○いたも　甚しくも。
○有木山　備中國賀陽郡。
○荒妙の　藤の枕詞。
○藤戸の浦　兒島郡。
○おとひ少女　姉妹の少女。萬葉集卷一「あられ打つあられ松原住の江のおとひ少女と見れど飽かぬかも」

みやびをが飲む杯にさす月は君が庭にもおして照るらむ

二十八日、自二彦崎一至二逢崎一途中二首

吾が國は夕立すらしひさかたの天の金山雨ぎらひたり

兒島には虹かも立てる否をかも建日方別注連引かすかも

十一月十九日夜、遊二于聚遠觀一二首

石の上ふりにし妹は咲き匂ふ初花よりもめづらしきかも

妹が家の梅をめでつゝ吾が居れば在明の月夜鴈鳴き渡る

十二月七日、自二庭妹郷一至二松島一途中二首

大井川朝風寒み大丈夫と思ひてありし吾ぞはなひる

妹が手を鳥羽の島の朝風に曉飲みし酒さめにけり

十一日、山村探梅

あれはもや早花得たり水鳥の鴨山越えて早花得たり

十三日、逢崎眺望二首

梅の花こひもつきねば高おがみ雪を降らせて吾を偲ばすも

久方の天の金山加佐米山雪ふりつめり妹は見つるか

同日、寄二高階謙滿一

---

○みやびをが云々　萬葉集卷七「春日山押して照らせるこの月は妹が庭にもさやけかりけり」。
○おして　おしなべて。
○吾が國　元義の生國備前。
○天の金山　金山。岡山市の北方にある山。
○兒島には云々　萬葉集卷十四「筑波嶺に雪かも降らる否をかも悲しき子ろがにぬほさるかも」の調である。
○虹かも立てる否をかも　かは疑問、もは感動、をは助詞。虹が立てるか然らずかの意。
○建日方別　古事記「生二吉備兒島一亦名謂二建日方別一。」
○石の上　ふりの枕詞。
○初花　こゝは梅を指す。平家物語小原御幸「青葉まじりの遲櫻初花よりも珍らしく云々。」
○妹が家　聚遠觀を指す。
○大井川　賀陽郡。足守川。
○はなひる　くさめをする。
○妹が手を　とるの枕詞。
○鳥羽の島　備中國都宇郡。
○あれはもや云々　萬葉集卷二「吾はもや安見兒得たり皆人の得がてにすとふ安見兒得たり」
○梅の花こひもつきねば　梅花を戀ふることの盡きないのに。
○高おがみ　高龗。雨雪を司る龍神。

冬されば雪降り積める兒島の海逢崎見には君は來ざるや

同夜、逢崎賞レ月二首

鴨山に晝は梅見つ夕されば逢崎の磯に月を吾がまつ

まそかゞみ清き月夜に兒島の海逢崎山に梅の散る見ゆ

十四日、望二父峯一

父の峯雪ふり積みて濱風の寒けく吹けば母をしぞ思ふ

天保十一年正月二日

吉備津彦神の社の池の水長閑にぞ見ゆる春たつらしも

十四日、遊二于梅之園一

茜さす晝も見つれど妹が園の梅は月夜に見るにしかずも

丈夫はいたも瘦せにき梅の花心つくして相見つるから

十五日

うち見る島の崎おちず妻はあれど君をぞ思ふにくからぬから

十六日、發二松島一行二篠沖村一途中

思ふ子に別れて行けば春の夜の月かげくらし倉敷の村

二十七日夜、遊二于下原一二首

○まそかゞみ　清きの枕詞。萬葉集卷十一「まそかゞみ清き月夜のゆつりなば思ひはやまじ戀こそまされ」

○父の峯　兒島郡にあるといふ。

○吉備津彦神の社　備前國津高郡

○茜さす　晝の枕詞。

○丈夫は云々　一本「丈夫は瘦せにけるかも妹が園の梅の花見に心つくして」

○うち見る云々　古事記「打見る崎々かきみる磯のさき落ちず若草の妻持たせれは云々。」

○おちず　漏らすことなく。第一二句は何所へ行つてもの意。

○別れて行けば　別れて來れは。

○倉敷　備中國都窪郡。

石の上ふりにし妹が園の梅見れども飽かず妹が園の梅
莟めるは既に手折れど開きたるは未だ手折らず守る人多み

晦日三首

花守は心許しついざ吾妹上枝の梅をこゝに手折らむ
皆人の得がてにすとふ君を得てわが寐る夜らは人な來りそ
きも向ふ心の中を居待月あかして談る今宵樂しも

二月十二日、自二玉島一女の許に行きける時、邇磨の坂本にて

二萬坂を打ちいで見れば梅の花咲ける山邊に妹が家見ゆ

三月三日夜

天地の神に祈りてますらをを君に必ず生ませざらめや

五日、河邊渡口

わかくさの妻の子故に河邊川しば〳〵渡る妻の子故に

十日、自二中山一至二松島一途中

茜さす日指の高根雲きらひ松島山に雨ぞふりくる

十八日、自二下原一至二篠沖村一路上

吾妹子を山北に置きて吾がくれば濱風さむし山南の海

○莟めるは云々　花を年少、年長の二女に喩ふ。
○花守　女の監督者を指す。
○上枝の梅　年長の女を指す。
○皆人の得がてにす云々　前出の「心もはや」の歌參照。一本第四句「君を寐る夜は」
○きも向ふ　心の枕詞。
○居待月　あかしの枕詞。
○二萬坂　備中國下道郡。一本「やかたを打ちいで見れは梅の花咲けるあたりに妹が家見ゆ」
○天地の神云々　萬葉集卷十三「天地の神を祈りて吾が戀ふる君に必ずあはせざらめやも」
○わかくさの　妻の枕詞。
○妻の子　妻。
○河邊川　下道郡。
○茜さす　日の枕詞。
○日指の高根　備中國都窪郡。
○山北　下原を指す。
○山南　篠沖村を指す。

十九日、高階謙滿宅宴飮

天照皇御神も酒に醉ひて吐き散らすをばゆるし給ひき

四月十三日、遊二予聚遠觀一

妹が園おそつゝじ花杜若いや珍らしく思ふ此の頃

五月五日、高階謙滿宅宴飮

はしきやし妹に楝の花見つゝ宴をすれば君をしぞ思ふ

十一日夜、發二松島一還途中

妹がりを吾が出で來れば月照りて風さへ涼し撫川の里

八月十五夜、宿二予占見鄕富山秀資宅一

吾妹子があれを占見の浦の月獨りし見れば家をしぞ思ふ

九月六日二首

吉備津彦神の社のもみぢ葉は彌ますます色濃くなりぬ

吉備津彦神の社の秋のもみぢ葉日竝べて見れども飽かぬ秋のもみぢ葉

十六夜、夜更けて女のもとに行きて

在明の月夜をあかみ此の園の紅葉見に來つ其の戸ひらかせ

二十六日、早起女のもとより歸るさに

○天照皇御神云々　古事記にある速佐之男神が大嘗聞しめす殿に屎まり散らした時、天照大御神は咎めず宣はく「屎なすは醉ひて吐き散らすとこそ我が那勢の命のかくしつらめ云々。」との故事による。

○おそつゝじ花　後れて咲く躑躅

○はしきやし妹に　楝の序詞。楝に逢ふ意を掛く。

○撫川　都窪郡。

○吾妹子があれを　占見の序詞。占見に恨みを掛く。

○占見の浦　備中國淺口郡。

○もみぢ葉は　一本「秋の葉は」

○日竝べて　幾日も。

○此の園の　一本「妹が園の」

○其の戸　一本「此の戸」萬葉集卷十三「此の夜は明けぬ入りて吾が寢む此の戸開かせ」

吾妹子に別れて行けば眉引の横山の上に月ぞ殘れる

十月二十四日、早起

まな兒なす兒島の高嶺津島山陽炎たちぬ夜は明けむとす

十一月五日

鳥がなく東の旅に丈夫がいで立ち行かむ春ぞちかづく

十二月二日、題二西蕃壽老人畫一

言さへぐ國の長人杯に汝が影うつせ妹に飲ませむ

十六夜

梅の花窗にうつりて面白き今宵の月夜君をこそ思へ

十七日、自二山手莊一至二秦下村一途中

久方の空雲きらひ石屋風寒けく吹きぬ雪ふらむとす

小田渡口

古のますらたけをが渡りけむ小田の渡を吾も渡りつ

天保十二年閏正月十一日夜、宿二于小橋武丸宅一

正木山月かくろひて梟のなく曉は家偲ばるも

十八日、負レ山龜贊

---

○眉引の　横山の枕詞。萬葉集卷十四「妹をこそあひ見に來しか眉引の横山べろの鹿なす思へる」

○横山　横はり臥せる山。

○まな兒なす　如二眞砂一の意。兒にかけていふ。

○津島山　備前國御野郡。

○陽炎たちぬ　黎明の空が淺赤く染つた。

○鳥がなく　東の枕詞。

○言さへぐ　韓又は百濟の枕詞であるが、こゝは國に續けて、唐國の意となる。

○長人　長壽人。七福神の一なる壽老人を指す。

○汝が影うつせ　此の下に「その長壽にあやかるやうに」の語を補ふ。

○山手莊　備中國窪屋郡。

○雲きらひ　雲が霧らふ。

○石屋　石屋山。賀陽郡。

○小田の渡　備中國小田郡。

○正木山　備中國下道郡。

○かくろひて　隱れて。

大君の御代榮えむと山負へるあやしき龜も國に生り出來

三月二十五日

はしきやし妹に別れて吾がかへる今はな啼きそ人呼子鳥

五月六日、聚遠觀眺望

見渡せば天の金山三野の山霧たちかをる雨ふらむとす

六月十五日、發二山北一至二山南一

いよべ山ゆつ岩群に這ふ葛の別れのあまた惜しき今朝かも

十五日夜、大郷盛正宅看月

旅にして月を見る夜は泊りにし君ぞ偲ばゆ月を見る夜は

七月二日夜、宿二于甲努郷一

甲努人衣をな擣ちそ旅にして其の音きけば家しぬばるも

八月六日、游二于松島一

二人をまつ島山の初紅葉心めづらしみ舟をとゞめつ

十一日夜、自二彦崎一至二逢崎一路上二首

久方の月の光に海見れば雲の退邊に妹が國みゆ

射干玉の月面白み彦崎の逢崎さして吾が磯つたふ

○大君の御代云々　萬葉集卷十八「すめろぎの御代榮えむと東なるみちのく山に黄金花咲く」
○山負へる　山は蓬萊山。
○たちかをる　立ちかすむ。
○いよべ山　伊豫部山。下道郡。
○ゆつ岩群　五百箇岩群。澤山なる岩。
○這ふ葛の云々　「葛の」までは序詞。萬葉集卷十三「這ふ葛のわかれのあまた惜しくもあるかも」
○甲努　小田郡。
○松島　兒島郡。
○二人をまつ島　二人を待つ意を掛けて、松島に續けた。
○心めづらしみ　心に浦を掛く。
○久方の　月の枕詞。
○退邊　遠方。
○射干玉の　月の枕詞。

十二日、遊二于鴨川一

逢崎に月を見明かしつとめては鴨の川邊に紅葉をぞ見る

二十一日

石の上ふりにし妹が家訪へば秋の花のみ艶ひてありけり

清瀧越道中

清瀧を夕越え行きてなく田鶴の田土の浦に月を待たむかも

二十五日、神崎博之宅小飲二首

こゝにして紅葉を見つゝ酒飲めば昔の秋し思ほゆるかも

杯に散り來もみぢ葉みやび男の飲む杯に散り來もみぢ葉

安田定之の「石の上ふりにし道を数へてよ」など言ひけるにこたへて

今日よりは朝廷尊みさひづるや唐國人にへつらふなゆめ

九日朔日、生坂途中

月立の今日の朝とて望月の彌めづらしき君に逢ひにき

十五日、鴨神社賞二紅葉一

打日刺みやび男もがも水鳥の鴨の社の秋を示さむ

十七日、長尾村途中

---

○つとめては　翌朝は。
○清瀧越　兒島郡。
○田土の浦　同郡。
○散り來　散り來れ。
○安田定之の　一本「漢學する人の」
○さひづるや　からの枕詞。
○月立　朔日。
○望月の　彌めづらしきの枕詞。
○打日刺　みやの枕詞。

績苧なす長尾の村に九月の時じく匂ふ梅の花かも

十月朔日、鴨井耕太郎大銘訪二月見之樓一小飲

客人に何を示さむ山里の秋の紅葉のこれを示さむ

天保十三年正月九日、遊二手都宇郡一

白眞弓春立つ今朝は妹が手を鳥羽しま山風長閑に吹く

十五夜、從二兒島一還二一宮一途中

妹に戀ひ汗入の山を越え來れば春の月夜に鴈なき渡る

藤井高枝が祖父高尙が三年の靈祭に、寄月述懐といふ意をよめといひければ

松の屋の松の木末に月澄みて昔戀しき秋の夜らかも

人こそは變り行けども松の屋のもと松が枝に匂ふ月影

天保の十まり四とせ四月の二十まり六日の日、備中國英賀郡刑部の郷山奥の村なる定藤ちう所に宿りけるに雨ふりしきければ

落ちたぎちたばしる水の音高みいの寢らえねば家ぞしぬばゆ

天保十四年十二月十八日、窪屋郡大市郷倉敷に梅の宴せし時、菊子といへる妓の席につらなりたるを見て

---

○績苧なす　長の枕詞。
○時じく　季節外れに。
○何を示さむ　一本「何もてあへむ」
○秋の紅葉のこれを示さむ　一本「秋の紅葉をこれと示さむ」
○白眞弓　はるの枕詞。一本「三冬盡」
○妹が手を云々　前出「妹が手を云々」の歌を參照。
○汗入の山　あせる意を掛く。
○松の屋　高尙の屋號。
○夜らかも　一本「夜かも」
○もと松が枝　昔ながらの松枝。
○いの寢らえねば　安眠が出來ないから。

濱よりも珍らしきかも時じくに匂ひよろしき萩が初花

弘化二年四月四日都へ上りける時

吾妹子が送らむといひし雄島野の二本松は雲がくろひぬ

五月五日の朝、播磨の室の水門より船出せむといひし時、此の浦に坐す

皇大御神を人々とともに拜み奉りて

大船に眞梶しゞぬき漕ぎつゝも室の御神に幣奉る

同じ所をこぎ出でゝ

室のうち朝潮高し和田津神やすく守らへ旅行く吾を

弘化三年二月十五日、備中國にて

弓柄とる益荒猛雄しおもふ事遂げずばとく〱かへるべきかは

三月十一日、備中國窪屋郡の社に在りて

我が鄕は山の隔りて見えぬかも春の霞のかくしたるかも

閏五月五日

くはし戈ちまきの餠あら玉の年に二たび食すはめづらし

いざ子ども旗押し立てゝ立ちかへり年に二たび五月來にけり

閏五月二十一日、兒島の三家の里に渡る時の歌

〇匂ひよろしき　萬葉集卷二十「宮人の袖づけ衣秋萩に匂ひよろしき高圓の宮」

〇雄島野　備前國上道郡。

〇雲がくろひぬ　雲に隱れた。

〇室の水門　揖保郡。室津港。

〇大船に云々　萬葉集卷七「大船に眞梶しゞぬき漕ぎ出にし沖は深けむ潮は干ぬとも」

〇眞梶しゞぬき　船の兩側に澤山の梶をつけて。

〇和田津神　海神。

〇弓柄　弓の握り。

〇益荒猛雄し　一本「麻すら男子し」

〇かへるべきかは　かへるは弓の緣語。一本「かへるべきかも」

〇山の隔りて見えぬかも　一本「山のさかりに見えなくに」

〇くはし戈　ちの枕詞。

〇ちまきの餠　粽餠。

〇あら玉の　年の枕詞。

〇五月　五月號。

〇立ちかへり　折りかへして。

妹をおきて吾が漕ぎ來れば中山の山邊こひしく鳴ぞ鳴くなる

　御野河の河尻にて

岡山の城の邊こぎ出でて吾が戀ふる兒島に渡る雨な降りそね

　二十二日、小串の浦に回りかへりて

夏の日も涼しかりけり都より風吹き通ふ籠崎の小門

　弘化四年四月十五夜、備前國磐梨郡佐伯の郷にて

名に高き高星山のほとゝぎす聞きつゝ居るに夜ぞくだちける

　弘化四年五月十五日、美作國粂郡弓削郷治部正路が別業の宴に、時島こら飛びわたりければ

杯になが影うつせ久方の天飛びかけり啼くほとゝぎす

　九月二十九日、磐梨郡にて詠める歌の中に

佐伯路はまして寒しもこも枕高星山の山おろしの風

　嘉永元年三月十九日、女の家にて

戸開きて見れども飽かず昨夜の雨にぬれたる山の山櫻花

　三月二十一日の曉がた

夜のほどろ我が出で行けば妹が門の櫻の上に殘る月かげ

○吾が漕ぎ來れば　一本「吾漕ぎ來れば」
○中山　吉備の中山。
○御野河　現今岡山市を貫流する旭川。
○岡山の城　岡山市内にある。
○吾が戀ふる兒島　兒島に子を掛く。
○雨な降りそね　「ね」は希求の意の助詞。
○都より　都は東方に當るから、東方からの意。
○夜ぞくだちける　夜ぞ更けた。
○なが影　汝が姿。一本「しが影」
○佐伯路　備前國赤磐郡。
○こも枕　たかの枕詞。
○夜のほどろ　夜の明け離れる頃（古義）。萬葉集卷四「夜のほどろ吾が出て來れば吾妹子が思へりしくし面影に見ゆ」一本「夜あけぬ」
○櫻の上に　一本「櫻のうれに」

○庭の花　庭の菊の花。
○宮人　神主。
○俣海松の　又の枕詞。
○西のうねを　うねは連なれる丘山。殘月であるから西といふ。
○小中山大中山　次の香登と共に何れも村名。
○松のけ　松の木。
○美作は奈義の神の嶺　美作と因幡との國境にある那岐野山。一本「神祭る奈義の神の嶺雪降りて云云。」ともある。又「美作は」を「美作や」ともある。
○こしの彌彦　越後國西蒲原郡の彌彦山。降りて來しを越の云々の意。
○かき數ふ　二の枕詞。
○二神山　二上山。美作國久米郡。
○み雪こゞりて　降れる雪が凝固して。
○妹が住む　鏡の枕詞。
○鏡の山　美作國勝田郡。
○上道居郡　備前國上道郡居都村一本第二句「居都の里なる」
○菊の山　菊に聞く意を掛く。これまでは序詞。
○年のはじめに　正月十一日は具足開、藏開、鍬初め等の祝日であるからいふ。

十月八日　美作國勝田郡和氣郷の神主岡本信信が家にて

めづらしき山のもみぢ葉庭の花見れども飽かぬ宮人の宿

十一月十七日、美作國英田郡より歸るさ

俣海松の又も來て見む妹が宿の西のうねをに殘る月影

十八日、和氣郡大中山より歸るさ

小中山大中山も越えて來ぬ今こそ越えめくるま路の坂
香登をうち出でて見れば土の戶の杜の松のけ南に見ゆる

十二月十八日、勝田郡に在りて賦みる歌

美作は奈義の神の嶺雪降りてこしの彌彦いかにあるらむ

二十日、久米郡にて

かき數ふ二神山の雪の上に霞たなびく春近みかも

二十一日の歌

夕されば み雪こゞりて妹が住む鏡の山は越えやすきかも

嘉永二年正月十一日、敷島田に人々の集ひける時の歌

上道居都に在りとふ菊の山よき事きかむ年のはじめに

五月十六日、美作國一の宮にまゐでて

中山の神の社のさくらかげ朝け涼しく夏の風ふく

八月十一日、久米郡倭文の郷にて

玉くしげ二神山にくれなゐの雲たなびきて雨は晴れにけり

嘉永三年三月二十八日、播磨國赤穗郡八野鄕入野村鶴屋濱崎氏が家に持ち傳へたる鶴龜松竹梅のかたなせる奇しき石を見て

大穴牟遲少名御神の作りけむ岩かも見ればこゝら神しき

二十九日、都に上る人に贈る

針間路の櫻花さく次嶺經山代山とさかりなるべし

吉備の海ゆ難波へ上る早船のはや事畢へて歸らせわがせ

嘉永三年四月十日の夜、備前國磐梨の郡にて

立ちて居て聽けども飽かず妹が宿の木のくれやみに啼くほとゝぎす

嘉永五年十月十一日、美作國久米郡倭文鄕にて

たゝなめて射水神のね奈義の峯初雪ふれり見つゝ飲めこそ

嘉永六年二月二十九日、美作國久米郡にて

うら／＼と霞たなびく春の日に櫻散るなり長岡の山

四月十二日、備前國の別業にて

○さくらかげ　葉櫻の木陰。
○朝け　朝明け。
○玉くしげ　ふたの枕詞。
○くれなゐの雲　夕燒。
○大穴牟遲云々　萬葉集卷三「大穴牟遲少彥名のいましけむしづの石屋は幾世經ぬらむ」。
○こゝら神しき　非常に珍らしい
○針間路　播磨路。
○次嶺經　山城の枕詞。
○山代山と　山城大和。
○早船の　早船の如く。これまではの序。
○わがせ　吾が背。吾が親しき者よの意。
○立ちて居て　立ちても又坐りても。
○聽けども飽かず云々　萬葉集卷十「五月山卯の花月夜ほとゝぎす聞けども飽かず又鳴かむかも」同「影草の生ひたる宿の夕陰に鳴くこほろぎは聞けど飽かぬかも」
○木のくれやみ　葉が茂つて木陰の暗い所。
○たゝなめて　いの枕詞。
○射水神のね　美作國苫田郡。
○飲めこそ　飲み給へ。こそは希望を現はす助詞。一本「遊はむ」

妹が宿の葉廣隈橿五百枝槻木のくれしゞになりにけるかも

　五月十五夜、美作國廣井郷にて

みどり子の乳戀ふが如く待ちこひし雨今ふりぬ御田は榮えむ

　嘉永七年正月元日、此の春は亞墨理加の賊來るよし、女童どものいひ騒ぐを聞きて

えみし等を討ち平げて勝鬨の聲あげそめむ春は來にけり

　西の戎ども攻め來る由女童どもの云ふをききて

えみし等は知らずやありけむ靈ちはふ神と君とのいます此の國を

　梵鐘を大筒に鑄かへらるゝ由聞きて

常なしと響ける鐘は常ならぬえみしを防ぐ火矢となりけり

　安政四年十一月十七日、安房國の防人横田右衛門左衛門鬼彦かへり來て、其の國の鏡の浦の圖に歌乞ひければ

ものゝふの猛き心も映るらむ底清らけき御鏡の浦

　同海士の縮に歌乞ひける時によめる

安房の海沖つ勿告藻名も家も告らせまほしきおとひ少女ら

　安政五年正月五日、美作國勝田郡飯岡の僑居にて

○葉廣隈橿　枝葉の榮え張れる橿の木。
○五百枝槻　枝が茂り出た槻の木。
○木のくれしゞに云々　木陰の暗い所が愈繁くなつた。萬葉集卷三「五百枝さししゞに生ひたる樛の木のいやつぎ〳〵に云々。」
○みどり子の乳戀ふが如く　萬葉集卷十八「みどり兒の乳乞ふが如く天つ水仰ぎてぞ待つ云々。」とあつて、同じく日でりに雨を乞ふ長歌がある。
○御田　御は美稱。
○あけそめむ春ぞ來にけり　一本「あけそむる春ぞ來向ふ」或は「あけそめむ春ぞ近づく」
○西の戎　ペルリ等の米國人。
○靈ちはふ　神の枕詞。
○常なし　諸行無常。
○常ならぬえみし　格別邪心がある紅毛人。
○火矢　大こあるを討す。
○防人　さきもり。
○横田右衛門左衛門鬼彦　一人の姓名で、右衛門左衛門は鬼彦の通稱。
○御鏡の浦　鏡の浦。安房國館山灣。
○安房の海沖つ勿告藻　告るの序詞。勿告藻は「ほんだはら」とよぶ海藻で、告る勿れと通じるので告るに掛けた。
○名も家も云々　一本「家も名も」萬葉集卷一「此の岡に菜摘ます兒家聞かな名告らさね……われこそは告らめ家をも名をも。」
○おとひ少女ら　姉妹の少女。
○飯岡の僑居　橘之舍塾といふ私塾を指す。

鶯の春とはいへど雪ちりて風さへ寒し飯岡の原

五月十三日、同じ所にて

山風に河風添ひて飯岡の坂田の御田は涼しかりけり

安政六年八月二日、美作國より還りける時

かへり來て見れば珍らし石淵の湯津岩村に咲ける白浪

萬延二年、美作國英多郡川會郷天石門別神社にて

鶯の春し來れば落ちたぎつ瀧の社に波咲きまさる

文久元年六月十日、兒島郡三家郷の郡家にありて

帶姫神の尊の大御船泊てし兒島の御津ぞ此のみ津

元治元年四月、藤卷翁を訪ひて

百年も千代も經まさむ年若き年にもまさるたけき翁は

九月、のどか山にてよめる歌の中に

美作は早く時雨の降るなべに能登香もさらも早くもみでき

美作や久米の二上ふたならび再び逢はむ時をこそ待て

九月十七日、安東翁の家の宴に

秋山の初もみぢ葉を打見つゝ君と酒くむ今日のたのしさ

---

○鶯の春　鶯の囀る春。萬葉集卷十「鶯の春になるらし春日山霞たなびく夜目に見れども」
○雪ちりて　一本「雪ふりて」
○石淵　備前國赤磐郡にある碧潭
○湯津岩村に咲ける白浪　潭山の岩々に激せる白波の迸る趣。
○瀧の社　天石門別神。
○波咲きまさる　落ちたぎつ瀧といふから、波が愈激すといふ。
○郡家　郡司の廳。
○帶姫神の尊　息長足姫。神功皇后。萬葉集卷十五「帶姫御船泊てけむ松浦の海妹が待つべき月は經につゝ」
○兒島の御津　甲の浦又は郡の浦
○藤卷翁　名は多門。俳號を鬼馬　當時八十六歲。元義は六十五歲。
○のどか山　美作國英多郡。
○早く　一本「早も」
○降るなべに　降ると共に。
○さら　美作國久米郡佐良山。
○もみでき　紅葉した。
○美作や云々　第三句までは序詞
○久米の二上　久米郡の二上山。
○安東翁　名は則秀。

○小原山　大原神社がある。
○妹が錦　妹が著た錦の衣。
○見さけて　遙かに見て。
○押して　一本「細く」萬葉集卷七「春日山押して照らせるこの月は妹が庭にもさやけかるらし」
○月ゆみ　月讀。月。一本「月影」
○明けむ　筥の緣語。
○持ちこせる　持ちて送り來れる
○旭なす　朝日の如く。
○目細し　美はしい。
○うらぐはし　心樂し。
○あから引く　あさの枕詞。
○淺原山　備中國窪屋郡。
○ぬば玉の　夜の枕詞。
○吾をおきて　我以外には。

二十三日、安東翁の家にて

小原山神の染めたる初紅葉妹が錦にまさるこのごろ

歳暮に

待つ春にはやも逢はむと思ふから暮れゆく年は惜しと思はじ

慶應元年正月二十六日、勝田郡にて山を見さけて

奈義の山みねの白雪かすむなり美作國内春し立つらし

八月十五夜、遊ニ于兒島郡三家郷北浦筥崎一、作歌一首

筥崎に押して照りたる月ゆみはいや照りに照れ明けむまで見む

## 中

天保十年正月二十四日、遊ニ于早瀧一

兒島のや　早瀧山の　山の際ゆ　早瀧姫の　持ちこせる　たぎつ白浪　旭なす　目細しも　夕日なす　うらぐはしも　見る毎に　こひもいや增し　來し人の　家も忘れて　見つゝ遊ぶ　早瀧山の　たぎつ早川

二月十夜、過ニ淺原山一

あから引く　淺原山を　ぬば玉の　夜たち往けば　吾をおきて　行く人もな

し　鳥さへも　曾て啼かず　靜けき　山にしあれば　吾がこゝろ　いや澄み渡りぬ　谷川の　川音さやけし　遠つ人　松風きよし　月弓し　おして照りたり　神漏伎の　少御神の　坐すとふ　常世の國は　けだし此の夜かも

天保十一年十一月三日、芳野村看梅作歌幷短歌

板倉と　撫川の郷の　中を行く　芳野の河の　河岸に　幾許咲けるは　誰が栽ゑし　梅にかあるらむ　十一月の　月の始めを　はやも咲きたる

反歌

まそかゞみ淸き月夜に風流士が飲む杯に散り來この花

弘化三年五月二十一日、備中國窪屋郡阿智の郷と三和の郷との境なる淺原の手向にて

赤らひく　淺原山を　高麗劍　わが越えくれば　面白く　花咲き匂ひ　珍らしく　鳥さへなきぬ　其の花の　匂ひよろしき　其の鳥の　聲のこほしき　吾妹子に　い放りをれば　思ひぞわがする

後の五月二十七日、讚岐國に還る人を送りて、上道郡宇治郷雄島山の手向にてよめる歌幷短歌

眞金ふく　吉備の海に　朝なぎに　來寄る深海松　夕凪に　來よる俣海松

---

○曾て　少しも。
○遠つ人　まつの枕詞。
○月弓し　月弓は月。しは强め詞。
○神漏伎　高皇産靈神又は皇祖天神の御稱。
○少御神　神皇産靈神の御子。古事記「さて後にはその少名毘古那神は常世國に度りましき。」
○常世の國　絕遠の所にある樂土と想像される國。
○まそかゞみ　淸きの枕詞。
○この花　梅。王仁「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」
○手向　峠。
○高麗劍　わの枕詞。
○匂ひよろしき　一本「匂ひめづらしき」
○聲のこほしき　聲の戀しき。一本「聲のうれしき」
○い放りをれば　いは接頭語。離れ居れば。
○思ひぞわがする　我は悲しむ。
○眞金ふく　吉備の枕詞。
○朝なぎに云々　萬葉集卷十三「神風の伊勢の海の朝風に來寄る深海松夕凪に來よる俣海松深海松の深めし吾を俣海松の又ゆきかへりつまといはじかもおもほせる君。」
○俣海松　海松の莖の股をなせるもの。俣海松の如くの意。

○還らす　歸る。
○父のみの　ちゝの枕詞。
○いとこやの　いとこは人を親しんでいふ語、やは歎詞。なつかしい人の意。
○益荒雄の雄島　雄に男を掛けていひつゞけた。
○あなに　「おやに」と同じくあゝまことにの意。
○廣幡の　八幡の枕詞。
○行幸の宮　祭の時神輿渡御あつて假に鎭坐する所。御旅所。
○八百日日　澤山の日數。祝詞出雲國造神賀詞「八十日日は在れども今日の生日の足日に云々。」
○足日　吉日。
○遊ばひ　遊びの延音。
○眞子なす御神の子等　愛子の如き氏子達。
○木綿あざね　木綿を髮に交へ結ふ。
○胸乳をし云々　古事記上「天宇受賣命天香山の天之日影を手次にかけて天之眞拆を鬘として天香山の小竹葉を手草に結ひて……胸乳をかき出で裳緒をほとにおし垂れき云々。」胸乳は乳。裳緒は裳を腰に結ぶ紐。
○百たらず　いの枕詞。
○竝立　竝び立てること。

深みるの　よせて來し君　俣みるの　よせて來し君　いかなれや　國へ還らす　父のみの　ちゝを思へか　いとこやの　妹を思へか　劒太刀　腰にとり佩き　古の　書を手握り　國へかへらす

反歌

益荒雄の雄島の山の秋の葉の匂はむ頃は又も渡り來

八月十四日、兒島郡三家郷北の浦に大坐す八幡大神の大行幸を拜み奉りて

掛けまくも　あやに恐き　言はまくも　あなに尊き　廣幡の　八幡の御神　此の浦の　行幸の宮に　八百日日は　ありと雖も　八月の　今日を足日と　行幸して　遊ばひませば　神主は　御前に立ちて　幣帛を　捧げ仕ふれ　眞子なす　御神の子等は　木綿あざね　髮結ひ垂らし　胸乳をし　あらはし出し　裳緒をば　陰上に押したれ　歌ひ舞ひ　仕へ奉らふ　けふの尊さ

十二月十五日、御野郡の路上にて伊豫の山を見てよめる歌幷短歌

百たらず　伊豫路を見れば　山の末　島の﨑々　眞白にぞ　み雪ふりたれ　竝立の　山のこと〴〵　見渡しの　島のこと〴〵　冬といへど　雪だに見えぬ　山陽の　吉備の御國は　住みよくありけり

反歌

吹く風も長閑に吹くなり冬といへど雪だに降らぬ吉備の國内は

弘化四年四月二十一日、國を出でける時のうた

吾がまちし　時は來りぬ　道の口　吉備より出でて　三枝の　美作越え　白眞弓　因幡ゆ傳ひ　柞葉の　伯耆を通り　八雲たつ　出雲に至り　名ぐはしき　出雲の國の　あこのもり　あくまで聞かむ　山ほとゝぎす

六月十九日、兒島郡三家鄕阿津の醫岡島某が高樓に暑さを避けてよめる歌幷短歌二首

遠近の　人は知らずや　いさなとり　海を見わたし　百八十の　國見はるかす　岸の上の　この高樓は　玉だれの　岡島ぬしの　丈夫の　心ふり起し　眞木柱　ほめて造れる　高き此の屋ぞ

反歌

風流士の來りつどひて歌おもひ辭思ふべきこれの高き屋

わたつみの潮の八百路の八潮路ゆ吹き來る風は涼しくありけり

八月二十四日、美作國勝田郡鹽湯の鄕御湯にてよめる歌

掛卷も　文にかしこき　言はまくも　穴に貴き　勝間田の　鹽湯の鄕の　靈

---

○道の口吉備　古備つ路の入口の國なる備前。
○三枝の　みの枕詞。一本「百しねの」
○美作　一本「美作を」
○白眞弓　いの枕詞。
○柞葉の　はゝの枕詞。
○通り　一本「過り」
○八雲たつ　出雲の枕詞。
○あこのもり　簸川郡阿吾の森。
○いさなとり　海の枕詞。
○百八十の國云々　澤山の國々を眺めやる。
○この高樓は　一本「これの高屋は」
○玉だれの　をの枕詞。
○眞木柱ほめて云々　祝言を唱へて杉檜の材木で高大に造つた此の殿である。萬葉集卷二「まけ柱ほめて造れる殿のごといませはゝとじおめかはりせず」一本「高き此の屋を」
○歌おもひ云々　萬葉集卷三「いざ庭の岡に立たして歌思ひ辭思はし云々。」辭思ふは詩文を作ること。
○潮の八百路の八潮路　潮流の多くの通路。祝詞六月晦大祓「荒鹽の鹽の八百道の八鹽道の鹽の八百會に坐す云々。」

ちはふ　神の御湯は　現身の　人の湯ならず　神ろぎの　少名御神の　神ながら　造らしし湯ぞ　かしこみて　浴みせ兒供　尊みて　湯あみせ世人　掛巻も　文にかしこき　いはまくも　あなに尊き　勝間田の　鹽湯の郷　神のその御湯

又、湯の社に參出てよめる歌并短歌

勝間田の　神の御湯は　神ろぎの　少名御神の　神ながら　造り給へれ　そこ故に　少名御神を　神代より　湯の御神と　申し來れる

反　歌

をろがみて仕へ奉らへ言はまくも文に尊き湯の大御神

十月二日、吉州東門内韓致玉といふ文字書ける皮つけたる鷹、備前國御前郡に渡り參來しを賀ぎてよめる歌（ことし天津日嗣しろしめしき）

八隅しし　我が大王　高光る　日の御子　玉敷の　平安の宮に　宮柱　太敷きまして　天津日嗣　つぎてのまにま　天の下　治め給へば　さひづるや　唐の王が　門の内に　とぐら結ひつゝ　据ゑて飼ふ　秀鷹すらも　かけり出て　わたり參來ぬ　飛ぶ鳥も　大王にまつろふ　天なるや　日月と共に　大御稜威　いや輝かす　我が大王かも

---

○現身の　人の枕詞。
○少名御神云々　勝田の湯は少名御神が鷲の浴せるを見て發見したとの傳説がある。
○神ながら　神の御心のまゝに。
○吉州　江西省吉安府。
○韓致玉　支那の人名。
○ことし天津日嗣云々　弘化四年九月二十三日孝明天皇御卽位。
○八隅しし　大王の枕詞。
○高光る　日の枕詞。
○玉敷　玉を敷き飾つたやうに美しい意。
○平安の宮　京都の宮城。
○太敷きまして　いかめしく立てられて。
○天津日嗣云々　帝位を繼ぎ給ふまに／＼。
○唐の王　淸國皇帝。
○とぐら　鳥の塒。萬葉集卷十九「鳥座結ひ据ゑて吾が飼ふましらふの鷹。」
○秀鷹　最上の鷹。
○天なるや　やは咏辭。

十一月十二日、美作國英多郡川會郷宮地村に坐す天石門別神社に參出て
よめる歌

石門別　神の命の　敷きませる　御諸を見れば　嶮しかも　巖の壁立ち
落ちたぎつ　河の瀨淸し　其の巖の　壁立つ如く　千早振　うとぶるもの
を　荒び來る　道に塞らし　其の河の　淸きが如く　過てる　人の心を
神直日直し淸めて　夜の守り　晝の守りに　現國守り給へる　神の尊さ

同じ夜のうた

石門別　神の御諸に　水こそは　淸く流ゆれ　月こそは　さやに照らせれ
其の水の　淸きが如く　其の月の　さやけき如く　いとこやの　妹が心は
淸くさやけし

嘉永元年八月十三日、豐年を賀ぎてよめる歌

八隅しし　吾が大王　高光る　日の御子　玉敷の　平安の宮に　久方の　天
つ日嗣を　神ながら　しらし給ひて　御代の名を　よろし永しと　かしこく
も　定め給へれ　天の下　奥つ御年は　天地の　神相たすけ　荒き風　水に
あはせず　八束穗に　なし幸はへり　今年より　いや益に　千五百代に
國は榮えむ　萬代に　民は榮えむ　安らけく　よろしく永き　神の大神代

---

○敷きませる御諸　領有せられる神社。御諸は御室。
○嶮し　嶮しい。
○千早振　うの枕詞。
○うとぶるもの　親しまない者。
祝詞御門祭「櫛磐牖豐磐牖命ミ御名を申す事は四方内外の御門に湯津磐村の如く塞り坐して四方四角より疎び荒び來む天のまがつひといふ神の言はむ惡事に相まじこり相口會へ賜ふ事なく……朝は門を開き夕は門を閉て參入り罷出る人の名を問ひ知らし咎過あらむをは神直備大直備に見直し聞き直し云云。」
○塞らし　防ぐ。
○神直日　禍を直す神。
○さやけし　一本「さやけき」
○よろし永し　嘉永。
○奥つ御年　最も晩く實る穀物卽ち稻。
○相たすけ　一本「相うづなひ」萬葉集卷十八「天地の神相うづなひすめろぎの御靈たすけて云々。」

十月八日、美作國勝田郡和氣鄕高此野の神主、岡本の俊信が家にて

よき人の　庭の園には　こゝばくの　花も匂へど　其の色の　宜しき花の　其の香の　よろしき花　みな人の　目につく花の　をとめ子に　似るちふ花の　ことさへぐ　からよもぎの花　くさ〴〵の　色あらそひて　垣もせに　千重に八重に　みやびをの　集へる此の日　咲きにほひたり

反歌

唐蓬見つゝしをれば吾妹子が夜戸出の姿おもほゆるかも

十一月十八日、和氣郡大中山より歸るさ

吾妹子が　袖振る鄕の　上つ道　豆田の鄕に　荒磯浪　古しぬび　今を思ふ　わが友垣の　きその夜ゆ　つどひてあるらむ　ぬば玉の　夜の明けぬれば　戸開きて　吾を待つらむか　歩めわが足

反歌

綱つけてひこづれ子供足なへの歩きがてなる車路の坂

十二月十六日の夜、美作國英多郡闇武の鄕にて

つくよみの　持たる水かも　高おがみ　降らす雪かも　久方の　きよき月夜に　敷たへの　妹が苑生に　こきた流れ來

○からよもぎの花　菊。
○垣もせに　垣も狹に。
○夜戸出　夜の外出。萬葉集卷十二「吾妹子が夜戸出の姿見てしより心空なり土は踏めども」
○吾妹子が袖振る鄕　吾妹子が袖はふるの序詞。振る鄕は故鄕備前
○上つ道　上道郡。
○荒磯浪　いにしの枕詞。
○きその夜ゆ　昨夜から。
○歩めわが足　萬葉集卷十「間遠くの雲居に見ゆる妹が家にいつか至らむ歩め吾が駒」
○綱つけてひこづれ　我が足に綱をつけて引きづれよ。
○子供　門人。
○足なへ　跛者。
○歩きがてなる　歩き難き。
○つくよみの持たる水　萬葉集十三「月讀の持たる越水をい取り來て云々。」月の中にあるといふ不老不死の水。一本「月弓の持たる水」
○高おがみ　雨雪を司る龍神。
○敷たへの　いの枕詞。
○苑生　一本「垣根」
○こきた　夥しく。

十二月二十九日、野々口隆正及びある漢學者流の、おのれを天傳ふ平賀の老翁、また平賀翁なにと物に書きたるを見て、いたく嘆きてよめる歌

皆人は　吾を老翁といふ　みな人は　吾を翁とふ　よしゑやし　老翁とも云へ　よしゑやし　翁ともいへ　黒髮は　白くもならず　白き齒は　黒くもならず　足すらも　いまだいなへず　口すらも　よくぞ物いふ　此の足の　踏みたつ極み　此の口の　物いふ限り　丈夫の　心振起し　八島國　あるき回らひ　古の　御書押開き　御國ぶり　說きぞ示さめ　事しあらば　火にも水にも　大君の　爲にぞ死なめ　年は老いぬとも

安政四年正月、人々集ひて、おのれ六十になれるかといふを聞きてよめる歌并に短歌

うつそみの　人に問はれて　指折り　かき數ふれば　六十とせの　年は經にけり　六十年の　年は經ぬれど　新玉の　年老いぬれば　眞木柱　立てし心は　若き世に　今もかはらず　わが年の　生けらむ極み　八隅しし　わが大君の　いにしへの　御書ひらき見　朝よひに　歌よみしつゝ　丈夫の　心を延ばへ　ますらをの　男さびせむ　わが命　死なば死ぬとも　身のみこそ　黄泉にし朽ちめ　魂は　天にまるのぼり　天なるや　日の若宮の　人にと

○野々口隆正　石見國津和野藩士初め平田篤胤、後に村田春門に學ぶ。
○天傳　ひの枕詞。
○よしゑやし　まゝよ。
○白くもならず　一本「いまだ白けず」
○いまだいなへず　いなへずの「い」は接頭語。一本「いまだなへず」
○よくぞ物いふ　一本「止まず物言ふ」
○丈夫の心振起し云々　萬葉集卷四「大丈夫の心振起し劒太刀云々」
○御國ぶり說きぞ示さめ　日本の國風を說き明かさう。一本「……示さむ」
○事しあらば云々　萬葉集卷四「吾が背子は物な思ひそ事しあらば火にも水にも吾なけなくに」
○死なめ　一本「死なむ」
○うつそみの　人の枕詞。
○新玉の　年の枕詞。
○眞木柱　立つの枕詞。
○男さびせむ　男らしくしよう。
○日の若宮　神代紀上「伊弉諾尊功既至矣、德亦大矣、於レ是登レ天報命仍留ニ宅於日之少宮一。」伊弉諾尊の坐す日の若宮に行き、其所に人として留る意。

どまらむ

反歌

わが命死ぬる死なぬは神ろぎの高みむすびの神のまに〳〵

備中國窪屋郡大市郷足高神社の碑の長歌

八隅しし　わが大君の　きこしめす　島のこと〴〵　神はしも　さはに坐せれど　このしまの　この皇神は　そきだくも　尊き神の　こきばくも　畏き神と　古よ　云ひ來し神ぞ　尊みて　仕へまつらへ　かしこみて　仕へまつらへ　天地と　日月と共に　萬代までに

野山法名が四十の賀によめる

美作や　苫田の鄕は　山みれば　山の久しく　川見れば　川遠長し　その山の　久しくまして　その川の　いや遠長く　皇神に　仕へまつらへ　神の宮人

夏の日人の來ける時によめる歌幷に反歌

あらがねの　土さへさくる　夏の日の　暑さ厭はず　めづらしき　君來ましたり　さしなべに　湯わかせ子ども　夏の日の　暑さ厭はず　若草の　いやめづらしき　君來ましたり

○高みむすびの神　造化の三神の一であるから、生死をその神に一任すといふ。
○さはに　澤山。
○そきだくも　そこはくも。萬葉集卷二十「そきだくもおぎろなきかもこきばくもゆたけきかも。」
○こきばく　そこはくも。
○神の宮人　神主。
○あらがねの　土の枕詞。
○さしなべ　鍋に注口あるもの。萬葉集卷十六「さしなべに湯沸かせ子どもいちひづのひはしよりこむきつにあむさむ」
○若草の　いやめづらしきの枕詞　萬葉集卷三「若草のいやめづらしきわが大君」

反歌

まれ人に何もて饗へむ清瀧のやまの高嶺ゆ南吹けこそ

# 下

## 立春

三芳野の芳野の山に花見つゝ妹と遊ばむ春は來にけり

高星もくらみの山もかすむなりわが山陽に春し立つらし

美作國勝田の郡奈義の山をみて

峯はみな雲にかくれて雪の上に霞たなびく奈義の神山

題しらず

梅にほひ柳けぶりて故鄕の仁堀の里に春は來にけり

雄神河棚引く霧も夕月のかげも霞めり春になるらし

大君のそこ寶田の初春にまづなく田鶴の聲のゆたけさ

きはまりて貧しき吾もたち歸り富み足り行かむ春ぞ來向ふ

大三和の御神の高ね雪とけて長田の御田に春風ぞ吹く

美作や奈癸の山ざと春立ちて峯のみ雪に霞たなびく

○まれ人　客人。
○饗へむ　馳走せむ。
○南吹けこそ　涼しい南風が吹いて呉れよ。
○三芳野の芳野の山　美作國吉野郡（現今の英田郡吉野村及び大吉村）
○春は來にけり　一本「春は來りぬ」
○くらみの山　美作國勝田郡の倉見山。
○仁堀　備前國赤坂郡。
○大君のそこ寶田　大君の至寶の意から寶田（上道郡財田）にかけた。
○大三和の御神の高ね　伯耆國大山。
○長田　伯耆國西伯郡。

○比波の山　出雲國能義郡。

○大君の春云々　古事記が仁德天皇が黑媛を慕つて吉備國山方に行幸せられ、黑媛が菜摘むのを見給ひ「山方に蒔ける青菜も吉備人と共にし摘めば樂しくもあるか」とある。

○石生　備前國磐梨で、現今の赤磐郡。

○散り來る梅　一本「散り來る雪」

○流れゆけこそ　流れ行つて吳れよ。

○故鄕　備前國一宮を指す。元義は十年間もこゝに住んだのでいふ

○故鄕はむかし云々　古今集春貫之「人はいさ心も知らず故鄕は花ぞ昔の香に匂ひける」

○袖たれて　安らかに遊び樂しむ貌。

○飲むさかづきに云々　萬葉集卷九「杯に梅の花浮けて思ふどち飲みての後は散りぬともよし」

○酒杯に云々　右の萬葉集の歌、誤つて紛れ入つたのであらう。

---

山陽に春し來ぬらし神さぶる奈義山雪に霞たなびく

山陰には春し來ぬらし伯耆のや大山雪に霞たなびく

比波の山雪の上より吹きおろす春の嵐は寒けかりけり

春の初め吉備の山方にて

大君の春さりくれば青菜つむわが山方にかすみ棚引く

磐梨郡和氣鄉にて

春霞日かげかすみて石生の和氣の小野路に春風ぞふく

旅の歌の中に

枕べに梅が香薫るあかときは妹が家路のまして戀しき

酒づきに散り來る梅は吾が戀ふる妹があたりに流れゆけこそ

題しらず

故鄕はむかしの梅の花さきて昔の聲に鶯ぞなく

春たちて幾日もあらねば山陽はをても此面も梅の花さく

袖たれて見むと思ひし紅の梅の初花咲きそめにけり

久かたの月に向ひて吾妹子と飲むさかづきに梅の花ちる

酒杯に梅の花浮けて思ふどち飲みての後は散りぬともよし

久方の月影かすむ春の夜にいづくをさして鴈はゆくらむ
うるはしき子等が手なれし梅が枝を洩れ來る月のにほひよろしも
立つ春の月とはいへど春霞かすむ月夜に豈しかめやも
霞む夜の月見ぬ人や夏秋の月をあはれといひ始めけむ
天の下のどけかりけり大君の御代のはじめの春の日の影
吾妹子がかきひく琴の殊更に音新たなる春にもあるかも
天雲のい別れ行けば明星のひかり寒けし春のあかとき
二神は霧の上にぞ見えにける大笹山の春のあかとき
こゝろなく啼く烏かも吾妹子に別れのをしき春の曉
神戸山霧棚引きて神風の揖保の里に春雨ぞふる
墨染の日名倉山に霧たちて昨日も今日も春雨ぞふる

美作國飯岡郷の別業にて

あがた河月影かすむ春の夜に河原の千鳥妻よびてなく

同國堰の口といふ處の人のうせしそのうた

なき人の跡とぶらへば春の夜の月朧なり堰の口やま

同國栗倉を立ちて歸りける時によみて殘しける

○月のにほひ　月光の美しさ。
○吾妹子が云々　嘉永元年の春に元義は結婚したから、吾妹子はその妻。
○天雲の　別れの枕詞。
○い別れ行けば　妹に別れ行けば
○明星　曉の明星。
○二神　美作國久米郡の二上山。
○大笹山　同國苫田郡。
○神戸山　播磨國揖保郡。
○神風の　いの枕詞。
○墨染の　くらの枕詞。
○日名倉山　美作國英多郡。
○あがた河　英多河（倉敷川）。

春されば櫻花さく粟くらの山を見すてて歸る鴈かも

同國勝田の郡和氣の郷百々の大宮は、掛けまくもかしこき後醍醐の天皇命の大御輿とゞめたまひて櫻見そなはししところなり。その櫻の古木を見て

春くれば櫻さくなりいにしへの天皇命のいでましどころ

備前國和氣の郡藤野の郷神根の保に坐す神根の社の櫻のうた

作久耶毘賣神根の神の神さびていや年のはにさくや木の花

題知らず

あらし山櫻ふゝみて鴨川の柳萌え出でむ時にはなりぬ

櫻咲く妹が園生の月影に蛙なく夜は明けずもあらぬか

晝暮し夜渡しきけど妹が宿の蛙の聲は飽かずもあるかも

櫻花わが見に來れば久方の月夜かすみてかはづなくなり

高此野をわが越えくれば面白き春の月夜に蛙なくなり

吾妹子が苑生の椿さくら花今を盛りとにほひたる見ゆ

我が郷の鄙山ざくらなつかしみ都の花見いでがてにせり

御湯の郷櫻はな咲くふる郷の中山いまし盛りなるらむ

(一)春されば　一本「春くれは」古今集春伊勢「春霞立つを見捨てて行く鴈は花なき里に住みやならへる」

○春くれは櫻さくなり　一本「櫻花今も咲くなり」

○いでましどころ　行幸遊ばされた所。

○保　古制では、九戸以下は保。

○作久耶毘賣　木花咲耶姫命。神根神社の祭神。

○年のはに　毎年。

○木の花　櫻の花。

○あらし山　鴨川と共に京都。

○ふゝみて　含みて。莟を持ちて。

○明けずもあらぬか　明けないでいつまでもそのまゝであらぬか。萬葉集卷八「もみぢ葉の過ぎまく惜しみ思ふどち遊ぶ今宵は明けずもあらぬか」

○晝暮し夜渡し　終日終夜。萬葉集卷十八「晝暮し夜渡し聞けど聞くごとに心動きてうち歎き云々」

○妹が宿の　一本「妹が園の」

○高此野　美作國勝田郡。

○苑生　一本「庭生」

○鄙山ざくら　吉備の中山の櫻。

○御湯の郷　美作國勝田郡。

○ふる郷の中山　吉備の中山。

吾妹子が園の櫻の樹の間より霞みて昇る春の夜の月

人問はば如何に語らむ瀧の上の櫻に匂ふ春の夜の月

春霞かすむ月夜の月影に花みるばかり好きことぞなき

夏秋の月とはいへど春霞かすむ月夜に豈しかめやも

茜さす晝も見暮し飽きたらで夜渡る月に猶ぞ花見る

茜さす晝はあれども霞みたる月にぞ花は見るべかりける

雨晴れて妹が園生を見に來れば櫻も桃も今盛りなり

はしけやし妹が園生のにくからぬ櫻の花は折らで置かめや

妹や子ら袖おし垂れて春の日ののどかの山に花を見るかも

年老いて病みたる我も花見れば昔の春の心地こそすれ

### 少年行

妹が家の板戸押開き我が入れば太刀の手上に花ちりかゝる

美作國勝田郡鹽湯郷鷺社にまゐ出て

白鳥の鷺の社のさくら花しろたへにこそ咲き匂ひけれ

同國の一の宮にて

中山のうなでの杜に散る花はうの羽の川に浮きて流れて

---

○樹の間云々　一本「樹の間ゆも霞みていづる」
○如何に語らむ　一本「何とこたへむ」
○夏秋の月云々　新古今集春大江千里「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」
○茜さす　晝の枕詞。
○夜渡る　一本「夜渡し」
○晝はあれども　晝もよいけれど
○櫻の花　妹を喩ふ。從つて折るは我が物とする意。
○袖おし垂れて　心安く遊び樂しむ意。
○のどかの山　春の日の長閑に美作國ののどか山を掛く。
○妹が家の板戸押開き　一本「吾妹子に切戸開かせ」妹が家は妓樓を指す。
○板戸　板張の戸。
○手上　柄。
○白鳥の　鷺の枕詞。
○しろたへ　白色。
○うの羽の川　鵜羽川。津山町を貫流する川。

足引の山を奇しみ行く水のさやけく清し中山の宮

苫西の郡布原の郷院ノ莊なる、掛けまくも恐き後醍醐天皇の行宮の址に

まゐ出て

まゐ出來て昔おもへば春風に櫻ちるなり美作の宮

題しらず

和氣のやま山櫻花過ぎ去りて青葉がくりにうぐひすの鳴く

雄神河春の行方を追ひくれば青葉の山にうぐひすの鳴く

春雨に櫻は落ちて青葉のみいや繁りたる林野のさと

眞榊に木綿かも懸くと見るまでに妹が栗林に花咲ける見ゆ

題しらず

見渡せば奈義の神の峯雪消えて美作國内夏立ちにけり

山みれば木のくれしゞになりにけり春は何處に過ぎかいにけむ

妹が家の向ひの山は眞木の葉の若葉涼しく遊び出でにけり

伯耆美作備中三國の境なる中山を越えける時のうた

中山をわが越え來れば前しりへ左右に啼くほとゝぎす

題しらず

○行く水の　一本「行く水も」

○まゐ出來て　參出來て。

○和氣のやま　備前國和氣郡。
○青葉がくり　青葉隱れ。
○雄神河　備前國吉井川。
○青葉の山　青葉茂れる山。
○眞榊　眞は接頭語。
○栗林　栗の木の林。栗の花の垂れたるは木綿を掛けたのに似る。

○遊び出でにけり　快く生ひ出た

○啼くほとゝぎす　一本「ほとゝぎす啼く」

墨染の黒澤山の夕月にひと聲なのる山ほとゝぎす

あがた川あかとき月に名のりつゝ川上遠くゆくほとゝぎす

雄神川かはをへだてて妹が宿の曉月に啼くほとゝぎす

妹がやどの向ひの山の時鳥雨降らなくに夜もすがら啼く

紐解かぬ旅のやどりに數なきてくに思はする醜ほとゝぎす

高星の山下あかき月の夜に妹が園生に啼くほとゝぎす

美作や珠洲の山路を越え來れば谿の石間に郭公啼く

和氣郡益原郷雄神河にて

かぐはしき茨の花の咲き匂ふ河邊の道は行けど飽かぬかも

和氣郡朝田郷にて

五月雨の日にけに降れば妹が著る衣笠山は乾く間ぞなき

院の莊のふるき宮所に參出けるに、後醍醐天皇今も大御坐すが如おもはれて、おのれ卽て大御前に侍ひ居る心地しければ

太刀佩きてあがさもらへば夏の風暑く吹くなり美作の宮

美作國英多河に月を見て

あがた河若葉をくゞる水の上にやどれる月の影の涼しさ

---

○墨染の　黒の枕詞。
○黒澤山　美作國苫田郡。
○あがた川　美作國英田郡江見川
○紐解かぬ　衣の下紐を解かない卽ち心安く寢られない意。一本「草枕」
○くに思はする　故郷を偲ばせる一本「物思はする」
○醜ほとゝぎす　醜は同情のない時鳥を罵る意。
○あかき　明るき。
○谿の石間に　一本「谷の底にも又は「谷の底へに」
○日にけに　毎日。
○妹が著る　かさの枕詞。
○さもらへば　伺候すれば。
○若葉をくゞる　一本「若葉を分くる」

同國廣中の郷清瀧にて

清瀧をわが見に來れば足引の山の木ごとに蟬ぞなくなる

同國勝田の郡豐國の郷笠掛の森にて

夏の日は道行く人も休ふなり木影すゞしき笠掛の森

題しらず

玉垂の小簾動かして南ふく夏こそ妹が宿は涼しき

我妹子が苑生の松に啼く蟬の聲さへ涼し今日の夕立

雄神河かは邊涼しも吾妹子にあふち花咲く川邊涼しも

しら絲の栗子の村の棟かげ夕風すゞし休みて行かな

神さぶる周匝の山ゆい吹き來る風を涼しみ吾がたちとほる

棚霧らひ雨ふりの山の朝雨に濡れつゝ行けば涼しくもあるか

高根より南吹き來て吾妹子が宿こそ夏は涼しかりけれ

內日さす大宮川に涼しくも押して照りたる夏の夜の月

春秋の月のみ良しといふ人に見せまく欲しき夏の夜の月

石竹も憎くはあらねど丈夫の見るべき花は夏菊の花

能登香山妹が門見にわが來れば今盛りなり夏菊の花

---

○玉垂の　をの枕詞。

○吾妹子にあふち花咲く　吾妹子に逢ふ意を掛く。一本「高屋ゆ北吹きおろす」

○しら絲の　くりの枕詞。

○栗子の村　美作國久米郡。

○周匝の山　備前國赤坂郡。

○たもとほる　ぶら／＼する。

○棚霧らひ　霧が棚曳いて曇る。

○南ぶりの山　美作國英多郡。

○南　南風。

○內日さす　宮の枕詞。

○大宮川　美作國苫田郡の宮川。

○春秋の月のみ云々　一本「夏月の月のみよしといふ人に見せまくはしき春の夜の月」

もみぢ葉は秋とはいへど夏の日もくれなゐにほふをかつらの園

天保十四年、眞島郡中山を越えける時、山の背に赤き花咲きたるを人に問へば「うつぎ」なりといひけり。今年勝田の郡梶並山の山越えて行くに、紅に咲きたるを問ふに「卯の花」なりといひければ

卯の花を白しといへど美作のうつぎは赤き花ぞ咲くなる

兒島にて月を見て

かぎろひの夕霧はれて兒島のうみ藤戸の浦に月すめる見ゆ

美作國二上山の麓に顏よき女ありと聞き行きて共に月を見て

むかひゐて見れども飽かず美作や二上山の秋の夜の月

八月十五夜、弄槍して

月よみの光さやけみ鉾とりて男さびする丈夫のとも

題しらず

妹が家の月見にくれば雄神河かはべ涼しく秋風ぞ吹く

大公の三門國守萬成坂月おもしろみわれひとり行く

山はみな霧にかくれて霧の上に月ばかりこそ澄みて見えけれ

玉久世の清き河原に照る月はさ夜更けてこそ照り勝りけれ

---

○をかつら　楓。

○かぎろひの　ゆふの枕詞。

○月よみの光云々　一本「月讀の光をきよみものゝふの建男のともらはこりこぞする」

○男さびする　男らしいそぶりをする。

○秋風ぞ吹く　一本「秋の風吹く」

○大公の　みかどの枕詞。

○三門國守　何れも備前國御野郡

○萬成坂　岡山市内。

○月おもしろし　一本「月おもしろみ」「月影清み」或は「月おもしろく我は越え來ぬ」

○玉久世　玉は美稱。久世は美作國大庭郡久世村。

○河原　高田河原。

妹と二人曉露に立ち濡れて向つ峯の上の月を見るかも

そこ清き鏡の河邊たもとほり秋の御中の月をみるかも

名ぐはしき芳野の山にさゝがにの雲さへ晴れて照る月夜かも

笠懸の森の外には隈もなし鏡の橋の秋の夜の月

月よみの光さやけみぬば玉の今宵の國見書にまされり

かゞみ川御影うつりて天地に一つ照る月二つと見ゆる

白たへの衣手たれて吾妹子と遊ぶ今宵の月夜たのしも

磐梨郡佐伯鄕にて

高星の溪のもみぢ葉吾妹子に見せまくほしき谷のもみぢ葉

題しらず

見わたしの山のもみぢ葉苑の菊けふの時雨に色いやまさる

立ちかへり又も見てしが奈義山の時雨にぬれしもみぢ葉の色

能登香山かゆきかく行き妹と吾秋の紅葉を今日も見るかも

妹や子等谷の巖に腰かけてのどかに山の紅葉をぞ見る

まそ鏡見れども飽かぬ山鄕の秋の紅葉を風吹きちらす

奥山の秋のもみぢ葉見るごとに吉備の中山思ほゆるかも

---

○妹と二人云々　萬葉集卷二「吾が背子を大和へやるとさ夜更けて曉露に吾が立ちぬれし」

○鏡の河　香美川。美作國苫田郡

○秋の御中の月　仲秋の月。

○名ぐはしき　芳野の枕詞。

○さゝがにの　くもの枕詞。

○笠懸の森の外には　笠懸の森のみは暗いが、其の外は。笠懸の森は美作國英田郡。

○鏡の橋　梶並川に架せる橋。

○ぬば玉の　今宵の枕詞。

○國見　高所に上って國の有様を見下す意。

○白たへの　衣の枕詞。

○衣手たれて　袖たれてと同じ。

○見わたしの山　眼前に見渡される山。

○見てしが　見たいものだ。

○能登香山云々　一本「のどか山いよぢのぼりて妹と吾今年も秋の紅葉をば見つ」第三句「妹や子等」ともある。

○かゆきかく行き　彼方に行き此方に行き。

○のどかに　能登香山を掛く。

○まそ鏡　見るの枕詞。一本「日重ねて見れども飽かぬ足引の山の紅葉を風吹きちらす」

神の根の秋のもみぢ葉散りて來ば飲む風流士の杯のうへに

雄神川かはべに立ちて家思へば高星山に鹿ぞなくなる

雨晴れて清く照りたる有明の月に鹿なく高星の山

久方の月影明き秋の夜に男鹿妻よぶ高星の山

故郷へ還りける時

妹がりと我が越えくれば鹽田山吾を松蟲の夕月になく

播磨の千草といふ處にて

玉鉾の千草の原の秋の日に咲き亂れたる八千ぐさの花

赤坂郡周匝鄕にて

周匝路の堤の木の間わけくれば天の橋立ゆくこゝちせり

見わたせば高星高嶺朝日さし下つ寧山さ霧たなびく

ふる鄕の寸簸の山方山高み秋風さむし衣かせ妹

磐梨郡和氣鄕熊山の麓にて

久方の月はくもりて熊山の神のみほとに霧かをる見ゆ

父のうせにし頃ありし事ども思ひ出て

上山は山風寒しちゝのみの父のみことの足冷ゆらむか

---

○神の根　備前國和氣郡神根神社

○月影明き　一本「月おもしろき」

○妹がりと　妹の許へと。

○鹽田山　備前國和氣郡。

○吾を松蟲　松に待つを掛く。

○玉鉾の　ちの枕詞。

○千草　宍粟郡。

○衣かせ妹　妹よ我に衣をかせよ　古今集羇旅讀人不知「都出でて今日みかの原泉河河風寒し衣かせ山」

○みほと　山間の凹んだ所。

○霧かをる　霧が煙る。

○上山は云々　一本「上山はまして寒しもちゝのみの父のみことの足冷ゆらしも」

○上山　父の墓所。備前國御津郡

○父のみこと　みことは尊稱。

○足冷ゆらむか　元義の父長春は中風症であつたからいふ。

兒島に雪ふりけるを見て

見わたせば建日方別鐸日賣の衣手しろく雪ぞ降りたる

兒島の逢崎にて

あさりするもずの聲のみ聞えけり雪降り積める浦の夕暮

美作國勝田の郡香々美山にて

鏡山雪に朝日の照るを見てあな面白と歌ひけるかも

題しらず

新田の穂田は日照りて妹が著る衣笠山にしぐれ降るみゆ

妹まつと庭にたち出でて久方の天の時雨にぬれにけるかも

奈義の根を朝日に見れば降り敷ける雪の上より霧たち昇る

あかねさす日は照りながら紅の淺原山ゆ雪のちり來る

久方の天の岩門を漕ぎ行けば天つ御長田ゆ雪ぞちり來る

河邊山吾が越え來れば久方の清き月夜に雪ぞ散り來る

美作は寒けかりけりみ雪降る奈義の高峯の山おろしの風

吾妹子が庭おもしろき山里の雪にのこれる有明の月

白妙の雪さへ降りて面白き今宵の月に家路へだてて

○見わたせば云々　一本「見渡せば建日方別鐸日賣の袖白妙に雪ふりにけり」又は第四句「衣手寒く」

○建日方別鐸日賣　古事記「生二吉備兒島一。亦謂二建日方別一。次生二小豆島一、亦名大野手比賣。」兒島と小豆島とを指す。

○あさりするもずの聲のみ　一本「かし島のあさるこゑのみ」

○あさりする　餌を搜す。

○新田の穂田　新田は備前國和氣郡。穂田は稻穂の實れる田。一本第一句「遠治田の」

○妹が著る　かさの枕詞。

○妹まつと云々　萬葉集卷二「足引の山の雫に妹待つと吾立ちぬれぬ山の雫に」

○紅の　淺の枕詞。

○天の岩門　和氣郡。

○天つ御長田　天照大神の營み給ふ狹田長田。一本「天つ御空ゆ」

○河邊山　美作國勝田郡。

○み雪降る　一本「三冬月」又は「寒さぶる」

埋火は消え果てにけり旅にして身に添ひぬべき妹もあらなくに

妹がうむ雄神の川の川千鳥家思はせて夜もすがら鳴く

藤原の渡口に立ちて月見れば上つ瀬川に千鳥しばなく

雄神河曉寒み河上のゆつ岩群に猿さはに啼く

美作に在りける時故郷の酒妓がもとより文おこせける時に

荒小田をかへすがへすも妹が文見つゝし居れば小夜そ明けにける

題しらず

打ちなびく春の園生の春風になびく柳のなびけ吾妹子

打乘らむ馬はあれども吾妹子に戀の松原かちよりぞゆく

遠くともいそげ大麿吾妹子に早も見せまくほしきこの文

たらちねの母にころばえ夜逢はむ妹とし我は晝こそ逢ひけれ

居待月明かしてみれど秋津羽の袖振る妹は飽かずもあるかも

彌上山池の水底清らけき妹がこゝろは忘れかねつも

夕闇の道は暗けど吾妹子に戀ひてすべなみ出でて來るかも

物見ると人には云ひて鏡なす吾が思ふ妹を餘所に見しかも

吾妹子を目には見れども現身の人目を多み逢ふ由ぞなき

---

○妹がうむ　をの枕詞。
○藤原の渡口　美作國久米郡。
○渡口　渡頭。
○上つ瀬川　一本「下つ瀬川」
○しばなく　繁く鳴く。
○荒小田を　かへすの枕詞。一本「春の田を」
○打ちなびく云々　柳のまでは序詞。
○打乘らむ馬云々　萬葉集卷十一「山科の强田の山を馬はあれどかちの吾が來し汝をおもひかね」
○戀の松原　備前國上道郡の二本松あふ埠島野。
○かちより　徒歩で。
○大麿　人名。
○ころばえ　ど鳴られ。
○妹とし　しは強め詞。
○居待月　あかしの枕詞。
○明かして　夜を明かして。夜通し。
○秋津羽の　袖の枕詞。秋津羽は蜻蛉羽。萬葉集卷三「あきつ羽の袖振る妹を玉くしげ奧に思ふを見給へ吾が君」
○彌上山　備前國赤磐郡。
○夕闇の道は云々　萬葉集卷十一「吾背子に戀ひてすべなみ春雨のふるわき知らに出でて來しかも」
○すべなみ　仕方がないから。
○物見ると云々　萬葉集卷十二「足引の山より出づる月待つと人には云ひて妹まつ吾は」
○鏡なす　吾が思ふ妹の枕詞。
○吾妹子を目には云々　萬葉集卷十二「心には千重に百重に思へども人目を多み妹にあはぬかも」
○人目を多み　一本「人目を繁み」
○吾妹子は茅花云々　萬葉集卷八

吾妹子は茅花をこゝだ食ひけらし昔見しより肥えましにけり

望赤坂郡龍天山

振りさけて見れば神しも大穴牟遲神の伏せし布勢の神山

赤坂郡周匝郷劔の峯をよめる

すさのをの神の劔の納まりて在りとふ御山みれば尊し

讃岐の海にて殘りたる月を舟より看て

吾妹子がいとこやの上に殘りたる月かも海の上にし見ゆる

和氣郡益原郷雄神河にて

吉備の國雄神の河にあわゆきの眞白き龜を昔獲しちふ

上道郡都起郷にて

山守の古き入江をとめくれば昔の聲に田鶴ぞなくなる

美作國吉野郷赤田村をよめる

朝日子の早も來むかひ夕されば夕日よく照るを明田の村

美作にゆきて

美作や大原山の山つ藷こきだく食ひてあは肥えにけり

兒島の逢崎にて

---

「吾君にわけは戀ふらしたまひたる茅花を食めどいや瘦せに瘦す」同卷四「吾妹子は常世の國に住みけらし昔見しより若えましにけり」

○振りさけて見れば　遙かに眺むれば。

○伏せし　伏せりしで、鎭坐する意。

○布勢の神山　龍天山の古名。

○すさのをの神の劔　大蛇を退治した十握劔。

○いとこや　寢所。

○あわゆきの　白の枕詞。

○眞白き龜云々　文德實錄の嘉祥三年七月の條に「於郡下石生郷雄神河獲白龜一枚云々。」

○山守の古き入江　備前國上道郡

○朝日子　朝日。

○を明田の村　をは接頭語。

○大原山　英多郡。

○山つ藷　山の芋。

○こきだく　澤山。一本「こきたくらひて」

逢崎は名にこそありけれはしきやし吾妹が國は雲居隱りぬ

三宅郷田土の浦より竹島を望みて

兒島の海田土の浦に神しくも神さびいます竹島の神

讃岐國にゆきける時

藻鹽やく綱の浦囘の夕暮は故郷ましてしのばるゝかも

播磨國と美作國と境杉坂の關にて

御軍の仇防ぎしは昔にて杉のみ立てり杉坂の關

美作國苫東の郡高野の郷なる墨の池にて

これやこの昔法師のもの書きて筆洗ひにしする墨の池

陽成天皇の元慶元年に、美作國眞島郡かぶらわり山より銅を掘り探りて進りし事、三代實錄に見えたるを、國人に問ふに、「さる山をば聞かず、高田の郷にかぶら坂ちふ坂あり。」といふ。行きて見るに、其の坂の東に金掘谷ちふ所ありて、そこに銅掘りし坑あり。所謂かぶらわり山こゝなる事いちじるしければ

古のかぶらわり山國人の知らずて年を經しがかなしさ

美作國吉野郷政民が家にて

○逢崎　備前國兒島郡。逢ふ意を掛く。
○吾妹が國　一本「吾妹の家」
○綱の浦回　讃岐國鵜足郡。
○杉坂の關　南北朝時代に赤松則村が守つたここ等を指す。

○淑人の云々　萬葉集一「淑人のよしとよく見てよしといひし吉野よく見よよき人よく見つ」
○山川の淸き河内　萬葉集卷二「山川の淸き河内と御心を云々。」
○萬代も云々　一本「萬代にかはらずあれと壽ぎて祝ふこの屋よ萬代までに」
○千早ぶる　神の枕詞。
○石閒入江　備前國上道郡。
○さきはへまさむ　榮え給はむ。
○二柱酒の御神　酒水男神、酒水女神。
○うちひさす　みやの枕詞。
○屯倉の浦　兒島郡。
○ともしさ　面白い。
○北島山　備前國邑久郡。
○名ぐはしき　名高い。
○石の谷蟆　ひきかへるの形をした石。

---

淑人のよしとよく見て住みよしと云ひし吉野に住めるよき人

ある人の家にて

山川の清き河内とみやびをの住むこの宿は萬代までに

萬代もかはらずあれと壽ぎて祝ふこの宿萬代までに

千早ぶる神の高根をとこしへに見るこの宿は萬代にもが

朝な〳〵石閒入江に鳴く田鶴の聲きく宿は千年にもがも

五百萬千萬神の萬代にさきはへまさむ宿ぞ此の宿

二柱酒の御神も守らひて千代に榮えむ宿ぞこの宿

岡島主の高樓に宴して

うちひさす屯倉の浦の夕潮に漕ぎ來る船を見るがともしさ

業合大枝を訪ふ

邑久の海北島山の名ぐはしき君に逢はなと舟漕ぎよせつ

備前國周匝の武士高木帶刀が家の庭にある谷蟆の石を

神漏伎の少名御神や造りけむ見れば神しき石の谷蟆

美作國勝田の郡飯岡の郷、三十六□の中に姥がふところに夕日の照るところ

○姥がふところ　飯岡村にある一小字。
○賊ども　南北朝の時赤松方の軍
○神力山　生野の銀山をいふ。
○天地の神の力のいひそひて　天地神の神力といふ名前が人のいふ所によつて此の山の名についで。
○月次屏風　一年中の毎月の行事を書いた屏風。
○濱び　濱邊。
○いさなとり　海の枕詞。
○命長山　命長しに長山を掛く。
○ます鏡　ミル枕詞。
○深見草　心の深いと牡丹とを掛く。
○大御代の賀の歌　聖代を祝賀する歌。
○鹿島の石　鹿島神社內にある要石。

こゝにこそしまし休はめ夕づく日かげ暖けき姥がふところ

美作國勝田の郡鹽湯の郷鷺の社の八景の中に林野山城墟といふを

賊どもの昔こもりし林野の山は松のみ繁りてありけり

人のもとめによりて生野の神力山を

天地の神の力のいひそひて千代榮えゆく白銀の山

備前國月次屏風、和氣の郡方上の津に月を見る所

方上の濱びに立ちていさなとり海より出づる月を見るかも

屏風に書ける

こゝにこそ住家ほしけれ美作や英多の奥の命長山

美人畫賛

わがせこは待てど來まさず誰が園の櫻の花を見にか行きけむ

女の牡丹を見たる繪に

ます鏡見ませわが背子君をわが思ふ心の深見草これ

或人大御代の賀の歌をよめといひければ

君が代は御さかえまさむ常陸なる鹿島の石の堅石常松に

生野銀山の人の賀によめる

ときはなる生野の山は限りなき君が齢の名にこそありけれ

或人の夫婦の四十の賀に、鶴の繪の上に

この浦に二つならびて住む田鶴は君が妹背の千代の友かも

或法師の四十の賀に

うつそみの世は捨つるとも萬代に命ばかりは捨てずてあれこそ

備前國赤坂郡輕部の里人額田正員が六十賀に、その里なる長尾山によせて

長尾山ながらへをりて石の上ふること語れさ額田の翁

人の婚姻に

逢ひそむる今宵を千代の初めにていや變若にをちて契り終へこそ

爲貞大和守久綾朝臣、大夫に任たるを賀してよめる

うべしこそ位はたまへ大君に二心なき神の宮人

眞黑なる煙の中をくきぬけて仇とり來べき人とこそ思へ

社軍隊に五百の鐵砲を下し給ひけるを

古の二萬の軍に勝るなり今とゝのひし五百のつはもの

整ひし五百津の軍いかでかも君が御楯とならざらめやも

---

○ときはなる生野　いつまでも生きる意。

○うつそみの　世の枕詞。
○捨つるとも　一本「捨てぬとも」

○長尾山　ながらへをいふ料。
○石の上　ふるの枕詞。

○いや變若にをちて　愈若返つて
○契り終へこそ　契り終へることを冀ふ。

○うべしこそ位はたまへ　五位の位を賜いたのも道理である。
○くきぬけて　潜り抜けて。

○社軍隊　元治元年國事多端の時岡山藩内の五百人の神職を以て編成した警備隊。
○五百津の軍　五百人の兵。

かけまくも恐き齊明天皇、から國を攘ひ給はむとて、筑紫へ行幸坐し時に、勝兵二萬を獲まして大く悦びましたる事備中風土記及び本朝文粹に見えたり

また杉山某が、社軍隊の事取りし功によりて、國守より物賜ひけるをほぎて

萬世を經とも朽ちめやその功ほめて賜ひて君がたまもの

見垣國通が太刀給ひけるをほぎて

賜ひたる太刀取り佩きて事しあらば國の御楯と出でたたしませ

福島何がしが妻阿宗氏、其の行ひのよきとて、地頭より褒美とて物多く賜ひけると聞きて

美作や赤田の村の明らけき君がこゝろは神もしるらむ

名和伯耆守の十六代の裔長房によみて贈る歌の中

大君の御楯となりし丈夫の末はます〳〵いや榮えたり

源長年朝臣の裔長房が六十の賀しける時、容貌いと若く見えければ

伯耆山立ち榮えたる松の樹は千代もかはらぬ色ぞ見えける

喩二高階膽齊一

○杉山某　杉山直明。

○出でたたしませ　一本「出で立てわがせ」

菅の根のながき春日を徒らに暮さむ人は猿にかも劣る

ある若き武士によみて贈る

弓矢とる道には人におくれじと心勉めよ若き武夫

武夫の道には負けじおくれじと利心起せ武夫の子は

山城國東山吉田にて、信濃國諏訪の人におくりける歌

信濃路や大木曾の峯の白雲を分けつゝ君が家訪ひゆかむ

景義にかはりて、難波なる其の母によみて見せける

思ふこと言ひのばへつゝ諸共にうれしむ心神も知るらむ

直向ひ今も見るごと萬代に變らずいませ尊き吾が母

人の別れを惜しみてよめる歌に和へたる歌

水こそは歸らずあらめ現身は又も歸らぬものならなくに

人に別れてゆくとて

うつそみの世の事繁み珍らしき君に別れて山を越えゆく

僧實雅が都へ上る馬のはなむけによめる

うち日さす都の櫻めづらしき君に逢はむと咲きてまつらむ

玉敷の平安の宮のほとゝぎす君がのぼるを待ちて啼くらむ

○菅の根の　ながの枕詞。
○猿にかも劣る　萬葉集卷三「あな醜くさかしらをすと酒飮まぬ人をよく見れば猿にかも似る」
○弓矢とる道云々　一本「ものゝふの道には人におくれじと心つとめよものゝふの子は」
○利心　勇猛心。
○大木曾の峯　木曾山。
○言ひのばへ　言ひ陳べ。
○直向ひ云々　萬葉集卷二十「眞木柱ほめて造れる殿のごといませ母刀自おもがはりせず」
○現身　生けるこの身。
○うち日さす　都の枕詞。

江戸へゆく人の馬のはなむけに

鳥がなく吾妻の旅のゆくさくさ君をばちはへ八ちまたの神

原田何がしが江戸より還りける時に

草まくら氣長き旅の苦しさを忘れて今宵妹と寢るかも

人の江戸よりかへりけるに

おほやけの事のこと〲事をへて歸りし君に酒杯はさせ

題しらず

大江戸に行きたらはしてつゝみなく還りくる日はうれしくもあるか

美作國勝田の郡香々美の郷三宅氏の子うせける時のうた

かゞみ山山のあるじの常ならぬ音をし聞けば涕流るも

出雲國熊野意宇麿が國へ還りける時、わが塾の庭に柊を栽ゑたるを見て

玉くしげ一心なきますらをの心に似たるひゝらぎの花

備中國新見に、松を愛づる人の、歌を乞ひけるに

玉くしげ一心なきますらをの植ゑて愛づべき木こそこれの木

備中闇師城に學舍をたてて、漢文よませらると聞きて

暗四鬼の司人たち願はくはすめらみ國の大道をゆけ

---

○ゆくさくさ　行くさ來さ。往復
○ちはへ　幸を與へよ。
○八ちまたの神　旅の安全を守る神。
○草まくら　旅の枕詞。
○氣長き旅　長い旅。
○こと〲　全部。
○君に　君にこそ。
○大江戸に云々　萬葉集卷十九「から國に行き足らはして歸り來むますらたけをに御酒獻る」
○行きたらはして　行って十分役目を果して。
○つゝみなく　恙なく。
○山のあるじ　三宅氏をいふ。
○常ならぬ音　呱々の聲。
○玉くしげ　ふたの枕詞。
○木こそこれの木　一本「木こそ松の木」

述懐

放たれし野邊のくだかけ岡山の大城戀しく朝夕に啼く

大穴牟遅神の命は袋負ひ袁祁の命は牛飼ひましき

詠史

日の御子を迎へまつりし古の國つ御神も龜に乘りけり

おほぎみの錦の御旗天つ日に光りかゞやく船の上の宮

船の上いでましの山の山颪八島の國を吹きとよもすも

兒島備後三郎大人賛

吾が大君ものな思ほし大君の御楯とならむ我なけなくに

大君の御楯とならむ丈夫の鏡とすべき人ぞこの人

妹尾太郎兼保大人

道の中板倉川の末長く淸き其の名を流しけるかも

宇喜多七郎兵衛三宅忠家入道安心の翁を

いざ〳〵と君がのらずば千萬の唐の軍を誰か討つべき

西蕃漢張良賛

言あげて稱むれどつきじ月の沒る西の戎の大丈夫ごゝろ

---

○放たれし野邊のくだかけ　流涙の我が身を鷄に喩へた。
○岡山の大城　岡山城。
○大穴牟遅神云々　二つとも古事記にある話で、袋を負つたり牛を飼つたりするのは賤業である。ここは流涙の元義が發憤以て他日に資する意氣を示した。
○日の御子　神武天皇。
○國つ御神云々　古事記にある話で、神武帝が速吸追門で、國つ神宇豆毘古が龜甲に乘つて來るのに逢はれた故事。國つ御神は地方の豪族の意。
○船の上の宮　伯耆國の船上山に於ける後醍醐帝の行宮。
○いでましの山　行幸せられた山
○山颪　名和長年一族の勢をいふ
○ものな思ほし　物思ひ給ふ勿れ
○我なけなくに　我なきにあらず
彼の「天莫空勾踐。時非無范蠡。」萬葉集卷二「吾が大君物な思ほしすめ神のつぎてたまへる我なけなくに」
○大君の御楯とならむ　萬葉集卷二十「吾が大臣物な思ほし大君の醜の御楯と出で立つ我は。」
○道の中　備中。
○板倉川　足守川。兼保は板倉の戰で死んだ。
○忠家　浮田秀家の叔父で、征韓の總大將秀家の後見人。
○いざ〳〵と　進軍の號令。
○言あげて　揚言して。
○月の沒る　西の枕詞。
○西の戎の大丈夫ごゝろ　一本「西の戎があつき心は」

年のはに正月十六日、美作の國の人ども、久米郡弓削の神戸なる大菅山に鹿獵して、苫東の郡苫田の郷中山の大社へ獻るを、神の宮人ども庖丁して某大神の御饗に備へ奉ること、古よりの例なるよし聞きて

大菅の山のさ男鹿いつよりか神の御贄に仕へそめけむ

國つ神を

まつるべき國津御神は大穴牟遲大物主と大國魂の神

伊邪那伎命、伊邪那美命を

皇產靈の神に續きて尊きは伊邪那伎の神伊邪那美の神

多賀、熊野の二社を

伊邪那伎の神は多賀に伊邪那美の神は熊野にますと知れ人

淡路國の伊邪那伎の宮、出雲國と伯耆國との境比波の山を

多賀熊野のみにはあらず淡路にも比波の山にも坐すは此の神

天照皇大神宮を

天照らす皇大神の天降らして今もまします五十鈴の大宮

建速須佐之男神を

天照らす神に竝びて尊きはたけすさの男の神にぞ坐しける

---

○大穴牟遲大物主　二つとも大國主神の別名。
○大國魂の神　大國主神の別名ではあるが、諸國經營の神の意なる大國御魂神をいふ。
○皇產靈の神　高御產巢日神。造化三神の一。
○多賀　近江國犬上郡。
○熊野　紀伊國牟婁郡。
○淡路にも　津多郡。
○比波の山　出雲國能美郡。

天照らす皇大神に御いさをの劣らぬ神はすさのをの神

須賀の宮を

出雲のや須賀の熊野に妻ごみにこもりて坐す素盞嗚神

石上の神宮を

神世より大和と吉備に鎮まらす布都の御魂の神の尊さ

狹井、大神の二社を

國津神宮は多けど狹井と美和大國魂ぞ殊に尊き

杵築の宮を

狹井の宮尊くあれども出雲なる杵築の宮も同じ神の宮

酒殿の神を

酒つくる家にまつらむ神たちは酒水男神酒水の女の神

兒島の神たちを

兒島には神は多けど尊きは神の高嶺の國魂の神

屋船の神を

人の家にいはひ奉らむ皇神は屋船くゝのち豐受姫の神

八神屋を

---

○出雲のや云々　古事記「八雲立つ出雲八重垣妻籠に八重垣つくるその八重垣を」
○妻ごみに　夫婦隱りに。
○大和と　大和國山邊郡。
○吉備　備中國赤坂郡。
○狹井　三和と共に大和國礒城郡
○大國魂　大國主神。
○杵築の宮　出雲大社。
○酒殿　宮中にあつて、酒を造る殿。
○神の高嶺　兒島郡。
○國魂の神　國土經營の神。
○屋船くゝのち　古事記「次に木の神、久久能智神を生みまし。」家屋の神。
○豐受姫の神　屋船豐受姫神といつて、同じく家屋を司る神。
○八神屋　八神殿。

いはまくもあやに尊き神籬の八柱の神を人の知らなく

英多郡川會郷神石の里の神石をよめる

神さびて立てる石こそ石門別神のすなはち御形なるらめ

題しらず

八島國國つ御神のあら御魂うらさび坐さむ時近みかも

神島の磯間は西に打見えてかへりみすれば玉の浦みゆ

靈ちはふ大神島やま神の崎大海の上に神さびてみゆ

田土の浦漕ぎ出でみれば丈夫のたけ雄島山浪の上に見ゆ

高島の神島山を見に來れば磯間の浦に田鶴さはに啼く

弓削はたゞ名にこそありけれ弓削人は田をば作れど弓は削らず

夏麻引く菟上やまの山もとに今もましますう菟上の神

物皆はかはりゆけども萬代に變るべからぬ神の宮どころ

おほろかに思ふな子ども皇祖の御書にのれる神の宮處

吾獨り知ると申さば神漏伎の少彦名に面くはれむか

妻籠に籠りし神の神代より清の熊野にたてる雲かも

こも枕高島山ゆ見わたせば牟佐のあたりはよろしき所

---

○八柱の神　神皇産靈神、高皇産靈神、玉皇産靈神、生皇産靈神、足皇産靈神、大宮賣神、御食津神、事代主神。

○八島くに　日本國。

○あら御魂　和御魂に對して、勇進の神靈。

○うらさび坐さむ　一本「みさけび坐さむ」とある。

○神島　上道郡。

○玉の浦　邑久郡。

○靈ちはふ　神の枕詞。

○大神島やま神の崎　大は美稱神島は備中國小田郡。

○田土の浦　兒島郡。

○丈夫のたけ雄島山　丈夫のたけは雄島山の雄につゞく序詞。雄島山は上道郡。

○弓削　美作國久米郡。

○夏麻引く　うなの枕詞。

○菟上やま　美作國大庭郡。

○物皆は云々　萬葉集卷六「ふたぎ山山並見れば萬代にかはるべからぬ大宮ところ」同十二「月も日もかはりゆけども久にふる三諸の山のとつみや所」によい加減に。

○おほろかに

○皇祖の御書　六國史。

○神の宮處　社内。

○面くはれむか　日本書紀に潮のまゝに流れ寄つた少彦名命を大國主神が掌に取上げた時「すなはち跳りてそのつらをかみき。」といふことがある。

○妻籠に籠りし云々　前出「八雲立つ出雲八重垣云々」の歌による。

○こも枕　たかの枕詞。

○牟佐　備前國赤磐郡。

出雲のや伊賦夜の坂の千引石引くとも行くな惡しき道へは

足曳の山中治左が佩ける太刀神代もきかずあはれ長刀

五番町石橋の上でわが魔羅をたぐさにとりし吾妹子あはれ

彌兵衛が十握の劔遂に拔きて富子を切りて二きだとなす

彌兵衛が臥せる屍蛆たかれ見るわれさへにたぐりすらしも

本しげき吉備の大門に夕星のかゆきかく行く蜑の釣舟

武安の聖の君の立ちかへり又出でましし御代かとぞ思ふ

或武士の手負ひたるが歌乞ひければ

鎌倉のますら健男は眼に立ちし矢をさへ拔かで仇を取りけり

弓柄とる益良健男はまなごなす跡疵一つを苦しと思ふな

或若き武士に詠みて贈りける歌

弓とれば人におくれぬものゝふの世に名を揚げむ時をこそ待て

からふねを

大君の御稜威かゞやく日の本に狂業するな癡の漢人

○伊賦夜の坂の云々　八束部。伊邪那岐命が伊邪那美命を黄泉に訪ひ、遂はれてこゝまで逃げ來り千引石を以て道を塞ぎ遁れるこミが出來た話が古事記にある。千引石までは引くの序詞。
○足曳の山中云々　これに對する山中の返し「白波の興津新吉穿ける足袋神代も聞かずあはれ片足袋」興津新吉は元義の通稱。元義は怪我の爲に常に片足袋を穿く。
○五番町　岡山市。
○たぐさ　手でもてあそぶこミ。
○彌兵衛　一本「利兵衛」岡山市の酒家の番頭。富子は某商家の下女。
○十握の劔　日本書紀「伊弉諾尊遂に帶せる十握の劔を拔きて軻遇突智を斬りて三段になす」
○たかれ　集まりて。
○たぐり　嘔吐。
○吉備の大門　兒島郡籠崎の小門
○夕星の　かゆきかく行きの枕詞
○武安の聖の君　池田光政。光政の神號を鎭國武安光政命。
○立ちかへり　一本「歸りても」
○御代　池田義政の時代。
○鎌倉の云々　鎌倉權五郎景政。
○仇を取りけり　一本「仇い取りけり」
○まなごなす　細かい砂のやうな。
○跡疵　一本「小疵」。
○からふね　外國船。
○大君の御稜威云々　萬葉集卷二十「いざ子ども狂業なせそ天地のかためし國ぞ大和島根は」
○狂業する　一本「狂業なせそ」
○癡の　愚鈍なる。

# 補遺

安東翁の六十の賀に龜に寄せて

あがた河かしら竝べて住む龜は君が妹背の萬代の友

道廣ぬしの持ち給へる奇石の不二に似たるを人の云ひければ

駿河なる不二の高根も此の石も同じ御神ぞ造らせりける

嘉永元年六月九日、苫東の郡高倉の郷大さゝの社に在りて

神さぶる大さゝ高根棚きらひ美作國内夕立ぞする

○

ほとゝぎすとよもすなべに吾妹子が園生の栗林花さきにけり

嘉永三年正月一日美作國久米郡に在りて

菅の根の長岡山にてれる日の御影のどけく見ゆる今日かも

出雲國造出雲宿禰尊孫が六十の賀に詠みて贈る歌幷に短歌

明つ神　わが大君の　臣達は　多にあれども　宮つ子は　多にあれども　天地の　遠き初めに　天の菩耳　神の命の　千早振　國つ御神を　百傳ふ　日隅の宮に　媚鎭め　靜めし時に　神ろぎの　神の命の　神ながら　のらし給

○とよもすなべに　鳴き響かすと共に。
○菅の根の　長の枕詞。
○明つ神云々　明き神は天皇を美め奉りて申す。萬葉集卷六「明つ神吾が大君の天の下八島の中に國はしも多くあれども里はしも多くあれども云々。」
○天の菩耳　天の穗日命。出雲國造の先祖。
○百傳ふ　一本「天傳ふ」
○日隅の宮　杵築の大社。
○媚鎭め　機嫌を取つて。

はく　汝穂日　神の命　恐きや　天□命の　田長の　大御代を　堅石に　いはひ奉り　常磐に　ちはへ奉れと　神隨　仰せ給ひし　大命　かゝぶり持ちて　其の穂日の　神の命の　子孫の　其の八十連續　千々かさね　いや續々に　まさきづら　いや遠長に　神代より　一代の如く　今の代も　神世の如く　神代より　今のをつゝに　忠けく　仕へ來らす　出雲の　國の造　出雲の　宿禰の君は　天地は　廣しといへど　二人なき　職に坐せば　千年に幸くいまし　萬代に　いまし給ひて　千早振　國つ御神を　今も猶　媚鎭めつゝ　明つ神　吾が大君の　大御世を　年長の御世と　堅石に　いはひ奉らせ　常磐に　ちはへ奉らせ　出雲國造　出雲宿禰　□なき其の名□□（以下缺）

平賀元義集　終

○天□命　一本「天皇命」

○田長の大御代　長久の大御代。祝詞祈年祭「皇御孫命の御世を手長の御世と堅磐に常磐に齋ひ奉り云云。」

○かゝぶり　被り。

○八十連續　數多くの一族。

○まさきづら　遠長の枕詞。

○今のをつゝに　現在の世に。

○仕へ來らす　仕へ來る。

○□なき其の名　一本「二人なき其の君」又反歌として「於字の浦にむれ立つたづも二人なき君がり向きて千代とこそ啼け」とある。

# 野鴈集

安藤野鴈

# 野鴈集

安藤野鴈作歌

## 雑歌

春

青海原　にほひて昇る　朝日なす　まぐはし姫が　春山の　花見あそばす　よろしなべ　めでのくはしき　春山の　この櫻花　匂ふ子が　かへりみるまで　花な散りそね

鶯の　鳴く月立ちぬ　睦月には　梅の花咲き　きさらぎに　梅の花散る　梅の花　散り過ぎ行けば　櫻花　咲きつぎにけり　咲く花の　うらぐはしみ　散る花の　うらがなしみ　あなによろしき春し　あやにおもしろき春し　過ぐらく惜しも

秋

秋の野は　今ぞおもしろ　をみなべし　咲きし殘れり　はりが花　散りし初

○朝日なす　まぐはしの枕詞。
○まぐはし姫　美しい姫。
○よろしなべ　よい工合に。
○めでのくはしき　めでは賞讃の意、くはしは美しく妙なる意。

○うらぐはしみ　心樂しく。

○うらがなしみ　心悲しく。
○あなに　あやにと同じく嗚呼ほんにの意。

○はりが花　萩が花。

めけり　あきつ羽の　か行きかく行き　思ふどち　狩り暮れにけり　乘る駒の　あふりときおろし　草枕せな

時雨の雨降りにてしより足引の山橘の實も照りにけり

足引の山橘の照れる實に降れる初霜消ぬらく惜しも

冬

晝はしも　さしも堅めぬ　金門（かなと）ゆも　はひ入りなまし　刺竝（さしなみ）の　鄰の垣を　百重しも　隔たる如く　天雲の　心いさよひ　音のみに　聞き戀ひ渡る　長きけに　思へる君を　新玉の　年ゆき返り　春花の　匂ひに逢はむ　鶯の　木傳ひ鳴かむ　島も見がてり

右一首文久三年癸亥十一月客遊在武藏國兒玉郡八幡山里堀越秋雪家閑中之人松村遜家于數歩間家有號賞趣園者傳聞主人風流之士泉石亦雅致矣予有一觀之念於是製歌介秋雪以贈焉

## 相聞

春

青柳（あをやぎ）の　末葉（うらは）の若葉　若柳（わかやぎ）の　若葉の末葉　若やかに　我は見る兒を　青や

○あきつ羽の　蜻蛉の如く。

○あふり　障泥。泥除のために馬の兩脇の腹附の上に覆ふ具。

○山橘の實云々　萬葉集卷十九「この雪の消殘る時にいざ行かな山橘の實の照るも見む」

○刺竝の　鄰の枕詞。

○天雲の　いさよひの枕詞。

○心いさよひ　心がためらふ。

○長きけに　長い月日の間。

○新玉の云々　萬葉集卷二十「新玉の年ゆき返り春立たば先づ我が宿に鶯は鳴け」

かに　我は見らくを　みなのわた　か黒き髪　か青なる　妹がまよね　春山の　峯もとををゝに　あを山の　腰もたわゝに　すがるなす　妹の姿を　妹の帶　結垂るみのの　若菅原　青葉菅の根　そが根を　穿ちもて來　羽鴫(鳴鳥イ)の青羽ねろか□　ねもころ〳〵に　兒等に巻きめかもや　妹と逢はめかもや

反歌

春山をゆめ人懸くな忘れにし彼の眉引の思ほゆらくに

内日刺す　天の御門べ　天人の　參入り給ひ　宮人の　退出で給ふ　罷出道の　家路の柳　參入道の　宮路の櫻　花のみに　ゆるして君に　解けし紐かも

反歌

たゞ一目見てし君ゆゑかぎろひのもゆる春日を戀ひわたらくも

春されば　霞たなびき　百鳥も　來鳴き遊ぶと　空蟬の　人もこと〳〵　若菜つむ　處女のともは　白妙の　袖振りかはし　紅の　赤裳垂れ引き　玉鉾の　道に出で立ち　刺楊　ねばり梓に　珠纏の　靫負の伴も　さぬつ鳥　き

---

○みなのわた　か黒きの枕詞。
○まよね　眉根。
○とををゝに　たわゝにと同じ。
○すがるなす　似我蜂のやうな。萬葉集卷十六「飛び翔るすがるの如き腰細に取りかざらひ云々。」
○結ひ垂るみのの　結ひ垂る身のに御野を掛く。
○青羽ねろ　青葉の嶺。
○ねもころ〳〵に　懇に。
○春山をゆめ云々　萬葉集卷十一「秋山をゆめ人かくな忘れにしそのもみぢ葉の思ほゆらくに」
○ゆめ人懸くな　決して言葉にいひ出して我に聞かせるな。
○内日刺す　天の御門べの枕詞であらう。
○天の御門べ　朝廷。
○たゞ一目云々　萬葉集卷十二「花細し葦垣越にたゞ一目相見し兒ゆゑ千度歎きつ」
○空蟬の　人の枕詞。
○玉鉾の云々　萬葉集卷十二「玉鉾の道に出で立ち別れ來し日より思ふに忘る時なし」
○刺楊　ねばりの枕詞。
○ねばり梓　弓。萬葉集卷十三「刺楊根張梓を御手に取らし給ひて云云」
○珠纏の靫負の伴　珠を巻き飾つた靫を負つた靫負の人々。
○さぬつ鳥　雉子の枕詞。

ぎしを追ふと　櫻咲く　山邊にい行く　菅の根の　ながき春日の　暮れまくを　知らにと我(あれ)は　片戀に泣く

雜

越の海の　潮干滿つなみ　波水の　別く世なみ　夜日に　ありなめみるめ
山河の　淺瀬の水絶え　石椅の　斷間のまゝに　流れ藻の　行方を知らに
浪雲の　うるはし妹に　亂藻の花

下つけぬ　那須のやどりに　此の朝開(あさけ)　降り初めにける　初雪の　消なば惜しけみ　白妙の　袖の別れに　泣きしおもほゆ

をはり田の　新桑繭の　にぬごろもを　あが著なばかも　面がはい　あがしたらめ　面忘れ　それも思はめ　表々(おもてく)の　縫目の針目　裏もく　つぎ目のぬき目　小針穴(をはりな)の山

右一首上野國蓁名山作歌也

## 挽歌

登下總國荒海亭時望葬作歌

荒海(あらみ)より　今立ち來れば　にひあらきの　はふり立ちいぬ　飯さへに　白く

---

○菅の根の　長きの枕詞。

○浪雲の　うるはし妹の枕詞。萬葉集卷十三「浪雲のうつくし妻と物いはず別れし來れば速川の行方も知らず云々。」

○此の朝開云々　萬葉集卷八「ぬば玉の今宵の雪にいざぬれな明けむ朝に消なば惜しけみ」

○白妙の袖云々　萬葉集卷十二「白妙の袖の別れは惜しけども思ひ亂れてゆるしつるかも」

○をはり田　新たに開墾した田。

○新桑繭のにぬごろも　山繭で織つた布の衣。萬葉集卷十四「筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君がみけししあやにきほしも」同「筑波嶺に雪かも降らる否をかもかなしき兒ろがにぬほさるかも」

○面忘れ云々　萬葉集卷十一「衣しもさはにあらなむ取りかへて著せばや君が面忘れたらむ」

○小針穴の山　蓁名山。

○にひあらき　新殯

精げ　水さへに　清く捧げ　飯は　玉笥に盛り　水は　玉もひに盛り持ち
泣きつゝ　い行かす其の兒は　若草の　彼の妻あらめを　にひあらもの　喪
服しろに　うば玉の　黒髪解けて　ひきぬらし　誰しの人ぞ　つま別れせし

喪　子

かからむとかねて知りせばはしけくもいひてましもの今し惜ししも

以前一十六首

○飯は云々　日本書紀「玉笥には飯さへ盛り玉もひに水さへ盛り泣きそぼち行くも影媛あはれ。」
○玉もひ　もひは酒や水を盛る器
○にひあらも
○はしけくも　愛しけくも。日本書紀「はしけくも未だ言はずてあけにけり吾妹。」

# 春

春の始めによめる

ほの〴〵と春は來にけりひむがしの山際あかく霞たなびく

武藏の橘の浦にて

春の色の海よりのぼるかげろふに半ばそめたる安房の浦なみ

春の歌よめる中に

今年さく梅のしもとのさし枝にうぐひす啼きつ春の初聲

山里も春來にけりといふめるをいまだしげにもふれる雪かな

市人のせめてうりたる花の木にこぼれぬばかり梅咲きにけり

まちつけし梅ひともとの春ゆゑに別れ〳〵の枝ぞ戀しき

雪はいまだ尾上に殘る白鳥のさぎさか山に霞たなびく

そほぬれて猶野に出でむあまざはり一夜のからに若菜老ゆめり

若菜つむ春にしなれば打ちはへて霞も野べにたたぬ日ぞなき

なにばかり色とも見えぬ庭草のそめ增りする頃にもあるかな

菅の根の長き春日になりぬれど空猶さえて雪はふりつゝ

---

○ほの〴〵と春は云々　枕草紙「春は曙やう〳〵白くなりゆく山際少しあかりて紫立ちたる雲の細くたなびきたる。」新古今集春太上天皇「ほの〴〵と春こそ空に來にけらし天の香具山霞たなびく」

○橘の浦　武藏國橘樹郡。

○かげろふ　黎明の光。

○しもと　枝の多い若い木立。

○山里も云々　續拾遺集雜春前大納言顯朝「雪は猶冬にかはらずふる里に春來にけりと鶯ぞ鳴く」

○いまだしげにも　未だ春が來ないといふ風に。

○せめて　强ひて。

○白鳥の　鷺の枕詞。

○さぎさか山　鷺坂山。山城國久世郡。

○あまざはり　雨に障つて家を出ないこと。

○一夜のからに　たつた一晩のために。

○打ちはへて　際限もなく。

○なにばかり色とも見えぬ　何程の人目にもつかない。

○菅の根の　長きの枕詞。

おのづから急がで渡る春の日に殘る寒さものどけかりけり

柳をよめる

春の雨のうち降るごとに我が宿の柳のうれは色づきにけり

朽ちのころ淀の川との老柳さりとも春はひこばえにけり

したがはぬ柳の枝のなきまゝに幾たび吹きぬ春の夕風

みちの國にありけるころ櫻のおそかりけるに

何事もひなはおくるゝならひにてあな待遠に匂ふ花かな

春のうたよめる中に

ながめあまりあやな憂への色ぞ添ふあなあなにくの花や柳や

ながめには柳の眉もたゆげにてうるみて見ゆる花のまなじり

ゑひみだれ花にねぶりし酒さめてさむしろ寒し春の夕風

故里の春の月の心を

荒れたれば影もくもらぬ古里の庭おぼろなる春の夜の月

さくらの花をよめる

身にしめて物の匂ひを見る時は櫻もにくきものにぞありける

いづこかはさして我が宿行きまじり野にも山にも花のへに寢む

○春雨のうち降る云々　此の歌「うれ」を「すゑ」にかへて、玉葉集春上に人麿の歌として在る。
○うれ　梢。
○川ど　川門。川の一つに流れ合ふ所。
○さりとも　朽ちた老柳でも。
○ひこばえにけり　切つた根から芽が出て來た。
○したがはぬ柳の枝　風に柳さいふ通り、柳は微風にもなびくのでいふ。
○ながめあまり　物思ひに眺め勝の上に。
○あやな　あやなし。無分別にも。
○にくの　憎らしい。後拾遺集戀藤原隆經朝臣「如何にせむあなあな憎の春の日や夜半のけしきのかからましかば」
○ながめには　我が物思ひに沈む時には。
○柳の眉もたゆげ　柳の芽もだるさう。
○まなじり　目尻。
○さむしろ　狹筵。筵。
○さして　こゝぞご特定して。
○我が宿　我が宿とせむ。
○行きまじり　行つて分け入る。
○花のへ　花の邊。

寛永寺に法師の花を見るをみて

法の山いろは空しく見る花に世をさくらとや思ひとくらむ

すみだ川の花見ける折に

すみだ川花のよどみにうく鳥の櫻はねきる春のゆふぐれ

角田川あや瀬の瀬浪しろけれどあやなく花の色暮れにけり

ある尼寺にて

あか棚のかなまりごとに浮きにけり胡蝶のとばす桃の花びら

春の歌の中に

武藏野の朮(うけら)が花は春ごとに踏まれながらに咲きにけるかな

花さかばと契りける人のちりはつるまで訪はざりける

こむ春はいかにまたまし庭櫻よのいつはりに花も習はば

文久三年三月十一日賀茂の行幸おはします

神山に花のみゆきのふりし世を今はた見むと思ひかけきや

久しく絶えたりしを思へばなり

山吹の花をよめる

小鳥なくしのの垣根の朝露に一枝さける山吹の花

○寛永寺　東京上野の寛永寺。
○いろは空しく見る　色則是空。
○世をさくら　空則是色。
○花の色　櫻の白色。
○はねきる　羽はたきをする。
○あか棚　閼伽棚。閼伽桶を載せる棚。
○かなまり　金屬製の椀。
○朮が花　山薊。
○神山　賀茂の神山。
○花のみゆきのふりし世　花のみ雪の降りし世と花の行幸の舊りし世とを掛く。
○しのの垣根　篠竹で作れる垣根

櫻のちるをよめる

のどかなる春の光にあひながら何をうけくに花のちるらむ

あだなりなうべも花とはいはれけりあな憎みがた色は見ゆれど

さゞ浪のあふみの宮のみや木もりもらぬ櫻の花ちりにけり

にくからぬものなりながら櫻花おほくの人に恨みらるらむ

吉野川はしる小鮎のかくれがは花のふゞきのよどみなりけり

にほふまもあらでやみぬる花なればあやなく春のながめらるらむ

春されば玉の緒ばかりありてちる花の愛への長くもあるかな

花の皆ちりにてしより春の日のくらしがたくもなりにけるかな

花はちり人はまれなる山里に今いくかかは春ものこらむ

面かげに色の残りてさくら花にほふや春のかぎりならまし

櫻色の衣だにいまだ縫ひあへねば春くれなゐのひもさしぬなり

櫻ばな世にうしとこそ思ほゆれ匂ひもあへず何かちるらむ

そむかれぬ世の面影をみえがほにさきちる春の櫻なるらむ

櫻花いかにくるしく思ふらむわりなく人にうらみらるれば

心ゆかぬ事にこもりをりて彌生の二十日ばかり出でたり

○のどかなる春の云々　古今集春紀友則「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ。」
○何をうけくに　何を憂いことにして。
○あだなりと云々　古今集春讀人不知「あだなりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり」
○憎みがた　憎み難し。
○さゞ浪の　あふみの枕詞。
○あふみの宮　天智帝の近江の宮
○みや木もり　宮木を守る人。
○もらぬ櫻　守らぬ櫻。
○恨みらるらむ　「らむ」に「何故」の意がある。
○かくれが　隱れる所。
○やみぬる　散りぬるの意。
○玉の緒ばかり　一寸ばかり。長くに對す。
○人はまれなる山里　後撰集雜讀人不知「遠近の人目稀なる山里に家居せむとは思ひきや君」
○縫ひあへねば　縫ひおほせないのに。
○春くれなゐのひもさしぬ　晩春の日が射す意に　紅の紐をさす意を掛く。
○匂ひもあへず云々　古今集卷十紀利貞「山高み常に嵐の吹く里は匂ひもあへず花ぞ散りける」
○わりなく　むやみに。

身の爲に殘る春やといで見れば大かた花も青葉なりけり

江戸よりみちのくに下るに

玉鉾の道のくまでの遠ければ一日も櫻ふまぬ日はなし

常陸のうばらきの郡を過ごるるに

うばらきを今たちくれば道の上に心もなくて花のちるらむ

みちのくより江戸に上りけるに白川の關なりける所にて彌生のつごもりなりける

ふるさとも春もわかれの關山に花のみ散りてあふ人もなし

彌生のつごもりによめる

大方におくるゝ花もあるものをひたみちにのみ春のいぬらむ

## 夏

卯月のはじめによめる

夏山のあを葉がくれの郭公おくれし花に初音なくなり

遲櫻を

わかさぢの後瀨(のちせ)の山のさくら花春におくるゝ名にこそありけれ

---

○玉鉾の　道の枕詞。
○道のくまで　道の屈折の多いこと。
○うばらきの郡　城上の郡。
○關山　關所のある山で、岩代國白川の關。
○大方に　春咲く一般の花より。
○ひたみちに　直路に。只管に。
○いぬらむ　何故去り行くであらうの意。
○夏山の云々　金葉集春藤原盛房「夏山の青葉まじりの遲櫻初花よりもめづらしきかな」
○わかさぢの云々　萬葉集卷四「かにかくに人はいふとも若狹路の後瀨の山の後もあはむ君」後瀨の山は若狹國遠敷郡。
○春におくるゝ名　後瀨に後の逢瀨を掛けたからである。

きしたのさくらが白山といふ所へいきたりける道にて折りたるとて卯の花おこせたる返事に

白山のみちのたよりにをる花は雪とも見ゆるものにざりける

郭公をよめる

ぬば玉のよるの枕をそばだてて山ほとゝぎすなくを聞くかな

郭公ゆめ驚かすこゝろをよめる

しきたへのまくらの山をこえぬなり夢路をかけてなく子規

梅雨をよめる

五月雨はけふ幾日まで苫ほさであなしほどけの波の浮寝や

梅雨は蜑の苫ぶきぬれ朽ちてよそのみるめも汐たれにけり

さみだれの晴れぬるによめる

さみだれの雨今こそは晴れぬなれあかりて匂ふ姫ゆりの花

夏の歌よめる中に

涼しさのいづこはあれど桂川みやこの西は秋風ぞふく

水無月のつごもりの夜

あはれなる空の螢のゆくへかな秋風たかく吹きやしぬらむ

---

○白山　加賀國の白山。
○ものにざりける　ものにぞありける。
○枕をそばだてて云々　白樂天「遺愛寺鐘欹レ枕聽。」
○しきたへの　枕の枕詞。
○まくらの山　枕邊近い山。
○夢路をかけて云々　夢心地の中に子規の鳴聲の聞えた意。新千載集雜前大僧正慈鎭「閨近き軒端の梅の花の香に夢路をかけて匂ふ春風」
○五月雨は云々　千載集夏源仲正「五月雨は苫のしづくに袖ぬれてあなしほたれの波の浮寢や」
○よそのみるめ　海松布と見る目とを掛く。
○あかりて　明りて。
○いづこはあれど　何處も同じやうであるが。
○みやこの西云々　玉葉集秋慈道法親王「わきてなほ紅葉の色や深からむ都の西の秋の山里」

# 秋

秋たちける頃

聞き知りぬ上葉にかはる荻の風そよ〳〵人の秋といひしは

露はたゞむすびにむすぶ百草の花の紐こそうしろめたけれ

わさ萩のほつえの花もまだ咲かで露ばかりなる秋は來にけり

蜩の聲はなやかになりにけり小野の小萩も今はさくらむ

秋の野といふべき程になりにけりまだ七草の數はたらねど

みちのくにに下りけるに白川の關にて

これよりの旅寢の奥やいかならむ秋風ふきぬ白川の關

七日の夜

あはぬ夜の數にしとらば盡きぬべし天の川原のさゞれなりとも

今宵とは契らずながら星合をひとり見まうき秋の空かな

契りおきて今宵もこぬは星合のあはれ見すぐす心なりけり

秋の歌よめる中に

湊田の稻葉をわくる濱風に穗浪かたよる秋は來にけり

---

○聞き知りぬ云々　元良親王「秋風に吹かれてなびく荻の葉のそよそよさこそいふべかりけれ」
○そよ〳〵　風の靜かに吹く音に感動詞のそよ〳〵を掛く。
○むすびにむすぶ　露が結ぶに紐の結ぶ意を掛く。
○花の紐　花の蕾。
○うしろめたけれ　氣がゝりである。
○わさ萩　早く咲く萩。
○ほつえ　上枝。
○旅寢の奥　旅寢する奥州の道。
○秋風ふきぬ云々　後拾遺集秋能因法師「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白川の關」
○さゞれ　さゞれ石。
○見まうき　見るのが辛い。
○湊田　湊にある田。

草の葉の露をこぼさぬ風にだにあへぬは老の涙なりけり

なか〱に音なふものの寂しきは獨りある宿の荻のうは風

高砂のをのへの松の秋の聲時しらぬにはあらぬなりけり

いつとなく鴫の羽音にさまされて田づらの宿はぬる夜半もなし

鴈がねの來なきしなべにしらすげの眞野の萩原散り初めにけり

白露の玉のこぼるゝ音かとも聞ゆる夜のこほろぎの聲

蟲の鳴くをよめる

この夕おく白露のさむけれや淺茅のもとに蟲のなくらむ

鴈をよめる

つれなくて春かへりにし心にはこよなの鴈のけさの初音や

霧をよめる

時しらぬ眞木のみどりの青山に秋霧しろく棚びきにけり

垣根より夕霧のぼるあし曳の山里ものは秋ぞかなしき

秋の夕のこゝろをよめる

色もなき秋のゆふべの空みればそのこととなくものぞ悲しき

うつたへに物のあはれもしらぬ身の思ひの外の秋の夕暮

---

○あへぬは　抵抗出來ないのは。
○獨りある宿云々　古今集秋讀人不知「秋萩の下葉色づく今よりや獨りある人の寐ねがてにする」
○時しらぬには　松は四時を論ぜず綠であるが、松風の音は秋の聲であるから、斯くいふ。
○田づらの宿　田のほとりにある家。
○鴈がねの云々　萬葉集卷十「鴈がねの來なきしなべにから衣立田の山は紅葉ぢそめけり」
○しらすげの　眞野の枕詞。
○眞野　攝津國武庫郡。
○つれなくて　無情にも。
○こよなの　此の上なき。
○時しらぬ眞木　常綠の杉檜類。
○そのことなく云々　伊勢物語「暮れ難き夏の日暮し眺むればそのことなく物ぞ悲しき」新古今集冬藤原高光「神無月風に紅葉の散る時はそこはかとなく物ぞ悲しき」
○うつたへに　只管に。
○物のあはれ云々　新古今集秋西行法師「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」

ながめむかふ心々にかなしさの色さだまらぬ秋の夕雲

さぶしさは水底までにとほりけり夕日のすめる秋の砂川

水あせて石あらはなる山川に夕日ながるゝ秋のいろかな

月をよめる

青雲のたなびく今日の入日よし今宵あかけむ秋の夜の月

おしてるや難波の海の夕しほにいでたる月もみちにけるかな

こもりぬのあしの下根の下ばへてよな〳〵宿る月の影かな

むら雲や月のおもてをのごふらむ晴れゆくたびに光こそ添へ

雲はらふ嵐の風にみがかれてかゞみに見ゆる秋の夜の月

荒れたる家の月のこゝろをよめる

わが庵は月にもらせて秋風のゆくへもなくや人のなりけむ

衣をうつをよめる

櫻色の妹がおもてに汗あえて力の限り打つきぬたかも

誰ぞこのふけたる月にうつ衣ねられぬまゝのすさびなるらし

もみぢ葉をよめる

水際（みなぎは）にちらで落ちたるかげ紅葉海のものとや蜑は見るらむ

○色さだまらぬ云々　秋の夕雲の變化と同じく悲しい心の色合も色色に變化する。

○水あせて石あらはなる　蕪村「柳散り淸水涸れて石ところ〳〵」

○青雲のたなびく　空の晴れ渡つた意。

○今日の入日云々　萬葉集卷一「渡つ海の豐旗雲に入日さし今宵の月夜明らけくこそ」

○おしてるや　難波の枕詞。

○みちにける　夕潮と月とにかゝる。

○こもりぬ　隱り沼。

○下ばへて　萬葉集卷九「隱沼のしたはへおきて云々。」忍び隱して。

○むら雲や云々　金葉集秋源俊頼朝臣「村雲や月のくまをはのごふらむ晴れゆくたびに照りまさるかな」

○のごふ　拭ふ。

○もらせて　守らせて。

○秋風の　秋風の如く。

○汗あえて　汗が滲み通つて。

○ねられぬまゝ云々　風雅雜藤原爲守女「此の頃は月にも猶ぞなれまさる寢られぬまゝの老のすさびに」

○ちらで落ちたるかげ紅葉　紅葉の影が水に映つてゐるのでいふ。

もみぢする蔦にかゝりて露霜の染めぬ松をも折りてけるかな
引きよぢて折らむ折らじのやすらひに一葉二葉はちる紅葉かな

長月のつごもりがたによめる

枝に來てよべばしぐるゝ山鳩の聲ものすごく秋ふけにけり

## 冬

神無月ばかりによめる

暮れ殘るわがもとゆひの秋の霜それさへ寒くふく嵐かな
神無月けふは小春とうぐひすも鳴きぬばかりの日の匂ひかな

時雨をよめる

神無月まなく時雨のふる里はならの木の葉も移ろひにけり
さしとむる岸の此方に晴れにけり渡りもはてぬむら時雨かな
逢坂や鳥のそらねにさきだちてゆるさぬ關をゆく時雨かな

冬の夜の月を見てよめる

枝にゐる鴉ばかりをくもりにて霜よりしろきありあけの月

雪をよめる

○もみぢする蔦云々・續千載集秋權中納言公雄「露霜の染めぬ色さへまさりけりかつらの里の秋の夜の月」
○やすらひ　躊躇。
○山鳩の聲云々　新古今雜西行法師「ふるはたのそばの立つ木にゐる鳩の友よぶ聲のすごき夕暮」
○暮れ殘るわがもとゆひの秋の霜　生き殘れる我が髮の白くなる意を掛く。東關紀行「かはらじなわが元結におく霜も名にしおいその杜の下草」
○鳴きぬばかり　暖かな許り。
○まなく時雨の云々　新古今集冬「時雨の雨間なくし降れば槇の葉も爭ひかねて色づきにけり」同太上天皇「深綠あらそひかねていかならむまなく時雨のふるの神杉」ふる里に降ると古里とを掛く。
○さしとむる　棹し止める。
○逢坂や云々　枕草紙「夜をこめて鳥の空音ははかるともよにあふ坂の關は許さじ」
○ゆるさぬ關　新刊撰集戀祝部成茂「逢坂の關はゆききの道なれど許さぬ關はその甲斐もなし」
○くもり　ぼんやりと薄黑いこと

庭雀雪にあさりし路はあれど袖うち拂ひとふ人もなし

つの國の難波わたりの冬がれに蘆の葉しろくふれる雪かな

冬の歌よめる中に

冬ふかみ氷のくさびうちとめて堅田の波はゆるがざりけり

何故に春のまたるゝすまひかは手づから植ゑし花の一もと

# 戀

雜の戀

あさせ川水を枕にぬる鳥のゆめ〳〵いふな母はとふとも

淀川の淵にすむてふこひすればいをだに安くねられざりけり

頼むかな春野のつゞらこにくみてひと目も洩らぬ中の契りを

かげを見てあな井にのぞむ緑子のまどへる戀も我はするかな

はじめたる

もらしそむ

戀しともうしとも物をいふらむや思ひわかれぬ程の心に

石の火の中にこがれし年月を打ちつけなりといひやけつべき

---

○袖うち拂ひ云々　新古今集冬藤原定家朝臣「駒とめて袖うち拂ふ陰もなし佐野のわたりの雪のゆふ暮」

○氷のくさび云々　後拾潰集冬曾禰好忠「岩間には氷のくさびうちてけり玉ゐし水も今はもりこず」

○堅田の波　近江國の堅田ではあるが、堅の字は堅固の意を含ます。

○あさせ川　鳥のまでは序詞。

○ゆめ〳〵　夢に決しての意を掛く。

○こひすれば　鯉に戀を掛く。

○いをだに　魚に寐を掛く。

○つゞら　葛。

○こにくみて　籠に編んで。

○ひと目　籠の一目と一寸あふことの意とを掛く。

○かげを見て云々　井戸にうつる姿を見て幼兒が自身井中に居ると驚き怪しむ意。

○石の火　電光石火。束の間の意

○打ちつけ　ぶしつけ。

○いひやけつべき　いひ消すことが出來ようか。けつは石火の緣語。

ちぎる

契りてもあかぬ心のうたがひに後の世かけて物をこそ思へ

いのる

外に又たがねぎごとをうけひきて神さへ今はつれなかるらむ

## 離　別

美濃國ゑなの郡より江戸に歸らむとするに人々別れをしみて中津川の驛にて馬のはなむけしけるによめる

別れてもなほわかれぬや目に見えぬ心々のわかれなるらむ

江戸にありわびにければ都がたへ登らむとするたび遠つあふみの國榛原の郡かなやの驛にて江戸なる知る人あひたり珍らかに哀れに相思ひ談らへりけり扠其の人の江戸に歸る別れに

別れなば君はあづまへ歸るべし行方しらぬは我が身なりけり

美作國なる人の江戸にありしを歸る折にかの國の酒とてのみなどして

わくらばに相みまさかの久米の酒聲をのみても別れぬるかな

○ねぎごと　願ひごと。
○うけひきて　承諾して。

○ゑなの郡　惠那郡。
○中津川　同郡。

○ありわびにければ　住みづらくなつたから。此の文伊勢物語の文に似る。
○かなや　金谷。

○わくらはに　たまさかに。
○相みまさか　相見るに美作を掛く。
○久米の酒　久米郡産の酒。
○聲をのみても　悲しさのために口を閉ぢて。

## 羇旅

京へ上らむとするたび江戸をたち箱根をこえ伊豆の三島にやどれり

關こえて三島にやどる夕ぐれに思へば家をとほざかりぬる

三河國になれば富士のね見えずなりぬ

天の原ふじの高ねの見えぬまでまことに遠く我は來にけり

ある年武藏國わらびの驛に宿りて

春ならば野邊にもえまし伏庵に翁のたくもわらびなりけり

## 賀

美濃國なる人の七十の賀しける

限りなくいくる藥となる瀧は君が身のなるものとこそきけ

人の賀に住の江の松高砂の松といへるをかけるかたに歌よみてよとあるによみてかける

今年よりをちをばいはずおひそめて幾世になりぬ高砂の松

住の江にいはひはじめし瑞垣の久しき世をも松は知るらむ

○わらび　蕨。武藏國北足立郡。
○伏庵　貧弱な小屋。
○わらび　蕘火。蕨をかく。
○いくる藥となる瀧　養老の瀧。
○今年より云々　拾遺集賀紀貫之「昨日よりをちをば知らず百年の春のはじめは今日にぞありける」
○をち　遠き未來。
○住の江に云々　新古今集神祇「むつまじと君はしらなみ瑞垣の久しき世よりいはひそめてき」
○瑞垣の　久しきの枕詞。

# 哀傷

天保四年九月本居大平のうせたるにいひおくれりける

君がよと思ひしものを長月は長き別れの名にこそありけれ

松の木の枝にさがりてわなきて死にたる人あり

千年とも契りはおかで松が枝に何をかけたる露のいのちぞ

# 雜

齋宮たたせ給へりなど聞ゆることのある時

ありし瀬の絶えて久しき竹川はもとの綠になりぬとかきく

山崎知雄が校訂日本紀畧のふみなりての竟宴に

ふみわくる跡もなかりし古の野中ふる道あきらむる今日

菅原の神を

くだけちり曇りなきみの白玉はぬり黑むれどくろまざりけり

王昭君をよめる

あはれとは鴈をながめし北の空遙かにこしは我が身なりけり

---

○君がよと云々　長月を君が生き長らへる月の意に取つた。

○わなきて　首をくゝつて。

○かけたる　契りかけた。

○竹川　伊勢國多氣郡にあつて、伊勢齋宮の群行の時、大神宮司の卜部が竹川で禊したので祓川ともいふ。

○もとの綠云々　多年絕えてゐた齋宮が復活した意。綠は竹の緣語。

○竟宴　現今でいふ出版記念會のやうな宴會。

○こしは　來しはに越を掛く。

長恨歌の言葉を題にて歌よみけるに梨花一枝春帶雨のこゝろを

忘られぬそのおもかげに似たるかなしをれて匂ふ花の一枝

唯將舊物表深情

なく／＼も猶まゐらするかむざしに玉ぬくものは涙なりけり

夕殿螢飛思悄然

草村にはかなく消えし玉かとも空の螢をながめつるかな

孤燈挑盡未成眠

よもすがらいをねられぬや燈火の盡くれど消えぬ思ひそふらむ

遲々鐘鼓初長夜

今ぞ知るいぎたなかりし春の夜はねられぬ秋の始めなりけり

耿々星河欲曙天

淺き瀬と思ひうとみし星合は天の河原のかはらざりける

翡翠衾寒誰與共

たれと又語りあはせむ二人ねてみしや昔の春の夜の夢

琴をよめる

少女子が膝を枕にふす琴はねの哀れなる物にぞありける

---

○玉ぬく　玉のやうに貫く。

○玉　魂。

○消えぬ　燈火の緣語。

○いぎたなかりし　眠りがちであつた。

○琴　「こと」を掛く。

○ねの　音と寢とを掛く。

○雨のふる寺　ふるに降ると古とを掛く。
○空よりたゝく　雨が漏るからいふ。
○おどろかさずは　目をさまさないならば。
○やたての硯　矢立硯。
○かべ　夢の意と壁とを掛く。
○しもの翁　白髪の老翁。
○露わくる云々　こまがたは淺草區の駒形町に駒を掛けて、露わくるを縁語にした。淺草寺も草に縁を持たせた。
○あそび　遊女。

とり／＼に思ふ心をすががけばいはでもことのたる世なりけり

古寺の雨のこゝろをよめる

瓦ぶきくづれて雨のふる寺に空よりたゝくかねの音かな

松の上に鶴ねぶれり

松風のおどろかさずば千代までに鶴の眠りはさまさざらまし

人のやたての硯の紐のはしに小さき龜のかたをしてつけたりけるが離れてなくなりける

龜の子は君がもとをぞ離れける齡をおのがかたみにはして

達摩のかたに

花鳥のいろをもねをもかべと見てさむる枕に春風ぞふく

夜發をよめる

さむしろにしもの翁もたをりけりよひ／＼さける白菊の花

江戸の淺草寺のゆふべの鐘のこゝろを

露わくる我がこまがたに聞えけり淺草でらのいりあひの鐘

駒形もところの名なり

同じ淺草のあそびなにがしの作れる唐うた「自此身化楚雲古園消息渺無

閒朦朧猶記當年事家在京師鴨水邊　邊の字覺束なしこは今の人なりときくにあはれなればいはれたる

あはれなる身のうき草の行方かな根ざしたえにし鴨川の水

駿河國浮島の原の驛に宿りたる夜盜人多く入りくとのゝしるなり

ぬばたまの夜嵐すごく音づれて白波よせくうきしまの原

あくる日盜人をもとむるに時は長月なりければ紅葉したる山を尋ねあなぐるなり

秋山をかくれもてくるわび人はしかぞ紅葉の陰になくらむ

駿河國庵原の郡岩淵といへる所は富士川のほとりなりそこのちごやといへるは旅人やどらするをなりはひにかふる家なりければ宿りてある年の春の始めより秋の終りまでありける間ときどきことにふれて歌ともなくすゞろにいへりける事ども

抱きては母のくゝむるちごのやのこのやのちゝも心しり人

軒端よりふりさけみれば富士のねはあまり俄にたてりけるかな

淸見潟田子のうら波ひきはへて帶の如くもめぐりたるかな

伊豆の山天城の峯も足柄の箱根の山も愛鷹(あしたか)も見ゆ

---

○人たなり　人なるなり。

○あはれなる云々　古今集雜小野小野「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらば去なむとぞ思ふ」

○白波　盜賊の意。

○うきしまの原　憂き意を掛く。

○あなぐる　搜索する。

○しかぞ　鹿に然かの意を掛く。

○このや　此の屋で此の家の意。

○心しり人　人情を知つてゐる人

○ふりさけみれば　遙かに見れば

○ひきはへて　引き延へて。

あしたか駿河の山なり

おちたぎちはしり流るゝ富士川の瀬枕ごとにねたる鳥かな

ふじ川のむかひに見ゆる浮島の原のはる〴〵青む春かな

居ながらに見らるゝものを殊更に幾度たちて山を見るらむ

若葉さす柳の枝をよちとりつ男の子こそさがなものなれ

桃の木のたけだちばかりいつなりて雛遊びをやめむとすらむ

庭くらき所の蟲は晝なれど夜と思ひて鳴きぬなりけり

垣にたつ柹のずはえの花さきて實になるまでに逢はぬ君かな

枝にきては鳥のおとす澀柹のしぶき此の世をあまなへる身ぞ

夜嵐に柹のほぞちのあまければ明日は子供の拾ふなるべし

老の目はまぎらはしさに折りかねつ月夜(つくよ)の霜の白菊の花

時雨にも霜にもぬれぬ物ゆゑに弱くなりぬる蠅のはねかな

山がくれ短き秋の日のたけをきりにきりてもたちにたつかな

いでて見れば日は殘れるを山陰はとく暮れぬると思ふなりけり

秋ふくる庵のあまりさびしきに盗人だにも入りて來ななむ

人は皆ねぶたかりとて歸りつるあとの霜夜のおもしろきかな

○瀬枕　早瀬の波の音。

○さがなもの　不良な者。

○ずはえ　幹の細長くまつすぐのもの。

○實になるまで云々　萬葉集卷十「吾が宿に咲きし秋萩散り過ぎて實になるまでに君にあはぬかも」

○あまなへる　甘んじて受く。

○ほぞち　蔕落。よく熟したもの。

○老の目は云々　古今集秋凡河内躬恒「心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」

○秋の日のたけ　秋の日の長さと竹とを掛く。

○きりにきりても　後拾遺集卷二十和泉式部「思ふこと皆つきねとて麻の葉をきりにきりても祓へつるかな」

○たちにたつ　時間が經つ意に竹を斷つ意を掛く。

○來ななむ・來ればよい。

打ちなびく猫の額のさがりばに嫁はこよなくけおされにけり

かかる人のありしなるべし

ゐのころは多くの子供もたりけり母のむな乳のたらぬばかりに

ゐのころは此の頃こそは生まれしか早く戀するものにぞありける

わが顔をかべの穴よりうかゞひつ鼠の友とおもふなるべし

なが鬚は筆にゆふべくなりぬなり老のねずみは心したらむ

ますらをは鼠の肝もなかりけりいかでかひぢのはねになるべき

產みの子のうまごひまごのたゆまねば山を平らになしぬべらなり

おのづから出でて流るゝ山清水澄みもにごりもなき世なりけり

妹が上をたしかにしらでいふ人はほゝゆがめてを語りごちける

戀しさのあまり思ひに過ぎぬれば憎くさへなるものにぞありける

みるのごとわゝけさがれる衣をし故郷人に見すべかりけり

いにしへの妹がぬひてしたへの帶紐にもあへずなりにけるかな

黄金さへ虱の子ほどうまはらば我は富みたる身なるべきをや

消え殘る身の油火をかゝげても讀ままほしかる書にもあるかな

春や秋や花や雪やとながめ來てつひにも年の老いにけるかな

○さがりば・垂髮の下つた有樣。
○けおされにけり　壓倒された。
○むな乳　胸にある乳房。
○鼠の肝も云々　莊子の鼠肝蟲臂の故事。
○ゆがめてを　「を」は助詞。
○語りごちける　いひなす。
○みる　海松。此の歌朱買臣の故事を反對にいつたもの。
○わゝけさがれる　亂れ下れる。
○衣をし　「し」は强めの詞。
○たへの帶　楮の帶。絹布類で織つた帶。
○うまはらば　殖えるならば。
○なるべきをや　をもやも嘆詞。
○消え殘る身云々　餘命を捧げてもの意。

命こそはかなものなれ寳なれたから物なれはかなものなれ

何事を思ふとなしの醉ひ泣きにたねなくおつる我がなみだかな

一もじをみそもじばかり長らへて讀み竝べたる歌にもあるかな

以前百八十四首

古ぶり今ぶりすべては二百首なり

五十まで諷へる歌をかきつめて二もゝちにもなりにけるかな

元治元年五月二十三日

○たねなく　原因もなく。

○かきつめて　書きあつめて。

○二もゝち　二百。

# 野鴈集 終

# 和田嚴足家集

# 和田巖足家集

## 短歌

年内立春

くれもあへぬ年の日數をよそにおきてあだにを春の何急ぐらむ

おのれ七十に近くて一とせの暮れやすき事を侘ぶとて

えみし船いまし寄り來よ歳の矢のたねつきぬまに射てましものを

萬葉集

寧樂(なら)の世のふりにし書(ふみ)を我はもよ友とのみこそ朝夕に見れ

春月

月影し山の霞にかたぶけば隱るゝほどもおもしろきかな

柳櫻交枝

花ながら柳の蘰(かづら)かけかねて大宮人(おほみやびと)の木かげさりあへぬ

旅宿歸鴈

かへる鴈つれてはいなで草枕(くさまくら)たびねの夢をなど驚かす

○くれもあへぬ云々　暦の關係上舊年が完全に終らない中に新年が來るから、舊年中の餘日に對する同情を歎つた。
○あだにを　「を」は嘆辭。
○歳の矢のたねつきぬまに　餘命の終らぬ中に。歳の矢は年月の經過の早いことで、矢から矢種のたねに續けた。
○月影し　しは强め辭。
○柳の蘰云々　新後撰集春人道前太政大臣「たをやめの柳の蘰春かけて玉のかざしに貫ける白露」新古今集春山邊赤人「百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日も暮しつ」
○つれてはいなで　我を伴ひ行かで。
○草枕　旅の枕詞。

花雨

玉にぬくものならなくに花の雨は雫をさへぞめづべかりける

幽栖秋來

物の音はすだく鬼にもあらざりき世に立ち渡る秋のはつ風

野鶯

百濟野と名にこそ負へれ鶯の鳴く音は何かこちたかるべき

折蕨

唐人の餓ゑて死にけむふることをもひつゝ折れる早蕨ぞこれ

依雪待人

うなゐ子が手にはなあだに轉ばしそ雪見る友のなかるべしやは

馬のあおとゝゝしいつか轟くと雪のたねより友待たるゝも

春曉月

白妙の花よりしらむ山の端に傾きかゝる曉の月

鷹狩歸路

とみ果ててとみ等申さく御迎への御馬引きたてて松陰にありと

雪與年深

---

○すだく鬼　なく鬼の意。
○百濟野　攝津國東成郡。
○名にこそ負へれ　名前がついては居るけれども。
○何かこちたかるべき　こちたしは仰々しい意。百濟といふのでかくいふ。
○もひつゝ　思ひながら。
○うなゐ子が云々　上句は子供が雪達磨や雪合戰などで雪景色を傷けることを制止する意。
○あおと　足音。
○とゝゝし　しは強めの詞。とゝとは足音。
○雪のたねより　たねは料の意であらう。
○白妙の花　白い花。
○とみ　跡見。跡見鳥獸の通ふ跡を搜索すること。とみ等はそれをする狩子の類で、勢子に當る。

明日立てむ金戸の松の瑞枝さへ地につくまで雪の降り置く

深夜待戀

愛しきやし人待つさよの更くらくをなぐさめ顔の郭公かも

絶後會戀

たえてありし恨みはいはで逢ふせには見越の崎のくゆとのみこそ

逢増戀

戀草のおもひみだれてゆふだすきかけてぞ祈る葛城の神

隱士出山

大御いめを畏み〳〵あはせつゝいさをくすしき楠木のあそ

君ならで外に上見ぬ鷲の尾のそがひに置きし父母等はも

忍涙戀

はさの山したなく鳩のしたにのみ涙を忍ぶ戀ぞくるしき

千湊鳥

旅衣そでの湊の村千鳥つゝみていなむよしの知らなく

名立戀

包めどもつゝみかねたるわが戀は人ことしげく名やたちぬべき

---

○金戸　古義は門。古事記傳では金物を打つて堅固にした門。
○松の瑞枝さへ云々　萬葉集卷二十「松が枝の地につくまで降る雪を見ずてや妹が籠り居るらむ」
○愛しきやし人、いとしい君。
○見越の崎云々　萬葉集卷十四「鎌倉の見越の崎の岩くえの君が悔ゆべき心は持たじ」見越の崎（現今の稻村ヶ崎）のは「くゆ」の序詞。
○戀草の　戀心の茂きを草に喩ふ。
○ゆふだすき　かけの枕詞。
○葛城の神　大和國葛城山に住はれた一言主神。
○大御いめ　後醍醐帝の楠に關する御夢をいふ。
○あはせつゝ　夢合をする。
○くすしき　靈妙なる意。
○あそ　朝臣。
○君ならで外に上見ぬ　帝以外には目もくれない楠木の心をいふ。鷲は高く空に舞ひ上るので上見ぬといふ。謠曲熊野にも「雲に上見えぬ鷲の御山の云々。」とある。鷲の尾（京都東山）のはそがひといふ麓においた。
○そがひ　後方。
○はさの山云々　古事記「あまだむ輕の孃女いたく泣かば人知りぬべし羽狹の山の鳩の下泣きに泣く」。鳩のまでは序詞。鳩の鳴聲は低く忍び聲であるから、いふ。羽狹山は大和國高市郡で、輕の附近であらう。
○そでの湊　涙で袖の濡れる意。
○つゝみていなむ云々　袖の中に包んで行く方法を知らない。古今集戀讀人不知「飽かずして別るゝ袖の白玉は君が形見と包みてぞ行く」

夕落葉

一つ散り二つ數そひ風またで落葉の積る夕暮の庭

夏草滋

立つ鹿のにび毛の綾の胸分の星も見わかぬ根白高萱

變契戀

雨と降り雪とうつろふ習ひとて浪たゞこゆる末のまつ山

花滿山

隈もなく花こそ咲けれ端山つみおく山つみのかざし足らしに

後朝戀

きぞの夜の小牀におとす我が紐を今朝しも妹が取り置くらむか

杜卯花

森かげにあやなきやみやなからまし卯の花白き月よみの庭

旅泊

わぎも子がふるとしもなき袖の浦の浪にいくよか浮寢しなまし

竹籬聞鶯

梅はちり櫻はふゝむ山里の竹のまがきに鶯ぞなく

---

○人ことしげく　噂高く。
○にび毛　鈍毛。薄黑い毛。
○胸分の星　胸間の斑毛。
○根白高萱　根が白く高く見える萱。
○浪たゞこゆる云々　後拾遺集戀淸原元輔「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪越さじとは」末の松山は陸前國宮城郡。
○端山つみ云々　古事記「次に腹に成りませる神の御名は奥山津見神……次に右の手に成りませる神の名は羽山津見の神云々。」
○かざし足らしに　盛大なる插頭のために。
○きぞの夜　昨夜。
○小牀におとす　牀に置き忘れた意。
○あやなきやみ云々　古今集春躬恒「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」
○月よみの庭　伊勢國度會郡の月讀の森の庭か、或は月の照れる庭か。
○わぎも子が　ふるの枕詞。
○袖の浦　涙に袖の濡れた様を潮に濡れる浦に喩へた。
○ふゝむ　蕾がふくらむ。

○春の野の梅云々　古今集秋素性法師「もみぢ葉を袖にこき入れてもて出なむ秋は限りと見む人のため」。
○こきれし　こきいれし。扱き入る。
○しをり　道しるべ。
○青葉しみゝの云々　青葉の繁れる嶺を越え山を越えて。古今集卷二十「甲斐が根を根越し山越し吹く風を人にもがもやことづてやらむ」
○そほどの神　案山子。
○菰枕　たかの枕詞。
○あし垣の　ふりの枕詞。
○蟹が行く　横の枕詞。
○横山　横になる山。
○猪にもが　猪でありたい。

梅留袖

春の野の梅をこきれし我が袖の香をこそ今日の家づとにせめ

暮春

春はそも何をしをりにかへるらむ青葉しみゝの根ごし山ごし

田家春雨

山田守るそほどの神のみのかさにおとだにたてず今日の春雨

嶺樹霞

朝戸あけてたゞ見いづれば菰枕たかねの松に霞かゝれり

古寺花

山かげにふりぬる寺も花さけば住まほしき宿とこそもへ

舊宅殘花

あし垣のふりにし宿に咲きのこる花のあるじや今は誰なる

花下送日

いくばくもあらぬ櫻の盛りとてかくぞ日八日の遊びはしつる

深山花

蟹が行く横山に伏す猪にもが朝夕見てむみ山ざくらを

行路見花

さくらさく路の長手は橘のかげふむよりも行きよかりけり

關路花

關の名にかけてなこそと春風を和(なご)めもあへず花ぞしきちる

浦邊春月

朧夜の空行く月のかげ見えてゆたかに寄する春の浦波

山花如錦

櫻花をゝりにをゝりさゝらがた錦著粧(にしききよそ)へる山し乏(とも)しも

庭上落花

ちりしける花だに置きてめでましをなくたしめそね庭の淺茅生(あさぢふ)

遠岸紫藤

中垣のたちへだゝれる霞さへ紫にほふ岸の藤浪

躑躅

かぎろひもにほふばかりに岩間照(いはまて)り尾照(をて)り峯照(みねて)りつゝじ花咲く

水郷朝霞

朝日さす田上山(たながみやま)を見さくれば霞へだつる志賀の古郷(ふるさと)

---

○路の長手は云々　萬葉集卷二十「橘のみえりの里に父をおきて道の長道は行きがてぬかも」同卷二「橘の陰ふむ道の八ちまたに物をぞ思ふ妹に逢はずて」橘のかげふむは、上古には、果實を採り、或は人を休ませたりする爲に町外れ等に木を植ゑ列ねた。餌香市の橘も其の一例。

○關の名に云々　千載集春源義家朝臣「吹く風を勿來の關と思へども道も狹に散る山櫻かな」

○をゝりにをゝり　撓むほど茂る

○さゝらがた　錦の枕詞。

○なくたしめそね　な腐しめそね

○かぎろひ　陽炎の意よりも寧ろ光の意であらう。

○尾照り　尾は山の麓。

○田上山　近江國栗太郡。

谷底殘雪

やま人の玉つくらむと春かけてたくはひ置ける谷の雪かも

松上藤

むらさきの村ごを松におりかけて機織り匂ふ布引の瀧

契逢初戀

はふ蔦のおのがむき〳〵生ひのびてたがふべしとは契らざりしを

夜風告梅

谷かげに梅さくらくもいちじるくさよの嵐に香ぞ通ひ來る

暮山松風

高根吹く山風はやみ夕暮の雲は跡なき松の一本

橋下落花

櫻ちる千尋の谷をよそに見て花のうれ踏む木曾の棧

旅宿歸鴈

天津鴈旅のやどりにおとづれて歸る心を誘ひぬるかも

近砌山振

朝よひにおり立つ庭の砌なる山振咲きつ園もしみゝに

---

○春かけて　冬より春にかけて。

○村ご　斑濃。

○はふ蔦の　おのがむき〳〵の枕詞。萬葉集卷九「這ふ蔦のおのがむきむき天雲の別れし行けば云々。」

○花のうれ　花の梢。

○天津鴈云々　新續古今集春二品親王覺譽「あくがるゝ我に敎へよ春の鴈花にもめでず歸る心を」

○しみゝに　隙なく茂く。

深夜夢曉

草も木も眠れるほどの深き夜に彌聲の鳥や夢はやぶりし

邂逅逢戀

いせの蜑のかづく白玉たまさかに逢ひ見るこよの更くらく惜しも

憚人絶戀

人言のこゝらこちたきうれたさをうれたみてこそ思ひ絶えぬれ

里梅花

里の兒ら大宮人に梅咲けば言問ひかはすをりもありけり

隔遠路戀

ぬち山路や隔たればしきしぬぶ人には夢に逢ふべかりけり

被忘後戀

わすらるゝ我のみもとな戀せじと御手洗川にみそぎせむかも

若楓

わか楓何かは秋におとるべき染めむ錦をしたにふくみて

浦鶴啼月

我が國の春の月夜をなつかしみ長居の浦に田鶴騷ぐなり

○彌聲の鳥　八聲の鳥。鷄。
○いせの蜑のかづく白玉　たまさかにの序詞。萬葉集卷十一「伊勢の蜑の朝な夕なにかづくとふあはびの貝の片思ひにして」
○こよ　今宵。
○人言の云々　人の噂の大層仰々しいいやらしさを歎いて。
○ぬぢ　野路。
○しきしぬぶ　頻りに慕ふ。
○もとな　心許ない。
○戀せじと云々　古今集戀讀人不知「戀せじと御手洗川にせし禊神はうけずぞなりにけらしも」御手洗川は神社のほとりを流れる細い川。
○染めむ錦云々　若楓は秋に紅葉するから「含みて」といふ。
○長居の浦　備後國御調郡。現今の絲崎港。

羇中山路

旅人の行きこそなやめ蘆かびの足柄(あしがら)山のみねをさかしみ

春柳

すがの野にとりもつながぬ駒の尾の春の柳はうちなびきけり

山家流水

人問はぬ我が住みわたる里にしも酒かむほどの水は流れつ

水邊山振

鏡如(かゞみなす)岩かき淵(ふち)に山振(やまぶき)のうつるかげさへをとめさびせり

草處々

山櫻ちるきは雪とふりしけばかなたの花は雲と見えつゝ

春雪

荒駒(あらこま)のくゑはらゝかすあがきより村消(むらぎ)えかゝる春の野の雪

見山花

くれのおもおもひしあれば雲と見し八つ尾(を)の花に寄(よ)り立(た)ちにけり

樹陰早蕨

彌生へて子の日のぬべに來て見れば小松が下に萌(も)ゆるさわらび

○かびの　足の枕詞。
○みねをさかしみ　嶺が嶮しいから。
○すがの野に云々　菅野及び簓野は播磨國宍粟郡の同じ所にある地名を指したのであらう。とりもつながぬは放牧の意で駒に冠し駒から尾と續けて柳の枝を聯想さしたものと思ふ。
○酒かむ　酒を醸す。
○岩かき淵　岩垣の間にある淵。
○をとめさびせり　少女らしい。
○くゑはらゝかす　蹴散らす。
○あがき　足で掻くこと。
○くれのおも　吳母。うゐきやうといふ植物の名。古今集墨滅歌貫之「くれのおもこし時とこひつゝをれはゆふぐれのおもかげにのみ見えわたるかな。」おもひをいひ出す爲に置く。
○八つ尾　多くの峯。
○子の日のぬべ　子の日の遊びをした野邊。

花面影

散りまよひ過ぎにし花の面影のかはひらでちふ蟲ぞ飛ぶなる

藤埋松

藤なみをきぬにきそひてしみたたる荒山小松乏しきろかも

道落花

雪ならば老いたる馬にまかせても花ちりしける道はかへらむ

寄太刀戀

つむがりの太刀も得てしがわが戀の戀の奴を切り拂ふがね

不逢戀

忘貝千貝八千貝ひりふともあはぬ思ひは忘れかねつも

船中見花

さをさして行方さだめぬ小舟にも片山岸の花はちりつゝ

片戀

荒磯浪卷きもてよする片よりの玉藻や戀のたぐひなるらむ

貴賤鄰月

貴人のあはれと思ふ月かげのしけこきをやにさすがこほしき

---

○かはひらで　面影のかはらないに意を掛く。「かはびらこ」ならば蝶類の古名。
○藤なみをきぬにきそひて　藤の花が松に咲き懸れる姿をいふ。
○しみたたる　茂り立てる。
○荒山小松　人氣のない深山に生えた小松。
○まかせても　此の下に「行くけれど」の意を補ふ。
○つむがりの太刀　古事記にある八俣大蛇の腹中から出た太刀。鋭利なる太刀の意。
○戀の奴云々　萬葉集卷十一「おもわすれだにもえすやと手握りて打てどもこりず戀の奴は」
○切り拂ふがね　切り拂ふやうに
○忘貝云々　戀を忘れることに緣ある忘貝を如何に澤山拾つても。
○片山岸　片山のほとり。
○荒磯浪云々　萬葉集卷十七「荒磯の埼に沖つ浪寄せ來る玉藻片寄りにかづらに造り云々。」
○片より　一方へ片寄ること。
○しけこきをや　醜い小屋。古事記「葦原のしけこき小屋に菅疊いやさや敷きてわが二人寢し」
○こほしき　戀しき。

鷹

富士の雪ちるかと見えて青雲の中よりおつる眞白ふの鷹

喚子鳥

宵さらず鳴くよぶこどり何しかも散りにし花は喚びもかへさぬ

妻問に行かむとする人に贈る

まつぶさによそひたたさね春山(はるやま)の霞男(かすみをとこ)と人も見るべく

冬夜

酒のまむ友どちもがもしく／＼に雪の降る夜は寂しきものを

落葉驚夢

うつゝより夢路(ゆめぢ)にかよふ間使(まつかひ)は風におとなふ落葉なるかも

野雉子

ひえ颪吹きこそおくれ朝まだき粟野の野べにとよむ雉子を

夕眺望

をちかたの嵐や松にちりくらむ雲はあとなき夕暮の峯

寄獸戀

眞山木(みやまぎ)の伏木になばる荒熊(あらくま)の人になしらえ隠妻(こもりづま)ゆめ

---

○眞白ふの鷹　白斑の鷹。

○宵さらず　夜毎に。

○妻問　男女相語らふこと。

○まつぶさに云々　古事記「ぬばたまの黒き御衣をまつぶさに取り裝ひ云々。」手ぬかりなく支度せよ。

○春山の霞男　伊豆志袁登賣神を兄の秋山之下氷壯夫と弟の春山之霞壯夫とが競爭して、弟が勝ち得たといふことが古事記にある。

○しく／＼に　頻りに。

○間使　彼我に通ふ使。

○おとなふ　音を立てる。

○粟野　日本書紀「をち方の粟野のきゞしとよもさず我は寐しかど人ぞとよもす」粟野は粟島のある野邊。

○雲はあとなき　新千載集秋津守國助「拂ふべき雲はあとなき月影にたゞ夜寒なる秋風ぞ吹く」

○伏木になばる荒熊の　横れる木に隠れる荒熊の如く。

○人になしらえ　人に知られる勿れ。

○隠妻ゆめ　逢ひ難き妹よ決して

寄軍戀

軍士のたけび雄たけび男さび身もたな知らぬ戀もするかも

あひ思ふ　四言

なおきて妻はなしちふ神言をさらに互に言ひ出でつるかも

鹿

さを鹿のかれず鳴くがね秋萩は□□□の花にありこせぬかも

古寺鐘

白雲のゆききはゞかる古寺は鐘より外に物のともなし

野秋風

荒野なる尾花吹き越す秋風にしゝまつ征矢もそよとこそなれ

久戀

思ひやる戀のたつ木に植ゑし木は木高くしげく成りにけるかも

花摺衣

秋の野の佛うつすきぬはあれど春の花をやさらに摺るべき

松を植う

みづえさしいや榮えこそ根こじもて植うる心は八千代とぞ思ふ

○身もたな知らぬ戀　我が身も全く忘れた戀。
○なおきて　汝を置きて。汝以外には、古事記須勢理毘賣命「八千矛の神の命や吾が大國主汝こそは男にいませば打見る島のさきざきかき見る磯の岬落ちず若草の妻持たせらめ吾はもよ女にしあれば汝を置きて男はなし汝を置きて夫はなし云々。」
○かれず鳴くがね　始終鳴くやうに。
○□□□の花　試みにいはば「千年の花」でもあらうか。
○ありこせぬかも　あつてほしい
○白雲のゆききはゞかる　人が往來するのを遠慮する意。白雲のは白雲の去來さ寂しい山里さを想はせるが、こゝでは枕詞風の役目であらう。
○物のと　物の音。
○しゝ　野獸。猪や鹿を指すこともある。
○征矢も云々　萬葉集卷二十「はろばろに家を思ひて負征矢のそよと鳴るまで歎きつるかも」
○秋の野の佛云々　例へば新古今集秋權僧正永縁「秋萩を折らではすぎじ月草の花摺衣露にぬるとも」
○みづえさしいや榮えこそ　瑞枝がさし出で益榮えるやうに願ふ。
○根こじもて　根附のまゝに掘り取つて。

思ふどち語らふ

神代にしいでかへらまく欲しといへばおのも〳〵はうべと答へつ

山里に椎拾ふ

み山べの里の童(わらは)にまじらひて心なぐさに椎ひりひてむ

四海

えみしらが貢(みつぎ)をたつと舟こがむ四方(よも)の海べに浪な立ちそね

忍戀

現身(うつそみ)の人なるわれや隱沼(こもりぬ)の下樋(したひ)の水に成りはてぬべき

獨酌一杯酒

大伴(おほとも)の旅人(たびと)のきみはまさねども月待つほどの友はありけり

羇中送日

旅衣著初(きそ)めし袖の花ふゞき思ひいでつゝ打拂ふ雪

海士

水鳥のうき寢のゆめや破るらむあことゝのふる友のよばひに

海外山

大海の深き心にあらそひて雲のそぐにへ山のそゝれる

---

○おのも〳〵　各人。
○うべ　宜。もつともだ。
○まじらひて　交りて。
○心なぐさ　心慰めに。
○ひりひ　拾ひ。
○現身の人　生きてゐる者。萬葉集卷二「現身の人なる我や明日よりは二上山を妹とわが見む」
○隱沼の　下の枕詞。
○大伴の旅人　萬葉集卷三に「太宰帥大伴卿讃酒歌十三首」がある。
○あことゝのふる云々　萬葉集卷三「大宮のうちまで聞ゆ網引すとあことゝのふる海士の呼聲」網を引く者を呼び集める友の呼聲に。
○雲のそぐにへ　雲のある遠く離れた上の方。

八代にさされける時春臣に贈れる

月花のなからむ里を中々にまぎて住ままく思ほゆるかも

わが影をともと見るがね八代の鏡の池はあせずもあらぬか

劔著く手野の神杉ひともとは枯れずて殘れ手野の神杉

妖怪

ますらをが弓に矢さしてまつとしも知らぬはおぞきものにざりける

備後三郎 太平記異本には柳の木と有り此の歌は普通の太平記に隨ふ

すめらべに明き心はさくら木をかき削りたる跡にのこれり

大塔宮

日の御影世に顯はしし岩戸裂く神の後には君ぞ坐しける

楠公

思ひきや御夢の楠をくすしくも千代のかゞみに仰ぐべしとは

菊池殿

鞍嶽の山の山おろしはやきにも君が昔のたけびをぞ思ふ

義貞朝臣 此のあそわたつみの神に祈りて潮退く事太平記に見えたり

まごゝろや干潟となししたつのまを直はせ渡す稻村が崎

○八代　肥後國八代郡。
○さされける　蟄居を命ぜらる。
○まぎて　求めて。
○あせずもあらぬか　水が涸れないであつてほしい。
○劔著く　手の枕詞。
○手野　肥後國阿蘇郡。

○おぞきものにざりける　愚かものである。

○岩戸裂く神　磐裂く神。伊邪那岐命が軻遇突智神を斬られた時、御刀の血が澤山の石に走り突いて出來た神。磐をも根をも刺し裂く稜威ある神。

○鞍嶽　肥後國菊池郡。

○たつのま　龍馬。

長年

大船の上としおぼしたのましし高御座をし守りたらはせり

天子の御座を高みくらと云ふ、此の歌船の上籠城の功を云ふ而已

兎

けたの崎なみ伏す鰐を打橋のたゞ渡り來し神ぞこの神

花前待人

こぬ人を松浦さよ姫いきかへり花のひれだに振りこせぬかも

寄月餞別

別れ路に心限なき月影を酒にうかべて酌みかはさばや

寄花述懷

ますらをの心たらひに花は見む醜の御楯は命はかなし

松本秀宗井口益方と共に麓といふ所に遊ぶ道のべの小田に早苗あり

八束穗の秋のたり穗をいさゝけき綠にふゝむ苗代ぞ是れ

谷といふ所にて

梓弓春の谷間にわけ入れば思ひもかけず蛙鳴くなり

藤浪のかゝる匂ひし殘らずば山の木立を夏とこそ見め

---

○大船の上　船上山を含む。上さしも長年を聯想させる。
○高御座　後醍醐帝。
○守りたらはせり　手落なく守つた。

○けたの崎云々　古事記にある稻羽の素兎の話。氣多の崎は因幡國氣多郡。
○打橋の　打橋の如く。打橋は假作りの橋。
○松浦さよ姫　待つを掛く。
○いきかへり　生きかへりに行き歸りを掛く。
○花のひれ　花瓣の意に佐用姫の振つた領巾を掛く。
○心限なき月影　ぬかりなく心の屆く意に曇りない月の意を掛く。

○麓　肥後國八代郡。
○八束穗云々　神代紀「其秋垂穎八握莫莫然其快也。」
○いさゝけき綠　僅かな綠色。
○梓弓　はるの枕詞。

殊更に暮れ行く春のをしまれてたゞ過ぎがたき藤浪のかげ

氷室

貢する氷室のあとをいしき／＼渡らふ富士の山おろしの風

水邊見月

磯にふり浪はくだけてかへれども我はかへらじ月をさやけみ

玉くがねしゞにつらぬる鱗なす龍とかゞやく浪の月影

皇國芳花無惡虎

はやき風おこせる虎は櫻開く御國の外に神ややらひし

時鳥

中々にとりてなづけば時鳥おもひあがれる聲聞かめやも

神祇

墾土に蘆嘗生ひぬ八千鉾の神のみたまは今もかはらず

嶺松

荒鷲のやどるやどりを尋ぬれば嶺に年ふる松ぞそゝれる

河邊花

川浪やうすくれなゐに匂ふらむ岸かけてらす花の盛りに

---

○貢する氷室　朝廷に奉る氷を貯へる所。
○いしき／＼　追ひつく意。古事記「山代にい及けい及け鳥山い及けいしけ吾が愛妻にい及き逢はむかも」
○磯にふり　磯に觸れ當る。
○くがね　黄金。
○しゞに　繁く。澤山。
○やらひし　やらひは追ひやる意。
○おもひあがれる聲　自慢らしい聲。
○墾土　開墾した土地。
○蘆嘗生ひぬ　續日本紀「日の本の大和の國をかみろぎの少名毘古那が蘆嘗を植ゑ生しつゝ國固め造りけむより云々。」
○八千鉾の神　大國主神。葦原色許男神とも大穴牟遲神ともいつて少名毘古那神と共に日本國を建設した。
○そゝれる　聳え立つ。

澤螢

淺澤に機張廣き錦如たてぬきしげくほたる飛ぶ見ゆ

白雨

夕立のはらゝぐ雨に潦やがてながるゝ庭のおもかも

水邊菖蒲

射目たてて富の小川を渡るとて刈らぬ菖蒲の袖にかをれる

岡早蕨

春されば信夫の岡の早蕨もしのびかねてや穗にいでぬらむ

更衣

蜻蛉羽のきぬならなくに荒妙もまづ珍らしき夏は來にけり

夏衣とり粧ふとて磯浪のそにぬぎうつる花の著ならし

雪與年深

年の波よるひるとなく雪ふれり立ちかはるべき春惑はしに

池上蓮

をどりあがる鯉の廣旗花にふり池の蓮のちらまくをしも

夕立のはらゝぐひさめ見出づれば白玉こぼす池のはちす葉

○機張廣き錦如　幅の廣い錦の如く。拾遺集秋法橋觀敎「湖に秋の山邊をうつしては機張廣き錦とぞ見る」
○たてぬきしげく　縱横自在にの意。
○はらゝぐ　はら〳〵と落ちる。

○射目立てて　富の枕詞。
○富の小川　大和國生駒郡。
○信夫の岡　岩代國信夫郡。
○蜻蛉羽のきぬ　とんぼの羽のやうなうすもの衣。
○荒妙　祝詞祈年祭「御服は明妙、照妙、和妙、荒妙云々。」荒い布で織つた衣。
○磯浪のそにぬぎうつる　磯浪の打寄せる磯に脱ぎ捨てる。こゝでは磯浪のそにはぬぎうつるをいふ爲においた。古事記「ぬばたまの黒き御衣をまつぶさに取り裝ひ沖つ鳥胸見る時はたたぎもこれはふさはず邊つ浪磯に脱ぎうて云々。」
○花の著ならし　花の著馴衣で、今までの春衣を脱ぎ捨てるのである。
○春惑はしに　春をまごつかせるために。
○廣旗　廣鰭。大きい鰭。
○はらゝぐひさめ　はら〳〵と降つて來る大雨。

鏡が池とところがらこそ花はちす身の盛りうつすをとめとは見れ

湖水餘寒

春としもおもほえぬまで馬車氷をわたるすはの海づら

山吹露

玉ふくむ井手(ゐで)の山振(やまぶき)あはれ〳〵こまに飼(か)ふちふ露な溢(こぼ)しそ

菊始開

鴈がねを聞くやいかにと問(と)ふ人(ひと)にまだ綿きせぬ花はしめしつ

夕鶯

花にあかでかへる山路の遠近(をちこち)に夕片(ゆふかた)まけて鶯なくも

暮春花

霍公鳥したまつほどの木がくれに匂へる花や春はとゞめし

河花

稲筵(いなむしろ)河添(かはそひ)やなぎしきちれば流るゝ花をわかゆ潜(く)めり

邂逅逢戀

たまさかにあひ見るよひは秋の夜を千夜(ちよ)もいほよも續(つ)がまく思ほゆ

雨中春草

---

○花はちす身の盛り云々　日本書紀「草加江の入江の蓮花蓮身の盛り人乏しきろかも」

○すはの海　信濃國諏訪湖。

○井手の山振云々　新古今集春俊成「駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川」井手は山城國相樂郡。

○綿きせぬ花　菊の花には著せ綿をする。これは咲き初めだからかくいふ。これを示したのはまだ鴈の來るには早い意である。

○花にあかで云々　古今集春平貞文「花に飽かで何歸るらむ女郎花多かる野べに寢なましものを」萬葉集巻五「梅の花散りまがひたるをかびには鶯鳴くも春かたまけて」

○したまつ　心待ちに待つ。

○稲筵　河添柳の枕詞。

○しきちれば　頻りに散れば。

○わかゆ　若鮎。

○いほよ　五百夜。

をとつ日に見つる野べともおもほえずこの春雨にもゆる若草

寄道祝

立花のかげふむ路にありがよふ人草しげき君が御代かも

雲の上を思ひて「紫の袖をうつして池の面にふぢ見て立てる春の宮人」益方

右和歌

うま人のきぬの色めの藤なみを眞袖にかけて遊ぶ今日かも

月照古橋

月ながら長柄の橋を家苞につゝむ袖もが見ぬ人のため

五月雨晴

日をまねみ雨に朽ちぬる菅蓑を先づとり出でて干さまくぞ思ふ

寄琴戀

雪霜に枯野のふねも時しあれば八緒かきなすたなれと成りぬ

水郷葦

あしまよりいでて葦間にかへらふは浪速の里の小舟なりけり

顯戀

大伴の津守が占につけねども人言しげくなりにけるかも

---

○ありがよふ　馴れ通ふ。
○うま人　貴人。
○眞袖にかけて　新古今集秋顯昭法師「萩が花眞袖にかけて高圓の尾上の宮に領巾ふるやたれ」
○長柄の橋　攝津國西成郡。
○家苞に云々　萬葉集卷七「玉津島見れども飽かずいかにして包みもて行かむ見ぬ人のため」
○日をまねみ　幾日も〳〵。まねしは多い意。
○雪霜に　雪霜のために枯れる野といふ料に置いた。
○枯野のふねも云々　日本書紀及び古事記にある枯野といふ船。
○八緒かきなす云々　八弦を掻き鳴らす手馴れの琴となつた。八緒は古事記にも「八弦の琴を調べたる如云々。」とか、東遊にも「吾が夜子が今朝の琴手は七つ緒の八つ緒の琴を調べたることや云々。」とある。萬葉集卷五「こととはぬ木にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしあるべし」
○かへらふは　歸るは。
○大伴の津守が占につけねども　萬葉集卷二に「大津皇子竊婚石川女郎時津守連通占露其事皇子御作一首」と題して「大船の津守が占にのらむとはまさしに知りてわが二人寝し」とあるによつた。大伴のは津の枕詞。津守連は陰陽道に明るい人だから、其の者の占にあらはれないけれどといつた。

澤水鳥

ふぢ澤の味(あぢ)の村鴨(むらがも)立ち騒ぎなどいせ人にうき名負(お)はせし

旅宿鷄

曉のかけろ鳴くなり旅衣むなみはをしきいざ出でたたむ

湖霞

鏡山打出の濱にうちいでて見れば霞にかきくもりつゝ

雲開月

虎は走せ靇(みづち)は翔(か)ける天雲の絶間さやけき秋の夜の月

詠鴈

秋來ぬと鳴きて渡らふ初鴈は世の長人(ながひと)にとふふしもなし

晴夜月

現身(うつそみ)の世のさかしらを浮雲にたぐへてこよの月は見てしが

栽花

たぐひなく櫻の若木うつしうゑて心長くも花はまちてむ

風動野花

夏草のねこの山風吹きおちて浪野(なみの)の原の尾花(をばな)玉まく

○味の村鴨　味は味鴨とて鴨の一種。味鴨の羣れる鴨の意。萬葉集卷三「港つへに味村さわぎ云々。」
○かけろ鳴くなり　神樂歌「庭鳥はかけろと鳴きぬなり云々。」
○鏡山打出の濱　近江國蒲生郡及び滋賀郡。
○かきくもりつゝ　鏡の緣語。
○秋來ぬと云々　續古今集秋大宮院權中納言「秋來ぬと雲居の鴈のこゑすなり小萩が下や露けかるらむ」
○長人　長命者。古事記建内宿禰「高光る日の皇子うべしこそ問ひ給へまこそに問ひ給へ吾こそは世の長人そらみつ日本の國に鴈子產むと未だ聞かず」
○現身の　世の枕詞。
○さかしら　賢ぶること。
○夏草の　ねの枕詞。
○ねこの山　阿蘇五峯の一なる猫岳。浪野の原はその外輪たる坂梨峠の下の山野(豐後國直入郡)。
○玉まく　尾花に宿る露が玉のやうに亂れ落ちる。

行人隔霧

あひよばふ聲は隔てぬ樵人（そまびと）の分け入る山にかをる夕霧

春雨

音たてて降るとはなしに咲きにほふ花の雫となれる春雨

互別戀

妹が門かへり見すれば赤駒のあがくををしといたたせり見ゆ

野草露滋

いでましをしたまち顔（かほ）に秋の野の千草の露ぞ玉敷（たまし）きみてる

寄鳥戀

うち羽ふり八尾（やつを）越（こ）え乞（こ）ふ山どりのはつをのかゞみもとな懸けずは

雲間月

折ふしは月のあやなる村雲をなど一むきにうとみ果つべき

寄斧戀

仙人（やまびと）になれて朽ちにしをのの柄（え）にわが名はなりぬ現身（うつそみ）にして

草花告秋

咲きそむるくちなし色の女郎花なかなか秋をつげぬ色かは

○かをる　霞む。
○妹が門云々　萬葉集卷七「妹が門出入の河の瀨をはやみ吾が馬つまづく家思ふらし」同「赤駒の足掻早けば雲居にも隱り行かむぞ袖振れ吾妹」
○いたたせり　「い」は接頭語。
○いでまし　行幸。
○玉敷きみてる　萬葉集卷六「玉敷きて待たましよりは云々。」
○打ち羽ふり　羽搏きする。
○八尾越え乞ふ　多くの峯を飛び越える。
○山どりのはつをのかゞみ　萬葉集卷十四「山鳥のをろのはつをに鏡かけとなふべみこそなによそりけめ」山鳥は夜は雌雄峯を隔てて眠り、朝雌鳥の姿が雄鳥の光る垂尾に映る(古義)といふ。
○もとな　心許ない意。
○月のあやなる村雲　村雲も月に風情を添へる一種の模様であるからいふ。
○仙人になれて云々　晉の王質の故事。
○咲きそむる云々　金葉集秋源縁法師「咲きにけり梔子色の女郎花いはねどしるし秋のけしきは」口無しの意を掛け、次に「つげぬ」と縁語を用ゐた。五句は告げる色の意。

寄弓戀

いかでかく手弱き兒らが葛城の襲津彦眞弓こゝろづよかる

歸雁

聲よりも翅ぞ先にかくれぬる霞のそらをかへるかりがね

甚戀

すま人の燒くとふ鹽をからしとは我が戀ふらくを知らぬ言かも

名所山

繁本ゆふ葛城山にのぼりたち一言ぬしのよごとたばらむ

山家鳥

おへど〳〵しこの村鳥金戸べの山田のをしねぬすみとり食む

曉燈

鶺鴒まなびのまどのともし火は曉かけて影くまもなし

月前松風

みそらには月照りたらひ軒端には聞きのさやけき松風の音

寄穴戀

をつゝにしあはずてふれば盗人のゐりたる穴もたのまえにけり

---

○葛城の云々　萬葉集卷十一「葛城の襲津彦眞弓あらきにもよるとや君がわが名のりけむ」襲津彦は應神帝の時の勇將で、其の者の持てる强弓の如くの意。
○こゝろづよかる　無情であらうかの意。
○すま人の燒く云々　萬葉集卷十七「須磨人の海邊常さらず燒く鹽のからき戀をも吾はするかも」からしは鹽の辛いとつらい意とを掛く。
○我が戀ふらく云々　萬葉集卷四「村肝の心摧けてかく許り我が戀ふらくを知らずかあるらむ」
○繁本ゆふ　葛城山の枕詞。
○一言ぬし　大和の葛城山に住む一言主神。
○よごとたばらむ　善事を戴かう。雄畧帝が葛城山に登られた時、一言主神が「吾は禍事も一言、吉事も一言、言離の神、葛城の一言主の大神なり。」と答へたことが古事記にある。
○しこの村鳥　醜は罵る意。
○金戸べ　既出。こゝは古義の說により門邊の意と見る。
○鶺鴒　日本書紀にある伊邪那岐伊邪那美の命の故事によつて戀敎鳥又は敎鳥ともいふ。學びの窗といふ料に置いた。
○をつゝにし　現に。
○盗人の云々　萬葉集卷十二「門立てて戸はさせれども盗人の穿りたる穴ゆ入りて見えけむ」
○たのまえ　賴まれ。

草花告秋

八千草の匂ひ出でたる秋の色を蟲の垂衣かゝげてぞ見る

鴫

人訪はぬ山田の田居に家をれば物戀しぎの聲のみぞ聞く

風北にかはりて冱え返り又雪降る

雪と見て惜しびし花の面影の花とやは見ぬ春のあわ雪

いひはじむ

赤駒を打ちてさをびきひきも見で心を人に聞えつるかも

秋夕雲

かぎろひの夕立つ雲のうすいろに匂ふやみねの黄葉なるらし

馬上見花

まほに見て馬たぎ行けばやゝくに近勝りする山櫻花

乘り歸る駒の振髮振りさけて飽かぬ櫻を顧みぞする

月照古橋

夕汐の昇る濱名の橋ばしら立ちまちえたり立待の月

寄松祝

○蟲の垂衣　薄布を笠に縫ひつけて被るもの。
○家をれば　家に居れば。
○物戀しぎ　物戀しきにしぎを掛く。
○花とやは見ぬ云々　古今集春素性法師「春立ては花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく」
○赤駒を打ちてさをびき　萬葉集卷十四「赤駒を打ちてさをびき心引き如何なるせなかわがり來むといふ」赤駒を鞭つて索緒を引く意でひきの序詞。
○ひきも見で　相手の心を引いて見ることもせずして。
○かぎろひの　夕の枕詞。
○まほ　眞正面。
○馬たぎ行けば　馬の手綱を操つて行けば。
○近勝りする　近づく程見榮えがする。近劣りの反對。
○振髮　頭髮。
○振りさけて　遠く仰いで。
○立ちまちえたり　立ちは柱の緣語。
○立待の月　十七日の夜の月。

荒山に茂れや千松しが齡をばいくらも君に奉るがね

螢照水草

淺澤に螢をやどす浮蓴菜夜深く人をつなぎとめてき

初春海

きぞの夜し盡きしみ冬の名殘とていそまによする浪の初花

夕落花

夕されば繋げる駒の餌乞の足がきにさへも花の散りしく

霞籠めたり

いくばくの野坂の蜑かかけてほす霞みわたれる沖つ島山

路卯花

足占問ふ方こそ知らね白雪のちまた惑はし咲ける卯の花

池杜若

池の面に匂ひあまれる杜若きそひ狩する袖に摺らゆな

浦五月雨

棚ぎらし八重立つ雲も日並べて長ゐの浦に五月雨ぞふる

浦時鳥

○いくらも　數多く。

○人をつなぎとめてき　人をして立ち去ることを禁ぜしめる意。じゆんさいの緣語。

○野坂　肥後國葦北郡。

○足占問ふ云々　一足を吉一足を凶と定め或距離に達するまで吉凶の語を歩調に合はせつゝ歩み、最後の歩みを以て吉凶を定めるを足占といふ。

○杜若云々　萬葉集卷十七「杜若衣に摺りつけますらをのきそひ狩りする月は來にけり」

○きそひ狩りする　先を競つて狩りする說と著裝ひて狩りする說とがある。

○摺らゆな　摺られるな。

○長ゐの浦　備後國御調郡。

うたがたの哀れ聞きしる蜑もなし野坂の浦の山ほとゝぎす

海上螢

汐の泡の輝くかげを友と見て波のほしろく螢飛ぶ見ゆ

春の懷舊

大方の秋の霧もや片よりて花にわかれし袖にやどれる

春草

荒駒のはらばふ野邊はいくばくの藍もて綠そめかけぬらむ

寄弓戀

みすゞ刈る信濃の山に登り立ち引きならすべき眞弓選ばむ

眞鉋もて削る荒木の槻弓の月たち日たち馴れぞ增れる

海夕立

光神なりはためける海の面に鯨の立てし汐煙かも

八日、雨

春雨に萌ゆるにこ草にこやかにいつかも花のさかむとすらむ

去年の春花の日數を敷き馴れし草の席や生ひかはるらむ

月前蟲

○うたがた　野坂浦は歌坂ともいふから、歌潟の意か。或はうたかた(暫しの意)か。

○波のほ　波頭。

○荒駒のはらばふ　萬葉集卷十九「大君は神にしませば赤駒のはらばふ田居を都となしつ」

○みすゞ刈る　信濃の枕詞。萬葉集卷二「みすゞ刈る信濃の眞弓吾が引かばうま人さびていなさいはむかも」

○眞鉋もて云々　萬葉集卷十七「眞鉋もち弓削の河原の埋木のあらはるましじきことにあらなくに」

○光神なりはためける　雷が鳴り轟く。萬葉集卷十九「光神鳴るはたをとめ云々。」

○にこ草にこやかに　柔かい草がにこ〳〵して。萬葉集卷十一「蘆垣の中のにこ草にこやかに我と笑まして人に知らゆな」にこ草には箱根草等種々の說がある。

○いつかも　何時かまあさて待遠しく思ふ心。

秋の野に光あまれる月人の天つあゆひの鈴蟲ぞなく

月夜よしこほろぎとなく蟲のねにさそはれ出でて露に濡れぬわれ

松間月

望月のまろがり難き松が枝も隈とやは見るみやびをの友

見る人のあはちふ聲す松風の葉越しの月のおもしろきよに

述懐

浮雲のうまのふつまを乗りがたみ振りさけて見る故郷の空

十一日、雨

忘れては花やうつろふとおもふは風交にふる閏の春雨

忍逢戀

山川の瀬すべる年魚を島つ鳥鵜八つかづけてくはしめに逢ひつ

寄山述懐

遠々し越の白山しらねどもたかき心を行きてくらべむ

将軍

すめらぎの大御軍をあともはばたれかをゝしき心付からむ

初雁

○月人　月。
○天つあゆひの鈴蟲　古事記「宮人の脚結の小鈴落ちにきと宮人とよむ里人もゆめ」脚結は昔表袴を膝の邊で結ぶ紐で、それには鈴や玉等を飾りに附ける。
○まろがり難き　丸くなり難い。
○あはちふ聲　あゝといふ聲。
○松風の云々　玉葉集冬二品法親王守覺「浦松の葉越しに落つる月影に千鳥妻とふ須磨の曙」
○うまのふつま　馬の太馬。萬葉集卷十八「片思ひを馬にふつまにおほせもてこしへにやらは人かたはむかも」
○瀬すべる　瀬を滑り行く。
○島つ島　鵜の枕詞。
○鵜八つかづけて　萬葉集卷十九「年のはに鮎し走らば辟田河鵜八つかづけて河瀬たづねむ」鵜を何羽も水に潜らせて。
○くはしめに逢ひつ　前のは反歌で、その長歌の一節に「鮎子さ走り島つ鳥鵜飼ともなへ篝さしなづさへ行けば吾妹子がかたみがてらと紅の云々。」とある。くはしめは美女。
○遠々し越の白山しらねども　古事記「遠々し越の國に云々。」古今集羇旅藤原兼輔朝臣「君が行く越の白山知らねども雪のまに〳〵跡は尋ねむ」
○あともはば　率ゐるならば。
○心付からむ　心付かざらむとあったのであらう。

待ち戀ひて鴈が鳴く音を聞きそめてなどかも秋のこゝら悲しき

十八日、雨

きのふ見し日かげの絲の青柳に玉こそ添はれ春雨のつゆ

古寺

なかごよむ聲たえてこそ中々に聞きのさやけき松風は吹け

岸紅葉

風のなす岸の紅葉のしがらみにわれもかゝりぬ秋の日ぐらし

雨後夏月

なよ竹のうら葉にのこる夕立のつゆもすゞしく月夜(つくよ)さしけり

十九日、曇

萌えいづる柳を見ても待ち渡る青葉のさくら忘れて思へや

寄瀧戀

末つひによりあはむ水も岩にふり千々に砕(くだ)けて落ちにけらずや

水樹有佳趣

わたつみの五百津桂(いほつかつら)もかくばかりすがの所にしみたちぬらし

毎家有春

○こゝら　夥しく。

○日かげの絲　日陰蔓。

○なかご　中子。經。

○風のなす岸の云々　古今集秋春道列樹「山川に風のかけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり」

○われもかゝりぬ云々　我も秋の終日それを見て暮した意。かゝりぬは紅葉の緣語。

○岩にふり云々　萬葉集巻十一「高山ゆ出で來る水の岩に觸りわれてぞ思ふ妹に逢はぬ夜よ」

○五百津桂　澤山の桂。

○すがの所　すが〲しい所。神代紀「出雲之淸地(註)淸地此云素鵝」

○しみたち　茂り立つ。

豐かなる霞と共に家々のにぎはふ煙四方に棚引く

家毎にさかり見はやす庭櫻花のうたげも遠近きこゆ

　二十四日、雨

花すゝき心靜かに酒くめといはぬばかりの今日の春雨

○

黑崎の松の茂みの目移しにしら玉磨く村山の雪

ふる雪にきはふ白浪味さはふ女島の磯の松にかゝれり

　九月盡

秋毎にをしみなれても長月の暮れ行く今日ぞ物は悲しき

　二日月幽に出でたり

手弱女の眉とは見ずて二日月ふつの御靈のこゝら戀しき

　むつき、花を思ふ

まち〳〵て今年のものとなりぬればいよゝこひしき山櫻花

　今年の初魚とて取りあへず、さかなとしつゝ、人々眞魚板の上に踊れるを、辛うじて居りつ、熊本などの客人どもがな、見せまほしと思へり、ふぐ、油目、藻伏、殊にうまし

○家々のにぎはふ煙　新古今集賀仁德天皇「高き屋にのぼりて見れは煙立つ民のかまどは賑ひにけり」

○花すゝぎ　花に雨の降りそゝぐ

○黑崎　筑前國遠賀郡であらう。
○村山　羣山。
○味さはふ　めの枕詞。
○女島　肥後國葦北郡。

○手弱女の眉云々　萬葉集卷六「ふりさけて三日月見れは一目見し人の眉引思はゆるかも」
○ふつの御靈　古事記の神武帝御東征の段に「僕降らずとも專ら其の國平けし横刀あれは降してむ。」とあつて、其の刀の一名を布都御魂といふ。二日月の形を刀と見做した。

心あひの友のみしきて戀しきはあたら關屋の天の眞魚喰（あめのまなぐひ）

昨夜の雪積りて深き事平地九寸ばかり

鄰にも朝戸おし開き我が如くあはちふこゑすけさの大雪

殘雪

鶯のかへる古巣や惑ひなむつれなく雪のいく日殘れる

柳

川添の一本柳（ひともとやなぎ）枝たれて影の玉藻（たまも）にわかゆかくらく

刈菰（かりごも）の亂れて靡くあやもなしあやはなけれどしゑや面白し雨の青柳（旋頭歌）

○

閨（ねやの）廼隙（ひまあかつきがたの）曉方能夢現（ゆめうつゝわかで）王可傳靜計（しづけき）幾春雨（はるさめの）廼音（おと）

古草（ふるくさ）はあるかなきかにひ草の生ひまさり行く春雨の跡

尋餘花

かへるさの時鳥とは思はぬをのこりて見えぬ山櫻花

夏衣きならの鄉にあくがれつ八重の一重も花やのころと

若草

しゝじもの膝折り伏（ひざをりふ）せて家にありし心おぞかりき野べのわか草

---

○しきて　一面に竝んで。
○關屋　肥後國葦北郡。
○天の眞魚喰　魚の料理。古事記に「さきたけのとを〻〻に天の眞魚咋獻らむ。」
○あはちふ　あはさいふ。
○川添の一本柳　日本書紀「いなむしろ川添柳水行けば靡き起き立ちその根はうせず」
○かくらく　隱る。
○刈菰の　亂れの枕詞。
○しゑや　まゝよ。
○古草は云々　萬葉集卷十四「面白き野をばな燒きそ古草に新草まじり生ひは生ふるがに」
○時鳥とは思はぬを　時鳥を聞かうとは思はなかつたのに。
○のこりて見えぬ山櫻花　山櫻の殘花の見えない意。
○夏衣　きの枕詞。
○きならの鄉　大和國奈良の里。
○しゝじもの　膝折り伏せの枕詞
○膝折り伏せて　膝を折り屈めて
○心おぞかりき　心愚かであつた

首夏藤

花ちりて山時鳥なきもあへぬたゆ間繼ぐとか藤のさくらむ

七夕橋

朝霜のみけの大木の倒木を思ひいでてや星の合ふらむ

落葉

一つちり二つ數そひ昨日今日庭は落葉の錦となりぬ

朝眺望

朝日子ののぼる御影にかつぐ\も霧のかなたの沖つ島見ゆ

○

蘆かびと共に目たてて匐ふ蟹のあなおもしろの春の干潟や

立秋風

みそぎせし人はたれともしらにぎて吹きたゞよはす秋のはつ風

簷梅　幽栖春月

きのふけふ香にこそ匂へ梅の花忍草はふりし草ともふりし

うつ木垣咲く花まだき月人の何をしるべにわぎへ問ふらむ

櫻百首抄

○たゆ間繼ぐとか　日本書紀「うま人のたつる琴たてうさゆづるたゆまつがむにならへてもがも」

○朝霜のみけの云々　日本書紀「到ニ筑紫後國御木一居ニ高田行宮一時有ニ僵樹一長九百七十丈濶百寮蹈ニ其樹一而往來時人歌曰」とあつて「朝霜のみけのさをはしまへつぎみい渡らすもみけのさをはし」とある。朝霜のは「け」の枕詞。みけのさをはしは御木の眞小橋卽ち御木の橋の意。今筑後國三池郡の地名に殘つてゐる。

○かつぐ\も　辛うじて。

○蘆かび　蘆の芽。

○人はたれともしらにぎて　知らずの意に楮の皮で織つた布の白幣を掛く。千載集戀德大寺左大臣「一目見し人は誰とも白雲のうはの空なる戀もするかな」

○吹きたゞよはす云々　萬葉集卷十「秋風の吹きたゞよはす白雲はたなはたつめの天つ領巾かも」

○わぎへ　我が家。

久方のあめの木(こ)だねも國わきて咲くは櫻の花にぞありける

みるからにまうらたぬしも花細(ぐは)し櫻は花の神にぞあるらし

おしてるや難波(なには)のさきのならび濱ならぶ色なき山櫻ばな

櫻花かざしにさせる風流士(みやびを)の丹摺(にずり)の袖も色けたえけり

歌さはにうたひ出づるも櫻とふくすしき神のしわざなるらし

長き日を花の木の間ゆ太白(ゆふづゝ)のかゞやくばかり遊びくらしつ

春山に日はかくるとも櫻花つき夜とふたつ今しましみむ

霞立つこれの山間(やまま)に入りたてば匂ひよろしき山ざくら花

三吉野の吉野のさくらをつゝにはいまだみなくに夢に見えけり

足なへと目しひにあへる道にまれ花見に行けば厭はざりけり

我がしめし櫻の枝に鈴かけて木傳ひちらす鳥をしもらむ

なら人ぞさかしらはするしかはあれど花はめでつゝ歌はうたひし

言(こと)をこそ山櫻とへうち日さす都もまねく花にこもらく

淺茅生(あさぢふ)のしぬのかりくひにあしふますな花見る人を

さぬばりのきぬにつくなすめにつくは春の山びの山櫻かも

櫻花わがのる駒のあを駒の匂ふばかりに花のちりしく

---

○あめの木だね　日本書紀「初五十猛神天降之時多將樹種而下然不殖韓地盡以持歸遂始自筑紫凡大八洲國之内莫不播殖而成青山焉。」

○國わきて　國を區別して。日本國と特定して。

○まうらたぬし　心樂しい。

○花細し　櫻の枕詞。

○おしてるや云々　第三句までは序詞。日本書紀「おしてる難波の埼のならび濱ならべむとこそその子はありけめ」ならび濱までは序詞。

○丹摺の袖　赤く摺つた衣。

○色けたえけり　色が消された。色染えのしない意。

○さはに　澤山に。

○太白　宵の明星。

○しまし　暫し。

○これの　この。

○匂ひよろしき　萬葉集卷二十「宮人の袖つけ衣秋萩に匂ひよろしき高圓の山」

○をつゝには　現には。

○道にまれ　道にもあれ。

○しめし　占めし。所有とする。

○木傳ひちらす云々　萬葉集卷十「いつしかもこの夜の明けむ鶯の木傳ひ散らす梅の花見む」

○もらむ　守らむ。見張をする。

○なら人　奈良時代の人。

○言をこそ山櫻とへ　言語でこそ山櫻とさへいへども。古事記「あたら菅原言をこそ菅原といはめあたらすがし女」

○うち日さす　都の枕詞。

○都もまねく云々　都も茂く花に籠る。

○しぬのかりくひ云々　古事記「そ

月影に花をし見れば短木綿みじかきこよのふくらくをしも

小初瀬はみ谷八十ありおきつものなばりて咲ける花を尋ねむ

霰うつあられ松原まつばらにみれどもあかぬ山櫻花

庭つ鳥かけのたりをの誰しかも花をしめでぬ人あらめやも

何のいとまありてかもとな櫻の咲きのさかりに異こひはせむ

知らぬひつくしのわたを村山にかづけたるなす花ざかりかも

鶯はもるにかあらむひるはも日のこと〴〵くさくらに來鳴く

躍りあがる駒はおしてもとゞめてむ散り行く花ぞすべも知らなく

咲き初めて散り過ぐるまで我はもよ花の奴と成りてしありけり

馬にかくふもだしもがもうつり行く花の梢にかけてとゞめむ

年魚ならば鵜八つかづけてせめもせむ山川の瀬にちれる花はも

春べは花をりかざし遊びつるぬべの秋萩したなつかしも

花をのみめづるものとし思ひつる櫻のうら葉もみだひにけり

ちる花を雪とし見べく散る花の面かげなして雪のふりしく

櫻木をかたにゑるてふたくみらを打ち殺すべきくぶつゝもがも

同じくせどうか

---

の小竹の刈杙に足踏り破るれども　その痛きをも忘れて云々。」笹の刈株。
○さぬばりの云々　萬葉集卷二「三輪山の林のさきのさぬばりの衣につくなす目につくわがせ」野榛の色が自ら衣に附き染るやうに自ら人目につくのは。
○山び　山邊。
○短木綿　みじかきこいふ料。
○小初瀬　大和國の初瀬。
○おきつもの　なばりの枕詞。
○なばりて　隱れて。
○霰うつあられ松原　まつばらにの序詞。霰うつはあられ松原の枕詞。あられ松原は攝津國東成郡。
○まつはらに　つまびらかに。
○もとな　徒らに。
○異こひ　異戀。他物を愛する事。
○つくしのわた　筑紫產の綿。
○かづけたるなす　被らせたやうな。
○馬にかく云々　馬に掛ける綱を欲しいものだ。
○うつり行く　散り行く。
○年魚ならば云々　萬葉集卷十九「年のはに鮎し走らば辟田河鵜八つかづけて河瀨たづねむ」
○花はも　花はせめこる事は出來ない意。
○したなつかしも　心中懷かし。
○もみだひにけり　紅葉した。
○櫻木を云々　櫻の木を色々の物に細工する職工をいふ。
○打ち殺す云々　古事記「久米の子が頭椎い石椎いもち擊ちてしやまむ云々。」くぶつゝは頭椎の大刀で柄頭が塊狀をせる大刀。

狼のすだく荒野の山櫻花見つゝ居りしか窺はく吾しらめやも

浦の五月雨

五月雨に浦わの煙たえはてて水馴れぞまさる蜑の藻鹽木

雹に菜の葉破れたり

若菜にも降りし霰の痕しあれば手毎に摘みて語りあへらく

巴提須が虎をとれるかたかきて

ますらをの試みがてり虎じものすだくみ山に安寐しなさむ

佐敷にありける比小野篁の歌につぎてよめる

海士の子のさやぐさやぎにうき里も事やは足らぬ月を見る目に

關霧

所から關の下道たどりつゝ行きてぞなやめ足柄のせき

正月十一日の夕

春雨は軒の荵をつたひさしつらゝとなりぬしのぶながらに

戀奴

利鎌もて海士の刈藻に住む蟲のわれからなりぬ戀の奴に

初雁

○すだく　集まる。
○窺はく　狼が我をねらふ事を。
○若菜にも云々　拾遺集春圓融院「春日野に多くの年は摘みつれど老いせぬ物は若菜なりけり」
○虎じもの　虎なる物。
○佐敷　肥後國葦北郡。
○小野篁の歌　古今集雜「思ひきや鄙の別れにおとろへて蜑の繩たぎいさりせむとは」
○さやぐさやぎ　騷ぐ騷ぎ。
○つたひさし　途中まで傳はり。
○利鎌もて云々　第三句までは序詞。古今集戀典侍藤原直子朝臣「海士の刈る藻に住む蟲のわれからと音をこそ鳴かめ世をば恨みじ」われからは蟲の名と身自らの意とを掛く。

袖寒き程としもなき秋風にまだき聞ゆる衣かりがね

山家松

とふ人の櫻を折りし見ならひに雪の咲きたる軒の松が枝

名所松

住吉の浦吹く風に霧はれてみどりこだかきあらゝ松原

旅宿山風

旅にして家こふる人ぞ山越しのかぜにはいとゞ耳とかりける

夕風

暮近み寢ぐらにかへる村鳥の羽なみ亂るゝ森の夕風

狩人

負征矢の千箆の五百箆はすゝき如野に立ち雙べる御狩人かも

龜

かくばかり治まる御代を綠毛のかめは知らでやなばりてあらむ

牛

眞直にし世をしわたらば大路行くことひの牛の遲くともよし

寄花懷舊

○衣かりがね　寒くなるので衣を借りる意に鴈が音を掛く。古今集秋讀人不知「夜を寒み衣かりがね鳴くなべに萩の下葉もうつろひにけり」

○浦吹く風に云々　千載集秋藤原清輔朝臣「鹽釜の浦吹く風に霧晴れて八十島かけてすめる月影」

○あらゝ松原　立木の疎なる松原

○山越しのかぜ云々　萬葉集卷一「山越の風を時じみ寢る夜落ちず家なる妹をかけてしぬびつ」

○耳とかりける　耳敏くありけるの意。

○負征矢の千篦の五百篦は　箙に入れて脊に負へる人々の澤山の矢は。

○綠毛のかめ　青海龜。しやうかくばう。

○なばりて　隱れて。

○ことひの牛　牡牛の强健なもの

ちりぬれば枝にかへらぬ櫻だに昔の花にありこせぬかも

遠近落葉

あな囂(かま)とおち葉のまどをあけて見ればわたりの森の梢寂しも

○

秋見つる雲ゐの駒も若草に馴れ易げなる朧月毛や

人の許に撫子を贈るとて

うら若きわが撫子の開使(きつかひ)はあなおぼつかな事(つか)へあへむかも

田家月

家路には手馴の牛を先だててわが小山田の月をこそ見れ

送春如昨

春の日を長しとたのみ〳〵きて過ぎにし程は昨日とぞ思ふ

咲くを待ち散るを惜しみし花過ぎて春はきのふの心地こそすれ

霜藏家

ふせ庵のきぞの夜寒も諾(うべ)なりしおきこそかくせ今朝の初霜

衾

眞玉手(またまで)の玉手さしまきいをなさす神の夜牀(よどこ)の衾(ふすま)ともがも

---

○ありこせぬかも　再び語れないこと。

○あな囂と　あゝやかましいこと。

○わたりの森　肥後國菊池郡。

○雲ゐの駒　天までも驅ける駿馬。

○朧月毛　雲居の緣語で、月毛は馬の毛色。

○わが撫子の開使　撫子に愛子の意を掛く。

○事へあへむかも　お役に立つかしらの意。

○咲くを待ち云々　新拾遺集秋役宇多院宰相典侍「咲くを待ち散るを惜しむに日數經て盛りすくなき花の頃かな」

○眞玉手の云々　古事記「眞玉手玉手さしまき股長に寐はなさむを云々。」手と手とを枕として。

○いをなさす神　寢給ふ神。これは右の古事記の歌に基いて、八千矛神と沼河比賣とを指す。

水鳥近馴

味村の狂ふ激ちの水けぶりけぶりはたてど立ちも騒がず

旅時雨

からさきの松を時雨のかさにきてひるの錦の家づとにしつ

十九日、晴

いつてぶねいつはあれどもふなぎほひうらおもしろき春のあけぼの

散る花を眞帆に孕める百舟をつら〱に見る春の曙

さらぬだに心うきたつ曙の嵐にきほふ花の百舟

依風知梅

沖つ藻のなばりの山の梅が香の風のたなれの馬に乘り來る

逢夢戀

盗人のゑりたる穴に關守をおきてとゞめむ人のおもかげ

寄道祝

神ながら安らかなりし御手振を後の世人は道とこそあふげ

戀奴

おへど〱馬にかきつゝ虻じもの戀のやつこしかきつかひけり

○味村　あぢ鴨の羣。
○ひるの錦　錦を著て晝行くの意卽ちその光榮を人々に見せる意。
○いつてぶね　十艇櫓の船。
○いつはあれども　いつとても面白いけれど。
○ふなぎほひ　船を競漕し。
○つら〱に　つく〲と。
○沖つ藻の　なばりの枕詞。
○なばりの山　名張山。伊賀國名賀郡。
○たなれの馬　手馴の馬。
○盗人のゑりたる穴　萬葉集卷十二「門立てゝ戸はさしたれど盗人のゑれる穴より入りて見えしを」
○關守を云々　古今集戀業平朝臣「人知れぬ我が通ひ路の關守は宵宵ごとに打ちも寢ななむ」

獨居戀

大路行くことひの牛のむかつぬの妹に向ひてあらくしよしも

岩苔埋路

さかしらの入り立ちぬべくおもほえぬ苔に埋るゝ岩がねの路

早春霞

初春を誰うれしとて山の端にゑまひのまゆの匂ふ霞ぞ

逢戀

眞木の戸におとたてて吹く夜嵐をいであへる妹が言ぐさにしつ

契空戀

契りにはふさはぬ物を野坂の蜑もとなひりへりあなうつせ貝

朝眺望

ねぐら出て汐路はるけく飛ぶ鷲のい隠るゝ島さきつ島見ゆ

社頭祝

よもの海の外のゑみしもうべしこそなべて畏め神の廣鉾

松上藤

咲く藤のなみのすさびにこの頃は松の嵐のおとたゆむめり

---

○むかつぬの　相對せる角の如く以上は序詞。
○あらくしよしも　離れ〴〵に居るがよろしい。

○ゑまひの云々　萬葉集卷十八「なでしこが花見るごとに少女らがゑまひのにほひ思ほゆるかも」笑める風情をいふ。

○ふさはぬ物を　相應しないものを。
○野坂の蜑　野坂は肥後國葦北郡
○もとなひりへり　徒らに拾った
○うつせ貝　中實のない貝。
○さきつ島　崎津島。肥後國天草郡。

○廣鉾　丈の長い鉾。

○咲く藤のなみのすさび　咲く藤の花のなみ吹き榮えること。なみに靡みと波とを掛く。

新樹

そに鳥の衣きそへり夏木立眞玉さはまきはけむ太刀もが

時鳥　郭公

たづぬるもあなおぼつかな五月闇くらぶの山の山ほとゝぎす

浦雪混浪

筵なす雪の一ひら妬しとや巻きもてよする浦のしら浪

寄寒草戀

霜に伏す穗蓼古がら人しれず辛き戀をしわれはするかも

浪速江の蘆間の草の冬枯れていけりともなき戀もするかも

月前見花

花にあかで暮るゝ筵に油火をとだにも月のいはせざるかも

納涼舟

ゆふべおちず乘る棚無にさす棹のわれもみなれてあつさわすれむ

月照山雪

立ち昇る月影にこそ沖つ藻のなばりの山の雪は驚け

霧中松風

○そに鳥の衣　翡翠の衣。綠色の衣。古事記「翠鳥の青き御衣をまつぶさに取り裝ひ云々。」

○眞玉云々　玉を澤山卷き著けた太刀を欲しい。

○五月闇云々　古今集春貫之「梅の花匂ふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける」くらぶ山は山城國愛宕郡。暗い意を掛く。

○穗蓼古がら　蓼の穗の古い莖。これまでは序詞。

○辛き戀を云々　萬葉集卷十七「須磨人の海邊常去らず燒く鹽の辛き戀をも我はするかも」

○冬枯れて　これまでは序詞。

○ゆふべおちず　毎夜。

○棚無　棚無小舟。

○驚け　目がさめる。雪の輝く意。

家人の我をまつ風心なく旅のやどりのゆめおどろかす

荻告秋

破れつる夢よりやがて秋たちてうたゝ恨むる荻のさやぎや

月前犬追物

馬手に越す弓末に月のかゞやけば程なく聞ゆ矢叫の聲

月影は空にこそすめ御犬追ふこまの足なみは塵に隠れぬ

浦邊月

すま人の夜潮の煙うちきらしなか〳〵月のあやとこそなれ

澤井友松はわが古き友なり、此の頃身まかりぬるよし、其の子某がもとよりいひおこせたるに、讀みておくる二首

などて君松の千年をいたづらのものとはなしし松の千年を

わがかばね龜の川べに草むさば更にや君と手携はらむ

龜の川、或は神の川ともいふ、此の肥の御國と、薩摩との境にあり、そこは唐人にもあれ、薩摩人にもあれ、若し世に背きて、射向ふ事しもあらむ時、皇軍もて身もたな知らず討ちむかふべき所なり。

浦松風

---

○我をまつ風　待つと松とを掛く

○うたゝ恨むる　愈恨むる意に愈裏見る意を掛く。

○わがかばね云々　萬葉集卷十八「山行かば草むす屍大君の云々。」

○龜の川　豐後國速見郡。

○身もたな知らず　我が身も全く顧みず。

○射向ふ　反抗す。

旅人の袖吹きかへす秋風に奴島がさきの浪さわぐなり

遠村霧

玉簾の遠の家村きりこめてことひの牛のこゑかすかなり

社頭雪

住の江の神の齋垣の雪ふかしそれかあらぬかあら〻松原

初春待花

消えあへぬ雪に霞の匂ふにもおもかげよりぞ花のまたる〻

依風知梅

鬼神にあらぬものから目に見えぬ梅が香つれてわたる春風

柳櫻交枝

花のぬき柳のたての高機を春の日ぐらしおりはへてみむ

旅宿歸鴈

算みさしの日數を旅の宿りにてたわすれしめし歸るかりがね

嘉永二年しはすの二十日あまり一日といふ日より、藏北斗石の御關守に行きて守り居り、其の明の日は、み冬盡きて春をむかふる際とて、たそがれ時、なやらひといふのを家毎になすならはしなるを、如此御關屋を

○旅人の袖云々　新古今集羇旅藤原定家朝臣「旅人の袖吹きかへす秋風に夕日寂しき山のかけはし」

○奴島がさき　淡路國津名郡。

○玉簾の　をちの枕詞。

○家村　家の聚れる所。

○おもかげより　雪に霞の匂ふ風情を見ても。

○鬼神に云々　古今集序「目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ云云。」

○あらぬものから　あらぬものの

○花のぬき柳のたて　櫻を横絲にし柳を縱絲にする。萬葉集卷七「み吉野の青ねが峯の苔むしろ誰か織りけむたてぬきなしに」

○高機　織機の一種。

○おりはへて　織り延へてに引き續いての意を掛く。

○算みさし　數へることを途中で中止する意。

○たわすれしめし　忘れしめし。

○なやらひ　追儺。

し守りをればさるわざをもえせず、只獨り浪の響み、松風の音をのみ、聞きわたりてもだ居れど、中々に世のさかしらにかゝづらはで、心はいとやすらかに靜かなれば

さし竝の鄰だになき關守の心にやらふ鬼の一口

如此歌へるものから、年老いたる兄、隈本にありて、此の程病みこやしぬと、風のたよりに聞きつれど、かくおほやけの事にかゝづらひ、はた遙けき海山をし隔てれば、心ならずやがてもえ問はず、今程はいかにかいますらむ、なにど思ひつゞくれば、暮れ行く歲の名殘さへ、殊更に心細くおぼえて

年の浪わけむ舟もがまき柱太き心の行くへたづねむ

又遠見の御關屋の山の裾は、年經し松枝さしかはし、千引の石疊み果なりて、其のあやしき樣を、物に譬へば、唐土のききさといふ獸の、大海の波を渡りさしたらむが如く、又虎といふ神の、嘯き立ちたらむが如し、或は蛟の蟠れるに似たり、此の頃風は吹きすさびたり、夜のふけゆくままに、速人の薩摩のとより、依り來る浪の音は、雷などの如く、磯に觸れ碎くるさまは、百の鯨の汐煙吹きたつらむも、かくこそと覺ゆれ、

〇もだ居れど　默つて居れど。
〇さし竝の　鄰の枕詞。
〇鬼の一口　物の僅少なる或は事の容易なる意。
〇病みこやしぬ　病臥した。
〇まき柱　太きの枕詞。萬葉集卷二「眞木柱太き心はありしかどこの吾が心しづめかねつも」太き心は大丈夫の心。
〇千引の石　千人引の石の意。
〇ききさ　象。
〇速人の　薩摩のとの枕詞。とは泊門。

折しも雲間洩る片われ月の光をかはしたる、又類ふべきものなくおもしろし

薩摩潟沖の小島はいさ知らずこゝも雲間の月なげなくに

明くれば春を迎へて

朝びらき漕ぎつらねたる百舟の帆に見え渡る春の初風

嘉永三年む月の七日、兄の病重しとの使來れば、やがて其の夜の中に、ふねを出して夜一夜はしり、明の日松橋につきぬ、それより陸にあがりて、其の日の暮過ぐる頃、隈本に著きぬ、かたみに歡びあへる事いふばかりなし、其の後七日を經て身まかりたまひぬ

山は越え海は渡りて見し君も今は五百重の雲に隱りぬ

御關屋のあたり時鳥いと多し

我ながらこゝを雲居とまどふまで袖の下くき鳴く時鳥

眞百合去年のしはす末つかた、思ひもかけず正宗といへる鍛冶の作れる紐刀を得たり、此の刀持たりし人、此の刀の甚錆び朽ちてありしまゝに銘を彫れる事をもえ知らず、等閑に思ひて、それが子の童べに指させ置きたりしに、其の童常は木竹なにど嫁ひなく此の刀もて伐り、或は笋

---

○薩摩潟沖の小島　千載集羇旅平康頼「薩摩潟沖の小島に我はありと親には告げよ八重の汐風」

○月なげなくに　月がないのではない。

○朝びらき　朝船が港を出て行くこと。

○松橋　肥後國宇土郡。

○袖の下くき　袖の下を潛り。

○紐刀　懐劍。

○あさらへ　誂へ。

○みぎり　右。

○手弱女云々　此の歌既出。

を掘り取りなにどせしかば、刃は鋸といふ物の如く損ねたり、されど此の刀作りし鍛冶は古今に並びなき聞えあれば、用ゐるべくはあらずとも、せめて古き鐵色をだに見ばやとて研が許にやりて研かせたるに、いとも細くは成りたれど、燒刃は續きて殘りたり、猶精げ研きてよと、あとらへたりしかど、其の人も折から閙はしく、歳の内はえ磨き終へじ、あけなば三日四日の頃は必ず磨き終へむと契りおきぬれば、一時も早く見まほしくて、一日を過すも一とせの如く思へるに、今日しも遠見の山に登りてみれば、西の空に二日月幽に出でたり、其のさまみぎりに云へる紐刀の面影に似たりければ

手弱女の眉とは見ずて二日月ふつの御靈のこゝら戀しき

過ぎし二月の頃おくり賜はりし堯舜禹湯文武孔子伯夷叔齊等の御歌、すべておのれも、御心の如く思へり、そは同じ學びのおやによりて學びたれば、うべ理なりけり、又こたび給へる儒者をあやしび給ふ御歌の反し歌に、唐猫といふ事あり、おのれも歌の意は異なれど、其の猫はよみたることあり、其のよめるさまをこゝに聞えまつらむかし、八代に住みし頃、三人四人集へる中に、或一人がいへらく、漢土は皇國に先だちて

萬の道開けたりと、亦或一人は、いな〳〵中々に皇國にさきだちて顯れたりといひて、堯舜を盛へと論らひ、湯武のことをもかたみに爭ひてやまざりき、己開ける處をもて思ふに、まづ鈴の屋の翁の言によるに皇大御國の古よりの大みてぶりをいはば天照大御神の御よざしのまに〳〵、代々の天皇、天津日嗣知食す故に、ならの葉の歌ぶみの歌に云く日の吾が御子ともまをし奉りたり、又現し御代知食す天皇をやがて神とも奉りたる歌多し、大王は神にしませば赤駒の又天皇も大身みづから神をうたはせる御製にも、大王の神の御子云々、神代の傳言の盛りに傳はれるなり、こゝをもて君と臣との位正しき事異國といたく異なる處なるべし、さて御政事のさまは神ながら安國と治め給へば、臣連八十伴男も其の氏姓をおもみしぬ、青人草に至るまで、それ〳〵己々の營みをたがへず、いそしみ事へ奉れるまゝに、天の下は穩しく樂しくて世を渡る外なかりしかば、道といふ言擧なにどはなかりしなり、かれ實は道あるが故に、道といふ言無く、道といふ言なければ、道ありしなりけりと、同じ大人の直毘靈にも說き出されたり、又古は山路田路などいへる物に、行く道こそありけれ、其を置きて人の行ひの上に、道といふ事は無かりしと

○鈴の屋の翁　本居宣長。
○大みてぶり　大御手風。御風習
○よざし　寄託。
○ならの葉の歌ぶみ　萬葉集。
○大王は神にしませは赤駒の　第四五句は「はらばふ田井を都となしつ」(萬葉集十九)
○大王の神の御子　萬葉集二「天皇の御子のいでましの云々。」
○八十伴男　多くの部屬の長。
○青人草　庶民。
○言擧　特に取立てていふこと。
○直毘靈　宣長の著作。

もいはれたり、亦神の道といふ事も古き世にはなき事なりしを、日本書紀、難波の長柄の宮の御卷に至り、始めて神の道といふ文字見えたり、其は此の頃に至りて聖の道、佛の道などいへる外國の道渡り來りて、其の道々にまがへる故にわが皇國の神ながらの大御手ぶりを神といひ、又彼等がいへるさまをかりて玆にも道といふ言を添へられたるよしも演べられたり、己思ふに道といふ言の無き許り、道のありし世にあらまほしくこそ、道といふ名や尊き、安らかなる實や尊き、詳かにこゝをし思はば、おのづから誰も悟るべき事なり、されば堯舜の賢しきに讓るなにど名は宜しきさまなれど御歌の如く是れよりや國の風は猥りに成り行きけむ、魯の國の春秋といふ書に記せる年月のうちばかりにも、君を弑る事のいと多きを、それより後代々を逐ひて、いよゝ益猥になりもて行きたる事は、彼の國のふみに見えたるが如し、されば御歌の如く國風の穢れたる其の源は堯舜なれば、是等の人は彼の國の爲には八百萬代の罪人なるべし、同じ漢土の人の中にも見る所異なるきはは、堯舜をも下の心をばいぶかしみ顏にいへるも有りけり、そは唐の李白が詩に(上畧)雲憑々兮欲二吼怒一堯舜當レ之亦禪レ禹、君失レ臣兮龍爲レ魚、權歸レ臣兮鼠

變レ虎、或曰堯幽囚舜野死、九疑聯綿皆相似、重瞳孤墳竟何是、帝子泣兮綠雲閒（下略）竹書云、昔堯德衰爲ニ舜所一レ囚也云々亦同書云、舜囚堯後偃塞丹朱使レ不ニ與父相見一也、書舜典曲注曰舜卽レ位五十年、巡狩死ニ於蒼梧之野一而葬焉、又孔子は其の垣内の儒者は、たぐひなき神とも聖ともあがまへ尊べど呂氏春秋には、老聃、孔子、墨翟、關尹子、列子、陳駢、楊朱、孫臏、王廖、倪良此十人者皆天下之豪士也といへり、楊墨等は異端とて儒ども賤しむれど、同一人々のますらをと見たるにこそ、伯夷はらからは又御歌の如し、おのれが見聞く處、右の如くなれば、からは早く崩れたりといへる方に同じおもひなりしかども、片へは心凝りたる漢學にて諭し難しと思ひ、戯歌一首をよみて其の爭ひに加はらざりし其の歌

海士の刈る藻に住む蟲にたぐふ身もわれから猫の皮は剝ぎ見じ

今年閏霜月はつかあまり五日といふ日、人々に誘はれて、海士の刈る沖津深みる深水といへる山里の、名に高き瀧見になもおもひ立ちける時、

よめる歌どもの中

（四言）ぬもせにたづさはに居りむれ居り（四言）のどに遊ばくたづさはに居り（野上の原を見れば鶴多く群れ居り）

○海士の刈る云々　古今集戀典侍藤原直子朝臣「蜑の刈る藻に住む蟲のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」
○海士の刈る沖津深みる　深水といふ料。
○ぬもせに　野も狹に。
○のどに遊ばく　長閑に遊ぶ。

○千くら云々　祝詞六月晦大祓や日本書紀にある千座の置戸の意であらう。松を祓物として澤山の臺に載せて罪の贖とする意に見なしたのであらう。
○さき竹の　そがひの枕詞。
○そがひの里　後方の里。
○もとすゑにして　本末にして。雲を本、水泡を末と見る。
○咲きかはるべみ　咲きかはるべきによつて。
○小車の　とゞろくの枕詞用に置いた。
○まひはせむ　御禮をする意。
○まぐ　捜す。
○たなまたさかえ　指と指との間を裂かれ。

ことゝへど水はこたへず岩がねに枝さしたれし一つ松はも
足引の山川清しおほかたの松も千くらにかへまくおもほゆ
さき竹のそがひの里に咲く梅をつぐるに似たり山おろしの風
はるけくもおち來る瀧かみねの雲谷の水泡(みなわ)をもとすゑにして
水上を隱しし空の雲はれていよ〳〵高きみねの瀧かも
春たたば又も來て見む瀧の上の雲もさくらに咲きかはるべみ
小車のとゞろく瀧をあとにおきて山の八十隈かへりみぞする
物をしむ醜の茨にまひはせむかくせる硯只えしめてよ　（おきつる硯の石をまぐとて、冬枯の茨に、たなまたさかえつゝよめる）

# 長歌

正宗の刀磨き足らはしたり

さねさし　相摸(さがむ)の國に　もろ〳〵の　かぬちのおやと　人皆の　いひつがひける　正宗の　銘なを鐫(ほ)りおける　濱千鳥　千鳥の跡も　年を經て　それと定かに　見もわかず　うつでておきし　おぞ人の　手にし埋もれ　童べがほぐしにかへて　筍(たけのこ)を　掘りてありしを　かむ直日(なほび)　神の尊(みこと)　大直日(おほなほび)　神の尊の　御靈(みたま)もて　時しもあれば　かぎろひの　有るか無きかの　字(かた)をさへよみ明らめて　眞玉なす　磨(みが)きて見れば　電光(いなびかり)　驚くばかり　まさやかに燒刀(やきば)顯(あら)はれ　朝雲の　あやに棚引き　夕霧の　匂ふが如く　見も飽かぬ　つるぎとなりて　大丈夫(ますらを)の　身をし放たず　國衞(くにまも)る　寶となるも　造りおきしうましかぬちの　ねもごろに　心をこめし　驗(しるし)なるらし

詠霰歌一首并短歌一首

水鳥の　妻むかへねば　杯結(うきゆひ)を　可爲(すべ)も非(あら)ぬ　我が宿の　眞木(まき)の板戸(いたど)に　誰(たれ)人(びと)ぞ　つぶては打つと　おもほでり　いきどほろしく　出で見れば　（○一句脱カ）人間(ひと)の投(う)つ　石にはあらで　谷間吹(たにまふく)　嵐のむた　打ちきらし　銀杏(ら)（桃の實）のみばか

---

○さねさし　相模の枕詞。
○かぬち　鍛冶。
○いひつがひける　言ひ繼ぎける
○千鳥の跡　文字。
○うつでておきし　棄てて置いた
○おぞ人　愚人。
○ほぐし　火串か。
○かむ直日云々　神直毘神も大直毘神も禍を直す神。
○かぎろひの　有るか無きかの枕詞。

○うましかぬち　熟練な鍛冶。

○杯結　酒杯を取り交して永久の契りを誓ふこと。
○おもほでり　顏を赤くし。
○嵐のむた　嵐と共に。

り　大きなる　霰の降れる音にざりける

人皆云銀杏三つばかりの大さなりと依換桃

自註、此處の風俗に婚禮の夜、石打といふ事あれば、如此歌ふ

反　歌

奴がいふにこそ、

奴らが小笠の楯を射破りて霰の矢先身に痛し云ふ

自註、言囀ぐ唐かさのはじき金といふ物を懸けたるは、皆霰に打ち破らえぬ、しぼめてさしたるは然らず。

雲居遙けく歸る鶴を見てよめる

咲く花を　待ち侘びすさび　常世べに　歸る鶴村　千とせ經る　鳥と聞けるを　いかなれば　心短き　殊更に　此の火の國に　常鶴の　沼なけなくに　常世べに　歸る鶴村　おぞの鶴村

反　歌

一度はおぞしと譏る鶴村の雲井の翼羨しきろかも

磯田克直が大江門に行くとき、うまのはなむけによめる歌幷短歌

浪のよる　磯田のあそを　君が行く　あづまの國は　雲はなれ　遠くしあれ

○言囀ぐ　唐の枕詞。

○待ち侘びすさび　待ちあぐんで

○常世べ　常世國。蓬萊山。

○火の國　肥後國。

○浪のよる　磯の枕詞。

○あそ　朝臣。

○雲はなれ　雲居に遠く離れ。

ば　もろこしの　虎ちふ神に　飛ぶ鳥の　つばさ生ふし　乘る駒に　なすと
もいかで　たゞゆきて　たゞたちかへり　朝夕に　相語らはむ　そこ故に
かねてぞ思ふ　這ふ蔦の　別れむのちは　花見ても　意さぶしけむ　月みて
も　下こほしけむ　しかはあれど　神にしあらねば　玉鉾の　道の長手を
くりたゝね　たゝねいよせむ　たどきさへ　知らずて無詮　丈夫の　何か思
はむ　海路こそ　千重浪へなれ　眞山こそ　五百重かさなれ　春されば　花
なけなくに　秋の夜は　月なけなくに　月花を　君と見るがね　月花を　あ
ひもふ友と　君もみまさね

反歌

つゝみなくかへらむ君をしらとりのとば山松のまつがうれたき

河上健雄が家に小集ひて、梅風遠薰といふことをよめる歌并短歌

風のとの　遠皇の　神の世に　定め給ひし　男が弓端　女の手末の　外に
しも　えみしの國ゆ　高光る　日の吾が御子の　大御稜威を　かけてかしこ
み　大船の　船腹干さず　毎年に　棹楫おかず　貢せし　藥の中の　木實を
ば　國にもおふし　足引の　山にも植ゑて　みづえさし　茂くしなれば　沫
雪の　ちりかふ花を　奈良人は　酒にも浮べ　宮人は　折りてもかざし　新

○這ふ蔦の　わかれの枕詞。
○下こほしけむ　心中戀しく思ふであらう。
○玉鉾の　道の枕詞。
○くりたゝね　くりたゝみの誤り手繰り寄せて疊む。萬葉集卷十五「君が行く道の長手をくりたゝみ燒きほろぼさむ天の火もがも」
○たゝねいよせむ　疊み寄せる。
○たどき　方便。
○へなれども　隔れども。
○あひもふ友　相思ふ友なる我。
○つゝみなく　恙なく。
○しらとりの　とばの枕詞。とば山は大和國生駒郡。萬葉集卷四「白鳥の飛羽山松の待ちつゝぞあが戀ひ渡るこの月頃を」
○まつがうれたき　松が梢に待つが愛しを掛く。
○風のとの　遠の枕詞。
○男が弓端女の手末　日本書紀「始校二人民一更科二調役一此謂二男之弓弭之調、女之手末調一云々。」古事記にもある。男は弓矢で捕へた鳥獸を租税とし、女は手先で造つた絲や織物を租税とする意。
○高光る　日の御子の枕詞。
○かけて　いつも。
○大船の云々　古事記「自分以後年のはに船雙めて船腹乾さず柂檝乾さず天地のむたこゝはに仕へ奉らむ」始終貢の船を獻る意。
○沫雪　春の雪。
○奈良人は云々　萬葉集卷八「杯に梅の花浮べ思ふどち飲みての後は散りぬともよし」同卷十「百數の大宮人は暇あれや梅をかざしてこゝにつごへる」

玉の　いやとし〴〵に　みやびたる　花とはなりぬ　木立こそ　いはひもとほれ　匂ひこそ　櫻にしかね　卯の花の　色をし奪ひ　橘の　香をし爭ひ　村山の　み雪しけつゝ　櫻花　開き出でむほどの　うら弓弭　たゆまいつぎて　春風の　吹きのまに〳〵　玉簾の　遠近かけて　風流士の　眞袖にうつれ　はしきこの花

水無月の望の日、河上健雄が家に小集ひて、樹陰忘暑と云ふ題を、設けてよめる歌一首并短歌

いつはあれど　不二の高根の　み雪さへ　消ゆとふけふは　てれる日の　あつき極みぞ　暑き日の　いたきかぎりぞ　しかはあれど　いより立ちたる　いつかしが　こぬれをしげみ　しみさぶる　木立をふかみ　渡る日の　かげさへ見えず　梢より　吹きおろす風は　さや〳〵に　音をたてつゝ　蜻蛉羽の　袂にかよひ　萩が花　いまだも咲かず　初雁も　鳴きわたらねば　まだきにも　秋かも立つと　曇り夜の　おもひまどひて　夏草の　しなぶるしらに　堅庭の　割くらくしらに　蜩の　鳴きくらすなべ　此の日くらしつ

反歌

いくばくのかあを衣笠させりともこれの木陰に豈しかめやも

○いはひもとほれ　這ひ廻れども
○み雪しけつゝ　雪に比べつゝ。
○うら弓弭　本弓弭に對して末の弓弭。たゆまいつぎての枕詞として用ゐたのであらう。日本書紀には「うま人のたつることたてうさゆづるたゆまつがむにならへてもがも」とある。
○たゆまいつぎて　絕間を繼いで
○玉簾の　をの枕詞。
○いつはあれど　何時といふ中にも格別。
○いたきかぎり　甚しい極み。
○いより立ちたる云々　寄り立った嚴しい樫の梢が茂り。
○しみさぶる　茂く古びたる。
○蜻蛉羽の袂　夏の薄物。
○鳴きわたらねば　鳴き渡らぬに
○曇り夜の　まどひの枕詞。
○夏草の　しなぶるの枕詞。
○しなぶるしらに　萎え弱ることも知らず。
○かあを衣笠　青い衣笠。衣笠は絹や織物を張つた長柄の傘。

夷船の流れ來し時の歌

不知火　つくしの海は　時じく　浪はとよみ　うち羽ふり　風こそさわげ　其の浪の　しきよるむた　其の風の　荒ぶるなべ　えみしぶね　流れ來つゝも　皇國を　いたくかしこみ　浦人に　目みだにいまだ　合はせねば　千尋の海に　獺じもの　なばり入りぬれ　憑みつる　舟は奪はえ　よるべなみ　正體もとらえ　しゝじもの　いはひをろがみ　春鳥の　さひづらひけり　ぬば玉の　くろき夷　いぬじもの　おぞき夷　しが國に　幸くかへらば　さらにも　うたゝまゐきて　手童に　およびさゝえて　笑はゆな努

九月の二日、筑前國人、岡部春平、明日其の國に歸るとて、訪ひ來つるに、馬のはなむけに、よみておくりける歌并反歌

玉だれの　岡部のあそは　となみはる　さかしらごとを　あられふり　あなかましと　聾の　耳にもふれず　皇國の　大御手ぶりを　おむがしむ　やまと心し　入紐の　おやじかりけり　そこゆゑに　あひみるからに　はらからの　うるはしみつゝ　永き夜の　ふくらくしらに　月影の　かたぶくしらに　かたらへど　かたりもあかねば　けならべて　あひ見まほしと　こもりぬの　したにはもへど　鶉なく　ふりにしさとの　名に高き　いきの松島

○時じく　始終。
○打ち羽ふり　煽り煽る。
○しきよるむた　頻りに寄ると共に。
○獺じもの　獺のやうに。
○正體もとらえ　體自身もとらはれ。
○しゝじもの　いはひの枕詞。
○いはひをろがみ　這ひ拜み。
○春鳥の　さひづらひの枕詞。
○さひづらひけり　囀つた。解せないことをぺちやくゝ喋る。
○くろき夷　黒色人種。
○いぬじもの　おぞき夷の枕詞。
○おぞき夷　愚鈍の蠻人。
○うたゝまゐきて　愈參り來て。
○およびさゝえて　指をさゝれて
○玉だれの　をの枕詞。
○となみはる　さかの枕詞。
○さかしらごと　漢學を指す。
○あられふり　かしまの枕詞。
○おむがしむ　喜はしく思ふ。
○入紐の　おやじの枕詞。おやじは同じの意。
○うるはしみつゝ　親愛に感じつゝ。
○けならべて　日ならべて。幾日でも。
○こもりぬの　した心中の意の枕詞。
○鶉なく　ふりにし里の枕詞。萬葉巻四「鶉なく古りにし里と思へども何ぞも妹に逢ふよしもたき」
○いきの松島　筑前國早良郡。「まつ人の」といふ料。

まつ人の　あらくもしらず　ひもとかぬ　妹もぞあるらむ　しかれこそ　常(とこ)世(よ)の空ゆ　きぞの夜に　鳴きわたりつる　初鴈の　春をしまてと　しひてとどめね

反　歌

春まちてとこよを戀ふるかりがねにたぐはぬ君ぞすべもすべなき

賀茂翁のみたま祭に、落葉浮水といふ事をよめる歌幷反歌

秋たけて　冬來(ふゆき)むかへば　足曳の　荒山はゝそ　しがうれを　かしましきまで　山のあらし　い吹きさやがし　村雨の　落つる木の葉し　谷川の　瀧落(たぎち)にうかび　岩間くき　早瀬(はやせ)を流れ　水のむた　平瀬(ひらせ)行きたみ　うすらひの氷り渡れる　河淀(かはよど)に　しがらみなしつ　其の水の　よどむがごとく　もみぢ葉の　いよるが如く　もちどりの　かけてとゞめて　いすぎにし　こほしき人を　今もみてしが

短　歌

もみぢばをまきて寄せくるさゞら浪いやしく〳〵に昔こほしも

長月二十九日、鈴屋の大人のみ靈まつりに作る

あふみの　おき□まるくと　大宮に　おとなふ鈴　大殿に　ゆらぎし鈴　五(三言)

○あらくもしらず　あるかも知れない意。
○初鴈の云々　初鴈が春を待つて歸るやうに春を待つてからと强ひては止めない。
○とこよを戀ふ云々　常世の國に歸る鴈に准ずる事の出來ない君こそ言ひやうもなく歎かはしい。
○荒山はゝそしがうれを　荒山の柞のその梢を。
○瀧落　渦卷く流れ。
○岩間くき　岩間を潛り。
○水のむた　水と共に。
○平瀬　瀬が廣く、流れの穩かな所。
○行きたみ　行き廻り。
○うすらひ　薄氷。萬葉集卷二十「佐保川の氷り渡れるうすらひの薄き心を我が思はなくに」
○しがらみなしつ　からみつきつゝ。
○もちどりの　かけてとゞめての枕詞。
○いすぎにしこほしき人　過ぎにし戀しき人。眞淵を指す。
○さゞら浪　小波。これまでは序詞。
○いやしく〳〵に　愈益。

十鈴　ありとはきけど　其の鈴　ありとはいへど　かけまくも　あやにかしこし　神風の　伊勢の國なる　鈴の屋の　鈴のとをこそ　まさやかに　きかまくほれ　鈴はや　其の鈴はや　いづくにか　いかくりたる　いづくにか　いこもりたる　しゞくしろ　よみにかあらむ　日差方(ひさかた)の　天(あめ)にかあらむ　よみにあめに　あらむさきぐ\　いしかむと　したにはもへど　たづねむと　したにはもへど　足よゆく　馬はあれども　海よゆく　舟はあれども　船出せむ　海びも知らず　龍(たつ)のまも　道ゆきしらにこそ　山たづの　むかへはゆかね　鈴はや　其の鈴はや

水無月の十日あまり二日、山下素長が家に集ひて、遠山の夏の雲、といふことをよめる歌幷反歌

はなまだき　花にまがひて　うち渡す　峯に朝立ち　打向ふ　山に夕ごり　梓弓　春の心も　ともすれば　まとはしけらく　ありさまを　たなびきかへて　此のごろは　うつくし妻(づま)の　黛(まゆずみ)の　遠山(とほやま)の端(は)に　たくづぬの　眞白の虎の　眠るごと　雲こそ起れ　みな月の　照(て)る日(ひ)をいたみ　千町田(ちまちだ)の　田(た)の面(も)の泥(ひぢ)も　裂而有(さけたる)を　夕立雨(ゆふだちあめ)や　降り來ると　下喜ばひ　風流士(みやびを)の　花待ち渡る　思ひゆも　增れるものを　心なき　天津雲とて　千引磐(ちびきいは)の　動きもやら

○神風の　伊勢の枕詞。
○鈴のとをこそ云々　鈴の音をさやかに聞きたく思ふけれども。
○いかくりたる　隱れたる。
○しゞくしろ　よみ(黃泉)の枕詞
○いしかむと　い及かむと。追ひつかうと。
○足よゆく　足で歩いて行く。よはよりの意。古事記「淺小竹原腰なづむ虛空は行かず足よ行くな」
○海び　海邊。
○龍のま　龍馬。
○山たづの　むかへの枕詞。古事記「君が行きけ長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ」
○はなまだき　花の咲くには未だ早い。
○うち渡す　見渡す。
○夕ごり　夕方雲が凝り集まり。
○梓弓　春の枕詞。
○黛の　黛の如き。
○たくづぬの　白の枕詞。
○照る日をいたみ　照日が甚しいので。
○下喜ばひ　心中喜び。

ず　吹く風をなみ

反　歌

雲のゐる山の白虎嘯かば白雨ふらす風とならましものを

神無月の二十日、河喜多某して、今坂某が菊地主の歌乞へるまゝに

なまよみの　甲斐の荒駒　あら駒に　きする鞍岳　あまそゝり　そゝるを見れば　足曳の　其の山陰に　住みわたり　執り傳へたり　梓弓　おとに聞えし　益荒雄の　ありし昔を　くれのおも　思ひぞいづる　皇べに　あかき心を　いつくさし　つくしの國に　ことむけむ　ことはかりすと　三芳野のみね立ち隠す　雲の上ゆ　いくさぎみをし　こひまつり　ませまつらして家の風　ふかしし跡に　折こそあれ　秋の千草も　枯れはてて　しぐるゝ空ゆ　山おろし　たゞふき落ちて　袂寒しも

反　歌

鞍嶽にくもゐたなびく雲居ゆくくゝちの君の龍の馬はも

弓取草をよめる

置く霜の　しも野の原に　狩りくらし　明日とて歸る　狩人の　馬のしりへゆ　しましちふ　聲こそたてね　いとゞむる　物こそ有りけれ　そを何と

---

○なまよみの　甲斐の枕詞。
○甲斐の荒駒云々　日本書紀「ぬばたまの甲斐の黒駒鞍きせば命死なまし甲斐の黒駒」
○鞍岳　肥後國菊池郡。延元三年九月菊池武重と甲斐民部大輔重村との戰場。
○くれのおも　思ひの枕詞。
○いつくさし　盡し給ひ。
○ことむけむ　從はしめる。
○三芳野　肥後國飽託郡。
○いくさぎみ　軍將。
○秋の千草も云々　敵軍の敗滅をいふ。

○くゝちの君　菊池の君。

○しも野　霜野。肥後國鹿本郡。
○しましちふ云々　暫し待てといふ聲は立てないけれども。

かへり見すれば　うつそみの　人にはあらずて　下弭の　つらをに懸る　秋の花　露もみだれて　色もあやに　匂ふなりけり　あはれ〳〵　箭にやむ猪も　荒熊も　力競はば　たはやすく　むな手に捕らむ　さつをらも　握りもちたる　さつ弓を　強ひてし引かば　はさまれる　花も散るべく　うてなさへ　根さへたゆべみ　大丈夫も　思ひ惑ひて　みすゞ刈る　信濃の眞弓　捨てしより　弓取草と　名をや負布世之

阿蘇の君に硯を奉る弓削清英にかはりてよめる

纏向の　日代の宮に　天の下　しろしめしつる　風のとの　遠皇い　しきませる　御國こと〴〵　あま雲の　むか伏す限り　谷ぐゝの　さわたるきはみ　磯島の　崎々おちず　幸し　見し給はむの　御心を　八百日に懸けて　白縫　筑紫の浦や　纜を　解き放たして　八汐路の　海原遠く　い渡らし　御舟泊てゝし　島陰に　きこしめすべき　清水もがと　求かしし隨意に　久堅の　天のをち水　天降り著き　今の現に　玉かづら　絶ゆる事なく　涌き出でて　靈に奇しき　眞清水を　巖と二つ　おむがしみ　荒磯隱れの　玉柏　拾ひてましと　漁する　海士ならなくに　隼人の　薩摩のとより　よる浪に　袂もぬれて　かき貝に　足ふむしらに　取り得たる　硯にはあれど

○うつそみの　人の枕詞。
○つらを　弓弦。
○さつを　狩人。
○さつ弓　狩獵用の弓。萬葉集卷五「さつ弓を手握りもちて云々。」
○みすゞ刈る信濃の眞弓　萬葉集卷二「みすゞ刈る信濃の眞弓吾が引かばうま人さびて否といはむかも」
○纏向の日代の宮　大和國磯城郡古事記「大帶日子游斯呂和氣天皇纏向之日代宮にましまして天下治しめしき。」
○かぜのとの　遠の枕詞。
○遠皇い　いは接尾語。
○しきませる　治め給ふ。
○あま雲の云々　萬葉集卷五「天雲の向伏す極み谷ぐゝのさ渡るきはみ云々」
○崎々おちず　崎々まで殘す所なく。
○天のをち水　月にあるといふ若返りの水。
○玉かづら　絶ゆの枕詞。
○玉がしは　玉堅磐。堅い石。
○隼人の　薩摩の枕詞。
○かき貝に云々　牡蠣貝。古事記「夏草のあひねの濱のかき貝に足踏ますなあかして通れ」

見む人の　僞にしいへば　一向きに　惜しとももはず　貴人に　捧げまつれど　心には　飽かずぞ思ふ　其處をしも　物に譬へば　唐の　虎ちふ神を　管中ゆ　窺ふ如く　斑毛の　毛の文一つ　見そなはす　御心ちぞせむ　あはれあはれ　つかへまつらば　たくづぬの　白髪山も　片寄に　よりてをそゝれ　なびけ其の　二重のたむけ　阿蘇の君　あその高ねに　有りたたし　渡りのさ霧　神風に　い吹き拂はも　はろ〲に　名に負ふ島の　水島に　打向はして　見さけ麻須賀年

反歌

阿蘇の君國見かもせすぬざかの蜑しほやく煙心せよ努

蝦蟇をよめる

庭もせに　すうる建石　放れ石　雙べる中の　遣水の　流れにかよふ　蹈石の　苔むす下の　いさらけき　うつほの裏を　とこよべの　洞としめて　新玉の　年の八十年　住み渡る　くしき蟲あり　夏の夜の　さやけき月に　風流士の　あこがれ出でて　此の陰に　をし物あさり　彼の隈に　這ふ蟲まぎて　天地の　間にあらく　藥もよ　あしき物よも　とひさけず　風の戰がす　蜩の　もぬけの殼　活物の　動けばやがて　差向ひ　舌打鳴らし　かゞ

○白髪山　肥後國球磨郡。
○たむけ　峠。
○渡りのさ霧　あたりの霧。
○水島　肥後國菊池郡。
○ぬざか　野坂。肥後國葦北郡。
○すうる建石　据ゑ置いた石。
○放れ石　離れ置かせた石。
○いさらけきうつほ　小さなうつろ。
○をし物　食物。
○まぎて　捜して。
○とひさけず　論ぜず。
○蜩　かな〲蟬。
○かゞのめど　がぶ〲飲めど。

のめど　蜈蚣の口の　燒鎌の　刃にも掛らず　腰細の　すがるの尻の　刺すきばの　さすとも見えず　月の澄む　空に嘯き　うら安の　顏かき撫でて　朝な〳〵　おのが常世に　歸りふす　身にしあれども　僞りの　多かる世とて　まさな人　たぶれの葉に　欺かる　鹽を食しつゝ　あし物の　身や苦しむる　腹わたの　在りのこと〴〵　眞清水に　洗ひのぞきて　元の如　腹に納めぬ　あはれ〳〵　さかしき蟲や　神世より　吾が皇國の　習はしの　腹の中まで　みそぎして　むかしき神や　から鹽の　辛き世いとひ　空賢のそむ腸　穢しと　吐きて洗ひて　いかばかり　心清らに　澄みをるらむ

温克の杯の故よしを顯はし、かねて心靜延齡といふことをよめる

昔我が　釣りて放ちし　白龍の　行方をしらに　鎌倉の　見越の岬の　盤崩の　悔ゆとはなしに　玉筐　二度つりて　つれ〴〵の　なぐさにせなと　くま川の　千尋の潭に　垂るゝ絲の　空しからずて　廣鰭の　魚の力の　ひこ鬪らひ　此方彼方と　河も狹に　狂ひもとほり　岸陰に　騒ぐを見れば　いくばくの　年經ぬらむか　と思ひつる　鼈なりき　あはれ〳〵　何はあれども　鱸にも　鯉にも勝る　河のさち　得つと喜び　折こそあれ　わが好き友の　辛川の　よの長人の　壽の　うたげの庭の　御肴に　是れをだにとて

○燒鎌の　火で燒いて鍛へた鎌の如く此のあたりの文句は祝詞の六月晦大祓に負ふ所が多い。
○腰細の　すがるの枕詞。
○刺すきばの、刺す針の如く。
○うら安の顏　蝦蟇の泰然たる顏をいふ。
○まさな人　善くない人。
○たぶれの葉　狂れの言葉。
○あし物　毒のある物。
○吾が皇國の云々　祝詞に現はれたる我が民俗の禊の習慣をいふ。
○むかしき　喜ばしい。
○から鹽の　辛きの枕詞。から鹽は潮水。
○そむ腸　染む腸。

○鎌倉の見越の岬の磐崩の　悔ゆの序詞。
○玉筐　ふたの枕詞。
○なぐさ　慰。
○くま川　球磨川。肥後國球磨郡
○廣鰭の魚　大魚。
○ひこ鬪らひ　引張り。
○河のさち　河の獲物。

おくりつる　其の脊は遂に　面隱す　□にしかへて　常富廼　富の翁の　肝
向ふ　心靜けく　春秋に　とめるをほがむ　うみの子の　集ふ筵の　中に置
きて　豐神酒酌ます　玉うきと　なるぞ奇しき　しゝ自物　膝折り伏して
さもらへる　もろ人を努　大海を　渡る鯨魚の　いさましく　しが潮飲む
有樣の　あ□すを□□□　千代も八千代も

又

君が身の長き齢をもろ人のかきよむさへぞ靜心なき

神の道を說き給へることをよろこぼひてよめる歌幷短歌

王當つみの　沖津白玉　たま〳〵も　國のあやなる　皇國に　生まれ出でつ
つ　あらたまの　年の八千年　しき玉の　醜の敎へに　まじこりて　只一む
きに　ながこのむ　のみのすさびに　しが魂の　靈しきしらに　現身の　手
業た忘れ　曇夜の　思ひ惑ひて　ありぎぬの　あり經る民を　磯浪の　うつ
てもおかず　言擧せぬ　御國にはあれど　言擧せむ　時此の時と　ますらを
の　心振起し　天に座す　神の命の　命もち　あだし敎へを　いむべらが
齋斧とりて　たは易く　物を伐りなす　首槌い　石つゝいもち　島の子を
くだくが如く　葛城の　一言主の　一言に　のり□して　懸けまくは　畏け

○面隱す□にしかへて　□は「まり（鋺）」であらう。大きい杯（水や酒を盛る器）に代用して。
○肝向ふ　心の枕詞。
○ほがむ　祝はむ。
○うみの子　子孫。
○玉うき　玉盞。
○渡る鯨魚の云々　鯨飲をいふ。
○かきよむ　數へる。
○王當つみの沖津白玉　たま〳〵もの序詞。
○國のあやなる皇國　あやは文で世界各國の中最も勝れた日本國の意。
○しき玉の醜の敎へ　醜魂の醜の敎へ。佛敎を罵つた語。
○まじこりて　引き入れられて。
○ながこのむ　佛を祈禱し。
○のみのすさびに　餘りに祈禱に熱中する爲に。
○現身の手業云々　浮世の仕事を忘却し。
○曇夜の　惑ひの枕詞。
○ありぎぬの　ありの枕詞。
○あり經る民　生ける人々。
○磯浪の云々　磯浪の打つ如く打捨ててもおけず。
○言擧せぬ云々　萬葉集卷十三「葦原の瑞穗の國は神ながら言擧せぬ國然れども言擧ぞわがする云々。」
○いむべらが云々　祝詞大殿祭「齋部の齋斧を以ちて伐り採りて云云。」齋部の氏人が造る淸淨な斧。
○首槌い云々　古事記「久米の子が頭椎い石椎いもち擊ちてしやまむ云々。」
○葛城の一言ぬし　大和國葛城山に住む一言主神。

れども　皇神の　御政事の　廣道の　道の大道に　導けよ君

反歌

葎刈る利鎌のかまのやき鎌のつかのまも見む魂あひの友

龜子にほたり取らしめて、龜の背の杯を傾けつゝ、作歌幷短歌二首幷古振一首

ふりし世の　小野の篁　篁の　遠き國べに　さすらひて　歌ひし歌の　我もまた　松江の里に　衰へて　身さへまどしく　蘆北の　野坂の浦に　世を渡る　蜑にはあらねど　朝にけに　汐なれ衣　縫絲の　切れたる小笠　取り著つゝ　漁しすれば　心あひの　友のいへらく　汝が著たる　衣はあれど　汝がけせる　笠はあれども　雨ふらば　とほりてぬれむ　雪零らば　たもと寒けむ　こしよろし　笠に著てよと　ことさへぐ　もろこし人の　寶とて　持ち渡りつゝ　龜の背を　我にあたへぬ　うれしとは　思ふものから　隱り沼の　下に思はく　梓弓　弓末の末の　末の世に　いやつぎ〳〵の　うみの子ら　わが遠つ祖　いかなれば　昔の人の　いひおきし　猿にしも似て　酒のまず　さかしらはせし　あたら此の　あだし寶と　いはむ時　天翔りても　言ひ解かむ　爲しなければ　打霧らし　雨はふるとも　よしゑやし　雪はふ

○葎刈る利鎌のかまのやき鎌の　序詞。祝詞六月晦大祓「燒鎌の敏鎌以ちて云々。」
○魂あひの友　心のよくあふ人
○ほたり　丈の高い罇。罇は後世の德利に當る。
○小野の篁云々　嵯峨上皇の時遣唐使の事柄で隱岐國に流された。途中謫行吟七十韻を作つたことや「わたの原八十島云々。」の歌は人の知る所。
○松江　肥後國八代郡。
○まどしく　貧しく。
○蘆北の野坂の浦　肥後國葦北郡
○汐なれ衣　汐に馴れ染んだ衣。
○けせる　著せる。
○こしよろし　これはよく似合ふ
○ことさへぐ　もろこしの枕詞。
○隱り沼の　下の枕詞。
○梓弓　末の枕詞。
○昔の人の云々　萬葉集卷三大伴旅人「あなみにくさかしらをすと酒飲まぬ人をよく見は猿にかも似む」
○あだし寶　無用の寶。

○笠こしせずは　笠こするよりは
○八汐路の云々　古事記「荒汐の汐の八百道の八汐路の汐の八百會に坐す速開都比咩といふ神持ちかがのみてむ云々。」
○鹿子じもの　ひとりの枕詞。
○大まり　大鋺。
○あせ　吾兄。
○うきのたりうき　酒杯の獐酒杯
○ほたりとる子ら　古事記「臣のをとめ秀罇取らすも秀罇取り堅く取らせした堅くやかたく取らせ秀罇取らす子。」
○同じ名負へる　鹿子と龜とであるからいふ。
○おれ　おのれ。
○したかたく　しつかり堅く。
○ませまつらむ　坐させ奉らむ。御相手にしようの意。
○樫の實の　ひとりの枕詞。
○をさむ　食さむ。
○言をこそ　言にこその意。
○人とへ　人と言へ。
○鴈金の　ゆきたむの枕詞。
○ゆきたむ山　行きめぐれる山。
○三栗の　中の枕詞。
○さき竹の　そがひにの枕詞。

るとも　よしゑやし　笠とせずは　八汐路の　和田の勇魚の　荒汐を　かがのむ如く　豐みきを　如此のむがね　杯にせむ

反歌

大伴の旅人の君しましまさばなど鹿子じものひとりのむべき

天の川いかに流れて龜が取るほたりの酒の瀧とおつらむ

又

面隱す　大まりはや　大まりの　まりのおやなる　龜の背を　（添句）あせを　龜の背の　うきのたりうきを　（添句）あはれ　豐みきの　ほたりとる子ら　誰よけむ　たれはあれども　入紐の　同じ名負へる　龜よけむ　（添句）おれ　したかたく　ほたりとらへ　（添句）ゆめ　誰をかも　ませまつらむ　大伴の　旅人の君　（添句）あはれ　此の君は　現にまさず　樫の實の　ひとりかをさむ　言をこそ　むかしの人とへ　鴈金の　ゆきたむ山を　三栗の　中におき　さき竹の　そがひに酒のむ　きさの翁　あはれ

大石眞麿が家につどひて、歌よみける夜、時鳥の聲を聞きてよめる歌并短歌

足曳の　山ほとゝぎす　あら玉の　はや年のはに　鹿子じもの　ひとり聞き

つゝ　友垣を　もとなや戀ひむ　今宵(こよひ)のみ　をちかへりても　千鬼(ちびき)なす　おいしのあそが　室(むろ)ぬちに　いもがうむをの　いつぎ／＼　聲聞えこそ　夏の夜くだち

みじかうた

ほとゝぎすなれもたぐひぞ風流士のまとゐのむしろ鳴きとゆめこそ

初秋風をよめる

盗人(ぬすびと)の　ゑれる穴(あな)ゆや　通ひきて　うまいのゆめを　もの自(じ)もの　おどろかせれば　しき妙の　枕おしそけ　憎(にく)しとて　とらむとすれど　闇(やみ)の中に　むざねはなくて　庭の面の　荻(をぎ)こそさやげ　うべな／＼　そも目に見えぬ　秋の初風

楠公父子櫻井の驛にて訣別せる畫に

敷島の　日本心に　たぐふてふ　櫻の花は　こも枕　高きいやしき　八千年の　むかしも今も　おしなべて　諸(うべ)こそめづれ　うち日さす　都はあれど　野に山に　いづくはあれど　淑人(よきひと)の　よく見てよしと　稱(たゝ)へけむ　芳野の花の　名どころの　おやにぞ有るべき　然れこそ　遠皇(とほすめらぎ)も　菜摘川(なつみがは)　岸打つ波の　折々の　いでまし所　しめまして　遊び給へれ　名も高き　瀧の宮處(みやこ)

---

○をちかへりても　繰返しても。
○千鬼なす　おいし（大石）の枕詞。
○室ぬち　室内。
○いもがうむをの　妹が績む苧の如く。
○いつぎ／＼云々　夏の夜ふけに引きつゞいて鳴く聲が聞えるやうに願はしい。
○なれもたぐひぞ　汝も我等と同じ仲間だ。
○鳴きとゆめこそ　鳴きひゞくことを希望する。
○盗人の云々　萬葉集卷十二「門立てゝ戸はさせれども盗人のゑりたる穴ゆ入りて見えけむ」
○うまいのゆめ　安眠の夢。
○もの自もの　人のやうに。
○しき妙の　秋の枕詞。
○おしそけ　おし退け。
○むざね　本體。
○そも目に見えぬ云々　古今集秋藤原敏行朝臣「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」
○敷島の　大和の枕詞。
○敷島の日本心　本居宣長「敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花」
○こも枕　たかの枕詞。
○淑人のよく見て云々　萬葉集卷一「淑人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見」
○淑人　貴人或は賢人の意。
○菜摘川　吉野郡。
○いでまし所しめまして　行幸處を占められて。
○瀧の宮處　萬葉集卷一の幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌の中に「此の川の絶ゆる事なく此の山のいや高からし石走る瀧のみやこは見れど飽かぬかも」

に　春されば　櫻がさねの　朝霞　八重立渡り　夕雲の　にほひとゝほし
しみたてる　竝木櫻　老櫻　枯ればやがて　若櫻　かつ生ひつがひ　つがの
木の　いや繼々に　益人の　ます〳〵花の　繁山と　なれる上に　新玉の
年の五百年　をちつかた　楠の公　大君の　御代に事ふる　をみの子の　醜
の御楯の　いそしびの　事闘りおちず　菅のねの　ねもころ〴〵も　謫しつ
つ　わく子の君を　はろ〴〵と　千本の花の　三芳野に　かひのよろしき
櫻井の　驛の道ゆ　古郷に　かへし給ひし　御教への　驗はやがて　御垣衛
る　櫻と咲き出　名におへる　たのむの鴈も　大方は　北に歸れど　楠の
心の櫻　うつろはぬ　花の操は　呉竹の　世をみよかけて　匂はせし　うま
し花のおや　久堅の　雲居の櫻　色添へし　芳野の花は　現世に　木種傳は
り　年のはに　咲きて散れれば　年毎に　在りし大宮の　苔の上の　芥とな
りて　朽ちぬれど　君に仕ふる　萬代の　鑑とながく　君が名は　岩切り融
し　ゆく瀧の　とゞろ〳〵と　轟かずやは

如此いふは安政五年彌生の二十日

長月二十一日、江口高廉が家の小集兼題　曉別戀

○櫻がさねの朝霞　櫻襲は表白裏赤花であるから、花の上に霞の渡つてゐるのをかく見たてた。
○匂ひとゝほし　美しさと相通ひ
○しみたてる　茂り立てる。
○かつ生ひつがひ　一方から生えつぎ。
○つがの木の　つぎ〳〵の枕詞。
○益人の　人間の如く。人間は蕃えるからます〳〵に掛る。
○をちつかた　遠つ方。昔。
○をみの子　臣子であらう。
○醜の御楯　我が身を帝の爲に敵を防ぐ御楯として奉ること。
○いそしび　いそしみと同じく、忠實に働くこと。
○事闘りおちず　手落ちなく事闘り。
○菅のねの　ねもころの枕詞。
○わく子の君　若子の君。正行。
○御垣衛る　宮廷即ち天皇を守る
○名におへる云々　伊勢物語「三吉野の田の面の鴈もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる」古今集羇旅讀人不知「北へ行く鴈ぞ鳴くなる連れて來し數は足らでぞ歸るべらなる」北は北朝を指す。
○呉竹の　よの枕詞。
○雲居の櫻　吉野行宮にあつた櫻の名。
○岩切り融し云々　古今集戀讀人不知「吉野川岩切り通し行く水の音には立てじ戀ひはしぬとも」

○よさ　夜。
○績苧如　績苧の如く長く。
○時もりとむる　時間を見張つて引き留める。
○亂屋　鷄小屋の意であらう。
○わが宿のひつにさらさじ　古義には「家にありし櫃に釘さし藏めてし」とある。

---

餘り奇に過ぎ候歌に付、諺解を加へ申候

たまくも　相見るよさの　秋の夜は　千夜も五百夜も　績苧如(うみをなす)　雖欲繼(つがまくほれど)　ふけすぐる　時もりとむる　關(せき)をなみ(無サニ也)　言葉のこりて　はふつたの(冠辭也)　わかれむとては　かりごもの(冠辭)　思ひみだれ　亂屋の　かけさへ(副サヘハモニ同ジ)鳴けば(期ノ來ル也)　今はとて　心ふり起し　身にやどり　戀の奴を（萬葉、わが宿のひつにさらさじ隱せりし戀の奴のつかみかゝりて）つむがり(利劒也)の（つむがりの太刀、古事記竝日本紀にも見えたり、太刀の切味のことにて、今も物のよくきるゝをいやりときるると云ふいやりといふ言葉の元也）太刀もてたちて(決斷也)　たち出れど(難退)　將思へらく(らくハルノノベ也)　太刀が緒を　堅めていなば(佩付ケテ歸ラバ也)　玉纒の(太刀ノ飾也)　玉の光に　あかぼしの(夜明ノ明星也)　影もうつろひ(移り也ろひハりノ延)　在明の　月もかゞやき　人もこそ　目に立ちて見め　こまにしき(紐ノ冠辭也高麗錦也)　紐の　片へに(へハ方ニテ片々ト云フコト也)　なぞらへて　是れのをだちを(をハ發詞ニ添ヘタル也只太刀ノコト也)　あすの夜の　ちぎりぐさ(契種)　とし(此レハ助辭也)　取り置きてまたね(願意也)

右の一首は元伊勢物語の歌に、「秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉のこりて鳥や鳴くらむ」と有ると、萬葉集の旋頭歌に、「こまにしき紐の片へぞ牀に落ちにけるあすの夜し來なむ」といはば取り置きて待たむとあると、二首を本歌に取りてよめるなり

言語絶断の□□也、畫を公家様に書きては、一向面白く無之、身を放
さぬ筈の太刀を、女に渡し置き懸らざる様に言なすが趣ある也

まろ腰のをのことなりて曉の月星厭ふ戀もするかも

蘆のまろ屋のまろに同じ、今俗言にも丸腰といふ、何も腰のあたりに
無き也、御一笑

月前言志

此の秋は　最中の月も　かき曇り　見ぬを恨みの　友どち　計らひけらく　秋はいにて　人めも草も　枯れぬるを　わびてあるらむ　山里の　朋許訊はむ　しかよけむ　いざてふまにま　朝鳥の　直思ひ立ち　定めなき　時雨の雲も　よしゑやし　譬へ降るとも　よしゑやし　雲居はすらむ　龍の馬に　乘りてしありと　大ふねの　思ひ憑みて　鳰鳥の　馬なべ行けば　程もなく　しるしの杉に　馳せ著きて　一村松の　下庵のあるじを問へば　其の人も　吾ら二人を　めづらしみ　見ざりし秋の　月影を　仰ぐとばかり　よろこほひ　常は鎖せる　眞木の戸を、押明けみればちりのこる　紅葉のにほひ　霜枯の　草のやつれも　なか〱に　した何恰く　歌うたひ　遊べる程に　冬の日の　暮れ果てぬれば　今はとて　わかる

○最中の月云々　八月十五夜と九月十三夜との月。
○人めも草も云々　古今集冬源宗于朝臣「山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば」
○直思ひ立ち　只管思ひ立ち。
○定めなき時雨　後撰集冬讀人不知「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめなりける」
○大ふねの　おもひ憑みの枕詞。
○鳰鳥の　なべ（並べの意）の枕詞。
○しるしの杉　「三輪の山しるしの杉」とある意でなくて、目じるしの杉の意であらう。

とすれど　あるじさへ　語らひ飽かず　別れ路を　送りてましと　咲栗(さゑくり)の　三人ならばひ　山陰ゆ　打出で見れば　山本の　里をのみこそ　霧籠めて　さやにも見えね　割竹(さきたけ)の　そがひの山の　山の端に　いさよふ月し　やゝややに　亦昇りぬれ　過ぎにし　名におふ月の　曇夜の　ありし恨みも　朝霜の　あとなく解(と)けて　まそ鏡　限なき月に　馬のあゆみ　押して停めて　打向ひ　言擧しけらく　君たちの　乘らせる手馴　あるは驪(くろうま)　或は赤駒　おのがのは　虎ちふ神の　もろこしの　獸に似たる　斑毛の　醜毛(しこけ)にあれど　そも〱　のれる主は　敷島の　日本魂　入紐の　同じ心に　此の月の　明きが如く　事しあらば　火をも水をも　問ひさけず　國に報いて　海山の　尸(へ)にみづき　草もむせ　雪にしぼまぬ　瑞枝さす　松の操は　撓めじと　あげつらへれば　おのも〱　いふにや及ぶ　諾(うべ)とこたへつ

ちか言の　あるじや誰と人問はば此の月にこそおよびさし天兎(てめ)

三人馬に騎りて山上の月を見て居る繪を作者自ら描きて、それに賛した長歌

おのれ、心あひの友どち、六人(むたり)山下素長、幸恆立、幸恆久、大矢野種高、江口高廉、己　今年のむ月より始(はじ)めて日に〱長き短きに限らず片歌(かたうた)にまれ必ずよまむとの契りを

---

○咲栗の　三の枕詞。
○割竹の　そがひの枕詞。
○手馴　手馴の駒。
○火をも水をも云々　萬葉集卷九「水に入り火にも入らむと云々。」
○海山の尸に云々　萬葉集卷十八「海行かばみづく屍山行かば草むす屍大君のへにこそ死なめ云々。」尸はほとり。みづきは水につかる草もむせは草が生えて屍を被うてもの意。
○あげつらへれば　論ずれば。
○ちか言　誓言。
○片歌　五七七の三句を以て成る歌。

なしつゝ競ひよめり、今此の五月の朔日より、七日に七つの喜、怒、哀、惡、愛、樂、慾。心をよめる中に、惡の歌おのづから、病人を罵り給ふ御歌に似たる所あれば、そをやがて和歌にあつ

惡

空賢の　言も行狀も　よき人と　人には見えて　飛驒人の　打つ墨繩の　眞直なる　人はしりぞけ　奈良山の　兒の手柏の　二面の　ねぢけ人のみ　親しびて　語合ひ睦ぶ　癡人を　わがもふ隨意に　なすべくは　其奴が面に　つばきて　首槌いもち　丈夫の　いづの雄たけび　彌たけび　打ちてましもの　惡きそやつを

霜月の望をおとつ日といふ日、能勢某が家に醸みたる酒を、けふしも酌みそむるとて、思ふどち打ちつどひて、一日呑みくらしつるに、あるじは暮まだき醉ひ伏したりしかば、呑み勝ちたる心地して、其の明の朝、其の主に書きておくる誇歌一首幷短歌

此の宿の　泉の壺に　家君の　かよわきかたの　弱肩に　太玉襷　とりかけて　醸成酒の　新しぼり　今日斟み初むる　まどゐして　誰はあれども　瑞枝さす　松崎のあそ　西のぬし　眞震らをさへ　中垣の　隔てぬ友と　猪じ

---

○飛驒人の云々　萬葉集卷十二「かにかくに物は思はず飛驒人の打つ墨繩のたゞ一道に」

○奈良山の兒手柏の二面の　序詞　萬葉集卷十六「奈良人の兒手柏のふたおもにかにもかくにもねぢけ人のさも」大和の奈良山にある側柏(常綠灌木)の葉が兩面あるやうに表裏のある佞人。

○つばきて　唾をはきかけて。

○いづの雄たけび　いつは稜威。勢ひの烈しく猛く振舞。

○弱肩に云々　祝詞祈年祭「忌部の弱肩に太襷取りかけて云々。」

○中垣の　隔ての緣語。

○三栗の　なかの枕詞。
○勇くはし　鯨の枕詞。
○鯨のもころ　鯨の如く。
○呑のすさびに　愈呑むので。
○呑みふさへつゝ　相當に呑みつゝ。
○おふけなくも云々　其の身を省みず無禮な要求。
○かゝぶり　被り。
○其の儲　其の任。
○蘆垣の　ふりの枕詞。萬葉集卷六「おしてる難波の國は葦垣の古りにし里云々。」難波の國をいふ。

---

もの　膝折り伏せて　埋火の　炭火搔起し　三栗の　なかに圍み居　勇くはし　鯨のもころ　呑む酒の　呑みのすさびに　主さへ　呑みふさへつゝ　時も今　伏木に隱る　荒熊の　あらおもしろの　冬の宴や

反歌

春さらば雪の伏木をいでよ君さらに仙境のみきを給らむ

今年水無月の始め、遠き國べのえみしども、大船四艘に取乘り、小舟はいくら貯へて、おふけなくも、卯々しきねぎ事をまをすとて、相摸國の海べに、參來つるまゝに、公の仰せごとをかゝぶり給ひて、吾が君は若し其のえみしども御國をしも、窺ひ奪ひ奉らむの、きたなき心あるべきも知るべからねば、其の儲に御軍をなも出したまひにける、さてまけの軍人の中なる、兒島某、神足某、又眞鍋、正木なにどが、其の事を蘆垣のふりにし里に、いひ送りつる書とて、繼々に傳へうつせるを見るに、吾が肥の御國の軍人達、しかすがに西の國べのものゝふのならひとて、國々大方の軍だちに勝れて、勇競へりしさま、こゝろのなして、今まのあたり見るが如し、さればかけてまをさむも、いと〳〵畏けれど、此の度の御軍たちあだにあひて、矢を放ち、戈を交ふるには、至らぬものか

ら、仇おのづから退きて、細戈千足國の名におひし此の御國の號空しからず、みいづを輝かし給ふにこそ、はたよろづに御掟などの、正しくおはしまし、物事嚴かに類なかりしことは、見る人の、見るまゝを語れば、聞く人のいや繼々に、語りつがひて、大江戸の人は更なり、何れの國々にも、おしなべてたゝへまつる由なり、そは今我が住む、薩北の驛路にありがよふ、隼人の薩摩人らが、親しく眞震らに口づから語れるにて知れり、さればおのれらが如き、翁さびたる身さへ、庭雀躍り騰るばかりよろこぼしきに、又其のえみしども、しが國にかへるさにやありつらむ、紀の國熊野の沖にて、雷神に船を碎かえ、そこねたる船どもを捨てて、にげいにしことを、押照るや浪速なる、田代某がこゝちよしとて、其の事を淺茅原、つばら〳〵に書き綴りて、おくりたりといふをも、此の頃合はせ見たりき、誰かは心地よからざらむ、かれこゝに眞震ら思へらく、此のえみしども、元よりきたなき心あらば、天神地祇いかでゆるし給はむ、そは塞にもし給ふべけれど、さるきはには至らねば、まづゐやなかりつるを、聊か懲し戒め給ひしにやとおぼえて、如此なもうたふ

○細戈千足國　日本國の美稱。細戈はちの枕詞。

○ありがよふ　馴れ通ふ。

○よろこぼしき　喜ばしき。

○しが國　其の國。

○そこねたる船　損はれた船。

○淺茅原　つはら〳〵にの枕詞。

○ゐやなかりつる　無禮であつたこと。

八百萬　千軍神の　神の祖　國の祖とも　天つ水　仰ぎ尊ぶ　かむろぎの　神の尊と　かむろみの　神の尊し　鳰どりの　相雙ばして　國うまし　神たちうまし　可怜國　御國の號さへ　蘆原の　瑞穂の御國　細し鉾　千足るの　國と　負ひしより　天地の共　高光る　日の吾が御子の　食す國と　定め給ひし　神代より　よゝの朝廷の　廣鉾の　みいづのほどを　外國の　遠き境に　輝かし　今のをつゝに　大江門の　大將軍　望月の　あかき御心　水と澄み　船とうかぶに　皇への　御干城とならし　事しあらば　つかへまつらむ　千萬の　軍貯ひ　眞木柱　ふとしきたてて　玉椿　八千代の春の　しが花の　いてりさかはえ　しが葉なす　廣ごり居坐せる　みたかきの　近き程をも　白浪の　浦賀の海に　船泊てて　願事まをす　夷ども　しがならはしの　えみしさび　敬さへしらに　火もてやる　車を添ふる　飛鳥の　足速の船を　御宛しの　限りを背き　内津海に　已にこぎれて　ほと〳〵に　軍もすべく　見えつるを　命蒙り　吾が君の　むけ給はしし　軍人　諸こそいさめ　あた守る　筑紫の國の　物部の　習ひにしあれば　やゝ〳〵に　近づくえみし　たむかはば　火をも水をも　とひさけず　言擧せすて　若蘆の　とりひしがむと　濱もせに　吾をも忘れ　浦もせに　身も棚しらず　山たづ

○天つ水　仰ぎの枕詞。
○かむろぎの云々　祝詞新年祭「高天原に神留りに坐す皇睦神漏伎命神漏彌命以ちて天社國社と稱辭竟へ奉る云々。」
○鳰どりの　雙びの枕詞。
○可怜國　よい國。
○高光る　日の吾が御子の枕詞。
○廣鉾　丈の長い矛。
○大江門　大江戸。

・

○玉椿八千代の春　莊子逍遙遊「上古有二大椿者一以二八千歳一爲レ春以二八千歳一爲レ秋。」
○いてりさかはえ　照り榮え。
○しが葉なす　其の葉の如く。
○みたかき　御高城。江戸城。
○白波の　浦の枕詞用としたであらう。
○火もてやる云々　蒸氣船。
○こぎれて　漕ぎ入れて。
○ほと〳〵に　殆んど。
○あた守る　筑紫の枕詞。
○物部　武士。
○若蘆の　とりひしがむの枕詞。
○山たづの　迎への枕詞。

○山の井の　汲みの枕詞。
○なつぬ行く云々　萬葉集卷四「夏野行くを鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや」
○猿島　相模國三浦郡。
○火矢のと豐め　大砲を轟かし。
○さねさし　相模の枕詞。
○朝びらき云々　萬葉集卷三「世の中を何に譬へむ朝びらき漕ぎにし船の跡なきがごと」
○あさもよし　紀の枕詞。
○手玉もゆらに　手の飾りにつけた玉もゆらぐばかりに。萬葉集卷十「足玉も手珠もゆらに織る機を君がみけしに縫ひあへむかも」
○八種坐す神　古事記にあつて、大雷、火雷、黑雷、拆雷、若雷、土雷、鳴雷、伏雷。
○あもり　天から降り。
○碎けはらゝぎ　碎け散り。
○いたかしこびて　甚しく恐れて
○しが伴　其の仲間。
○うつて　打ち捨て。

の迎へ出づれば　船競ふ　蠻が伴も　敷島の　日本魂　いかり猪の　かへり見もせぬ　ひとむきの　したのこゝろを　山の井の　汲みてや知りし　なつぬ行く　小鹿の角の　つかのまに　炎の船を　こぎかへし　沖べを遠く　その島の　島廻づたひに　猿島の　島根がくれに　かへるさは　言だにとはず　徒らに　火矢のと豐め　さねさし　相摸の海從　朝びらき　漕ぎ行く隨意　あさもよし　紀の海づらの　汐曇り　立ちかさなれる　浪の隈　熊野の沖を　眞帆張りて　わたらふ時し　あまそゝる　遠の高根ゆ　見るが内に　雲立ち覆ひ　機津女の　手玉もゆらに　織る機の　はたにはあらぬ　霹靂なりはためきて　八種坐す　神の中にも　裂雷　物にたとへば　とりの子を　くぶつゝいもち　打つよりも　速き光の　たゞあもり　千尋の海の　千尋潛き　底つ岩根に　とほるまで　落ち懸りぬれ（ばを略く格）薄冰の　碎けはらゝぎ　伴へる　小船ちりとび　こがらしの　風にたゞよふ　木の葉如　浮び流るれ（ばを略く格）えみしども　いたかしこびて　しが伴の　みづく屍も　さきたけの　背向にうつて　逃げゆけば　風さへなぎて　夕立の　雲は遙けく　遠ざかり　庭も靜けき　青海原　八重の汐路に　船影も無之

反歌

ゐやしらぬこゝろこらしに吾が國の裂雷やたはわざはせし

夕立の跡さりげなき紀の海にえみしが捨てし舟ひりふ見ゆ

又

海路にも守る關おかねあさもよし木の關守がたつか弓たつ足もなきえみしらをなどかとゞめぬ愚鈍の關守

又枯野の船の古事を思ひいでて

紀の海の海べに無用の濱もがもすまびと集へえみしらが捨てし小舟を忌部等がいむをのい持ち打碎き薪となして汐やかむ鹽のから鹽の唐木の薪しが餘り琴に造らむ七郷に響き渡らむ小琴つくらむ

又古ぶり

神長柄靈に奇しき皇國の尊き白土御巖稜の畏き白土蠻夷らが食物乞はく狗白物をうちふき水乞はくゆふべ貝ふく馬白物うまやのあがきなれ／＼の狎のすさびを神もこそ面火照るらめ熊野の海沖のと中の天降らししいづのあもりつむがりの太刀のみたまくぶつゝの勢ひなす八種の神のおやあせをあゝしやを醜のえみ

---

○ゐやしらぬ云々　禮儀を知らぬ心を懲らしてやるために。
○たはわざ　戯事。
○夕立の云々　新古今集夏賴政「庭の面はまだ乾かぬに夕立の空さりげなく澄める月かな」
○ひりふ　拾ふ。
○たつか弓　手束弓。たつとかゝる。壬生集「引きとめよ紀の關守が手束弓春の別れもたちやかへると」
○枯野の船　日本書紀應神天皇の卷及び古事記下卷に「兎寸河の西に一高樹有りけり……故この樹を切りて船に作れる……この船の破壞れたるを以て鹽を燒き、其の燒け遺れる木を取りて琴に作りたりしに其の音七里に響えたりき云云。」
○すまびと　須磨人。
○忌部等が云々　祝詞大殿祭「今奥山の大峽小峽に立てる木を齋部の齋斧を以ちて伐り採りて云々。」
○唐木　夷の船であるからいふ。
○七郷云々　古事記の文に依る。
○をうちふき　尾を打ち振る。
○面火照る　慣る。
○と中　海中。
○いづのあもり　稜威の天降り。
○あゝしやを　あゝ其奴を。罵る詞。古事記「えゝしやこしやあゝしやこしや」

しいきのこる　おぞのえみし　ゑら〱に　悦嘘はく　おのれこやつ　天驅づかひ　古登能加多利娯登毛古遠婆

以下「廿日草」抄出長歌

○

火の國は　いづくはあれど　蘆北は　すがの處し　さはにあれば　そこし見が欲り　沖津藻葉　採るとは無しに　へつ藻葉　求ぐとしもなく　おもふどち　をぶねつらなへ　なみ騒ぐ　野坂漕ぎ廻み　味澤ふ　め島の磯に　來て見れば　咲きめぐれる　白波の　下潛く松の　深綠　思ひふかめて　異津浦異津島根は　よしゑやし　たとひ見ずとも　渡神の　宮に一夜は　宿り管千年の下枝　敷妙の　枕にまきて　寝むとこそ思へ

反歌

浪の共め島の松により立てば千年の枝に玉藻かゝれり

○

たらちねの　母が養ふこに　あらねども　眉ごもり如　こもりゐて　名殘ち盡きず　朝鳥の　只立つ人を　あさもよし　紀の關守が　たつか弓　引きも止めず　かな戸べに　送りもあへず　行く水の　過しやり簡　樫の實の　一

○ゑら〱に　笑ふ聲。
○天驅づかひ云々　古事記「いしたふや天馳使ことの語言も是をば」天驅使は飛脚の如き仕事をする使物を傳達する天驅使の如くこれが後に傳つて故事として話の種に殘るであらう。
○すがの處云々　菅の生えてゐる處が澤山あるから。
○沖津藻　大きい藻を指し、邊津藻は小さい藻を指す。
○つらなべ　連ぬ竝べ。
○味澤ふ　めの枕詞。
○咲きめぐれる　波が高く立ち廻れる。
○渡神の宮　龍宮。
○たらちねの云々　萬葉集卷十一「たらちねの母が養ふ子の眉隱り隱れる妹を見むよしもがな」
○眉ごもり如　老蠶が繭の内に隱れる如く。
○行く水の　過ぎしの枕詞。
○樫の實の　一人の枕詞。

人二人の　家人と　打向ひゐて　とふ言もなし

反歌

妻兒共も言こそ問はね玉襷かけてやすらふ人の船路を

○

晝のまぞ　人も問ひ來し　青山に　日がくりぬれば　靜かなる　軒の玉水
たま〳〵も　我が眞木の戸に　おとなふは　何ぞと聞けば　宵さらず　愛し
き水鷄の　たゝくなりけり

反歌

宵毎の水鷄と共に我が門を叩きて問はむ風流士欲得

○

翡翠の　青葉隱りの　我が宿に　友の目を欲り　牀の上に　默止をり難み
庭の面を　たち廻れば　刈菰の　亂れあひたる　蓬生に　匂ひ出でたる　花
や何　覺束なしと　淺茅原　委曲に見れば　其の名さへ　草ふけ百合の　ゆ
りもあはぬ　友の目戀し　くさのゆかりに

反歌

蓬生に交りてにほふ百合見ればゆりあはぬ友し許多戀しも

---

○玉襷　かけての枕詞。
○かけてやすらふ人　心にかけてためらひ待てる自分。

○宵さらず　毎夜。

○翡翠の　青の枕詞。

○刈菰の　亂れの枕詞。
○淺茅原　委曲にの枕詞。
○草ふけ百合　草の深く茂つた中に咲いた百合。萬葉集卷十一「道の邊の草深百合のゆりにちふ妹が命を我知らめやも」
○ゆりもあはぬ　後もあはない。萬葉集十八「さ百合花ゆりも逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ」

○

去年の春　花散り果てし　つれ〴〵に　世の憂きことも　數そはる　思ひやらむと　松江の海　淸き島廻に　船よせて　辛き戀すら　忘るとふ　貝はあれども　目輝く　玉はあれども　疊有る　岩間に生ふる　濱木綿を　根こじにこじて　我が宿の　庭の砌に　植ゑつれば　榮え茂らひ　花開きて　其が名におへる　百重なす　思ひやるべき　なぐさには　貝に玉にも　勝りて阿里計利

反歌

三熊野の遠き濱べゆ家づとに持ちてや來しと人の問はまく

○

唐に　有りしむかしの　大夫が　身も棚しらぬ　別れ路に　男さびすと　冠を　逆立つ髮の　黑髮の　突きしと聞ける　故事を　思ひ出でつゝ　かにかくに　過ぎこしかたも　ゆく末も　懸けてぞ思ふ　淸水汲む　井口のあそ　君も吾も　互に今は　白髮の　山の山人　水島の　島の島守　長へに　如斯てあらむと　馬車　手携はりて　月花も　共にめでしを　蘆北の　醜の御楯の　崎守と　よざしの隨意に　處から　野坂の浦に　綱引する　白水郎

○松江の海　肥後國八代郡。
○辛き戀すら忘るとふ貝　戀忘貝
○疊有る　重なる。
○其が名におへる云々　萬葉集卷四「三熊野の浦の濱木綿百重なす心は思へどたゞに逢はぬかも」濱木綿の葉は幾重にも重なつて莖を包むのでいふ。
○なぐさには云々　なぐさは慰。萬葉集卷十八「わぎも子が心なぐさにやらむため沖つ島なる白珠もがも」
○問はまく　問はむ。
○淸水汲む　井の緣語。
○白髮の山の山人　白髮の山人の意に肥後國球磨郡にある白髮嶽の山人を掛く。
○水島　肥後國葦北郡。
○崎守　防人。
○よざし　任務。
○綱手の　引綱の如く。

の綱手の　引別れ　ことつ郷にし　ひけ鳥の　汝がひけ行けば　友千鳥　立ちおくれたる　こゝちして　太き心も　吾人の　衣手寒き　河風に　いさよふ波の　いづち行きけむ

○

工もよ　奇しき工　槌の音の　登々々毛せねば　眞鉋の　屑さへ見ねば　何時の間に　造る車ぞ　工はや　大工はや　益方は　前つ轍　眞震らは　後つ轍　ことひの牛　曳くとしもなく　牛童　追ふとしもなく　行きめぐる　車はや　小車はや　言の語りごとも　古乎婆

○

夏蟲の　火蟲の衣　著装はし　天のかゞみの　舟うけて　寄り來し神は　八千鉾の　神の命と　鳰の　相竝ばし　かたみに　相計らし　海べには　蘆をおふし　河べには　眞菅を植ゑ　蘆がねの　根這ふまに／＼　菅の根の　根足ればやがて　稚かりし　國堅まりぬ　かたまれる　國のまほらに　穀植うる業さへ　やゝ／＼に　教へ給ひし　二神の　神の功は　荒金の　地蹈む毎に　足曳の　山に思ひで　浪のよる　浦に所慕　味凝の　靈に尊く　なべて世の　國つ御民の　崇まへる　神にし坐すを　いかさまに　おもほしけ

---

○ことつ郷　異郷。
○ひけ鳥の　ひけ行けはの枕詞。
○ひけ行けば　引かれ行けば。
○太き心　大丈夫の心。
○いさよふ波の　ためらふ波の如く。
○登々々毛せねば　とゝゝは槌の音。
○造る車　佛教の輪廻の理を車に喩ふ。
○夏蟲の火蟲の衣云々　日本書紀「夏蟲の火蟲の衣二重著てかくみたりやは豈よくもあらず」古事記「故大國主神出雲の御大之御前に坐す時に波の穗より天の羅摩船に乘りて鵝の皮を内剝に剝ぎて衣服にして歸り來る神あり云々。」火蟲の衣は蛾の衣とも鵝の衣ともいふ天のかゞみの船はかゞみ草の實が二つに割れると舟の形になる。それに乘つて少彦名命が來たのである。
○八千鉾の神　大國主神。
○鳰の　竝びの枕詞。
○荒金の　地の枕詞。
○思ひで　思ひ出し。
○味凝の　靈にの枕詞。

めか　常世べに　飛び去りまして　其の神の　御身は皇國に　まさねども　神のみ靈は　つねさらず　幸ひ給へる　御幸ひに　雲居の遠從　天翔り　翔り渡ろふ　鶴村の　喰ひ持ち來つる　稻だねを　植ゑ生しぬる　蘆原の　みづ穗の國の　名におへる　御國からかも　歲每に　榮え廣ごり　其の苗は　眞菰のもころ　八束穗は　木綿しでなせる　うましねの　常世の國ゆ　まゐ來しも　此の大神の　惠みなるらむ

反歌

常世より少彥名の御使の喰ひ持ち來つる鶴渡しの稻

○

笹がにの　絲に懸れる　蜾蠃もよ　健きすがる　笹蟹を　劒もて螫し　諸共に　地に落つるを　庭雀　翔り來りて　速啄き　喰ひもあへねば　刺竝の　鄰のぬえこ　唐猫　潛び〳〵に　叢の　限ゆ窺ひ　其の鳥を　捕りて失せぬれ　殘りたる　蜘と蜾蠃を　いさゝけき　蟻ちふ蟲の　見出でつゝ　限りも知らぬ　其がたぐひ　羣り來り　或は引き　或は捧げて　穴中に　持ちていにけり　あはれ〳〵　たま〳〵得たる　食物を　己獨りは　えも不食　侶誘ひて　睦ましく　ものせる業は　今の世の　人に勝れる　蟲ぞ此の蟲

○常世べに云々　古事記—「大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神相竝ばして此の國作り堅め給ひき。さて後には其の少名毘古那神は常世國に度りましき。」
○眞菰のもころ　眞菰の如く。
○うましね　うまし稻。よい稻。
○笹がにの絲　蜘蛛の巢。
○蜾蠃　似我蜂。
○喰ひもあへねば　喰べ果てぬに
○ぬえこ　猫。

反歌

奈良山の兒手柏を折り頭插す人に見せばや蟻の羣り

〇

我が宿の　葎がきつの　放鳥　盗み喰まむと　晝はも　犬匍匐ひ　夜はも狐潛めり　眞震らが　朝夕とれる　射ならしの　弓はあれども　晝の戸に矢ささむ時し　雨零らば　雨にそこね　夜の門に　い立たむ折し　露もおかば　繼木放れて　須磨の蜑の　燒くとふ鹽の　から鹽の　辛き戀する　わび人の　した憂からむと　みづ〳〵し　久米のあそが　櫛橋の　翁や得たる短ゆふ　短きほこの　たつか弓　射よげにしあれば　稻ぶねの　否と言はせど　かにかくに　弓のゆかりに　押借りて　手に取りならし　ぬば玉の　夜晝わかず　ますら雄の　守る心に　此の弓の　み靈添はりて　獵矢さし　射るまでも無く　窺ひし　犬も狐も　逃げ失せて　跡なくなれば　今はとて君にぞ返す　櫛橋の　くしき翁の　くしき弓　眞弓

〇

なかこのむ　聲は言痛し　しかはあれど　古きかはらの　廻りの　み池もあやに　今もかも　咲きにほふらむ　花蓮　目にこそ見えね　香をだにも　ほ

〇葎がきつの放鳥　葎垣内に棲む放ち飼ひの鳥。
〇繼木　繼木弓。木と竹とを粘はし合はせて作れる弓。
〇須磨の蜑の云々　戀するまでは序詞。萬葉集卷十七「須磨人の海邊常さらず燒く鹽の辛き戀をも我はするかも」
〇した憂からむ　心中辛からう。
〇みづ〳〵し　久米の枕詞。
〇短ゆふ　丈の短い木綿。下の短きに掛る。
〇稻ぶねの　否の枕詞。萬葉集卷十九「最上川のぼれば下る稻舟の否にはあらずこの月ばかり」
〇なかこのむ　中子祈む。誦經する意。
〇目にこそ見えね云々　古今集春良岑宗貞「花の色は霞にこめて見せずとも香をだに盗め春の山風」同冬小野篁朝臣「花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく」

のにおくらむ　風も吹かぬか

和田巖足家集 終

昭和十三年九月一日印刷
昭和十三年九月五日發行

（非賣品）

校註國歌大系

第十九卷

編輯者　中山泰昌

發行者　東京市神田區錦町一丁目五番地　小川菊松

印刷者　東京市板橋區志村町五番地　河合勝夫

印刷所　東京市板橋區志村町五番地　凸版印刷株式會社板橋工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目五番地　株式會社　誠文堂新光社
電話神田　自二一二六番　至二一二九番
振替東京四五三四〇番

昭和四年七月十日印刷・昭和四年七月三十日發行

63

I